平成14年度放送大学学部開設予定授業科目講義内容

平成13年11月発行

第　19　版

放送大学学園

教務部教務課

目　　次

1．共通科目（一般科目）

番号		頁	開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（人文系）				
1	生活学入門－日常生活の探求－	1	10	R	2
2	生活文化史（’９８）	3	10	ＴＶ	2
3	生活と地球社会（’９９）	5	11	R	2
4	教育の方法（’９９）	7	11	ＴＶ	2
5	教育心理学通論（’０１）	9	13	R	2
6	心理学初歩（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	13	14	ＴＶ	2
7	フロンティア人間科学（’９８）	15	10	ＴＶ	2
8	現代人のための哲学（’００）	17	12	R	2
9	現代アメリカ思想（’０１）	19	13	R	2
10	倫理思想の源流（’０１）	21	13	ＴＶ	2
11	宗教への招待（’９９）	25	11	ＴＶ	2
12	国語学概論（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	27	14	R	2
13	国文学入門（’００）	31	12	R	2
14	近代詩歌の歴史（’９９）	33	11	R	2
15	歴史学の現在（’０１）	35	13	ＴＶ	2
16	日本の文化と思想（’９８）	37	10	ＴＶ	2
	（社会系）				
17	法学入門（’００）	39	12	ＴＶ	2
18	立憲主義と日本国憲法（’０１）	41	13	ＴＶ	2
19	政治学入門（’００）	43	12	R	2
20	経済学入門（’００）	45	12	R	2
21	社会学入門（’０１）	47	13	ＴＶ	2
22	社会福祉入門（’００）	51	12	ＴＶ	2
23	社会調査の基礎（’０１）	53	13	R	2
24	日米欧の企業経営（’０１）	55	13	ＴＶ	2
25	情報基礎管理学（’００）	57	12	ＴＶ	2
26	比較技術の文明論（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	59	14	R	2
27	科学と技術の歴史（’９９）	61	11	ＴＶ	2
28	現代社会と著作権（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	63	14	ＴＶ	2
29	アーツ・マネジメント（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	65	14	ＴＶ	2
	（自然系）				
30	数学の歴史	67	9	R	2
31	初等微分積分学（’０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	69	14	ＴＶ	2
32	微積分入門Ⅱ（’９９）	71	11	ＴＶ	2
33	線型代数Ⅰ（’９９）	73	11	ＴＶ	2
34	線型代数Ⅱ（’００）	75	12	ＴＶ	2

			開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（自然系）				
35	確率と統計（’０１）……	77	13	R	2
36	物理の世界（’９９）……	79	11	ＴＶ	2
37	物理・化学通史（’９９）……	81	11	R	2
38	物質の世界－化学入門（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	83	14	ＴＶ	2
39	物質の科学と技術開発（’９９）……	85	11	R	2
40	基礎生物学（’９８）……	89	10	ＴＶ	2
41	人間の生物学（’９９）……	91	11	ＴＶ	2
42	生物学の歴史（’０１）……	93	13	R	2
43	疾病の成立と回復促進（’０１）……	95	13	ＴＶ	2
44	人体の構造と機能（’０１）……	97	13	ＴＶ	2
45	地球とその歴史（’００）……	99	12	ＴＶ	2
46	宇宙とその歴史（’００）……	101	12	ＴＶ	2
47	宇宙像の変遷と人間（’００）……	103	12	ＴＶ	2
48	実験科学の方法（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	105	14	ＴＶ	2

2. 共通科目（外国語科目）

	（英語）				
49	英語Ⅰ（’０１）……	107	13	R	2
50	英語Ⅱ（’９８）……	109	10	R	2
51	英語Ⅲ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	111	14	ＴＶ	2
52	英語Ⅳ（’９９）……	113	11	ＴＶ	2
53	英語Ⅴ（’０１）……	115	13	R	2
54	英語Ⅵ（’９９）……	117	11	R	2
	（ドイツ語）				
55	ドイツ語Ⅰ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	119	14	ＴＶ	2
56	ドイツ語Ⅱ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	121	14	R	2
57	ドイツ語Ⅲ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	123	14	R	2
	（フランス語）				
58	フランス語Ⅰ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	125	14	ＴＶ	2
59	フランス語Ⅱ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	127	14	R	2
60	フランス語Ⅲ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	129	14	R	2
	（中国語）				
61	中国語Ⅰ（’０１）……	131	13	ＴＶ	2
62	中国語Ⅱ（’０１）……	133	13	R	2
63	中国語Ⅲ（’００）……	135	12	R	2
	（ロシア語）				
64	ロシア語Ⅰ（’０１）……	137	13	R	2
65	ロシア語Ⅱ（’０１）……	139	13	R	2

			開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（スペイン語）				
66	スペイン語Ⅰ（’９９）……	141	11	R	2
67	スペイン語Ⅱ（’９８）……	143	10	R	2
	（韓国語）				
68	韓国語Ⅰ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	145	14	ＴＶ	2
69	韓国語Ⅱ（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	147	14	R	2
	（日本語）				
70	日本語Ⅰ（’０２）－外国語としての－……（平成14年度改訂開設科目）…	149	14	ＴＶ	2

3. 共通科目（保健体育）

71	保健体育（’０１）……	151	13	ＴＶ	2
	体育実技 ……		—	—	1

4. 共通科目（基幹・主題科目）

	（基幹科目）				
72	日本の自然（’９８）……	153	10	ＴＶ	2
73	現代日本の教育課題（’９９）……	155	11	ＴＶ	2
74	現代日本の地方自治（’９９）……	157	11	ＴＶ	2
75	現代生活論（’００）……	159	12	ＴＶ	2
76	認知科学（’００）……	161	12	ＴＶ	2
77	舞台芸術の現在（’００）……	163	12	ＴＶ	2
78	現代生物科学（’００）……	167	12	ＴＶ	2
79	科学の思想と論理（’０１）……	169	13	R	2
	（主題科目）				
80	地球環境を考える（’９９）……	171	11	ＴＶ	2
81	共生の時代を生きる（’００）……	173	12	ＴＶ	2
82	現代社会とスポーツ（’０１）……	175	13	ＴＶ	2
83	家族論（’０１）……	177	13	ＴＶ	2

5. 専門科目

生活と福祉

			開設年次	メディア	単位
	（生活一般）				
84	家族と生活ストレス（’００）……	179	12	R	2
85	近代社会と人生経験（’９９）……	181	11	R	2
86	生活者の経済（’００）……	185	12	R	2
87	生活の経営（’０１）……	187	13	R	2
88	消費者問題の展開と対応 ……	189	10	R	2
89	日本人口論－高齢化と人口問題－ ……	191	10	R	2
90	変動する社会と暮らし（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	193	14	R	2
	（衣・食・住）				
91	衣生活の科学（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	197	14	R	2
92	現代モード論（’００）……	199	12	ＴＶ	2
93	着ごこちの追究（’９９）……	201	11	ＴＶ	2
94	地域と食文化（’９９）……	203	11	R	2
95	食物とからだ（’００）……	205	12	ＴＶ	2
96	調理とおいしさの科学（’９８）……	207	10	ＴＶ	2
97	食生活をめぐる諸問題（’００）……	209	12	R	2
98	住計画論（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	211	14	ＴＶ	2
99	世界の住まいと暮らし（’９９）……	213	11	ＴＶ	2
100	日本における集合住宅計画の変遷 ……	217	10	ＴＶ	2
	（健康科学）				
101	医療・社会・倫理（’９９）……	219	11	R	2
102	看護学概説（’０１）……	223	13	R	2
103	母子の健康科学（’００）……	225	12	R	2
104	公衆衛生（’０１）……	227	13	R	2
105	高齢者の心と身体（’００）……	229	12	R	2
106	こころの健康科学（’９９）……	231	11	R	2
107	脳の健康科学（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	233	14	ＴＶ	2
108	がんの健康科学（’０１）……	235	13	ＴＶ	2
109	循環器科学（’００）……	239	12	ＴＶ	2
110	薬の歴史・開発・使用（’００）……	241	12	R	2
	（社会福祉）				
111	子ども家庭福祉論（’９８）……	243	10	ＴＶ	2
112	障害者福祉（’０１）……	247	13	R	2
113	高齢者福祉（’９９）……	249	11	R	2
114	地域福祉（’９９）……	251	11	R	2
115	公的扶助（’０２）－生存権のｾｰﾌﾃｨﾈｯﾄｰ ……（平成14年度改訂開設科目）…	253	14	R	2
116	年金・医療保険論（’００）……	255	12	R	2
117	社会福祉の国際比較（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	257	14	ＴＶ	2

			開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（教育学）				
118	近代の教育思想（’９８）	261	10	R	2
119	教育の歴史（’００）	263	12	TV	2
120	教育社会学（’９８）	265	10	TV	2
121	道徳教育（’９９）	267	11	TV	2
122	幼児教育の社会学（’９８）	269	10	R	2
123	現代社会の学力（’９９）	271	11	R	2
124	教育の政治経済学（’００）	273	12	TV	2
125	子どもと若者の文化（’０１）	275	13	TV	2
126	家庭・学校と地域社会（’００）	277	12	TV	2
127	国際化と教育（’９９）	279	11	R	2
128	メディアと教育（’９９）	281	11	TV	2
129	障害児教育論（’０２）（平成14年度2学期開設科目）	283	14	R	2
130	発達障害児の心と行動（’０２）（平成14年度2学期開設科目）	285	14	TV	2
131	障害児教育指導法（’０２）（平成14年度2学期開設科目）	287	14	TV	2
	（心理学）				
132	知覚心理学（’０１）	291	13	TV	2
133	労働と生活の心理学（’０１）	293	13	TV	2
134	学習の心理学（’００）	295	12	TV	2
135	生涯発達心理学（’０２）（平成14年度改訂開設科目）	297	14	TV	2
136	発達と学習（’００）	299	12	R	2
137	乳幼児心理学（’０２）（平成14年度改訂開設科目）	303	14	TV	2
138	児童心理学（’９８）	307	10	R	2
139	老年期の心理と病理（’０２）（平成14年度改訂開設科目）	309	14	R	2
140	言語発達心理学（’９８）	311	10	R	2
141	社会心理学－アジア的視点から－	313	10	TV	2
142	人格心理学（’００）	315	12	TV	2
143	臨床心理学概説（’９９）	317	11	R	2
144	児童の臨床心理（’９８）	319	10	R	2
145	現代精神分析学（’００）	321	12	R	2
146	カウンセリング概説（’０１）	323	13	R	2
	（教育・心理）				
147	生涯学習と自己実現（’０２）（平成14年度改訂開設科目）	325	14	R	2
148	教育の中の言葉（’９９）	327	11	R	2
149	生徒指導（’９９）	329	11	TV	2
150	教育評価（’９９）	331	11	R	2
151	心理測定法（’９８）	333	10	TV	2

	社会と経済		開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（法律学）				
152	日本の法システム（’００）……	335	12	R	2
153	法と裁判（’００）……	337	12	ＴＶ	2
154	紛争と民法（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	339	14	ＴＶ	2
155	家族法（’９８）……	341	10	ＴＶ	2
156	商法（’９９）……	343	11	R	2
157	市民生活と行政法（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	345	14	R	2
158	刑法（’０１）……	347	13	R	2
159	経済法（’００）……	349	12	R	2
160	雇用と法（’９９）……	353	11	R	2
161	国際関係法（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	355	14	R	2
162	現代法の諸相（’９９）……	357	11	R	2
	（政治学）				
163	ヨーロッパ政治史（’０１）……	359	13	R	2
164	比較政治学（’００）……	361	12	R	2
165	第三世界の政治（’０１）……	363	13	R	2
166	国際政治（’００）……	365	12	ＴＶ	2
167	日本政治思想史（’０１）……	367	13	R	2
168	西洋政治思想史（’０１）……	369	13	R	2
169	政治過程の比較分析（’９９）……	371	11	ＴＶ	2
170	現代日本の政治変動（’９９）……	373	11	ＴＶ	2
171	現代の行政（’００）……	375	12	R	2
	（経済学）				
172	現代経済学（’０１）……	377	13	ＴＶ	2
173	金融論（’９９）……	379	11	ＴＶ	2
174	財政学（’００）……	381	12	ＴＶ	2
175	国際経済学（’０１）……	383	13	R	2
176	日本経済史（’９９）……	385	11	R	2
177	欧米経済史（’９９）……	387	11	R	2
178	経済学史入門（’０１）……	389	13	ＴＶ	2
	（社会学）				
179	コミュニティ論（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	391	14	ＴＶ	2
180	メディア論（’０１）……	393	13	ＴＶ	2
181	逸脱の社会学（’９８）……	397	10	R	2
182	ジェンダーの社会学（’９９）……	399	11	R	2
183	都市空間の比較社会学（’９９）……	401	11	ＴＶ	2
184	環境社会学（’９９）……	403	11	ＴＶ	2
185	都市社会の人間関係（’００）……	407	12	R	2

	産業と技術		開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（経営学）				
186	経営工学総論（’００）……	409	12	R	2
187	生産性科学入門（’９９）……	411	11	ＴＶ	2
188	技術の分析と創造（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	413	14	ＴＶ	2
189	イノベーション経営（’０１）……	415	13	ＴＶ	2
190	産業と労使の関係（’９９）……	417	11	ＴＶ	2
191	マーケティング論（’９９）……	421	11	R	2
192	企業の経済学（’９９）……	423	11	R	2
193	社会の中の会計（’００）……	425	12	ＴＶ	2
194	管理会計（’９９）……	427	11	R	2
195	簿記入門（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	429	14	R	2
196	現代ファイナンス入門（’００）……	431	12	R	2
	（産業論）				
197	現代産業組織論（’０１）……	433	13	R	2
198	情報産業論（’００）……	435	12	R	2
199	ネットワーク産業論（’００）……	437	12	R	2
200	ベンチャー企業論（’０１）……	439	13	R	2
201	大地と人間－食・農・環境の未来 ……	441	10	ＴＶ	2
202	アグリビジネス（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	443	14	R	2
203	発展途上国の開発戦略（’９９）……	445	11	R	2
204	都市・地域経営（’９９）……	447	11	ＴＶ	2
205	都市と生活空間の工学（’００）……	449	12	ＴＶ	2
206	環境アセスメント（’００）……	451	12	ＴＶ	2
	（工学・技術）				
207	エネルギー工学と社会（’９９）……	455	11	ＴＶ	2
208	材料工学と社会（’０１）……	457	13	ＴＶ	2
209	バイオテクノロジー（’０１）－その社会へのインパクト－……	459	13	ＴＶ	2
210	情報工学と社会（’０１）……	461	13	ＴＶ	2
211	電子技術と社会（’００）……	463	12	ＴＶ	2
212	情報工学（’９９）……	465	11	ＴＶ	2
213	プログラミング入門（’００）……	467	12	ＴＶ	2
214	産業人間工学（’００）……	469	12	ＴＶ	2
215	設計学（’００）……	471	12	ＴＶ	2
216	21世紀への技術発展（’９９）……	473	11	R	2

	人間の探究		開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（哲学）				
217	ギリシャ哲学（’９９）……	475	11	R	2
218	西洋近世哲学史（’９９）……	477	11	R	2
219	現代の哲学（’０１）……	479	13	R	2
220	美と詩の哲学（’９９）……	481	11	R	2
221	現象学入門（’００）……	483	12	R	2
222	自己を見つめる（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	485	14	R	2
223	宗教の哲学（’００）……	487	12	R	2
224	老荘思想（’００）……	489	12	R	2
225	仏教思想（’０１）……	491	13	R	2
226	自然と文化の記号論（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	493	14	ＴＶ	2
	（文学）				
227	日本語の歴史（’０１）……	495	13	R	2
228	書誌学（’９９）……	497	11	ＴＶ	2
229	上代の日本文学（’００）……	499	12	R	2
230	平安朝の文学（’０１）……	501	13	R	2
231	中世日本文学の風景（’００）……	503	12	R	2
232	近世の日本文学（’９８）……	505	10	R	2
233	近代の日本文学（’０１）……	507	13	R	2
234	徒然草の遠景（’９８）……	509	10	R	2
235	中国明清時代の文学（’０１）……	511	13	R	2
	（史学）				
236	古代日本の歴史（’０１）……	513	13	ＴＶ	2
237	日本の中世（’９８）……	515	10	R	2
238	日本の近世（’９８）……	517	10	ＴＶ	2
239	19世紀日本の歴史（’００）……	521	12	R	2
240	朝鮮の歴史と社会（’００）……	523	12	R	2
241	中国の歴史と社会（’９８）……	525	10	R	2
242	南アジアの文化を学ぶ（’００）……	527	12	ＴＶ	2
243	東南アジアの歴史（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	529	14	R	2
244	古典古代の歴史（’００）……	531	12	ＴＶ	2
245	ヨーロッパの歴史（’０１）……	533	13	ＴＶ	2
246	ヨーロッパと近代世界（’０１）……	535	13	R	2
247	アメリカの歴史（’００）……	537	12	ＴＶ	2
	（美学・芸術論）				
248	芸術の理論と歴史（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	539	14	ＴＶ	2
249	イメージの歴史（’００）……	541	12	ＴＶ	2
250	西洋音楽の歴史（’０１）……	545	13	ＴＶ	2
251	日本音楽の基礎概念（’００）……	547	12	R	2
252	応用音楽学（’００）……	549	12	R	2
253	現代における伝統演劇（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	551	14	ＴＶ	2

			開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（比較文化・地域研究）				
254	文化人類学（’００）……	555	12	ＴＶ	2
255	博物館概論（’９９）……	557	11	ＴＶ	2
256	博物館資料論（’００）……	559	12	ＴＶ	2
257	博物館経営・情報論（’００）……	561	12	Ｒ	2
258	言語学（’９９）……	563	11	ＴＶ	2
	（外国の言語・文化・社会）				
259	ギリシャ・ローマ文学（’００）……	565	12	Ｒ	2
260	ドイツ文学（’９８）……	567	10	Ｒ	2
261	フランスの文学（’９８）……	569	10	Ｒ	2
262	ドイツの言語文化（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	571	14	Ｒ	2
263	フランスの言語文化（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	573	14	Ｒ	2
264	中国の言語文化（’０２）……（平成14年度改訂開設科目）…	575	14	Ｒ	2

	自然の理解		開設年次	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（数学）				
265	応用数学（’９９）	577	11	R	2
266	解析学（’００）	579	12	R	2
267	数学基礎論（’９９）	581	11	R	2
268	計算の理論（’９９）	583	11	R	2
269	データの科学（’０１）	585	13	R	2
270	統計の考え方（’００）	587	12	R	2
271	カオス学入門（’０１）	589	13	ＴＶ	2
272	パソコンによる解析学（’９９）	591	11	ＴＶ	2
	（物質科学）				
273	運動と力（’０１）	593	13	ＴＶ	2
274	光と電磁場（’０１）	595	13	ＴＶ	2
275	相対論（’９９）	597	11	R	2
276	量子力学（’０１）	599	13	ＴＶ	2
277	物性物理学入門（’００）	601	12	ＴＶ	2
278	物質の科学・量子化学（’９８）	603	10	ＴＶ	2
279	物質の科学・反応と物性（９９）	605	11	ＴＶ	2
280	物質の科学・有機高分子（０２）…（平成14年度改訂開設科目）…	607	14	ＴＶ	2
281	物質の科学・分析（’９８）	611	10	ＴＶ	2
282	微生物機能に学ぶ化学（’０１）	613	13	R	2
283	光と物質（’００）	615	12	ＴＶ	2
284	植物の生理（’００）	617	12	ＴＶ	2
285	生態学（’９９）	619	11	ＴＶ	2
286	分子生物学（’０１）	621	13	ＴＶ	2
287	生物の進化と多様性（’９９）	623	11	ＴＶ	2
288	動物の行動と社会（’００）	625	12	ＴＶ	2
289	細胞生物学（’９８）	627	10	ＴＶ	2
	（宇宙地球科学）				
290	太陽系の科学（’９９）	629	11	ＴＶ	2
291	宇宙の進化（’０１）	631	13	ＴＶ	2
292	宇宙の観測（’０１）	633	13	ＴＶ	2
293	日本列島の地球科学（’９９）	635	11	ＴＶ	2

＝ 生活学入門 ＝（R）

― 日常生活の探求 ―

〔主任講師：大久保　孝治　（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：嶋﨑　尚子　（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

日常生活というものを客観的かつ新鮮な目でとらえること。そのためには、（1）日常生活の自明性を　疑ってかかること、（2）日常生活を記述・分析するのに必要な単語（専門用語）と文法（理論）を学習すること、（3）全体社会と個人生活との間の関係について常に考えることが大切である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言葉　(1) 言葉と世界	たとえば、日本人にとって虹は七色だが、文化（言葉）によって虹は六色であったり、五色であったりする。人間と世界（事物）との間には言葉が存在する。人間は言葉というフィルターを通して世界を見ているのである。日常生活の探求を開始するに当たって、まず、この事実をしっかり把握しておく必要がある。	大久保孝治（早稲田大学教授）	大久保孝治（早稲田大学教授） 嶋﨑尚子（早稲田大学教授）
2	言葉　(2) 名前	「あなたは誰？」と聞かれれば、われわれは自分の名前を答える。名前は自分という存在にとって不可欠の要素である。しかし、誰も自分の名前（本名）を自分で決めることはできない。当たり前のことのようでいて、これは重要なことである。命名という社会的行為をめぐって、そこにどのような規範が存在するのかを考える。	同上	同上
3	言葉　(3) 言葉と社会	言葉は社会構造と密接に関連している。言葉の文化をみることで社会構造の特徴を描き出すことができる。ここでは家族観、ジェンダー観をとりあげる。一方で言葉は社会の変化と呼応して変化する。言葉の収斂と多様化の２方向から考える。	嶋﨑尚子（早稲田大学教授）	同上
4	身体　(1) 自然・身体・社会	身体行動は、自然なものでありかつ社会的所産である。生物的身体と社会的身体ある。われわれは社会化・文化化をとおして社会的身体へ変容していくのである。われわれの身体的行動の社会性を動作ならびに喜怒哀楽の表現か。	大久保孝治	同上
5	身体　(2) 「私」と身体	自己と自己の身体は重なり合い、人は鏡に映った自分（の身体）をみて「これが私だ」と確認する。身体は自己と「私」の境界線として位置づけられる。しかし身体の変容によってわれわれは自己と自己の身体とのズレを経験する。成長と老化の過程は、ズレの修正の過程でもある。	同上	同上
6	身体　(3) 身体・生命 －その再生産－	女性の再生産行為は自然秩序の一部としてとらえられがちであるが、社会性、文化性を帯びている。出産場面みてもその社会性は明らかである。さらに近年の急速な人口生殖技術の発展により、身体のみならず生命の社会性が高められている。そうした現状を考えていく。	嶋﨑尚子	同上
7	メディア　(1) 電話	特定の個人と特定の個人を双方向的に結びつけるメディアをパーソナル・メディアと呼ぶ。パーソナル・メディアの代表といえるものが電話である。電話の導入の歴史と最近の携帯電話の急速な普及について触れながら、対面的なコミュニケーションと電話による電話によるコミュニケーションの相違について考える。	大久保孝治	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	メディア (2) テレビ	不特定多数の人々に向けて一方的な情報の伝達をおこなうメディアをマス・メディアと呼ぶ。その代表であるテレビは、現代の生活に不可欠なほどに普及している。テレビが何を伝え、何を伝えないかを知ることは、テレビの受け手であるわれわれにとり重要なことである。	大久保孝治	大久保孝治 嶋﨑　尚子
9	メディア (3) 空間移動のメディア	モノや人の移動手段である輸送・交通メディアは、20世紀をとおして急速に進歩した。空間移動のメディアは、物質の流通にとどまらず時間統一、国家語成立、認知世界の拡大をもたらす。一方ではマイカーというパーソナルなメディアは、移動における空間的閉鎖性を高める。両者の展開を考える。	嶋﨑　尚子	同　上
10	他者 (1) 「あなた」	他者関係の基本は２者間関係（ダイアド）にある。親子、夫婦、友人、恋人これらの２者間関係は、血縁、姻縁、友情、恋愛感情といった別個の縁によって形成され、その関係性も固有である。ここではこれらの関係のメカニズムの特徴について考察する。	同　上	同　上
11	他者 (2) 「彼・彼女」	他者との関係は直接的接触による場合でも、個人の生活や人生に与える影響に多少がある。深く関わる他者が「あなた」であるなら、部分的に関わる他者を「彼・彼女」と呼ぶことができる。接触者と関与者をキー概念に個人と他社との相互作用の質を考察する。	同　上	同　上
12	他者 (3) 「彼ら」	直接には接触しない他者、「名前のない他者」は社会規範の代理人としてわれわれ生活に関与している。「名前のない他者」の総質量は膨大であり、その重力によって社会空間は一定の構造を与えられる。「社会」とはそうした社会空間であり、近代社会は共同体と市場の二重構造から成立している。	大久保孝治	同　上
13	時間 (1) 時計と手帳	時計と手帳は近代社会における時間意識の象徴である。近代社会は、時間に多大な価値を与えている。日常生活は、種々の時間をめぐる規範に従っている。また時間は人生の志向性の軸であり、未来志向性と現実志向性は人々の行動様式を規定する。時間志向性は「生き方」にほかならない。	同　上	同　上
14	時間 (2) 生活時間の構造	個人は資源として平等にもっている１日24時間という時間をどのような活動に配分しているのだろうか。生活時間研究は、1960年代以降、社会科学において活発に展開されている。ここでは研究の基本的な視点ならびに現代日本社会での個人の生活時間構造の特徴について考察する。	嶋﨑　尚子	同　上
15	時間 (3) 年齢	年齢は基本的な社会的カテゴリーである。年齢規範、年齢階梯制など年齢を軸に多くの社会制度が成立している。同時に年齢はライフコースの軸でもある。年齢を軸にしたライフコースは近代人の特徴といえる。こうした２次元から近代社会における年齢意識・年齢差別を考えていく。	同　上	同　上

＝ 生活文化史（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平井　聖（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

日本の生活文化は、中国大陸や朝鮮半島からの影響を受けながら築かれてきた。そして、この百年余は、欧米の文化を受け入れ続けている。そこで、日本の生活文化の基礎を築くのに重要な役割を果たした中国及び韓国の人々の生活をみながら、欧米の生活も併せ考えて、日本の住を中心とする生活文化とその特色について見直したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	住居を中心とした日本の生活文化の基本的な性格を、中国ならびに韓国の生活文化と比較しながら考察するこの生活文化史のねらいである。住生活をさまざまな行為に分解したそれぞれの項目の意味や視点などについて説明する。	平井　聖（昭和女子大学教授）	平井　聖（昭和女子大学教授）
2	ねる－1	「ねる」という姿勢は、「すわる」姿勢と共に、住生活における基本的な姿勢である。また、眠るということは、起きていることと、生活時間を分ける重要な行為である。床に寝る、ベッドに寝るという２つの寝方、寝るための部屋などについて、歴史的経過を追う。	同上	同上
3	ねる－2	一般的に地面に何かを敷いて寝る方式から、床やベットに寝る方式に移行してきた。寝床から固定した床（ゆか）を作って寝るようになった地域、地面に床と呼ぶベッドを置いて寝るようになった地域など、現状と発展の様子を見よう。	同上	同上
4	すわる－1	地面に直接座る、床に座る、椅子に腰掛けるの３つの姿勢は、昼間の生活にとって重要である。この３つの姿勢に関し、座る場所と場面、そのための座具などについて考えると共に、生活習慣と住居のつくりの関係についても歴史的に考察する。	同上	同上
5	すわる－2	韓国と日本では、座るためと寝るために、板敷が発生した。一方、中国では寝るため座るために、家具である牀（床）が生まれ、早くから椅子に腰掛ける生活方式へ発展した。韓国・日本でも近代化にともなって、椅子式の座り方が普及しつつある。	同上	同上
6	たべる－1	椅子に腰掛けて、テーブルを囲む食事風景にたいして、韓国と日本では床に座り食卓を囲む光景もある。歴史的に見ると、日本では膳を運ぶ食事の習慣もあった。このような食事形式の変化は、日本だけではない。食事形式の移り変わりと、その背景について考える。	同上	同上
7	たべる－2	食事の場は、台所と分離できない関係にある。日本では欧米の影響を受けて、両者を一体に造るダイニングキッチンが、敗戦後急速に擴まった。その背景に、当時の住宅事情や家族観があり、調理用機器の発達があった。食べる場所と作る場所の関係について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ゆあむ	日本では、ホテルで洋風バスと洋風の便器と洗面所がユニット化されている。一方、住宅では湯舟と洗い場のユニットで、便所、洗面所と洗濯機置き場が別につくられる。それぞれの国の入浴の習慣と浴室およびその周辺について考える。	平井　聖	平井　聖
9	もてなす－1	住宅を考えるとき、客を迎える作法・場所は重要な要素であった。玄関で客を迎える作法、座敷に客を迎える作法と、玄関、座敷の発生と変遷について、歴史的に考える。また、明治以降に生まれた洋式の応接間の役割についても考える。	同上	同上
10	もてなす－2	敗戦後の日本では、家庭で客をもてなす習慣が殆ど消滅してしまった。現在の中国および韓国で、客をもてなす場所と方法について聞き、日本との習慣の違い、それぞれの国の独自性について探る。そして、その成立の背景について考えよう。	同上	同上
11	くつろぐ－1	日本では、幕末までの暮らしと対照的に、明治維新以降は家族の暮らしが、クローズアップされるようになる。団欒と言う行為に対する意識が、住生活の中で次第に大きくなる。食卓を囲む食事とその後の団欒、そしてその場としての茶の間は、近代化の象徴である。	同上	同上
12	くつろぐ－2	近代化の波は、日本だけでなくおそかれ早かれ中国にも韓国にも押し寄せている。その中で、家庭生活にもっとも大きな変化をもたらしたのは、いずれの国でも家族が団欒するという行為であろう。中国、韓国および日本における、その実態を見よう。	同上	同上
13	たくむ	電気・ガスが家庭に導入されてから、家事の革命が始まる。同時に、自然に近い生活から人工の生活環境への道をたどりはじめる。この傾向は、第二次大戦後に加速の度を加える。中国、韓国、日本の事情を比較しながら、生活環境と生活文化について考える。	同上	同上
14	つたえる－1	中国・韓国・日本あるいはそれらの国を構成する多くの民族には、それぞれの伝統文化が存在する。生活環境の急速な変化の中で、伝承される生活文化と消滅した生活環境について検証し、生活文化によってつくり出された、家族を包む器である住居について考える。	同上	同上
15	つたえる－2	伝統文化による生活習慣だけでなく、近代化の中で獲得した新しい生活文化もある。それぞれの国あるいは民族によって事情は違うが、伝承され適が生活文化、新たに獲得した生活文化、これらを次の世代にどのように伝えていけばいいのであろうか。	同上	同上

＝ 生活と地球社会（ '９９）＝（R）

〔主任講師：清野 きみ（北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：原 ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代生活の構造的要因が地球規模であり、また、日常的であることを意識する人が多くなった。しかし自己との関係において必ずしも、体系知、生活知にはなっているとはいい難く、とくに過剰消費を克服するライフスタイルの構築は、緊急課題といえよう。本講では生活者、生活の担い手が、次世代家族とその生活活動の持続可能な生活環境要因を深く理解するため、国際化、高齢化、少子化、食料問題、環境と平和、ジェンダーの視点から生活技術と文化の知見を述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球社会と生活構造	生活の質の向上を考えたとき、生活は学際的、総合的に捉えなければならない。転換期における生活の分析には、人の生命・生存・文化の総体として多角的なアプローチが望まれる。本章では、“21世紀は家族と女性の時代”といわれる構造的背景、高度テクノロジーが深く家庭に浸透している時代におけるライフスタイル、生活主体と支援、生活の再生と課題を述べる。	清野 きみ（北海道大学名誉教授）	清野 きみ（北海道大学名誉教授）
2	日常生活と経済システム	「豊な社会・日本」の実生活が存外に「貧困」であることを、身近な食生活の例でその実態を検証する。日本の食生活は海外依存型・資源浪費型であり、それは高い食費、不安定な食品を横行させている。しかも世界的な資源・環境問題も加速させている。	中嶋 信（徳島大学教授）	中嶋 信（徳島大学教授）
3	飢える世界と日本の課題	食料問題は人類全体が解決を迫られている課題で、地球上の人々が健やかに暮らすために、各国は食料生産の増大とともに、食料の配分や消費のあり方の改善を図っている。こうしたことから、「例外国家・日本」の食料・農業政策を 改革することが必要である。	同上	同上
4	共生型の経済システム	経済成長を最優先にする社会はさまざまな問題を激化させる。公共財政の危機、環境・公害問題、家庭生活のひずみ、国際的対立などの問題が従来型システムの破綻を物語っている。日本および世界の経済を調和的に発展できる経済システムに転換させることを考える。	同上	同上
5	国際化時代における生活の構築	国際的な経済のグローバル化は、人やものや情報の交流を促進している。日本でも海外生活者・成長者として経験をもつ人や、多様な文化的背景をもつ人の共住が進行していることから、異質な文化的規範を持つ人々が共存に向けてどのような生活を構築するかを考える。	原 ひろ子（放送大学教授）	原 ひろ子（放送大学教授）
6	高齢社会と生活の構築	高齢社会では、異なる世代がどのように共存するか。それは世帯、家族、親族、友人、職場、コミュニティにとっての課題であると同時に、生活者が社会政策のあり方にどう発言していくのかの課題でもある。また、個人は加齢とどうつきあうのか。これらを比較文化的に考える。	同上	同上
7	地球社会の中の子ども	武力紛争や貧困など経済的・社会的な事情から子どもらしい暮らしが保障されず、子ども時代を奪われている子どもたちがいる。一方、日本の子どもは恵まれているようにみえるが果たしてどうであろうか。地球社会に暮らす子どもたちの現状をみる。	中森千佳子（金城学院大学教授）	中森千佳子（金城学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	少子化社会の生活と子育て	少子化は高齢化とともに経済社会の発展にともなう共通した人口課題となっている。豊かさを求め、ライフスタイルの多様な選択が可能になる中で、子育てに何が起きているのだろうか。結婚観や子ども観の変化を軸に、少子化社会の子育てを考える。	中森千佳子	中森千佳子
9	消費社会における子育て	これからの子どもたちは国際化、高度情報化が進展する消費社会での生活が中心となろう。したがって、消費社会の生活者として、消費者としての学習は不可欠である。子どもの消費者としての発達を一例に、消費社会における子育てを考える。	同上	同上
10	環境とヒトの健康	ヒトは環境に影響を与えるとともに、それからさまざまの影響を受ける。本講ではヒトが快適に生活するための条件としての環境、労働衛生的問題、環境側の要因による疾病、公害、ヒト活動の究極の問題である地球レベルの環境問題について論じ、環境法制、国際協力などにも触れる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
11	持続可能な社会と身近な環境問題	温暖化、オゾン層破壊、海洋汚染などの地球環境問題は、つきつめてみれば私たちの日常生活と密接に結びついている。ごみ、水、エネルギーなど私たちの身近な環境問題を取り上げ、未来世代に対する私たちの義務と責任について考える。	荻原なつ子（元東横学園女子短期大学助教授）	荻原なつ子（元東横学園女子短期大学助教授）
12	持続可能な社会の市民の取り組み	地球環境問題を解決するには、「地球規模で考え地域で行動する」ことが最も重要である。現在国内外で様々な環境問題への取り組みが行われている。ここでは市民による具体的な環境活動の事例を通して、持続可能な社会の構築に向けての糸口を探る。	同上	同上
13	地球社会と生活設計	これまでの学習を踏まえ、環境や食料、開発などの諸課題から現代人に課せられた三つの課題を抽出し持続可能な社会に向けた視点を明確にその具体化としての取り組みを例示し、現代の日本人に求められている生活設計のあり方を提案する。	阿部治（埼玉大学助教授）	阿部治（埼玉大学助教授）
14	持続可能な社会と環境教育	持続可能な社会形成のために重要な役割を果たす環境教育について、国際的視点からその概要を整理するとともに、生涯学習としての環境教育のあり方についてモデルを提示し、併せて学校教育のあり方についても提案する。	同上	同上
15	ライフスタイル構築の課題－文化現象としての生活再考	生活文化の特性を踏まえ、地域におけるトータルな生活コミュニティの構築と再生のための諸課題を述べ、歴史と風土に根ざした生活文化づくりを環境意識と食術、生業から考える。	清野きみ	清野きみ

＝教育の方法（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　学（東京大学教授）〕

全体のねらい

授業の具体的な事例を対象としながら、教育方法学の諸問題を、歴史的、心理的、社会学的に検討する。教えるとは、どういう行為なのか、授業において子どもと教師は、どのようなコミュニケーションを成立させ、何を経験しているのか。これらの検討を通して、これからの学校教育の役割と教師の使命についても講述したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	授業の世界へ	さまざまな授業の風景を提示しながら、教育方法学が扱う問題についてオリエンテーションを行う。	佐藤　学（東京大学教授）	佐藤　学（東京大学教授）
2	授業の様式(1)	小学校の実際の授業の様子を紹介し、授業における様式の特徴として、(1)「変容的様式」と(2)「模倣的様式」があることを示す。	同　上	同　上
3	授業の様式(2)	同　上	同　上	同　上
4	教育方法の歴史(1)	近代学校の成立と教授学、授業の定型の形成を提示し、今日の基本となっている授業の骨格について歴史的に検討する。モントリアル・システム、一斉授業の様式、日本における授業の成立。	同　上	同　上
5	教育方法の歴史(2)	学校の革新の中で追求されてきた教育方法の変化を、1910年代以降、今日までの改革の歩みの中で探る。 新教育の方法、個性化教育、単元学習、オープン・スクールなど。	同　上	同　上
6	教室という場所	教室という場所が、教師にとっても子どもにとっても、さまざまなディレンマに直面する場所であることを示す。あわせて、日米の教室の風景を比較し、教室における人間関係の組織、学習環境の違いについて考察する。	同　上	同　上
7	教室の出来事	授業の改革の実例を紹介し、教科学習において「わかる」ことの意味と、コミュニケーションを通じた学びのあり方について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	授業を創る(1)	今、試みられている授業改革の努力を紹介し、教師が授業を創造するにあたって、どのような問題ととりくんでいるのかを示す。総合学習、共同学習など。	佐藤　学	佐藤　学
9	授業を創る(2)	前回にひき続き授業の計画・実施評価の過程を検討する。	同　上	同　上
10	学びの経験としてのカリキュラム	カリキュラムの意味、カリキュラム研究の状況について説明し、カリキュラムの改革についての研究が、どのように進展しているのかについて示す。	同　上	同　上
11	カリキュラムと単元の構成	教科の意味、総合学習の意義について紹介し、カリキュラム開発を学校と教室を基礎にして推進する方法について講述する。	同　上	同　上
12	授業研究の方法(1)	授業を改善するための研究方法が、どのように開発されてきたのかを概観し、行動科学の方法によるカテゴリー分析の実例を通して、授業の道程を科学的、分析的に見ることの可能性と限界について考える。	同　上	同　上
13	授業研究の方法(2)	行動科学の批判以降の新しい授業研究の流れを紹介する。 参加観察法による研究、ビデオ記録や物語の記録による質的研究の可能性を探る。	同　上	同　上
14	専門家としての教師	教職の専門性についての理論を講述し、今日の教師の専門性が、どのような現実にあり、どのような改善が求められているのかについて示す。 教師の仕事を職業的アイデンティティの追求と専門家共同体の形成という視点で分析し、教師が生涯をとおして学び成長する姿を紹介する。	同　上	同　上
15	改革の展望	授業とカリキュラムを中心とする学校改革の現状を紹介し、今後の教育方法学の課題について検討する。	同　上	同　上

＝ 教育心理学通論（’０１）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「教える」とはどういうことなのか、「学ぶ」とはどういうことなのか、という問題を心理学的に解きほぐして、問題の考え方の歴史や、理論のよりどころとなっている実証的な研究との関係を平易に説明することによって、術語の丸暗記で済ますことなく、育児や学校教育や社会教育の様々な問題を批判的に考えられる力を養う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育心理学とは何か	知覚心理学、学習心理学、発達心理学、人格心理学、臨床心理学など、心理学という名がつく学問はいろいろある。このような様々な心理学の知識を教育に応用するのが「教育心理学」だ、という考え方もあるだろうが、そのようなやりかたでは、実際には、あまり教育の役に立たない。場合によっては、教育にとって有害な情報を提供してしまうことがある。教育心理学は、教育に関する心理学的研究なのだとひとまず考えておいていいが、古い心理学の方法が批判され、文化人類学的方法をとりいれるほうがいいという意見が強くなっている。	永野　重史（放送大学教授）	永野　重史（放送大学教授）
2	様々な教育	学校教育でも幼稚園の教育と中学校の教育は全く違う。陶器を焼くことをおぼえようとすると、そこには、学校とは違った教育がある。アメリカの文化人類学者の中には、かつての日本の銭湯（公衆浴場）を観察して、そこに素晴らしい教育があることを発見した。視野を広げて、様々な「教育」について考えると、新しい見方ができるようになる。	同　上	同　上
3	行動主義の学習心理学とその応用	自然科学の客観性に学ぼうとして、心理学は、主観的な体験を排除した。その結果、心理学は「心」を研究することは止めて、他人が観察できる「行動」を研究する方針を立てた。行動主義の心理学である。シロネズミの学習を研究して、「学習の法則」をつくったのが学習心理学。ネズミと人間を同じように扱ったから、その影響を受けた教育にもあまり好ましくない影響がでた。	同　上	同　上
4	学習の認知的理論	研究対象を「行動」に限定しないで、「考える」ということも視野に入れたのが「認知的理論」。「習慣」ができあがることではなく、「ものの見方」が変わることが学習なのだ、というような主張をした。しかし、心理学実験室の中で、日常生活から離れた状況での思考や学習を研究することにこだわったので、仲間になって協同して学ぶ現象を理解することができなかった。	同　上	同　上
5	道具と学習、人間関係と学習	人間は道具をつくる。道具というと硬い物だけを考えてしまうから「人工物」ということにすると、記号や言葉、社会制度やマナーも含めていい。こような人工物の利用を考えずに人間の生活について考えることはできないし、教育について考えることはできない。また、人工物の利用は、人間関係に深くかかわっている。従来の教育心理学は、独りで学ぶ学習者のことだけを考えて、人と共に学ぶ学習者の問題を見過ごしてきた。	同　上	同　上
6	発達研究と発達理論	発達の研究というと、何歳になるとどんなことができるようになるかを調査することだと考える人が多い。そのような知識をもとに、何歳で何を教えるかが決められると考える時代もあった。だが最近では、広い意味の「教育」があって発達するのだと考えるべきだという見解が有力になってきた。また、調査の仕方を工夫すると、幼児の能力も以前考えられていたよりははるかに高いこともわかってきた。発達段階の見直しがはじまった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	発達と教育	上のように発達に関する考え方が変わると、発達と教育の関係について従来考えられていたことも見直さなければならない。子どもの発達を待って教えるというレディネスの見方を改めて、教える者と学ぶ者が一緒になって課題を発見することが重要だと考えられるようになってきた。	永野重史	永野重史
8	記憶の心理学と教育	「わかる」「考える」などとは別に「記憶する」という別の能力があるかのように考える人がいるが、それは、１９世紀の能力心理学や、古い実験心理学の流れをひくあやまった考え方である。人の記憶とコンピュータの記憶は、全く別のものである。人の記憶は、感情・想像・知識・思考・欲望がすべて加わったもので、様々なことを体験し、感動をもっていろいろ知れば、「記憶力」は増大する。教えることを減らすよりも、楽しく学ぶことを増やすのがよい。	同上	同上
9	動機づけの心理学	心理学で「動機づけの研究」といわれているものは、いっぱんに言って。学習者が、ひとから学習を強制的される状況で、学習するときの心理を研究するもので、学習意欲の研究全体からすれば、極めて特殊なものである。快楽説にもとづく動機づけ論、外発的動機づけと内発的動機づけ、達成動機などを説明する。	同上	同上
10	意欲の研究	学校における学習では、問題を解決する方法も決められているし、問題解決できたかどうかを判断する「採点基準」も決められている。そのために学習者は、自由にじぶんの力を発揮することができない。絶えず、ひとの評価を気にして暮らすようになる。このことを考えるために、達成行動における目標の種類（世間による能力評価を高めようとする生き方と自分の世界が広がることを喜ぶ生き方など）について考える。	同上	同上
11	知能と創造性	知能テストで測られるものは「知能」なのか。「知能」とは何か。「知能」を伸ばす試みとはどのようなものか。「知能」とは別に「創造性」というものがあるというがそれは何か。風変わりなアイデアを出す能力が創造性だという説と、考え方のスタイル（流儀）の違いに着目すべきだという説。教育の中では何を考慮すべきか。	同上	同上
12	教育評価とテスト	教育評価とはテストのことではない。教え方が下手なので子どもが学習できないという場合に、学力テストを頼りに考えてはいけない。教え方に問題がなかったかどうかを考えるべきである。つまり、教育評価には、目的がある。どういう問題を解決しようというのか。そのためには、どのような情報が必要かを十分に考えなければならない。二種類の形成的評価とは何か、絶対評価というものが存在すのか、などの問題をかんがえる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	人間観と教育（1）	進学のことをすぐに考える世の中では、試験の得点を高くすることに熱心になる。そのために、精神測定的人間が優勢になって、個性を重視しようという声があがっても、「では、人を測るものさしを多くして、多元的な評価をしようという話になる。しかし、学校で測られない能力に注目すると、子どもたちは、興味のあることを能動的に学んで、育っていることに気づく。この自ら育つ（発達する）力を大切にする発達的教育観はどのような人間観に支えられているのだろうか。	永野重史	永野重史
14	人間観と教育（2）	従来の教育は２０世紀はじめからの行動主義的心理学の影響を受けている。それは機械論的で、シロネズミを材料にした学習心理学の法則や、実生活からかけ離れた「実験的状況」における記憶の研究や発達心理学を重んじ、実体験を離れて様々なことを考えることができる、想像力に富んだ人間のことや、実生活の様々な状況で、ひとびとが社会生活を送りながら、考えたり、判断したりしているということを忘れ勝ちである。いま教育心理学の中心課題となっているのは、このような「人間再発見」である。	同上	同上
15	教育環境の見方と設計	授業を教授・学習過程としてとらえると、まず、教えることを決めておき、それをじょうずに教えて、子どもがどのように学習したかを評価する、というように、一方向的な見方をしてしまう。ここでは、発達的教育観にたって、子どもが学び育つ教育環境を分析し、そのうえで、教育の設計を考えよう。設計の方法として、「工学的接近」と「羅生門的接近」の比較を考える。	同上	同上

＝ 心理学初歩（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：辻　敬一郎（中京大学教授）〕
〔主任講師：星　　薫　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

初めて心理学に接する受講者に、心理学が対象とする「心」および「心理」を探る方法を解説した後、意識・行動・個性・社会の諸側面について現代心理学が明らかにしている知見を紹介する。

昨今、心理学に対する社会的関心が高まっている反面、心理学の実像が必ずしも把握されていないように見受けられるので、その点に特に配慮し、心理学及び隣接科学の基礎教育として位置づけられるように授業を構成する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	導入－現代心理学とは？－	心理学が対象とする「心」をどう捉え、その法則性としての「心理」をどのように解き明かそうとするのかを脳科学との関連にも触れながら解説する。また、現代心理学の広範な研究分野についても概観する。	辻　敬一郎（中京大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）	辻　敬一郎（中京大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）
2	基本的意識過程（１）－感覚器官とその働き－	私たちは周囲の世界（外部環境）や自身の内部（内部環境）からの刺激を受けている。それらがどのように受容され、どのような感覚が生じるのか。最も基本的な意識と考えられる感覚の生理的・心理的過程を解説する。	相場　覚（北海道大学名誉教授）	相場　覚（北海道大学名誉教授）
3	基本的意識過程（２）－知覚世界の現象特性－	感覚過程で収集された情報は、時間的・空間的に統合されて知覚世界を構成する。私たちの行動や高次の意識の展開を支える知覚世界がどのような現象特性をもつかを、主として視覚的事実に基づいて解説する。	同　上	同　上
4	高次意識機能（１）－記憶作用の特性－	私たちは時々の状況において、記憶された事物や事象を再現し、それを利用している。時間的な連続の中に生きることを可能にする記憶の働きについて、実験心理学及び認知科学の成果に基づいて解説する。	星　　薫	星　　薫
5	高次意識機能（２）－言語の運用と思考の展開－	推論や理解などの思考活動、それと密接に関わる言語の習得と運用の問題を取り上げ、人間において格段に進化したこれらの高次の意識機能について、その特徴を明らかにした近年の研究を紹介しながら解説する。	同　上	同　上
6	高次意識機能（３）－感情の喚起とその表出－	人の認知には常に多かれ少なかれ感情的要素が混ざっていると言えるだろう。また感情は、行動を動機づけ、その表出は言語によるコミュニケーションを補完する社会的信号としての重要な機能をもつ。このような感情の働きを解説する。	同　上	同　上
7	行動的対処（１）－行動の発生と進化－	適応は、多くが環境への働きかけによって達成される。このような行動的対処には、生得的なプログラムとして具わっているものが少なくない。比較心理学を紹介しながら、行動の発生や進化の問題について解説する。	辻　敬一郎	辻　敬一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行動的対処（2）－行動習得の基礎－	人間の場合、行動的対処の様式は、主として生活史の中で経験に基づいて形成される。そのような学習性行動の形成や変容の基礎にある慣れ(ハビチュエイション）や条件付けの過程について解説する。	辻　敬一郎	辻　敬一郎
9	個性（1）－知性の誕生と働き－	心理学は、個人を越える「心理」の一般性を明らかにする一方、個人間の差異についても検討してきた。パーソナリティ(人格）の側面の一つである知性について、その発生と規定因、知能の測定などの問題を解説する。	上里　一郎（広島国際大学副学長）	上里　一郎（広島国際大学副学長）
10	個性（2）－性格の形成と差異－	パーソナリティのもう一つ別の側面が性格である。性格についての関心は古くからみられる。ここでは、その形成と変容、性格検査の信頼性と妥当性、性格の理論化などの問題について解説する。	同　上	同　上
11	個性（3）－人格と心理的適応－	知能や性格の統合体としての人格が個人の心理的適応とどのような関係にあるかを、フラストレーション(要求阻止)に対する耐性やコンフリクト（葛藤）への対処などに焦点を当てて解説する。	同　上	同　上
12	社会と文化（1）－社会的知覚と他者認知－	対人的行動は集団やその成員(他者)についての認知に強く規定される。また、非社会的な事象の認知に社会的経験や社会的要求が影響する場合も多くみられる。印象形成や力動的知覚など、認知に現われる社会的側面について解説する。	山岸　俊男（北海道大学教授）	山岸　俊男（北海道大学教授）
13	社会と文化（2）－集団力動と社会現象－	集団の成員が相互に影響しあうことによって、そこに社会現象が発生する。小集団から大規模社会までを対象に、環境破壊や災害事故などのマクロな問題の解決に欠かせない基礎的な知見について解説する。	同　上	同　上
14	社会と文化（3）－文化的基盤の影響－	グローバリゼーションの進展に伴い、文化的基盤が私たちの意識や行動に及ぼす影響が注目されるようになった。近年の「文化心理学」の成果に基づいて、異文化接触や国際交流をめぐる心理的問題を解説する。	同　上	同　上
15	まとめ－再び心理学とは？－	現代心理学の扱う諸問題とその研究方法の理解を踏まえ、改めて心理学の特徴、他の学問との関連、社会的貢献の可能性などについて、受講者と担当講師（主任講師）との質疑応答の形式で整理し、まとめに代える。	辻　敬一郎 星　薫	辻　敬一郎 星　薫

＝ フロンティア人間科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中島　義明（大阪大学教授）〕
〔主任講師：太田　裕彦（関西国際大学教授）〕

全体のねらい

人間は文化や社会の中で学び、悩み、遊び、成長する極めて多面的な特徴を持つ存在である。このような人間の全体像を捉えるには、多視点からの総合的な理解が必要である。本科目では、現代社会において人間が直面する諸問題をテーマとして、人間科学のさまざまな知のフロンティアを紹介しながら、人間を立体的に理解することをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間科学とは何か	社会・文化・パーソナリティを中核に広範な周辺諸科学との知のネットワークとしての人間科学のイメージと、その多様な方法論について概説する。	中島　義明（大阪大学教授） 太田　裕彦（関西国際大学教授）	中島　義明（大阪大学教授） 太田　裕彦（関西国際大学教授）
2	情報と人間	人間は言わば情報を「食べて」栄養素を吸収し、はじめて生存可能となるような生き物である。このような情報を人間の深い関わりについて考察を加える。	中島義明	中島義明
3	エラーと人間	人間の行動にとってエラーは大きな問題となる。しかし、エラーは人間の特性からして起こるべくして起こっているとも言える。このような視点からヒューマンパフォーマンスに関し考察を加える。	同上	同上
4	ゆとりと人間	人間にとってゆとりがいかなる意味をもつのかを人間の労働・余暇・遊びを通して考える。	太田裕彦	太田裕彦
5	生涯学習と人間	人間は死ぬまで新たな知識や創造を追求する生物である。それゆえ、生涯教育という視点が大事である。教育学者の視点よりこの問題に考察を加える。	山本　慶裕（国立教育政策研究所総括研究官）	山本　慶裕（国立教育政策研究所総括研究官）
6	ジェンダーと人間	現在社会において求められる男性・女性の役割や文化と歴史の中の男性と女性について考察を加える。	伊藤　公雄（大阪大学教授）	伊藤　公雄（大阪大学教授）
7	国際化と人間	現代社会において人間が直面している異文化理解や地球規模での共存の問題について考察を加える。	渡辺　文夫（上智大学教授）	渡辺　文夫（上智大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ボランティアと人間	ボランティア活動が開く新しい人間関係や社会変革力などについて考察を加える。	大熊由紀子（大阪大学教授）	大熊由紀子（大阪大学教授）
9	ニューメディアと人間	現代社会におけるさまざまなニューメディアの登場が人間の行動やライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているのかについて考察する。	中島義明	中島義明
10	特殊環境と人間	現代社会ほど人間がさまざまな環境に進出しようとしている時代はかつてなかった。宇宙環境、高層環境等々に見られる人間の心理について考察を加える。	同上	同上
11	自然と人間	人間は自然をどのように認識しまたどのように自然に関わっているのかという問題を中心に取り上げ、自然を通じた人間の特性を考える。	太田裕彦	太田裕彦
12	いじめと人間	現代社会において「いじめ」の問題は深刻な様相を帯びてきている。この問題に関し、心理学的に考察を加える。	丹野義彦（東京大学助教授）	丹野義彦（東京大学助教授）
13	死と人間	人間は必ず死を迎える。死に直面した人間とその周囲の人間の心理に関し精神科医の立場より考察を加える。	柏木哲夫（大阪大学教授）	柏木哲夫（大阪大学教授）
14	記号的想像力と人間	世界に生きる人間を記号・表現・レトリックの交錯するただ中に探る。	菅野盾樹（大阪大学教授）	菅野盾樹（大阪大学教授）
15	人間科学の可能性	これまでの講義を立体的にまとめ、さらに複数の講師による討議も交えつつ、知のフロンティアとしての人間科学の可能性について考える。	中島義明 太田裕彦	中島義明 太田裕彦

＝ 現代人のための哲学（’００）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、やさしい哲学入門である。哲学とは何かを、現代人の生き方と結びつけて示すのが、そのねらいである。科学技術の発達し、恐ろしい社会的諸事件の起こるこの転換期にあって、私たちは、どのように考えて生きたらよいのか。私たちは、現代における人間の生き方の根拠を問い尋ねてみようと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代とはどういう時代か	現代とは、歴史の転換期である。科学技術が急速に進歩し、地球上が狭くなり、人間生活の様相が激変し、伝統的価値が揺らいでいる時代である。ニヒリズムや悪がはびこり、自由と欲望がゆがんだ形で突出し、すべてが相対化し、多元性のなかで乱立している。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	科学とは何か	現代を規定している近代科学の本質を、まず考え直してみたい。17世紀以来の科学革命とその現代における帰結、科学における合理と実証、仮説演繹法、その結果としての科学の蓋然性などを明らかにして、科学の意義と限界を見定めてみる。	同　上	同　上
3	技術の光と影	近代科学は必然的に工業化されて、技術的に応用されるという性格をもつ。この技術革新のなかに現代人の生活はおかれている。技術は一方で、人間生活に役立つ多くの効果をもたらしたが、他方では、環境問題など深刻な難問を残している。技術の光と影を追う。	同　上	同　上
4	自然の生命の大切さ	私たちは、この地球上で、生命を恵まれて文化を築き、社会生活を営んでいる、ひとつの生きものにすぎない。私たちを包む大きな自然の生命の営みのなかに私たちを位置づけないとき、私たちの生存は危うくされる。自然全体の生命の大切さを考え直す必要がある。	同　上	同　上
5	脳と心	自然のなかに物質的身体性をもって生きている私たち自身のあり方を考え直してみると、そこに身体と精神という問題が現れてくる。そのことをもっと端的に表すと、私たち人間のあり方は、すべて脳の機能に還元されるのか否か、心とは何かという問いが生ずる。	同　上	同　上
6	人間の内面性	人間において大切なのは、心の内面性である。意識とか、精神とか、理性とか、知情意とか、自我とか、人格とか呼ばれるものは、自己自身の内面に、本人自身によって自覚され、また形成されるべき、各人の大切な自己自身のことにほかならない。	同　上	同　上
7	生きる根拠	私たちが、この世で生きてゆくときに、心の支えとなるものは、各自の内面性の深い奥底から、やむにやまれぬ必然性においてわき起こり、強い要求として立ち現れる、内面の声に聴き従うところに生じてくる。ここに自己の本当の実存と愛が芽生えてくる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	悪の問題	しかし、それは、たんに自己の我執にみちた欲望や妄念の追求のことではない。我欲にはしり、他人を排除し、抹殺し、憤怒と破壊に突進し、エゴイズムの野望に駆られることは、悪である。人間のうちに潜む邪悪な罪責性を自覚することが必要である。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	行為の規範	人間は、他人との共同存在のうちにある。そこにおのずと、自己と他者の間において守られるべき倫理と道徳の問題、つまり社会的行為の規範という問題が生ずる。これは、法の根拠への問いともなる。それは、人間における善と悪の原理を問い直す試みとなる。	同上	同上
10	人生の苦悩について	人間はたえず自己のうちの罪責性を悔い改め、日々新たに、人生を正しい軌道にのせて自己形成をなすべき努力を課せられた存在者である。あるべき本当の自己たるべく、一生涯、努力精進するのが、人間としての使命である。ここに人間のさまざまな苦悩が生ずる。	同上	同上
11	情念の問題	人間の大切な点は、たんなる知性のうちにはなく、むしろ感情と意志、つまり情意のうちにある。情意を本当に満足させえないとき、人間は不幸である。とりわけ大事なのは、意志である。意志の拡充と阻止に伴って、人間には多様な喜怒哀楽の気分と感情が生ずる。	同上	同上
12	死について	いかに努力精進しようとも、やがて人間は死ぬ。死という終わりにさしかけられた有限の人生のただなかを、いま私たちは生きている。この死という厳粛な事実に対して、私たちはどのように身構えたらよいのか。これは人生の生きがいや幸福の問題に関わってくる。	同上	同上
13	歴史のゆくえ	もちろん、私たちの個々人の一生を越えて、さらに人類の歴史は続く。いったい歴史の大きな流れは、どこから発し、どこへと向かっているのであろうか。歴史のなかでは、さまざまな悲惨な戦争、災害、悲劇が起きた。歴史のゆくえと意味はどこにあるのだろうか。	同上	同上
14	祈りと希望	私たちは、多くの社会的事件の起こるなか、歴史のゆくえをしかと見定められぬ状況のうちで、各人それぞれの持ち場で、より良い明日を願い、ささやかながら努力精進して生きている。そのとき私たちの心をみたすものは、豊かな実りへの祈りと希望である。	同上	同上
15	神は存在するか	現代を生きる私たちの心の最も奥深いところで、私たちを捕らえて離さない問いは、この災いにみちた人間の生存の現実のなかに立てば立つほど私たちに迫ってくる「神は存在するのか」という問いであろう。私たちを救う神は存在するのか否かが、問題となる。	同上	同上

＝ 現代アメリカ思想（’０１）＝（R）

〔主任講師：魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代アメリカ人の実際的な物の考え方の根底にある思想に光をあてる。特に、どんな思想もそれに基づいて行動した結果によってその意味や良否を判定するといった姿勢をとる、現代アメリカの代表的な哲学思想、プラグマティズムの展開が中心となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代アメリカ思想の背景	現代アメリカ思想の背景として独立宣言の思想を検討し、さらに「知的独立宣言」を表明したと言われるエマソンの思想やソローの活動を明らかにする。また移民によって開拓された国の「人類のオーケストラ」とも言うべき文化的多元主義の背景をさぐる。	魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）	魚津　郁夫（熊本大学名誉教授）
2	プラグマティズムの登場	自然科学の発展にともなう決定論的な思想と、人間の自主性をもとめる思想の対立からくる「十九世紀末の悪夢」の一例を、マーク・トウェインの小説「人間とは何か」に見る。こうした悪夢に立ちむかう思想としてジェイムズのプラグマティズムが登場する。	同　上	同　上
3	パースの「探究」と真理	ジェイムズによって全世界にひろめられたプラグマティズムの原型は、パースの「プラグマティック・マクシム」である。ここではパースの主張する「探究」について概観し、真理とは何か、実在とは何か、を明らかにする。	同　上	同　上
4	パースと記号論	あらゆる思想は記号によって媒介されたものであり、直接的な直観による認識はありえないとする、パースの基本的な考え方と、そこから展開された先駆的な記号論を検討する。	同　上	同　上
5	パースのアブダクションと可謬主義	推論には演繹（ディダクション）と帰納（インダクション）の他に、アブダクションがあることをパースは指摘した。アブダクションによって探究は進展するが、そこにはつねに誤謬の可能性がつきまとう。	同　上	同　上
6	ジェイムズと真理	ジェイムズは、パースのプラグマティック・マクシムに独自の解釈を加えて真理論を展開した。彼の企ては、科学的世界観と宗教的信条の両立をはかるところにある。	同　上	同　上
7	ジェイムズと宗教	宗教とは、孤独のなかにある個々の人間が、自分が神と思うものとかかわっていることを自覚したときの、その経験である、とジェイムズは言う。こうした立場からジェイムズによって記述された様々な宗教のありかたを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ジェイムズの「純粋経験」と多主義	経験のもっとも基本的な形は、主観と客観が区別されていない「純粋経験」である。それはいわば心と物の交点である。こうした見解は西田哲学につよい影響をあたえた。	魚津　郁夫	魚津　郁夫
9	ミードの「社会的行動主義」と言語論	人間の意識はコミュニケーションという社会的行動のなかからうまれる。したがって社会的行動主義は、観察可能な社会的行動から、個人の内面的な意識を解明することを試みる。さらにミードはここから独自の言語論を展開した。	同　上	同　上
10	ミードと自我論	自分にたいする他人の態度や役割を自分のなかにとりいれることによって自我が形成される、という「役割とりいれ説」にもとづく独自な自我論の展開。	同　上	同　上
11	デューイの「道具主義」と教育論	思想や観念の意味をその結果によって判定するパース以来のプラグマティズムの流れのなかで、思想を問題解決のための道具と考える、デューイの「道具主義」とその展開である教育論。	同　上	同　上
12	デューイと真理と宗教	デューイは論理学を「探究の理論」としてとらえる。探究はすべて問題解決のための活動であり、四つの段階をへて「保証された言明可能性」すなわち真理にいたる。さらに、彼の立場から展開された宗教論。	同　上	同　上
13	デューイと善と美	デューイによれば、善とは究極の固定した目標ではなく、それへとむかう過程にほかならない。また美とは、完結した経験のもつ特徴をさらに純化し強化したものである。	同　上	同　上
14	モリスの思想とクワインの思想	モリスはパースの影響のもとに、記号過程の研究をおこない、また仏教も視野に入れた独自の宗教思想を展開した。クワインはネオ・プラグマティズムの立場から、二十世紀後半の分析哲学に深刻な影響をあたえた。	同　上	同　上
15	ローティーのプラグマティズム ～全体をふりかえって～	ローティーは、心を、実在をうつす鏡と考える伝統的哲学を否定する。この立場では、哲学は文学と区別できず、科学でさえ文学のひとつのジャンルとなる。本章では、ローティーの主張を批判しつつ、プラグマティズムの現代的意義を考える。	同　上	同　上

＝ 倫理思想の源流（'０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：関根　清三（東京大学教授）〕

全体のねらい

西洋の倫理思想史の様々な潮流がそこに発する、ギリシアとヘブライの２つの源流に遡って、基本テクストを読解し、多様な思索に学びつつ、そこで何が問題となり、それが倫理学的にどのような意味を持つのか、について考察する。そのことを通して特に、愛・正義・超越・犠牲等、現代人の思索に挑む問題系の射程を見定め、特に「驚き」を基底に据えた倫理学の可能性について、何某かの展望を開くことを目指したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論―「驚き」―	プラトン、アリストテレスが哲学の始めに「驚き」があることを指摘しているが、実践哲学としてのギリシアの倫理学もここに起点を持つだろうことを、様々なテクストを引きつつ、確認する。ヘブライの宗教倫理においても、「驚き」が鍵語となることについては、現代のユダヤ教哲学者ヘッシェルが、正当にも注目しているが、これについても、本論を先取りして、主要テクストを参照する。	関根　清三（東京大学教授）	関根　清三（東京大学教授）
	第Ⅰ部　古典ギリシアの実践哲学①ソクラテス前の哲学者たち（１）―イオニア学派	紀元前６世紀、ギリシアの植民地イオニアに、澎湃として出現した哲学者たち、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスは、万物の無限な原理を探り、さらにはクセノファネスはその原理を擬人神観的に捉えることを批判し、ヘラクレイトスは万物を操る叡慮について思索した。それらは哲学の嚆矢であると同時に、超越への驚きに基づく知的探求を善とする倫理学の誕生を告げるものである。		
2	②ソクラテス前の哲学者たち（２）－イタリア・トラキア学派	前5世紀のイタリア・トラキア学派では、憎しみが惹起する争いによる罪の意識とそれを償おうとする意志、更には愛の調和への復帰を語ったエンペドクレス、上機嫌や中庸の徳、さらには畏怖の重要性を指摘したデモクリトスが、倫理思想の上からは注目される。しかし両者に影響を与え、現代のハイデッガーに至るまで広汎な影響力を有する、パルメニデスの独創的な存在論も刮目に値する。	同　上	同　上
3	③ソクラテスとプラトン（１）－ソクラテスからプラトンへ	プラトンの初期対話篇の主人公であるソクラテスと、中期・後期対話篇のプラトン自身の思想を分けて、それぞれを比較する。徳が幸福のために十分と考え、徳を知と同一視し、また霊魂不滅を信じたソクラテスに対し、徳は幸福に至る手段ではなく、また知識以上のものと考えたプラトンは、独自の正義論・愛論を展開する。また彼は霊魂不滅の信仰を論証しようと試みた。両者の比較を通して、倫理的な問答の真髄を探る。	同　上	同　上
4	④ソクラテスとプラトン（２）－プラトンを中心に	プラトンにおける徳と正義、愛と快楽、霊魂とイデアといった中心問題を、中期の『国家』篇の読解を通し、適宜、中期の『パイドン』『パイドロス』『メノン』『饗宴』、後期の『テアイテトス』『フィレボス』その他の対話篇も参照しつつ、論ずる。	同　上	同　上
5	⑤アリストテレス（１）－幸福と倫理的卓越性	以下3回にわたって、アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読み解きつつ、ギリシア倫理学の到達点を見定める。先ずこの書の位置付けと構成を押さえた上で、プラトン倫理学との相違点を整理する。特にアリストテレスの視点からするプラトンのイデア論批判の妥当性を検討する。次に、善と幸福とは何か、から説き始め、最高善の指摘をもって結ばれる、『ニコマコス倫理学』全体の結構を俯瞰する。続いて倫理的卓越性（徳）論を整理する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	⑥ アリストテレス（２）－中庸と徳論	徳論の中心である中庸論とそれへの後世の批判、それらの評価について論じた後、勇気、正義、愛の三つの徳に絞って、その意味について考える。配分的・矯正的・相補的正義の解釈、自愛は総じて非か否かをめぐる議論等をめぐって、考察する。	関根　清三	関根　清三
7	⑦ アリストテレス（３）－知的卓越性と観照	まず倫理的卓越性に対する知的卓越性の諸相を、思慮（実践知）に焦点を合わせて論ずる。行為と責任、放埒と抑制といった問題圏から、独自の快楽論とその位置付けについて考察する。最後に、幸福としての観照をめぐるアリストテレスの結論部を分析し、プラトンとの比較、政治論への移り行きについて押さえる。またその理性尊重の基本姿勢とその包含する問題性、ギリシア的自由民の倫理からヘブライ的捕囚民への展望を開いて、第Ⅰ部の結びとする。	同　上	同　上
8	第Ⅱ部　古代ヘブライの宗教倫理 ⑧ 十戒（１）－第六戒から第九戒を中心に	第Ⅱ部の宗教倫理としてのヘブライ倫理についての論じ方をめぐって注意点を押さえた上で、旧約の第一部分「律法」から先ず十戒を取り上げる。殺人・姦淫・偸盗・偽証を禁ずる第六戒から第九戒をめぐって、ヘブライ語に遡った広狭二つの解釈の可能性を確認し、更にそれらが禁ぜられる根拠を探る。カントの定言命法からの根拠付けとヘーゲル以降の批判、和辻哲郎の信頼理解からの根拠付けとその当否について論ずる。	同　上	同　上
9	⑨ 十戒（２）－第一戒を中心に	前回見た和辻の第六戒以降の根拠付けは、第一戒から四戒、すなわち神関係の戒めを無視するところに、十戒解釈としては瑕疵が存することを指摘した上で、論者自身神関係の戒めを哲学的に解釈する可能性を模索する。それを踏まえて、和辻に代わる、十戒の根拠付けを試みる。倫理が突き詰めたところ、何らかの超越的原理と関わらざるを得ないことを、現代の象徴論などを考慮しつつ論じ、そこから古代の倫理に通底する「驚き」へと論じ進む。	同　上	同　上
10	⑩ 法集成 ―「契約の書」「申命記法」「神聖法典」	「律法」中唯一の断言法たる十戒に対し、決疑法の代表的集成である、「契約の書」「申命記法」「神聖法典」の三つについて、倫理思想上の落穂拾いをする。捕囚民・社会的弱者へのアガペーの思想、愛敵の思想が、新約に先駆けて語られることに、注目する。	同　上	同　上
11	⑪ 知恵文書（１）－『箴言』	旧約聖書の第三の部分「諸書」中、倫理思想の上から逸することができないのは、所謂「知恵文書」である。その代表的三著『箴言』『ヨブ記』『コーヘレス書』について、以下三回にわたって学ぶ。『箴言』については、これを徳目表として読むというのが、論者の視点となる。しかもその錯綜した叙述を、ギリシアの『ニコマコス倫理学』の徳論との比較の視座を導入して、哲学的に整理しつつ読むというのが、ここでの方法である。そこから、ギリシア・ヘブライそれぞれの徳論に共通するものと独自のものの別も見えて来るはずである。なお『箴言』中にも愛敵の思想が顕著であることを、パウロと比較して付言する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	⑫ 知恵文書（2） －『ヨブ記』	『箴言』では基本的に応報信仰が保たれていたが、義人が苦しむ現実を前に、応報思想の破れを問題にした後期知恵文書が、『ヨブ記』である。キルケゴール、ユングなど後世の解釈を批判的に紹介した上で、『ヨブ記』作者のこの問題に対する独自の答えを読み解いて行く。	関根　清三	関根　清三
13	第Ⅲ部　ギリシア・ヘブライ倫理の帰趨 ⑬ ヘブライ宗教における応報倫理 －『コーヘレス書』を中心に	『ヨブ記』は例外的な義人の苦難を問題にしていたが、より一般的に応報の破れた現実を剔抉し、伝統的な信仰の革新を試みた最後期の知恵文書が、『コーヘレス書』である。全てを空、と断ずるその思想を、語の十全の意味でニヒリズムと規定すべきことを、ニーチェ・ハイデッガーのニヒリズム定義を参看しつつ論じた後、現代の哲学的に整理されたニヒリズム理解との比較において、『コーヘレス書』の迷路のようなテクストを読み解くことを試みる。特に倫理思想の観点から重要なのは、応報倫理の破れたニヒリズムを、個人のささやかな愉悦を楽しむことによって超克しようとする、コーヘレス独自の思想だが、そこには終始他者が忘れられていることも、他方限界として指摘せねばならない。	同　上	同　上
14	⑭ ヘブライの宗教倫理と贖罪思想 －預言者を中心に	応報の破れを率直に認めつつ、コーヘレスのようにエゴイズムに閉じこもることなく、他者関係に開いた新しい神の模索を、旧約の他のテクストに探って行くことが、ヘブライズムについての最終回である14回の課題となる。旧約中第二の部分「預言者」から先ずイザヤを取り上げ、彼の義の神とその限界、また歴史書と文学書からダビデのバテシェバ事件における愛の神の発見とその問題性を読み解いた後、義だけでも愛だけでもなく、両者の統合を贖罪思想において発見した、捕囚期の預言者第二イザヤに注目する。ヴェーバーの古代ユダヤ教理解を批判的に援用しつつ、第二イザヤこそ、応報倫理の破れを逆手に取ってかつてそこにこそ顕れる新しい神の働きを見出したことを確認する。それを踏まえて更には新約のイエスの十字架理解の系譜へと論じ進む。しかしこの贖罪思想の系譜こそ、カント、若きヘーゲル、またニーチェ、レヴィナスなどの諸家が激越な批判の対象とした、思想史上の争点でもあった。最後にそれぞれの視点からの批判と、贖罪思想からの応答の可能性を探る。	同　上	同　上
15	⑮ 愛と義をめぐるギリシア哲学の省察 ―アリストテレスに即しつつ	ヘブライの倫理思想の根本問題は、応報倫理の破れをどう解するか、という点に収斂したが、これに対するユダヤ・キリスト教の贖罪信仰からする解答を、より一般的な哲学の理性の言葉で敷衍するとどうなるであろうか。最終回は、『ニコマコス倫理学』に戻って、その行間にまで分け入りつつ、愛が贖罪にまで至り得、また至らざるを得ない事情について、何某かの展望を開き、あわせ哲学と宗教の相補的緊張関係について確認して、結びとする。	同　上	同　上
	結語と展望 －再び「驚き」をめぐって－	ギリシア・ヘブライの倫理思想に底流するものとして、序論で確認し、本論でも適宜注意を喚起して来た「驚き」をめぐって、その現代的意義について省察するのが、最後の課題となる。謙虚、謎解き、愛、超越など現代人に挑む問題系を包含する驚きという概念の、倫理思想にとっての豊かな可能性を示唆し、聴講者の思索への誘い水とする。	同　上	同　上

＝ 宗教への招待（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大峯　顯（大阪大学名誉教授）〕

全体のねらい

死すべき命を生きる人類の生活と文化は、昔から人間と人間以上の実在との関係としての宗教を根本にして成り立って来たが、科学が発生してからは、この重要な基盤が動揺しはじめた。これは現代文明における深刻な根本の問題である。人間存在にとって宗教がなぜ必要かを明らかにして、宗教の再生の途を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代日本と宗教	仏教の伝統が崩れてきた明治以後の日本社会は、真の宗教を失って世俗化し、いろいろな擬似宗教を経験してきたと言える。日本はおそらく世界中のどの国家よりも世俗化が進んだ非宗教的な社会だと外国人の目に映るようである。その実態を明らかにする。	大峯　顯（大阪大学名誉教授）	大峯　顯（大阪大学名誉教授）
2	民族宗教と世界宗教	宗教は民族宗教（原始宗教）と世界宗教（歴史宗教）の二つの類型に分けられる。両宗教のちがいを明らかにすることによって世界宗教の本質的な特質である現世否定と現世超越性を明らかにする一方、宗教研究の二つの立場である「宗教学」と「宗教哲学」について述べる。	同　上	同　上
3	現代人と死（その１）	現代文明社会に生きる人間の特徴は、死というものに対する異常なまでの拒否であると思われる。しかし、人間が死すべき存在である以上、死の問題を拒否することは、とりもなおさず人間を見失うことである。古代と中世の死生観の紹介。	同　上	同　上
4	現代人と死（その２）	近代から現代までの哲学にあらわれた死生観の紹介。	同　上	同　上
5	現代人と死（その３）	大乗仏教の死生観の紹介。	同　上	同　上
6	宗教の本質を問う（その１）	宗教といういとなみをそれ以外の人類のいとなみから区別する特質、宗教をして宗教たらしめるところのものが宗教の本質である。これを最初に問題にしたのが近代ヨーロッパに成立した宗教哲学であるが、現代の非宗教的な状況の中でもう一度この問題をあつかう。	同　上	同　上
7	宗教の本質を問う（その２）	同　上	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宗教と言葉	言葉が最も根源的な姿をあらわしてくるのは宗教においてである。キリスト教の聖書や禅仏教、浄土教の「名号」などにあらわれている言葉の諸相を明らかにして、人間にとって言葉とは何かという問題を考える。	大峯　顯	大峯　顯
9	日本人の自然観（その1）	日本の仏教や文芸の著しい特色は自然というものを親しい友として見ると同時に人間以上の聖なるものと見ている点にある。仏教の言葉で言えば、自然は仏であったり衆生（同朋）であったりする。日本人の自然体験の流れを具体的なテキストに即してたどる。	同　上	同　上
10	日本人の自然観（その2）	同　上	同　上	同　上
11	聖と俗（その1）	宗教とは人間と聖なるものとの関係だと言ってよい。しかし、人類の歴史の中で聖なるものの観念はいつも同じではなく、さまざま変貌を見せている。東西の宗教思想における聖のいろいろな姿をたどりながら、聖と俗との交渉を明らかにする。	同　上	同　上
12	聖と俗（その2）	同　上	同　上	同　上
13	宗教と哲学	宗教と哲学とは共に絶対的なものにかかわる人間のいとなみでありながら、同時にまた信仰と知性という正反対の面をもっている。この両方がどのように関係するかという問題をとりあつかう。	同　上	同　上
14	宗教と科学	今日すべての宗教が直面している最も深刻な問題は科学や科学技術との関係である。科学的な世界観は宗教的世界観と正反対のところがあるが、それにもかかわらず、人間精神の中で、この二つは何らかの仕方で統一されなければならない。その統一の途を探る。	同　上	同　上
15	生命とは何か	宗教は個人の願望とかイデオロギーではなく、各人の内にある生命それ自身の要求、生命が生命自身を自覚しようとするいとなみである。ライフ・サイエンスは生命を外から研究するのに対して、宗教は生命を生命自身の内から明らかにする。	同　上	同　上

＝ 国語学概論（’０２）＝（R）

〔主任講師：白藤　禮幸（帝京大学教授）〕
〔主任講師：杉浦　克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

世界各国との接触が日常的となった今日、私たちの「国語」は従来とは違った視点で見直し、より意識的になる必要があるのではないだろうか。そのような視点で国語の諸分野を概観し、我々の言語を対照的に捉えることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国語と日本語、国語学の諸分野	我々は私たちの言葉を国語と呼ぶことがあるが、この語は近代になってから、当時の中央集権的な国家を目指してきた動きの中で作られた。欧米から、新しい学問として言語学が導入され、それに伴って国語学という学問が生まれた。私たちが、じぶんの言葉を見詰め直し、その特質について自覚的に意識することの意義について考える。	白藤　禮幸（帝京大学教授）	白藤　禮幸（帝京大学教授）
2	世界の中の日本語	近時、外国語としての日本語などと、我々の国語を客観的に対照的に捉えようとする態度が必要とされる。国際化の進んだ今日、相互理解のためにも、私たちの国語が、他の言語と比べて、どのような性格を持つのか、世界の諸言語の中での日本語の位置を相対的に考え、言語構造の上で、どのような違いをもっているのかを、音韻、文法、語彙形態などについて考える。	同上	同上
3	国語の音韻	言語の最も基本的な単位は、言葉を話す人の声である。国語のそれにはどのような種類があり、それがどのような仕組み、体系をなしているか、直音・拗音・清音・濁音・半濁音・連濁・連声など、国語の音韻独特の諸概念について、その持つ意義に留意しながら考察し、あわせて、他言語との違いが齎らす問題点をも見る。	同上	同上
4	漢字音	わが国は古代から、中国から漢字を借りて書くという言語活動を始め、多くの漢語をも導入して我々の語彙を増やしてきた。そのなかで中国音は国語に大きな影響を与えた。日本漢字音としての呉音・漢音などが、何時、どのようにして国語の中に定着したか、漢字音が定着する過程で国語に対してどのような影響を与えたか、漢字音の表記法（字音仮名遣い）にはどのような問題があるか、などについて考える。	沼本　克明（広島大学教授）	沼本　克明（広島大学教授）
5	国語の文字	国語の文字は、世界の諸言語と比較しても、文字に関して極めて特異な特色を持っている。表意文字の漢字、表音文字の片仮名・平仮名、その他、アルファベットやローマ数字など多種の文字を使っている。その背景と問題点を考える。	白藤　禮幸	白藤　禮幸
6	国語の表記	多種の文字を用いる国語の表記には、それ故の問題点がある。その表記の歴史的な変遷を概観し、仮名遣い、漢字制限、漢字仮名交じり、片仮名・平仮名の使い分け、句読点その他の記号の用法など、現代語の表記に関する問題点を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	国語の文法の構造	日本語と英語の代名詞を比較すると、英語では、"they their them" と変化するが、日本語では、「彼らが、彼らの、彼らを」のように変化する。このように、格的意味の違いを、英語では単語の一部を取り替える手続きによって表すのに対して、日本語では「を、に、と」などの異なる助詞を付けることによって表す。文法的な意味を表す形を作る際の日本語の語形を作る手続きには、英語やその他の言語と較べてどのような特徴があるかを、名詞、動詞、形容詞を中心に考えてみたい。	鈴木　泰（お茶の水女子大学教授）	鈴木　泰（お茶の水女子大学教授）
8	文語と口語	日本語において、活用は、何のために、どのようにして生まれたか。そして、活用体系は古代語から近代語に移り変わる中でいかなる変遷を辿ったか。そうした変遷の中で変わらなかったものは何か。また、それによって日本語の表現はいかなる変化を蒙ったかを考える。	同　上	同　上
9	文章・文体	文章研究の概要を実際の文例で示し、また国語の文体について、近現代の文例から、その特色をになう要素を考える。さらに歴史的な観点で主に表記面から、漢文とその訓読に由来する類と、和歌や女流日記等の平仮名文に由来する類に整理して、文体の成立と発達を概説する。	杉浦　克己（放送大学助教授）	杉浦　克己（放送大学助教授）
10	敬語	敬意に基づく待遇表現としての敬語の基本的な役割の観点から敬語を分類整理し、その発達・変化を概説し、さらに現代では身内他人敬語・荘重語のように人への敬意ではなく場への配慮として用いられる敬語へと変化しつつあることを述べる。	同　上	同　上
11	国語の語彙	意味を表す最小単位として単語をとらえ、単語とその意味はどのようにとらえることができるかを、考え方の実例を挙げて概説し、単語はどのように習得され、どのように頭の中で整理されて用いられているかを考える。	同　上	同　上
12	和語・漢語・外来語	国語で用いられる語彙は、その由来によって大きくいくつかのグループに大別できることを述べ、それは単に由来のみでなく表記や文体等とも関係して、国語の実用上に大きな影響を与えていることを、実例を挙げながら概説する。	同　上	同　上
13	方言	日本には、そのせまい国土のわりには、土地によって言葉が違うという方言の差が著しく認められる。その方言の姿を音韻・語法・語彙について、いくつかの事例に基づき、土地・所による言葉の形の差を大きな視点で概観する。	小林　隆（東北大学助教授）	小林　隆（東北大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	国語研究の歴史	国語について、どのような研究がなされてきたか、我々の先人は、国語のどのような面に問題を感じてきたかを、中古以降の音韻・文字・語法の研究書を取り上げ、そこで論じられたことを概観し、あわせて国語の性質を考える。	白藤　禮幸	白藤　禮幸
15	国語の将来	国語の抱える問題点とその歴史的な背景を概観し、現代社会の多様化や情報化等と関連づけて概観し、具体的な国語政策、特に国語科教育との関わりを一つの例として、現状と今後の方向を考える。	杉浦　克己	杉浦　克己

＝ 国文学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：堀　　信夫（大阪樟蔭女子大学教授）〕
〔主任講師：野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

国文学全般について、基本的な教養が身につくように基礎的事項や確定している知見を提供する。また、学問の基礎作業を手ほどきし、できるだけ先進的な問題関心についても紹介しながら、わが国の文化的特質について展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国文学とは	導入部として、国文学の基礎的概念を規定しながら、この講義全体の構成について概説する。また国文学研究の成立や展開、さらには近代化の様子を概観する。なお、国文学史の全体像を明らかにするため、その時代区分の仕方についても、簡単に説明する。	堀　信夫（大阪樟蔭女子大学教授）	堀　信夫（大阪樟蔭女子大学教授）
2	上代文学（Ⅰ）	上代文学の研究は、国語学の発展と緊密に結びついている。これは国語全体に関連する事柄なので、この基本をしっかりおさえて上代文学を概観する視座を確認する。	神野志隆光（東京大学教授）	神野志隆光（東京大学教授）
3	上代文学（Ⅱ）	記紀万葉と一口に言われる習わしだが、代表的な作品について、上代文学ならではの特質を解明し、内容を略説する。また、漢文学や説話についても言及する。	同　上	同　上
4	平安文学（Ⅰ）	漢詩文・和歌・物語と展開していく時代の流れをわかりやすくたどり、それぞれの特質を解説するところから、平安文学全体の構造を探る。また、日記文学の本質についても、時代の特徴と関連させて考える。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
5	平安文学（Ⅱ）	和歌と歌論・歌学、またそれに関連して歌謡の具体相を解説する。散文では物語文学と日記文学の関連や歴史物語の誕生に触れ、説話文学に言及する。締めくくりに『枕草子』と『源氏物語』について述べる。	同　上	同　上
6	中世文学（Ⅰ）	中世は非常に長い期間にわたっているので、まず、その領域と理解の仕方について述べる。次に、韻文・散文のそれぞれを概説し、さらに、この時代の特質である語り物と芸能に関しての初歩的なアプローチの方法を紹介する。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
7	中世文学（Ⅱ）	前時代からの継承としての和歌・物語、及び『平家物語』などの軍記物語について解説し、また、中世に特有の韻文の本質・発展、説話集の多様化、『徒然草』などの随筆の盛行など多岐にわたる文学の諸相を概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近世文学（Ⅰ）	時代の支配的思想が、仏教から儒学に移行し、庶民の生活レベルがアップしたこと、および文化の商品化が進行し、衆庶の意向が文学の動向に強い影響を与えたことを明らかにする。特にこの回では近世小説の変遷を概括する。	堀　信夫	堀　信夫
9	近世文学（Ⅱ）	新しく流行した俳諧文学の特質を明らかにしながら、伝統と革新という観点から、和歌文学との比較を試みる。また芭蕉の生き方や思想を中心に、近世俳諧の特色を明らかにし、蕪村の芸術との相違点や、雑俳流行の積極的意義などに言及する。	同　上	同　上
10	日本漢文学の流れ	日本漢文学の簡略な定義をした上で、上代から平安へ、さらに中世の五山文学を経て、近世に達する日本漢文学の流れを概観する。近世においては、日本化と大衆化という観点から巨大な量の作品を分析解明する。	揖斐　高（成蹊大学教授）	揖斐　高（成蹊大学教授）
11	日本演劇	まず、演劇の本質から説き起こし、日本演劇の特性を述べる。次いで能・狂言に代表される中世の演劇について解説し、人形浄瑠璃と歌舞伎で頂点をきわめた近世演劇について考察する。	服部幸雄（日本女子大学教授）	服部幸雄（日本女子大学教授）
12	近代文学（Ⅰ）	明治以後急速に近代化の道をたどった文学の多様な姿を概観する。まず、詩人や作家が用いた文章について、その特質を考察する。次いで近代文学の全体をその傾向と内容からどのように包括的に理解すべきかを述べる。	浅井　清（帝京大学教授）	浅井　清（帝京大学教授）
13	近代文学（Ⅱ）	近代文学の事象から要請される研究上の観点について、その主題と方法に関する基本的な問題を具体的に解説する。これがまた、いわゆる鑑賞から研究への道を開くものであることをわかりやすく述べる。	同　上	同　上
14	近代詩歌	明治の新体詩と和歌俳諧とを軸にして、近世から近代への歴史的転換について考察する。この問題が遠く現代にまで影響を及ぼし、また日本人論や近代化論の原点になっていることを述べる。	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
15	結びに代えて	いわゆる戦後に論議をまきおこした第二芸術論を手がかりにして、短詩形文学の運命について考察する。また、戦前戦後の詩と比較しつつ今日にまで及び問題を考え、あわせて国文学の本質まで展望する。	同　上	同　上

＝ 近代詩歌の歴史（’９９）＝（R）

〔主任講師：野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

明治以後において詩歌の変革が避けられない大きな問題であったことを明らかにするのが目標。前代からの連続と断絶、変革の実際などを述べて、内部から近代詩歌の本質を解明する。さらに、散文・小説との関連に照明を当てて外側から近代詩歌のありかたを分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	詩歌の歴史の構想	ことばの定義と全体の構成、詩歌の内外を総体として考える。明治期に全領域の基本構造を見定め、さらに散文・小説まで視野に組み込んで考察する。	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
2	詩歌の変革	正岡子規1　第2回から6回まで子規を視点に据えて考える。前代の韻文・詩歌の状況と、そこから出発した子規のありかた、及び変革の不可避であったことを述べる。	同上	同上
3	文学としての詩歌	正岡子規2　明治二十年代文学を概観し、そのなかで詩歌が占めていた位置を考えながら子規の存在意義を見定める。	同上	同上
4	短歌形1－俳句	正岡子規3　子規の最も重要な成果である俳句革新の具体的な様相を追跡する。	同上	同上
5	短歌形2－短歌	正岡子規4　子規のもう一つの大切な仕事であった短歌革新について概説する。	同上	同上
6	歌俳の系譜1	正岡子規5　子規の理想がどの程度実現したか、または挫折したか、をできるだけ細かく観察し、併せて結社の展開の姿を略述する。	同上	同上
7	新体詩と短歌明星派1	明星派1　初期明星派が結成される過程と結社に対する考えかたを略述する。主な対象は与謝野鉄幹・晶子。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	新体詩と短歌 明星派 2－ 白秋と啄木	明星派2　詩歌の全域を自分の個性として構想した北原白秋と石川啄木について考える。	野山嘉正	野山嘉正
9	新体詩と短歌 明星派 3－ 白秋の全領域	明星派3　第8回に引き続き白秋の後半生に集中して詩歌の全領域への展開の具体的な事実を追跡する。	同上	同上
10	詩歌と小説 1 －近世から近代へ－	近世から近代へ　詩歌と小説の歴史的な位置関係の変化を観察する。併せて小説偏重の文学史を見直す。取り上げる主たる対象は坪内逍遙と北村透谷。	同上	同上
11	詩歌と小説 2 島崎藤村	島崎藤村と田山花袋　いわゆる〈詩歌から散文へ〉という図式を再検討する。二人それぞれの詩歌と小説に対する考えかたを考察する。	同上	同上
12	詩歌と小説 3 －『抒情詩』の詩人たち－	柳田国男と国木田独歩　柳田の散文の背景、独歩の内部の詩歌などを考え、詩歌と韻文の関連を論ずる。	同上	同上
13	詩歌と小説 4 森鷗外	森鷗外について－「啓蒙家」の姿を見せながら、他の追随を許さぬバランス感覚を持っている鷗外が、文学史で果した役割を詩歌を通じて考える。	同上	同上
14	詩歌と小説 5 夏目漱石	夏目漱石について－第一級の俳人、漢詩人であった面を強調することで漱石の本質を再検討する。	同上	同上
15	結び － 芥川龍之介からの一つの見通し	芥川龍之介を転回点に、明治大正期以後の詩歌について、本書の立場から展望する。	同上	同上

＝ 歴史学の現在（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井　憲彦（学習院大学教授）〕

全体のねらい

歴史学は、２０世紀末の数十年の間に、たいへん大きな変化を経験した。歴史についてどのような角度から、何を問うのか。その問いを解くために、どのような史資料を用い、いかなる方法によって調べ考え、どう叙述するのか。これらに関する研究の展開を、毎回トピックを立てて確認し、歴史を問うことの意味を考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会史という問題提起	現在からの問いがあって、歴史ははじめてその姿を現してくれる。２０世紀後半における社会史という問いは、歴史の捉え方や歴史への問いの変貌を、大いに促すものであった。社会史の提唱を通じてどのような新しい可能性が開けたのか、考えてみる。	福井　憲彦（学習院大学教授）	福井　憲彦（学習院大学教授）
2	証拠としての史料・資料	何らかの手掛りがなければ、歴史について調べ、考えることはできない。今まで重要視されてきた文書史料は今後も基本だが、絵画や地図、道具などの非文字資料もまた大切である。歴史への問いの性質と史資料との関係など、基本的な理解の要点をおさえてみよう。	同　上	同　上
3	歴史の舞台としての環境	人類の歴史は空中楼閣で展開してきたわけではない。きわめて具体的な環境諸条件とのやりとりのなかに歴史はあり、また歴史の展開が環境を改変し、ときには破壊も引きおこしてきた。現在の深刻な環境問題を念頭において、歴史と環境とのかかわりを考えてみる。	同　上	同　上
4	時間の認識と時代区分	いつも時計があったわけではない過去において、社会は時間をどう捉え、秩序をたてていたのだろうか。それは、その社会の歴史の見方と、どう関係していたのだろうか。歴史の時代区分は、現在においてどのように考えることができるだろうか。	同　上	同　上
5	地域からの視線	今まで歴史の考察は、多くが一国を基本的な前提の枠組としてなされてきた。しかし国の内部には多様な独自性をもった地域があったのであり、国家形成はそれらを統合しようとしたものであった。地域からの視線は、歴史のどのような姿を浮び上らせるだろうか。	同　上	同　上
6	グローバルな歴史の捉え方	交通や情報手段の発達した現代はもちろん、過去においても歴史は、同時代における地域や国の相互連関ぬきには理解しがたい。複数の地域世界や文化圏、あるいは国家を相互に結びつけていた複合的関係に着目することで、歴史の捉え方はどのように豊かになるか。	同　上	同　上
7	歴史の重層する都市	歴史の変化は、ある時点で断層が起こったように生じる場合もあるが、屋根瓦が重なるように変化する場合もある。巧みな空間構築の技術が読みとれるような都市の事例から、歴史が重層している社会空間の厚みを捉え、そこでの社会生活の豊かな条件を考えてみる。	同　上	福井憲彦 ゲスト 陣内　秀信（法政大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	技術と社会	技術といえば科学技術のみを想起するのは考えが狭い。工業化以前の社会でも人々は、環境諸条件と対応して多様な道具を用い、さまざまな知恵を働かせて生活の改善を工夫していた。歴史的に伝承され磨かれた技術の質の高さ、それを支えた社会について捉えよう。	福井　憲彦	福井　憲彦 ゲスト 斉藤　洋一（信州農村開発史研究所主任研究員）
9	からだと病いと身体感覚	人間の身体に対するかかわり方、感じ方は、いつの時代でも同じだったのではない。病いのあり方も同様である。人々は、どれほどの生きる可能性をもち、病気にはどう対応していたのだろうか。病気への処方や身体感覚は、どのような変遷をたどったのだろうか。	同　上	福井　憲彦
10	「生と死」に向きあう心	生命の誕生や死を前にした人々の態度、それらの受けとめ方は、歴史のなかで大きなリズムを刻むように変化してきた。ヨーロッパ史について明らかにされたその変貌の歴史を素材にして、心性の歴史の捉え方や史資料との関係について考えてみよう。	同　上	同　上
11	歴史人口学が拓いた地平	第２次大戦直後からまずフランスで、ついでイギリスで、統計以前の時代を含む、出生、結婚、死亡の様相を中心とした地道な人口動態の研究が推進された。教区簿冊を中心史料とした数量的研究はどのような成果をあげ、新しい歴史の見方をどう開拓しただろうか。	同　上	同　上
12	比較というまなざし	特定の社会や地域だけ見ていたのでは、また特定の時代しか分からないとすれば、その社会や地域の歴史的特徴を論じるのは不可能だ。たとえば現在自明視されている事柄は、いつから成立したものだろうか。いくつかの具体例を取りあげて考えてみよう。	同　上	同　上
13	人と人とを結ぶもの	人は孤立しては生きられない。たがいに多様な関係を形成しながら歴史を織りなしてきた。家族や地域住民としてのまとまり、あるいは職業や趣味や志を同じくする関係。人と人とが結びあう形はどのように変化し、それは社会の仕組みや政治支配とどう関係したのか。	同　上	同　上
14	政治と文化の再考	政治史や文化史の理解の仕方は、最近大きく変化した。伝統的なそれらはどこに問題があったのだろうか。イメージやシンボル操作、表象の闘争、多様な差異への着目などを問う視点の刷新は、現在における政治や文化をめぐる変動と、どう関係しているのだろうか。	同　上	同　上
15	歴史と記憶または歴史と現在	歴史とは過去を記憶にとどめるための技法だろうか。記憶自体のあり方が、時代と社会に応じて多様なあり方をしている。現実に生じた歴史は変わりえないものだとしても、どの部分をどのように歴史像として描き、伝えるかは、現在の選択に基づいている。	同　上	同　上

＝ 日本の文化と思想（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大隅　和雄（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

日本文化の特色を、文字の使用が始まり、仏教が伝来した頃から、現代に至るまでの歴史の中で解明することをめざす。社会の変化に応じて、日本人の生き方が変わり、それが、思想・文化としてどのように表現され、つぎの時代に受け継がれ、現代日本の思想・文化につながっているかを考える文化史にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本文化史の見方	はじめに、文化の概念と文化史の見方を説明し、日本史の時代区分の中で、各時代の思想・文化のあり方を概観する。日本における思想・文化は、外来文化との接触と緊張関係の中で形成されてきたことに注目し、文化史の時代区分を考えてみたい。	大隅　和雄（東京女子大学教授）	大隅　和雄（東京女子大学教授）
2	神々の祭りと日本神話	近年、遺跡発掘が進展して、日本文化史の源流の解明が進んできたが、ここでは、国家の統一の動きの中でまとめられた『古事記』『日本書紀』の成立の経緯と、記紀神話の特色、神の性格と祭りについて説明し、日本文化の基層を考えることから始める。	同　上	同　上
3	仏教の伝来と受容	６世紀の半ばに、百済から仏像と経巻が伝えられ、仏教を通じて外来文化を受容する道がつけられた。仏教受容の進展を、飛鳥時代の文化の動向、律令国家の仏教統制、唐文化圏の仏教、南都仏教の教学、最澄と空海の活動の諸項目に分けて説明する。	同　上	同　上
4	律令制度と官人の学問	日本の国家統一は、隋・唐の文物を摂取することによって進められた。律令の編纂とその運用に必要な知識の性格と範囲、官人の学問と漢詩文について考え、この時代に摂取された唐代の文化が、日本文化の骨格として大きな役割を果たしたことを説明する。	同　上	同　上
5	かな文字の成立と国文学	官人や僧侶は、漢字漢文を学ぶかたわら、日本語の表記のためにさまざまな試行を続け、平安時代の半ばに、かな文字を成立させた。漢文の外に、和文が成立したことの意味を考え、豊かな国文学の世界が拓かれたことを説明し、国風文化とその伝統を考える。	同　上	同　上
6	仏教の革新と庶民への浸透	仏教は、貴族文化を支える役割を担っていたが、日本の社会に浸透して行く中で、土着の信仰と習合し、日本化の道を辿った。鎌倉時代の仏教革新運動の中で生まれた、新しい仏教の動向を説明し、日本の思想と文化の中で仏教が果たしてきた役割を考える。	同　上	同　上
7	公家と武家の文化	中世の公家は、前代の貴族文化を憧憬の対象とし、その継受者であることを主張し、武家は、公家文化の受容に努める中で、武家の立場を自覚するようになった。公家社会の年中行事と、その武家社会への伝播を手がかりに、中世の文化の特色を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	芸能の成熟	中世に入って、庶民生活が向上し、貴族社会と大寺院の文化が、庶民の間にも伝播して行く中で、芸能の世界が拡大し、芸の洗練が進み、日本的な芸能が完成の域に達した。平曲などの語り物、舞と歌謡、能・狂言、絵解きと説話と絵巻、などについて説明する。	大隅和雄	大隅和雄
9	儒教とその日本化	中国の古典に関する知識は、貴族文化の支柱であったが、中世に入って、宋・元・明の学問が伝えられ、それまでの日本に存在していたい中国文化の再編が始まった。徳川幕府が重視した朱子学、それを批判した古学について説明し、日本の儒学について考える。	同上	同上
10	国学と洋学	儒学が武家の学問の基本とされる中で、日本の古典に関する学問が起こり、日本精神を重視して儒教や仏教を批判する国学が生まれた。本居宣長を中心に、国学の成立と展開を説明し、同じ頃に始まった、西洋の知識学問の受容と、洋学の成立、性格について考える。	同上	同上
11	町人文化とその思想	近世の日本では各地に都市が成立し、町人や各地の知識人を中心に、新しい都市文化が生み出され、新しい経済関係を背景にした都市生活の諸相が、小説や俳諧、浄瑠璃や歌舞伎、風俗画などの中に描き出された。元禄、化政時代を中心に説明し、その特質を考える。	同上	同上
12	知識人と西欧の思想	幕末、明治の日本人は、西欧の力を前にした緊張の中で、近代化の道を急ぐことになったが、その中で指導的な役割を果たした知識人が、多様な西欧の思想・文化の中で選択したものが何であったかを説明し、明治の日本の思想と文化の特質を考える。	同上	同上
13	日本中心の思想	政府主導の近代化の中で、旧幕臣などの知識人は、表面的な近代化を批判し、前代の日本中心思想を受け継ぐ人は、欧化に反対して、日本の伝統を守ることを主張した。日本中心主義の諸系譜について説明し、その国家観、歴史観などについて考える。	同上	同上
14	近代日本の諸宗教	近代の日本では、神信仰が国家を支える宗教とされ、神社制度が整えられた。いわゆる国家神道の成立過程、戦前の諸宗教の統制、戦後の政教分離、新宗教の活動について説明し、近代の日本人が、宗教に求めてきたものについて考える。	同上	同上
15	国際社会における日本文化	交通通信が急速な発展を遂げる中で、社会生活の世界的な共時性が生まれ、文化の国際化が進んでいる。そういう中で、私たちが、日本の伝統的な文化を理解し、日本文化の特質を外国人に紹介する、というのはどういうことなのか、問題を指摘し整理を試みる。	同上	同上

＝ 法学入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：田中　成明（京都大学教授）〕

全体のねらい

法の基本的なしくみと主な機能、法の実現すべき目的・価値、法の運用方式とその担い手などについて、現代日本の法状況に焦点を合わせて説明し、法というものをどのように考え、どのように用いるべきかということを中心に、市民的教養としての法の理解を深めることをめざしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法へのアプローチ	講義全体の序論として、一般の人々の法イメージ・法体験や法への期待と反発がどのようなものであるかを紹介・検討しながら、法というものの基本的な考え方、法学を学ぶにあたって心がけるべきことなどを説明する。	田中成明（京都大学教授）	田中成明（京都大学教授）
2	どのような法があるか	法学を学ぶにあたっての基礎的知識として、法の主な存在形態（法源）を概観した上で、公法と私法、民事法と刑事法、実体法と手続法、国内法と国際法など、法の主な種別について説明する。	同上	同上
3	法の機能	法の規範的機能の特質と法規範の主な種別を概観した上で、法システムの主な社会的機能を取り上げて、それぞれの機能や全体の相互関係をどのように理解すべきかについて説明する。	同上	同上
4	日本の法制度と法文化	世界の主な法系と法の継受について大陸法系と英米法系を中心に概観した上で、日本の法制度が中国法・大陸法・英米法の影響を順次受けて発展してきた過程を辿り、日本の法文化の特殊性論議を紹介・検討する。	同上	同上
5	法と強制	法における強制の意義と特質について一般的に説明した上で、刑罰による犯罪の事前抑止と事後処理という典型的な事例と、最近の法的サンクションの多様化の代表的事例とを対比しながら、現代法における強制の役割をどのように考えるべきかを検討する。	同上	同上
6	法と道徳	自然法論と法実証主義、法の外面性と道徳の内面性など、法と道徳の区別と関連に関する主な考え方を紹介した上で、法による道徳の強制、法的パターナリズムをめぐる最近の問題状況を、具体的事例を取り上げて検討する。	同上	同上
7	法と正義	主な正義観念と法との関係、法的正義としての「合法性」の特質を説明した上で、最近の正義論の動向を紹介しつつ、正義実現において現代法システムが果たしうる役割の可能性と限界を考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	裁判制度	典型的な法制度とされる裁判の歴史を概観し近代の司法的裁判の特質を説明した上で、現代日本の裁判制度の組織と活動について、その基本的構造と現況を紹介・検討する。	田中成明	田中成明
9	裁判の機能	裁判の政策形成機能を期待した現代型訴訟の続発、和解・調停などの裁判外紛争解決手続の活況という、裁判利用に関する二つの現代的現象を取り上げて、代表的な事例を紹介しながら、その意義や問題点を検討する。	同上	同上
10	法的思考	法的思考あるいはリーガル・マインドといわれているものの特徴を説明し、それに対する学問的・社会的などの批判・評価をどのように考えるべきかを検討する。	同上	同上
11	法の解釈と適用（I）	法の解釈と適用という、法を運用しその目的を実現する中心的活動について、その基本的な論理構造を説明した上で、具体的事例を取り上げながら、事実認定と法の解釈をめぐる主な問題を検討する。	同上	同上
12	法の解釈と適用（II）	同上	同上	同上
13	法学という学問	古代ローマ以来の長い歴史をもつ法律学の発展を概観した後、法政策学、法哲学、法社会学など、法に関してアプローチを異にする諸々の学問が生まれた背景とそれらの現況を説明する。	同上	同上
14	法律家	わが国における裁判官・検察官・弁護士などの法律家の組織や活動を概観した上で、法曹一元制，国民の司法参加，法曹養成制度などに関する改革論議を検討する。	同上	同上
15	法の考え方と用い方	講義全体のまとめとして、法というものの特質をどのように理解し、日本社会における法の役割をどのように考え、市民一人一人がどのような姿勢で法にかかわりあうべきかについて説明する。	同上	同上

＝ 立憲主義と日本国憲法（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋　和之（東京大学教授）〕

全体のねらい

憲法の目的は、個々人が最善と考える生の選択を可能とするような社会の仕組みを実現することにある。その仕組みは、人権の保障・権力分立・国民主権・法の支配といった立憲主義の基本原理を基礎に組み立てられているが、それぞれの原理の意味と、それらが日本国憲法の中にどのように具体化されているかを学ぶのが課題。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家と憲法	立憲主義は、国家権力が憲法に従って行使されることを要請するが、そこで前提となっている国家とはいかなる性格の社会か、国家権力・主権とは何か、憲法とは何か等々の基礎的なコンセプトを説明する。	高橋　和之（東京大学教授）	高橋　和之（東京大学教授）
2	立憲主義の基本原理	近代立憲主義を構成する人権保障・権力分立・国民主権・法の支配の諸原理につき、その意味と相互の関係を説明し、それが現代においてどのように変化しているのか、変化の原因は何かを見る。その上で、日本における立憲主義の歴史を素描する。	同　上	同　上
3	人権の観念	人権という考えを基礎づけている人間観・社会観・国家観はいかなるものか、国家と人権はどのような関係に立つのか、人権にはどのような種類が分類されるのか等々、「人権とは何か」をめぐる諸問題につき説明する。	同　上	同　上
4	人権の適用範囲と限界	人権は、人が人としてもつ権利であるが、いついかなる場合でもその主張が認められるわけではなく、一定の状況・コンテクストにおいては認められなかったり、制限されたりすることが生じる。どのような場合に、いかなる理由で制限が生じるのかを説明する。	同　上	同　上
5	包括的人権と平等権	包括的人権：憲法が個別に列挙していない人権も、時代の要請に従って新しく認められることがあるが、その根拠となるのが包括的人権と呼ばれる。その具体例として、プライバシーの権利・自己決定権等を見る。 平等権：総則的性格をもつ人権としてここで説明する。	同　上	同　上
6	精神的自由権(1)	個人の内面における精神作用（考える・信じるなど）や、その外部への表現を保障する人権を精神的自由権と呼ぶが、そのうち、ここでは思想良心の自由・信教の自由・学問の自由を説明する。	同　上	同　上
7	精神的自由権(2)	表現の自由につき、内容規制・内容中立規制検閲・事前抑制、名誉毀損・プライバシー侵害、わいせつ・ポルノ規制、差別的表現、報道・取材の自由、知る権利・情報公開制などを説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経済的自由権・人身の自由	経済的自由権：財産権、職業選択の自由・営業の自由等につき説明する。 人身の自由：主としては刑事手続において国家権力が逮捕・捜索などの強制力を行使する場合に守られるべきルールを指す。	高橋　和之	高橋　和之
9	参政権・社会権・国務請求権	参政権：選挙権・被選挙権の性質、定数不均衡、選挙運動の規制などにつき説明する。 社会権：生存権、教育を受ける権利、労働基本権。 国務請求権：請願権、裁判を受ける権利、国家賠償・国家補償請求権	同　上	同　上
10	国政のメカニズム（1）議院内閣制	議院内閣制の特徴を大統領制と比較しながら理解し、その上で現実の議院内閣制がどのように運用されるのかを、選挙制度や政党制のあり方と関連させて説明する。	同　上	同　上
11	国政のメカニズム（2）国会と内閣の組織・権限・活動	議院内閣制の枠組みの中で、国会と内閣がどのように組織され、どのような権限を分配され、どのように活動を行っているのかを説明する。	同　上	同　上
12	地方政治のメカニズム	国と地方公共団体の関係、相互の権限配分のあり方、地方政治の基本原則（団体自治・住民自治）、地方議会と長の組織・権限・活動等につき説明する。	同　上	同　上
13	法の支配と裁判所	法の支配を担保する役割を担う裁判所の組織・権限（司法権）、司法権の独立、裁判の公開などの問題を説明する。	同　上	同　上
14	憲法の保障と違憲審査制	憲法は、権力の担い手が憲法を遵守することを保障するメカニズムを組み込んでいるが、その代表的な制度が違憲審査制である。他方で、憲法の内容は時代の要請に応じて改正する必要も生じる。持続と変化の調和が大切であり、それを実現するための方法を説明する。	同　上	同　上
15	日本国憲法の普遍性と特殊性	立憲主義は西欧に発する考えであり、日本の伝統と対立する面をもつ。ここでは、一方で天皇制に象徴される日本的伝統とのあつれき・調和の問題、他方で、立憲主義そのものを越えようとする平和主義の問題を考察・展望して、本講義の締めくくりとする。	同　上	同　上

＝ 政治学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：阿部　齊　（　放送大学教授　）〕
〔主任講師：久保　文明（慶應義塾大学教授）〕
〔主任講師：山岡　龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を提供したい。同時に、政治学の入門講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。政治の世界に起こりつつある最近の変化にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治と権力	租税、教育、環境保全などの具体例を通じて、政治とは何かを明らかにし、政治の機能、権力の特性について論ずる。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	代表制・議会・国会	民主主義国家と議会、代表制とその発達、地域代表と国民代表、二院制、議会の役割、議会と行政府、立法過程、議会の問題と課題などの諸テーマについて論ずる。	久保　文明（慶應義塾大学教授）	久保　文明（慶應義塾大学教授）
3	行政府・内閣・官僚制	行政府の活動、内閣総理大臣と内閣、官僚制の概念、公務員制度、立法国家から行政国家へ、官僚制の統制、大きな政府と小さな政府などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
4	選挙と選挙制度	政治参加と選挙、政治の大衆化とその意義、投票することの意味、選挙制度の諸類型、わが国の選挙制度改革などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
5	政党と政党制	政党の定義、名望家政党と大衆政党、政党の機能、政党制の諸類型、日本の政党政治などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
6	利益団体とその活動	現代の政治過程と利益団体、利益団体の活動様式、利益集団の政治的資源、公共利益団体、利益集団と政治体制などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
7	政治指導	政治的リーダーシップ、政治的リーダーの資質、政治的リーダーシップの諸類型、日本の政治的リーダーシップ、平等主義社会とリーダーシップなどの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地方自治と市民参加	地方分権と地方自治、団体自治と住民自治、固有事務と委任事務、首長と議会、住民運動と市民参加などの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊
9	社会福祉	夜警国家から福祉国家への転換を明らかにしたのち、社会問題と社会政策、社会保障制度の発展、高齢化社会の福祉政策、福祉国家と民主政治などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上
10	民主主義	民主主義という政治原理が、西欧政治思想史のなかに登場してきた諸モデル（参加民主制、共和制等）を検討し、この原理が歴史的に蓄積してきたさまざまな思想を紹介する。その上で、いくつかの民主主義批判を検討し、民主主義政治の未来について考える。	山岡龍一（放送大学助教授）	山岡龍一（放送大学助教授）
11	自由主義	自由主義思想の諸類型を検討し、自律概念の解釈を中心にして、その整理を試みる。さらにJ．ロールズを中心とする現代政治理論の展開を、自由主義の原理をめぐる論争として再構成し、現代自由民主主義のあり方について考える。	同上	同上
12	現代のイデオロギー	イデオロギーとは何かということを、歴史的・概念的に検討し、その上で、現代におけるさまざまなイデオロギーを概説する。社会主義、保守主義、フェミニズム、エコロジズム、原理主義等が取り上げられる。	同上	同上
13	国家と市場	近代国民国家の生成と構造について検討し、この国家概念がいかに近代の「政治」概念を構成するうえで重要であったかを明らかにする。その上で、近年の世界経済の動向がいかにしてこの国家の役割を相対化しているかを考察する。	同上	同上
14	国際政治	国際秩序をどう捉えるかを明らかにしたのち、現実主義、相互依存論、世界システム論、国際秩序の歴史などの諸テーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊
15	日本の政治	明治国家の遺産、戦後の民主主義、保守政治の統治体制、政治改革、一党優位の政治から連合の政治へ、などの諸テーマについて論ずる。	同上	同上

＝ 経済学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：新飯田　宏（横浜国立大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代の経済を分析するには、通常、家計・企業・政府などの各経済主体の行動を説明するミクロ経済学と、経済全体の動きを説明するマクロ経済学の理論が必要であるが、この経済学入門の講義では、これら２つの経済分析の基礎となっている経済学的な考え方を、現実の問題を例にしながら説明し、経済学的思考方法に慣れて貰うことを狙っている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学とは何か	経済学がどういう学問であるかを３つの主要経済問題（What, How, For Whom）を例に説明する。次に市場メカニズムと政府部門の混在する混合経済を中心に、簡単な競争モデルの考え方を示し、機会費用などの費用概念，経済主体のインセンティブ，効率性について説明する。	新飯田　宏（横浜国立大学名誉教授）	新飯田　宏（横浜国立大学名誉教授）
2	相互依存の利益（交換と生産）	個人間にしろ、国家間にしろ、交換取引によって、相互依存の関係からお互いに利益が得られるのはなぜかを明らかにする。次いで比較優位の考え方から、貿易における相互依存関係が消費可能性を改善することを説明しつつ、比較優位の決定因を検討する。	同　上	同　上
3	価格の決定－需要と供給	市場を通ずる競争的資源配分は、市場の需要曲線と供給曲線によって決定され、需給の不一致は市場価格によって調整される。個人・企業の需要・供給曲線と市場の需要・供給曲線の関係，その形状と性質，両曲線がシフトする要因について説明する。	同　上	同　上
4	需要・供給分析の応用	需要・供給曲線の弾力性の概念を説明し、政府の間接税（又は関税）の課税効果を検討する。さらに、最低賃金制，上限価格規制の資源配分機能を分析する。	同　上	同　上
5	競争市場の効率性	消費者余剰，生産者余剰の考え方を中心に社会厚生（総余剰）を最大にする資源配分の効率性について説明し、関税賦課の場合と自由競争の場合を比較し、政府の市場介入の効果を分析する。	同　上	同　上
6	生産要素市場と所得分配	生産要素である労働，土地，資本の各サービス価格（賃金，地代，レンタル）の決定を説明し、所得分配の実証的・規範的な側面について説明する。	同　上	同　上
7	不完全競争の諸形態と産業組織	供給独占、複占、寡占、また独占的競争の概念を説明し、完全競争のモデルと本質的に異なる点が、どこにあるか、それぞれの資源配分における特徴を明らかにする。これらの分析に、産業組織論的接近方法の有効性について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	政府の役割	市場メカニズムが効率的に機能しなくなる理由の１つは外部性の存在である。外部性とは何か。外部経済（不経済）によって、資源の最適配分が実現しない市場の失敗は、政府の介入によってどのように解釈されるのか。公共財の存在はなぜ資源配分を最適にしないのか。また、政府は失敗することはないのか、について説明する。	新飯田　宏	新飯田　宏
9	経済活動水準の測定	各産業部門間の財・サービスの流れを産業連関表によって説明する。次いで生産，分配、支出の３面等価原理を産業連関表で示す。物価水準の上昇と実質国民所得の関係を説明しつつ、物価指数（デフレーター）の役割を検討し、経済成長の意味を明らかにする。	同　上	同　上
10	ＧＤＰの決定と貯蓄投資の重要性	ＧＤＰ（又はＧＮＰ）がどのように決定されるのかを、45°線グラフで示し、貯蓄・投資の均衡の意味を説明する。次いで、乗数理論の意味を説明し、財政政策の役割を検討する。	同　上	同　上
11	失業（雇用）と賃金率	非自発的失業とは何かを労働市場の特質と関連づけて説明する。賃金の下方硬直性と非自発的失業の関係を論じ、名目賃金の下落と物価水準の下落が同時に発生した場合などを考える。また、失業の経済的損失をオークン法則を利用して説明する。	同　上	同　上
12	経済成長と技術進歩	潜在成長率と現実の成長率の関係を説明し、経済成長が生産能力の増大にあること、そして、生産性の上昇とくに技術進歩の重要性を実証的に示す。新技術が投資による新しい資本増加に具体化されることから、投資を可能にする貯蓄の役割を強調する。	同　上	同　上
13	貨幣の供給と需要	「貨幣とは何か」という古典的な質問から入り、貨幣の機能を明らかにしつつ、中央銀行を頂点とする銀行システムを説明し、通貨供給の増加・縮少のメカニズムを論じる。次いで、金融政策とインフレ（デフレ）の関係を説明する。	同　上	同　上
14	不況の経済分析と経済政策	総需要・総供給の考え方から、不況の経済分析を試みる。総需要の減少、総供給の減少（オイル・ショックなど）の場合と、物価下落と景気後退とが併存する場合とでは、何が基本的に異なるかについて簡単に説明し、財政・金融政策の効果について論じる。	同　上	同　上
15	オープン・マクロ経済学	外国貿易と国民所得の関係を説明し、為替レート（自国通貨と外国通貨の相対価格）の決定を、購買力平価説の考え方から説明する。購買力平価と現実為替レートの乖離の意味を明らかにし、購買力平価説の限界を示す。そこでは、内外価格差の考え方も説明される。	同　上	同　上

＝ 社会学入門（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕
〔主任講師：秋元　律郎（大妻女子大学教授）〕
〔主任講師：岩永　雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会学とはどのような学問なのか。何を対象とし、どのような方法を用いる学問分野なのか。社会学の諸分野における専門的な学習へと進むに先立って、学問としての社会学に関するおおよそのイメージを形作り、社会学の基本的な概念や基礎となる考え方について習得しておくことは必要不可欠である。この講義では、社会学とは何かを知るため、第一に社会学の来歴を通じて社会学という学問領域の意味と目的を明らかにし、第二に社会学の各分野に共通する基本的概念や研究上の技法を具体的に学習した上で、第三に各分野での具体的な現実課題に関する研究例を学ぶ。それらを通じて、社会学という学問分野に関する理解を深めるだけでなく、現実の社会に生起するさまざまな社会事象を認識し、分析し、さらに的確に理解していくための具体的な方法についても学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会学とは何か	社会学は何を対象とし、どのような方法を用いる学問かを概説する。また、社会学は、成立以来どのような理論的な展開をとげ、さらに経験科学として研究領域を確立してきたかをあきらかにしていく。	秋元　律郎（大妻女子大学教授）	秋元　律郎（大妻女子大学教授） 倉沢　進（放送大学教授） 岩永　雅也（放送大学教授）
2	社会学の方法	社会学の諸研究がこれまで用いてきた研究法について説明する。具体的には、帰納と演繹といった分析の基本的視座、調査と集計分析の手法、フィールドワークの方法等々を含む。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授）
3	自我とコミュニケーション	社会は個々の人々の数限りない相互行為の結果として成り立っている。つまり人々の相互行為は社会の根源である。その社会的相互行為について、言語を介したコミュニケーション、日常性と場等の理論から考察する。	船津　衛（東洋大学教授）	船津　衛（東洋大学教授） 秋元律郎
4	集団と組織	相互行為が反復して行われ、それが他者によって期待されるようになると、そこに役割が発生し、それが固定化することで地位が形成される。ここでは役割と地位の集合体としての社会集団と組織について、基本的な学習をする。	船津　衛	船津　衛 秋元　律郎
5	文化と社会化	社会集団が成立しそれが秩序だって維持されるためには、規範が必要である。その規範と行為とその結果の集積が文化である。文化の本質と成り立ち、機能を明らかにし、併せて文化の個々人への内面化である社会化も検討する。	岩永　雅也	岩永　雅也 秋元　律郎
6	同調と逸脱	同調とは、基本的に規範に則した行動をとることである。ここでは、同調の諸類型とそれらの背景を学び、その上で非同調、つまり逸脱および無規範状況としてのアノミーについても概略学習する。	岩永　雅也	岩永　雅也

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	家族と社会	家族は人類のもっとも古い基礎的集団である。家族の成り立ちと諸類型、機能、変遷などについて学習を進め、現代社会における家族の意味を知り、併せて環境の変化により今後家族に生じると思われる変動も予測する。	野沢　慎司（明治学院大学教授）	野沢　慎司（明治学院大学教授） 倉沢　進
8	教育と市民社会	教育、特に学校教育は、近代社会における社会化の最も重要なファクターである。国家と公教育制度の成立の関わり、近代社会における学校教育の機能、社会集団としての学校の内部の諸関係、等々について考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也
9	職業と階層	産業社会は、経済的関係を基礎とする階層社会である。階層の成り立ちと分化のメカニズムを検討し、併せて階層の最も重要な要素である職業について考察する。社会的平等・不平等にも言及する。	同上	岩永　雅也 秋元　律郎
10	地域社会と生活	コミュニティについての基本的な概念を紹介し、その成立の根底にある人々の連帯と疎外の諸条件を検討する。さらに、都市、農村といった地域集団の諸相についても概略的な解説を行う。	竹中　英紀（桃山学院大学助教授）	竹中　英紀（桃山学院大学助教授） 倉沢　進
11	エスニシティと国家	国家は最大規模の社会集団であるだけでなく、そこに民族とそれに関わる諸要素を伴っている点で、他の社会集団と大きく異なっている。ここでは、移民、国際紛争、民族問題等の視点から、現代における国家について考察する。	梶田　孝道（一橋大学教授）	梶田　孝道（一橋大学教授） 倉沢　進
12	大衆社会と政治	現代の大衆化と大衆社会の意味について概説した上で、大衆社会の特性、大衆操作の必然性とそのメカニズムをあきらかにしていく。さらに大衆社会特有の政治課題について社会学的に検討する。	秋元　律郎	秋元　律郎 岩永　雅也
13	メディアと大衆	まずメディアとは何かについて検討した上で、情報化社会といわれる現代社会のメディア状況を概観し、メディア、特にマスメディアの機能とその問題点をさまざまな角度から考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	現代社会と宗教	現代社会は原子化した孤立する大衆によって構成されている。そうした状況の下での連帯感の喪失は、宗教への最も強力な誘因となる。現代の宗教状況を、特に若者の宗教指向との関係で考察する。	谷　富夫（大阪市立大学教授）	谷　富夫（大阪市立大学教授） 倉沢　進
15	現代社会の諸相 −社会学に何ができるか−	現代社会に特徴的な諸現象に対して、社会学はどのように取り組むことができるのか、また、どのように関わっていくべきなのか、前回までの学習内容を踏まえて、社会と社会学との関わりを展望する。	倉沢　進	倉沢　進

＝ 社会福祉入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：岡本　民夫（同志社大学教授）〕
〔主任講師：三ツ木　任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会福祉は人間の社会生活上に発生する諸困難を緩和解決するための政策、制度、援助活動、実践技術、運動などを指すが、本講では、その意義、概念、歴史、現状さらには当面の課題や将来展望について講述する。また、激変する現代社会と急速に進行する少子高齢社会のなかで、福祉問題と私たちの生活との関連を考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	私たちの暮らしと社会福祉	現代社会における福祉問題の普遍化現象は福祉がすべての人々の生活課題であることを理解し、それらが自分自身の問題であると同時に社会問題として客観的に把握し、科学的に解明し、緩和解決に向けてどのような施策や活動が展開されているかを明らかにする。	岡本民夫（同志社大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）	岡本民夫（同志社大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）
2	社会福祉の概念	福祉の語源、言語の由来と変化、社会福祉における基本理念と定義及びその変遷など、社会福祉を考えていく上において把握しておくべき基本的枠組みについて、具体例をあげながら解説する。	岡本　民夫	岡本　民夫
3	社会福祉の歴史１（西洋の場合）	西欧における社会福祉の前身であるカリタス、慈善や博愛事業、社会改良など様々な援助活動の具体例を通じて、その源流を探り、今日の社会福祉との差異や関連性を明らかにして、社会福祉の普遍性とともに歴史性を学ぶ。	岡本民夫 永岡　正己（梅花女子大学教授）	岡本民夫 永岡　正己（梅花女子大学教授）
4	社会福祉の歴史２（日本の場合）	明治以降の社会福祉の前身というべき色々な援助救済活動を取り上げながら、日本の社会福祉の考え方、発展過程やその背景、実践活動の特徴、さらには現在の社会福祉とのつながりなどを明らかにし、社会福祉に関する歴史的認識を深める。	岡本　民夫 永岡　正己	岡本　民夫 永岡　正己
5	社会福祉の法制度	社会福祉を支える公式の対策として憲法第２５条の生存権理念を受けて、各種の法制度が制定実施されている。その根幹をなす生活保護法、児童福祉法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、老人福祉法および母子及び寡婦福祉法など福祉六法を中心に関連法制度ついても論述する。	岡本民夫 河野　正輝（九州大学教授）	岡本民夫 河野　正輝（九州大学教授）
6	社会福祉の構造と運用	公私にわたる福祉施策の体系と具体的内容、さらには福祉財政及び運営管理のあり方について取り上げる。また、平成１２年から導入される介護保険や福祉の基礎構造改革による市場原理の導入が社会福祉に新たな局面を開くことにも言及する。	岡本　民夫	岡本　民夫
7	社会福祉の分野１	社会福祉は広範多岐にわたる範囲を対象とするため、捉える角度によって、色々な分野が構成され、さまざまな事業・サービスが展開される。本講では、児童福祉の現状・課題等について分析解明する。	岡本民夫 山縣　文治（大阪市立大学助教授）	岡本民夫 山縣　文治（大阪市立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会福祉の分野２	障害児者福祉の理念・概念、歴史、現行施策をとりあげ今後の障害福祉に関するあり方と展望について具体的実践活動や事例をあげながら論述する。	岡本　民夫 三ツ木任一	岡本　民夫 三ツ木任一
9	社会福祉の分野３	社会福祉の重要な分野として老人（高齢者）福祉を中心にとりあげるが、老人の保健医療についても論述する。	岡本民夫 奈倉　道隆（東海学園大学教授）	岡本民夫 奈倉　道隆（東海学園大学教授）
10	社会福祉の方法・技術１	社会福祉問題をかかえる個人、集団、地域などその問題解決を具体的に図っていくために、それに対応する専門的な方法・技術（技能）が不可欠である。その基本的枠組み、関係のあり方、援助の原理、過程、手法、技術等を明らかにする。	岡本　民夫	岡本　民夫
11	社会福祉の方法・技術２	多様な福祉問題の緩和解決には色々な種類の専門的方法・技術が必要でるが、それらが現場でどのように応用され展開されているかについてとりあげ、各段階でどのような点に留意すべきかを具体的に論述する。	同　上	同　上
12	社会福祉の従事者	福祉事業やサービスには、制度，施設などの整備が前提となるが、これらを利用者に意味と価値あるものに具象化するには、高度な知識と技術をもった担い手である専門家の他にボランティア、住民、当事者の参加が不可欠である。そのあり方と実態を明らかにする。	同　上	同　上
13	社会福祉の教育	今日の福祉問題は多様化、複合化の傾向が強い。この課題に対処していくためには、高度で専門的な教育訓練と研修が必要であり、その体系と内容について解説する。また、国家資格制度についてもとりあげる。さらに、すべての人々を対象とする広義の福祉教育についてとりあげる。	同　上	同　上
14	社会福祉の関連分野	社会福祉は生活上の諸困難を研究・実践対象にするが、関連諸領域としての所得保障、医療、保健、労働、住宅、教育、司法、人権擁護など近接諸領域とどのように協力、連携していくかについて論述する。	岡本民夫 京極　高宣（日本社会事業大学教授）	同　上
15	社会福祉の課題と展望	少子高齢社会の進行と家族機能の変化、地域社会の変貌、社会経済の変動、国民の価値観や意識構造の変化などによって、既存の福祉施策では社会的要請に対応できなくなり、新たなシステムの構築が求められている。その課題と展望を含めた総括を行う。	岡本　民夫 三ツ木任一	岡本　民夫 三ツ木任一

＝ 社会調査の基礎（’０１） ＝（R）

〔主任講師：岩永　雅也（放送大学教授）〕
〔主任講師：大塚　雄作（大学評価・学位授与機構教授）〕
〔主任講師：高橋　一男（東洋大学教授）〕

全体のねらい

社会調査は、社会のありさまを的確にかつ客観的に把握するための重要な手段である。この科目はまず社会科学研究における社会調査の位置づけについて理解したうえで、実際に調査を行なうための技法と調査の結果得られたデータの集計、分析、解釈の方法を学ぶことを目的としている。本科目では、量的調査だけでなく、質的調査にも重点を置き、より多面的な現実把握が可能となるように配慮している。また、調査結果の適切な表示の仕方についても学習する。なお、昨今の情報化の著しい進展に鑑み、ラジオというメディア特性にも配慮して、サンプル・データ、分析ツール等の入った副教材CD-ROMも用意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会を調査する	現実の複雑で非定型的な社会事象から、定量的あるいは定性的な変数を見出し、その変量を測定する方法が社会調査である。ここではまず社会調査の意味を明らかにしたうえで、社会科学研究との関連について検討し、さらに現行の社会調査に発展してくるまでの系譜にも言及する。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授）
2	調査の類型	現在最もよく用いられる各種の調査をさまざまな観点から分類し、それらの特性を整理する。分類の観点としては調査の目的(記述と説明)、変数のタイプ(量的と質的)、そして調査結果の用途の三者をとりあげる。	同　上	同　上
3	調査票調査の設計	量的調査の中心は調査票を用いた調査である。ここではまず量的調査にあった調査テーマとはどんなものかを検討したうえで、その調査テーマにそった調査票調査の設計の方法について学習する。	同　上	同　上
4	調査票を作る	具体的な調査テーマに即して実際に調査票を作成するプロセスを紹介し、調査票そのものについての理解を深めるとともに、さまざまな質問技法、ワーディングにあたっての種々の問題点などを学習する。	同　上	同　上
5	サンプリングと実査	量的調査におけるサンプリングの意義と目的を明らかにする。特にランダムサンプリングとその応用について学習を深める。また、調査票調査の実施方法を、実査の諸類型（面接、郵送、電話等）に沿って、その内容と手法、留意点などを詳しく紹介する。	高橋　一男（東洋大学教授）	高橋　一男（東洋大学教授）
6	集計と統計量	調査票調査の結果はさしあたり抽象的な数値や記号であって、そこから何らかの具体的な情報を得るためには集計が必要である。ここではまず広義の集計、ついで狭義の集計について各々詳しく説明する。また標本の各統計量(代表値、変動値など)とその記述法についても学習する。	大塚　雄作（大学評価・学位授与機構教授）	大塚　雄作（大学評価・学位授与機構教授）
7	2変数の関連	2変数間にどのような関連があるかを探るための方法とそこで用いられる各種の指標について学習する。具体的には、2群の量的データ間の相関係数やクロス表を基礎にした質的変数間の関連性の検討などを行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	検定の考え方	対象とする集団の一部からランダムサンプリングによって得られた数量データ(標本)に基づいて集団全体(母集団)の数量的特徴を推論する方法としての統計的検定の基本的な考え方と手続きを紹介する。	大塚　雄作	大塚　雄作
9	検定の実際	検定の基本的な考え方を基礎において、実際の統計データに基づいた種々の検定方法とその考え方を学習する。具体的には、平均値の差異を検討するｔ検定や質的変数同士の関連性を検討するχ^2検定などを学ぶ。	同　上	同　上
10	パソコンによるデータ解析	現在、実際の量的調査では、集計・分析・解析にコンピュータが用いられる場合が非常に多い。そこで、集計結果をコンピュータに入力し、集計・分析ソフトを用いて統計量を求めたり、各種の分析を行う方法を学習する。	山田　文康（静岡大学教授）	山田　文康（静岡大学教授）
11	多変量データ解析	多くの変数間の関連性を概括的に捉えるために、多変量解析と呼ばれる一連のデータ解析法が開発されている。その例として、因子分析と重回帰分析の基本的な考え方とそれらの適用例を紹介し、多変量解析の一端に触れてみる。	同　上	同　上
12	自由面接	自由面接(インタビュー)は、質的調査の最も基本的な手法である。まずインタビューの用いられる具体的な状況や条件を整理し、さらに実際のインタビューの方法、留意点、結果のまとめ方などについて、実例を交えながら学習する。	高橋　一男	高橋　一男
13	参与観察	調査の対象となる集団の活動に調査者も実際に参加し、その集団成員と同じ視点から集団と活動について調査するのが参与観察である。実際の生産活動や生活に参加し、調査対象者と同じ視点で調査する方法を紹介しながら、参与観察法のエッセンスを講義する。	同　上	同　上
14	メディアの利用	現代はメディア社会であり、調査にもさまざまな形でメディアが関わる。調査の題材として、調査手段として、結果のプレゼンテーション手法として、メディアがますます重要になっている現状を紹介し、その意義を検討する。	同　上	同　上
15	調査結果のまとめと表現	さまざまな調査結果をどのように記述し、表現したらよいか、表やグラフの有効な用い方とはどのようなものか、調査結果を説得力のある論稿にまとめるにはどのような点に留意すべきか、といった問題について検討する。	岩永　雅也	岩永　雅也

＝ 日米欧の企業経営（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉森　賢（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

企業統治はアメリカ、ドイツで発達し、日本においては続発する大企業の違法行動、重大な経営失策を背景として９０年代初頭から急速に注目を集め始めた問題領域である。この科目は日米欧５カ国の企業経営を企業統治と経営者の視点から比較し、日本企業の企業統治および経営者行動のあるべき姿を求めることを試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業統治とは	企業統治とはなにか、企業統治が注目される背景、それが企業経営に与える影響を考察し、それがなぜ企業経営の基本的問題であるかを理解する。また日米欧5カ国の比較をどのような方法で行うか、それが日本企業にとってどのような意義をもつのかを示す。科目全体の構成と内容について説明する。	吉森　賢（横浜国立大学教授）	吉森　賢（横浜国立大学教授）
2	企業はだれのものか－日本	企業はだれの利益のために経営さるべきか、に対する答を企業概念と定義し、日米欧においてそれがどのように異るかを歴史的に比較する。米英の株主利益中心の一元的企業概念、日本の全利害関係者指向の多元的企業概念、両者の中間にある独仏の二元的企業概念を対比し、日独仏の実態を比較する。最初に日本をとりあげる。	同　上	同　上
3	企業はだれのものか－アメリカ、イギリス	前回に続きアメリカとイギリスの企業概念の特質を考察する。両国において伝統的な企業概念がどのような批判を受けてきたかを概観する。	同　上	同　上
4	企業はだれのものか－ドイツ、フランス	日本と類似した企業概念を有するドイツ、フランスにおいて、それがどのような制度として動いているかを考察する。	同　上	同　上
5	企業はだれのものか－結論	5カ国比較の結論として各国の企業概念の特質、利点、限界の比較を行う。特にアメリカと日本の比較に焦点をあてる。	同　上	同　上
6	企業の所有・支配構造	日米欧における大企業を所有および支配する主体（同族、法人、機関投資家、個人株主、国家など）を比較する。バーリとミーンズによる所有と経営の分離および経営者支配が各国でどのように実現されているのかを考察する。日本において顕著な経営者支配の歴史的背景とその影響を理解する。	同　上	同　上
7	株主総会	株主総会は株主が直接に経営者から業績、利益処分、経営方針、役員構成などに関して報告、提案を受け、これに対して質問や批判を行う監視機関である。その監視機能がどの程度有効に発揮されているのかについて日米欧比較を行う。日本の株主総会の形骸化がの原因を考察し、米欧から学ぶものは何かを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	取締役会－日本	経営者に対するもっとも重要な監視機関とされる取締役会の構造と機能を日米欧について比較し、それぞれの問題点と改善への取り組みを考察する。その第一回は日米欧の取締役会を単層型構造と二層型構造に分類し、続いて日本の取締役会の実態と執行役員導入を中心とする最近の改善対策を考察する。	吉森　賢	吉森　賢
9	取締役会－アメリカ	アメリカの取締役会の構造と機能を日本のそれと比較しつつその特質を理解する。取締役会会長とCEOの兼務、社外取締役の独立性、経営者の他社取締役の兼務、経営者の高額報酬などアメリカの取締役会の問題点を概観し、これらの解決への取り組みを考察する。	同　上	同　上
10	取締役会－ドイツ	ドイツの取締役会はその二層型取締役会により監視と業務執行の厳格な分離を規定する法律と監査役会における労資による共同決定制度により日米英には見られない大きな特質を有する。その制度の目的と実態を把握し、制度が目指した目的が実現されているかを検証する。問題点を考察し、改善の方向を概観する。	同　上	同　上
11	取締役会－イギリス	イギリスの取締役会の構造と機能の特質を理解する。取締役会機能の向上のために提案されたキャドベリ報告、グリーンベリ報告、ハンペル報告の内容を検討市、これら勧告の実施状況を考察する。	同　上	同　上
12	取締役会－フランス	フランスについては単層型取締役会と二層型取締役会の併存が法的に可能であるが、それぞれの実態と問題点を考察する。取締役会機能の改善のために作成されたヴィエノ報告およびマリニ報告の内容を考察する。	同　上	同　上
13	主取引銀行・企業間関係	日本とドイツにおける主取引銀行の役割を企業統治の視点から理解し、その利点と限界を考察する。また日独仏における長期的取引関係、株式持ち合い、役員相互派遣などに基づく企業間関係の経済的合理性を考察する。同様の主取引銀行と企業間関係はなぜアメリカでは少ないかを検討し、これが経営成果に与える影響を考える。	同　上	同　上
14	証券市場と企業支配市場	アメリカとイギリスにおいては株式市場を通じての企業買収とそれに伴う経営者更迭が経営者の無能、怠慢、違法行為に対する監視および制裁機能を発揮するとされる。この経営者監視方式の実態とその功罪を考察し、企業の競争力や長期的繁栄にいかなる影響を及ぼすかを考える。	同　上	同　上
15	経営者と経営者行動、まとめ	日米欧における経営者はどのような人物であるかを、学歴、出身階層、年令などの視点から概観する。最後にこの講義のまとめを行う。	同　上	同　上

＝ 情報基礎管理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋　三雄（麗澤大学教授）〕

全体のねらい

電子メールの急速な普及にともなって情報技術は企業管理者層にとっても身近なツールになった。情報技術は意思決定活動を支援する可能性を秘めている。かつてのＭＩＳ（経営情報システム）が果たし得なかった実戦的な情報技術活用がいま可能になろうとしている。この講義ではトップからミドル、ロアーそして一般社員にいたるまで、各層における意思決定活動をふまえながら、現在利用可能な情報技術について、パソコンソフトや周辺機器を具体的に話題にしながら講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	オフィスツールに見る意思決定支援	オフィスツールたとえばWORD（ワープロソフト）、Exel（表計算ソフト）などには文書作成や単なる表計算機能だけでなく、意思決定を支援する興味深い機能もみられる。あらためてオフィスツールを検討し、その中で意思決定支援を考える。	高橋三雄（麗澤大学教授）	高橋三雄（麗澤大学教授）
2	意思決定活動と情報技術	そもそも意思決定とは何だろうか。問題発見、代替案探索、代替案の評価／選択、実行案の実施、意思決定の再検討（レビュー）からなる各段階を具体的に検討するとともに、それぞれの段階でどのような情報技術支援が考えられるかについて、概観する。	同上	同上
3	データの収集と分析	インターネットは情報収集の重要なツールである。また、最近は会社四季報など各種データベースがCD－ROMの形で利用可能となった。さらに、業務処理目的で構築された社内のデータベースも、もっとも重要な内部データの源である。意思決定支援の出発点ともいえるデータ収集／分析を支援する情報技術について検討する。	同上	同上
4	データの収集と分析（その２）	同上	同上	同上
5	「データ」から「情報」を読み取るために	数値データから特徴（情報）を読みとるためには、検索／抽出機能が活躍する。また、データベースの階層構造にもとづいて任意のデータ範囲やレベルにわたってデータが参照できることが重要である。Excelの「アウトライン」や「ピボットテーブル」機能がその出発点である。さらにデータウエアハウスの基本機能の一つ、「OLAP（OnLine Analytical Processing）」もまた、本格的なデータの分析を支援する。さらに、膨大なデータを統計分析にもとづいて分析し、特徴を読み取る情報技術が「データマイニング」である。これら、パソコンから本格的なデータウエアハウスまで、「データ」を読み取るための情報技術をサーベイする。	同上	同上
6	「データ」から「情報」を読み取るために（その2）	同上	同上	同上
7	「情報」のコミュニケーションのために	企業の意思決定は個人的に行われるわけではない。関係者がいわばグループとして意思決定活動にかかわる。そしてそのさいに重要な機能がコミュニケーションである。情報をいかに伝えるか、そのためにたとえばプレゼンテーションソフト（PowerPointなど）が役立つし、プレゼンテーションを支援するハードとしてプロジェクタも急速に普及をはじめた。理解しやすい魅力的な情報はまた、文字や表だけでなく、イラスト、写真そしてやがては音声による解説やビデオ動画などが含まれた情報も見られるようになるだろう。PowerPointから先にどのようなプレゼンテーションが見られるか、その基本技術としてマルチメディア、オーサリングそしてCD－RやDVDなど情報の配布メディアも注目される。コミュニケーションや双方向という意味で電子メールやグループウエアが重要な役割を果たす。また、情報発信の場としてインターネット、イントラネットがある。ここではコミュニケーションに関わるさまざまな情報技術を具体的な実践を含めてサーベイしたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	将来を予測するためのツール	意思決定は過ぎ去った過去や現在ではなく、これから起こること、つまり将来に関わる。そして将来には不確実性が含まれる。将来をできるだけ見通すためにはどうしたらよいか、予測やシナリオライティングなどがその手段となる。そして統計分析ツールやシミュレーション、シナリオ分析などが使われる。ここでは需要予測やシミュレーション分析を話題にする。	高橋三雄	高橋三雄
9	将来を予測するためのツール(その2)	同上	同上	同上
10	代替案の探索と情報技術支援	解決すべき問題が明らかになれば、解決のための代替案を探索することになる。情報技術が直接、代替案を示してくれることは望むべくもない。人間（意思決定者）の創造的な思考が基本であることはいうまでもない。しかし、アイデアをまとめるために、また、複数の関係者のアイデアを融合するために情報技術が支援する可能性もある。いわゆる発想法やその支援である。KJ法などを例にしながら検討してみたい。	同上	同上
11	代替案の評価／選択のための情報技術	代替案がリストアップされれば、今度はそれらの評価が必要となる。評価は意思決定の目標、目的との関わりで様々な基準に基づいて行われる。また、立場の異なる複数の関係者の評価を統合(調整)するといった作業も必要だろう。評価基準として利益や費用そしてそれらに関わるリスク(不確実性)などが問題になる。評価においてもシミュレーションが有効であるし、また、資源制約の中で代替案の選択を行っていくために数学的計画法などのOR（経営科学）手法も有効である。具体的なソフトを例にしながら検討してみたい。	同上	同上
12	代替案の評価／選択のための情報技術(その2)	同上	同上	同上
13	実行案の実施	特定の案が実行案として選択されれば、計画にそって実行を図っていかなければならない。そのためにプロジェクト管理手法が有効となる。プロジェクト管理（資源や時間の管理)について検討したい。	同上	同上
14	意思決定支援のための注目される情報技術	マッピングあるいはGISと呼ばれる新たな情報技術の分野があらわれた。従来、環境問題とか都市計画などの面で応用されていたが、最近になってビジネスの世界、とくにエリアマーケティングとか店舗立地の意思決定分析にGISが応用されるようになった。また、データの多くも場所の項目を含んでおり、データを分析するためにも地図上に表示(ビジュアル化）することの意義は大きい。マッピングをはじめ、意思決定支援の領域において今後に注目される情報技術をトピックス的に話題にしたい。	同上	同上
15	意思決定支援のための注目される情報技術（その2)	同上	同上	同上

＝ 比較技術の文明論（’０２）＝（R）

〔主任講師：森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

技術と産業の発展は、21世紀においていっそう大きくなる、先進工業国にアジア諸国が加わって、競合はますます激しくなるのは確かでせよ、その各国ごとの発展を比較技術の調査から分析し、さらに全体としての発展が、いかに望ましいものであるかどうか、文明論として考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代技術の諸相	20世紀に技術は大きく進展し、経済、社会を発達させたが同時にさまざまな社会問題も生じている。21世紀に技術はいかに進んでいくのか、それは文明論として考察しなければならない。	森谷　正規	森谷　正規
2	技術と文明	技術は文明を大きく発達させた。その技術文明には、都市文明と道具文明の二つがあるが、それぞれいかに発達したか、現状はどうであるのかを考えて、技術と文明の関係を明らかにする。	同　上	同　上
3	比較技術とは	各国の技術は、国民性、風土などによって大きく変わるが、それを比較技術として考察することができる。この新しい研究の意義を明らかにして研究の概要を体系的に示す。	同　上	同　上
4	技術の発展	近代技術を産業革命によって生かされたが、それが現代までいかに大きく発展してきたか、その内容はいかに変わってきたか、どのような国が担ってきたのかの概略を示す。	同　上	同　上
5	産業革命を担った英国	産業革命を生んだのは英国であるが、なぜ英国に生まれたのか、英国がいかなる役割を果たしたのかを明らかにする。さらに、英国の技術の現状を見る。	同　上	同　上
6	近代工業を発展させたドイツ	英国の後を次いで近代工業に発展させたのはドイツであるが、その技術の特質を明らかにする。また、現代において、ドイツの技術の強さと弱点を示す。	同　上	同　上
7	大量生産を創始した米国	米国は19世紀後半から大量生産の産業を興したが、その必然性を示す、20世紀に入ってからも技術と経済の大国として世界をリードしてきたが、その米国の技術の変遷を示す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ハイテク大量生産の日本	日本はアジアでただ一国だけ、先進工業国の仲間入りををしたが、そのその理由を明らかにする。さらに、第二次大戦後、ハイテクを生かした大量生産によって経済大国に発展した現状を明らかにする。	森谷　正規	森谷　正規
9	先進工業国の攻防	米国、欧州、日本の先進工業国の技術力の発揮が、それぞれに大きく変ろうとしている。各国が激しく攻防しながら、いかに世界の技術進展をリードしていくかを、文明論から見ていく。	同　上	同　上
10	アジア諸国の台頭	大量生産において、アジア諸国が急速に伸びてきている。そのアジアの技術はどこまで進展していくのか、望ましい方向に進むのかどうか、文明にかかわる問題として見よ。	同　上	同　上
11	先進国を追う韓国・台湾	韓国、台湾は、先端的なハイテク分野において大量生産で躍進しており、先進国を追いあげてる。なぜ、急速に発展したのか、その状況を明らかにし、今後を展望する。	同　上	同　上
12	工業大国に進む中　国	中国は、いくつかの難題を抱えながらも、工業大国に着実に発展していくと予想される。その実状を示し、また、大国であるから他への影響が大きく、その点について考察する。	同　上	同　上
13	競い合う東南アジア	東南アジアは、日本の工場進出によって工業を発展させてきたが、発展段階の異なる多くの国があって、これから激しく競い合う、その状況を明らかにする。	同　上	同　上
14	インドはいかに発展するか	インドはやがて人口で中国を抜く大国になる、工業発展は後れているが、そのインドの特質を明らかにして、これからいかに発展するか、他にいかなる影響を及ぼすかを考えよ。	同　上	同　上
15	将来展望と日本の役割	先進工業国とアジア諸国の技術と産業の発展をまとめて、その文明にかかわるありようについて考える。そして、その中で日本が果たすべき役割を示す。	同　上	同　上

＝ 科学と技術の歴史（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家　達将（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：赤木　昭夫（　放送大学教授）〕

全体のねらい

古典ギリシヤから現代までの科学と技術の歴史について、古代・中世・近代・現代の各時代における特徴的な歴史事例を選んで考察し、科学・技術の歴史の流れがどのようなもので、今後どのように展開されてゆくかを考える。科学の出発点は、何故と問うべき意義のある問題を見つけること、技術の出発点は解決すべき意義ある問題を見つけることである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古典ギリシヤの壺	古典ギリシヤでは不思議な陶器が作られた。初期は赤い地肌に黒い絵だったが、のちに反転され黒地に赤い絵を焼きつけたものが作られた。この陶器の作り方を調べることで、古典ギリシヤ人の柔軟な思考力、彼らの高い技術（技能）と科学の成り立ちを考察する。	道家　達将（東京工業大学名誉教授）	道家　達将（東京工業大学名誉教授）
2	アリストテレスの生命論	現代科学の源流は、体系的なものとしては、ギリシヤに発する。なかでもアリストテレスは万学の父といわれ、とくに彼の動物学は際立っていた。生命はもとより自然を生成として捉え、生成を形相と質料の概念で説明した。彼の学の継承克服がその後の科学を形成した。	赤木　昭夫（放送大学教授）	赤木　昭夫（放送大学教授）
3	アラビアの錬金術	古典ギリシヤの科学の成果は、西欧ではなく主にアラビアに継承された。アレキサンドリアでＡＤ1～3世紀頃に生まれた錬金術は中世のアラビアで大いに発展した。その実状を考察する。	道家達将	道家達将
4	実験科学の誕生	12世紀頃、アラビアの科学・技術が西欧に伝わった。それをもとに16～17世紀にかけて、実験によって事実を探究する実験科学がガリレオやハーヴェーらによって盛んになる。ハーヴェーは血液が循環し、心臓がポンプであることを実験で示した。	同上	同上
5	デカルトの身心論	17世紀のフランスの哲学者・数学者デカルトは、中世スコラ哲学から脱するため、自明なことのみから探究を展開する「方法」を唱えた。人間を身と心の二つに分け、心が身を統御すると説明した。彼の身心二元論は後代に大きな影響を与えた。	赤木昭夫	赤木昭夫
6	紡績工場にみる産業革命	18世紀半ばのイギリスで始まった産業革命は、輸入綿花から綿糸を作る紡績機と、綿糸から綿布を作る織機に代表される作業機械の自動化、動力化による大量生産を起点とする。これを契機に、機械は人間、経済、社会に大きな力を及ぼすようになる。	同上	同上
7	化学工場にみる産業革命	産業革命の進展によって、化学工業も盛んになった。その内容はどのようなものであったか。その発展によって早くも公害が発生した。それはどのようにして解決されたか。今日につながる化学工業と、その要請で生まれた理論化学の発展などについて見てゆく。	道家達将	道家達将

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	細胞：観察と理論	顕微鏡で細胞が見られるようになった17世紀から、生命単位として細胞を位置づけるようになる19世紀半ばまでの観察と理論をたどる。それを通じて、技術と哲学と科学の関係（観察と技術的制約、観察にたいする理論的負荷）についてふりかえる。	赤木昭夫	赤木昭夫
9	生命化学への道	人間をふくめ、生きているということの仕組みをめぐって、19世紀半ばに論争が起こった。生命現象は生命力があるからだとする説と、分子・原子レベルの問題だとする説が対立し、実験を使って論争が繰り広げられ、近代的細胞生化学が成立してゆく。この講義では、主に、その前段階の、有機化学、染料化学工業が発展して医薬品が生み出され、伝染病克服につながった歴史を述べる。	道家達将	道家達将
10	ダーウィンの進化論	産業革命の進展のなかで、動植物の育種も盛んになった。なぜかくも多くの動植物がいるのか、またなぜ子は親に似るのかなどの問いにたいし、育種・進化・遺伝の仕組みをダーウィンたちが考えた。彼らの思索・行動・社会背景を考察する。	同上	同上
11	電気の科学と技術	ファラデーは、推理と実験の積み重ねで電流と磁気の働きを解明し、それをもとに発電機やモーターを発明した。彼の成果をマクスウエルが方程式にまとめた。またファラデーは科学の啓蒙でも大きな足跡を残した。彼の思考のプロセスを追跡する。	赤木昭夫	赤木昭夫
12	エネルギーとエントロピー	19世紀に熱機関の仕事と効率からエネルギーとエントロピーの概念が生まれた。20世紀に入って、エネルギーの存在形態としての量子、エネルギーと質量の統一を経て、自然の層的理解が深まった。それにはボルツマン、プランク、アインシュタインが貢献した。	同上	同上
13	コントロールとコンピュテーション	状態をつくり、状態を変える、それをコントロールすることで、歯車式、ついで電子式の計算機が作られた。その母体は、カードにしたがって模様を織り出すジャガード織機だった。計算機の可能性を追求したラブレス夫人とチューリングの役割を紹介し評価する。	同上	同上
14	複雑性への挑戦	20世紀後半になって、システム、サイバネティックスといった捉え方に始まり、気象のコンピュータ・シミュレーションによるカオス現象の解明などを経て、生命や経済などの複雑な現象を捉える試みが展開された。その経過と今後の方向を展望する。	同上	同上
15	日本の科学と技術の歴史ー日本における近代科学・技術の出発	日本で、科学とりわけ近代科学がどのように育ってきたのか。生産活動の中で求められてゆっくり育ち、1774年の『解体新書』の出版を原点として急速に連鎖的に発展した。そうなった理由と、その展開過程を述べる。	道家達将	道家達将

＝ 現代社会と著作権（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：齊藤　博（専修大学教授）〕
〔主任講師：作花　文雄（内閣法制局参事官）〕
〔主任講師：吉田　大輔（文部科学省研究振興局情報課長）〕

全体のねらい

情報の蓄積や送信の技術が次々と開発されるなか、情報の利用形態も多様化してきた。その情報の多くは、言語や音楽、映像などの著作物や実演等、著作権法制の関与するものであり、現代社会における著作権法制の在り様が問われることになる。そのような視点から、本講義は、まず、「著作物」「著作者」など、基本的な概念を学びつつ、新しい課題をも考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	有体物と無体物	開講に際して講義の概要、日常の生活と著作物や実演等の関わり、著作物などの無体物と有体物の関係、無体物の特性、すなわち、無体物は媒体を変えて偏在することを実例に触れながら学ぶ。	齊藤　博（専修大学教授）	齊藤　博（専修大学教授）
2	テクノロジーと著作権	人類が情報にアクセスしてきた歴史を概観した後、印刷術をはじめ、録音、録画、放送、宇宙衛星、コンピュータ、デジタルネットなど、それぞれの時代を画するテクノロジーが著作権法制にどう関わってきたかを考える。	同上	同上
3	著作物	著作権法の保護対象である著作物の要件や、著作物の種類について説明する。また、複数人が関与して作成する共同著作物や特殊な形態の著作物である編集著作物、データベースの著作物について説明する。	作花　文雄（内閣法制局参事官）	作花　文雄（内閣法制局参事官）
4	著作者	著作権法上の権利の享有主体となる著作者とは誰であるのかについて説明する。また、職務上著作される著作物については、誰が著作者になるのか、法人が著作者になる場合の要件について説明する。	同上	同上
5	著作者人格権	精神的創作物としての著作物は、著作者の人格の発露でもあるところから、著作者は人格権を保有する。この著作者人格権につき、公表権、氏名表示権、同一性保持権を述べ、その他の人格権との関係についても概説する。	吉田　大輔（文部科学省研究振興局情報課長）	吉田　大輔（文部科学省研究振興局情報課長）
6	著作権	著作権は著作物の利用形態に応じてその内容を変えてきた。今回と次回の2回にわたり、複製権をはじめ、上演権、演奏権、上映権、公衆送信権、伝達権、口述権、展示権、頒布権、譲渡権、貸与権、翻訳権、翻案権等の、著作権の内容を学ぶ。	同上	同上
7	著作権	同上	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	権利の制限（その１）	著作者の権利が及び得るような著作物の利用をする場合でも、一定の場合には権利者の許諾を得ることなく自由に利用できる場合があり、これを権利の制限（規定）と呼んでいる。権利が制限される様々なカースについて説明する。	作花　文雄	作花　文雄
9	権利の制限（その２）	同　上	同　上	同　上
10	保護期間等	著作権等がどのように発生し、いつまで保護されるのか、無名・変名著作物や団体名義の著作物、映画の著作物についての特例、外国の著作物の保護期間の留意事項、さらに登録の制度について述べる。	吉田　大輔	吉田　大輔
11	他人の著作物の利用	他人の著作物を複製、送信するなどに際してどのような制度があるか。著作権の譲渡、著作物の利用許諾、出版権の設定などを学んだ後、著作権を集中的に管理する団体の状況、著作権の管理に関する新たな立法に言及する。	同　上	同　上
12	著作隣接権	著作権に隣接する権利について、その性格、著作権との違いを学んだ後、実演家の権利、レコード製作者の権利、放送事業者の権利、有線放送事業者の権利を述べ、デジタル時代に対応した立法の動きにも言及する。	同　上	同　上
13	権利侵害に対する救済	著作者の権利が侵害された場合における、差止請求や損害賠償請求などの民事上の救済や刑事上の制裁について説明する。	作花　文雄	作花　文雄
14	国際的な動き	著作権に関するベルヌ条約等を概観した後、国際的な動き、とりわけサイバー時代を迎え世界知的所有権機関（WIPO）等で繰り広げられる討論、法律思潮の違いと調和への模索の過程を探る。	齊藤　博	齊藤　博
15	電子的権利処理システム等	デジタル環境下、電子商取引の延長上に行われはじめた、音楽、映像、テキストのネット配信を視野に入れつつ、著作権等の電子的処理・管理システム構築の可能性を探り、著作権法制の未来像に迫る。	同　上	同　上

＝ アーツ・マネジメント（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：川崎　賢一（駒澤大学教授）〕
〔主任講師：佐々木　雅幸（立命館大学教授）〕
〔主任講師：河島　伸子（同志社大学助教授）〕

全体のねらい

本講義では、芸術文化活動を生み出すマネジメントの仕組みを探る。映画のような商業的文化も対象とし、グローバルな視点から講義を進める。文化運営の単なる実践的ガイドではなく、経済学・社会学・政策学などによる学際的アプローチに基づく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イントロダクション：目的・定義・アプローチ	全体の俯瞰。講義の目的（アーツ・マネジメントの基本とその社会科学的背景の理解）、視点の設定（グローバルな観点の採用）、アプローチの仕方（学際的アプローチ）、基本概念の定義（アート、アーツ・マネジメントの定義）。	川崎　賢一（駒澤大学教授）	川崎　賢一（駒澤大学教授）
2	アーツ・マネジメント史	アーツの制度とアーツ・マネジメントの歴史を概括する。その際、進化論的立場の重要性と西欧中心の歴史を紹介する。同時に、日本的視点・アジア的視点の今日的意義を明らかにする。	同　上	同　上
3	日本におけるアーツ・マネジメントのはじまり	1990年頃より我が国において、アーツ・マネジメントへの関心が急速に高まった。この背景である社会・経済的要因を、1960年代のアメリカと対照しつつ探り、アーツ・マネジメントの現状と今後の課題を整理する。	河島　伸子（同志社大学助教授）	河島　伸子（同志社大学助教授）
4	文化の経済学	文化の市場構造、文化団体の収支構造の特徴を文化の「外部経済効果」をキーワードに説明する。市場的収入のみに依存する商業的文化団体と、非市場的収入をも併せ持つ非商業的文化団体には、どのような行動の違いがあるのだろうか。	佐々木雅幸（立命館大学教授）	佐々木雅幸（立命館大学教授）
5	都市文化政策とアーツ・マネジメント	都市再生の切り札としての都市文化政策の流行と定着、創造的な芸術産業を生み出すための文化的投資と文化的インキュベータの重要性に触れ、その一方で、文化事業や文化支出に対する行政評価システム導入の背景を追う。	同　上	同　上
6	文化の組織化	文化を生産・流通させていくために、近代社会はさまざまな形態の組織を発達させてきた。この講義では、これらの違った組織におけるマネジメントの特徴を理解し、特に企画的なマネジメントで重要とされるインフォーマルなネットワークの重要性について述べる。	河島　伸子	河島　伸子
7	芸術創造のマネジメント	「芸術文化の生産を担う組織」を取り巻く環境、戦略的計画、意志決定とリーダーシップのあり方を一般企業のマネジメントと比較しつつ明らかにし、経営学におけるナレッジ・マネジメントのアート分野への適用を考察する。また、文化生産組織の構成要素、組織のデザイン、スタッフ構成、グループダイナミクスなどを一般企業のマネジメントと比較しつつ明らかにする。	佐々木雅幸	佐々木雅幸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文化生産の経済と非営利マネジメント	文化を生産・流通させていくためには、他の経済活動同様に、資源を確保していくことが重要である。非営利的な文化活動においては、資源調達先とサービス提供先が合致しないことがあるが、これはマネジメントにとってどのような意味を持つのだろうか。	河島　伸子	河島　伸子
9	文化団体におけるマーケティング・マネジメント	非営利の文化団体であっても、事業収入をいかに増やしていくか、ということ、すなわちマーケティング活動は重要な課題である。マーケティングはさらに観客・社会一般との関係づくりにとっても大切な考え方である。今回はこのようなマネジメントの基本を理解する。	同　上	同　上
10	アーツ・マネジメントと鑑賞者開発	前回に続き、観客との関係作りを基礎にするマネジメントを探る。既に観客となっている人々を超え、観客となる可能性を秘めた人々を掘り起こしていく「鑑賞者開発」について明らかにする。	同　上	同　上
11	視覚芸術とマネジメント	行政・美術館・商業ギャラリーが、美術館・マネジメントに果たす役割を、比較社会的（欧米型とアジア型）に明らかにする。その際、アーティストの関係や空間的インスタレーション・コラボレーションなどの意義も考察する。	川崎　賢一	川崎　賢一
12	舞台芸術とマネジメント	オペラ・クラシック音楽・演劇などの舞台芸術の特殊性とそれに起因するマネジメントの特性、プログラミングにおけるリスクとその回避のあり方、専門家の養成システムなど財政面での社会的支援システムについて国際比較を通じて検討する。	佐々木雅幸	佐々木雅幸
13	商業的文化のマネジメント	ハリウッド映画、ポピュラー音楽産業に代表されるアメリカ文化は、世界市場に長らく君臨してきたが、近年その独占的支配力を更に強化している。この支配力を可能にしてきた産業の経営戦略、ヨーロッパにおける対抗政策、そして近年の技術革新の影響などを探る。	河島　伸子	河島　伸子
14	新しいメディア文化とアーツ・マネジメント	CGやコンピュータ技術を用いたアートについて、そのボーダーレスな実態とその対応を分析する。メディアビジネス・マイクロビジネスとしてのアート。その際、知的所有権・知識マネジメントのあり方などを検討する。	川崎　賢一 佐々木雅幸	川崎　賢一 佐々木雅幸
15	グローバルな文脈におけるアーツ・マネジメント：まとめと展望	グローバルな文脈でアーツ・マネジメントを捉える必要性を述べる。その普遍的性格の一方で、非欧米文化の抱える問題や対応を紹介する（ディアスポラ・ジェンダー・エスニシティなど）。また、日本社会の今日的問題も指摘し、今後を展望する。	川崎　賢一	川崎　賢一

＝数学の歴史＝（R）

〔主任講師：長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学は、往古の昔より、人間の不思議な知的領域であり続けてきた。抽象的な概念を論じ、ときには「目に見えないもの」や「常識では理解できないもの」さえ扱いながら、「不可謬の論理」に基づいているがゆえに絶対的な厳密性と普遍的妥当性をもち、それでいて、現実の生活にも深い関わりをもってきた。

このような数学を、完成された学問体系として学ぶのは、能率の良い学習方法ではあるが、しばしば、受動的な姿勢を強いられ、数学の技術的側面にしか注意が行かなくなる憾みがないとはいえない。本講では、ギリシャ時代から近現代までの数学の形成の過程を、それぞれの文化状況において見ることで、数学の立場から、認識の歴史を考察していく。現代の科学文明を支える数学的思考の意味を再考する機会にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「数学の歴史」序論	数学を歴史的過程において考えることの意義と問題点について、やや広い視野で考察する。また、講義全体の計画を（「幾何学時代」「代数学時代」「解析学時代」「算術学時代」という分類の意味と合わせ）述べる。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授）
2	幾何学時代の数学(1)	ギリシャ数学の特質をユークリッドの『原論』の第一巻を中心に論ずる。議論の素材は、今日「初等幾何」という名前で親しまれている図形に関する厳密な論証であるので、高等数学に経験のない人にも身近な話題であろう。	同　上	同　上
3	幾何学時代の数学(2)	ユークリッドの『原論』の第五巻の「比例論」に焦点を当て、ギリシャ数学が、通約不能量（無理量）のパラドクスを克服して連続体をどのように扱ったかを論ずる。	同　上	同　上
4	幾何学時代の数学(3)	アルキメデスの『放物線の求積につい』と『方法』を取り上げユークリッド『原論』の対照的な彼の数学（近世の微積分法的なアイデアと現代数学にも通ずる厳密な論証）を紹介する。	同　上	同　上
5	代数学時代の数学(1)	中世末期にスコラ学者の間で行われてギリシャ古典（特にアリストテレース『自然学』）の研究（ルネッサンス）における近代科学＝近代数学的特性の萌芽を見る。	同　上	同　上
6	代数学時代の数学(2)	中世アラビアにおける数学研究（特に方程式研究）を紹介する。	同　上	同　上
7	代数学時代の数学(3)	代数的記号法の発明と発達の歴史を紹介する。あわせて、近世イタリアにおける方程式の研究を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	代数学時代の数学(4)	近代合理主義哲学の祖デカルトの数学と哲学を述べる。「我思う故に我在り」と、彼の数学との不可分の結びつきを考察する。	長岡　亮介	長岡　亮介
9	解析学時代の数学(1)	フェルマーによる新しい数学の開拓の様子を紹介する。カヴァリエリやケプラーの業績を素材に初期の無限小解析の方法論的特質を探る。また、ガリレオ・ガリレイの数学と力学を中心に新しい科学と新しい数学の結び付きを考える。	同　上	同　上
10	解析学時代の数学(2)	ニュートンの業績を中心に初期の微積分法の内容を紹介する。	同　上	同　上
11	解析学時代の数学(3)	微積分法が、自在に応用されて、新しい分野を切り開いていった様子を、オイラーの業績を中心に紹介する。	同　上	同　上
12	解析学時代の数学(4)	解析学時代の数学のパラダイムの変更が迫られる事件（振動弦論争）を紹介する。またフーリエによって導入された新しい手法（今日フーリエ級数と呼ばれているもの）を紹介する。	同　上	同　上
13	算術時代数学(1)	ラグランジュ、コーシ等、フランスのエコル・ポリテクニーク「数学教授」による数学の改革運動（解析学の厳密化）を紹介する。	同　上	同　上
14	算術時代数学(2)	ディリクレ、リーマンによるフーリエ級数の研究を中心に、19世紀半ばにおける数学の研究の方向転換を紹介する。	同　上	同　上
15	算術時代数学(3)	ワイヤシュトラースを中心とする「解析学の算術化」運動を紹介、あわせてカントルによる集合論の形成を歴史的な視野のもとで論ずる。	同　上	同　上

＝ 初等微分積分学（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：熊原 啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

1変数の微分積分学の入門をわかり易さに重点をおいて解説する。微分と積分を平行して説明する。高等学校において微積分の導入と基礎を学習していることが望ましいが、まったくの初心者も理解できるようていねいに述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	関数と変動	写像と関数、数と座標、極限値、関数の連続性	熊原 啓作（放送大学教授）	熊原 啓作（放送大学教授）
2	導関数	微分係数、接線、導関数、微分、無限小	同上	同上
3	不定積分と導関数の計算	合成関数の微分、置換積分、単調関数、逆関数、原始関数、不定積分、部分積分	同上	同上
4	指数関数と対数関数	指数関数、対数関数、自然対数、対数微分法、双曲線関数	同上	同上
5	三角関数と逆三角関数	三角関数、三角関数の加法定理、三角関数の微積分、逆三角関数	同上	同上
6	有理関数の不定積分	有理関数、部分分数分解、有理関数の不定積分に帰着される積分	同上	同上
7	定積分	定積分、区分求積法、リーマン和、微分積分学の基本定理、積分の平均値の定理	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	平均値の定理	平均値の定理、ロルの定理、コーシーの平均値の定理、不定形の極限	熊原　啓作	熊原　啓作
9	テイラーの定理	高階導関数、ライプニッツの公式、テイラーの定理、剰余項	同　上	同　上
10	関数の増加と減少、極値	増加、減少、極大、極小、凸凹、変曲点	同　上	同　上
11	積分の拡張	非有界関数の積分、無限区間における積分、ガンマ関数、ベータ関数	同　上	同　上
12	面積と体積	平面図形の面積、曲線の長さ、回転体の体積・表面積	同　上	同　上
13	平面曲線	パラメター表示、長さ、曲率、伸開線、縮閉線	同　上	同　上
14	級数	無限級数、整級数、マクローリン級数	同　上	同　上
15	簡単な微分方程式	１階微分方程式、２階線形微分方程式	同　上	同　上

＝ 微積分入門 II（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤　正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

『微積分入門 I（’98）』の続きとして、級数（1～4）、偏微分法（5～8）、重積分（9～11）およびベクトル解析（12～14）を扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数列	数列の定めかた――数列の極限――極限の定義の反省――極限に関する諸定理――実数の完備性（または連続性）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）
2	級数	級数の収束性と和――正項級数――交項級数	同上	同上
3	整級数	コーシー列――絶対値収束――整級数――収束半径	同上	同上
4	項別微積分	項別微積分――収束域の端点での様子	同上	同上
5	偏導関数	偏導関数――全微分――接平面――合成関数――平均値の定理	同上	同上
6	高階偏導関数・極大極小	高階偏導関数――極大極小	同上	同上
7	陰関数定理・平面曲線	陰関数定理――平面曲線	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	条件つき極値・最大最小	条件つき極値――開集合と閉集合――最大最小	斎藤正彦	斎藤正彦
9	方形上の積分	積分の定義――累次積分――積分範囲が有界でない場合――開方形の場合――微分と積分の順序交換	同上	同上
10	一般領域での積分	面積――一般領域での積分――体積――広義積分(1)――広義積分(2)	同上	同上
11	変数変換・曲面積	変数変換公式――曲面積	同上	同上
12	線積分・グリーンの定理	線積分――単純閉曲線・領域の境界――グリーンの定理	同上	同上
13	面積分・ガウスの定理	座標系の向き――曲面の向き――面積分――ガウスの定理――ベクトル解析の記号について	同上	同上
14	ストークスの定理	法線方向の微分――ガウスの定理（再）――パラメーター曲面――向きつきの変数変換公式――空間曲線に沿う線	同上	同上
15	反省と補足	微積分の基本定理――定積分の近似計算――無限小解析の基礎づけ――無限小量の使用について――微分方程式について――放射性物質の崩壊	同上	同上

＝線型代数Ⅰ（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数理科学諸分野の勉強を志す人に必要な線型代数の基本部分の確実な理解を主目標におきつつ、必ずしも技術的な知識だけにこだわらず、現代数学の方法論的特徴が実感できるような講義を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義の目標と流れ	線型代数という手法の数学的な意義について、概括的な解説をあたえる。講義全体に対する鳥瞰図的な把握を目標とする。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	現代数学の方法(1)	現代数学は、高等学校以下の数学とは、かなり異なった叙述方法を採用する。ここで学生諸君の感ずる違和感を少しでも減らすために、現代数学の方法論的な特徴を概説する。	同上	同上
3	現代数学の方法(2)	現代数学で良く使う（とりわけ線型代数ではすぐに必要とする）基本概念を集合、写像を中心に解説する。	同上	同上
4	線型空間（数ベクトルの世界）	最も身近な2次元、3次元の数ベクトルの話題から、やや一般的なｎ次元数ベクトル空間の具体的な話題を紹介する。ｎ次元の数ベクトル空間を考える上で、連立一次方程式の知識が不可欠であることを理解する。	同上	同上
5	連立一次方程式から行列へ	初等的な解法の水準を超えて連立一次方程式の解法を理論的に見つめ直し、その解法の中に、行列とその演算が隠されていることを理解する。この立場から、連立方程式のもっとも基本的な解法を論ずる。	同上	同上
6	行列の代数学（行列の演算）	連立方程式を理論的に論ずるために必要となった行列についての基礎的な方法を体系的に論ずる。特に、行列についての和、積が、恣意的な規約としてではなく、理論的に自然な合理性をもって定義されていることを実感してもらいたい。	同上	同上
7	行列の基本変形（逆行列の計算）	行列に対して、“可逆な変形”とは何かを学ぶ。逆行列を求める実用的なalogorithmの一つを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	階級（rank）の概念	基本変形を通じて行列の階数を定義し、これが、連立一次方程式の方程式における解の自由度などに深く関係していることを明らかにする。	長岡亮介	長岡亮介
9	行列式の定義に向けて	行列の集合が持つ代数的な構造を具体例として、群論の入門的な議論を紹介する。それを受けて、置換と置換群、対称群、交代群の概念を講ずる。	同上	同上
10	行列式の概念	置換に基づく行列式のもっとも基本的な定義から始め、これに基づいて行列式の基本的な性質（多重線型性）を導く。	同上	同上
11	行列式の計算	実用的な行列式の計算法について具体的な列を通じていくつか実践的に学ぶ。	同上	同上
12	余因子行列の概念、Cramerの公式	逆行列に対する行列式の立場からのアプローチを紹介する。その副産物として、有名な連立一次方程式の解の公式を導出する。	同上	同上
13	行列と行列式論のまとめ	行列に関するこれまでの議論を演習を交えて振り返り、何がこれまでにできたか、この上に何がすぐにできるか、を考える。たとえば、行列の表す一次変換（線型変換）について考える。	同上	同上
14	抽象的なベクトルの理論	公理的なベクトルと線型空間の入門的な解説を行う。具体的なベクトルはまさにその具体的出現にすぎないこと、素朴には「方向」も「大きさ」もなさそうな数学的概念がベクトルの一種であることを理解する。	同上	同上
15	今後の課題と展望 固有値	線型代数Ⅱで学ぶ、固有ベクトル、固有空間、行列の対角化、三角化と呼ばれる線型代数のもっとも重要な概念と手法についての概括的な展望を講義する。	同上	同上

＝線型代数II（'００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

主として数理科学諸分野の勉強や研究を志す人のために、線型代数Ｉ'99で講じた線型代数学の基本部分の理解を前提として、諸領域での応用を目指したやや発展的な講義を行う。放送授業においては線型代数学の理論的核心と方法論的特徴が見えるような講義を、他方、印刷教材においては内容的に整理したやや詳しく厳密な叙述を、心掛ける。したがって講義と印刷教材は一致しないところもある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義の目標と流れ	「線型代数Ｉ'99」で学んだ内容を概観し、解決された問題、未解決の問題を整理する。本講義に必要な予備知識が明らかになるであろう。また煩雑な計算に対するＣＡＳ（Computer Algebra System)を利用したアプローチも紹介する。そして抽象的な線型空間論に向かって、抽象代数の方法論的な準備を整える。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	線型空間と計量線型空間	線型空間の公理的定義を与える。“ベクトル”の厳密な定義がここで明らかにされる。これととりあえずは区別された計量概念の導入を通して素朴に理解された「距離」や「角度」の概念を理論的にとらえ返す。さらに、抽象的な線型空間の概念を通じて実ベクトル空間以外の「不可能な」線型空間の概念を構想することの意義を理解する。複素数に関する初歩的な知識は冒頭でごく簡単にまとめる。	同　上	同　上
3	線型写像とその表現	「線型代数Ｉ'99」で学んだように数ベクトル空間上の線型写像が行列で表現できることの復習から、一般の有限次元線型空間上の線型写像が基底によって定まることを講ずる。一般的な基底概念を理解するための準備として、基底の概念に暗黙に含まれていた“単位性”、“直交性”を概念的に定式化しておく。	同　上	同　上
4	基底の取り替えと線型写像	線型写像の表現は、基底により定まるはずであるから、基底を取り替えることによって、表現も変更を受ける。この変更の仕組みを把握する。	同　上	同　上
5	線型変換に関する不変性	線型変換与えられた線型変換によって“変らない部分”（線型変換についての不変部分空間）の概念とこれに対する表現行列の特性を見る。これによって固有値、固有ベクトルの概念を準備する。	同　上	同　上
6	固有値と対角化	固有空間と固有値の概念を不変部分空間からの自然な発展としてみる。もっとも基本的な応用として、対角化の問題（可能性の判定、計算手順）を主として実行列の範囲で取り上げる。	同　上	同　上
7	固有値問題の応用　(1)	対角化の有効性を明らかにするために固有値問題の応用として、手始めに、線型差分方程式（漸化式）によって帰納的に定義された数列の一般項を求める計算や線型連立微分方程式への応用を取り上げる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	固有値問題の応用 (2)	2次形式の概念を解説し、固有値の概念を通じてその分類ができること、それが、いわゆる2次曲線、2次曲面の分類へ応用できることを具体的に紹介する。	長岡亮介	長岡亮介
9	商空間、双対空間	商集合、双対性、同型性という現代数学のキー概念を線型空間を例にとって解説する。	同上	同上
10	エルミート行列とユニタリ行列	複素計量空間における共役変換の概念と正規行列の概念を紹介する。複素空間を考えることの理論的な優位性を明らかにする。	同上	同上
11	Jordanの標準形 (1)	冪零変換、冪零行列を通じて、対角化することのできない行列について、これに準ずる、Jordanの標準形と呼ばれる、実用的に重要な概念を紹介する。	同上	同上
12	Jordanの標準形 (2)	冪零行列の標準形からはじめて、Jordan の標準形を作るアルゴリズムを講ずる。	同上	同上
13	固有値問題の応用 (3)	Jordan の標準形を踏まえて線型微分方程式や、2次曲面の分類などについてより広いアプローチを紹介する。	同上	同上
14	線型代数の応用 (1)	線型計画法を中心に線型代数の応用を具体的に紹介する。	同上	同上
15	線型代数の応用 (2)	情報理論などから線型代数の応用を具体的に紹介する。	同上	同上

＝ 確率と統計（’０１）＝（R）

〔主任講師：釜江 哲朗（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

確率の考え方に対する理解を深め、それが世の中でどのように用いられているかを参照しながら、基本概念や計算方法に習熟して行くことを目指す。さらに、統計の考え方を学び、検定・推定の意味を理解しつつ、現実のデータの統計解析が行えるようになることをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	確率の考え方と確率の用いられ方	確率をどう考えるかについての考察を行う。パスカル以来のさまざまな考え方を紹介するとともに、現在どういうところで確率が用いられているかを紹介する。	釜江 哲朗（大阪市立大学教授）	釜江 哲朗（大阪市立大学教授）
2	場合の数と確率	配列の数、組み合せ数を用いた場合の数の計算と、それに基づく確率の計算を例題を解く形で論じる。組み合わ数に関する基本性質の復習も行う。	同 上	同 上
3	確率事象とその計算法則	確率事象とは何かを説明し、それらの和や共通部分、背反事象の和の確率を論じる。確率事象の間の関係が集合の場合と同様に、ベン図式で表されることと、確率と面積の類似性を用いて、確率の加法性を導く。また、条件付確率を導入する。	同 上	同 上
4	確率変数とその期待値、確率変数列の独立性	確率変数の概念を導入する。また、実数値確率変数の和や積、期待値・分散を論じる。期待値の線形性を導く。また、独立確率変数の積の期待値について論じる。	同 上	同 上
5	離散確率分布	２項分布、ポアソン分布、幾何分布、超幾何分布を導入し、それらの実例、平均と分散を論じる。	同 上	同 上
6	連続確率分布	一様分布、指数分布、正規分布を導入し、それらの実例、平均と分散を論じる。	同 上	同 上
7	大数の法則と中心極限定理	独立確率変数列についての大数の法則を導く。また、中心極限定理について説明し、その意味を具体例とともに論じる。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ランダム・ウォークとブラウン運動	ランダム・ウォークの導入とランダム・ウォークに関する確率の計算をいくつか行なう。また、その極限としてブラウン運動を導く。ブラウン運動の応用も論じる。	釜江　哲朗	釜江　哲朗
9	統計の考え方と意味	統計学の歴史と統計についてのさまざまな考え方を紹介するとともに、今日統計学がどのように用いられているかを紹介する。また、母集団、母数、標本、統計量といった基礎概念を説明する。	同　上	同　上
10	仮説検定の考え方とその意味	統計的検定の定式化とその背後にある考え方。仮説、対立仮説、第１種過誤、第２種過誤、有意水準、検出力関数の意味や検定の良さの基準を論じる。また、わかりやすい具体例を紹介する。	同　上	同　上
11	推定の考え方とその意味	区間推定と点推定を論じる。不偏性、一致性、最小分散性等の推定の良さの基準を導入する。また、具体例をもとにこれらの意味を紹介する。	同　上	同　上
12	正規母集団に関する検定・推定	正規母集団における分散既知の場合の平均の検定・推定、分散未知の場合の平均の検定・推定、平均未知あるいは既知の場合の分散に関する検定・推定を論じる。これに関係して、t-分布、x^2-分布、F-分布を導入する。	同　上	同　上
13	適合度検定	x^2-分布を用いた適合度検定を具体例をもとに論じる。	同　上	同　上
14	分散分析	F-分布を用いた分散分析を導入し、母集団の同一性等の検定を行う。	同　上	同　上
15	最小２乗法	最小２乗法の意味を論じ、その解としての正規方程式を導く。これによる未知母数の決定を論じる。	同　上	同　上

＝ 物理の世界（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）　〕
〔主任講師：遠山　紘司（神奈川工科大学教授）〕

全体のねらい

日常生活と密接に関連した現象を通じて、その背後に潜む物理の原理や法則をできるだけやさしく、わかりやすく説明するのが本講義の目的である。数式が少々現れるが、それがわからなくても全体の理解には差し支えがない。理系の人はもちろんのこと文系の人にも物理の面白さ、重要性が理解していただければ幸いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	乗り物の物理	自動車、新幹線、飛行機などの乗り物を題材として、力学の基礎的事項である速度、加速度について学ぶ。また、エアートラックの演示実験、コンピュータグラフィックなどを利用し、運動の法則、微分、ベクトルなどを説明する。	阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）	阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）
2	スポーツの物理	運動の法則の理解を深めるため各種のスポーツを考察する。ゴルフや砲丸投に現れる放物運動を説明し、またハイジャンプに対するモデル実験を紹介する。さらに、ハンマー投と関連し等速円運動を、力学的エネルギー保存則と関連しスキーのジャンプを考える。	同　上	同　上
3	圧力の物理	地球表面では大気の重さのために、人間を含めすべての物に約１気圧の圧力が加わっている。ここでは人の血圧について考えた後、１気圧よりさらに圧力を加えた場合と、逆に１気圧より減圧し、真空にした場合の日常生活との関連について学ぶ。	遠山　紘司（神奈川工科大学教授）	遠山　紘司（神奈川工科大学教授）
4	摩擦の物理	物体と物体との間には互いに運動をさまたげるような摩擦が働く。ここでは摩擦の種類とメカニズムについて述べた後、摩擦を積極的に利用する例として車のタイヤと路面の関係を、逆に摩擦を減らす例として潤滑やベアリングを摩擦係数の面から論じる。	同　上	同　上
5	温度と熱の物理	各種温度計の原理、温度の範囲（温度の下限）、極低温（超流動、超伝導）、物質の三態、臨界点などを中心として温度と熱について学ぶ。また、臨界点近傍の水（臨界水）の思わぬ応用例について述べる。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
6	水と空気の物理	パスカルの原理、ボイル・シャルルの法則を紹介した後、車のエンジン（熱機関）を例として熱力学の初等的な事項を学ぶ。また、少々難しいかもしれないが、エントロピーの説明を行なう。	同　上	同　上
7	カメラの物理	光の性質のうち、幾何光学に関する部分を学ぶ。直進、反射、屈折について述べた後、それを応用したカメラ、顕微鏡、虫めがね、望遠鏡の原理、さらに近年、通信分野や医療分野で急速に利用が増している光ファイバーについて述べる。	遠山　紘司	遠山　紘司

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	太陽光の物理	光の波動性（偏光、回折）、屈折率、光の速さ、紫外線、赤外線、赤外線リモコン、可視光線、横波、スペクトルなどを題材に電磁波としての光について学ぶ。また、虹、色の三原色など色に関する事項を論じる。	遠山　紘司	遠山　紘司
9	電話の物理	携帯電話、ＰＨＳ、ラジオ（ＡＭ、ＦＭ）、ＢＳ放送、ＣＳ放送などを題材として電磁波の性質のうち、光より波長の長い領域である電波を中心に学ぶ。また、電波を発生させる方法、空中の伝わり方も論ずる。	同　上	同　上
10	楽器の物理	起きている時も、寝ている時も音は私たちの耳に届く。気持ちの良い音、いやな音もある。音には何か規則性があるのだろうか。 ここでは楽器の音を中心に音の性質、音のでる仕組み、聞こえ方、さらに人間の耳に聞こえない音などについて学ぶ。	同　上	同　上
11	単位の物理	物理量を扱うさい、単位の決め方は重要な意味をもつ。ここでは、長さ、重さ、体積、時間の単位の決め方を学び、また加速度、密度などの組立て単位についても考察する。 国際単位系（ＳＩ）を中心に日常生活、社会習慣と単位の関係についても考える。	同　上	同　上
12	宝石の物理	宝石のもつ硬さや美しい色は何に起因するのであろうか。宝石を形作っている原子の並び方である結晶構造を中心に、宝石特有の性質を学ぶ。 さらに、原子の並び方に規則性がない場合（非晶質）についても考える。	同　上	同　上
13	発電の物理	発電のためのエネルギーとして位置エネルギー（水力、揚水）、運動エネルギー（風力、潮力）、熱エネルギー（地熱、石油、ＬＮＧ、ゴミ）原子力エネルギー、太陽エネルギーがある。これらを通してエネルギーの変換を学ぶと同時に送電・変電について考える。	同　上	同　上
14	家庭の電気	家電製品、電子レンジ、モーター、電熱器、ＦＡＸなどの電気器具を題材として、電気の基本的概念である電圧、電流、抵抗、オームの法則、直流、交流、電力、実効値などについて学び、電気的な現象を支配する物理法則を論じる。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
15	記録の物理	磁気記録（テープレコーダー、ＶＴＲ、フロッピーディスク、磁気カード）、光記録（光ディスク、ＣＤ）、光磁気記録（ＭＤ）など、それぞれの記録のメカニズムを通して、日常生活とのかかわりあいについて学ぶ。	遠山　紘司	遠山　紘司

＝ 物理・化学通史（’９９）＝（R）

〔主任講師：橋本　毅彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

明治以来日本が導入した西洋近代科学とは何であるのかという問題設定の下、①古代中世の科学や中国科学との比較対照、②近代科学改革で起こったこと、③その後の科学研究の理論的発展と研究制度の整備、技術的応用、という３つの基本的テーマを歴史的に順次追いながら、その特徴・あり方を論説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	科学とは、どこでも動く機械ではなく、育つべき土壌を必要とする生命体のようなものであるという、お雇い外国人教師ベルツの言葉を手がかりに、日本が移入した西洋近代科学とはいかなるものか論説しつつ、講義の概要を説明する。	橋本　毅彦（東京大学教授）	橋本　毅彦（東京大学教授）
2	ギリシャ科学	近代科学の最も重要な源泉はギリシャ科学である。神話的な説明様式にとって代わって、論理的・整合的な説明が始まる。タレスの自然哲学に始まり、無理数の発見、パルメニデスのパラドックス、そしてアリストテレスの総合化によるギリシャ科学の完成を解説する。	同上	同上
3	中世の科学	ギリシャ科学は、アラビアを経由して、「12世紀ルネサンス」の時代に西欧ラテン世界に導入され、新しく登場した大学で講じられるようになる。ギリシャ科学は、キリスト教の枠組みの中でいかに変容され、独自の学問体系に組み込まれていったのか論じる。	同上	同上
4	中国の科学	ギリシャ以降の西洋の科学の発展と好対照をなすのが中国における科学の発展である。特に歴の作製と結びついた天文学のあり方に注目して、官僚的な中国科学の姿を紹介する。また中国で近代科学が生まれなかった理由に関して、問いかける。	同上	同上
5	コペルニクス革命	近代科学革命のハイライトは、コペルニクスによる地動説の提唱である。プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説とを概略を説明し、その後の地動説への反応、またその継承発展をテイコ・ブラーエ、ケプラーなどを取り上げて説明する。	同上	同上
6	魔術的自然観	中世キリスト教世界において抑圧されていた各種の魔術・占星術は、ルネサンスの人間主義の登場とともに大いに流行する。小宇宙・大宇宙のアナロジーに代表される魔術的自然観を紹介するとともに、実験哲学を準備した「自然魔術」の歴史的意義を論説する。	同上	同上
7	機械論的自然観	アリストテレス的自然観、魔術的自然観にとって代わって近代科学の基礎概念として登場したのが、デカルトらによって提唱された機械論的自然観である。デカルトの著作を通じて、機械論のあらましを紹介し、その背景として、真空実験や精巧な機械の普及を解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ニュートンの宇宙論	ニュートンは、地動説に基づくケプラーの天文法則と、ガリレオの落下の法則に代表される地上の運動論とを、見事に総合し近代力学を作り上げ、科学革命を完成させた。錬金術や神学の研究にも専念したニュートンの科学思想の全体像を説明する。	橋本　毅彦	橋本　毅彦
9	ラヴォワジェの化学革命	フランス革命前夜にラヴォワジェは、新しい燃焼理論を打ち出すとともに、体系的な元素表を提案し、今日の化学の基礎を築いた。ラヴォワジェによるこの化学革命を、18世紀における化学技術の発展という背景を見ながら分析する。	同　上	同　上
10	ラプラス物理学	ナポレオン体制下のフランスにおいて、光・熱・電気・磁気などの物理現象に関して、古い光粒子説などに代わって新しい光波動論が提唱されるとともに、精緻な数学的物理理論が登場する。「第2の科学革命」とも呼ばれるこの時期の物理学の躍進を解説する。	同　上	同　上
11	電磁気学・古典物理学の完成	19世紀の英国では、ファラデー、ケルビン、マックスウェルらの物理学者によって、古典物理学の中核をなすことになる電磁気学が完成される。この事情を、これら英国物理学者が共有する独特の自然像や、大英帝国の電信網の発展に関連させつつ説明する。	同　上	同　上
12	有機化学の発達と企業研究所の出現	合成染料の開発を契機に、飛躍的発展を遂げた、19世紀後半の有機化学の発達を概観する。その基礎を築いたリービッヒの化学実験教育、パーキンの最初の合成染料の発明、そしてその後の科学研究のあり方のモデルともなる企業研究所に関して論じる。	同　上	同　上
13	量子力学の誕生	プランクによって提唱された量子仮説は、古典物理学の根底を覆し、ミクロの世界に関して全く新たな認識をもたらした。ボーアの原子構造論、シュレディンガーの波動力学、そしてハイゼンベルクの不確定性原理などを解説する。	同　上	同　上
14	原子物理学の発展と原爆開発	ミクロの世界の探究は、新しい素粒子の発見などを経て、核分裂の発見へと導かれる。この発見が、第二次大戦下にあって、いかに原爆開発へとつながっていったか説明する。また大戦中の米国で、科学者・技術者による兵器開発の研究がいかに組織されたかも見る。	同　上	同　上
15	巨大加速器と素粒子論研究	ＳＳＣといった巨大加速器に象徴される現代の巨大科学。加速器と検知器の発展の歴史を追うことにより、いかに素粒子研究が、巨大組織化されていったかを見る。サイクロトロンの発明、泡箱の発明、そしてＳＳＣの計画などについて論じる予定。	同　上	同　上

＝ 物質の世界－化学入門（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平川　暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師：濱田　嘉昭（放送大学助教授）〕

全体のねらい

自然界は物質で構成されており、私たちの身のまわりで起こる現象は物質の性質と変化によるものである。現在と未来の生活の安全と豊かさについて考えるとき、物質についての基礎知識は不可欠である。本科目では物質の世界の基本的な事項を化学の体系としてわかりやすく解説し、自然環境と技術開発の問題についても考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の世界	一般に「物質は原子や分子からできている」と説明されているが、実際に手に触れる物質と原子・分子との関係は自明ではない。それが解明されるに至った過程を説明し、生活の中で、物質について正しい理解をもつことの大切さを示す。	平川　暁子（放送大学教授） 濱田　嘉昭（放送大学助教授）	平川　暁子（放送大学教授） 濱田　嘉昭（放送大学助教授）
2	原子と分子	物質を理解するには、その構成要素である原子・分子の特性と、それらを正確に記述する科学の言葉を知ることが必要である。この回では、原子・分子の基本的事項を解説し、その科学的表現に慣れることによって、物質の理解が深まるように平易に説明する。	同　上	同　上
3	化学結合と分子の構造	自然界にある多種類の物質は原子間の化学結合によってできる。化学結合の種類と、各結合によってできた物質の特徴を説明する。また、分子の形や性質と化学結合との関係を、模型やＣＧを使ってわかりやすく説明する。	同　上	同　上
4	物質の変化(1)：状態変化	物質の多様性は、分子の種類の様性だけでなく物質が変化することによって現れる。この回では、状態変化を日常の経験と関連させて説明し、物質により状態変化に違いがあること、その理由は分子の運動や分子間力の違いによることを示して、物質の多様性の統一的な理解をはかる。	同　上	同　上
5	物質の変化(2)：化学変化	化学変化について日常の経験と関連させて説明し、化学反応の本質とその法則を理解する。化学反応が起こるときの、物質の量の関係・熱量の関係などを理解することが、生活の中でも重要であることを示し、物質の定量的な取り扱いについて説明する。	同　上	同　上
6	物質の混合	自然界が多様性を示す原因の一つは混合である。物質は原子・分子の集団であり、組成の種類・数・混合状態によって新たな性質が現れること、混合の不可逆性などを実例によって示す。濃度の正しい取り扱いは日常でも重要であり、それに慣れるように説明する。	同　上	同　上
7	水溶液と酸・塩基	自然界で最も多い混合物は水溶液である。水溶液の特性は生物の生存にも重要な役割をしている。水素イオン濃度（ｐＨ）・酸・塩基など日常でもよく使われる言葉の意味を、化学的に正しく理解できるように、わかりやすく説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	酸化と還元	化学反応は結合の組み替えであり、その際には、電子の授受が起こる。見かけが違っていてもほとんどすべての反応は、酸化反応と還元反応として説明される。有機物の燃焼も、金属の酸による溶解も、電池の電圧も、電子の動きで統一的に説明できることを示す。	平川　暁子 濱田　嘉昭	平川　暁子 濱田　嘉昭
9	有機化合物	有機化合物は種類も多く、生命に関係する物質として重要である。この回では、有機化合物の特徴を総合的に説明し、多種類の有機化合物が存在する理由・特異な機能を示す理由を化学結合の視点から説明して、身近な有機物質の理解を深めることをめざす。	同　上	同　上
10	化合物の反応	化学変化にはどのような種類があるか、反応はどのように起こるか、どのように進むか、どのような条件でどこまで進むか、どのくらいの速さで進むか等、反応には多くの要素が関係していることを説明し、生活・産業の中での反応の工夫を、具体例をあげて説明する。	同　上	同　上
11	物質とエネルギー	熱・光・電気など各種のエネルギーに応じて物質は独自の性質を示し変化する。反応による熱の放出・吸収、物質の色、光による分解、電気分解などは、エネルギーを伴う物質の現象である。物質とエネルギーとの関係を、実例をあげながらその本質について説明する。	同　上	同　上
12	材料の化学ー新しい物質をつくる	古来、エネルギーと化学反応の利用が人間の暮らし方を変えてきた。動力機関の発明、色素の合成、肥料の合成、高分子物質の合成など、近代だけでも多くの例がある。現代では優れた機能を持つ物質を予測し作り出す試みが行われており、その実例を紹介する。	同　上	同　上
13	生命と化学	生命現象は、生物体を構成しているタンパク質・核酸・脂質・炭化水素等の生体分子の有機的な相互作用である。この回では、生体分子の性質や反応の特徴について紹介し、生命の営みの不思議について考えてみる。	同　上	同　上
14	物質循環と地球環境	地球上の物質は、空間的にも時間的にも絶えず変化と循環を繰り返している。物質と人間とのかかわりにおいては、物質が資源として存在するか、環境破壊物質として存在するかが重要な問題であることを示し、物質への関心を深める。	同　上	同　上
15	物質の不思議	物質の世界は科学的に解き明かされてきたが、ミクロの原子分子が集まってマクロの物質ができる際の現象には、まだ不明な点も多い。この回では、本科目で学んだ物質の科学について復習しながら、未解決の課題と将来の展望について考えることとする。	同　上	同　上

＝ 物質の科学と技術開発（’９９）＝（R）

〔主任講師　：　平川　暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師　：　道家　達將（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

今日そして今後の生活を支える素材には、これまでにない高度な機能を備えた新物質が利用される。その開発には、物質や方法についての基礎的・理論的研究、そして開発に固有の研究が必要である。資源・環境問題への配慮も要る。本講義では、これら最先端の開発研究に当ってこられた方々の苦心談を聞いて共に考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	持続可能な発展に向けて工業材料はどうあるべきか	製造業における「労働生産性」、「資本生産性」の追求が大量生産・大量消費を生み、その結果として大量廃棄・地球環境負荷の増大をもたらした。これからは持続可能な発展に向けて「資源生産性」重視へ考え方を変換しなければならない。	村田朋美（北九州市立大学教授） 平川暁子（放送大学教授） 道家達將（東京工業大学名誉教授）	村田朋美（北九州市立大学教授） 平川暁子（放送大学教授） 道家達將（東京工業大学名誉教授）
2	無機物　(1) ー鉄鋼材料日本の鉄はなぜ優れているかー	鉄は古くて新しい。産業の基礎素材として日本の鉄鋼材料が世界を凌駕してきた理由を3視点から述べ21世紀への課題と展望に繋げる。放送教材では、主に自動車用鋼板について述べる。	阿部光延（元新日本製鉄㈱顧問） 道家達將	阿部光延（元新日本製鉄㈱顧問） 道家達將
3	無機物　*(2) 高温超電導　材料ー材料開発はどこまで進んでいるかー	高温超電導材料は、電力貯蔵、輸送、エネルギー変換などの領域で最も期待されている材料技術である。①高温超電導特性発現の理論と材料技術の現状、②利用技術、利用システム開発の壁と対応策、③この材料を生かした未来技術と私達の夢。	橋本操（新日本製鐵株式会社解析科学研究部長） 道家達將	橋本操（新日本製鐵株式会社解析科学研究部長） 道家達將
4	不定比化合物とその応用	①不定比化合物とは何か、その歴史的経緯、②鉄やウランなどの酸化物を例に遷移元素、欠陥構造、相図など話す、③固溶体の熱力学、④不定比化合物の物理的性質（ホッピング型半導体、イオン伝導、原子価と色など）、⑤機能性材料など役立つ不定比化合物、⑥高温超伝導*物質と不定比性等について述べる。	舘野淳（中央大学教授） 道家達將	舘野淳（中央大学教授） 道家達將
5	光　（１） 基礎特性	通信・情報処理・加工などの先端技術を支える光の基礎的特性について解説。すなわち波としての性質により引き起こされる反射・屈折・干渉・回折などの現象を説明する。自然界でのこれらの例についてもふれる。	大津元一（東京工業大学教授） 道家達將	大津元一（東京工業大学教授） 道家達將
6	光　（２） 限界の打破	波として光を考えると説明できない現象がいくつかある。これを説明するために、光をエネルギーの粒として扱う量子力学の必要性、その産物の一つであるレーザーの原理についてふれる。一方、波長よりも小さな光の粒を発生させるための近接場光学の原理とそれによる顕微鏡・光メモリ・原子の操作などの話題にもふれる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	光ファイバ技術の勝利	光ファイバ通信の原動力となった低損失光ファイバの開発の経緯を紹介し、合せて、技術開発のポイントや情報通信へのインパクトを明らかにする。	須藤昭一（ＮＴＴ光エレクトロニクス研究所研究研究企画部長） 道家達將	須藤昭一（ＮＴＴ光エレクトロニクス研究所研究研究企画部長） 道家達將
8	炭素 (1) 炭素の構造と物性	炭素は人類が最も古くから利用してきた物質である。燃料や製錬など化学反応材料として用いられると同時に吸湿ろ過材・顔料・宝石研磨材など広く使われて来たが、今日の新素材としての炭素の利用は、炭素の構造と物性の研究の上に展開されていることを述べる。	大谷杉郎（群馬大学名誉教授） 平川暁子	大谷杉郎（群馬大学名誉教授） 平川暁子
9	炭素 (2) 炭素繊維の開発	炭素繊維は軽量で高強度・高弾性率・耐熱性等のすぐれた性質を持つ素材であって、宇宙開発から民生用までさまざまな面で使用されている。このような優れた性能をもつ炭素材料を得るまでの過程での研究開発戦略・問題点の解決方法などについて述べる。	同上	同上
10	ダイヤモンド膜の開発	ダイヤモンドは光の屈折率が高いことによる宝石としての価値だけでなく、原子全体が共有結合を作ることによる高い硬度と高い熱伝導性によって、きわめて優れた素材物質となる。このためにダイヤモンド膜が開発されているが、その開発の手段、問題点を述べる。	佐藤洋一郎（独立法人物質・材料研究機構物質研究所客員研究員） 平川暁子	佐藤洋一郎（独立法人物質・材料研究機構物質研究所客員研究員） 平川暁子
11	有機物 (1) 導電性高分子の発見	有機化合物にも電気伝導性を示すものがあることが知られて以来、金属に比べ重量・加工性・多様性等に優れた有機物を導電性素材として使用する試みが進められている。有機導電性物質の基本的な物性と機能と各種の有機導電性物質の特性・合成方について述べる。	松永孜（元、ブリヂストン㈱研究開発本部理事） 平川暁子	松永孜（元、ブリヂストン㈱研究開発本部理事） 平川暁子
12	有機物 (2) 導電性高分子を電極に用いたポリマーバッテリーの開発	現代の情報化時代に使われる機器には、軽量・高性能の電池が不可欠である。しかも天然資源の有効利用のためには繰返し充放電できる２次電池が求められる。はじめて実用化された有機ポリマーバッテリーの開発の方針・開発過程での問題と解決の経験を述べる。	同上	同上
13	有機物 (3) 分離膜の物性と機能	物質を取扱う際には混ざっているものを分離することが重要な過程である。しかもこの分離は選択性が高く時間的効率が高いことが望ましい。分離膜はこのために有効である。膜の分離機能はどのような物性によりあらわれるのか、機能性分離膜の作り方を述べる。	神澤千代志（産業技術総合研究所第５事業所管理監） 平川　暁子	神澤千代志（産業技術総合研究所第５事業所管理監） 平川　暁子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	有機物 (4) 分離膜の開発	海水から真水を得る分離膜、合成化学原料、COをとりだす分離膜等、それぞれの素材開発について述べる。	神澤 千代志 平川 暁子	神澤 千代志 平川 暁子
15	物質の科学と技術開発	以上の話を総括する。	道家達將 平川暁子	道家達將 平川暁子

注：超電導*、超伝導*の用語は、内容は同じで、英語としては、superconductivityであるが、日本では工学系は主に前者を、理学系は主に後者を使っており、担当講師のご意見を尊重してそのまま使うことにした。

＝ 基礎生物学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中澤　透（元放送大学教授）〕
〔主任講師：山田　晃弘（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

生物科学の発展により、遺伝子のレベルから高次の神経活動、あるいは生態や進化など生物の多様性が明らかになりはじめている。生物現象を正確にとらえて生命の本質に迫るために、基礎的な生物科学を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の特徴	30億年以上にわたり発展を続けてきた生命体は、生命の基本的営みに必要なつくりを保持しながら、生命の多様化に対処するつくりを発達させた。このような非生命体にはみられない生物の特徴を学ぶ。	中澤　透（元放送大学教授） 山田　晃弘（東京大学名誉教授）	中澤　透（元放送大学教授） 山田　晃弘（東京大学名誉教授）
2	細胞－かたちとはたらき	細胞は生物の基本単位である。いろいろな細胞には核をはじめ特有なはたらきの細胞小器官がある。細胞は分裂によって増殖し、細胞内部の情報伝達が機能調節を担当する。かたちとはたらきの関係を探る。	中澤　透	中澤　透
3	生体を構築する分子	生命の営みは生体を構築する分子のはたらきによっておこる。生体を構築する分子として、炭水化物、脂質、タンパク質および核酸のどのような構造が生体のはたらきの基盤になっているかを学ぶ。	山田晃弘	山田晃弘
4	代謝	生体構築分子は合成と分解をくり返し、生体の維持と成長に役立てている。このような代謝を触媒する酵素のはたらきについて、また代謝の進行に伴って出入りするエネルギーについて学ぶ。	同上	同上
5	遺伝と遺伝子の本体	メンデルの法則とその再発見がなされてから、遺伝子の本体がＤＮＡであることが証明されるまでの道筋を解説する。	東江昭夫（東京大学教授）	東江昭夫（東京大学教授）
6	遺伝子のはたらき	ＤＮＡの構造が解明されたことは生物学のいろいろな分野に大きな影響を与えた。この章では、遺伝暗号の解読、遺伝子のはたらき、および遺伝子操作法などについて解説する。	同上	同上
7	生殖	30数億年以前に出現した生物は、自分と同じ性質の子孫を残す生殖のはたらきによって維持されている。形質を受け渡す遺伝現象は生殖と深く関わること、生殖細胞の出現や性の決定の重要性などについて学ぶ。	中澤　透 山田　晃弘	中澤　透 山田　晃弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	発生	生殖細胞の卵と精子は受精によって発生を開始する。胚の細胞は分裂・増殖し、そして独特な分化が始まる。発生のプログラムは遺伝情報の発現によって進行し、形態や性質の多様性がつくりあげられることを学ぶ。	中澤　透	中澤　透
9	運動と神経のはたらき	動物の運動は筋肉や繊毛によって行われるが、それはどのような仕組みによるのだろうか。また、神経はどのようにして信号を伝えるのだろうか。動物の活動を理解する上で重要なこれらのことがらについて概説する。	高橋　景一（国際基督教大学教授）	高橋　景一（国際基督教大学教授）
10	感覚と行動	視覚と聴覚について脳のはたらきとの関連を紹介する。動物の行動に関しては、ミツバチの視覚行動やフクロウとコウモリの聴覚行動について考察する。さらに本能行動や刷り込みについても言及する。	青木　清（上智大学教授）	青木　清（上智大学教授）
11	ホルモン	内分泌系は神経系や免疫系と協調して、体内の環境を一定に保っている。その他にホルモンが動物の行動様式を定めたり、変態のめざましい形態変化を起こすなどの重要でおもしろいはたらきについても言及する。	川島誠一郎（全薬工業研究所長）	川島誠一郎（全薬工業研究所長）
12	植物の特徴	植物は太陽エネルギーを利用して合成した有機物を動物、菌類、細菌類などに供給し、地球上に広く発展した生態系の維持に重要な役割を果たしている。植物のもつ機能的特徴、構造的特徴と生育環境要因との関連について考える。	庄野　邦彦（日本女子大学教授）	庄野　邦彦（日本女子大学教授）
13	生態と環境	生物は地球上のさまざまな生態系で生活している。生態系の構造を学ぶにあたり、島の生態系に注目する。生物の水平分布や垂直分布と生態系との関連、さらに生態系におけるヒトの位置についても論ずる。	松本　忠夫（東京大学教授）	松本　忠夫（東京大学教授）
14	進化と生物の多様性	生物はすべて共通にＤＮＡからなる遺伝子によって、その機能と構造を規定されている。それにもかかわらず、生物に驚くほどの多様性をもたらしたのは進化である。進化の要因と生物多様化の道筋について概説する。	石川　統（放送大学教授）	石川　統（放送大学教授）
15	生物学の現状と将来	最近の生物学の発展によって、多様な生物の側面が明らかになっている。この章では将来につながる問題として４つの問題を取り上げている。生物進化には地球の進化や個体発生の検討が関連し、生物の多様性の確保には地球環境との関係を探り、バイオテクノロジーの問題点を把握し、そして宇宙生物学の可能性を明らかにするなどの諸問題があり、すべて見通しをつける必要がある。	山田　晃弘 中澤　透	山田　晃弘 中澤　透

＝ 人間の生物学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新井　康允（人間総合科学大学教授）〕
〔主任講師：近藤　洋一（群馬大学名誉教授）　〕

全体のねらい

人間を客観的に見ようとする場合、われわれは自身が人間であるので、生物学的というより、ヒト固有のものとして考えがちである。ヒトを生物の一員として、医学、薬学、人類学などの範疇にとらわれず、もっと広く生物学的な立場で、できるだけ身近な問題を取り上げて考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人類の起源と進化	生物としての人間はどんな特徴を持っているのか。人間の進化の歴史で、何時、何処で、人類が誕生したのか。人類の起源と進化の問題を化石の最新の研究結果や最近の分子遺伝学の新知見を交えて学習する。	新井　康允（人間総合科学大学教授） 近藤　洋一（群馬大学名誉教授）	新井　康允（人間総合科学大学教授） 近藤　洋一（群馬大学名誉教授）
2	ヒトの身体の基本構造－細胞・組織・器官	ヒトの体はただ細胞が無秩序に集合しているのではない。細胞と細胞の産生物質が一定な配列と形態をなして集まっていて、いくつかの機能的な細胞集団－組織を作っている。ヒトの器官は（臓器）は機能に応じてこれらの組織がうまく組み合わさってできていることを理解する。	新井　康允	新井　康允
3	ヒトの性と生殖－生命の誕生を中心として	生殖は生物の最も基本的な機能であり、生物は生殖によって種の維持を図っている。生殖をになう生殖細胞と体細胞の違いや、ヒトの精子や卵子の出来かたの違い、そして、受精、着床、胎児の発生までの過程について理解する。	同　上	同　上
4	男と女の体はどのように作られるか－1	受精時の性染色体の組み合わせで、体の性は必ずしも自動的に決まるものではない。精巣ができるか、卵巣ができるかはＹ染色体上にある精巣決定遺伝子が働くかどうかによって決まる。最近、ＳＲＹという遺伝子が精巣決定遺伝子であることが判明した。その働きについて学習する。	同　上	同　上
5	男と女の体はどのように作られるか－2	体の性が決まるにはいくつかの関門があり、それぞれの関門に両性になるうる選択肢が用意されている。それを決定するのは精巣の２種類のホルモンである。なぜ、男子の子宮がないのかなどの問題や、行動的な性差－脳の性分化がどのようにして起こるかを学習する。	同　上	同　上
6	脳とニューロン－心のハードウェア	脳の構成成分である神経細胞（ニューロン）とグリア細胞の特性と基本的な働きについて学ぶ。心のハードウェアとしての脳を理解するうえで、脳の生後発生における、神経細胞の樹状突起や軸索の伸展とシナプスの増加による神経回路の複雑化の過程を理解する。	同　上	同　上
7	ヒトの脳－1感覚と運動の制御	ヒトの大脳皮質の機能の局在性があり、外界からの刺激情報がどのような経路を経て大脳皮質に到達し意識にのぼるか、また、大脳皮質の運動の指令がどのような経路で身体の運動を制御するのかを理解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ヒトの脳－2 大脳皮質の進化と脳の左右差	ヒトの大脳皮質の新皮質、古皮質、原皮質の発達を動物と比較しながら、特に高次神経機能に関連のある連合野の働きについて理解し、脳の進化を考える。脳の高次機能には左右差のあるのがあり、ヒトの脳の機能的、形態的左右差の最近の知見に関して学ぶ。	新井　康允	新井　康允
9	免疫の役割－1 感染や障害と闘う	病気になる、あるいはその誘因があると体は治癒のための、あるいは防御のための行動を起こす。免疫反応はその一つである。障害を受けた細胞の処理、侵入した異物、微生物類の抗体による処理など生体防御の仕組みを学ぶ。	近藤　洋一	近藤　洋一
10	免疫の役割－2 私とあなたを見分ける－臓器移植の問題点	ヒトの体の構造や機能は遺伝子によって決められている。しかし、親からもらった遺伝子が同じでも免疫細胞には区別がある。他人の臓器は見分けられ、排除される。生体防御に役立つ免疫は本来、自他を区別する精緻な仕組みである。自己認識の仕組みを学び、免疫の意味を理解する。	同　上	同　上
11	体の調節の仕組み－1　ヒトのゲノムとバイオシグナル	ヒトのゲノム（全ＤＮＡ）には10万の遺伝子があり、体の形や細胞の基本的な機能を決める。この機能を有効利用するためには環境や体内の情報を知らせるホルモンやサイトカイン等のバイオシグナルが必要である。ゲノムとバイオシグナルについて学ぶ。	同　上	同　上
12	体の調節の仕組み－2　ホルモン群による成長と健康の維持	すべてのヒトの体は一個の受精卵から始まる。複雑な大人の組織を作り、成熟した体の健康を守るためには、バイオシグナルを効率よく使ってタイミングのあった調節が必要である。ホルモンやサイトカインはどのように働くのか？その仕組みを学ぶ。	同　上	同　上
13	調節の破壊によるヒトの病気－癌とエイズと糖尿病の生物学	癌は増殖の調節がきかなくなった自分の体の細胞集団である。エイズはウィールスによる免疫機構の破壊である。糖尿病は血糖の調節不能にある。どの様にしてこの様な破綻が起こるか、対抗する手段があるのか、生物学からみた病気の実体を学ぶ。	同　上	同　上
14	老化と死－最終過程の調節	老化は避けることのできない生命の最終過程と考えられている。アルツハイマー病の発生を中心に癌の多発や心身機能の衰えなどの老化現象と内分泌系、神経系、免疫系などのバイオシグナル機構の破綻の関係を学び、老化と寿命の原因を探る試みにも触れる。	同　上	同　上
15	自然環境と人間－環境汚染と環境ホルモン	人間が生活していくうえで自然環境との調和が大切である。人間の作った物質が環境を変化させ、それが地球上に住むヒトを含めた生物に重大な影響を与えるようになってきた。ＤＤＴ、ＰＣＢ、ダイオキシンなどのホルモンかく乱物質を１例として、この問題を考える。	新井　康允	新井　康允

＝ 生物学の歴史（’０１）＝（R）

〔主任講師：中村　禎里（立正大学教授）〕
〔主任講師：溝口　　元（立正大学教授）〕

全体のねらい

人類の生命についての理解や考えを、古代から現代まで歴史に辿り、生物学の成立と展開を学ぶ。生物関連諸科目を学ぶ際の基礎知識の提供、人類の知的遺産としての生物学の把握をも心がける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古代の生命観ーアリストテレス、ガレノス	アリストテレスの思考枠、三段階の生命原理、身体各部の位づけと目的論、ガレノスの生理学説	中村　禎里（立正大学教授）	中村　禎里（立正大学教授）
2	解剖学のルネサンスーレオナルド・ダ・ヴィンチ	絵画における象徴表現から写実的表現へ、技芸職人から学者・芸術家へ、解剖学のルネサンス	同　上	同　上
3	近代科学成立時の生物学－1　ハーヴェイ、ボイル、ロウアーと生物学における実験	ハーヴェイによる血液循環の証明、分析ー総合法、実験生物学の始まり、ロイヤル・ソサエティと呼吸の役割の解明	同　上	同　上
4	近代科学成立時の生物学－2 顕微鏡の発明と生命単位の探究	・近代科学の誕生と肉眼観察 ・顕微鏡の発明とレーウェンフック、マルピーギら顕微鏡学者の登場 ・フック「ミクログラフィア」と細胞の命名 ・顕微鏡の改良 ・生理学の状況	溝口　元（立正大学教授）	溝口　元（立正大学教授）
5	近代科学成立時の生物学－3　生物の発生とその仕組み	・前成説と後成説 ・ハルトゼーカーの精子論とヌックの卵子論 ・単為生殖、再生現象の発見 ・受精研究と自然発生の問題 ・後成説の定着と胚葉説の確立	同　上	同　上
6	19世紀の生物学－1　ダーウィン進化論の成立とその背景	・進化思想を生んだ背景 ・ダーウィンの先駆者たちービュフォン、キュビエ、ラマルク ・自然選択説をめぐるダーウィンとウォーレス ・ハックスレー『自然における人間の位置』 ・ダーウィン説への批判	同　上	同　上
7	19世紀の生物学－2　細胞説、発酵論争、免疫学・微生物学の成立	・細胞説の確立ーシュライデンとシュワン ・発酵をめぐる論争ーリービヒとパスツール ・免疫学・微生物学の成立ーパスツールとコッホ	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	19世紀の生物学－3　メンデルの遺伝の法則の発見	・メンデル以前の遺伝研究 ・メンデルの略歴と交雑実験 ・メンデルの遺伝の法則の特徴 ・変質の遺伝 ・ワイズマン「生殖質連続説」	溝口　元	溝口　元
9	20世紀初頭の生物学－1　メンデル以降の遺伝研究	・メンデルの遺伝の法則の再発見 ・モーガンの遺伝子説 ・モーガン以降の遺伝学 ・集団遺伝学 ・核酸研究への途	同　上	同　上
10	20世紀初頭の生物学－2　社会ダーウィニズムの登場と展開	・社会ダーウィニズムと優生学－ヘッケル、ゴルトン ・各国の優生思想とその実施 ・遺伝学と社会	同　上	同　上
11	20世紀初頭の生物学－3　実験研究の確立	・世紀の変わり目までの生理学－ミュラー、ベルナール、パブロフ、ロエブ ・ホルモン研究 ・実験発生学の誕生 ・臨海実験所の設立と展開	同　上	同　上
12	日本の生物学－1　幕末まで	・中国本草学の伝来 ・日本の本草学の自立－貝原益軒、稲若水、小野蘭山 ・ツンベルクの来日と西洋植物学との邂合 ・医学的知識の場合	同　上	同　上
13	日本の生物学－2　明治期以降	・お雇い外国人生物学教師－モースとホイットマン ・初期の動物学者たち－箕作佳吉、石川千代松、丘浅次郎、谷津直秀 ・初期の植物学者たち－伊藤圭介、矢田部良吉、三好学	同　上	同　上
14	20世紀後半の生物学－分子生物学の成立からバイオテクノロジーへ	・分子生物学の成立 ・二重らせんの発見－ワトソン、クリックとフランクリン ・遺伝暗号の解読 ・遺伝子組変え技術の登場と生物学の産業化 ・バイオテクノロジーと環境保全	同　上	同　上
15	現代の生物学－生物学の多様な拡がりと将来の方向	・現代の生命科学研究－アシロマ会議とエイズ研究 ・バイオエシックスの誕生 ・専門分化と新たな研究の展開	同　上	同　上

＝ 疾病の成立と回復促進（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：薄井　坦子　（宮崎県立看護大学長）〕
〔主任講師：竹中　文良　（日本赤十字看護大学教授）　〕
〔主任講師：川島　みどり（健和会臨床看護学研究所所長）〕

全体のねらい

私たちの日常の生活リズムは、疾病によって大きく乱れ、その影響は個人にとどまらず、家族や周辺の人々にまで及ぶ。そこで健康状態から疾病が成立するまでの変化のプロセスを、生活との関連においてとりあげ、疾病の構造や回復を促進するための生活調整上の方向性とその根拠について理解を深め、人々の生きる力を支援する能力の向上をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	病むとはどういうことか	人間は、この自然界のなかで生きていく力を備えて生まれ、育まれて自立した生活を営み、やがて老いて死を迎える。その間に個人が受ける健康を脅かす力について理解し、病気は健康を脅かす力と自然回復力との力関係の結果としてあらわれることを学ぶ。	薄井　坦子（宮崎県立看護大学長）	薄井　坦子（宮崎県立看護大学長）
2	身体徴候と防御反応	日常多く見られる身体徴候として発熱、ここでは感染による発熱を取り上げ、身体内部の変化とその意味を探りながら、回復を促進させるケアの方向性を学ぶ。	佐藤　郁子（健和会臨床看護学研究所研究員）	佐藤　郁子（健和会臨床看護学研究所研究員）
3	病気に対する治療と看護	異常状態に対する診断・治療過程で、人々はさまざまな体験をする。その時々に生じる患者の反応に着目し、消耗を軽減でき、安定した気持で生活調整をはかれるように支援し、免疫力を高める看護の役割を理解する。	竹中　文良（日本赤十字看護大学教授） 薄井　坦子	竹中　文良（日本赤十字看護大学教授） 薄井　坦子
4	回復困難とみなされた事例への看護	医師が病名の診断をつけ、医学的には回復困難とみなしたとき、看護者はどのように患者にかかわっていくのであろうか。回復困難といわれた事例をとおして、医師の判断根拠となった身体内部の変化とその意味を理解したうえで、健康状態を高めるという観点から生活調整の方向性をみいだす考え方を学ぶ。	山本　利江（千葉大学助教授）	山本　利江（千葉大学助教授）
5	脳の機能が障害されたとき	脳疾患の中で特に脳血管障害は最も多い疾患の１つである。ここでは脳出血を例に、脳の機能、脳出血による脳の機能障害および回復を促進させるケアの方向性について学ぶ。	田中　裕二（千葉大学助教授）	田中　裕二（千葉大学助教授）
6	脳の精神機能の歪み	脳は、全身を統括する生理的機能と、感じる心や考える力を個別に分化させていく精神的機能とをあわせもっていて、それらの発達状態は、遺伝と環境と意思のからみ合いの結果としてあらわれる。したがって、私たちが脳の精神機能に歪みのあらわれた人々に接する時、その人の時代性や地域性や家族構成など環境との関連で見つめることによって患者の見え方が変わり、人間としての成長を促す関わりの方向性が見えてくることについて学ぶ。	薄井　坦子	薄井　坦子
7	生命の危機的状況	救急救命時に患者の身体内部で起こっている現象、とくに虚血性心疾患（心筋梗塞）に焦点を当て、救命からリハビリに至る過程で身体内部に起きる変化と救命処置について学ぶ。また再発防止の方策についても学ぶ。	川島みどり（健和会臨床看護学研究所所長）	川島みどり（健和会臨床看護学研究所所長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	生命維持が困難となったとき	がんの進行によって生命維持が困難となった患者の身体内部の変化について理解し、ＱＯＬ(Quality of Life) を高めるための治療・看護のポイントとその意味について学ぶ。	竹中　文良 奥原　秀盛（日本赤十字看護大学助教授）	竹中　文良 奥原　秀盛（日本赤十字看護大学助教授）
9	食物摂取から排泄に至る過程の病気	細胞のつくりかえに不可欠な栄養素のとりこみに障害をもたらす病気の特徴と、その結果生じる悪循環をたち切るための生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。	岡部喜代子(宮崎県立看護大学教授)	岡部喜代子(宮崎県立看護大学教授)
10	内部環境の調整が困難になった病気（1）	不調サインが現れにくい病気、ここでは肝機能障害を取り上げ、身体内部で起こっていることを解きつつ、回復に向けた生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。また、肝癌の病期と現時点における治療の手段についても学ぶ。	川島みどり	川島みどり
11	内部環境の調整が困難になった病気（2）	ネフローゼ、腎不全の事例をとりあげ、生活のなかでの腎機能障害の要因を探り、生活調整のポイントとその根拠について学ぶ。	花野　典子（宮崎県立看護大学教授）	花野　典子（宮崎県立看護大学教授）
12	運動機能を突然失った事例	下肢や上肢に機能障害をもつ事例をとりあげ、その内部構造の変化が日常生活に及ぼす影響を理解し、生活調整のポイントとその根拠について学ぶとともに、日常生活の質を向上させるための関わりを見出す思考のプロセスを示す。	大名門裕子（宮崎県立看護大学教授）	大名門裕子（宮崎県立看護大学教授）
13	日常生活の質を低下させる病気	現代医学でも未だ根本的な治療法が確立されていない病気(パーキンソン病)に焦点を当て、その病気の成り立ちとQOLを低下させる症状について学び、快適な心身の状態を維持することで病状の進行を遅らせることができ、回復困難であっても前向きに生活できることから、QOLを高める看護の視点と具体的方法を学ぶ。	川島みどり	川島みどり
14	生命の連続性をつくりだす機能を妨げる病気	月経痛の強い事例、子宮内膜症の事例をとりあげ、思春期の身体と心のつくられ方が女性のライフサイクルに及ぼす影響について考え、健康に生きる上での性の重要性について学ぶ。	花野　典子	花野　典子
15	総　括	健康のよい状態が乱れた人への看護学的視点は、個別なその人や家族をとりまく人々の生活の質を高めるために、どのような矛盾があらわれているかを見抜き、専門的知識・技術を重ねて、関わり続ける意思が明確になる思考のプロセスを身につけることであることを確認してまとめとする。	薄井　坦子 川島みどり 竹中　文良	薄井　坦子 川島みどり 竹中　文良

＝ 人体の構造と機能（ ’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：黒川　清（東海大学教授）〕
〔主任講師：菱沼　典子（聖路加看護大学教授）〕
〔主任講師：北村　聖（東京大学助教授）〕

全体のねらい

食事をすること、息をすること、トイレに行くことや話をすることなどは、毎日の生活の中で当たり前に行っていることである。これらの日常生活行動は、何のために、どのような仕組みで行われているのかを人体の機構から解説し、体に対する理解を深めることをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命と日常生活行動	一個の受精卵から人間が形作られ、誕生する過程を理解しながら、個体が外部環境と関係を保ちながら、内部環境を整え、細胞の活動を維持していくことを解説する。私達の日々の生活行動が、生命維持と関わっていることを理解させたい。	黒川　清（東海大学教授）	黒川　清（東海大学教授）
2	食べる（1）摂食	生命維持のために外界から食物をとり入れる営みについて解説する。空腹感や食欲、摂食の過程（咀嚼、味覚、嚥下を含む）、消化・吸収について、消化器系の名称、構造を含めて解説する。	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）
3	食べる（2）消化管と消化腺	消化管の運動と消化腺の分泌活動について、自律神経とホルモンによるコントロールを解説する。便の排泄について、便意と排便行為までを解説する。消化管を例にして、自律神経系を概説することを含める。	佐伯　由香（長野県看護大学教授）	佐伯　由香（長野県看護大学教授）
4	食べる（3）栄養分の代謝	吸収された栄養分が細胞の代謝活動に使われる過程を、肝臓と膵臓の作用を中心にして解説する。肝機能障害や糖尿病など比較的身近かな疾病を例にして、病態から正常な機能の理解を深められるようにする。	谷亀　光則（東海大学講師）	谷亀　光則（東海大学講師）
5	生体の流通路－心臓と血管	外部環境との関係においておこなわれる栄養摂取、呼吸を終えたところで生体内の物質の流通路をとりあげる。心臓、血管系の構造とその役割を、流通路として認識できるよう、また、心臓収縮のメカニズムとその調節機構を解説する。	山本真千子（宮城大学教授）	山本真千子（宮城大学教授）
6	血圧	血圧について、血圧の意味、血圧の決定因子、血圧の調節機構を解説する。血圧は、一般社会でも、医療のなかでも生体情報として頻繁に用いられる。その意味と調節機構を理解し、高血圧の重要性と対策を考える。	黒川　清	黒川　清
7	血液	血液の組成および働きを解説する。赤血球は酸素を運び、白血球は生体防御に関わっている。また、血小板は止血に関わっている。これらの働きと、その機能が失われた場合の疾患にも少し言及したい。さらに、これらの血液細胞は共通の幹細胞から分化してくることを、骨髄における血球の産生と分化と共に解説する。骨髄移植について考えるとこれらのことが理解しやすい。	北村　聖（東京大学助教授）	北村　聖（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自分を守る	免疫反応は細菌やウィルスなどの外敵から体を守るだけでなく、移植片の拒絶反応や、自己免疫疾患などでも重要な働きを演じている。この免疫機序の全体を理解するために、細胞レベルにおける自己認識と、他者の排除の機構、細胞性免疫と液性免疫の機序を理解し、自己免疫疾患や免疫不全症候群などの疾患についても基礎的な知識を得る。	北村　聖	北村　聖
9	息をする	換気・ガス交換にかかわる呼吸器の構造と機能について解説する。また呼吸と血液の酸塩基平衡のかかわりについても解説する。様々な肺疾患がガス交換のどの部位を障害するのか、この障害によってどのようなことが生体に引き起こされるのかにも触れたい。	沓澤　智子（東海大学助教授）	沓澤　智子（東海大学助教授）
10	トイレに行く	腎臓での尿の生成過程を、生体内の体液の調節の意義を含めて解説する。次いで、尿の排泄について、尿意を感じて排泄に至るまでの尿路の構造と機能を解説する。	谷亀　光則	谷亀　光則
11	見る・聴く・感じる	神経系の概要を講述し、神経系が生体の即時的な環境適応を可能にし、生体恒常性を維持する系であることを理解させる。ここでは感覚器系、とくに視覚、聴覚、体性感覚について「見る、聴く、感じる」という視点で詳述し、人間生活がいかに感覚系に依存しているかを考えさせる。	深井喜代子（川崎医療福祉大学教授）	深井喜代子（川崎医療福祉大学教授）
12	考える	神経系の概要を講述し、神経系が生体の即時的な環境適応を可能にし、生体恒常性を維持する系であることを理解させる。ここでは中枢神経系のはたらきを、「考える」という視点で詳述し、脊髄、脳幹、大脳皮質などの中枢神経系における情報処理過程を中心に解説する。また、睡眠の生理、脳死についても言及する。	同上	同上
13	動く	筋の構造と収縮のメカニズムについて解説する。また、運動における骨格と筋、関節の働き、これに伴う心肺系の反応およびその調節機構を解説する。	山本真千子	山本真千子
14	ホルモンとストレス反応	ホルモンによる調節について概要をおさえる。また、個体は常に刺激を受けているが、その刺激（ストレッサー）に対して、どのような調節をしているのかを概観する。	佐伯　由香	佐伯　由香
15	ケアへの応用	1～14回までに学習した内容が、自分の日常生活を再認識することに役立ったかどうかを問いかける。また、日常生活行動や子ども、高齢者、病者の世話をするのに、どうこれらの知識が生かされるか、例をあげて解説する。	菱沼　典子	菱沼　典子

＝ 地球とその歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

宇宙全体がら見れば、ゴミの様な微小な存在である地球。しかし、それは人間を含む生き物全てにとってかけがえのない生存の場を提供してくれる、巨大かつ偉大な存在である。この母なる地球は、いま科学の眼でどのように捉えられ、理解されているのか、そしてヒトはその地球にどのように関わっているのか。構成・歴史・現況を概観する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	地球の形成	太陽系の一惑星として誕生した地球の最も早い時期に関する諸説を紹介し、他の惑星との関連も、比較惑星学の立場から概観する。地球のもつ美しい成層構造の成立、大陸と海洋の出現など地球のメガフィーチュアをとらえ、海洋中心の水圏、大気圏等にも言及する。	同上	同上
3	地球観の移り変わり	地球に関する人間の関心の歴史をたどりながら、さまざまな地球観の成立とその背景を探る。他の天体の動きと地球の運動についての論争だけでなく、大地そのもの、海そのものの成り立ちや歴史の解釈、地球の年齢に関する推定の移り変わりなどにもふれる。	同上	同上
4	動く大地の認識	生活の場としての地球の大地が、あるいはそれを取り囲む海洋が、決して成立以来やすむことなく変動してきたことが、研究史を通じて明らかにされる。目で直接確認できない地中のできごとや、大過去での経過を探る地球科学の手法や考え方を示す。	同上	同上
5	地表の形態	地球に水と大気があり、太陽のまわりを公転しつつ、自転する球体であるために、表層部ではさまざまな営力による変形作用が進む。侵食と堆積により地形が形成され、地層が作られる。そして、地形は海底地形を含め、ダイナミックに時代変遷をとげてきたことを示す。	同上	同上
6	地層と時間	地球の歴史を数値時間で表現したいとする科学の願望がいかにして改良され、精度を上げてきたかを通観する。重力場における物質の配列－地層・岩層の形成、鉱物に含まれる放射性同位体が示す過去の時間の測定法をとりあげ、地球史編年の原理を理解する。	同上	同上
7	地球通史	46億年という長い地球史において、いくつかのキーエポックあるいはキーイベントをとり上げることにより、大局を通観する。地殻変動や火山活動、変性作用等のみならず、生命との相互作用と環境変遷を含め、地球カレンダーをつくり上げてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生命の発展	水の惑星の特異な現象とされる、地球型生命の発現とその後の発展に焦点を当てて地球史を眺めてみる。地球生命は宇宙生命とどのような関わりがあるかにもふれる。進化という不可逆事象の結果が、化石という証拠に残されながら地球史を刻んでいく様をみる。	濱田隆士	濱田隆士
9	環境変遷史	地殻変動が不断に起こり、生命がその中で進化をとげていく以上、その相互作用系としての地球環境もまたさまざまな変容を遂げてきた。過去の地球環境の実態と、そこから推定される環境変動要因を、地球外部からの作用をも含めて考えてみる。	同上	同上
10	森林の歴史	生命史に大きな役割を果たしたのは、云うまでもなく植物界の核をなす葉緑素のもつ化学力である。地史にみる森林の変遷は、したがって地球大気の変遷史でもあり、そこに養われる動物界とも不可分の関係を持つ。恐竜の歴史もそこに位置づけられる。	同上	同上
11	サンゴ礁の歴史	葉緑体をもつ褐藻類を体内に共生させる造礁性サンゴ類は、まさに海中の森林に例えられる。そのうえ、CO_2を$CaCO_3$の形で、“岩石化”していくなど、サンゴ礁が地球史に占める意義を歴史的ならびに環境科学的な視点から明らかにしてみる。	同上	同上
12	文明と都市化	地球上に人類が誕生したのは、長い地球史のごく最近に過ぎない。その人類は、知的進化の先端に位置づけられ、二足歩行と脳の大化を背景に文明化を進めてきた。この作用が地球表層部に与えた地形的要素として都市化を眺めることは意義深い。	同上	同上
13	人為の役割	ヒト属が、際限のない欲望を満足させようとする生物進化の側面を持ってしまった以上、そこに、人類の地球システムに対する介入・干渉が始まった。人為の果たしてきた地球自然へのインパクト役は、地球型生命の中では特異なものであり、ヒトの生態的反地球型性格が見える。	同上	同上
14	地球環境問題	他意はなかったにせよ、人類の歩んできた文明化の道は、結果として、地球自然に対して大きな歪を与えることになった。CO_2増加と地球温暖化をはじめ、地球環境問題としてとり上げられる幾つかの事態を、地球史とヒトの特異性との接点として捉えて学んでみる。	同上	同上
15	プループラネットの未来	地球環境問題を解決する力がなく、ヒトも地球も滅びる、とする俗説を超え、地球進化史と生物進化史の示す1つの流れを地球科学の立場から捉えてみる。ヒト社会の成り行きという近未来のみならず、プレート運動の結果おこる日本列島の形状変化まで考えてみる。	同上	同上

＝ 宇宙とその歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 杉 本　大 一 郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

天体と宇宙の構成および進化の歴史を論じる。個々の現象や天体の詳細よりも、宇宙や天体に関する概念、宇宙の見かたがどのように展開されているかについて、大局的な理解と描像を得ることを目的とする。宇宙認識の進んできた歴史的経過に従うよりも、現在の知識から見て再解釈し、科学として系統的に理解できる体系にまとめる。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コペルニクス的転回	それまでの地球中心説が太陽中心説に移って何が変わったのか。近代科学の始まりとどういう関係にあるのかを論じる。その後、ニュートンによる万有引力の法則の発見によって、天上の法則と地上の運動法則は統一された。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇 宙 の 物 質	分光学を使った天体の観測によって、天体を構成する元素が同定され、地上の物質と天上の物質は同じ物であることが分かるようになった。その後、量子力学によって、原子の世界の成り立ちが解明され、天上と地上の物質は統一された。	同　上	同　上
3	星のエネルギー	放射性元素によって太陽系の年齢が 10 億年の桁に及ぶことが分かり、その間太陽を光らせ続けるものは原子核エネルギーしかないということになった。その後、恒星内部における原子核反応が解明され、恒星進化論が展開された。	同　上	同　上
4	物質世界の歴史	恒星内部での原子核反応は、同時に元素を合成する過程でもある。その解析によって、宇宙における元素の起源が恒星進化と関連づけて解明された。ただしヘリウムは膨張宇宙初期に合成されたものであることがその後に解明された。	同　上	同　上
5	銀 河 の 世 界	星や星団より上の階層として銀河がある。それは千億個ほどの星とガスからなる。直接には観測されない暗黒物質も銀河を取り巻いていると考えられる。宇宙には千億個ほどの銀河がある。それらは宇宙の大構造を作っている。	同　上	同　上
6	活 動 す る 銀 河	銀河の中には激しく活動しているものがあり、電波などによって観測される。クェーサーなどの活動性を支えているのは、中心核にある巨大ブラックホールである。銀河どうしの衝突も星の爆発的形成に導く。その様子は赤外線で観測される。	同　上	同　上
7	世 界 の 中 心	コペルニクス以前は地球が世界の中心と考えられた。その後観測範囲が広がるにつれて、世界の中心は太陽、太陽系、銀河中心となり、地球の位置は相対化されていった。宇宙膨張が見出され、宇宙はどこにも中心がないということになった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宇宙の果て	18世紀にオルバースは、宇宙に果てがないとすると夜空は無限に明るくなるはずだが現実はそうなっていないという、パラドックスを指摘した。この問題の解決には、一般相対性理論による宇宙論の展開が必要であった。	杉本大一郎	杉本大一郎
9	宇宙と相対論	相対性理論はしばしば、その展開の歴史を軸として語られるが、ここでは相対論の物理的意味を語り、概念構成として不思議だと思われやすいが実はそうではないのだということを説明する。こうして、宇宙論との関連を明確にする。	同上	同上
10	宇宙のはじまり	相対論的宇宙論は、宇宙が高温・高密度の状態からビッグバンをとおして始まったと言う。その様子は理論的に追求されると同時に、観測をとおして得られる証拠が求められる。こうして実証科学の対象になる。	同上	同上
11	宇宙の進化	宇宙が膨張するにつれて銀河等の構造が形成され、現在見るような秩序立った宇宙へ進化した。一方エントロピー増大の法則によると、系は熱平衡状態という熱的死の状態へ向かう。宇宙の場合について両者の関係はどうなっているかを論じる。	同上	同上
12	ハワイの天文台群	ハワイ島マウナ・ケア山頂には、各国の天文台がひしめいている。天体の、特に赤外線による観測条件が良いからである。そこでは、新しい技術が、望遠鏡の構造体にも、光学にもふんだんに開発され、使われている。その様子をロケによって紹介する。	同上	同上
13	すばる望遠鏡	日本の国立天文台は、マウナ・ケア山頂に、単一鏡では世界最大の光学・赤外線望遠鏡を建設した。1999年には試験観測から本格的観測へ移行する段階にあったが、その時すでに、新しい宇宙の観測を開き始めていた。その様子をロケによって紹介する。	同上	同上
14	電波天文学と高エネルギー天文学	銀河や星を電波、X線、ニュートリノなどで観測すると、観測バンドに対応して、それぞれ異なる側面の情報を得ることが出来る。それらは、低温ガス雲内の分子から天体の高エネルギー現象、恒星内部の直接観測に及ぶ。ロケをおりまぜて紹介する。	同上	同上
15	天文学の理論	まとめとして、天体や宇宙を研究する理論とその構成、その特徴、その意義、他の学問分野との関係などについて考察する。	同上	同上

＝ 宇宙像の変遷と人間（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：金子　務（大阪府立大学名誉教授）〕

全体のねらい

古代から現代に至るまで宇宙の姿を人々がどう捉えどう想像しどう観測してきたかを考えていく。とりわけ人間の逞しい想像力と鍛えぬいた推理力が、天上界と地上界をどうつないで宇宙像を確立してきたを洋の東西にわたり見ていく。日本の場合もつねに念頭にいれて、なるべく現地の史跡等の映像を駆使して検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	落下文明と古代の星座	人間が天上から落ちたというイメージは東西に共通する。地に蠢く人間が上昇へという反重力の技術を開発し、天空への思慕と想像力から、数々の神話や星座を思い描いてきた。混沌・複雑な宇宙の事物に秩序を与える試みである。	金子　務（大阪府立大学名誉教授）	金子　務（大阪府立大学名誉教授）
2	時間計測と暦法の問題	自然や宇宙のリズムや周期を捉え、その規則性と特異性を見つけて自然環境を予想し、自分の立つ世界を確認するために暦が発明される。東西における古来からの暦と天地にまたがる時刻法を調べ、時間認識と文明の高まりを見る。	同　上	同　上
3	空間認識と地図の発展	この地球や太陽を知るには、まず正確な空間認識と測量技術が必要になる。星図と対応して地上の航海図が大航海時代の展開には不可欠であった。地図を得るのに、天地にわたる緯度と経度の決定や投影術の技法が追求工夫された。	同　上	同　上
4	プラトンの問い「現象を救え」	火星等の惑星運動の不規則現象を神の図形の円運動からどう説明するか、このプラトンの問いから数学的天文モデルが生まれる。幾何学的なプラトン宇宙創生論や導円・周転円理論は、古代人による神々への回答と挑戦でもあった。	同　上	同　上
5	二重コスモス像の世界	アリストテレス自然学とキリスト教神学に結びついたプトレマイオス宇宙モデルは、月を第一天とする天上界と地球を含む月下界からなる。ダンテの『新曲』にもある像だ。マクロ・ミクロ両コスモスや錬金術の問題も考えていく。	同　上	同　上
6	コペルニクス革命は革命か	『天球の回転』(1543) がもたらした意義とその受容を見ながら、科学革命の意味と科学理論の優劣を考える。なぜ目視観測の第一人者ティコが別の天文体系を立てたのかを検討する。南蛮文化以来の日本の宇宙観の形成も考える。	同　上	同　上
7	ガリレオの望遠鏡と宗教裁判	振り子等から落下運動法則を確定したガリレオは、自作の望遠鏡を天上界に向け、木星の４衛星・金星の相変化・太陽黒点と自転等を発見する。『天文対話』から生じた真理をめぐるガリレオ裁判の意味と観測手段の革新性を問う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ケプラーが聴いた天上の音楽	楕円軌道の発見等のケプラー３法則の成立を見てから、その宇宙モデルにおける新プラトン主義の影響を考える。ケプラーはティコのデータを駆使した理論家で新型望遠鏡も考案、宇宙の調和を天上の音楽と捉えた神秘家でもある。	金子　務	金子　務
9	ニュートンのリンゴと引力	反射望遠鏡で注目のニュートンは光学実験と並行して万有引力に想到する。リンゴの落下体験の意味を考えてから運動の３法則の成立を調べ、重力をめぐるフックとの先取権問題、錬金術趣向と神学への傾倒など意外な側面を見る。	同　上	同　上
10	無限宇宙複数世界論の勝利	この世界以外に別世界があるか否か、古代ギリシャの原子論はそれを肯定し、アリストテレスは否定した。18世紀にかけて宇宙は無限で複数世界あるとの見解がブルーノ、フォントネルらの支持で確立する。宇宙人論議が展開する。	同　上	同　上
11	宇宙の熱死を示すか「時の矢」	19世紀半ばに登場した熱力学は宇宙の熱機関モデルとその一方向への変化を示唆した。物理学に進化論がドッキングする始まり。エネルギーとエントロピー概念の意義を見ながら、人々を震わせた太陽や宇宙の熱死の恐怖を考える。	同　上	同　上
12	光の宇宙とアインシュタイン	世紀末の混沌の中から、20世紀になって光をめぐって相対性理論と量子力学が誕生する。非ユークリッド幾何学と結びついたアインシュタインの重力理論がもたらす解釈論議が、宇宙は静的か動的かといった根本課題に迫っていく。	同　上	同　上
13	ハッブルの後退する宇宙	パロマー山の巨大な光学望遠鏡を駆使したハッブルはついに、遠方の銀河が遠ざかることから、宇宙が膨張しつつあるかとを発見する。膨張宇宙論の誕生である。オルバース問題を解決しそれを支持した研究者たちと傍証データを見る。	同　上	同　上
14	宇宙探査とＥＴ問題	第二次大戦後に登場した宇宙ロケットと電波望遠鏡は、宇宙の直接探査を飛躍的に高めた。アポロ計画の有人月着陸・ボイジャーの太陽系探査等からは、ＥＴの存在を示すものはまだ見つかっていない。ＥＴの探査問題を検討する。	同　上	同　上
15	ビックバン後の最新宇宙論	量子論を基礎にした量子宇宙論の登場で、宇宙の創成と進化が論じられるようになった。ブラックホールからホーキング宇宙、インフレーション理論に至る現代宇宙論の科学的思想的諸問題を、研究者等の素顔もあわせて見ていく。	同　上	同　上

＝ 実験科学の方法（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　嘉昭（放送大学助教授）〕
〔主任講師：菊山　宗弘（新潟大学教授）〕

全体のねらい

自然科学では自然界に起こる様々な現象を分類・整理し、これらの現象を支配する法則を明らかにしようとすると共に、現象を予測し、場合によれば新たな現象を作り上げようとする。このためには、実験と観察、論理が必要です。自然科学には物理学、化学、生物学など様々な分野があるが、自然科学としての基本的な考え方などは共通している。この講義では、様々な自然科学に共通する考え方、手法を学ぶと共に、自然科学の学習の進め方に役立てようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	自然科学の構造	自然科学はどのようにして発展して来たのか、現状はどうであるかなどを概観する。次に自然現象の現れ方の特徴とそれに見合う探求の方法についてまとめる。最後に自然科学の諸分野とそれらの相互関係を検討し、自然科学の学び方についても言及する。	濱田　嘉昭（放送大学助教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）	濱田　嘉昭（放送大学助教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）
2	自然科学における観察と実験	自然科学は自然現象を観察や実験をとおして理解しようとするものである。正しい観察や実験を行うにはどのような手順を踏むべきかを考える。事実としての自然現象、理解するための観察や実験結果との関連、一般化としての概念や法則について考えてみる。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
3	自然科学の言葉と表現：単位と標準	様々な分野の研究結果を伝達し、知識を共有するためには「共通語」が必要となる。このため各種の物理量には、その物理量の意味や基準が厳密に定義されている。この章では定義や基準・標準について解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
4	自然科学の戦略：分析と統合	様々な現象に対する実験や観察によって得られた結果を分類・整理することによって、その結果の中に含まれる意味を汲み取り、現象を引き起こす原因を抽出することができる。さらにその原因を、その実験だけに固有のものとするのではなく、可能な限り一般的な法則としてまとめることが大切である。分析と統合の関係、そのプロセスを解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
5	目に見える現象	力学的現象、生物の織り成す世界などは目に見える形で観察できるものが多い。したがって伝統的に蓄積されてきた知識の体系を作っている。これらの分野の現象の特徴と観察・実験の組み方、結果のまとめ方、法則化に至る過程を可能なかぎり具体的な例を挙げて解説する。目に見える現象の裏に目に見えないミクロの過程があることを同時に理解する。	同　上	同　上
6	目に見えない現象	素粒子、原子や分子などのミクロの物質は目で見ることはできない。これらの物質が関係する現象の特徴と観察・実験の組み方、結果のまとめ方、法則化に至る過程を可能なかぎり具体的な例を挙げて解説する。目に見えないミクロの過程は、マクロの物質の現象として現れる場合があることを同時に理解する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
7	自然現象に働きかける	われわれは自然現象の起こる原因を知るために観察や実験を行う。実験に際しては、何らかの形で対象に働きかけその応答を見る。このとき、対象に及ぼす影響を可能な限り小さくするという方法と、激しく働きかけることによって現象の裏に潜んでいた実体を顕わにする方法がある。それぞれの意味と実例を解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自然現象を見る目を研ぎ澄ます	自然現象が発する信号を謙虚に見つめることは必要であるが、信号を受け止める感度と範囲を広げる努力も重要である。また測定の方法によっては、同一の現象も異なった様相を示す場合がある。この章では実際に測定をするときの技術的な問題とともに、何を観測しているのかを熟知しておくことの重要性を解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
9	自然現象の美しさを知る	自然現象に関する実験や観察による事実をそのままメモや文章として記述しただけでは、分析や考察の対象とはならない。実験・観察データの中に含まれる規則性や原因を抽出するにはグラフ化とか統計処理などが必要となる場合がある。どのような処理の方法があって、どの処理法を適用すればよいのか。その注意点は何かなどについて解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
10	自然現象の裏に潜む姿を暴く	実験や観察によって得たデータは、自然現象の表す一つの事実であるが、その事実に隠された“真実”をデータの解析を通じて明らかにすることができる。一過性の現象、厳密な数値を再現性よく入手することが難しい分野などの研究を支える基礎は何か、そのような領域のデータはどのように扱えばよいかを解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
11	自然現象の秩序と法則の表現	一見雑多で複雑に見える自然法則を整然と定量的・論理的に記述し、観察や実験の結果と比較し判断を下すには、それにふさわしい表現法が必要である。それが数学である。この章では、数式で表現するということの意義を解説する。	同　上	同　上
12	自然科学における評価と判断	実験や観察によってある結論を引き出す場合に必要なことは、関連する現象やこれまで蓄積されてきた知識や法則との整合性である。独断を排し、結論の妥当性を謙虚に検討する必要がある。それには自分のデータや結果の解析や評価だけでなく、他の研究者の成果との間の比較検討が重要である。この過程を実際に即して解説する。	同　上	同　上
13	情報の収集	自然科学の知識や技術には膨大な蓄積がある。何がどこまで明らかになっているか、あるいは何が未解決の問題であるか、どのような考えが提出されているかの検討は、実験計画の段階から、成果の発表の段階まで、常に必要とされる。この章では情報の収集、特に文献の検索について解説する。	同　上	同　上
14	研究成果の発表と討論	自然科学の研究で得られた新事実や法則を人類共通の財産にするためには一定のルールにしたがって結果を整理し、適切な方法や媒体を用いて発表する必要がある。報告書（レポート）の作成、論文のまとめ方、発表のしかたについて説明する。また学習段階での報告書、実習レポートのまとめ方などについても概説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
15	自然科学の今後の発展 （全体のまとめ）	２０世紀に自然科学は巨大な発展をした。各分野では今後どのような発展が期待されているのか。２１世紀の近未来の姿を予測する。　１４回までの内容のうちいくつかの重要と思われる話題を取り上げることにより、全体としてのまとめとする。	同　上	同　上

＝英語Ⅰ（'０１）＝（R）

－コミュニケーションのための文法－

〔主任講師：平賀　正子（立教大学教授）　〕
〔主任講師：藤井　洋子（日本女子大学助教授）〕

全体のねらい

基本的な文法の知識を活性化させるために、英語の日常生活で使う表現を用いて学習する。従来コミュニケーションのための英語というと、文法的説明抜きに反復やドリルを通して覚え込み、運用するような教授法がとられてきた。それに対しこの科目では、両者の融合をはかる。つまり、コミュニケーションに最低限必要な文法をやさしい日常表現を通して学ぶことになる。こうしていわば生きた文法を身につけ、初歩的な英語が自由に使えるようになることがこの科目のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。英語が分かる楽しさについて、最低限の知識の習得とその創造的な応用がいかに大切かについて考える。学習者の動機と学習スタイルの違いを踏まえて、どんな学習方法が効果的かを探る。	平賀　正子（立教大学教授） 藤井　洋子（日本女子大学助教授）	平賀　正子（立教大学教授） 藤井　洋子（日本女子大学助教授）
2	発音の基礎	英語の発音の仕組みを音声・アクセント・イントネーションなどについて説明する。その上で、コミュニケーションに欠かせないあいづちとつなぎ表現を紹介する。	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford（静岡大学助教授）	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford（静岡大学助教授）
3	文法の基礎（1）	基本的な英語の文法について復習する。特に、文の種類・文の要素・品詞について説明する。	同　上	同　上
4	文法の基礎（2）	英語の文法にとって最も基本的な品詞である動詞と名詞について再検討する。動詞の種類、時制、相、態、名詞の種類と用法について述べる。	同　上	同　上
5	"You look great!" 自動詞	自動詞の代表であるbe動詞を始め、基本的自動詞について説明する。人や物の状態や様子の表し方を学ぶ。	同　上	同　上
6	"I want some tea." 他動詞	基本的他動詞である動作を表す動詞を始め、さまざまな種類の他動詞について学ぶ。	同　上	同　上
7	"What can I do for you?" 疑問文	疑問文の仕組みと働きを学ぶ。物を尋ねる表現、依頼する表現、同意を促す表現などについて説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	“I don't know.” 否定文	否定文の仕組みと働きを学ぶ。Noの言い方、notを使う否定、副詞を使う否定などについて説明する。	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford	平賀正子 藤井洋子 Steve Redford
9	“Please take care.” 命令文	命令文の仕組みと働きを学ぶ。特に、pleaseの使い方、letの使い方について説明するとともに、命令文と疑問文の違いについても解説する。	同上	同上
10	“May I come in?” 助動詞	代表的な助動詞であるcan, may, must, will を中心に、助動詞の働きと用法を学ぶ。人間関係を円滑に営むために重要な「敬意」や「丁寧さ」をあらわす助動詞についても説明する。	同上	同上
11	“It's nice to meet you.” 不定詞・動名詞	動詞を品詞変換し、名詞、形容詞や副詞の働きをもたせて表現する仕組みを学ぶ。特に、不定詞と動名詞について説明する。	同上	同上
12	“Do you know what time it is?” 長文の仕組み	やや複雑な文の仕組みを名詞節・形容詞節・副詞節という観点から説明し、長文の仕組みについて解説する。	同上	同上
13	“So do I.” 省略	英語にみられる省略の仕組みについて説明する。日常生活で使う表現によくみられる省略について、基本的文法の知識をどのように活用したらよいかを学ぶ。	同上	同上
14	まとめと応用（1）	５章～１３章で説明した基本的文法の知識を会話という観点からまとめ直し、生きた文法として活用するための応用力を養う。	同上	同上
15	まとめと応用（2）	５章～１３章で説明した基本的文法の知識を会話という観点からまとめ直し、生きた文法として活用するための応用力を養う。	同上	同上

＝英語II（'９８）＝（R）

〔主任講師：霜崎　實（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな現代的なテーマを扱いながら、英語コミュニケーション能力の基礎を習得することを目的とする。毎回テーマを導入する英文を読み、語彙・表現・背景的知識を確認する。次に関連テーマについての対話文を通じ、口頭でのコミュニケーションにおいて語彙や表現を活用する方法を学ぶ。さらに、様々な機能表現を学ぶことによって、表現の幅を広げていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Computer and Society	インターネットの普及にともなって、現代社会は急速にコンピュータ依存社会になりつつある。第１回目の今回は、コンピュータと私たちの生活との関わりをテーマとして取り上げる。	霜崎　實（慶應義塾大学教授）	霜崎　實（慶應義塾大学教授）
2	Recycling	私たちの生活はゴミと切り離すことができない。近年では使い捨て文化の蔓延でゴミが激増し、処理が追い付かない状況になっている。そこで、資源の再利用がますます重要となる。今回のテーマはリサイクル。	同　上	同　上
3	Wind Energy	毎日の生活に電気は必要不可欠である。しかし、水力発電用のダムは自然の生態を破壊する可能性があり、原子力発電には安全上の問題がある。今回のテーマは環境にやさしいとされる風力発電。	同　上	同　上
4	The Ozone Layer	物質文明の進展にともない私たちの生活は豊かになったが、地球環境はますます悪化しているとされる。今回は、私たちの日常生活で使われている化学物質によるオゾン層の破壊をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
5	Diet	健康は私たちの最大の関心事である。しかし、現代人はストレス・過食症・拒食症・肥満・アレルギー症など、さまざまな問題を抱えている。そこで今回は、健康とダイエットをテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
6	Drinking	最近日本でのワインの消費量が増えているという。確かに、私たちのまわりにもワイン党の人が増えているが、一方ではビールや日本酒にこだわる向きも相変わらず多い。今回のテーマは飲酒。	同　上	同　上
7	Review (1)	今回は、第１回から第６回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Smoking	最近ではようやく煙草を吸わない人への配慮が定着しつつある。レストランでも禁煙席を設けているところが増えているし、公共の交通機関でも禁煙が当然となりつつある。今回のテーマは喫煙を取り上げる。	霜崎　實	霜崎　實
9	Cellular Phones	携帯電話は便利ではあるが、問題点も少なくない。自動車運転中の使用は交通事故の危険をともなうし、電車やレストランの中での使用は他人の迷惑にもなる。今回のテー マは携帯電話。	同　上	同　上
10	Computer and Health	コンピュータにより必要な情報を短時間で検索し利用することが可能になった。しかし、長時間にわたるキーボードの使用は健康被害をもたらすという。今回は、コンピュータと健康がテーマである。	同　上	同　上
11	Working Women	近年女性の社会進出が目覚ましいが、まだ男女間の待遇 格差は依然として残っている。フェミニズム運動の盛んなアメリカにおいても事情は同じらしい。今回は働く女性の問題がテーマである。	同　上	同　上
12	Work and Leisure	ワーカホリックと呼ばれたのは一昔前のことで、私たち日本人も休暇を楽しむ余裕が持てるようになった。しかし、休暇をとれる期間は国によって事情が異なるようである。 今回のテーマは仕事と休暇。	同　上	同　上
13	Automobile Society	急激に「車社会」へと変貌した最近の日本では一家に２台の車を持つ家も珍しくはない。確かに生活は便利にはなったが、交通渋滞や交通事故の問題は深刻である。今回は車社会をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
14	Space	宇宙は神秘的であるがゆえに、魅力的である。しかし、 最近では惑星探査ロケットが送ってくる情報によって、少しずつではあるが神秘のベールが剥がされつつある。今回のテーマは、宇宙。	同　上	同　上
15	Review (2)	今回は、第８回から第14回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認 するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

＝ 英語III （’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：霜崎　實（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

アメリカのさまざまな地域を舞台とする3本の映画を取り上げて、学習を進める。それぞれの映画は、大学進学を控えた青年、失業中の中年男性、1950年代に初めて白人の学校へ通うことになった黒人少女を主人公として展開する。英語表現を学ぶことに留まることなく、出来事の背景を充分に踏まえたうえで、映画の核心に迫っていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	August Roads (1)	第１回から第５回に渡って、Joshua Moss監督の“August Roads”を取り上げる。アメリカのバーモント州の農場で、仕事を手伝いながら大学進学を考えるJimmyの苦悩と決断の物語である。物語は、Jimmyがプリンストン大学から入学許可の手紙を受け取ることから始まる。	霜崎　實（慶應義塾大学教授）Sarah Teasley（東京学芸大学非常勤講師）	霜崎　實（慶應義塾大学教授）Sarah Teasley（東京学芸大学非常勤講師）
2	August Roads (2)	Jimmyの叔父のPhilipが突然農場を訪れる。1年前に父親を亡くしたJimmyの相談相手であるが、母親のCatherineからは歓迎されない。何か不協和音が存在する。	同　上	同　上
3	August Roads (3)	PhilipはJimmyに進学を諦めるよう説得する。大学進学のことを知った母親は、Jimmyの言うことを聞こうとしない。しかし、ある小さな事件をきっかけにJimmyは進学の決意を固める。	同　上	同　上
4	August Roads (4)	大学の授業登録のために農場を去ろうとするJimmyに、母親がやっと心を開いてJimmyの進学を認める。農場には、幼いJimmyの弟Charlieと母親が残される。	同　上	同　上
5	August Roads (5)	第5回は、これまで断片的に見てきた“August Roads”を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上
6	Routed (1)	第6回から第10回に渡って、David Ullendorff監督の“Routed”を取り上げる。ある日突然解雇された中年男性Clarkは、風邪を引いた息子Stevieの代わりに新聞配達を始めるが、配達の途中で、彼を解雇した元上司Spivakの家を偶然発見する。Clarkのとった行動は？	同　上	同　上
7	Routed (2)	配達先の家で、Mrs. Groveという不思議な女性に出会う。Mrs. Groveによれば、この世の中の出来事は、すべて原因と結果の糸で結ばれているという。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Routed (3)	ClarkはMrs. Groveから「糸」に注意するように忠告を受けるが、相変わらずSpivakに対して嫌がらせを続ける。彼の新聞から漫画のページを破ってしまうのである。	霜崎　實 Sarah Teasley	霜崎　實 Sarah Teasley
9	Routed (4)	新聞破りの様子を写真にとったSpivakはClarkの上司に連絡、その結果Clarkは再び解雇されるが、新しい仕事を見つけようともせず、家で玩具の鉄道遊びに興ずる。	同　上	同　上
10	Routed (5)	第10回は、これまで断片的に見てきた“Routed”を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上
11	Last Breeze of Summer (1)	第11回から第15回に渡って、Marilyn Kay Webber作の“Last Breeze of Summer”を取り上げる。黒人少女Lizzyを主人公として、人種差別の残る1950年代のテキサス州を舞台に繰り広げられる物語である。差別撤廃政策によって、白人の学校へ転入する候補生に決まったLizzyは有頂天になるが、母親の心境は複雑である。	同　上	同　上
12	Last Breeze of Summer (2)	父親のWillは、LizzyとSamuelをピクニックに連れ出すが、そこで白人警官から屈辱的な扱いを受ける。Lizzyの転入を認める父親と認めようとしない母親の間で激しい口論が起きる。	同　上	同　上
13	Last Breeze of Summer (3)	Lizzyは住みなれた自分の町を出て、バスで初めて白人の学校へ登校する。差別撤廃政策に反対する群集に出迎えられたLizzyは何とか授業に出るが、そこでも屈辱を味わう。	同　上	同　上
14	Last Breeze of Summer (4)	学校でショックを受けたLizzyは、登校への意欲を失いかける。しかし、父親の話を聞き、また弟Samuelの小さな成功をきっかけに立ち直り、翌日、登校していく。	同　上	同　上
15	Last Breeze of Summer (5)	第10回は、これまで断片的に見てきた“Last Breeze of Summer”を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上

＝英語IV（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山内　久明（放送大学教授）〕
〔主任講師：グレアム・ロー（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

英語圏文化の原型としてのイギリスも、ボーダーレス化したといわれる現代においては、相対的個別の一つに過ぎないかもしれないが、イギリスの文化と社会のなかに普遍的価値を見つけ出すことを目指し、同時に日本との比較も視野におさめた英語学習。15章（回）からなる印刷教材、放送教材は、教育、コミュニティ、仕事の三分野に大別。各章はそれぞれのテーマを紹介する短いテクスト、現地取材のインタヴュー、さまざまの語学的演習、テーマに沿った短い文学テクストなどから成り立つ。特に読解と聞き取りに力点がおかれる。題して'Voices from Britain'。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	First School	On the early years of compulsory education at primary school from age five to eight, focusing on the child-centred education movement.	山内　久明（放送大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）	山内　久明（放送大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）
2	Sixth Form	On the final years of secondary education from age sixteen to eighteen, focusing on the issues of early specialisation and freedom of choice.	同　上	同　上
3	Ancient University	On the historical development and modern functions of Oxford and Cambridge Universities, focusing on the collegiate system.	同　上	同　上
4	New University	On the foundation and function of newer universities founded since the nineteenth century, with a particular focus on the post-war campus university.	同　上	同　上
5	Open University	On the creation and development of Britain's own "University of the Air", focusing on its contribution to the expansion of adult and continuing education.	同　上	同　上
6	House	On the development and structure of residential housing, focusing both on both socio-economic and cultural aspects.	同　上	同　上
7	Garden	On the physical and psychological functions of the modern domestic garden, emphasising its continuities with the formal public garden.	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	In the Country	On the economic and cultural function of the countryside in the past and today, focusing on its interdependence with the growing urbanised areas.	山内　久明 グレアム・ロー	山内　久明 グレアム・ロー
9	In the City	On the process of urbanisation, focusing on the presence of the past in the modern city, traditions of town planning, and the decay and renewal of the inner city.	同　上	同　上
10	In the Metropolis	On life in London in the past and today, focusing on the same three themes as in Unit 9 above.	同　上	同　上
11	Working from Home	On the increase in self-employment and the role of the home as a place of work, focusing on the situation of writers and artists.	同　上	同　上
12	Teacher	On the role of teacher in education and scholarship, focusing on career structure and socioeconomic status.	同　上	同　上
13	Doctor	On the role of the physician within the National Health Service, focusing on the General practictioner and the Local Health Centre.	同　上	同　上
14	Architect	On the role of the architect and town planner in the past and today, focusing on the relations between public and private initiatives.	同　上	同　上
15	British Voices on Japan	On interest in and studies on Japanese culture and society in Britain today, focusing on the views of several eminent British Japanologists.	同　上	同　上

＝英語Ｖ（'０１）＝（Ｒ）

〔主任講師：佐藤　良明（東京大学教授）〕
〔主任講師：河合　祥一郎（東京大学助教授）〕

全体のねらい

演劇・うた・物語にエッセイ、解説文を交えた多様な英語表現を扱いながら、表面的な文意を超えて、作者、演じ手、歌い手の「こころ」を読み聞く力を鍛えしようというコースです。テクストは主に古典として現代に生きるものを選びました。放送というメディアを生かしてナマの音を活用します。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物語　(1)	ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』	河合祥一郎（東京大学助教授）	河合祥一郎（東京大学助教授）
2	物語　(2)	ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』	同上	同上
3	ポピュラーソング(1)	夢幻の国のジョン・レノン	佐藤　良明（東京大学教授）	佐藤　良明（東京大学教授）
4	ポピュラーソング(2)	ビートルズと60年代少女	同上	同上
5	演劇　(1)	ジョージ・バーナード・ショー『ピグマリオン』	河合祥一郎	河合祥一郎
6	演劇　(2)	映画音楽『マイ・フェア・レイディ』	同上	同上
7	ポップ・カルチャー　(1)	プレスリーと現代社会	佐藤　良明	佐藤　良明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ポップ・カルチャー (2)	コカコーラと現代社会	佐藤　良明	佐藤　良明
9	ポップ・カルチャー (3)	マクドナルドと現代社会	同　上	同　上
10	演　劇 (3)	シェイクスピア『ハムレット』(1)	河合祥一郎	河合祥一郎
11	演　劇 (4)	シェイクスピア『ハムレット』(2)	同　上	同　上
12	演　劇 (5)	シェイクスピア『ハムレット』(3)	同　上	同　上
13	ポピュラーソング (3)	スティーヴン・フォスターの歌	佐藤　良明	佐藤　良明
14	ポピュラーソング (4)	カントリー音楽のさびしさ	同　上	同　上
15	ポピュラーソング (5)	サンプリング・ミュージック	同　上	同　上

＝ 英 語 VI（’９９）＝（R）

〔主任講師：池上 嘉彦（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

私たちの日常生活の中で大きな役割を果たしている意味のやりとり — これを捉え理解するために、どのような概念や方法が用いられるのか、英語を中心に、そして日本語の場合との対照をも含めつつ、具体的な例に多く言及しながら考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常の言語生活の中でのことばの意味	日常の言語生活の中で、私たちは意味に関わる多種多様の経験をしている。どのような出来事にどのような意味の問題が関わっているのか、導入として、以後の授業で取りあげる問題の多様性を確認する。	池上 嘉彦（昭和女子大学教授）	池上 嘉彦（昭和女子大学教授）
2	ことばの意味	ことばの〈意味〉ということで、私たちはどのようなことを諒解しているのであろうか。私たちはことばで、あるものを〈指す〉とか、あることを〈表わす〉とか言う。このような場合、〈意味〉はどう関わっているのか。〈意味〉の意味を考えてみる。	同上	同上
3	ことばの意味と辞書 (1)	私たちはことばの〈意味〉を調べるために辞書を見る。しかし、辞書に記載の〈意味〉が不十分という経験をよくする。辞書に記されている〈意味〉とは何なのか、またそれとどうつき合えばよいのか — この点を改めて考え直してみる。	同上	同上
4	ことばの意味と辞書 (2)	同上	同上	同上
5	語彙の中の意味関係 (1)	語の〈意味〉には似ているもの、似ていないもの、関係あるもの、関係ないもの、さまざまな場合がある。語と語の〈意味〉の間にはどのような型の関係が想定できるのであろうか。	同上	同上
6	語彙の中の意味関係 (2)	同上	同上	同上
7	文法と意味 (1)	文法は一応身につけたはずなのに何かが旨く行かない — こういう経験をするのは、適切な言語運用は文法だけで決まるものではないからである。文法からもれるきめの細かい意味の問題、そして文法それ自体に深く浸透している意味の問題 — 文法と意味のインターフェイスを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文法と意味（2）	前頁のつづき	池上　嘉彦	池上　嘉彦
9	意味とコンテクスト　(1)	現実の言語運用は、具体的な場面で具体的な思惑を持つ話し手、聞き手の間で行われる。そこではそれらの要因との関係で、ことばの意味はさまざまに変容され、駆け引きの対象にすらなる。そのようなレベルでの意味の問題を考える枠組を取りあげる。	同　上	同　上
10	意味とコンテクスト　(2)	同　上	同　上	同　上
11	意味の変化(1)	ことばが時と共に変化するということは古い資料を見ればすぐ分かるし、現代でも進行中の変化を経験することがある。ことばの意味も例外ではない。一見ばらばらに見える変化にも、実はかなりの決まった方向性が認められるものである。	同　上	同　上
12	意味の変化(2)	同　上	同　上	同　上
13	意味の普遍性と相対性　(1)	違った言語で語の意味を較べてみると、似ているもの、似ていないもの、そして一見似ていながら微妙にずれているものがある。対応の仕方は出鱈目のようであるが、実はここでも意外と共通の制約の働いていることが知られている。	同　上	同　上
14	意味の普遍性と相対性　(2)	同　上	同　上	同　上
15	意味と文学	自明のことなのだが、文学が〈言語〉の芸術であるということは忘れられがちである。同じようにことばを素材としていても、何があるものを〈文学〉にし、あるものをさせないのであろうか。ことばを通しての芸術的創造性ということを考えてみる。	同　上	同　上

＝ ドイツ語I（'０２）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 新 田　春 夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の基礎を学びます。水は容器の形によってさまざまな姿をとるのと同じように、同じ事柄を表現するにも言語や文化によって表現形式が異なります。ドイツ語の形式、すなわち、文法を学ぶことはドイツの社会や文化を理解する有効な鍵です。また、放送の中のスケッチでは日常的な場面における実際的な表現の運用を学びます。さらに、発音練習のためにドイツリートを聴き、また、スケッチの内容と関連するドイツ、オーストリア、スイスの都市やお祭りなどの映像も紹介します。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発音と文字（1）	ドイツ語のアルファベットから始めて、発音と文字によるその表記を学びます。ここでは母音を中心に練習します。ドイツ語の発音や文字による表記は英語より簡単です。日常よく見られる略語の読み方も練習します。また、耳を慣らすためドイツリートを聴きます。今回はシューマンの「君は花のよう」です。	新田　春夫（武蔵大学教授） S. グレーブ・ケネカー（東京大学外国人教師）	新田　春夫（武蔵大学教授） ゲスト：ミヒャエル フェルト（立教大学教授）
2	発音と文字（2）	子音の発音を中心に学びます。言語を習得する上で正しい発音は最も大切です。繰り返し練習して美しいドイツ語を身につけましょう。また、ドイツリートを聴きます。今回はシューベルトのセレナーデです。発音の練習に役立ててください。	同　上	同　上
3	動詞の現在人称変化（1）	ドイツ語では主語（人称）によって動詞の語尾が変化します。ここでは基本的な動詞の現在時称における変化を学び、簡単な文を作る練習をします。人称変化はさまざまなレベルの変化に共通した現象ですから、しっかり理解しておきましょう。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの旧市街をご紹介します。	同　上	同　上
4	名詞の性と格変化	ドイツ語の名詞には性、数、格の区別があります。中でも重要なのは格の区別です。格は主語や目的語といった、名詞が文の中で果たす役割を示しています。これは主に冠詞によって表されます。ここでは疑問文を作る練習もします。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの街中のアルスター湖などをお見せします。	同　上	同　上
5	不規則動詞 sein, haben	大部分の動詞は規則的な変化をします。しかし、重要な動詞ほどよく使われるために特別な形があったり、語形が縮約されたりして不規則な変化をします。ここではsein「…である」、haben「持っている」を使った重要な表現の練習をします。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの港の映像をお見せします。	同　上	同　上
6	名詞の複数形	名詞の複数形の作り方を学びます。ドイツ語では複数形の作り方には5種類あり、どの語がどのような複数形になるのか個別的に覚えなくてはなりません。また、数詞の勉強をし、値段、時刻の表現練習をします。さらに、ドイツリートも聴きます。今回はモーツァルトの「すみれ」です。	同　上	同　上
7	動詞の現在人称変化（2）	一部の動詞は現在人称変化で語尾だけでなく、語幹の母音が変化するものがあります。これらの動詞は日常的によく使われる重要な動詞です。ここではこれらの動詞を使った基本的な表現を練習します。また、前回のインタビューに関連して、今回はウィーンの街をご紹介します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	前置詞	前置詞は名詞、代名詞などに付いて他の語との空間、時間、理由などの関係を表します。日本語の格助詞と似た点があります。しかし、前置詞の使い分けは慣用的な部分が多いのです。ここでは基本的な前置詞を使った表現の練習します。また、今回はスケッチに出てくる聖マルティンの提灯行列の様子をご紹介します。	新田　春夫 S. グレーブ・ケネカー	新田　春夫 ゲスト：ミヒャエル・フェルト
9	否定冠詞、所有冠詞	否定を表すkeinや所有を表すmein「私の」，dein「君の」などの語は名詞の前に置かれ、不定冠詞einと同じ語尾変化をして名詞の格を示す役割を担っています。ここではこれらの不定冠詞類の語を使った表現の練習をします。今回はスケッチに出てくる、ズュルト島などのリゾート島がいろいろある北海の映像をお見せします。	同　上	同　上
10	人称代名詞	「私」、「君」、「それ」などを表す人称代名詞も名詞の仲間です。ですから、性、数、格の区別があります。しかし、これらは語尾変化ではなく、語形そのものが変化します。ここでは人称代名詞と疑問詞を使って人にものを尋ねる表現を練習します。また、今回はスケッチに関連して、ドイツのケーキやケーキ屋さんをご紹介します。	同　上	同　上
11	命令・要求表現	親しい相手への要求は命令形を使います。しかし、親しくない相手には接続法Iによる別の形を使わなくてはなりません。ここではそのような命令表現や要求表現を作り方を学び、具体例によって練習します。また、今回はスケッチでも言及されているリューベックの街をご紹介します。	同　上	同　上
12	語順	ドイツ語の語順は英語に似ている部分と日本語に似ている部分とがあります。ここではドイツ語の語順はどのように考えたらいいのかを検討し、ドイツ語の語順の特徴を明らかにします。また、それを踏まえてドイツ語の文を作る練習をします。また、今回はスケッチに出てくるカーニヴァルの様子をご紹介します。	同　上	同　上
13	分離動詞	言語の習得には文法や単語を覚えるだけではなく、熟語を使いこなすことが重要です。ドイツ語ではとくに副詞＋動詞の形をした熟語はひとつの動詞のようにみなされて分離動詞と呼ばれています。ここではそれらを使った表現の練習をします。また、ドイツリートも聴きます。今回はシューベルトの「鱒」です。	同　上	同　上
14	形容詞：付加語的用法	ドイツ語の形容詞は名詞の前に置かれたときに語尾変化をします。それは冠詞と同様に名詞の性、数、格の表示をする役割を担っています。この語尾変化は少々厄介ですが、形容詞の名詞化などとともにドイツ語の表現の可能性を広げることができます。また、今回は、前回のインタビューに関連して、スイスのルツェルンの街をご紹介します。	同　上	同　上
15	話法の助動詞	話法の助動詞は、本動詞が表す出来事や行為に関して、能力、意志、義務、また、許可、禁止、などを表すだけでなく、伝聞、推量、命令などといった話者の判断や相手へのは働きかけも表します。ここでは話法の助動詞を使ったそのような表現を学びます。また、スケッチに関連して、最近のベルリンの映像をご紹介します。	同　上	同　上

＝ ドイツ語II（'０２）＝（R）

〔主任講師：新田　春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Iに引き続き、ドイツ語の基礎を固めます。また、ケネカーさん書下ろしのテクストは、長崎、徳島、神戸、長野、東京、仙台、札幌など、日本におけるドイツゆかりの地を尋ね、例えば、日本における第九交響曲初演の経緯、キリスト教の伝道、ナウマン象の発見といった、日独文化交流の歴史をふりかえります。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動詞の３基本形	不定詞、過去、過去分詞を動詞の３基本形と言います。不定詞は現在人称変化の原形であり、過去は過去人称変化の原形ですし、過去分詞は助動詞と共に完了時称の文や受身文を作るからです。ここでは3基本形の作り方を学びます。	新田　春夫（武蔵大学教授） S. グレーブ・ケネカー（東京大学外国人教師）	新田　春夫（武蔵大学教授） ゲスト：ミヒャエル　フェルト（立教大学教授）
2	時称（1）：過去	過去時称は、物語などにおけるように、一連の出来事を描写するのに使われます。ここでは過去基本形からの過去人称変化を学び、報告文などを作る練習をします。また、物や事柄が主語になるような、日本語とは発想の異なった表現について考察します。	同　上	同　上
3	時称（2）：現在完了、過去完了	現在完了時称や過去完了時称は現在や過去の時点から見てある出来事や行為がすでに完了していることを表します。特に現在完了は日常の会話の中で過去の出来事を言うのによく使われます。ここではそのような完了表現を練習します。	同　上	同　上
4	動詞の格支配	動詞がとる目的語が何格になるかは論理ではなく、言語習慣的に決まっています。目的語の格は動詞ごとに違います。ここでは個々の動詞がどのような目的語の取り方をするかを学び、重要な動詞を使った表現の練習をします。	同　上	同　上
5	現在分詞、過去分詞	現在分詞や過去分詞は形容詞のように使われますが、動詞としての性質も残していて、目的語や副詞などもとることができます。目的語や副詞などを伴った分詞は長い修飾句を作ることができます。ここではそのような分詞の使い方を学びます。	同　上	同　上
6	形容詞：比較変化	ドイツ語の形容詞・副詞は、英語などと同じように、比較変化をします。ここでは比較級、最上級などの語形変化の練習をし、また、さまざまな比較表現を学びます。	同　上	同　上
7	再帰表現	他動詞の目的語が主語と同じ人称の代名詞である文を再帰表現と言います。日本語には再帰表現はありませんので、つい再帰代名詞を忘れてしまいがちですが、どうして再帰代名詞が必要なのかを考え、さまざまな再帰表現を練習します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	推量表現	普通の文は話者の断定的な主張を表しますが、話法の助動詞やwerdenと使った文は話者の推量を表すことができます。ここではそれらの助動詞を使って話者のさまざまな確信度を表す表現を練習します。	新田　春夫 S. グレーブ・ケネカー	新田　春夫 ゲスト：ミヒャエルフェルト
9	構文	manを使った表現やhaben+zu不定詞、sein+zu不定詞、非人称表現など、いくつかのよく使われる構文があります。これらはしばしば日本語と発想のパターンが異なるという点で熟語と並んで重要なものです。ここではそのような基本的な構文を練習します。	同上	同上
10	受動文	動詞の表す行為を受け手の側から表現するのが受身文です。ここでは受身文の作り方を学び、受身文を作る練習をします。また、能動文との使い分けについても考えて見ましょう。	同上	同上
11	接続詞（1）	wenn, weil, damitなどの接続詞は一つの文をもう一つの別の文に埋め込んで複合的な文を作る働きをします。これらに導かれた文はもう一つの別の文における時、理由、目的などを表しています。ここではそのような複合的な文を作る練習をします。	同上	同上
12	接続詞（2）	dassという接続詞はそれに導かれた文に名詞のステータスを与え、もう一つの別の文における主語や目的語とする働きをします。ここでは接続詞dassを使った複合文を作る練習をします。また、疑問文を埋め込んだ複合文も学びます。	同上	同上
13	関係文	先行する文の中の名詞（先行詞）を受けた語（関係代名詞）によって新しく始められた文を関係文といいます。関係文は「そしてそれは…だが」という意味の挿入句と考えることができます。ここでは関係代名詞について学び、関係文を作る練習をします。	同上	同上
14	接続法（1）	接続法は、話者が事柄の事実性に関して中立であったり、非事実として捉えているときの形です。接続法にはIとIIの２つの形態がありますが、ここでは接続法Iの形態を学び、それを使った要求表現と間接引用を練習します。	同上	同上
15	接続法（2）	接続法IIは非現実の事態を仮定するときに使われます。また、これの派生的用法として丁寧な要請や控えめな主張などの表現に使われます。ここでは日常的によく使われる非現実の願望文や丁寧な表現の練習をします。	同上	同上

＝ ドイツ語III（'02）＝（R）

〔主任講師：幸田　薫（東京大学教授）〕

全体のねらい
初級文法を学び終えた直後の学習者にも無理のないように、重要な文法事項を復習しながら、やさしい文章からやや難しい文章へと読み進めて行く。童話、民族、環境、欧州統合のテーマを扱うことで、ドイツ語圏の民族と文化の理解も深めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	童話の世界 (1)	Brüder Grimm: Frau Holle(前半) 文法: 動詞の判別 (1) 本動詞のみの構文	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）
2	童話の世界 (2)	Brüder Grimm: Frau Holle(後半) 文法: 動詞の判別 (2) 助動詞＋本動詞の構文	同　上	同　上
3	童話の世界 (3)	Eugen Drewermann: tiefenpsychologische Interpretation 文法: ドイツ語の文型 (1)	同　上	同　上
4	ドイツ語圏の国々 (1)	Wilhelm Tell 文法: ドイツ語の文型 (2)	同　上	同　上
5	ドイツ語圏の国々 (2)	Geschichte der Schweiz 文法: 単語の整理: 派生と複合	同　上	同　上
6	ドイツ語圏の国々 (3)	Arthur Schnitzler: Die grüne Krawatte 文法: 副文 (1)、接続法II	同　上	同　上
7	ドイツ語圏の国々 (4)	Peter Giacomuzzi: Der Traum der großen Kleinheit 文法: 副文 (2)	幸田 薫 Peter Giacomuzzi（東京大学外国人教師）	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ドイツの環境保護(1)	ImmermannとRaabeの環境意識 文法: 形容詞と分詞	幸田　薫 Gabriele Stumpp	幸田　薫 Gabriele Stumpp
9	ドイツの環境保護(1)	Interview mit Prof. Wolfgang Krohn(前半) 文法: zu不定詞句	幸田　薫	幸田　薫 Prof. Dr. Wolfgang Krohn (Universität Bielefeld)
10	ドイツの環境保護(2)	Interview mit Prof. Wolfgang Krohn(後半) 文法: 受動態	同　上	同　上
11	ドイツの環境保護(3)	Gabrielle Stumpp: Das Umweltbewusstsein der Deutschen 文法: 副詞句と語順(1)	幸田　薫 Gabriele Stumpp	幸田　薫 Gabriele Stumpp
12	ヨーロッパ(1)	GoetheとNietzscheのヨーロッパ 文法: 副詞句と語順(2)	同　上	同　上
13	ヨーロッパ(2)	Der Spiegelの記事から(後半) 文法: テクストの構造(1)	同　上	同　上
14	ヨーロッパ(3)	Der Spiegelの記事から(後半) 文法: テクストの構造(2)	同　上	同　上
15	ヨーロッパ(4)	ドイツ語圏3カ国からヨーロッパを見る 文法: 総まとめ	同　上	幸田　薫 Peter Giacomuzzi Gabriele Stumpp 他

＝ フランス語I （'０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鈴木　啓二（東京大学教授）〕
〔主任講師：増田　一夫（東京大学教授）〕

全体のねらい
毎回短いスキットを見ながら、そこで用いられている表現を中心にフランス語の基礎を身につける。文法はフランス語I、フランス語II全体で完結させる。反復練習などを通じて、実際に応用可能な実践的なフランス語能力の習得を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Une rencontre ある出会い	アルファベ、名詞の性と数、不定冠詞、定冠詞	増田　一夫（東京大学教授）	増田　一夫（東京大学教授）
2	Un rendez-vous デート	主語人称代名詞、動詞être、疑問文、	同　上	同　上
3	Trou de mémoire 記憶ちがい	動詞avoir、否定文、部分冠詞、縮約形	同　上	同　上
4	Des goûts et des couleurs 好みの問題	第1群(-er)動詞、形容詞	同　上	同　上
5	Une invitation généreuse 気前のよい招待	第2群(-ir)動詞、動詞aller, venir、近接過去、近接未来	同　上	同　上
6	La résidence d'été 夏の別荘	不規則動詞partir, sortir, voir, descendreなど、非人称動詞il faut、quelを使った感嘆文	同　上	同　上
7	Peine perdue 骨折り損	動詞faire, savoir, connaître, devoir, mettre、ni...ni	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Réservation 予約	疑問副詞 où, quand, pourquoi, comment, combien	鈴木 啓二（東京大学教授）	鈴木 啓二（東京大学教授）
9	Notre écrivain préféré お気に入りの作家	指示形容詞 ce, cette, ces 所有形容詞 mon, ma, mes 等	同 上	同 上
10	Loto ロト	疑問代名詞 qui, qui est-ce qui, qu'est-ce qui, qu'est-ce que, 等	同 上	同 上
11	Quel jour sommes-nous aujourd'hui? 今日の曜日は？	疑問形容詞 quel 非人称のil 時刻の表現	同 上	同 上
12	La place Furstenberg フュルスタンベール広場	関係代名詞 qui, que, où	同 上	同 上
13	Ce qui n'est pas le plus facile à faire 最も簡単ではない事柄	形容詞・副詞の比較級・最上級	同 上	同 上
14	Le photographe 写真家	動詞の肯定命令形・否定命令形	同 上	同 上
15	Souvenir d'un été ある夏の思い出	複合過去形(肯定・否定形)	同 上	同 上

＝ フランス語II（'０２）＝（R）

〔主任講師：鈴木　啓二（東京大学教授）〕
〔主任講師：増田　一夫（東京大学教授）〕

全体のねらい
フランス語Iにひきつづき、フランス語の基礎を学ぶ。文法はフランス語I、フランス語II全体で完結させる。抽象的な文法理解を越えて、実践的なフランス語運用能力の習得を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Le football サッカー	動詞の受動態	鈴木　啓二（東京大学教授）	鈴木　啓二（東京大学教授）
2	L'hitoire d'un Belge あるベルギー人の物語	現在分詞とジェロンディフ	同　上	同　上
3	Ceci et cela これもあれも	指示代名詞 (ceci, cela, ça, ce) 疑問代名詞(lequel, laquelle, lesquels、etc)	同　上	同　上
4	Quiz 21 クイズ21	dont, 前置詞＋関係代名詞(lequel, laquelle,　lesquels, lesuqelles)	同　上	同　上
5	Vernissage ヴェルニサージュ	代名詞(me,te, le, la les, etc)	同　上	同　上
6	L'aéroport 空港にて	命令法と代名詞	同　上	同　上
7	Un petit détail 些細なディテール	代名動詞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Embouteillage 渋滞	動詞の直説法半過去・大過去	増田　一夫 （東京大学教授）	増田　一夫 （東京大学教授）
9	Que de souvenirs!たくさんのお土産	動詞の直説法単純未来、前未来	同　上	同　上
10	Mission inaccomplie 任務未完了	代名詞 le, en, y、所有代名詞	同　上	同　上
11	Un choix difficile むずかしい選択	Faireを使った使役の表現、laisserを使った放任の表現、知覚動詞voir, entendreを使った表現	同　上	同　上
12	Un dimanche de pluie 雨の日曜日	動詞の条件法現在、条件法過去	同　上	同　上
13	Cherche remplaçant 求む、代役	動詞の接続法現在、接続法過去	同　上	同　上
14	La malade imaginaire 病は気から	直接話法・間接話法、副詞節における接続法	同　上	同　上
15	Apprenti roller ローラー族入門	直接話法・間接話法、時制の一致	同　上	同　上

＝ フランス語III（'０２）＝（R）

〔主任講師：三浦　信孝（中央大学教授）〕

全体のねらい

中級から上級への橋渡しになるような総合的フランス語力の養成をめざす。素材としては、世界各地のフランス語作家の作品抜粋16篇を選び、詳しく読む。フランス語はフランス人の植民活動や植民地支配を通してヨーロッパ外に広まった結果、今日では文化的にきわめて多様な人々が表現伝達手段として使用する国際語であることを理解する。

ネイティヴスピーカーの分担協力者は、レユニオンやアフリカで育った経験をもつすぐれた研究者であり、受験生のヒアリング能力向上をねらい、テキストの朗読だけでなく、フランス語で作品を解説してもらう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヨーロッパのフランス語文学（1）	アゴタ・クリストフ『悪童日記』『昨日』	三浦　信孝（中央大学教授） ミカエル・フェリエ（中央大学教授）	三浦　信孝（中央大学教授） ミカエル・フェリエ（中央大学教授）
2	ヨーロッパのフランス語文学（2）	ミラン・クンデラ『裏切られた遺書』	同　上	同　上
3	カリブ海のフランス語文学（1）	エメ・セゼール『帰郷ノート』	同　上	同　上
4	カリブ海のフランス語文学（2）	ラファエル・コンフイアン『コーヒーの水』	同　上	同　上
5	カリブ海のフランス語文学（3）	マリーズ・コンデ『生命の樹』	同　上	同　上
6	カナダのフランス語文学（1）	アントニーヌ・メイエ『荷車引きのペラシー』	同　上	同　上
7	カナダのフランス語文学（2）	ケベックの詩人歌手たち	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カナダのフランス語文学（3）	エミール・オリヴイエ『千の水』	三浦信孝 ミカエル・フエリエ	三浦信孝 ミカエル・フエリエ
9	アラブ世界のフランス語文学（1）	カテブ・ヤシーヌ『ネジュマ』	同上	同上
10	アラブ世界のフランス語文学（2）	アルベール・メンミ『地の塩』	同上	同上
11	アラブ世界のフランス語文学（3）	タハール・ベンジェルーン『狂人モハ、賢人モハ』	同上	同上
12	アラブ世界のフランス語文学（4）	アミン・マルーフ『アラブ人がみた十字軍』	同上	同上
13	アフリカのフランス語文学（1）	レオポール・セダール・サンゴール	同上	同上
14	アフリカのフランス語文学（2）	チカヤ・ウタムシ	同上	同上
15	アフリカのフランス語文学（3）	アマドウ・クルマ	同上	同上

＝中国語Ⅰ（'０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

やさしい文のスキットを読みながら、発音と文法の基礎を学習する。文法項目は主語述語の結びつきから始めて接続関係まで、全体の中から偏りのないように主要な構文を抜き出して配列し、まずそれになれることを目標に学習を進める。１５回で完結して初歩的に文法の大枠が把握できるようにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	玉仏寺の前で(1)	四つの声調 単韻母　a，e 複韻母　ai，ei，ao，ou 声母　d，t，n，l	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	玉仏寺の前で(2)	複韻母　an，en，ang，eng 声母　zh，ch，sh，r 第三声の連続 主語と述語　――　Ｓ－Ｐ 形容詞述語	同　上	同　上
3	玉仏寺の前で(3)	声母　g，k，h　　声母　z，c，s 声母　b，p，m，f　と単韻母　o 動詞と目的語　――　Ｖ－Ｏ 動詞と補語，断定　――　Ｖ－Ｃ，断定動詞 修飾語　――　Ａ－Ｈ，連体，連用，副詞	同　上	同　上
4	玉仏寺の前で(4)	軽声 声母　j，q，x　　韻母　er 特殊疑問　――　疑問詞 選択疑問（１）　――　肯定否定並列 主述述語　――　Ｐ（Ｓ－Ｐ）	同　上	同　上
5	玉仏寺の前で(5)	単韻母 i，ｉ で始まる複韻母 単韻母 u，ｕ で始まる複韻母 単韻母 ，　で始まる複韻母 状況の相(1) ―― 付加，完了をいう文末助詞 状況の相(2) ―― 持続をいう文末助詞	同　上	同　上
6	レストランを開業(1)	個別の語の声調変化 当否疑問 ―― 語気助詞 推量 ―― 語気助詞 意志，勧誘 ―― 語気助詞	同　上	同　上
7	レストランを開業(2)	限定修飾語（１）　――　限定の助詞 限定修飾語（２）　――　名詞句自立 限定詞助数詞構造（１）　――　Ｄ－Ｍ 限定詞助数詞構造（２）　――　名詞句自立	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	レストランを開業 (3)	数詞 ——— 基数詞と位数詞 基数と序数 疑問数詞	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	レストランを開業 (4)	完了相 ——— 未然 ——— 未然をいう副詞 持続相 経験相	同　上	同　上
10	レストランを開業 (5)	選択疑問（2） ——— 已然未然並列 動作量補語（1） ——— 回数 動作量補語（2） ——— 継続時間	同　上	同　上
11	桂林へ行く (1)	所在・移動動詞と場所目的語 授与動詞と二重目的語 認定動詞と動詞句補語	同　上	同　上
12	桂林へ行く (2)	存在の表現 ——— 存在動詞 現象の描写と個体の叙述 方位詞	同　上	同　上
13	桂林へ行く (3)	前置詞句連用（1） ——— 所在，目的点など 前置詞句連用（2） ——— 共同の相手，授与の相手 前置詞句連用（3） ——— 動作授与の相手	同　上	同　上
14	桂林へ行く (4)	動詞句連用（1） ——— 結果の評価 動詞句連用（2） ——— 結果の事態 動作結果複合（1） ——— ＶＲ複合動詞 動作結果複合（2） ——— 方位移動のＲ	同　上	同　上
15	桂林へ行く (5)	接続（1） ——— 副詞で 接続（2） ——— 接続詞で 選択疑問（3） ——— 対称並列	同　上	同　上

＝中国語II（'０１）＝（R）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ｉで学んだ主要な構文を復習しつつそれぞれをやや複雑な構文に進んで学習するが、個々の項目を切り離された形で扱うのではなく、より大きな枠組みのなかでの位置を確かめながら理解を深めるようにしたい。中国語Ⅱで基礎の文法学習を終える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	大学生の就職活動(1)	文，主語と述語 ――― 提示と説明，S－P 構造の重なり ――― S－P，V－O，A－H 動詞の目的語と補語 ――― 陳述の違い	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	大学生の就職活動(2)	感情の表出 ――― 語気助詞　a 語気助詞　a　の連声 文の三層構造	同　上	同　上
3	大学生の就職活動(3)	動詞の完了相の使われ方 動作の相と状況経過の相	同　上	同　上
4	大学生の就職活動(4)	末尾桁助数詞省略，端数 集合 事態の断定	同　上	同　上
5	大学生の就職活動(5)	動作量補語（３） ――― 試行 動詞の重ね型 動作量補語（４） ――― 性質量 動作量補語と目的語	同　上	同　上
6	青春を語る(1)	思考動詞と文補語 認識動詞と文目的語 文補語と文目的語	同　上	同　上
7	青春を語る(2)	目的補語を伴う動詞（１） ――― 使役動詞 目的補語を伴う動詞（２） ――― 命名動詞 目的補語を伴う動詞（３） ――― 存在をいう動詞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	青春を語る(3)	動詞句連用（3） ——— 連用修飾 動詞句連用（4） ——— 方式と目的 後置句が補語となる場合	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	青春を語る(4)	前置詞句連用（5） ——— 比較 性質と状態 形容詞の重ね型 描写語を括る助詞	同　上	同　上
10	青春を語る(5)	前置詞句連用（6） ——— 処置 主題としての動作対象など 前置詞句連用（7） ——— 使役 前置詞句連用（8） ——— 受身	同　上	同　上
11	村長選挙(1)	包括（1） ——— 前置詞で 包括（2） ——— 最小で 包括（3） ——— 不定称で r化	同　上	同　上
12	村長選挙(2)	動作結果複合（3） ——— R成分の派生義 動作結果複合（4） ——— 付着 動作結果複合（5） ——— 反転 動作結果複合（6） ——— 結果への到達可能	同　上	同　上
13	村長選挙(3)	動作結果複合（7） ——— 起動過程 動作結果複合（8） ——— 継続過程 動作結果複合（9） ——— 過程完了 動作結果複合（10） ——— AR複合	同　上	同　上
14	村長選挙(4)	動作結果複合（11） ——— 到達 動作結果複合（12） ——— 停止，固定保持 動作結果複合（13） ——— 所在，落着点 動作結果複合（14） ——— 的中	同　上	同　上
15	村長選挙(5)	名詞句述語 過度をいう助詞 気がかりをいう助詞 承前疑問	同　上	同　上

＝中国語III（'００）＝（R）

〔主任講師：代田 智明（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代中国作家の手になる散文･エッセイを、少し丹念に読解することで、基礎的な文法、語法をもう一度確認しながら、中国語の読みを中心に能力をアップさせたい。合わせて内容の面からは、諷刺やユーモアある文章、文化比較を扱った文章を読むことで、中国の人々の笑いや思考について、少しでも理解を深めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	手紙の文字の書き方についての文章	基本的な文章の読み取り能力を身につける。文字のぞんざいな書き方のために、とんでもない読み間違いがおきたり、返信ができないという主旨を、ユーモアをまぜて述べた文章を味わう。典拠は、王力〈談談写信〉。	代田智明（東京大学教授）	代田智明（東京大学教授）
2	同上	1の続き	同上	同上
3	女性のファッションについて	やさしい文章の論理的展開をきちんとおさえる力を試す。女性のファッションについて、個性と自分の好みが大切であることを述べた文章。典拠は、張抗抗〈女人"会"不"会"穿衣服〉。	同上	同上
4	同上	3の続き	同上	同上
5	他人とのぶつかりをめぐる中国と西洋の違い	やや論理的な文章を、きちんと読み取る力を身につけることが目的。他人とぶつかることが西洋と中国では意味がことなることを述べて、文化の違いを明らかにした文章。典拠は、王蒙〈接触与 撞〉。	同上	同上
6	同上	5の続き	同上	同上
7	ショートショートから	超短篇小説。一通の手紙を道の向かいにあるポストに投函してもらうよう恋人に託すが、彼女は交通事故に遭ってしまう。その手紙とは？	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	嫉妬をめぐるブラックユーモア	7の続き	代田 智明	代田 智明
9	イソップ物語のパロディ	諷刺的な文章を、語り手の視点を理解して、ともに笑いを共有できる力を養いたい。良く知られたイソップの寓話数編を選び、それに新しい解釈を施す。典拠は銭鍾書〈読伊索寓言〉。	同上	同上
10	同上	9の続き	同上	同上
11	身体障害者スポーツの意義について	少し硬い評論文でも読みこなす能力を身に付ける。作者は身体障害者だが、スポーツを通じて、限界に挑戦する人間の姿を確信する。その内容も味わいたい。典拠は、史鉄生〈体育 意志信心〉。	同上	同上
12	同上	11の続き	同上	同上
13	裸体をめぐる日中文化の違い	論理的な文章をきちんと読みとる力を、最後に仕上げたい。裸体をめぐる日中文化比較論。混浴がありアイドルのヌードがもてはやされる日本では肉体が自然と感じられるのに対し、中国では醜悪なものと感じている文化的ちがいを指摘する。典拠は、秦弓《中国人的徳行》。	同上	同上
14	同上	13の続き	同上	同上
15	同上	14の続き	同上	同上

＝ロシア語Ⅰ（'０１）＝（R）

〔主任講師：佐藤　純一（創価大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語の最初歩の「読み、書き、聞き、話す」４技能のバランスのとれた習得をめざす。各回の学習項目が過大にならないよう留意するとともに、重点事項はいろいろな形で反復履修できるよう工夫する。また、文法に偏らず、毎回の授業に日常会話表現の系統的な紹介と練習を含め、受講者の実際的な関心に応えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文字と発音（1）	母音字母１０、子音字母２１、記号字母２の大小活字体、それぞれの音価や機能と呼称、音節構造とアクセントの原理などについて、常用単語の綴りと発音の練習を通じて学習する。	佐藤　純一（創価大学教授）	佐藤　純一（創価大学教授）
2	文字と発音（2）	アクセントのない母音字母の発音、子音字母の発音の同化の規則と断定文のイントネーションを、重要地名・人名、常用単語、基本表現の綴りと発音の練習を通じて学ぶ。他に出会ったときの挨拶、別れの挨拶。	同　上	同　上
3	基本３文型と疑問文	１）ＸはＹだ、２）Ｘはここ・あそこだ、３）Ｘは～する、の基本３文型とそれぞれの疑問文、肯定と否定の応答をイントネーションの区別とともに学習する。他にお礼の言い方とそのお返し。	同　上	同　上
4	疑問詞のある疑問文	「誰、何、どこ」など主要疑問詞による疑問文をそのイントネーションとともに学ぶ。また、人称代名詞Я、ВЫ、ОН、ОНА、指示代名詞ЭТОの用法も含める。他に「お元気ですか」とその答え。	同　上	同　上
5	復習と応用（1）	１－４課の例文と説明の総復習。文法補遺、練習問題と応用問題（アルファベット、アクセント、イントネーションＨＫ１，２，３，４、基本３文型、指示代名詞、人称代名詞、動詞現在３人称単・複、常用副詞、主要疑問詞）。他に「おなまえは？」とその答え。	同　上	同　上
6	名詞・形容詞・代名詞	名詞の性（男・女・中）と数（単・複）の区別、形容詞・所有代名詞の性数変化、人称代名詞の体系と用法について学ぶ。他に「おはよう」その他。	同　上	同　上
7	無人称文と無人称述語	「暑い・寒い・面白い・難しい」などのよく用いる無人称表現、義務・必要・許容・禁止などの意味を表す無人称述語、それらと用いる動詞不定形について学ぶ。他に「紹介しましょう」「はじめまして」。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動詞の現在変化	動詞の現在規則変化（第１・第２）、他動詞と対格補語、名詞の格、名詞単数対格のいろいろ、男性活動体名詞の対格、注意すべき動詞と補語の用法について学ぶ。他に「ちょっとうかがいますが」。	佐藤　純一	佐藤　純一
9	位置・場所の表現	前置詞Ｂ／ＨＡと名詞の前置格、必ずＨＡを用いる名詞と地名、状態の動詞、動詞特殊変化（ЖИТЬ）、ＣЯ動詞について学ぶ。他にていねいな承諾の返事。	同　上	同　上
10	復習と応用（2）	６－９課の例文と説明の総復習。文法補遺、練習問題と応用問題（名詞の性・数・格、形容詞、代名詞、無人称文、無人称述語、動詞の現在変化諸タイプ、活動体名詞、対格と前置格、状態の動詞）。他に「すみません」「かまいません」など。	同　上	同　上
11	行く・来るの表現	限定動詞ИДТИとＥＸＡＴЬ、無限定動詞ＸＯДИТЬとＥ３ДИТЬ、行く先を表すＢ、ＨＡ＋対格、乗り物を表すＨＡ＋前置格の用法について学ぶ。他にものを頼むときのまえおき。	同　上	同　上
12	過去と未来の表現	動詞БЫТЬの過去形、主要動詞の過去形、БЫТЬの未来変化、合成未来の形と意味、動詞ＸＯＴＥТЬとＭＯＣЬ、名詞類の与格について学ぶ。他にものの名や値段のたずね方。	同　上	同　上
13	所有の表現と数量表現	所有の表現とその否定、名詞の生格、人称代名詞の生格とＨＥＧＯ／ＨＥＥ／ＨＩＸ、否定生格の用法、数量表現と生格、数詞と名詞の結合の規則について学ぶ。他に歓迎の挨拶とそのお返し。	同　上	同　上
14	命令法	動詞２人称命令法の作り方、不定人称文、動詞特殊変化（－ＡＢＡＴЬ型）完了体動詞の意味について学ぶ。他に「調子はどうですか」。	同　上	同　上
15	復習と応用（3）	１１－１４課の例文と説明の総復習。文法補遺、練習問題と応用問題（移動の動詞、動詞の過去と未来、所有の表現、否定生格、数詞と数量表現、２人称命令法、名詞類の造格、格変化のまとめ）。他に別れの挨拶。	同　上	同　上

＝ロシア語II（'01）＝（R）

〔主任講師：佐藤　純一（創価大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語Ⅰで習得した各技能の可能なかぎりの向上・拡大をはかる。まとまったテクストの総合的な学習により語彙・表現・文法項目を系統的に学び、基礎的な読解と作文の能力の養成をはかるとともに、やや複雑なシチュエーションでの会話能力の習得をめざす。ロシア語能力検定４級合格を目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	形容詞の変化	テクスト1 Сейчас нет сливочного печенья.「いまクリームクッキーはありません」 テクストの詳しい説明とともに形容詞長語尾形の格変化の全体を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（1）	佐藤　純一（創価大学教授）	佐藤　純一（創価大学教授）
2	時刻・時間の表現	テクスト2 Который теперь час？「いま何時ですか」 テクストの詳しい説明とともに時刻・時間の表現の主要事項を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（2）	同　上	同　上
3	年月日の表し方	テクスト3 Сегодня у меня день рождения.「今日は私の誕生日です」 テクストの詳しい説明とともに年月日の表し方と順序数詞の形と用法について学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（3）	同　上	同　上
4	完了体と不完了体（1）	テクスト4 Максим решал задачу.「マクシムは問題を解いていた」 テクストの詳しい説明とともに動詞の完了体と不完了体の意味と用法の区別の要点を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（4）	同　上	同　上
5	完了体と不完了体（2）	テクスト5 Без вас кто-то приходил.「お留守中に誰かに来ましたよ」 テクストの詳しい説明とともに動詞の完了体と不完了体の形態の対応や派生関係、意味・用法の違いについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（5）	同　上	同　上
6	比較級と最上級	テクスト6 Какое время года лучше？「どの季節がよりよいか」 テクストの詳しい説明とともに形容詞・副詞の比較級と最上級の形と用法について学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（6）	同　上	同　上
7	いろいろな格の用法	テクスト7 Его отец был крестьянином.「彼の父は農民だった」 テクストの詳しい説明とともに述語の造格、生格の用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（7）	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	関係代名詞 который	テクスト8 Улица, которая носит имя Льва Толстого.「レフ・トルストイの名のついている通り」 テクストの詳しい説明とともに関係代名詞который の形と基本的な用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（8）	佐藤　純一	佐藤　純一
9	いろいろな関係代名詞	テクスト9 Тот, кто написалэту книгу.「この本を書いた人」 テクストの詳しい説明とともに関係代名詞кто, что, какой、接続詞のчто, какなどについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（9）	同　上	同　上
10	いろいろな従属複文	テクスト10 Они считали, что могут соперничать с богами.「彼らは神々と競争できると思った」 テクストの詳しい説明とともに名詞的従属文の主要タイプについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（10）	同　上	同　上
11	仮定法の形と用法	テクスト11 Если бы я был на вашем месте, я не пошёл бы в плавание.「私があなたの立場にいたら、航海には出ないだろう」 テクストの詳しい説明とともに仮定法の形態と意味・用法について学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（11）	同　上	同　上
12	能動形容分詞	テクスト12 Выход из создавшегося положения.「生じた事態からの抜け道」 テクストの詳しい説明とともに能動形容分詞の現在と過去の形態と用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（12）	同　上	同　上
13	受動形容分詞と受動相	テクスト13 Разрушенный город Гернika.「破壊された町ゲルニカ」 テクストの詳しい説明とともに受動形容分詞の現在と過去の形態と用法を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（13）	同　上	同　上
14	受動相と受動の表現	テクスト14 Сахаров был задержан и доставлен в прокуратуру.「サハロフは拘束され検察局に送致された」 テクストの詳しい説明とともに受動構文およびся動詞や不定人称文による受動の意味の表現を学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（14）	同　上	同　上
15	副分詞その他	テクスト15 У русских не принято улыбаться.「ロシア人には笑顔は禁物」 テクストの詳しい説明とともに副分詞、ся動詞の意味と機能などについて学び、練習問題で実際の運用能力を身につける。会話の表現と応用（15）	同　上	同　上

＝スペイン語Ⅰ（'９９）＝（R）

〔主任講師：山口　羔正（元放送大学助教授）〕

全体のねらい

近年外国語の学習の目標・方法も、単なる「訳読」中心から広くコミュニケーション全般の語学能力を高めることに重点が置かれるようになって来ている。本授業ではスペイン語を「ネイティブの国で初心者が学ぶ立場」から、平易な話し言葉を中心に基本的な表現を文法的な知識と共に学習していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	滞在地到着時の表現	名前を言う 行き先を言う 人称代名詞主格 動詞ＳＥＲ	山口羔正（元放送大学助教授）	山口羔正（元放送大学助教授）
2	簡単な挨拶朝食にて	朝食時挨拶を交わす 何を食べるか？ 冠詞、名詞 -ＡＲ・-ＥＲ規則活用動詞	同上	同上
3	住む家や品物を描写する	家の中を見る 私の持ち物 形容詞、指示形容詞 動詞ＥＳＴＡＲ、ＨＡＹ	同上	同上
4	自己について語る	自分・相手の事を話す -ＩＲ規則動詞 不規則動詞ＴＥＮＥＲ	同上	同上
5	目的地へ行く	大学へ行く バス・地下鉄を利用する 不規則動詞ＩＲ、ＳＡＬＩＲ 語根母音変化動詞1	同上	同上
6	入学手続き	事務の係の人との話し 不規則助動詞ＶＥＮＩＲ、ＶＥＲ 語根母音変化動詞2	同上	同上
7	外国人の友達と	国・言語・家族や授業などを話題にする 不規則動詞ＨＡＣＥＲ、ＤＡＲ 人称代名詞の目的格、数1	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	買い物	デパート・お店で必要な品物を求める 不規則動詞ＰＯＮＥＲ、ＯＩＲ 指示代名詞，所有形容詞	山口羔正	山口羔正
9	食事	大学のカフェテリアで昼食を取る、レストランにて 不規則動詞ＣＯＮＯＣＥＲ、ＳＡＢＥＲ	同上	同上
10	天候・暦	天気や月・日のことを話す 主語無しの表現 数2	同上	同上
11	時間	人と会う約束、仕事のこと 時刻の表現 不規則動詞ＰＥＤＩＲ，ＤＥＣＩＲ	同上	同上
12	趣味・好きなこと	趣味や好きなスポーツについて語る 動詞ＧＵＳＴＡＲ 不規則動詞ＪＵＧＡＲ	同上	同上
13	旅行をする	休暇でセカンドハウスへ 出張でホテルに泊まる 再帰動詞・再帰代名詞	同上	同上
14	日常生活の行動	日常の生活で用いる 再帰動詞の表現	同上	同上
15	健康・病気	健康な生活 医師の診察を受ける 薬を買う ＧＵＳＴＡＲ型の動詞、再帰動詞（続き）	同上	同上

＝スペイン語II（'９８）＝（R）

〔主任講師：山口　羔正（元放送大学助教授）〕

全体のねらい

スペイン語Ｉで学習した動詞の現在形による表現を基礎として、それぞれの日常的な場に応じた語句を用いて基本表現を発展させる。文法的には、動詞の過去形と命令形を中心に学ぶが、スペイン語を習得するには動詞活用は避けて通れないので、各自練習に努められたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	出会い・別れの表現	パーティにて、いとまごいをする 会社を訪ねる 空港での出迎え・見送り、週末の別れ 再帰動詞の復習	山口　羔正（元放送大学助教授）	山口　羔正（元放送大学助教授）
2	人のことを尋ねる・話す	スペイン語の国・国民名、職業は？ どんな人か？ 現在分詞 過去分詞	同　上	同　上
3	自然・気候などを話す	展望台にて、天候の表現 田園での余暇生活 再帰動詞（続き）：受け身的用法、無人称的表現、 単人称動詞	同　上	同　上
4	比較の表現	身近な品物、家族・友人、町・地方について話す 大きな数を学ぶ	同　上	同　上
5	命令形を用いて 1	勉強・遊びの中で勧め・忠告、要求、命令等の表現を用いる tú、vosotrosへの命令	同　上	同　上
6	命令形を用いて 2	仕事・付合いの中で頼み、詫び、禁止等の表現を用いる usted, ustedesへの命令 否定命令	同　上	同　上
7	命令形を用いて 3	家の中で日常的に用いる表現 目的格人称代名詞を伴った命令 再帰動詞の命令	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	過去を話す 1	昨日行ったところ、スペイン語のパーティ 直説法完了過去： -AR規則動詞 不規則動詞1（leer/ir/ser）	山口　羔正	山口　羔正
9	過去を話す 2	先日何をしたか：同窓生の集まり、家に友人を招く 直説法完了過去： -ER/-IR動詞 不規則動詞2（estar/hacer/tener/venir）	同　上	同　上
10	過去を話す 3	子供のころの思い出、その時何をしていたか？ 直説法不完了過去	同　上	同　上
11	過去を話す 4	スペイン語の国での生活経験から：スペインで困ったこと、メキシコへ行った人 直説法完了過去：不規則形3 （poder/querer/poner/dormir） 直説法現在完了	同　上	同　上
12	過去を話す 5	対人関係を話題にする、仕事仲間のこと、友人の結婚 直説法完了過去：不規則形4 （decir/dar/pedir/saber）	同　上	同　上
13	複文による表現	今日の天気、展覧会へ行く、パソコンはむずかしい？ 文を名詞化するque／仮定・条件文のsi／時を表すcuando／理由・原因をしめすcomo、porque／譲歩のaunque等を用いた複文	同　上	同　上
14	未来の表現	勉強、仕事で／旅行に行く話しで意図、予定、推量等を表現する 直説法未来	同　上	同　上
15	関係詞による表現	買い物、訪問地での語らい、送られてきたもの 名詞を修飾する関係代名詞queの形容詞節／lo queの表現／関係副詞のdonde	同　上	同　上

＝ 韓国語Ⅰ（'０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：生越　直樹（東京大学助教授）　〕
〔主任講師：根本　理恵（東京大学非常勤講師）〕

全体のねらい

簡単な会話によって韓国の人とコミュニケーションができるようになること、掲示や簡単な説明文を読めるようになることをめざす。まず、発音・文字（ハングル）の練習を十分に行ったのち、基本的な表現を使って簡単な文章を作る練習を行っていく。あわせて、スキットなどを通して韓国の文化・習慣についても紹介していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	母音１、あいさつ１	基本的な単母音６つと半母音yを含む重母音の発音、およびそれを表す文字の練習を行う。さらに、出会ったときなどに使うあいさつを練習する。	生越　直樹（東京大学助教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）	生越　直樹（東京大学助教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）
2	子音１、あいさつ２	子音（平音、激音）の発音とそれを表す文字の練習を行う。さらに、感謝などの簡単なあいさつ表現の練習を行う。	同　上	生越　直樹
3	子音２・母音２、あいさつ３	子音（濃音）および半母音wを含む重母音の発音、それを表す文字の練習を行う。さらに、謝罪などのあいさつの練習を行う。	同　上	同　上
4	終声・連音化、あいさつ４	音節末の子音（終声）の発音、および終声に関わる連音化の練習を行う。さらに、「はい」「いいえ」などの表現を練習する。	同　上	同　上
5	～です、ですか	「～です、ですか」「～でいらっしゃいますか」にあたる名詞文の叙述形・疑問形・尊敬形と「は」にあたる助詞を取り上げ、それらの表現を使った文の練習を行う。	同　上	同　上
6	います、あります	「ある、いる」「ない、いない」にあたる存在詞、「この、その、あの」にあたる指示詞を取り上げ、それらの表現を使った文を練習する。	同　上	同　上
7	～します、しますか	動詞・形容詞について、語幹と語尾の違いと母音語幹、子音語幹の違いを説明した後、「～します(か)、～です(か)」にあたる用言文の叙述形・疑問形についての練習を行う。さらに、漢語系の数詞とそれとともに使う助数詞の練習も行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	～しません、～ではありません	「～しません」にあたる用言文の否定形、「～ではありません」にあたる名詞文の否定形について練習する。さらに、固有語系の数詞とそれとともに使う助数詞の練習も行う。	生越　直樹 根本　理恵	生越　直樹
9	～なさいますか	用言の尊敬形の作り方と使い方、特殊な尊敬形の使い方を練習する。	同　上	根本　理恵
10	～してください	陽母音、陰母音の別を説明した後、用言の連用形の作り方を練習する。さらに連用形の縮約形の説明も加える。「～してください」にあたる依頼表現を使って、連用形の使い方を練習する。	同　上	同　上
11	～します	「～します」にあたる文末の丁寧な形hayyo体の練習を行う。また、残りの連用形の縮約形の練習もする。	同　上	同　上
12	～なさいますか	hayyo体の縮約形の練習を行う。さらに、hayyo体の尊敬形の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
13	～しました	過去形の作り方と使い方を練習する。さらに過去形の縮約形、尊敬の過去形の練習もする。	同　上	同　上
14	～します	話し手の意志や推測を表す未来・意志形の使い方を練習する。さらに、「～している」にあたる進行形の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
15	まとめと復習	ここまで練習した表現をまとめるとともに、練習問題をしながら復習を行う。	同　上	同　上

＝ 韓国語II（'０２）＝（ Ｒ ）

〔 主 任 講 師 ： 生 越　直 樹（東京大学助教授）　〕
〔 主 任 講 師 ： 根 本　理 恵（東京大学非常勤講師）〕

全体のねらい

韓国語Ｉを終了した程度の実力を持つ学習者を対象とする。いろいろな表現を使って韓国の人とコミュニケーションができるようになること、新聞記事などを読めるようになることをめざす。基本的な表現のうち、韓国語Ｉで学習しなかった事項について練習するとともに、より複雑な文を作文する練習も行う。スキットなどを通して、引き続き韓国の文化・習慣の紹介を行う。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	～する～、～した～	用言の後ろに名詞が続くときの形、連体形の練習をする。この課ではまず動詞、存在詞の連体形のうち、現在連体形、過去連体形の作り方と使い方の練習を行う。	生越　直樹（東京大学助教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）	生越　直樹（東京大学助教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）
2	～する～、～していた～	動詞、存在詞の連体形のうち、未来連体形、回想連体形の作り方と使い方を練習する。	同　上	生越　直樹
3	～な～	形容詞、指定詞の連体形（現在、未来、過去）の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
4	ｒ語幹の用言１	特殊な活用をするｒ語幹の用言について、その特徴と活用の仕方について説明し、練習を行う。さらに接続語尾・慣用表現をいくつか取り上げその使い方を練習する。	同　上	同　上
5	ｒ語幹の用言２	ｒ語幹の用言を使って文を作る練習をする。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
6	ｓ変則用言	変則用言の一つ、ｓ変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
7	ｔ変則用言	ｔ変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	p変則用言	p変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	生越　直樹 根本　理恵	生越　直樹
9	h変則用言	h変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	根本　理恵
10	rwu変則用言	rwu変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
11	wu変則用言	wu変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
12	rwu変則用言とwu変則用言	まずre変則用言の活用と使い方を練習し、さらにrwu変則用言、wu変則用言、re変則用言の使い方をまとめながら練習を行う。また、接続語尾・慣用表現をいくつか取り上げその使い方を練習する。	同　上	同　上
13	話し言葉で使う表現	話し言葉で使う表現、特に様々な縮約形を取り上げ、その使い方の練習をする。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
14	ぞんざいな表現	文末の形式のうち、ぞんざいな表現であるhay体、hanta体の叙述・疑問などの形を取り上げ、その使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
15	まとめと復習	ここまで練習した表現をまとめるとともに、練習問題をしながら復習を行う。	同　上	同　上

＝ 日本語Ⅰ（'０２）＝（ＴＶ）

－外国語としての－

〔主任講師：姫野 昌子（放送大学教授）〕
〔主任講師：吉岡 英幸（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：伊東 祐郎（東京外国語大学助教授）〕

全体のねらい

現代日本の社会と文化の理解、日本語の運用能力（大学１年生程度）の養成を図る。ＮＨＫや放送大学の番組を素材とし初級後半から中級にかけての文法事項と語彙を中心に日本語力をのばす。番組ごとにテーマを決め、外国人留学生と日本人学生を交えたトークや日本人有識者へのインタビューを通して書きことばと話しことばのスタイルの違いも学ぶ。日本の歌や有名文化人のことばと書画なども紹介し、楽しみながら学べるように、マルチメディアの特色を生かした、番組をめざす。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の風土	日本列島の地理的条件と自然環境の特色を取り上げる。四季を通じての風景の変化、地方の多様性などを紹介する。外国人日本語学習者による「私の国の紹介」スピーチも扱う。	姫野 昌子（放送大学教授） 藤村 知子（東京外国語大学助教授）	姫野 昌子（放送大学教授） 吉岡 英幸（早稲田大学教授） 伊東 祐郎（東京外国語大学助教授）
2	ごみ処理問題と資源化―分別収集と処理―	経済の発展とともに様々な環境問題が生じているが、中でもごみ処理は大きな問題である。鎌倉市の、ごみ収集と分別、再利用への取り組みを見る。外国人留学生を交えた「ごみ問題」についての話し合いも扱う。	姫野 昌子	姫野 昌子（放送大学教授） 伊東 祐郎（東京外国語大学助教授）
3	ごみ処理問題と資源化―プラスチックの再利用―	鉄鋼メーカーのプラスティック製品リサイクルの成功例を取り上げる。放送大学教授への中国人留学生インタビュー「ごみ問題」も扱う。	同上	同上
4	日本の防災―消火と救急活動―	人々の生命と財産を守る、防災システムを、具体的に埼玉県消防本部の消火と救急活動を中心に見る。外国人留学生を交えた「防災問題」についての話し合いも扱う。	姫野 昌子 荒川 洋平（東京外国語大学助教授）	同上
5	日本の防災―訓練と防災活動―	地域住民への広報活動も消防署の重要な仕事である。様々な行事や訓練の様子を通して地域社会に密着した危機管理のあり方を取り上げる。埼玉県消防本部現場の責任者へのネパール人留学生のインタビュー「日本の防災」も扱う。	同上	同上
6	ロボットとの共存―ロボットの開発―	早稲田大学理工学部の長年にわたるロボット開発への道のりと現状を取り上げる。外国人留学生による「私たちの生活とロボット」についての話し合いも扱う。	姫野 昌子 吉岡 英幸（早稲田大学教授）	姫野 昌子 吉岡 英幸
7	ロボットとの共存―未来のロボット―	早稲田大学理工学部の新しい技術開発の成果を取り上げる。早稲田大学教授への韓国人留学生のインタビュー「ロボットの開発」も扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	男女共同参画―少子化社会と男女共同参画―	現在日本では少子化が進んでいるが、男女共同参画社会の実現が問題解決の一つのカギとなる。子育てへの父親の参加を通して男女共同参画の現状を見る。外国人留学生を交えた「男女共同参画」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 小林　幸江（東京外国語大学教授）	姫野　昌子 伊東　祐郎
9	男女共同参画―地域社会への男女共同参画―	千葉県習志野市における小学校と地域住民の協力の現状を紹介し、子どもを中心にした男女共同参画の現状を取り上げる。内閣府局長へのセネガル人留学生のインタビュー「日本の男女共同参画」も扱う。	同上	同上
10	ＩＴ時代のビジネス―製造―	20世紀後半、日本経済発展の原動力の一つは技術水準の高い製造業であった。熟練工にしかできないと言われてきた技術が、IT時代に入り、コンピュータで処理されるようになった。その現状を見る。外国人留学生による「IT時代の社会」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 柏崎　雅世（東京外国語大学教授）	姫野　昌子 吉岡　英幸
11	ＩＴ時代のビジネス―商取引―	従来の商取引と違って、インターネット上で市場を開き、全国の業者と自由に取引する会社が現れた。その現状を見る。ネット上の取引リスクを回避する方法も見る。NTT 研究所長に対するアメリカ人留学生のインタビュー「IT時代の社会」も扱う。	同上	同上
12	子どもたちの読書離れ―原因と対応―	最近、児童書の売り上げが減ってきた。また、本を読まない子どもも増加している。読書離れの傾向に対する、出版社、教師、親たちの努力の現状を見る。外国人留学生を交えた「読書と教育」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 伊東　祐郎（東京外国語大学助教授）	姫野　昌子 伊東　祐郎
13	子どもたちの読書離れ―学校の取り組みと効果―	子どもたちの読書の機会を増やすために、図書室を改善した学校や、全体で読書に取り組んだ学校などがある。子どもたちは読書のおもしろさを 知り、学校が大きく変わってきている。その現状を見る。児童文学評論家に対する韓国人留学生のインタビュー「子どもと読書」も扱う。	同上	同上
14	メディアと社会―メディア技術と情報の共有化―	近代に入ってメディア技術はコンピュータの出現により飛躍的な進歩をとげた。デジタル技術により古い文化財の保存も可能になり、情報の共有が実現できるようになった。その現状を見る。外国人留学生を交えた「メディアと社会」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 鈴木　美加（東京外国語大学助教授）	姫野　昌子 吉岡　英幸
15	メディアと社会―インターネットによる教育―	教育でも新しいメディア技術を取り入れた活動が行われている。インターネットを利用した教室の活動状況を沖縄の学校を例に、見る。ニュースキャスターに対する韓国人留学生のインタビュー「メディアと社会」も扱う。	同上	姫野　昌子 吉岡　英幸 伊東　祐郎

＝保健体育　（’０１）＝（ＴＶ）

－生涯スポーツへの誘い－

〔主任講師：渡邉　融（元放送大学教授）〕
〔主任講師：臼井　永男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

日常生活の中にスポーツ等の身体運動を取り入れて生活の質の向上を図ろうとする際に必要となる考え方と科学的な知識とを提供することを狙いとする。できるだけ多くのスポーツ実践の事例を紹介しながら、運動が身体に及ぼす影響をスポーツ科学的な見地から講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯スポーツの時代	今日では、スポーツの振興策が国あるいは国際的なレベルで「スポーツフォーオール」という名のもとに進められている。それはスポーツが人間の発達と社会発展に資すると考えられているからである。本章では、その考え方と具体的な展開の状況とを解説する。（放送授業では、冒頭でこの科目の狙いと各章で取り上げる問題を紹介する。）	渡邉　融（元放送大学教授）	渡邉　融（元放送大学教授）
2	人間とスポーツ	人間は今日まで数多くのスポーツを作り出してきた。人々はそれらに対して単に楽しみだけでなく、様々に意味づけを施し、また、効用を期待してきた。本章では、それらから幾つかの例を拾い、人間にとってスポーツとは何かを考える。	同　上	同　上
3	スポーツ活動への科学的アプローチ	スポーツを実践するために知っておきたいスポーツ科学の基本的な事項について解説する。また、さまざまな身体運動における筋－腱－関節システムの働きを解説し、スポーツ動作の成り立ちについて考える。	福永　哲夫（東京大学教授）	福永　哲夫（東京大学教授）
4	筋収縮と筋力のメカニズム	筋力の大小は、筋の太さ、組成や神経の働きによって、またその活動様式によって左右される。このメカニズムについて解説する。	同　上	同　上
5	パワーアップトレーニングの科学	強い筋力を素早く発揮することによって高いパワーを得ることができる。このパワーを高めるためのトレーニングの科学的なメカニズムについて解説する。	同　上	同　上
6	呼吸・循環調節とスポーツ	さまざまな運動を行ったときに生じる生理的応答のうち、呼吸・循環系はとくに重要な役割を果たしている。本章では、運動中の呼吸・循環系の適応について解説する。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
7	持久的能力を高めるために	呼吸・循環系の機能を高めるために、持久的トレーニングが行われる。このトレーニングによって得られる効果とその評価方法、さらにトレーニングを行う場合の留意点についても解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	巧みとスキル	人間が自分の意思で体を動かすとき、その動きや動きの結果には必ず個人差が生ずる。その個人差を、我々は「強さ」と「巧みさ（上手さ）」という２種類の尺度を用いて評価している。上手だと評価される動作（キャッチ、的当て、フェイントなど）の特徴を探り、巧みな動作を可能にする体力要素（スキル）について解説する。	大築　立志（東京大学教授）	大築　立志（東京大学教授）
9	脳の運動制御	運動を引き起こす力は筋力によって発揮され、持久力のもとである酸素摂取能力は肺や心臓の性能によって決まる。これらに対して、スキルという運動の制御能力を決めるのは脳の運動中枢の性能である。巧みな動作は脳の正しい働きによって初めて可能になる。この時間は、運動と脳・神経系との密接な関係について学ぶ。	同　上	同　上
10	運動の上達	箸や鉛筆の使い方もスポーツも、適切な練習によって上達する。それは、脳の中にその運動のためのニューロン回路が形成されるからである。動作に習熟することを俗に「体が覚える」などと言うが、それは、実は「脳が覚える」ことなのである。今回は、運動の上達と脳の変化との関係、上手になるための練習の原理を学ぶ。	同　上	同　上
11	スポーツと栄養・休養	体内に蓄積できるエネルギーはすべて飲食によって賄われる。本章ではスポーツに必要なエネルギー補給のための栄養摂取について考える。 また、疲労回復のための休養のとり方についても解説する。	臼井　永男	臼井　永男
12	スポーツにおけるバリアフリー	障害の有無や年齢の高低に関わらず、社会のさまざまな場面で活躍し、またスポーツを楽しむ機会をもつ人が増えて来た。本章では障害者のスポーツ、高齢者のスポーツを取り上げその意義や目的について考える。	同　上	同　上
13	スポーツの医学（１） －スポーツの医学的効用と安全なスポーツ活動－	スポーツ・身体運動の効用は古くから知られていたが、現在の少子高齢社会では生活習慣病の予防をはじめ、健康の維持・獲得のため市民生活に欠かせない。しかし、スポーツ実施にあたってはあくまでも安全なスポーツ活動が前提で、そのためのメディカルチェックについて解説する。	中嶋　寛之（日本体育大学教授）	中嶋　寛之（日本体育大学教授）
14	スポーツの医学（２） －スポーツ損傷と応急処置・リハビリテーション－	スポーツによる急性あるいは慢性の外科的損傷・内科的損傷について解説するとともに、応急処置やその後のリハビリテーションについて原則的な考え方を解説する。	同　上	同　上
15	生涯スポーツの実践	ここまで各章で解説したこと、問題にしてきたことを総合して、生涯スポーツを安全に楽しく実施するには、如何にすべきかを考える。	渡邉　融	渡邉　融 臼井　永男 福永　哲夫

＝ 日本の自然（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕
〔主任講師：中村　和郎（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

自然の正しい理解のためには、事象や景観から受ける感動を大切にするのが基本となる。当科目では、ビジュアル世界に判り易い解説を付しながら日本列島とその周辺の気象・地形・生物等の多様性や特性を、個別アイテムの羅列とせずエコシステムに位置づけ、かつ人間生活と関わりを重視しながら紹介し、自然観の涵養に資する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	豊かな日本の自然	グローバルに見ると、豊かな緑に包まれた日本列島は、砂漠が広がる中緯度高圧帯に位置している。その厳しさを柔らげるのが海の存在であることを強調する。豊かさは地形の複雑さにも由来することをいくつかの事例をあげ、感覚的に日本の自然の多様性を学ぶ。	濱田　隆士（放送大学教授） 中村　和郎（駒澤大学教授）	濱田　隆士（放送大学教授） 中村　和郎（駒澤大学教授）
2	日本の大地	日本列島は激しい隆起地帯であり、険しい山に深い谷が刻まれ、大量の砕屑物が川によって運ばれ、平野を構築する。植生等の特徴や利用する人の知慧を探る。地勢を表わす地図化の手法や種類についても紹介する。	同上	同上
3	大地を作る地質と歴史	日本列島は、造山運動の激しい地帯の特色として、多様性の高い岩相・地層の帯状分布をもつ。岩石も鉱物も段数が多く、それらは形成時のさまざまな物理・化学環境を反映している。列島を造る大地の性質は、植生や動物相にも少なからぬ影響を持つことが示される。	同上	同上
4	日本列島の環境変遷	日本列島は、初めから列島であったわけでなく、プレートテクトニクスとしてのプレート運動に支配され、さまざまな気候帯を反映しながら現在に至っている。4億年前にサンゴ礁が発達し、以後くり返し温暖期が記録されている。関東地域に氷河期の影響も残される。	同上	同上
5	日本の川と文化	川を独立したユニットとして見る時代は終った。地球上の水循環の中に位置づけ、山と平野・海とを結ぶ物質移動の経路であることを認識しなければならない。森は川の源であるとする受け止め方があれば、人がそれらを利用する姿勢も自ずと方向が見えてくる。	大熊　孝（新潟大学教授）	大熊　孝（新潟大学教授）
6	日本をとりまく海と大気	列島をとり巻いて流れる黒潮と親潮は、ただ単に気温への影響が大であるばかりではない。豊かな海の幸が育ち、変化に富む植生を育み、気象・海象・気候が一連の環境変遷の主要因をなす。海・陸インターフェイスの重要性を強く指摘すると共に、生物の多様性にもふれる。	濱田　隆士 中村　和郎	濱田　隆士 中村　和郎
7	日本の土	大地の表層は、基本的に植生ひいては動物相を支配する大切な要素である。湿潤な気候や火山灰の存在は、日本列島の土の多様性を産み出し、豊かな自然環境を形成する正しく素地をなしている。人の生活様式は土の利用形態につながり、独特の文化を育てあげる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	森林（しんりん）の役割り	日本の森林は、ヨーロッパほどでないが最早原生の状態を留めている所が少い。山林の主体となる二次林や植林は、当然人と自然との相互作用として形成され、涵養されてきた。森林は生態の場だけでなく、大気の浄化を含め列島自然環境形成の主軸をなしている。	武内　和彦（東京大学教授）	武内　和彦（東京大学教授）
9	重要な里山の自然	里山という場と概念は、自然林と人の生活との接点において形成されてきた。里山は変化しつつある環境であり、生活文化の発祥の原点である。その里山も、国土の近代化政策により都市化という著しい変形を蒙り、激減に向いつつある実態に目を向ける必要がある。	同　上	同　上
10	日本の植物と昆虫	日本の野生生物は大きな生態的多様性を示すが、なかでも植物と昆虫との関り合いには注目すべきものが多い。里山という限定された環境下でのチョウと植物との関係を追いながら、自然界のシームレスなエコシステムの例を学び、その意義について述べる。	石井　実（大阪府立大学教授）	石井　実（大阪府立大学教授）
11	日本の鳥達	鳥は飛べる生き物でありながら、その分布や移動のパターンにはかなりの制約があることが知られている。鳥達の生き様に従って非常にバラエティに富み、不思議ともいえる知恵で子孫につないでいることも多い。単純な共存とか闘争といった図式だけでは説明できぬ。	樋口　広芳（東京大学教授）	樋口　広芳（東京大学教授）
12	湿地と動物達	湿地や干潟という特定の環境は、一般にはマイナーな存在と見られがちであるが、エコシステムからみると、実は非常に大事な位置を占めている。鳥や魚、エビやカニ、昆虫など多くの小型生物にとってかけがいのないナーサリーゾーンであることを列証する。	同　上	同　上
13	火山・地震の災害	自然に恵まれた日本列島は、その反面自然の恐しさも同居させている。自然災害のうち、大地と関連して発生する日本列島にとっては避けられない地震現象に起因するものが少くない。それだけに、その国土に住む人々にとって火山・地震への理解を欠かせない。	伊藤　和明（文教大学教授）	伊藤　和明（文教大学教授）
14	気象災害の恐ろしさ	季節によって変わるグローバルな気圧配置の下で、さまざまの気象災害が日本列島を見舞う。災害は雨や風だけでない。冷害も、フェーン現象による大災の危険が常にある。地勢の複雑さと、人の住む領域拡大に伴う土地の変形や変質が災害に直結する例も多くなった。	同　上	同　上
15	日本の自然教育と自然観	豊かな自然に住めば、自然への畏敬や感謝の念は薄らぐという事実がある。日本では縄文－弥生を経て恵まれた自然環境が激減し今日の文明化を迎えている。その経緯での環境悪化をどのように捉え、今後に資するかが今厳しく問われている。地球的課題にも共通する。	濱田　隆士 中村　和郎 伊藤　和明	濱田　隆士 中村　和郎 伊藤　和明

＝ 現代日本の教育課題（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：麻生　誠（放送大学副学長）〕
〔主任講師：天野　郁夫（国立学校財務センター教授）〕

全体のねらい

今、日本の教育は大きな転換期にある。教育をめぐって、これまではなかったような広がりと深さを持つ問題が生じている。このような現状を的確に把握し、そこに至る歴史的背景を正しく認識した上で、これからの日本の教育のあり方を広い視野から展望し、現代社会における教育の意味を理解することが、本講座の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の教育－何が問題か	近代的な学校制度が作られてから一世紀余り、日本の発展を支え、国際的にも高い評価を得てきた教育が、今そのあり方を根底から問われている。日本の教育の何が今、問題なのか、日本の教育はどこから来て、どこへ行こうとしているのかを考える。	天野郁夫（国立学校財務センター教授）	天野郁夫（国立学校財務センター教授） 麻生誠（放送大学副学長）
2	教育と近代－日本の経験	問題の根底にあるものを探り当てるためには、まず、近代学校制度の出発点にさかのぼってみる必要がある。明治の初期になされたさまざまな選択が、日本の教育と社会に何をもたらしたのか、戦前期におけるその明暗を明らかにする。	同上	天野郁夫
3	戦後改革の意味－効率化と平等化	第二次大戦後、アメリカの占領下に日本の教育は大きな変革を経験する。「第二の教育改革」と呼ばれるこの学制改革がいかに明治以来の教育の構造を揺さぶり、一変させ、戦後日本の高度成長のための基礎を創り出したかを見ていく。	同上	同上
4	大衆教育の時代－豊かな社会へ	1960年代から80年代にかけて、教育と経済はともに高度成長を遂げ、豊かな消費社会と大衆教育の時代をもたらした。誰もが18歳まで、さらに半数近くが20歳になるまで教育を受けるようになった時代。その豊かさが教育の大きな転換をもたらした。	同上	同上
5	学歴社会－教育と職業の間	現代社会では、学校で受けた教育の水準と内容を示す学歴が、人々の職業や社会地位と深い関わりを持つ。日本社会がことさらに「学歴社会」と呼ばれるのは何故か。またそれは変革の可能性を持ちうるのかを考える。	同上	同上
6	受験競争－教育と社会の病理	進学をめぐる激しい競争は、戦前期から、日本の教育と社会の最も深刻な病理現象とされてきた。受験戦争はなぜ起こるのか、それは解決可能なのか、高校や大学入試をめぐるさまざまな改革努力に触れながら、将来への展望を試みる。	同上	同上
7	家族の変質－躾の崩壊	家族は学校と同様、日々成長していく子どもたちの最も強力な社会化装置である。家族の持つ社会化機能を原理的に理解した上で、戦後日本の家族が教育に果たしてきた機能を整理し、現代家族の深刻な変質について検討する。	麻生誠（放送大学副学長）	麻生誠

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	病んでいく心－真善美の教育は死んだか	これまでわが国の学校教育はシステムとして十全に機能してきたと言われてきた。だが今日、精神的な不調を訴え保健室へ逃避する子どもたち、あるいは不登校、いじめが増加している。これは何を意味しているのか。子どもたちの心の問題を考える。	麻生　誠	麻生　誠
9	増加する非行とその変質－無規範型非行の増加	逃避とは異なる形での社会システムからの離脱に非行がある。戦後日本の少年非行の動向をたどり、その傾向を把握した上で、現代青少年の逸脱状況と、その背景としての規範意識の変質について考察する。	同　上	同　上
10	男女共同参画社会への道－女性リーダー形成の障害	男女共同参画社会の現実が、国の政策として取り上げられてからはや5年が経過したが、実現への道はなお遠いと思われる。その中で教育が果たすべき役割は非常に大きい。だが現実には、日本の教育と職場とが手を結んで，女性の社会的参画を阻む場合さえある。	同　上	同　上
11	人権と教育－同和教育の実態とその課題	同和教育にそのテーマを絞って、大阪大学とラトガース大学との共同で行われた日米同和問題国際調査等の研究成果をもとに、人権教育の展開を教師と地域住民の役割を中心に考察する。	池田　寛（大阪大学教授）	同　上
12	才能教育と学校－適能教育を構想する	戦後、エリート教育や才能教育は特に公教育の領域でタブー視され姿を消したが、最近、「教育上の例外措置」と言う形で才能教育が政策課題となっている。だがその力は微々たるものである。蔓延する受験才能教育に対し、公教育で望まれる才能教育の姿を追ってみる。	麻生　誠	同　上
13	生涯学習社会のゆくえ－豊かな自己実現への道	生涯学習は今や時代の風潮ともいいうる現象である。しかしその実体は多種多様であり、とても一括りに論じられるものではない。生涯学習の今日的意味について、放送大学の10年の歴史を検討し今後の我が国の生涯学習の可能性を探る。	同　上	同　上
14	教師とその養成－生涯学習型教師の登場	教育の場での直接の実践者は教師であって、教師を通すことなしにはいかなる教育上の理想や改革も実現できない。戦前、戦後のわが国で教師の果たしてきた役割を学習し、現在の教師の置かれた状況とその養成はどう行われ、いかなる問題をはらんでいるのかを考察する。	同　上	同　上
15	第三の教育改革－自由化と個性化	80年代後半の臨時教育審議会以来、日本の教育は明治初期と第二次大戦後に次ぐ「第三の教育改革」の季節を迎えた。改革のキーワードは「自由化」と「個性化」。多くの困難な課題を抱えた現代日本の教育はどこに行こうとしているのかを考える。	天野郁夫	麻生　誠 天野郁夫

＝ 現代日本の地方自治（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　齊　（放送大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は市民の日常生活に最も密着した公的活動領域である。しかも、従来の中央集権型の政治に代えて、地方分権型の政治が推進されている今日、地方自治の重要性は日を追って高まりつつある。この地方自治の領域に現れる諸問題は、日本の政治や社会が抱えている基本的な問題と密接に関連しているといえよう。この科目では、日本の地方自治の制度的な特徴を明らかにした後、具体的な政策問題の検討を通して、参加型地域社会形成の可能性を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地方自治と中央政治	地方自治と地方政治 明治国家の地方制度 日本的地方自治の特質 第二次世界大戦後の制度改革 地方分権と地域政治 地方自治の二層構造	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	首長の役割	首長主義 首長と議会の関係 首長の地位と役割 機関委任事務と自治体首長 行政指導と行政手続条例	同　上	同　上
3	地方議会	地方議会の機能 地方議会の構成と運営 地方議会と政党 地方議会と情報公開 地方議会の日米比較	同　上	同　上
4	住民と選挙	地方選挙の制度 地方選挙の現実 住民の権利 住民投票の可能性	同　上	同　上
5	地方財政	地方税制の仕組み 地方自治体の財政支出 地方交付税と国庫支出金 地方債の増発 地方財政の危機	同　上	同　上
6	都市計画	都市計画の意義 日本の都市計画 都市計画の現在 都市の空洞化	同　上	同　上
7	情報公開	情報公開と民主政治 行政部と情報公開 情報公開と地方自治 情報公開制の現状 プライヴァシーの保護 情報公開制の成果	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	性差別の是正	決定過程への女性の参加 積極的優遇措置 選挙と女性 女性と地方自治 フェミニズムの現在	阿部　齊	阿部　齊
9	環境保全	公害規制と地方自治 迷惑施設と環境保全 自然環境の保全 地球規模の環境汚染 地球環境問題と地方自治	同上	同上
10	地域福祉	高齢化社会の到来 少子化対策 在宅福祉とゴールド・プラン 介護保険制度の導入 高齢化と地域医療	同上	同上
11	教育行政	教育と政治 戦後教育改革 教育政策の保守化 自由民主党の教育政策 今日の教育制度の矛盾 教育の荒廃とその将来	同上	同上
12	文化行政	社会教育の役割 社会教育から文化行政へ 地域文化の振興 美術館と博物館	同上	同上
13	危機管理	警察行政の現状 消防行政の課題 防災体制の確立 阪神・淡路大震災の教訓	同上	同上
14	国際化への対応	相互依存の増大 自治体外交 内なる国際化 市民運動とＮＧＯ	同上	同上
15	自治体改革	団体自治と住民自治 地方分権の推進 地方分権推進委員会の勧告 勧告の意義 住民自治の推進	同上	同上

＝ 現代生活論（’００）＝（ＴＶ）

－新しい生活スタイルと生活支援－

〔主任講師：松村　祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

経済のサービス化、情報化、人口の高齢化、男女の役割変化などが進む現代社会での生活は、形態や機能が多様化し、複雑で見えにくい。現代生活においては、社会的規制が弱まり個人の自由意志が尊重される反面、新たな生活難が発生し将来展望が持ちにくく、子どもから高齢者まですべての年齢層に生活不安が広がっている。この講義では日本人の生活を多角的に分析するだけでなく、個人や家族が持てる力を充分に発揮していくための生活課題と、社会的生活支援策の方向と方法を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代生活のしくみ	現代生活を内部的条件（個人や家族の生活意識、家事活動、家庭内耐久消費財）と外部的条件（商品市場、社会保障制度、生活共同施設）の枠組でみていく。生活形成は内部的条件より外部的条件に規定されるようになっており、生活の個人別化、省力化が進んでいる。この講義の全回を通して、アメリカ合衆国及びフランスの事例との比較をまじえて、現代日本人の生活の特徴を浮き彫りにしたい。 （トピックス）日米消費生活相談	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	生活欲求の不確定化	時代により、社会により変化する生活欲求の発生、充足形態、内容、水準は、個人や家族にどんな影響を与え、どのような生活問題を生み出しているか。生活欲求の作られ方、生活欲求を不確定にしている要因、世代間の生活欲求の葛藤などを経済発展や情報化との関わりの中で見ていく。 （トピックス）生活雑誌からみるライフスタイルの変化	同上	同上
3	生活手段の選択、入手	生活手段の数や種類は増加し、個人的に使用するものだけでなく、社会的に共同使用するものも数多い。企業や行政からの単方向的な生活手段の供給によって生じる個人や家族の生活における過剰消費や主体性・個性の減退傾向について検討する。 （トピックス）インターネット通販	同上	同上
4	生活手段の加工、配置	家庭内での生活手段の自給は少なくなり、購入した生活手段の加工や配置についても省力化が進んでいる。サービス経済の進展の下で加速化される家事活動の減少が人々の心身の健康、人間関係、価値観迄変容させている状況を示す。 （トピックス）子どもの食卓風景	同上	同上
5	見えない家計、制御しにくい家計	生活費は長期的に見ると大幅に上昇してきたが、個計化、金融化によって新しい不安定さが生じてきている。また、税金、社会保険料の負担と供給が増える中で、家庭内外の世代間関係も変化している。新しい家計管理の方法についても取り上げたい。 （トピックス）多重債務の増大	同上	同上
6	不規則な生活時間	労働形態の変化により、自由時間が増え、生活時間の夜型化が進んでいる。また、女性と男性では生活時間の配分・内容に格差がある。さらに地域の居住環境の不備が人々の生活時間共有を妨げている。時間使用の構造、時間の流れ分析、生涯時間配分から、現代日本人の生活の特色を見る。 （トピックス）生活時間の国際比較	同上	同上
7	生活空間の拡散	多くの生活活動は家庭の外で営まれるようになってきている。しかし、生活の安定のためには、拡大した生活の場での利便性の追求と私的空間での自己保存のための活動の両方が必要である。ゆるやかに開放された生活空間によって可能となる個人の自己実現と社会の連帯のあり方を検討する。 （トピックス）コレクティブハウジング	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生活の価値観、目標の混乱	モノや金銭への執着や人間関係の稀薄化の促進によって作られた価値観は、国民総中流意識化や自己喪失感を強めた。さらに社会経済状況の激しい変動の下では、長期的生活目標を持ちにくく、刹那的で消極的な生活行動が多発している。生活の満足度は顕在化した生活欲求との相関だけでなく、潜在化した生活価値と生活実態との関係で測られることを示す。 （トピックス）ヤングアダルトの困難	松村祥子	松村祥子
9	生活の社会化	生活手段の商品化がすすみ、生活施設の共同利用や社会保障制度による社会連帯が強まっている。このような生活社会化はなぜ、どの様な形で進行しているのか。また、生活の社会化による生活の画一化、他律化、家庭機能の縮小について述べる。 （トピックス）生活協同組合の消費者支援	同上	同上
10	多元的な生活保障	個人や家族が自ら生活難に備えて貯蓄や保険などをする（自助）他に、一定の地域や集団での相互扶助（共助）、そして行政などの手で行われる公的生活支援（公助）が行われている。生活問題が多様化し、見えにくくなっている現在、必要とされる生活保障について考察する。 （トピックス）民間保険会社の活動	同上	同上
11	子どもの生活変化への対応	子どもは多くの消費や情報の機会に恵まれる一方、自然環境の悪化や、家庭や地域の子育て機能の低下の中におかれている。少子社会において、生活経験が豊かでパワフルな子どもの生活創造のための生活経営や社会福祉の実践例をみる。 （トピックス）フランスの子どものための余暇支援センター	同上	同上
12	男女の生活変化への対応	雇用環境や結婚観など、仕事と家庭をめぐる環境変化が著しい。失業率の上昇、リストラ、転職そして結婚難、子育てや介護問題などが従来とは異なる形や重さで生活に影響している。生活者の自衛策と社会的支援策の動向を分析する。 （トピックス）男女共同参画型社会に向けての諸施策	同上	同上
13	高齢者の生活変化への対応	生活歴の異なる４世代が共存する高齢社会では、個別家庭においても、社会全体としても世代間の生活行動の見直しが必要であろう。生涯生活時間の中での労働、余暇、消費の適正な配置と世代間の合意についての問題点を示し、解決への具体的な方策を探る。 （トピックス）アメリカのシルバー村	同上	同上
14	生活を支援する人と組織	現代生活において生じる金銭的、物質的、心理的、教育的課題に関して、トラブル防止や救援に携わっている人と組織について紹介する。特に米仏のソーシャルワーカー及びホームエコノミストの地域生活支援活動は我が国への導入が望まれるものである。 （トピックス）米仏の生活支援活動	同上	同上
15	生涯生活の充実のために	現代の生活不安に対処するためには、生活の自律を促す生活意識や生活技術の習得とともに、家族、地域、社会の様々なレベルでの連帯の強化と共同生活のしくみが不可欠である。長期化し、変化の波をうけることの多い現代生活のそれぞれの時期において主体的で積極的な生活形成を実現するための個人、家族の生活設計と社会的な生活政策、生活運動、生活教育の今後の課題を示す。	同上	同上

＝ 認知科学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：相場　覚（北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：西川　泰夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

心とは。意識とは。考えるとは。知性とは。知識とは。認識とは。心と機械の関係は。考える機械は可能か。心と脳の関係は。物質過程からいかに心は生成したか。心の謎に取り組む最新の心の科学を体系的に紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心の科学－認知科学の成り立ち	だれにも自明で自覚できるようにある心。それは、存在し多様な状態を示す。しかしそれ自体は見えない謎に満ちたもの。それを科学という観点から解き明かそうという最新の試みの諸前提や視点を紹介する。	相場　覚（北海道大学名誉教授） 西川　泰夫（放送大学教授）	相場　覚（北海道大学名誉教授） 西川　泰夫（放送大学教授）
2	心をとらえる－記号という観点から	形をもたない心にいかに形を与えることができるか。事象一般を記述する基本的な記号系は、物質、エネルギー、情報である。心の科学の基本的な記号系である情報をめぐり情報科学、情報理論、記号論などから考察する。情報を担う物理的記号系という観点からみた心。	西川　泰夫	西川　泰夫
3	心的表象系イメージ、象徴	心に形を与える機能を有する記号系でより自覚内容を反映したものにイメージや映像を主体とした感性記号がある。これらは、心的表象系と総称され自明性と確証性のないものである。その特性や基本構造を検証する。	相場　覚	相場　覚
4	心的発達と教育・社会化	心はどのように形成されるのか、心の成熟・発達過程を、心的表象系の組織化、体系化の観点から取り組む。ピアジェの行った発達過程の詳細な観察とそれを基に組み立てられた心の発達に内在する論理構造を紹介する。	同上	同上
5	言語と知識	世界知識を駆使した思考推論過程としての言語理解過程と言語精製過程の研究について紹介する。常識推論、感情推論、事例ベース推論などの各種推論と言語過程との関連が中心的話題である。語用論的問題へのアプローチも導入し、対話や言語コミュニケーションについての認知科学的モデルについても紹介する。	往住　彰文（東京工業大学助教授）	往住　彰文（東京工業大学助教授）
6	言語モジュールの性質とその獲得	心のモジュール性の理論を導入し、特に研究が進んでいる言語モジュールについての知見を紹介する。せいせい文法の成果とともに、理論言語学と人工知能との共同研究の成果も紹介する。また、幼児が言語能力を獲得する過程を通じて、言語の生物学的基礎についても言及する。	同上	同上
7	心的世界とその構造－視覚科学を通して	外的世界との出会いとその認識を可能にする基本的な機能を担う視覚系の仕組みと役割を、その現象面とその成立・獲得過程から現在、世界の最先端で精力的に研究活動を繰り広げる代表的な研究者たちの研究紹介を通じて行う。	相場　覚 西川　泰夫	相場　覚 西川　泰夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	感情－ 認知科学的視点から	感情のメカニズムについて、認知心理学的感情研究と、人工知能からのアプローチ、認知的文化人類学からのアプローチを紹介する。新しい感情研究として、自律エージェント（ロボット）の感情創発というアプローチも導入し、認知科学における新動向である、自律エージェントの行動設計というアプローチも体系的に紹介する。	往住　彰文	往住　彰文
9	心と脳（その1） 脳神経科学から見た心	心の物質基盤の中核は脳であることは現在の常識であろう。しかし、脳物質過程からいかに心が生成するかという論点はなお謎に満ちかつ未解決である。この点をめぐり繰り広げられている研究の最先端を紹介する。	相場　覚	相場　覚
10	心と脳（その2） 形式的ニューラル・ネットワークをもとに	脳過程を研究する上で、直接の脳を対象とすることに伴うさまざまな困難と制約をなるべく取り除くための工夫として導入されたモデル論的アプローチの最新の様子を紹介する。形式的ニューラル・ネットワーク・モデルや、非線型力学系モデルからのアプローチ。	西川　泰夫	西川　泰夫
11	応用認知科学 認知工学・印象の工学	認知科学の進展と共にその分野は拡大しており、その中でも応用的側面は多岐におよぶ。その一端を特に、日常で身近な現象への応用を試みる認知工学や印象の工学あるいは感性工学とよばれる領域での研究成果や具体的実践事例を紹介する。	同上	同上
12	比較認知科学－ 動物には心があるか，動物の知性とは	心を持つのは人だけであるという従来の信念は現在大きく揺らいでいると言って良い。コンピュータに知性を持たせる人工知能研究は大きな突破口となった。翻って人と同じ仲間の動物ではどうかという議論へと開かれる。	相場　覚 西川泰夫	相場　覚 西川泰夫
13	心をめぐる哲学的議論 -その背景と変遷	心を科学する認知科学における中心的テーマである心の概念は人類文明史において幾多の変遷と多様な心観の間で激しい論争が繰り返されてきている。それはもっぱら哲学における中心的課題であった。その推移を跡付けよう。	相場　覚	相場　覚
14	心の科学の基本的パラダイムの再吟味 -哲学的認識論と科学基礎論	心の科学が探求している心の仕組みと機能をめぐる基本的なパラダイムを整理し再考する。大きく対立する2つの立場、記号論・計算論と反記号論・反計算論と包括される主張点を吟味し新たな心の科学の地平と先端を展望する。	西川　泰夫	西川　泰夫
15	心の科学の新たな展開と展望	認知科学のこれからを吟味するに当たって現在新たな関心をよんでいる、複雑性の科学や心の哲学などを参照し、心の生成過程をめぐる新たな視点を紹介する。	西川　泰夫 相場　覚	西川　泰夫 相場　覚

＝ 舞台芸術の現在（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邊　守章（放送大学副学長）〕

全体のねらい

演劇を単に言葉の演劇に限らず、舞踏劇・音楽劇を含めて広く舞台芸術として捉え、現代におけるその基底的な問題を、主として日本と西洋世界の記憶を参照しつつ考える。平成８年度開講の「舞台芸術論」と平成９年度開講の「演劇を読む」の成果を踏まえて、単なる演劇入門でも、演劇史の概説でもなく、現代の国際化の地平における舞台芸術の創造を受容の根拠を問い、その構造と作用を分析する。基幹科目として、舞台芸術に直接関わる専門家にも、また舞台芸術を受容する観客の側にも、現代において〈舞台芸術〉とその〈作業〉を考える際に、最も基底的な問題は何かを理解するための手立てとなるようにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	舞台芸術の４要素	「舞台芸術」は何を指すのか。「演劇」との関係。対象の多様性。問題の多様性・多重性。日本における舞台芸術の特殊性。舞台芸術の基本的４要素（「演じる者」「見る者」「演じられる事」「「演じる者と見る者を結ぶ空間」）。	渡邊　守章（放送大学副学長）	渡邊　守章（放送大学副学長）
2	劇場論（1）-劇場という空間	「劇場」には様々な様相がある。まずは舞台と客席を持つ建築として、その構造（舞台と客席、ロビーの関係）と舞台機構を、西洋世界と日本の記憶に関して分析する。具体的には、現代の劇場の基本をなす「イタリア式額縁舞台」の構造と機能のモデルを、その廃虚を用いたパリのブッフ・デュ・ノール劇場（ピーター・ブルックの拠点劇場）を出発点に、ガルニエのパリ・オペラ座とワーグナーのバイロイト祝祭劇場によって分析し、最初のプロセニアム舞台としてのファイルネーゼ劇場を考察する。そこからグローブ座とテアトロ・オリンピコを介してルネッサンスと古代へと遡り、それとの対比において、日本の伝統演劇の劇場の系譜学を企てる。	同　上	同　上
3	劇場論（2）-システムとしての劇場	劇場の現在を、ミラノ・ピッコロ座の３つの劇場（半円形の実験劇場、プロセニアム型の中劇場、オペラ劇場）を例に分析し、現代における劇場論がどのような発想の転換を経験しているかを検証する（ストレーレル演出の『リア王』の一場面と、総監督セルジオ・エスコバール氏のインタビュー。）その際、「システムとしての劇場」をよく理解させる例として、国立パリ・オペラ座の２つの劇場（ガルニエ宮とバスティーユ・オペラ）を取材し、総監督のユーグ・ギャル氏のインタビューを交えつつ、１９世紀後半と２０世紀後半とを代表するこの歌劇場を分析する。また、劇場は、単に舞台で上演される作品によってのみ機能しているわけではない。それは一つの＜文化装置＞である。現代における文化装置としての劇場を考える上で重要な＜場＝空間＞としてのフェスティヴルを、南仏エックスーアン＝プロヴァンスの音楽祭（総監督ステファン・リスネール氏のインタビュー）とアヴイニョン演劇祭（総監督ベルナール・フェーヴルーダルシェ氏のインタビュー）によって考察する。	同　上	同　上
4	俳優論（1）-演じる者の系譜	大きく分けて演技者の演技には、「再現＝代行型演技」と「直接的・身体技」という対比的な関係が認められる。それを舞台の表象としては「ドラマ」と「ショー」と言いかえてもさして間違いではない。具体的な舞台表象におけるその関係は、文化によって異なるが、日本にはこの対比構造が根強く続いている。田楽と猿楽の対比を出発点として、日本と西洋世界の俳優術の記憶を復元しつつ、演技の構造を考える。それは舞台作りの構造にも、劇作の構造にも深い関わりを持つ問題であり、きわめて現代的な知の地平を拓くからである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	俳優論 (2) －俳優の形成	俳優を成立させる根拠は、文化と社会によって一様ではないが、「俳優という問題」の基本的な様相は分析しておく必要がある。また、演技者の養成＝教育は、前回に述べた演技の二つの系譜によって、それぞれ異なり得るが、それらの養成の実態と今日的な課題をフランスの国立高等俳優学校の例によって考察し、俳優の養成・教育の問題を考える。	渡邊守章	渡邊守章
6	劇作論 (1) －悲劇と言語	舞台で演じられるものを、「劇行動の作り」という意味で「劇作」と呼んでおくならば、それが文字化されて演劇作業の基底となるのが戯曲である。戯曲という言語表現の歴史で言えば、どうしてもヨーロッパのそれを論じておかなければならない。古代悲劇以来の「悲劇」という劇の書かれ方は、特にルネッサンス以降の西洋世界においては規範と考えられた時期が長いから、悲劇の問題は劇作論の基本として避けて通れない。悲劇を劇作のモデルとして、劇の構造と作用についての基本的命題を立てたアリストテレスによるモデル化の言説と、ルネッサンス以降の西洋演劇における「アリストテレス・モデル」の意味を考察し、悲劇の具体的な例として、フランス古典主義悲劇の代表作ラシーヌ作『フェードル』（渡邊守章演出）によって禁じられた情念の悲劇の構造と作用を分析する。	同上	同上
7	劇作論 (2) －喜劇の身体	すでにアリストテレスの『詩学』に読まれる悲劇と喜劇の対比構造は、１７世紀フランス古典主義演劇において、劇作の二分法として制度化されるに至った。それは主題に関わると同時に、それ以上に、主題の扱い方に関わる。喜劇を特徴付ける「笑い」や、「笑い」の担い手あるいは惹起者である「道化」に焦点を当てて、喜劇の表象と技法における「身体」の問題を考える。１８世紀の即興喜劇コメディア・デ・ラルテを現代に蘇らせたとして名高いジョルジョ・ストレーレル演出のゴルドーニ作『二人の主人を一度に持つと』の舞台を例に取って、仮面・役柄・即興・身体の問題を考察する。	同上	同上
8	劇作論 (3) －戯曲と演出	悲劇と喜劇の制度的二分法に先立つシェークスピアの『リア王』のストレーレル演出を例に取り、「王権と道化」の主題とその舞台的表象、演出における「間・テクスト性」と「引用のゲーム」を分析する。	同上	同上
9	伝統演劇の精髄 (1) 能の構造と作用	日本には、８世紀以来歴史的に相異なる時代に成立した舞台表象が歴史を生き延びて「伝統演劇」として現在も生産され受容されているという、世界でも例を見ない舞台の伝統が存在する。そのうちから、最も重要だと思われる１５世紀室町時代に成立した能・狂言と、１７世紀に町人階級の舞台表象として生まれた歌舞伎と人形浄瑠璃（文楽）について、現代の演劇作業の観点から、３回にわたって考える。９回目は能を取り上げ、能によって開かれた地平がどのようなものであったかを考える。具体的には『葵上』を「古式」の演出によって、能における「怨霊」の劇的演劇的表象の成立を考察し、観阿弥作『卒塔婆小町』によって「憑依と変身」の劇を、世阿弥作の『井筒』によって「複式夢幻能」の詩劇としての洗練を、同じく世阿弥『砧』によって情念の悲劇の能的表象を分析する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	伝統演劇の精髄 (2) 文楽と語り物	17世紀に成立し、18世紀に隆盛を見る人形浄瑠璃（文楽）は、世界に類のない優れた舞台芸術である。太夫と三味線、人形、人形遣いが舞台上に自分の作業を露呈しつつ独自の虚構空間を作り出していく。そのプロセスを、現代文楽を支える3人の人間国宝、人形遣いの吉田玉夫、大夫の竹本住大夫、三味線の竹沢団六のインタビューを交えつつ分析する。それは、この舞台表現の劇的言説を特徴付ける「語り物構造」を、現代の演劇作業の観点から読み直すことにも繋がる。（映像は『妹背山婦女庭訓』（「山の段」）『心中天網島』（「河庄」）『仮名手本忠臣蔵』（「判官切腹」）『菅原伝授手習鑑』（「寺子屋」。）「語り物構造」は、西洋世界の演劇理論を支配してきたアリストテレスの問題形成には全く欠けていた様相であるが、日本の伝統演劇においては、劇作術の上でも演技の上でも、能を初めとして極めて重要な要素を構成する。文楽について最も現代的な視点から書いたロラン・バルトの文楽論を一つのヒントとして、プレヒト以降の前衛演劇における「語り物構造」の戦略的意味についても考える。	渡邊守章	渡邊守章
11	伝統演劇の精髄 (3) 歌舞伎の技法	歌舞伎は日本の伝統演劇のうち、その興行形態やスター・システムによって、現在でも最も多くの観客に親しまれているが、その舞台表象や表現の分析は必ずしも容易ではない。歌舞伎のイメージの原型として「かぶき者」（例は歌舞伎十八番の『助六由縁江戸桜』と和事の『廓文章』）、劇作と演技における「時代物」と「世話物」の対比構造（時代物の例は『義経千本桜』『鏡山旧錦絵』、世話物は『東海道四谷怪談』）、舞踊劇としての「所作事」（『積恋雪関扉』）の技法を考察し、更に現代の歌舞伎を理解するために、日本の近代化の地平で歌舞伎に起きた変容を、20世紀の名優六代目尾上菊五郎に焦点を絞って考える。「六代目革命」である（『鏡獅子』と『勧進帳』。）	同上	同上
12	演出技法 -ジョルジョ・ストレーレルの世界	20世紀は「演出家の世紀」と呼ばれ、20世紀の演劇の歴史は、新作戯曲の歴史としては書くことは出来ず、演出家の作業を跡づけることが不可欠である。その際、演出の技法は、同時代の「前衛的な戯曲」の演出と「古典の読み直し」とによって測ることが出来る。7回目、8回目でも取り上げた20世紀後半の最も偉大な演出家ジョルジョ・ストレーレルの作品のなかでも名高いシェークスピア『テンペスト』とチェーホフ『桜の園』の画期的な演出を取り上げて、演出家が如何にテクストを読み込んで彼に固有の舞台表象を作り上げていくかを分析する。	同上	同上
13	音楽劇の現在 -オペラ・オペレッタ・ミュージカル	従来の西洋演劇史あるいはそれに基づく演劇論は、１７世紀以降のヨーロッパにおける「言葉の演劇」と「音楽・舞踏劇」との制度的分割を引きずって、言葉の演劇についてのみ論じることが多かった。しかしそのような１９世紀型の西洋美学の言説では、現代のように多様化した舞台芸術は論じられない。ヨーロッパ19世紀を代表する舞台芸術であるオペラが、20世紀後半にどのように読み直され、現代の舞台芸術として劇場に君臨するに至ったかを、バイロイト祝祭劇場100周年記念の『ニーベルングの指輪』（パトリス・シェロー演出、ピエール・ブレーズ指揮）によって分析し、同じ地平におけるオペレッタの新演出をジョルジュ・ラヴェッリの『メリー・ウイドー』によって見る。更に、現代における「音楽劇」としての「ミュージカル」の意味を、『キャバレー』の新演出とプッチーニ『ラ・ボエーム』の現代的書き直しである『レント』によって考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	舞踏劇の現在-バレエの変容	２０世紀は「ダンスの世紀」と呼ばれるほど、バレエや新しいダンスが舞台表象の全面に躍り出た時代であった。ロマン派バレエに発するクラシック・バレエが、なぜ現在でも人々の熱狂を呼ぶのか、また新しいバレエやダンスが、２０世紀後半の舞台芸術にもたらした変革は何であったのかを、スエーデンの振付家マツ・エックによるクラシック・バレエの技法と意味作用の読み直し（『白鳥の湖』『ジゼル』）を手掛かりに考えてみる。「ベジャール以後」の先駆的振付家（ジョン・ノイマイヤー、マツ・エック、ウイリアム・フォーサイス、ピナ・バウシュなど）と、クラシック・バレエの現場がどう切り結ぶのか、それをパリ・オペラ座の舞踊総監督ブリジット・ルフェーヴル、若手ダンサーのバンジャマン・ペーシュ、オーレリー・デュポンのインタビューを挟んで、考察する。シルヴィー・ギエムの踊るマツ・エックと、パトリック・デュポンの踊るノイマイヤーは、こうした作業の身体的な位相をよく分からせてくれるだろうし、ウラディーミル・マラーホフの踊る身体は、ニジンスキーによってバレエにもたらされた革命のジェンダー的局面を理解する上で有効だろう。	渡邊守章	渡邊守章
15	舞台はどのようにして作られるのか-『フェードル』の軌跡	舞台芸術はすぐれて「集団的な創造作業」である。その中での「演出家」の作業はどのような歴史をもち、どのような根拠に基づいているのか。この局面に焦点を当てつつ、舞台創造の実際を具体的な事例に則して収録し、分析する。（1999年11月－12月に、ラシーヌ没後300年を記念して東京とパリで上演された「空中庭園」制作、渡邊守章訳・演出『悲劇フェードル』の稽古の記録。）舞台芸術の「作業論」の一例である。	同上	同上

＝ 現代生物科学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山田　晃弘（東京大学名誉教授）〕
〔主任講師：中澤　　透（元放送大学教授）　〕

全体のねらい

地球表面の限られた空間と厳しい条件のもとで、生命は発展してきた。そのために、生命体は、遺伝子の発現と複製を基本としたさまざまなしくみの工夫が必要であった。生命体のかたちつくり、いとなみ、個体の統制、個体の環境との対応、そして、生命体の発展により多様化した個体群を捉え、そのしくみを考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命というシステム	生命は、個体の維持により保たれ、個体が限界に来ると、増殖によって継承される。個体は、環境の変化に対して、恒常性を保つしくみをもち、長期スケールでは、個体の変革によりこれを克服する。このように柔軟な生命のシステムを考察する。	山田　晃弘（東京大学名誉教授） 中澤　　透（元放送大学教授）	山田　晃弘（東京大学名誉教授） 中澤　　透（元放送大学教授）
2	発生と遺伝子	発生とは様々な細胞が分化し、統一のとれた個体に作り上げられる過程である。この発生過程を遺伝子発現の時間・空間的変化過程と見る立場から、初期発生に重点を置き、主としてショウジョウバエを例にとって講義する。	岡田　益吉（筑波大学名誉教授）	岡田　益吉（筑波大学名誉教授） 中澤　　透
3	発生と形態構築	動物の発生過程において様々な器官が形成され、形態的、機能的に分化する過程では、細胞間あるいは組織間の複雑な相互作用を必要とする。これらの現象について、そこに関わる多くの物質や遺伝子に注目して講義する。	八杉　貞雄（東京都立大学教授）	八杉　貞雄（東京都立大学教授） 中澤　　透
4	哺乳類の発生	哺乳類の発生は子宮内で進行する。胎児の様々な細胞を作るためには幹細胞が重要である。全能性をもつ受精卵と未分化幹細胞、卵子や精子を作る始原生殖細胞、神経系幹細胞、造血系幹細胞が存在する。最近は遺伝子導入動物や遺伝子破壊動物が作られて様々な研究に使われている。	中辻　憲夫（京都大学教授）	中辻　憲夫（京都大学教授） 山田　晃弘
5	植物の形態形成	植物の形態形成は遺伝子プログラムにより進行し、初期胚の発生は環境の影響を殆ど受けないが、発芽後の栄養成長、生殖成長の過程はさまざまな環境要因により支配される。形態形成の遺伝子発現に関わる環境要因、植物ホルモンの役割を学ぶ。	鎌田　博（筑波大学教授）	鎌田　博（筑波大学教授） 山田　晃弘
6	生物ではたらく構造	生物の形の基本単位は細胞である。細胞内外には膜、細胞小器官、細胞骨格や外部構造など多様であり、分子の特性に依存して一連の生物現象が進行する。分子としてはタンパク質だけでなく、遺伝情報に関わる分子もかたちとはたらきに関連する。	中澤　　透	山田　晃弘 中澤　　透
7	生体分子とその代謝	生命現象をつきつめると、生体内の分子のはたらきに帰せられる。これらの分子は生体内の化学反応（代謝）によって供給され、その動力となるエネルギーも代謝によって供給される。生体内の基本的代謝とその生体構造との結びつきを学ぶ。	山田　晃弘	中澤　　透 山田　晃弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	細胞増殖と細胞周期	生物の発生と個体の維持あるいは世代を超えた種の持続の全ての基礎は、遺伝的に全く同じ情報を持った細胞を繰り返し作り出していくことにある。本章では、こうした細胞の複製を制御する分子システムについて概説する。	岸本健雄(東京工業大学教授)	岸本健雄(東京工業大学教授) 中澤透
9	体内情報と調節	多細胞動物では細胞が調和と統制の取れた生理機能を営む。内部環境の恒常性を維持するために、細胞間で情報を授受して有機的な統合を行う制御システムを発達させた。ホメオスタシス、神経・内分泌・免疫系のクロストーク、細胞間情報授受の分子的仕組みについて述べる。	能村哲郎(埼玉大学名誉教授)	能村哲郎(埼玉大学名誉教授) 中澤透
10	個体防御システムの成立	多細胞生物個体を構成する細胞は受精卵由来のクローンである。この講義では、個体を構成する細胞クローンの同一性を監視して侵入者を排除する生体防御の仕組みと、その究極の形である脊椎動物の免疫システムがどのように「自己と非自己」を見分けているかを概説する。	栃内新(北海道大学助教授)	栃内新(北海道大学助教授) 山田晃弘
11	生物の行動をきめるもの	動物は動くが植物は動かない。これは食物の獲得法の違いによる。動くものと動かないもので、形はどのように違うのだろうか？ また、時間の速度は生きものによって変わる。形や時間が行動にどう影響するかを考える。	本川達雄(東京工業大学教授)	本川達雄(東京工業大学教授) 中澤透
12	生態系の発展と生物	自然界の景観や清浄な大気と水は、長い地球の歴史の中で物質循環と生物活動の共進化が生み出した。この共進化の枠組みを紹介し、特に海と森林の生態系の特徴とその中の生物の生き方について紹介する。	和田英太郎(京都大学教授)	和田英太郎(京都大学教授) 山田晃弘
13	生物多様性	小はバクテリアから大はクジラに至るまで、地球上にはきわめて多様な生物が生活している。このように多様な生物が共存する仕組みを紹介するとともに、近年生物多様性の減少が危惧されている熱帯雨林の生物の生活を、共生関係に注目しながら紹介する。	安部琢哉(元京都大学教授)	安部琢哉(元京都大学教授) 山田晃弘
14	生物進化のプロセス	４０億年前に出現した生命では、ＤＮＡでなくＲＮＡが遺伝情報や代謝などの生物活動の主役であったと考えられている。このような生命の歴史を概観し、ゲノム多様化のプロセスや生物進化へのレトロポゾンの関わり等について講義する。	岡田典弘(東京工業大学教授)	岡田典弘(東京工業大学教授) 山田晃弘
15	現代生物科学の方向	２１世紀には、ヒト等主要生物のゲノム全構造の解析を通じ、生命のしくみ、癌その他の難病治療への貢献、農作物の品種改良が進められる。一方、熱帯、深海の生態系の解明、宇宙への生命の発展も試みられよう。限りある地球資源のもとにヒトを含む生物の将来のあり方は如何にあるべきか、生物学の示唆は大である。	中澤透 山田晃弘	中澤透 山田晃弘

＝ 科学の思想と論理（’０１）＝（R）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：山田　　晃弘（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然科学は個々の事象の集積で、それぞれ専門化されたものと思われていることが、しばしばある。しかしその原理とリテラシーには壮大な体系がある。これは科学の思想や科学的世界観としても興味深いものである。それが身につけば、ミクロからマクロの世界まで、物質・生命界から宇宙までをとおして、専門を超えて自然界の全容が見えてくる。また自然科学で磨かれた概念と論理には一般性があり、文化・社会的現象に対処する場合にも大いに参考になるものがある。これらの意味で、自然科学には広く思想的にも実用的にも意義があり、この科目は文科系の学生にも理科系の学生にも興味を持ってもらえるものにしたつもりである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代科学の誕生	（最初にこの科目の主旨について主任講師が語る。） 近代科学はコペルニクス、ガリレオ、ニュートンの時代から本格的に始まる。デカルトは分析から始めてそれを総合する方法を提唱した。それは大きい成功を収め、現代科学技術の時代を作った。しかしこのような分析と総合が成功するためには重大な理論的前提がある。逆にその前提が満たされない世界には、まったく新しい方法論が要求されている。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授） 杉本大一郎（放送大学教授）
2	物質観とその歴史	物質はそれ以上には分割できないものとして原子が考えられた。分子は原子が結合したものである。それが化学に発展した。その後、原子はさらに分割され、その構成要素として原子核が研究がなされるようになった。物質世界には階層構造があり、エネルギーの大きさの桁によって分類される。今では宇宙における物質世界の歴史まで分かっている。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎
3	生命観とその歴史	生命とは何か。古来、学問の広い分野で論じられてきた命題である。生物学史では、生命体は非生物とは異なる特異的存在とする生気論が、まず、提唱され、その後、生命のしくみが解明されると、生命体と非生物の間に本質的な差はないとする機械論が提唱されるようになったという。しかし、生物学における生命観をこのような二者に極論してよいものだろうか。生物学史を通して、この問題に光を当ててみたい。	山田　晃弘（東京大学名誉教授）	山田　晃弘（東京大学名誉教授）
4	生命システムとその特質	生命体というシステムは、細胞に含まれる遺伝子情報の発現によって個体を構築し、個体を維持し、遺伝子を複製することにより個体を伝承する。また、遺伝子を変異させて、環境の変化に適応した個体へ進化する。このように、生命体は、遺伝子レベルですべてを制御された存在に見えるが、一方で、発現された情報間のさまざまな相互作用があり個体の一層の安全と繁栄を計るため、生命体は試行錯誤を続けている。	同　上	同　上
5	情報の取得	自然科学は自然界の成り立ちについて、情報を取得することから始まる。自然現象のいろいろな階層と対象に応じていろいろな情報取得の視点があり、学問のそれぞれのディシプリンを構成している。しかしそれは対象の外形によるものだけではない。情報取得の階層性はエネルギー空間や時間スケールによっても分類され、多様である。	杉本大一郎	杉本大一郎
6	近代科学における証明	科学における実証とは何か。それはどういう役割を果たしてきたか。実証されるべき事実の客観性は科学者集団や社会の間主観性とはどういう関係にあるか。科学を進める側の立場から、これらの問題を批判的に論ずる。	長岡　亮介	長岡　亮介
7	理論・実験・モデル	実験や観測はどのようにして理論化されるか。理論はどのようにして実験や観測を導くか。理論は単なる事実の集積ではない。理論は体系化されることによって、その理論を構成するのにキーとなった実験事実を含むと同時に、それを乗り越える。理論に使われる数理的リテラシーとその意義、その数学との違いについても考える。	杉本大一郎	杉本大一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	法則とは何か	実験や観測をとおして得られたものの中で、何が「法則」たりうるのか。法則は観測者の視点を超えて成り立ち、その表現は座標変換に対して不変でなければならない。問題になるのは個別性と一般性、原因と結果の因果などである。一般性と言っても法則には適用限界とその階層性がある。因果については決定論以外の法則もある。	杉本大一郎	杉本大一郎
9	理論の階層性と包摂関係	法則と同様に理論にも適用範囲がある。例えば相対性理論の体系は、速度の遅い極限としてニュートン力学を包摂している。だからと言ってニュートン力学が不用になったり、ニュートンの時空概念が死んだりするわけではない。それぞれが適用範囲に適切な概念体系をもっている。同様なことは他のパラダイムの理論体系にも当てはまる。	同上	同上
10	ローカルな論理とグローバルな論理	個々の要素現象は相互に作用し合い、一つのシステム（系）という総体を構成する。システムのグローバルな振舞いは要素のミクロな論理の集積が決めるものではあるが、全く別もののように見え、システムの主要な側面や着眼点になることが多い。また熱力学のように、ミクロな事柄の詳細が分からなくても総体の振舞を論じる体系もある。	同上	同上
11	地球という自然界の構成とその歴史	近代の自然科学が成長を開始したルネッサンスとそれに続く時代には、科学の諸領域は細分化されていなかった。その後18世紀になって、地球（地球型惑星）を対象にした分野が特化されるようになってきた。ここではまずその経過を追う。そして指導的な諸学説の特徴について考察し、物理学分野で広く受け入れられている「パラダイム理論」が、地球科学分野ではどのように当てはめられるかという問題について考える。	荒牧　重雄（日本大学教授）	荒牧　重雄（日本大学教授）
12	地球とその生命界	文明が発達し、ヒト中心の世界観が日常となった今日では、ヒト中心の生物界が地球上における全自然界のほんの一部にすぎないことを忘れがちである。生命体は、地球上の水の中で誕生し、進化して多様化した生態系にまで発展したが、地球上の極く限られた環境の産物に過ぎない。限界のある生物界を無視し、自然界の流れに対抗しようとするヒト文明社会のあり方についても考えて見たい。	山田　昇弘	山田　昇弘
13	変化と平衡および定常状態	自然界には非平衡状態が定常的に続いていることが多い。地球の環境や生命の存在はその典型である。線形代数の方法を用いた物理学の形式では、平衡状態から少ししか離れていない系が扱われてきた。しかし現実に生起する世界を扱うためには拡張された概念体系が必要となる。非線形・非平衡・開放系について考える。	杉本大一郎	杉本大一郎
14	非平衡世界の形成	空間と違って時間には流れの方向があり、過去と未来は区別される。閉じた系では時間の矢は、エントロピーが増大し、情報や秩序は崩壊していく方向に向いている。しかし現実の宇宙や自然界では、自発的に秩序や形態が形成されていくことがある。両者の関係はどうなっているのであろうか。これは社会の変化の問題とも関係するようである。	同上	同上
15	科学・技術・社会	科学と技術は、人間が自然界をコントロールする方向に進められてきた。そして今や人類の活動が地球という有限の自然界を圧迫したり、生命界を含む自然界の基本的な流れに逆らうようにもなっている。21世紀に入ったいま、科学技術と人間社会・文化との関係を総括的に考え直してみる時期にある。その上で、21世紀の科学はどうあるべきかについて、専門分野の異なる4人の講師が討論する。	同上	担当講師全員

＝ 地球環境を考える（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家　達將（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：新飯田　宏（関東学院大学特約教授）〕

全体のねらい

今日深刻な問題となっている、地域的公害からさらに拡大した地域規模での環境問題について、その現状・原因、そして解決策を、自然、社会、科学・技術等各方面から考察し、総合的な理解をめざすものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球環境問題とは何か	今日起っている多様な地域環境問題について、概観し、その相互連関性を考察し、この問題をどのように捉えたらよいかを考える。	道家　達將 新飯田　宏 阿部　齊 濱田　隆士	道家　達將 新飯田　宏 阿部　齊 濱田　隆士
2	地球温暖化とは何か	化石燃料の大量燃焼から発生する地球温暖化は、なぜ地球環境に悪影響を及ぼすのかを明らかにしつつ、その自然科学的メカニズム、その予防策、国際的取組について説明する。そこでは、Sustainable development（持続可能な発展）の理念とは何かも明らかにされる。	新飯田　宏（関東学院大学特約教授）	新飯田　宏（関東学院大学特約教授） 濱田　隆士（放送大学教授）
3	水の惑星・地球	地球は太陽系唯一の水の惑星である。水は生命を育み、豊かな自然をもたらし続けてきた。その地球の水環境が急速に悪化している。今回は、地球水システムの本質、水の持つ自然浄化力、川や海の機能、そして水環悪化の現状・原因と解決策を考える。	濱田　隆士（放送大学教授）	濱田　隆士
4	消えゆく森林	多様な生物が息づく熱帯雨林。アマゾンに焦点を当て、その開発による破壊の状況、大原生林消滅の危機的状況を見ながら、なぜそのようなことが行なわれるのか、その影響はどのようなものか、どうすればよいのか等を考える。	新飯田　宏	新飯田　宏
5	砂漠化はなぜ起きる	世界各地で砂漠化が進んでいる。そもそも砂漠とはどんなところなのか、砂漠化の原因は何か、解決策はあるのか等につき考える。 異常気象が循環システムの乱れであること、熱帯海域は「海の砂漠」であること、また都市化は砂漠と同義であることなども述べる。	同上	同上
6	拡がるオゾンホール	フロン、メタンによるオゾン層の破壊が極地だけでなく全地球上空に広がりつつある。代替フロンもオゾン層を破壊する。オーロラが語る環境破壊への警告などを聞きながら、地上の現実生活における解決策を考える。	同上	同上
7	生物多様性の保全	レッドデータブックの見方・読み方、「絶滅」についての正確な理解、生態的に反地球型生物と言える人間の問題について考え、種の多様性保全の意義について述べ、生態保存策と開発思考との矛盾について考える。動物の権利、野生生物はペットではない点にも論及。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授） 濱田　隆士

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自然との共生 ～ビオトープとナショナルパーク	世界各国の環境保護政策について論じる。 バイソンを絶滅から救うために設けたとされるアメリカのナショナル・パークやドイツのビオトープなどを例として考察し、わが国における環境保護政策についても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊 濱田　隆士
9	エネルギー	今日私たちは、石油・石炭など化石エネルギーを大量に使用することで、利便さを発展させる反面、環境を悪化させつつある。環境悪化を招かないようなエネルギーの発生と利用はどうすれば可能になるのか。それには科学・技術だけでなく社会的問題の解決が要る。	新飯田　宏	新飯田　宏
10	自動車社会の功罪	20世紀文明の象徴である自動車の大量生産と利用は、プラスの面とともに、マイナスの面をもたらしている。その実態に迫るとともに、今後どのようにすれば、マイナス面の克服が可能となるのか、各方面から検討してみる。	同上	同上
11	廃棄物－サイクルとリサイクル	今日私たちは、自分たちの廃棄物の処理に悩んでいる。自然には、自然のエネルギーと物質の循環がある。人間の廃棄物がこの循環系に入るとどのようなことになるのかを見るとともに、人間や生物の安全が確保できるリサイクルシステムについて考える。	道家達將（東京工業大学名誉教授）	道家達將（東京工業大学名誉教授） 阿部　齊
12	人類と生態系	エコシステムと「エゴシステム」とも言える反地球型活動を行う人間によるシステムを対比し、エビ養殖とマングローブ林開発などに見られるような過剰生産・過剰消費の現状を調べ、人間がいかに地球生態システムを乱しているかを考え、解決策を論じる。	濱田　隆士	濱田　隆士 阿部　齊
13	日本の環境問題と政策	世界の中のとくに日本における環境問題・環境政策に焦点をあてて問題点と解決策を論じる。例として、ゴルフ場の問題、干潟・海浜の消滅など、また水俣病や自然保護の問題などについても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊
14	環境政策と国民の取組み	まず、地域環境問題から地域環境問題へと基本的性格の変化に国民の意識が遅れいたことが情報の不確実性と重なって、環境対策を遅らせて来たことを明らかにしつつ、「持続可能な発展に向けて、産業・エネルギー・民生の各部門が、また政府がどう対応しつつあるか、またＮＧＯの役割についても検討する。	新飯田　宏	新飯田　宏
15	不確実な未来へ向けて	これまで論じて来たこと、また論じられなかったことを取り上げ、地球環境問題について総括したい。	道家達將 新飯田　宏 阿部　齊 濱田　隆士	道家達將 新飯田　宏 阿部　齊 濱田　隆士

＝ 共生の時代を生きる（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：江渕　一公（放送大学教授）〕
〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

２０世紀における国民国家の発展と科学技術の進歩は、人類の生活に計り知れない恩恵をもたらすと同時に、世界大戦や環境破壊を含む人類史上未曾有の悲惨かつ深刻な問題もたくさん惹き起こした。今日、最も深刻な問題は、民族問題と（自然・社会）環境問題である。民族問題は人間どうしの文化的共生にかかわる問題であり、環境問題は人間と自然および社会との調和的関係にかかわる問題である。２１世紀への転換に際し、現代人は、人間と文化環境・社会環境・自然環境との関係を「共生」や「調和」の視点から捉えなおし、新しい世紀にふさわしい価値観と人間の生き方を確立することを求められている。この科目は、そうした課題に迫るために、人間の探究、生活と福祉、及び産業と技術の３つの専攻分野においてそれぞれに今日的関心を喚んでいる実際的諸問題を世界的視野の中でとりあげ、学際的アプローチを試みることによって、新しい時代における人間の生き方を追求しようとするものである。

	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	共生の時代を生きる人間の課題 -問題提起－	転換期を迎える現代人の課題は、人間と自然及び社会環境との関係を「共生」や「調和」の視点から捉えなおし、新しい時代にふさわしい価値観と人間の生き方を確立することである。「転換期」の意義と「共生」の概念を検討し、文化、生活、技術の３つの立場から、各回の課題を概観する。	江渕一公（放送大学教授） 酒井豊子（放送大学教授） 森谷正規（放送大学教授）	江渕一公（放送大学教授） 酒井豊子（放送大学教授） 森谷正規（放送大学教授）
2	多文化共生の社会	ヒト及び文化の地球的規模の流動化が進む現代の特色の一つは、世界各地に文化的モザイクが出現し、多文化共生社会が発展することである。ここでは、「ニューカマー」の外国人に焦点を合わせて、彼らと地域住民との共生の姿を、関東地域の「街づくり」運動と関連付けながら多面的に検討する。	江渕一公	江渕一公
3	「民族」と地域社会－国家・行政・日常生活－	多文化共生社会の新しい動きをリードするエスニシティの動態は、国民国家の発展過程と密接な関連をもっている。この問題を「オールドカマー」に焦点を合わせ、そのエスニシティの消長過程並びに出身地とのネットワークに関連づけながら、主に関西地域の事例に基づいて検討する。	原尻英樹（静岡大学教授）	原尻英樹（静岡大学教授）
4	異文化間コミュニケーションとネットワーク	多文化共生社会における平和的、協力的関係は、異文化に対する相互理解・相互尊重の態度とコミュニケーション能力に支えられる。異文化間相互理解を促進するコミュニケーションをめぐる諸問題について、「アジアとの共生」の視点から在日ベトナム系住民の事例を中心に検討する。	川上郁雄（宮城教育大学教授）	川上郁雄（宮城教育大学教授）
5	多文化共生の社会と人間形成	ヒトの国境を越えての移動は、複数の文化にまたがって成長する子どもの増加を促す。日本では日本語力が十分でない子どもが急増し教育に様々な課題を提起している。多文化共生社会に生きる子どもの教育の現状を教育現場に即して検討し、日本の異文化間教育の現状と課題について考える。	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）
6	障害者と高等教育	世界的な均等法の流れの中で現代の日本の状況、特に高等教育を視座の中心にすえて障害の問題を議論する。またインフォメーションテクノロジーの役割、先端生殖技術による障害者排除の思想など、科学の投げかける新しい光と影を含めて、バリアフリー社会への実現にむけて検討する。	広瀬洋子（メディア教育開発センター助教授）	広瀬洋子（メディア教育開発センター助教授）
7	少子化社会と男女共同参画	少子化は活力ある社会を維持する上で深刻な問題と認識され始めている。出産・子育て期の現状が人間としての生涯発達、自己実現を図る上で、マイナスのイメージを抱かせている結果であろう。ジェンダーギャップ、勤労条件、支援システムなど、少子化の要因を分析し、今後の課題を考察する。	原ひろ子（放送大学大学教授）	原ひろ子（放送大学大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	長寿社会とライフコース	寿命の伸長は個人の人生の長さを保証し、20年以上にわたる高齢期をもたらした。その結果「ヤング・オールド」という新たな人生段階が特化されてきた。ここではこの未知なる「ヤング・オールドをいかに生きるか」という課題について、世代間の共生という視点から考察する。	嶋崎　尚子（早稲田大学教授）	嶋崎　尚子（早稲田大学教授）
9	家族の共生を考える	近代社会にあって、家族は企業に丸抱えになるという形で世帯単の暮らしを営んできた。そこには企業に磁場をもつ家族の姿がある。企業中心社会から家族のライフスタイル化が生じるなかで、もはや家族＝世帯は自明ではない。企業中心社会以降の個人と家族の共生を考察する。	同　上	同　上
10	生活者優先の視点	生活者優先、生活者視点などといわれ始めてからすでに久しいが、生活者優先とはどういうことか。一方、産業界では、消費者優先の体制を充実させてきているが、消費者優先は生活者優先とどう繋がっているのか。真の生活者優先の視点を高めるための、生活者、消費者等の課題を考察する。	酒井　豊子	酒井　豊子
11	共生を目指す技術の時代へ	個々人の生活向上に大きく寄与してきた技術が、広く普及するとともに人間、社会、自然に重大な負の影響をもたらしている。また、これから豊かさを求めて工業化する発展途上国がもたらす影響も大きい。いよいよ共生を目指す技術へ進むべきであり、その方向を示す。	森谷　正規	森谷　正規
12	物質と人間、自然	生活に大きな恩恵をもたらした多種多様な新しい物質が、様々な不本意なかたちで人間、社会、自然に入り込んで、健康、環境の面で負の影響をもたらしている。これからは、負の影響を極力押さえるように物質の開発と利用を進めねばならず、そのあり方を探る。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
13	エネルギーと人間、自然	生活における各種のエネルギー利用、車の利用が大気汚染、海洋汚染、地球温暖化など地球環境破壊の因となっていることを正しく認識して、その将来の重大問題化を防ぐために好ましいエネルギーの生産、利用のあり方を探らねばならず、その可能性を示す。	森谷　正規	森谷　正規
14	社会システムと人間	現代の社会は、交通、廃棄物処理、防災、福祉などの面で重大な問題を抱えており、さらに深刻化するおそれも強い。そうした社会問題に対して技術的な対応策は種々あるが、経済的、社会的な難題があり、進みがたい状況がある。その対応を進めるのは、社会全体の大きな課題である。	同　上	同　上
15	共生の時代の人間の生き方 －総括－	以上の各回における考察を踏まえて、３人の主任講師による総括と対談を行い、転換期の人間の生き方についてのこれからの課題と展望を明らかにする。	江渕　一公 酒井　豊子 森谷　正規	江渕　一公 酒井　豊子 森谷　正規

＝ 現代社会とスポーツ（ '０１）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 渡邉　融（元放送大学教授）〕

全体のねらい

現在、世界各国でスポーツの振興が社会発展計画の一環として取り上げられているので、その状況を概観する。次に現代日本におけるスポーツ実践の諸相を考察し、また、現代スポーツの一方の特徴である産業化、科学化の状況を一瞥する。そして、スポーツを我々の良き財産とするために、その問題点を探り、望ましい在り方を考える。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	現代スポーツの諸問題	まず、この科目で扱う「スポーツ」の意味内容がどのようなものかを明らかにし、ついで、２から１４までの各章で扱う諸問題を紹介する。	渡邉　融（元放送大学教授）	渡邉　融（元放送大学教授）
2	現代のスポーツ政策	スポーツは本来個人の私的かつ自由な活動領域に属するものであるが、現代では各国とも、国民の健康の維持増進、社会的連帯感の形成、国民経済の発展の観点からスポーツ振興政策を極めて重視するようになった。これらの政策の趣旨内容等を比較検討し、世界的な趨勢を探る。	池田　勝（大阪体育大学教授）	渡邉　融 山口　泰雄（神戸大学教授）
3	現代のスポーツ組織	20世紀の各国社会に生じた最も顕著な変化は国際化と大衆化であった。スポーツの世界でもこの傾向は無視できない。本章では、この趨勢を高水準の競技スポーツと市民スポーツとについて一瞥し、今後の国際社会に適合したスポーツの国際組織の在り方を考える。また、国際化と大衆化の不可欠の帰結であるスポーツとナショナリズムの密接な関係についても考えたい。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
4	子供とスポーツ	日本におけるスポーツの発達は、明治以来、学校制度に依存するところが大きかった。しかし、近年の社会変動により学校のスポーツが曲がり角に立たされている。本章では、学校における部活動や学校外の各種スポーツクラブ等、子供達のスポーツ活動に焦点を当て、問題の所在を探り、望ましい姿を考える。	渡邉　融	渡邉　融
5	市民スポーツの盛況	市民マラソン、ウォーキングイベントの盛行と、その国際化・祝祭行事化は顕著である。一方、フィットネスクラブはファッション産業化し、また、数百種といわれるニュースポーツが簇生している。本章では、これらの新しい市民スポーツの有り様を探る。	同　上	同　上
6	地域社会とスポーツ	我が国では生涯スポーツの拠点として地域に根ざす総合的スポーツクラブの構築が期待されている。これは既存の学校施設等を活用した、多世代の成員からなる組織である。そこでは、地域住民の主体的な組織力・経営力が求められている。本章では、地域社会論から見た望ましいスポーツの姿を考える。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
7	高齢社会とスポーツ	21世紀第２四半期には超高齢社会に突入することが予測されている。高齢者の身体的能力水準の向上と維持は高齢者の自立の前提であり、社会活性化の必須条件である。このような観点で、老年学から現代社会のスポーツ、高齢者スポーツのあるべき姿を考える。	柴田　博（桜美林大学教授）	柴田　博（桜美林大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	障害者とスポーツ	近年、障害者のスポーツに対する参加意欲は旺盛である。しかし、様々な障害があり、それへの対応は立ち遅れがちである。スポーツにおける「バリアーフリー」、「ノーマライゼーション」とは何か、障害者福祉論からスポーツを考える。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授） 臼井永男（放送大学助教授）
9	競技スポーツ	本章では、オリンピックスポーツ、興行としてのスポーツ等、高水準の競技スポーツの有り様と問題点、たとえば、スポーツ組織の運営、タレントの発掘・養成、スポーツのメディア化、商業化等について考えていく。	渡邉融	渡邉融
10	スポーツと経済	国民のスポーツへの関心・欲求が一層高まり、それに呼応してスポーツ産業の広がりと雇用創出、地域経済の活性化などの経済的効果や健康の維持増進による医療費の節減効果なども認められるようになった。スポーツが国民経済に果たす役割について概説する。	池田勝（大阪体育大学教授）	渡邉融 間野義之（三菱総合研究所主任研究員）
11	スポーツとテレビ	スポーツの膨張と産業化はＴＶの出現と普及、多額のＴＶマネーによる所が大である。一方、スポーツはＴＶ番組の最高のソフトといわれ、メディアの寵児となっている。ＴＶとスポーツとの相互関係、その中でのスポーツの主体性と今後の有り様を考える。	杉山茂（ｽﾎﾟｰﾂﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）	渡邊守章（放送大学副学長） 杉山茂（ｽﾎﾟｰﾂﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）
12	表象としてのスポーツ	身体競技の祝祭性、「スポーツする身体」の成立、現代メディアにおけるスポーツを見る「まなざし」とスポーツを見せる「仕掛け」等、表象文化としてのスポーツについて考える。	渡邊守章	渡邊守章
13	競技スポーツ－人間の限界への挑戦－	オリンピックや世界選手権等では、記録や技を競い合って人間の身体で表現できる限界への挑戦が続けられている。日頃の激しいトレーニングによって人間の身体はどのように変わって行くのか、またどこまで変わりうるのか、そうしたトレーニングをスポーツ医・科学がどのようにサポートしているのかを解説する。	浅見俊雄（日本体育大学教授）	浅見俊雄（日本体育大学教授）
14	競技スポーツとハイテクノロジー	スポーツのトレーニングや競技の現場ではハイテクノロジーが生み出した様々な用具や機器、設備が利用されている。陸上の100ﾒｰﾄﾙ競走一つを取ってみても、シューズ・走路・計時装置等、すべてハイテクで支えられている。安全性、トレーニング効率、競技成績などの向上や、競技会運営の合理化、機能化に貢献している様々な先端技術を見て行く。	同上	同上
15	スポーツを人類の良き財産に	ここまで見てきたこと、考えてきたことをまとめ、如何にしてスポーツを人類のよき財産にしてゆくかを話し合う。	渡邉融	渡邉融 浅見俊雄 倉沢進 阿部齊

＝ 家族論（ '０１）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

「人間にとって家族とは何か」 「社会にとって家族とは何か」を根本的に考察し、整理することは人文科学・社会科学における肝要な課題である。この科目は、諸学問領域での家族論の成果を整理したうえで、変動期にある現代家族現象への学際的アプローチの手がかりを提供するものである。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「家族とは何か」における多義性	日本社会で一般的に考えられている「家族」といっても歴史的にまことに多様であった。しかし、地球の各地ではさらに多様な「家族」が存在する。人々は何を「家族」に期待し、何を「家族」に期待しないのであろうか。人々にとって「家族とは何か」を特に現在日本社会における諸問題から考える。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	ヒトと人間の交差する場としての家族	人類社会のいずれの時代にも、家族は生物としてのヒトと文化をもつ人間が交差する場として機能してきている。「性と生殖」「加齢」「文化的価値の伝承」「世代間の葛藤と共存」「生者と死者の関係性」などの領域に関して諸社会を比較し、「家族」という場と「家族以外」の場に見られる上記の諸領域のさまざまな様相を考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
3	家　族　と　法	家族制度の時代、第二次大戦後の高度経済成長の時代、女性の職場進出と社会の少子化・高齢者化が急激に進んでいる現在、それぞれに対応して家族の法制度が前提とする標準的な家族像・家族観は変化する。ここではその変化をたどり、家族と法のかかわりを考察する。	二宮　周平（立命館大学教授）	二宮　周平（立命館大学教授）
4	家族と社会政策	サラリーマン（雇用者）の夫に専業主婦の妻、郊外の団地暮らしで子どもは２人、そんな家族が「標準世帯」と呼ばれることが多い。サラリーマンの専業主婦世帯は、いつごろ、どのように「標準世帯」となったのか、そこに社会政策はどんな役割をはたしたのか。	大沢　真理（東京大学教授）	大沢　真理（東京大学教授）
5	企業社会と家族	企業社会の文化規範は、サラリーマンの働き方のみならず、彼らの家族成員としての在り様をも規定する。企業社会における家族政策、文化規範が、家族生活にもたらす影響について考える。合わせて、近年における変化についてもとりあげる。	嶋崎　尚子（早稲田大学教授）	嶋崎　尚子（早稲田大学教授）
6	人口の再生産と家族	かつてマードックは核家族論を展開するなかで、家族の基本的機能として性、生殖、経済、教育をあげた。家族の生殖機能、すなわち人口の再生産の場としての家族の位置付けは普遍なのか。人口生殖技術の発展という社会変動との関連で考える。	同　上	同　上
7	家族の発達と個人のライフコース	個人の家族的関係からなる家族はそれ自体、時間の経過のなかで変化する（家族過程）。一方個人のライフコースは、家族内の世代間関係ならびに家族過程と共時性と非共時性をもちながら進行する。家族のライフサイクル。モデルを題材に、個人のライフコースと家族過程との関連性を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	歴史のなかの家族	近年の家族史研究は方法論的に急速な進化をとげ、歴史のなかで家族に関するドグマへの挑戦を続けている。近世日本の農民家族を具体例にしながら、実証的アプローチの方法とその成果を整理する。	嶋﨑　尚子	嶋﨑　尚子
9	変化する家族の機能	・家族研究の変化 ・近代家族の誕生 ・近代家族のゆらぎ	宮坂　靖子（奈良女子大学助教授）	宮坂　靖子（奈良女子大学助教授）
10	育児と生涯発達	・親イメージの変容 ・新しい父親研究 ・共同育児の実践	同　上	同　上
11	高齢者介護と老後問題	・少子高齢社会の到来 ・老後問題の発生 ・高齢者介護と家族	同　上	同　上
12	変わりゆく結婚	・日本における晩婚化・非婚化現象 ・晩婚化・非婚化の背景 ・社会制度としての結婚 ・現代日本における結婚の意義	善積　京子（追手門学院大学教授）	善積　京子（追手門学院大学教授）
13	脱「近代家族」への道	・ライフスタイルの多様化 ・近代家族の抑圧性 ・脱「近代家族」への課題	同　上	同　上
14	家族のアイデンティティ	「家族」を「集団」と考える人々と、「家族」を一人ひとりの人間をとりまく絆ないしはネットワークの集合体と考える人々がある。さらに「家族」を超えて生きようとする人々がある。また夫と妻という男女の対にもとづかない集団としての「家族」を形成しようとする人がいる。多様な考え方をする人々がどのようにして一定社会の中で共存していくのかを考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
15	「社会の中の家族」の現状と未来	家族の未来、クローン人間の生成を含む生殖技術の展開は、人間の家族にどのような変化をもたらすのであるうか。生物の種としてのヒトが「自己家畜化」を推し進めることによって、「人間として生きる」が何を意味することになるのであろうか。さらに、地域社会、国家、国際関係などの社会的環境の中で家族がどのように変化するのかを考える。	同　上	同　上

＝ 家族と生活ストレス（’００）＝（R）

〔主任講師：石原　邦雄（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

ストレス社会とも呼ばれ、変化の激しい現代社会にあって、また、世紀の転換期の不透明さに不安が広がるなかで、人々は家庭や家族に「安らぎ」や「よりどころ」そして愛情を求めている。しかしながら、家族自体も変化している現実があり、人々の期待は容易に満たされるものとはいえない。この講義では、今日の家族が、さまざまなストレス状況にさらされ、ある場合には自らストレスを生み出しながら、それに立ち向かって生活していくありさまと、そこに働く諸要因についてとらえ、現代家族の弱さと強さを考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．家族論入門 家族の問題性と家族の社会学	社会的事件が起こるたびに家族が問題にされる。核家族化、少子高齢化、女性の変化のなかで家族はどうなるのか。世紀の転換点で、人々は不安を抱え、家族をよりどころにしようとするが、家族自体にも問題が起きていそうだ。そこでのキーワードは、家族の個人化と多様化といわれている。家族の問題性を、社会学ではどのように捉えようとしているか。	石原邦雄（東京都立大学教授）	石原邦雄（東京都立大学教授）
2	変動する社会と家族	戦後５０年後を経て、日本社会も大きく変化してきたし、今日さらに変化しようとしている。産業化、都市化、民主化から更に、国際化、情報化、脱中心化への変化が進むなかで、家族のありようはどのように変化しつつあるだろうか。家族の、形態、機能、価値意識の面での変化を押さえておこう。	同上	同上
3	家族の内部過程と発達的変化	家族を捉えるには、いくつかの次元がある。ここでは、ミクロ社会システムとしての家族を、位座と役割の動態として捉える。更に、家族時間とも呼ばれる家族独自の変化過程であるライフサイクルと生活構造の展開を見よう。	同上	同上
4	Ⅱ．生活ストレスと家族ストレス 生活ストレスの捉え方	日常用語としても使われているストレスという言葉が、各種の学問領域で専門的に扱われていることを理解した上で、生活ストレスを捉えるモデルを考えよう。	同上	同上
5	家族のストレス論的な見方	ストレスモデルの家族への適用としての家族ストレス論とは、どのようなものであり、どのような背景のなかで成立し、発展してきたかをR．ヒルの業績を中心に概観する。	同上	同上
6	家族ストレス論の展開	ヒルによって確立された家族ストレス論の継承発展を、H．I．マッカバンの２重ＡＢＣ・Ｘモデルを中心に解説し、理論的な理解を深める。	同上	同上
7	Ⅲ．ライフイベントと家族危機 大災害の被災家族	家族ストレス研究で早くから取り組まれ、日本でも各種の研究が行われている、自然災害の場合を中心に、多くの家族を巻き込んだ、地域的な環境の急変にさらされた家族の場合を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不況・失業と家族の困難	これも家族ストレス論の成立に関連の大きかった、大恐慌や株価暴落のもとでの家族生活の困難と、それへの対応過程を、今日の不況とも重ね合わせながら見ていく。	石原邦雄	石原邦雄
9	難病・障害者と家族 －精神障害を中心に－	家族メンバーの一人が回復の困難な難病や障害を持つことになった場合、家族は扶養者としてどのようにしてその困難に対処していくか。精神障害を中心に研究例を見ながら考える。	同上	同上
10	Ⅳ．日常生活のなかの家族ストレス 職業生活と家族生活の葛藤	前の３つの章が生活の激変を扱っているのに対して、この後の章では、より日常的な状況の中で生じるストレス問題を考える。この章では、職業生活を契機に生じる家族のストレス状況として、単身赴任・海外赴任に関する研究例をもとに考えてみよう。	同上	同上
11	子どもの成長と家族関係の危機	家族のライフサイクル展開の主要な要素といえる子どもの成長発達は、これに伴う家族関係の変化とともに混乱を生じさせる、もっとも一般的な家族のストレス状況として押さえられる。	同上	同上
12	高齢者の扶養と家族ストレス	家族規範が揺らぐなかで、なお多くの家族が高齢者の扶養を実際に担っている。こうした世代間の扶養関係は、寝たきり、痴呆といった症状にとどまらず、親族関係も巻き込んで家族生活上の困難を生じさせる、大きな問題であり続けている。	同上	同上
13	夫婦関係のトラブル	離婚の増加、「家庭内離婚」など夫婦関係をめぐるトラブルは家族生活の基礎を揺るがすものである。欧米型の家族モデルを採用したが、必ずしも確立したとはいえないうちに、長寿化や女性の社会進出が進むなかで、夫婦関係の意味づけも、トラブルのありようも、変化している。	同上	同上
14	Ⅴ．展望と課題 理論上、実践上の課題	ストレスモデルで、家族生活の困難状況とそこでの動態を捉える試みは、どの程度成功したか。理論的に残されている課題はどのようなものか、また、家族に関する政策およびストレス状況下の家族への援助プログラムへの応用可能性はどのように考えられるか。	同上	同上
15	ストレス論から見たこれからの家族	家族が大きく変化しつつあり、家族の捉え方も多様化しているなかで、ストレス論による家族分析を通して、これからの家族像をどのように描けるだろうか。	同上	同上

＝ 近代社会と人生経験（’９９）＝（R）

〔主任講師：正岡　寛司（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：嶋﨑　尚子（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

近代社会は、前近代の伝統や生活様式を破壊し、そして別のさまざまに新しい生活様式をつくりだし、それらを制度化してきた。講義では、近代社会において広く普及した事柄を取り上げるが、その際とくに人びとが人生において経験する出来事のタイミングや出来事の配列に注目しながら、近代社会の特徴とその変化の趨勢を記述し、説明することに主眼をおくことにする。

講義では、近代人にあらわれた人生経験の特徴を、信頼できる時系列データ —— 個人のパネルデータやコーホート法による出来事経験データ —— によって明らかにしていく。そのデータは、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で長い年月をかけて収集された貴重な資料からなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代社会の生成と変容	最近100年間における人間生活ならびに人生の組織化にあらわれた変化は、これに先立つ数千年の間にあらわれた変化をはるかに凌ぐものであったかもしれない。たとえば、人間の平均寿命もこの間に著しい伸長をみせた。人生の延長は人びとにいったい何をもたらしたのか。	正岡　寛司（早稲田大学教授）	正岡　寛司（早稲田大学教授） 嶋﨑　尚子（早稲田大学教授）
2	近代化とライフコース	人が時間のなかを生きるのではない。むしろ、人の経験が時間を作りだすのだ。近代人の精神的特徴は、その時間意識の強さ、厳しさ、そして重要さにある。近代社会に先立つ牧畜・農耕社会において、人びとは自然のサイクル時間を生きていた。産業社会は時間の正確な測定、時計の普及から始まった。現在では、時間は人びとにとって、貨幣にまさる価値をもっているかもしれない。それゆえ、人生の時間的組織化は誰にとってももっとも重要な人生課題である。	同　上	正岡　寛司
3	経済恐慌と子ども、そして家族	子どもは家族・家庭を介して全体社会・時代と接触する。子ども期における大きな歴史的出来事との遭遇は、子どもの生活をどのように変えるのだろうか。また彼らのその後の人生経験にどのような刻印を押すのだろうか。大きな外的圧力を受けたとき、子どもはどのように大人になっていくのだろうか。子ども期に大恐慌を経験した者たちの人生経験をとおして考えていく。	嶋﨑　尚子（早稲田大学教授）	嶋﨑　尚子
4	学校キャリアと職業キャリアの選択	教育を受けることは、個人が近代社会において自らの人的資源を獲得するための経験である。教育経験がその後の職業選択の分岐に対して構造的にもたらす影響をイギリスのＮＣＤＳデータを用いて考察する。学校での位置は、その後の人生経験をどれほど広げるのか、あるいは狭めるのか、敗者復活はあるのか、構造上の位置の連結（パスウェイ）の揺らぎから考えていく。	同　上	同　上
5	近代青年の役割移行	青年期、あるいは／そして若者期が社会制度として成立し、そして世界的規模で広く普及したのは近代、とくに20世紀の現象である。青年期には達成すべき生活課題が含まれている。親の家族からの独立、学業あるいは職業訓練の修了、労働力への参入、そして結婚と家族形成である。本章では、期待される役割移行の順序と、その期待から外れた場合の社会的効果について考察する。	正岡　寛司	正岡　寛司
6	結婚の形成と解消	青年期あるいは／そして若者期を経過した若い成人は、配偶者をみつけて結婚し、やがて次の世代を再生産する。 このような世代間の再生産過程をとおして人間社会は時間的に継続していく。近代社会はこの社会的再生産過程に大きな転換をもたらした。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	人生の転機	人びとはその人生航路においていくどかの大きな軌道修正の出来事・状態（転機）を経験する。転機となる出来事はさまざまである。それらの中の１つに，自分自身が選択したのではない種類の社会的事件，たとえば戦争や経済的大不況によってもたらされる予期せざる変化や転換がある。戦争の効果はその時代を生きるすべての人びとになんらかの影響を与えるが，その時期を青年期において遭遇する若者たちは直接的に戦争に動員されていく。	正岡　寛司	正岡　寛司
8	働く母親の心理的福利と社会環境	20世紀，とくに第二次世界大戦以降における社会的変化のうち，もっとも顕著な趨勢の１つは女性の労働力参加，とりわけ乳幼児をもつ母親たちの就業参加である。若い母親たちの就業継続は家族における性別役割分担にいかなる変化をもたらしたか。また，若い母親たちの心理的な満足度は就業を継続することによってどのような影響を受けたか。そして，若い母親たちの満足度は国家政策の改善策によって高まったかどうか。本章では，スウェーデンのパネルデータを用いて若い母親および父親について考察する。	同　上	同　上
9	サラリーマンの昇進	近代産業社会においては，個人の職業キャリア（職業生活）は企業組織間・内の職位や職務の移動に特徴づけられる。終身雇用制・年功序列制雇用慣行システムを擁する日本企業社会にあって，サラリーマンはどのようにピラミッド型の職位・職務体系を移動していくのだろうか。大企業ホワイトカラー男性社員の人事管理データに基づいて，その日本固有のメカニズムを明らかにする。	嶋崎　尚子	嶋崎　尚子
10	家族時間の意味	基幹産業を支える多量なブルーカラーの労働者。彼らの職業生活は，家計経済の家族戦略に組み込まれた形で展開していく。近代社会の産業勃興の歴史は，ブルーカラー労働者と彼らの家族のライフコースにほかならない。アメリカ合衆国1830年代から１世紀にわたる紡績産業の盛衰と労働者・労働者家族の事例から産業勃興期におけるブルーカラー労働者と家族の人生経験をみていく。	同　上	同　上
11	中年期の親と子どもの離家過程	人生に組み込まれた生活段階のうち，子ども期，青年期，そして老年期についてかなり多くのことがわかっているが，中年期についてはあまり多くのことがわかっていない。「中年」という言葉が示すように，その意味は人生の中程の期間をあらわしているだけで，その内容は明確でない。本章では，子育てと親の介護という２つの重大な社会的役割を遂行しながら，しかも自身に身体的・精神的な変化の兆候があらわれ始める中年の親，とくに母親を取り上げる。	正岡　寛司	正岡　寛司
12	定年退職と家族の生活段階	定年退職後はそれまでの成人期を通して生活の中心的領域を占めてきた職業生活に別れをつげることの第１歩である。出来事としての定年退職，そしてその前後のキャリアのありようは，家族の生活段階（家族時間の進行）と共時性をもつ。働くこと（仕事）と愛すること（家族）という近代社会の人生テーマが結実し，収穫される時期である。ホワイトカラー・サラリーマンのデータから考察していく。	嶋崎　尚子	嶋崎　尚子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	人生後期への移行	近代における２つの側面における劇的な変化、すなわち個人の寿命の著しい伸長と福祉国家の形成とは、高齢者の生活に劇的な変化をもたらした。しかしだからといって、パーソナルな面における世代間関係のニーズと欲求が低下しているわけではない。定年退職をした子どもたちが超高齢の親たちの介護にあたるという現象も稀ではなくなった。	正岡　寛司	正岡　寛司
14	高齢者のライフスタイルと未亡人期への移行	高齢者のライフスタイル、および既婚女性の未亡人期についてパネルデータを用いて考察する。その際、とくに先行要因が現在のライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているかに焦点を合わせる。また、人生の最後に必然的に訪れる死は、死にゆく当人のみならず残された家族や友人にとっても危機的移行であるとみなされる。死に方にも近代社会は大きな影響を及ぼした。	嶋﨑　尚子	嶋﨑　尚子
15	ポストモダンと社会文化的ライフコース	近代社会における人生経験過程への具体的な研究を詳細に考察することからえられた成果ならびに残された課題を提示する。とりわけ日本における今後の研究展開の方向性と可能性を探っていく。	同　上	正岡　寛司 嶋﨑　尚子

＝ 生活者の経済（’００）＝（R）

〔主任講師：御船　美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）〕

全体のねらい

個人が経済社会と関わる際、労働者、消費者、債権、債務者、納税者・社会保障受給者など、さまざまな経済的側面をもつ。貨幣経済の中では経済人として行動したり、家庭や地域の生活を営み経済活動をする。個人の生活と経済との関係を認識し、経済社会において生活者が主役となる経済のありかた－生活経済を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活者の経済－何のための経済発展か	経済発展が必ずしも生活の豊かさの実現につながらないのはなぜか。従来の経済指標を整理し、それが何を示す指標なのか、経済成長政策と生活の豊かさはどのような関係かを明らかにし、持続可能な豊かな生活を実現する経済のあり方と、その条件を検討する。	御船美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）	御船美智子（お茶の水女子大学大学院助教授）
2	生活・くらしと経済	生活・くらしとは何か、生活の主体、構造、要素、プロセスを概説する。また、生活の経済的側面を抽出し、生活と経済の関係を相対化する。生活の豊かさとは何か、ものの豊かさと心の豊かさを対立的にとらえる考え方は妥当かを検討する。	同上	同上
3	現代社会と経済主体としての生活者	現代経済の構造と特徴を示し、生活者が経済主体となる条件を考える。また、生活者は複雑化する経済社会からどんな影響を受けているのか、生活者の行動がどのように経済社会のあり方を方向づけているのかを、経済構造・循環の中に位置づけて明らかにする。	同上	同上
4	生涯生活とリスクと経済	生涯にわたり生活資源、生活リスクをどのようにマネージメントするのか、資源管理の方法を概説する。貨幣管理に関わる収入と支出、資産・負債高の定義と分類、内訳、各の意味と関連をとらえ、フローとストックの概念、関係、経済取引、貯蓄の役割を把握する。	同上	同上
5	個計・個人の経済と家計・家庭経済	個人は自ら経済活動をするとともに世帯を形成して共同生活を営む。複数の個人が、なぜ、どのように家計・家庭経済を形成するのか、家計や家庭経済の構造と変化を示す。家庭経済内部の個人間の経済的平等とは何か、ジェンダー、家族共同性との関係を検討する。	同上	同上
6	政府・財政と国民・市民	生活と財政との関係を現実的、理論的に整理し、最低生活保障、福祉国家における国民と財政との関係強化を検討する。また納税、社会保険料納付、社会保障給付受給、社会福祉サービス等をめぐる問題点を探り、中央・地方政府や財政と国民・市民のあり方を考える。	同上	同上
7	市場と物価・利子率	生活者にとってのものやサービスの価格、お金の「値段」について考える。価格決定のメカニズム、消費者物価指数の対象や仕組み、消費者物価の推移、消費者物価地域差指数、制度への利用、内外価格差の考え方、利子率の種類や決定のメカニズム、推移を示す。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	消費社会と生活者の消費	消費とは何か、消費構造を把握し、生活者ニーズと消費と関係、消費の意味、位置づけを検討する。消費のメカニズム、消費の環境や条件、サービス化などの消費の動向、消費に関わる問題点を整理し、持続可能な消費社会のあり方、実現のための制度を考える。	御船美智子	御船美智子
9	金融と生活者	個人は様々な金融商品やサービスを購入したり、消費者信用や、ローンを利用したり、経済取引の決済手段として金融との関係を深めている。国際化する金融市場、自己責任原則の下での、新しい金融の在り方、そこでの生活者、取引の主体性について考える。	同上	同上
10	住宅、教育・扶養の経済	生活者の空間的基礎である住宅、次の世代育成のための教育は、生活経済上、重要な課題であり、その経済的負担が最も大きい。住宅水準、教育水準、住宅費と教育費の現状を把握し、住宅費や教育費に関する政策や制度的仕組みの在り方を検討する。	同上	同上
11	贈与・受贈と儀式・文化の経済	市場とは異なる仕組みの中で行われてきた贈与・受贈の慣習や儀式・文化は生活経済上重要な課題である。交際費、結婚や葬儀の市場の拡大、家族、価値観の多様化、市場、慣習の変化による新しい方向性などの現状と問題点を検討し、経済との関わりを考える。	同上	同上
12	生活者と労働と家事	仕事、労働、家事、ワーカーズ・コレクティブの活動、ボランティアなど、個人の働き方とその組織、環境の多様性、問題点を示す。個人が働く理由、社会的な意味、ペイドワークとアンペードワークの違いを明らかにし、職業とジェンダー、働く条件などを考える。	同上	同上
13	ボランタリー経済と生活者	生活に関わる経済は、市場経済、公共経済だけでなくボランタリー経済が重要な役割をはたしている。ネットワーク、コミュニティ、共同性、相互性、ＮＰＯなどボランタリー経済の基礎概念を整理する。また実例を検討しその問題点、制度的枠組みを考える	同上	同上
14	情報と経済社会	生活における情報の意味を明らかにし、なぜ情報化が進むのか、どのように情報化が進展しているのか、情報化の進展はどのような情報経済社会を形成しているのか、その問題点と解決のための制度を検討し、生活者のための情報経済社会の在り方を考える。	同上	同上
15	生活環境と経済	生活環境と経済の関係、生活者の立場からみた環境問題を整理し、その構造、要因を示す。また、生活環境問題を解決するための制度と経済のあり方、生活者の行動、それを支える考え方や、環境家計簿など具体的な取り組みを検討し、生活者の経済を展望する。	同上	同上

＝ 生活の経営（’０１）＝（R）

〔主任講師：原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

生活を単に家庭生活として据えるのではなく、人間の営み全般として据える。その上で、生活の主体である個人が、まわりの人々や組織、さらに国家や国際社会との関わりにおいて、自らの生活をどのように組み立てていくか大きな変動の時期とされる２１世紀前半を生きて行く上でどのような発想の転換が必要なのかを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活とは	ヒトという生物が文化をもって社会に生きる人間として主体的に生活を営む際に、年令や一人ひとりのおかれている状況に応じて、「自分」とどう折り合うのか、まわりの人間とどう折り合うのか、職場、団体、そして国家とどう折り合うのか、思想との折り合いは？	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	人間の「生活」の多様性（1）	衣・食・住・人間関係・自然とのつき合い方、超自然とのつき合い方、「時間」をどう生活の中に位置づけるのか。カナダ北方の狩猟採集生活者カショーゴティネの１９６０年代の実態をもとに１９６０年代の多くの日本人の生活との対比で考える。	同　上	同　上
3	人間の「生活」の多様性（2）	性別は越えられないものなのか。日本に生まれれば「日本人」として育っていくものなのか。「境界線」を越える生活は成り立つのか。「境界線」を越える生活を経営するということはどういうことなのか。	同　上	同　上
4	生活における「時間」とその意味	「時間」という資源は、万人に同じように機能するものなのであろうか。太陽、月、星の動き、潮の満ちひき、季節の移り変わり、天候や、個人毎の暦のあり方などと、グリニッチ天文台を基準とする近代的時間の流れと「労働時間」とお金との関係について考える。	御船美智子（お茶の水女子大学助教授）	御船美智子（お茶の水女子大学助教授） 原　ひろ子
5	生活における「お金」とさまざまな価値	「価値」は多様な基準ではかることができる。しかし、２０世紀末の日本では、「価値」をお金によってはかることが優勢になってきた。いわゆる「生活設計」といえば、生活費をどう確保し運用するかということのみと考えられるようになってきた。そこを問う。	同　上	同　上
6	生活における職業	生活の糧としての職業なのか、職業そのものは人生の目的なのか？職業をもたない子ども、主婦、高齢者、障害者、病者、ホームレスなどさまざまな状況にある人々にとって「職業がない」ということはどういうことなのか。職業というものを多様な生活者から見る。	上村　協子（東京家政学院大学助教授）	上村　協子（東京家政学院大学助教授） 原　ひろ子
7	家庭と家族親族	「家庭」とは近代の産物といわれる。「家族・親族」はヒトの発生以来、存在しているものとされる。このような個人としての人間をとりまく人間関係の絆や桎梏と人びとは多様なつき合い方をしている。今回は単身者にとっての家庭についてを考える。	原　ひろ子	原　ひろ子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生活における趣味	趣味は余暇の活用なのか、趣味は人生の目的ないしは生活の中核でありうるのか。人々の生活の中で趣味・職業・家庭が、どのように営まれていくのかについて考える。	原　ひろ子	原　ひろ子
9	生活の経営と地域社会	子ども会、町内会、老人会や住区協議会などに参加することだけが、生活の経営における地域社会の位置づけであろうか。自らの暮らす地域社会のあり方を、それぞれが、防災、資源の循環、シビルミニマム、景観、地域行政間政治との関連で自らの生活課題としてみる。	萩原なつ子（元東横学園女子短期大学助教授）	萩原なつ子（元東横学園女子短期大学助教授） 原　ひろ子
10	ボランティア活動 NGO／NPO 活動	自らが生活する地域社会の内外で、あるいは国際的な場でボランティア活動やＮＧＯ活動に参加する人々が増えている。時には、「世のため人のため」として行うこれらの活動が家庭崩壊を導くこともある。日本社会の中でのこれらの活動の位置づけと生活を考える。	同　上	同　上
11	政治参加と生活の経営	地域住民としてさまざまな施策の受益者であること、住民協議会などで政策決定過程に対する発言者となること、さらに政策決定に参加していく立場をとることなどについて、どのような現象が見られるのか、そしてそれが生活の経営とどう関連するのかを考える。	大海　篤子（法政大学非常勤講師）	大海　篤子（法政大学非常勤講師） 原　ひろ子
12	生　涯　設　計	老年期までの人生をどう生計するのかという個人の立場と同時に、この領域の課題を社会政策にどのように反映させていくかという政治参加の課題が含まれる。さらに生涯設計には自らの加齢についてのみならず、家族・地域・職場における次世代育成も含まれる。	上村　協子	上村　協子 原　ひろ子
13	危機管理と生活の経営	家族の病や死、災害、経済恐慌のみならず資源の枯渇、環境問題など、目に見えにくく身体で感じとりにくいようにしのび寄る危機に対して、一人ひとりの一生を越えた次世代やそのあとの世代に対する責任をも含めて、危機管理を考えていく。	原ひろ子	原ひろ子
14	国際化時代と生活の経営	「日本に生まれれば日本人に育つ」という前提ではなく、異質なものの共存を可能にするような生活の経営は、私たちの心の姿勢に修正を迫るものである。さらに家族・親族のあり方、職場のあり方、地域社会のあり方、ＮＧＯ／ボランティア活動のあり方も変るだろう。	同　上	同　上
15	まとめ：次世代の育成と生活の経営	２１世紀は、２０００年に生まれた人々だけでは終わらない。私たちがどのような生活の経営を行うかは、次世代のあり方、次々世代のあり方に深く影響を及ぼす。生活の経営は自分自身や、自分の家族や、自分の職場・団体の人々のためだけでなく、未来のためでもある。	同　上	同　上

＝ 消費者問題の展開と対応＝（R）

〔主任講師：小木 紀之（名古屋経済大学教授）〕

全体のねらい

消費者問題の解決は一朝一夕に可能な問題ではなく、行政、企業、消費者のそれぞれの積極的な対応が要求される。この科目は「消費者は真に守られているか」を視点に消費者問題の本質を理解し、消費者が健全な消費者主導型の経済社会を実現させていくための消費者の役割、企業、行政の責務について考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい消費者像を求めて	21世紀の新しい消費者像を模索し、自立する消費者のあり方を学ぶ。	木村 立夫（東京経済大学教授）	木村 立夫（東京経済大学教授）
2	消費者問題の課題と展望	消費者問題とは何か、消費者問題が発生してきた経済社会的な背景、主要な消費者問題、消費者の権利、新しい消費者問題の潮流などを中心に消費者問題の全体像を学ぶ。	小木 紀之（名古屋経済大学教授）	小木 紀之（名古屋経済大学教授）
3	消費者運動の歴史と展開	消費者問題解決の一側面を担う消費者運動のあゆみ（歴史と展開）を、日本・アメリカ・その他と対比させながら消費者運動の役割を学ぶ。	同 上	同 上
4	消費者行政の展開	消費者保護はなぜ必要なのか。国および地方自治体の消費者行政の仕組み、消費者保護基本法の理解を通じて、今後の方向性を探る。	同 上	同 上
5	消費者問題と消費生活関連法(1)	消費者問題に対応する消費者法にはどのようなものがあるか。情報公開と消費者・製造物責任法を中心にその課題を探る。	中村 年春（大東文化大学教授）	中村 年春（大東文化大学教授）
6	消費者問題と消費生活関連法(2)	安全・商品選択・適正な商取引と法律、訪問販売・通信販売・割賦販売と法規制、表示・警告、景品、広告と法規制など身近な消費者法を考える。	同 上	同 上
7	企業の社会的責任と消費者対応	メセナ、フィランソロピー、企業ボランティアなどの企業の社会貢献活動の実態と企業のあるべき社会的責任の課題を検討する。	木村 立夫	木村 立夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	企業の販売戦略と消費者	高度大衆消費社会における企業の販売戦略は、時として消費者不在のマーケティング活動を促す。消費者にとってのマーケティングの意味を学ぶ。	木村　立夫	木村　立夫
9	流通政策の展開と消費者	わが国の流通構造は、近年大きくその姿を変化させてきている。わが国の商取引・商慣行、国際化の進展、規制緩和などの中で、消費者志向型の流通政策のあり方を探る。	小木　紀親（日本福祉大学助教授）	小木　紀親（日本福祉大学助教授）
10	高齢化社会の進展と消費者対応	わが国における高齢化の進展は、消費者としての私たちの生活を様々な形で変化させてきている。具体的には、雇用・年金、健康・福祉、教育・文化、住宅・生活環境と高齢化の問題を検証する。	井上　崇通（明治大学教授）	井上　崇通（明治大学教授）
11	情報化社会の進展と消費者保護	マルチメディアの進展は、私たちの消費者としての環境を劇的に変化させてきている。生活のボーダレス化の持つ利便性と問題点を検討するとともに、今日、論議されている電子商取引についても取り扱う。	同　上	同　上
12	資源・環境問題と消費者	環境問題は、地域的な問題であると同時に世界規模の問題としても論議する必要がある。地球に優しいライフスタイルの確立に向けて、省資源、省エネルギー、ごみ問題等、わが国および各国の具体的な取り組みについて学ぶ。	同　上	同　上
13	サービス経済化と消費者問題	豊かさの象徴と言われるサービス経済化現象について学ぶ。サービス化の進展は、一方で消費者の支出構造に影響を与え、他方では雇用機会の変化をもたらしてきている。これらの側面についての知識を得る。	同　上	同　上
14	消費者教育の課題と展望	消費者教育の理論について学習し、学校・企業の消費者教育の意義を学ぶ。	小木　紀親	小木　紀親
15	消費者生活相談の現状と課題	多様化、複雑化する消費生活相談の現状と企業と消費者の接点に立って活躍する、消費者生活コンサルタント、消費生活アドバイザー、消費生活相談員、ヒーブ、ACAPの役割を学ぶ。	小木　紀之	小木　紀之

＝日本人口論＝（R）

－高齢化と人口問題－

〔主任講師：清水 浩昭（日本大学教授）〕

全体のねらい

人口高齢化の問題は、日本のみならず世界における現下の最重要課題であるといわれている。そこで、本講座では、世界人口の高齢化の動向を念頭におきながら日本社会における人口高齢化の特徴と問題点を人口学的な視点から概説することにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本人口論の到達点と課題	日本の人口学が今日までに蓄積してきた研究成果を紹介するとともに、高齢化問題研究の意義を明らかにする。	清水 浩昭（日本大学教授）	清水 浩昭（日本大学教授）
2	人口分析の方法とその特徴	人口学は人口現象を対象にして研究を展開している学問であるが、この学問にみられる研究方法の特徴を明らかにする。	同上	同上
3	人口高齢化研究の意義と高齢化の人口学	今、何故、人口高齢化について研究しなければならないのか。また、人口高齢化は、どのような人口学的条件の変化によって生ずるのかを明らかにする。	同上	同上
4	人口高齢化の現状と将来	人口高齢化の国際比較を行うとともに、日本の人口高齢化の特徴と問題点を全国レベルと地域レベルの二つの側面から明らかにする。	同上	同上
5	結婚と出生－晩婚化・少産化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである出生率低下の趨勢を結婚・出産期女子人口の減少（普通出生率の低下）、有配偶出生率の低下、夫婦の「有子少産」の出生行動の定着化に焦点をあてて考察する。	中野 英子（聖泉短期大学教授）	中野 英子（聖泉短期大学教授）
6	死亡－長寿化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである死亡率（寿命）の趨勢について概観するとともに、死亡率の低下（寿命の伸長）がもたらす影響の問題を日本人のライフサイクル、ライフコースの変動に焦点をあてて考察する。	高橋 重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）	高橋 重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）
7	移動－高齢者移動の動向と高齢化問題	日本の人口移動は、若年層を中核としているが、最近、高齢者移動も微増しつつある。このような人口移動の動向をふまえて、移動構造の変化が高齢化にどのような影響を与えているかを浮彫りにする。	山崎 光博（秋田県立農業短期大学教授）	山崎 光博（秋田県立農業短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	家族－核家族化の動向と高齢化問題	日本の人口動向を家族に焦点をあてて検討すると、核家族化の進展という問題が浮彫りになってくる。この核家族化の進展が高齢化問題といかなる関連を有しているかを概観する。	渡邊　吉利（国際医療福祉大学教授）	渡邊　吉利（国際医療福祉大学教授）
9	労働力－労働力の中・高年化と高齢化問題	寿命の伸長は、高齢期における非労働力期間を長くし、長い高齢期における新しい役割構造が必要となってくるものと思われる。このような動向をふまえて、労働力の中・高年化の問題と高齢化とのかかわりあいを就業行動・労働力の再配分等との関連で考察する。	中野　英子	中野　英子
10	結婚と出生構造の変化と地域の高齢化問題	日本社会における高齢化問題を地域的な視点でみると、地域によってその現れ方は多様である。そこで、この問題を結婚・出産期女子人口の地域性、出生行動・結婚行動の地域性に焦点をあてて考察する。	同　上	同　上
11	死亡構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動と死亡率低下の地域差は、人口構造（人口高齢化）の地域的多様性をもたらすことになった。このようにして生じた世代間人口の地域的多様性とそれに伴う世代間ギャップの問題を死亡率の動向に焦点をあてて考察する。	高橋　重郷	高橋　重郷
12	移動構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動が地域の高齢化に与える影響の問題を高齢化先行地域と高齢化後発地域に焦点をあてて考察するとともに、そこに内在する問題点を浮彫りにする。	山崎　光博	山崎　光博
13	家族構造の変化と地域の高齢化問題	日本の核家族化現象を地域的な視点でみると、地域差が存在している。この地域差の問題を日本の家族文化の多様性との関連で明らかにするとともに、核家族化の地域差が地域の高齢化問題とどのように関連しているかを考察する。	渡邊　吉利	渡邊　吉利
14	労働力構造の変化と地域の高齢化問題	労働力構造の変化は、地域の高齢化問題に様々な影響を与えている。そこで、この問題を労働力の中・高年化、女子化と就業構造の地域性、女子の就業行動の変化に焦点をあてて考察する。	中野　英子	中野　英子
15	高齢化問題とその対応策	人口高齢化の進展は、様々な問題を惹起した。そこで、この問題を解決するために今日までどのような対応策が提示されてきたかを概観し、本講座のむすびとしたい。	清水　浩昭	清水　浩昭

＝ 変動する社会と暮らし（’０２）＝（R）

〔主任講師：本間　博文（放送大学教授）〕
〔主任講師：今井　悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会は産業革命に次ぐ第二の大きな変革の波にさらされ、その波は我々の生活のあらゆる部分に浸透しつつある。情報処理技術を中心として、この技術の応用によって、医学や食糧問題までに技術革新の波は押し寄せてきている。もはや旧来の生活スタイルを守ってこれまでのような暮らしを続けることは難しく、変革に対応できないことを許さない過酷な状況を迎えつつある。暮らしを便利にそして快適にするための変革であるにもかかわらず、それに対応できない人々はきわめて不利な状況に置き去りにされ、様々な事故に巻き込まれるという危険性さえ想定される。
本講義では、このような生活のあらゆる側面に及ぶ変革について、①　それがいかなるものか、その内容を正しく理解し、且つその実態を明らかにする。②　我々の暮らしにどのような影響（プラス、マイナス）を及ぼすのかを探り、③急激な変革の下でどのような生活設計が可能なのか、について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	変動する社会	現代社会について、様々な統計データーを活用しその変動の様子を明らかにする。いかなる技術が実用の段階にあるのか。そしてそれらの技術が我々の生活にどのように関わろうとしているのか、そしてそれによってどのような変化が起こりつつあるのか、２章以下で解説する内容について概説する。	本間　博文（放送大学教授）	本間　博文（放送大学教授）
2	生活技術変化と暮らしの「便利さ」	暮らしの「便利さ」とはなにか。経済的効率性と使いやすさ。具体的には、情報家電あるいは携帯電話の例をあげながら、家計通信費の増大などの問題を考察する。	坂井　素思（放送大学助教授）	坂井　素思（放送大学助教授）
3	産業構造の変化と「働きがい」	暮らしのなかの「働きがい」とはなにか。情報化などの産業高度化のなかでの産業構造の変化、サーヴィス経済化・情報経済化のなかの労働、家事労働と市場労働の境界問題、非営利活動などの問題点をめぐって、労働がどのように変質するかについて考える。	同　上	同　上
4	生活の金融化と暮らしのなかの「リスク」	暮らしのなかの「リスクと安全」。電子マネー、ネットバンキング、地域貨幣などの例を取り上げながら、金融資産の増大、貨幣と情報の親和性、不確実性の増大と信頼の重要性などの問題について考えていく。	同　上	同　上
5	患者からのみた医療	先端医療は、臓器移植・生殖医療・遺伝子診断・遺伝子治療などの面で大きな進歩を遂げている。これにともない、われわれはこれらの先端医療を受けるか否かにかかわらず、人の生や死のあり方について自分なりの考えを持たなければならなくなっている。現代社会全体からみても、医学の技術や論理が一方的に進行していかないために、社会の価値観や倫理観を明らかにすることが求められている。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	心身の自立と医療保健	医療と公衆衛生の進歩によって制御可能な原因、特に環境側の病因による疾病が減じ、保健先進国での疾病は生物メカニズムに内在する異常に限られ、幼少期の遺伝的異常、先天奇形などと、生命の有限性を反映する高齢期の諸疾病に２分極化しつつある。少子高齢化はその結果であり、政治、経済、個人に大きな影響を及ぼしている。 現在、死亡の大半は８０歳前後におき、それに先立って平均１年程度、生活動作ＡＤＬを人手に依存するようになる。痴呆も半分程度に見られる。「心身の自立」は自己実現の必須の前提であるが、それを保つためには保健医療に加えて、生涯にわたる本人のセルフケアが大切である。本章では最近の日本の疾病動向の変貌と個人の心身の自立と「暮らし」とのかかわりなどを中心に、医療保障の現況とその賢明な利用についてのべる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
7	家庭生活とスポーツ	少子高齢化社会社会を迎え、生活慣習病の予防や体力の保持増進を目的としたスポーツの普及には目覚しいものがある。一方で、生活の質の向上、あるいは心の豊かさを求めてスポーツに関わる例も増えており、身体的・精神的な健康に果たすスポーツの役割は、今後一層高まるものと思われる。本性では、日常生活の中にスポーツがどのように位置付けられ、それが健康な生活とどのように関わっていくのか、という問題について考えてみたい。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
8	21世紀の食品事情	20世紀には様々な食品が作り出された。電子レンジ食品、冷凍食品のような調理加工食品やいわゆる健康食品の他、かつて存在しなかった全く新しい食品、遺伝子組み換え食品も出現した。 現代および近未来の食品事情を探るとともに、消費者はどう考えどう行動していったらよいのか考える。	今井　悦子（放送大学助教授）	今井　悦子（放送大学助教授）
9	変化する食事習慣	社会の大きな変動は食品事情を変えただけではない。食に対する考え方や食べ方---何を、いつ、どこで、誰と、どのように食べるか---なども大きく変えた。これらの変化は、家族関係やさらには人間性形成にも影響をおよぼしているという意見がある。何が、どこが問題なのか正しくとらえ、新しい食事習慣を考える。	同　上	同　上
10	居住環境を巡る諸問題	近年、世帯類型が多様化し、それに呼応するようにライフスタイルの多様化も著しい。当然器としての住居のあり方も大きな変化が起こりつつある。画一化から多様化へ、郊外型から市街地型、スクラップアンドビルト方式からストック更新型へ、環境と共生する省エネルギー住宅への変化である。このような変化はバブル崩壊によって住宅の評価が不動産としての財産価値から利用価値へと変換せざるを得なくなったという事情もある。品質保証制度が新たに制定され、消費者保護の観点からも新しい動きがスタートしようとしている。やっと本来の住まいのあり方が問われる状況になりつつあるといえよう。しかし一方で「ミニ戸建て住宅」が急増し、新たな居住環境上の問題として顕在化しつつある。高齢社会を迎え解決しなければいけない問題が山積している。	本間　博文	本間　博文

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	消費者責任の時代	循環型社会形成促進法の成立を受けて、消費者意識・行動も、消費者権利から消費者責任へと、いっそうの転換がもとめられる。新しい消費者視点に基づく企業評価の試みなどの中に、その潮流を探る。	酒井　豊子（放送大学教授）	酒井　豊子（放送大学教授）
12	家族文化と情報	伝統工芸の育成にとりくむ越前の和紙づくりの町、北海道におけるSOHO（テレワーク）－子育てをしながらソフトウエアをつくる主婦のネットワークなどを事例として、情報革命の中で何が変わり、何が守られ、何を発展させてきているかを家族・家庭を軸として探る。	赤木　昭夫（放送大学教授）	赤木　昭夫（放送大学教授）
13	地域文化・経済と情報	西陣の織物、金沢の工芸、東京の大田区の機械加工、荒川区の鉛筆製造などを事例として、地域の産業と経済の活性化が、自転車とファックスとインターネットによる情報交流によって進められている実状を紹介する。技術と経済の変動の中で、守るべき文化と依るべき核は何か、それは家庭・家族そして横丁、地域というクラスターである。	同　上	同　上
14	男女の共生する社会	近年「男女の共生」がなぜ一つの領域として学問、行政、社会生活の諸分野において取り上げられるようになったかをまず概観する。次に地球規模の視点から日本社会の位置づけを眺める。そして男女共生を可能にする社会は、障害者、外国人、その他さまざまないわゆる少数者の共存を可能にする社会であることを考える。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
15	まとめ－２１世紀の生活設計	１４回にわたって個々の視点（専門）からこれからの生活を素描してきた。本章では１４回の講義のまとめとして、２つのテーマ、１．２１世紀における健康生活（健康科学、食物学、スポーツ学）、２．消費者の立場からの生活設計（生活学、家庭経済、衣と住）を取り上げ、それぞれの分野の教員が相互にそれぞれの立場から生活の将来像について討議し合うことで、個々の専門分野だけでは指摘できない問題点、あるいは解決の糸口などを明らかにしてこの講義のまとめとする。	本間　博文	本間　博文

＝ 衣生活の科学（’０２）＝（R）

〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：牛腸 ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授）〕

全体のねらい

衣服はファッションを表現する代表的な手段である。しばしば時代の風潮に左右されやすく、生理的に快適で、文化的、個性的な衣生活を経営・維持するには、衣服や衣生活行動に関する科学的知識と洞察を必要とする。この科目では、衣服・衣生活にかかわる諸事象について、主として自然科学的基礎に立って理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	衣生活の科学的考察	衣服が果たす役割には、寒さや雨、風からの防護、快適環境の保持、審美的・社会的欲求の満足などがある。これらのために衣服が備えるべき機能と、衣服を効果的に利用する上での諸問題を概観する。	牛腸ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授）	牛腸ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授） 酒井　豊子（放送大学教授）
2	衣服素材の熱と水分移動	衣服が身体から蒸散される水分を外部へ散させることは、体温調節等の面から極めて重要である。衣服素材の吸湿，透湿，吸水などの現象を、繊維の化学構造、高次構造、形態特性、布の構造などとの関係で理解する。	同　上	同　上
3	着衣における熱と水分移動	着衣を通しての熱や水分の移動は着衣を構成する布素材の性質だけでなくデザイン、着方等着衣の構成要因および環境要因からも影響される。諸要因が組み合わさったシステムとしての着衣の熱・水分移動性が、布素材のそれとは必ずしも一致しないことをいくつかの例を挙げて解説する。	薩本　弥生（横浜国立大学助教授）	薩本　弥生（横浜国立大学助教授） 牛腸 ヒロミ
4	人体の動きと衣服の運動機能性	衣服の運動機能性は着心地と関連し、スポーツウエアなど運動量の多い衣服だけだなく、衣服全般に要求され性能である。運動機能性の劣る衣服を用いて作業をすると、身体は疲労し作業能率が下がる。ここでは、人体の動きと衣服の運動適合性，身体拘束による衣服圧等、人体への影響に関して述べる。	同　上	同　上
5	寝衣や寝具の快適性	快適な睡眠のために、寝衣・寝具に要求される性能には、温熱的、力学的特性が挙げられる。寝心地に影響する寝衣・寝具の熱や水分の移動特性は、単に素材だけでなくシステムとして快適な寝床環境を工夫する必要がある。力学特性の面からは、敷き布団や枕の最適な堅さについて考察する。	同　上	同　上
6	身体発達・身体運動と衣服	衣服には乳幼児、高齢者、身障者など着用者により、また、スポーツウエアなど使用目的により、それぞれの場合における生理機能、運動機能を考慮した設計が必要である。素材、形などの面から衣服の対応を考察し、これらの目的のために開発された各種素材等について紹介する。	牛腸ヒロミ	牛腸ヒロミ 酒井　豊子
7	衣服の形と色の心理効果	衣服は流行を具現化する最も代表的な手段となっている。人々はなぜ、衣服のデザイン、色などに”新しい”、”古い”などを感じるのか。また、そのような感じ方は、年齢や性別などでどのように異なるのか。ここでは衣服のデザインや色が人の感性にどのように影響するかをいくつかの事例から考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	皮膚と毛髪の科学	装いには衣服のみならず、髪型や化粧も大きな影響を及ぼす。ここでは皮膚と毛髪に関しその構造や生理を理解するとともに、化粧品、整髪料などの成分・作用などと、どのような研究に基づいて製品開発がなされているかを紹介する。	牛腸ヒロミ	牛腸ヒロミ 酒井　豊子
9	衣服の寸法変化と型くずれ	衣服はつり下げておくだけでも変形することがある。洗濯などでは収縮や伸び、型くずれ、しわなどを生じやすい。これら寸法変化や型くずれの要因を、素材側および取り扱い方法の側面から考察する。	三ツ井紀子（昭和女子大学短期大学部教授）	三ツ井紀子（昭和女子大学短期大学部教授） 酒井　豊子
10	光と衣服	繊維・布による光の反射・吸収・透過現象、布の紫外線遮蔽効果、紫外線による繊維の劣化・変色など、光と繊維との関わりについて科学的理解を深める。UVカット繊維製品の原理等についても考察する。	同上	同上
11	染色と変退色	繊維が衣服に用いられるためには、染色でできることは重要な条件である。染色性、発色性、色の堅牢性などは、繊維と染料の組み合わせによりさまざまである。これらに関する原理を理解するとともに、染料や染色助剤にかかわる環境負荷についても考察する	同上	同上
12	洗濯の科学　1	衣服の着用による汚れは衣服の機能を低下させる。汚れを除去してその機能を回復させるために洗濯が行われる。まず、衣服に付着する汚れについて、次に基本的な洗浄プロセス、洗濯用洗剤、洗剤の働き、洗浄のメカニズムなどについて科学的理解を深める。	多賀谷久子（滋賀大学教授）	多賀谷久子（滋賀大学教授） 酒井　豊子
13	洗濯の科学　2	省資源・省エネルギーのもとで、衣類のライフサイクルを可能な限り長期化していくことが重要である。実際の洗濯における洗浄力評価、洗濯条件、漂白・増白、溶剤洗浄などの基本的事項を理解し、資源・環境に配慮した洗濯のあり方について考察する。	同上	同上
14	洗濯と環境	洗濯は衣類の損傷、水・洗剤・電力の消費、洗濯排水、溶剤などによる環境負荷を伴う。環境負荷削減にはそれらを正確に評価し、正しく認識することが重要である。それらの環境影響評価の研究事例をいくつか紹介し、洗濯のあり方について考察する。	同上	同上
15	繊維資源と衣生活	日本で消費される衣服の実情と衣服の廃棄について、種々の統計資料に基づき分析し、現在の衣生活と繊維資源とのかかわりを、環境保全、生活の平準化などの視点から考察する。	酒井　豊子	酒井　豊子 牛腸ヒロミ

＝ 現代モード論（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：北山　晴一（立教大学教授）〕

全体のねらい

モードは、単に衣服デザインの形態上の主張ではなく、人が自らの身体をいかに把握し、他者との関係の中でいかに表現するかの問題である。本講義では、なぜ衣服を着るかという基本的な問いからはじめて、近代の消費社会のなかでいかにしてモード現象が発生したかを考察する。さらに、19世紀後半のフレデリック・ワース以来の代表的なデザイナーの足跡をたとることで、20世紀モードがいかなる問題軸を中心に展開され人々の生活に浸透していったかを検証する。そしてこれからのモードがどのような方向へ向かうことになるかを検討したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	なぜ衣服を着るのか	衣服の機能に関する3つの立場（生理学、人類学、社会学）からの説明を紹介しつつ、現代人にとっての衣服がおもに社会的な機能を軸にすえているとの理解を深め、モード現象の意味を考えるうえで何が重要であるかを検討する。ファッション、モード、流行などの用語についてもふれる。	北山　晴一（立教大学教授）	北山　晴一（立教大学教授） 酒井　豊子（放送大学教授）
2	近代消費社会の誕生	モード現象が人々の社会生活に浸透するためには、第1に人々の生活水準が生存維持の段階から人生享受の段階へと上昇すること、第2に人々の身体感覚が2つの方向（内面的身体と身体の他者性の発見）で広がりを獲得すること、第3の要因としてメディア化社会の進展が必要こと、等について考察する。	同　上	同　上
3	現代モードの源流	パリは現代モードの発祥地といわれるが、どのような経緯でそうなったのか、19世紀後半の巨大消費都市パリにおける衣服をめぐる諸状況（既製服の誕生、デパートの発明、流行の一般化など）を、当時の社会的、文化的、経済的、技術的な変化を確認しながら考察する。	同　上	同　上
4	20世紀モードの問題軸	何が20世紀モードの中心軸だったか。モード現象が平等志向社会の出現とそこにおける差異化への欲求に支えられていること、近代モード現象の進展のなかでどのような差異が消滅し、どのような差異が主張されるようになったかといった問題を、階級とモード、性差とモード、身体の束縛と解放などの事柄を軸に考察する。	同　上	同　上
5	20世紀モードの冒険者たち（1） フレデリック・ワースとオートクチュールの発明	前半でオートクチュールの歴史と現在を簡単に紹介したのち、19世紀後半（第二帝政期）のパリで活躍しオートクチュールの創始者とされるフレデリック・ワースの生涯と仕事を詳細に辿ることにより、当時のパリ市民と「上流階級」の衣生活の模様、オートクチュール発生の歴史的条件、現代的意味等を調べる。	同　上	同　上
6	20世紀モードの冒険者たち（2） ポール・ポアレとジャポニズム	20世紀モードはポール・ポアレとともに始まるといわれる。ワース流の豪華絢爛だが重いフォルムを排してなんとかして女性の身体のシルエットと動きを表現する必要から、ポアレはコルセットを必要としないドレスをつくるにいたった。ポアレとジャポニスムへの関心、アメリカ市場の開拓についてもふれる。	村田　仁代（大分大学助教授）	北山晴一 村田　仁代（大分大学助教授）
7	20世紀モードの冒険者たち（3） マドレーヌ・ヴィオネと永遠のドレス	マドレーヌ・ヴィオネは20世紀モードを造形面で革新した。シャネルほど知名度はないが、現代デザイナーたちがヴィオネに言及するのはなぜなのか。流行に距離をおき女性の身体をもっとも美しく見せる永遠の衣服美を求めたヴィオネの意匠の革新性と両義性について考える。特徴的な一枚布活用についてもふれる。	北山　晴一	北山　晴一 酒井　豊子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	20世紀モードの冒険者たち（4） ガブリエル・シャネルと女性服	ジャージースーツの発案者として20世紀の女性服の原型をつくったガブリエル・シャネルは、女性服に機能美と自由な感覚をもたらした。シャネルの生涯と仕事を紹介しながら、スポーツモード、女性と仕事、モードの両義性、ブランドの意味等について考える。同時代のスキャパレリらについてもふれる。	北山　晴一	北山　晴一 酒井　豊子
9	20世紀モードの冒険者たち（5） クリスチャン・ディオールとモード産業	クリスチャン・ディオールは、モード現象を社会の重要な活動として認識させたという意味で20世紀後半のもっとも代表的なデザイナーである。あらゆるフォルムの実験者として、伝統的なエレガンス（女性美）の演出者として、またプレタポルテの推進者として、さらにはブランド産業の確立者としての生涯を考察する。	同上	同上
10	20世紀モードの冒険者たち（6） 三宅一生らと新しい服、新しい身体、新しい素材	1980年代から多くのデザイナーたちが目指してきた方向は、ジェンダーの枠から自由でありかつセクシュアルな衣服、あるいは身体性を制約しない衣服、逆に身体性に制約されない衣服、ときには第2の皮膚とも形容される衣服、いいかえれば究極のモードを求めることだった、こうした方向性の具体化の例を検討する。	同上	同上
11	ブランドの力	「ブランド」はモードに求心力と遠心力を与えるモード現象の根幹にかかわる事象である。パリやミラノに本拠をもつブランドの発生、戦略、特性などを「イメージ」をキー概念にすえた対項目（製品とイメージ、消費とイメージ、欲望とイメージ）の分析を通して明らかにする。にせブランド問題にもふれる。	同上	同上
12	社会規範と自由とモード	モード現象は社会規範と自由との間のダイナミックな均衡のうえに成立する。したがってモード現象はつねに社会規範の強化と自由の拡張を求める2つの側からの批判にさらされる。モードを拒否するさまざまの議論（瑣末の拒否、衣服の手段化、消費批判、エスタブリッシュ批判など）や行動（服装規制、パンク、ストリートファッションなど）を紹介する。	同上	同上
13	異性装の過去とゆくえ	現代モードは多様化したかにみえるが、近代以前にくらべると形態、色、素材の面で男女の性による拘束は、最近多少緩和されつつあるが、いぜん強い。それは性差の維持が、近代社会を支える重要な柱のひとつだったからである。古今東西の異性装の歴史と意味を検討することを通して、これからの異性装の可能性をさぐる。	村田　仁代	北山　晴一 村田　仁代
14	芸術・遊び・夢としてのモード	着られるためにあるという限定を外すことで衣服の可能性はどれほど広がるか。造形作品としての衣服は着られることを目的とせず、ショーのための衣服は日常の用には適さない。ことさら醜いことを主張することで美しい衣服、逆説（倒錯、パロディ）としての衣服も存在するこうした試みがモードの可能性を広げることを考える。	北山　晴一 村田　仁代	北山　晴一 村田　仁代
15	モードの力、モードの社会学	モード現象は身体、衣服、欲望の3つの「社会的」要素に支えられている。われわれ現代人はこの3つの要素を美しい身体、美しい衣服、美しい生き方といった用語に置き換えて理解しようとする。しかし現代モードの最大の課題は、この美しさの意味を問うことなのである。現代モードはまた、文明と自然の狭間に生起する問題（健康、環境、自由、幸福など）との関連においても考察されなければならない文明論上のテーマでもある。	北山　晴一	北山　晴一 酒井　豊子

＝　着ごこちの追究（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：田村　照子（文化女子大学教授）〕
〔主任講師：酒井　豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康で快適な衣生活を実現・維持するうえに重要な衣服等の着心地について、衣服の構成・構造や、素材の性能についての認識と、人の体系・寸法や感覚・生理の理解に基づいて科学的に追求し、着心地の良さを、人間と衣服の感覚的・生理的適合の面から明確にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	着ごこちのよさとは	衣服に期待されるさまざまな機能を概観し、その中における着心地の位置づけを考察する。着心地を人の感覚との対応において追究する科学の範囲と内容について概説する。	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）
2	衣服と皮膚　①肌ざわりと着ごこち	肌触りに関係する衣服の要因とその評価法を概説する。また衣服の汚れ吸収性と衣服の快適性との関連について触れる。	丹羽雅子（奈良女子大学長）	丹羽雅子（奈良女子学長） 酒井豊子
3	衣服と皮膚　②安全性をめぐる諸問題	衣服による皮膚障害、皮膚アレルギー、衣服のダニ、衣服による紫外線防御等、衣服と皮膚の安全性を巡る諸問題を取り上げ考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
4	衣服と身体寸法	個人個人の身体寸法に適合した衣服製作の基本概念、体型・寸法の把握方法、体型分類、ならびに、既製服サイズの現状について概説する。	松山容子（大妻女子大学教授）	松山容子（大妻女子大学教授） 酒井豊子
5	衣服圧と身体拘束	衣服による身体拘束の指標となる衣服圧のメカニズムと測定方法について述べ、衣服圧が身体に及ぼす悪影響や振動抑制、血液循環促進等の作用について考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
6	ヒトの体温調節機能	着心地のよさを、人間の温熱生理的適合性の視点から理解する基礎として、温冷感受性、皮膚温調節、発汗調節などヒトの体温調節の仕組みについて概説する。	同上	同上
7	衣服による体熱放散調節	衣服による保温と放熱の機構を考察し、暑熱・寒冷環境下での快適な着心地について、衣服の素材、形、着方などの面から考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	衣服と水分蒸散	不感蒸散や汗の放散に衣服がどのように関わるかを理解し、水分移動に関し快適な着心地を確保する衣服素材の性能について理解を深める。	田村照子	田村照子 酒井豊子
9	環境適応と衣服	特殊環境を含むさまざまな環境条件下における、快適衣服内気候形成のための衣服の選択と着装について考察し、気候・風土と密接に関わって成立してきた衣服・服装の実例を世界の民族服の中から検証する。	道明三保子（文化女子大学教授）	道明三保子（文化女子大学教授） 田村照子
10	着ごこちの耐久性	着用・洗濯の繰り返しによる衣服性能のさまざまな変化を着心地の劣化、あるいは、着心地性能の維持という視点から考察する。	酒井豊子 丹羽雅子	酒井豊子 丹羽雅子
11	身体ハンディキャップと衣服	病床にあるときの衣服、身体の不自由に対応した衣服等について、さまざまな事例を見ながら、着用者にとって、あるいは、介護者にとって快適で便利な衣服を考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
12	寝ごこちのよい寝衣・寝具	脳波等の生理反応による眠りの質の観察と、保温、透湿、体圧分布などの面から、快適な眠りを得るための寝具・寝衣の役割と条件を考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
13	スポーツと衣服	さまざまなスポーツの分野で、ウエアの改良が記録の更新に貢献している。スポーツウエアにおける素材・形・寸法などの工夫の例を取り上げる。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
14	快適な履物	解放性履物、閉塞性履物などのタイプ別に、歩行補助道具としての機能性と、通気性保温性などの観点から快適性について考察する。	眞家和生（大妻女子大学助教授）	眞家和生（大妻女子大学助教授） 酒井豊子
15	着ごこちの追究－今後の課題	人間の活動の広がりに対応して衣服に期待される安全性、快適性の考え型と、資源・環境問題、情報化、国際化、高齢化などに対応した今後の方向について考察する。	酒井豊子 田村照子	酒井豊子 田村照子

＝ 地域と食文化（’９９）＝（R）

〔主任講師：石川　寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

日常営まれる食生活は、地域によって用いる食材、調理・調味の仕方、供食形態等に相違がある。また日本各地には、郷土食として長く伝承されて来た独特のすぐれた食物が数多い。こうした地域が生み育んだ食文化を通して、地域間の相違、特色、変化を学び、地域と食文化との関わりを理解することが本教科のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域と食文化との関わり	食の文化は時代、階層、地域によって、それぞれ異なった特徴を示すが、なかでも食生活が営まれる地域の気候や風土、産物等との関わりや影響が大きい。そこでこれらの実態を示しこれにより独自の、独特の文化が生まれることを認識させ、本教科の意義と目的を講義する。	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）
2	主食の変遷と地域性	日本の主食は、古くから米が中心であったといわれているが、その種類や形態は、時代、地域、階層により異なっている。時代によるちがいを学ぶとともに、近世、近代を中心に地域による主食の種類・形態のちがいをその特徴およびその形成要因について考える。	江原絢子（東京家政学院大学教授）	江原絢子（東京家政学院大学教授）
3	粒食の地域性（米・麦・雑穀）	日本において日常食の中心となった「飯」は、米・麦・雑穀などを粒のまま利用したもので、このような形態を「粒食」とよぶ。各地域で伝統的に食べられてきた粒食について日常食、行事、儀礼食における特徴とその食べ方を学び、地域の特性を考える。	同上	同上
4	粉食の地域性	穀類の摂取については、米を中心にした粒食と小麦を中心にした粉食に大別される。粉食においては、パンと がその大部分を占め、全国的に画一化している。しかし、調理の仕方や食べ方には地域の独自性がみられる。こうした地域性や主食における粉食の地位について考察する。	三田コト（長野県短期大学名誉教授）	三田コト（長野県短期大学名誉教授）
5	芋食の地域性	自生のやまいもと稲作以前に伝来したさといもを儀礼食とする地域は多い。さつまいもとじゃがいもは江戸時代救荒食品として広まり、前者は西日本の食糧供給の安定化に貢献し、後者は洋風料理と共に普及した。生食の他、保存・加工の地域特性について考える。	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）
6	豆利用の地域性	日本の食における豆の利用は、特に大豆において多彩であり、重要である。普遍的に分布する豆腐に対して、未熟大豆の食用が東日本に偏在する如く、その利用の仕方に地域性が認められる。大豆を主にしながら、豆利用の地域性について解説し、考察する。	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）
7	野菜果物摂取の地域性	日本列島の南北への広がりと多様の気候のもとで、それぞれの風土に適した野菜・果物が栽培されてきたが、水分多く軟質のため輸送・貯蔵に不適であるので、産地での消費が原則であった。野菜・果物摂取の地域性を風土、生産、消費の立場から解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	魚食の地域性	四面を海に囲まれ、また河川・湖沼に恵まれたわが国では、古くから各地に水準の高い魚食文化が展開している。これについてまず漁獲の地域性を解説するとともに、各地の代表的な魚貝名産品をいくつかとりあげ、その分布状況を地域的に考察し、また魚食の実態を通してその地域性について検討する。	石川寛子	石川寛子
9	肉食の地域性	肉食禁忌の長い歴史を持つわが国では、摂食形態の地域性は薄い。とはいえ、明治の解禁時の農耕家畜の種類や、中国との交流等が反映し、肉の種類に地域性がみられる。また外国の料理を伝統的な調理法で適応させ、独自の発達をしたありさまをみる。	大坪藤代	大坪藤代
10	味付けの地域性	日本料理の味つけは、みそ、しょうゆなど発酵性調味料が中心となっているが、その使い方には地域による特徴がみられる。うどんなど 類の味やみその味の違いなど地域による味つけの特徴的事例をあげながら、その地域分布と要因などについて考える。	江原絢子	江原絢子
11	茶菓子文化の地域性	中世以降、各地の美しい風物、器物を模した煉物、焼物、半生物等、銘菓が続出し、同時期の「茶の湯」の発達と「一服の茶」の伸展にともない、全国に広まった。この菓子と茶の二つの消費状況を検討するとともに茶の名産地と地域別特徴、そして各地の菓子が織りなす文化の地域性について検討する。	石川寛子	石川寛子
12	餅の地域性	日本において餅は、古くから、さまざまな種類の、さまざまな形態の餅が生活の中にとり込まれてきた。ここではケの日、ハレの日の餅の形状と目的、そして食べ方を通して暮らしと餅のかかわりを考察し、また地域性豊かな各地の餅を紹介してその分布、そしてその伝承の実態を検討する。	同上	同上
13	すしの地域性	現在わが国でみられるすしには豊富なバリエーションがあり、郷土料理として認識されているものも多い。ここではそれらを例示しながら、日本におけるすし文化の多様性や地域性を紹介するとともに、そうした現状を生み出すに至った背景について考察する。	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）
14	漬けものの地域性	日本における日常食の基本は、飯・みそ汁・漬けものであった。漬けものは、各地域でその産物を塩や酢で漬けて保存食としたのが始まりである。その後、調味料の発達につれて調味漬けや旬の野菜の浅漬けなども惣菜化してきた。地域の特産品もあり、地域と関わりも検討する。	三田コト	三田コト
15	地域振興と食文化	21世紀の食生活は、それぞれの地域に住む人々が、地域の特性を充分に踏まえ、知恵と努力によって創造し伝承してきた独自性の強い食べ物を大事にしながら、その同質化に努力し社会性を高めることを理解し、地域振興との関わりについて考察する。	石川寛子	石川寛子

＝ 食物とからだ（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：野口　　忠（中部大学教授）〕
〔主任講師：今井　悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

食物を摂取することは、人が生命を維持し、成長し、健康で日々の生活を営むためには必須の行為である。本科目は、基礎知識として食物に含まれる成分としての栄養素を理解させた上で、消化・吸収され体内に取り込まれた栄養素がどのように代謝され、エネルギーや栄養素としての働きを果たすのかを解説する。すなわち、健康を考える上でもっとも基本となる、食物を食べたときからだはどう応答するのかを理解することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食物の役割	始めに、多様化、外部化等の言葉で表現されている近年の食生活の特徴を概観する。続いて食物摂取と人のからだとの関連について成分等の観点から解説し、その理解を深める。	今井　悦子（放送大学助教授）	野口　忠（中部大学教授） 今井　悦子（放送大学助教授）
2	炭水化物とは	炭水化物はもっとも摂取量の多い栄養素であり、エネルギー源としての供給率も最大である。食物に含まれる炭水化物について、どのような食物にどのような構造で存在し、調理や加工によりどのように変化して摂取されるのか等を解説する。	同　上	今井　悦子
3	脂質とは	脂質の摂取量は年々明らかに漸増しており過剰摂取に注意が促されている。また量だけでなく、質についても近年注目されている栄養素である。食物中の脂質について、その構造や特性、質についての近年の研究等を解説する。	同　上	同　上
4	タンパク質とは	生命現象の根幹を司る様々な体タンパク質は、必要なアミノ酸の一部が体内で合成されないため食物から摂取する必要がある。タンパク質とはどのような構造、特性をもつのか、食物中にはどのようなものが存在し、どう変化して摂取されるのか等を解説する。	同　上	同　上
5	ミネラルの役割	今日本人にはいくつかのミネラルの摂取不足や過剰摂取が指摘されており、また精製した食品の摂取量増加とともに微量元素の不足が懸念されている。ミネラルの体内での様々な働きと、次第に明らかになってきた微量元素の働き等を解説する。	同　上	同　上
6	ビタミンの役割	ビタミンは、生体内の代謝を含む様々な生理現象に潤滑油的な働きをしており、微量でも必須の栄養素である。近年、いくつかのビタミンが健康や老化との関係で注目されている。主なビタミンの生理作用について解説する。	同　上	同　上
7	食物の消化と吸収	炭水化物、脂質、タンパク質は高分子化合物であるため、消化器官で順次消化されることにより初めて体内に吸収され、栄養素としての働きをすることが可能となる。様々な食物が人の体内に取り込まれる機構、すなわち消化と吸収の仕組みについて解説する。	野口　忠（中部大学教授）	野口　忠

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	主要栄養素の代謝	食物の中で大きな部分を占める炭水化物、脂質、アミノ酸について、それらを摂取すると体内でどのような経路で代謝されるかを解説する。	野口　忠	野口　忠
9	タンパク質の代謝－1	食物中のタンパク質の栄養価の測定法、栄養価に影響をおよぼす因子について理解を深め、食品の必須アミノ酸含量と栄養価の関係を学習する。	同上	同上
10	タンパク質の代謝－2	からだの中でのタンパク質の合成の機構、分解の機構の基本を解説する。さらに体タンパク質の合成・分解はどの様に調節されているのかを学ぶ。	同上	同上
11	代謝の適応と臓器の役割	栄養条件が変化したときからだはどのように適応するのか。その機構を、絶食に陥った場合を中心に学ぶ。また、からだの中の諸臓器の間には、代謝の上でどのような相互関係があるかを解説する。	同上	同上
12	ホルモンの役割	食物を摂取することによって起こるからだの変化においてホルモンがどのように関与するかを、ホルモンについての基礎的知識、ホルモンの作用機構などを基盤にして解説する。	同上	同上
13	エネルギーの代謝	炭水化物、脂質、タンパク質については、物質としての代謝という側面のほかに、われわれにエネルギーを与えるという側面がある。エネルギーを与える物質としての食物の役割を理解させるとともに、からだはどのようにエネルギー代謝を行い、またそれを調節しているのかについて解説する。	同上	同上
14	食品機能の新しい視点	食品には、栄養素としての機能である1次機能、色、味、香りをもっという2次機能に加えて、からだの代謝を調節するという3次機能があることが近年の研究で明らかにされた。この3次機能について、例をあげて解説する。	荒井綜一（東京農業大学教授）	荒井綜一（東京農業大学教授）
15	これからの食生活	これからの食生活についてどのようなことを考えていく必要があるのか、また、世界的に食生活についてどのような勧告があるのか等、諸国のdietary guideline、recommended dietary allowance、adequateintake等の概念を示しながら考える。	野口　忠	野口　忠 今井悦子

＝ 調理とおいしさの科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：島田　淳子（昭和女子大学教授）〕
〔主任講師：今井　悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

食物摂取は人の生命維持に必須であるとともに、潤いや満足感をもたらす生活の営みである。満足感に大きく関わるのはおいしさであり、おいしさを創造するのに必要不可欠な工程が調理である。ではおいしさとは何か。調理中の食材の変化とおいしさはどのように関わっているのか。この講義では、これらに関する科学の基礎と最新の研究成果を、さまざまな切り口から解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	調理とおいしさの科学	地球上ではさまざまな民族が日々さまざまな調理をしている。調理操作や調理による食材の変化には全世界に共通する普遍性があるが、でき上がった料理とそのおいしさは文化圏によって大きく異なる。調理学は、文化としての調理とおいしさを、自然科学、感覚心理学など多彩な学問を駆使して科学する、新しく学際的な学問であり、本章では調理学の最新の成果を取り入れたこの講義の特徴を総括する。	島田　淳子（昭和女子大学教授） 今井　悦子（放送大学助教授）	島田　淳子（昭和女子大学教授） 今井　悦子（放送大学助教授）
2	おいしさの構造と官能評価	人は、感覚器官の全てを動員して食物からの情報を脳に送り、そこで心理状態、生理状態、記憶等を統合しておいしさを評価する。おいしさを感じる複雑なメカニズム、おいしさの表現、人を測定機器としておいしさを総合評価する官能検査の実際などについて解説する。	今井　悦子	今井　悦子
3	味の科学の最先端	おいしさの中心となる味。味覚情報はどのように脳に伝達されるか、味の嗜好と人種や民族とは関係があるのか、味の嗜好と人が生存するために必要な栄養摂取とは関係があるのかなど、食行動に大きく影響する味の科学について最新の研究成果を中心に解説する。	鳥居　邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員）	鳥居　邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員）
4	テクスチャーの探求	口ざわり、舌ざわり、噛みごたえ、のどごしなどさまざまなことばで表現されるテクスチャーは味とともにおいしさに大きく関与する。テクスチャーの制御は、調理操作のポイソトの一つであるといえる。複雑なテクスチヤーとその実態に迫ろうとする機器評価の試み、そしてその成果を解説する。	今井　悦子	今井　悦子
5	伝統技術とその科学 －うま味を引き出す日本人の知恵－	おいしく調理するために人類はさまざまな技術を育ててきた。そして今、これらの伝統技術に隠された合理性が科学の光によって照らし出されている。世界語となった“ＵＭＡＭＩ”の発見、うま味を引き出す日本の伝統技術の科学を中心に解説する。	下村　道子（大妻女子大学教授）	下村　道子（大妻女子大学教授）
6	米 －粘りにこだわる日本人－	米は、日本人の食生活においてもっとも基本となる食材である。ジャポニカ種の米でふっくらと炊きあげたご飯のもつ粘りは、日本人が共有するおいしさであるが、地球レベルでみるとこれをおいしいと感じる民族は少数派に属する。このおいしさを創り出すために必要な米の性質と調理条件に関する研究成果を解説する。	島田　淳子	島田　淳子
7	小麦粉 －多様な料理を生み出す穀物の魔術師－	小麦粉から作られる料理の種類の多さとテクスチャーの多様性は、他の穀物の追随を許さない。この秘密はユニークなたんぱく質グルテンにある。グルテンを中心とする小麦粉調理の最新の科学について解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	魚・畜肉 －複雑なおいしさをもつ食卓の主役	たんぱく質源として、伝統的に日本人の食卓で主役を果たしてきた魚と、現代の食生活の中で一躍トップに踊り出てきた畜肉。おいしさの秘密は共に複雑なうま味と独特のテクスチャーである。うま味を引き出し、テクスチャーを制御する調理のコツを科学する。	下村　道子	下村　道子 今井　悦子
9	優れた多機能食材	生では液体で、加熱により固体に変化する性質は卵独特のものである。また、卵白は優れた起泡剤、卵黄は優れた乳化剤とそれぞれ異なる機能をも合わせもつ。これら多様な機能を利用した卵料理の基礎にあるさまざまな科学を解説する。	今井　悦子	今井　悦子
10	野菜 －期待される生理機能と鮮度－	野菜は昔から、食卓に彩りを添える脇役として欠くことのできない食材である。近年、野菜中のビタミンや食物繊維の生体に果たす機能が見直され、注目されるようになった。野菜の保存および調理による変化にスポットをあてて解説する。	畑江　敬子（お茶の水女子大学教授）	畑江　敬子（お茶の水女子大学教授） 今井悦子
11	砂糖 －知られていない多彩な機能－	調理における砂糖の主要な役割は、甘味を付与する調味料としての働きであり、またその親水性の高さを利用した保存料としての働きである。さらに、砂糖は加熱の程度により様々に様態を変え、視覚的なおいしさに寄与している。このような砂糖のもつ多彩な機能の科学について解説する。	今井　悦子	今井　悦子
12	加熱の原理とおいしさの決め手	加熱は調理の主要操作であり、加熱の方法により仕上がった料理のもつ性質は全く異なったものになる。各種加熱の原理を分子レベルで解説し、おいしさとの関わりや最近話題の遠赤外の効果などについて最新の研究成果を紹介する。	飯淵　貞明（和洋女子大学教授）	飯淵　貞明（和洋女子大学教授） 今井悦子
13	理のもう１つの担い手 －調理器具－	調理の担い手は人である。そして、欠くことのできないもう一つの担い手が調理器具である。古くから調理の必需品であった包丁、一方最新の電化製品、電子レンジや多機能を売り物にした炊飯器などの理論と構造、また、調理器具の材質の違いがおいしさにおよぼす影響などを解説する。	同上	同上
14	現代の食生活の担い手 －新食品をどう利用するか－	この数十年の間に日本の食は大きく変化し、加熱するだけで食べられる食品が簡単に入手できるようになった。新しい食材や最新の調理加工技術等について、また、日本人の食卓にどのようなものがどのような経路で登場するかを解説する。さらにこれらの賢い利用法を考える。	田村眞八郎（農林漁業金融公庫技術参与）	田村眞八郎（農林漁業金融公庫技術参与） 今井悦子
15	理とおいしさを考える －未来への課題－	21世紀へ向けて世界は一層変化し、生活の利便性や快適性はさらに向上しつつある。しかし一方において、人類と地球環境の共生の危機が叫ばれている。このような中での食に関する研究を紹介し、生活者の立場から、未来への課題について考えてみる。	島田　淳子 今井　悦子	島田　淳子 今井　悦子

＝ 食生活をめぐる諸問題（’００）＝（R）

〔主任講師：豊川 裕之（食糧学院教授）〕

全体のねらい

食と生活を取り巻く諸問題は種々の側面を持つが、中でも食品衛生、ダイエット、廃棄物そして流通・販売などの問題は注目を惹く、しかし人間の側の考え方の問題も無視できるものではなく、その対応も含めて、ひろく取り上げたい。人工環境が肥大化して、人間が徒に自然を取り戻すことに夢中になっていると自然の猛威が心配。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食と生活	結論。食生活を生活全般の中でとらえて、食文化を考える。すなわち、食に関して、「人間が作った側の人工環境」を論じる。母なる自然という考え方と同時に、自然の猛威から人類を守る手段としての食生活の文化を明らかにする。	豊川 裕之（食糧学院教授）	豊川 裕之（食糧学院教授）
2	食と栄養学	「ビーフステーキに栄養があるか？」「カロリーは栄養素の一種か？」を論じて、「栄養素密度」について説明し、食事療法の基本を述べる。明治の文豪の実は陸軍軍医の森 外が説く「飽食」についての記述を引用して、現代における食生活の盲点を衝く。	同上	同上
3	栄養学の理論体系	栄養学の理論を、少々理屈っぽいが説明する。栄養素ではなく「食品」を構成要素とする「食物消費構造」、「食物消費の2次元空間図」などを用いて具体的に説明する。	同上	同上
4	食中毒の発生状況と問題点	食中毒が発生している状況を説明し、病理性大腸菌O157のような新たに注目された食中毒から、極く普通に見られる食中毒までを解説する。	丸山 努（麻布大学教授）	丸山 努（麻布大学教授）
5	食品の安全はどのように保たれるか	どのようにして食品の安全を保つかを、ＨＡＣＣＰの考え方をも説明しながら、その仕組みや行政機構などについて解説する。また、流通過程での取り扱い方にも問題があるので、その点についても論述する。	同上	同上
6	食品はどのように流通・販売されるか	流通・販売ルーとには、いろいろな道があって、それぞれが特色を持っている。食に関する健康ニーズ、手軽さニーズ、楽しみニーズを受けて、これに応える企業側の対応が流通機構の大きな変革を促進させている。	山口貴久男（㈱生活行動研究所所長）	山口貴久男（㈱生活行動研究所所長）
7	国際化する日本の食生活	日本型食生活が見直されて久しい、しかし、それが流動しており、徐々にエスニックや欧米の食事に影響されており、どのような型でそれが起こっているかを論ずる。食材料も輸入ものが多く、その点についても詳しく述べたい。	豊川 裕之	豊川 裕之

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	手作り料理と家庭料理の調理の伝承	手作り料理が減って、お惣菜やファースト・フード、レトルト食品などが増えて来る中で、手作り料理を家庭と家庭の調理がどのように伝承されているかを論ずる。	杉田　浩一（聖徳大学短期大学部講師）	杉田　浩一（聖徳大学短期大学部講師）
9	スポーツとダイエット	スポーツをする上で食事上の注意と、体重減量などのダイエットなどが無定見に行われていくことが多い。それらの基本となることを論ずる。	殖田　友子（㈱ミューズ・スポーツ栄養ネットワーク・代表取締役社長）	殖田　友子（㈱ミューズ・スポーツ栄養ネットワーク・代表取締役社長）
10	高齢者の食べ物と食生活	高齢者に見られる嚥下障害や五官の衰えなどを考慮する食事のあり方、および高齢者の生活上の問題点を考慮して生きる喜びを念頭においた食事を述べる。	豊川　裕之	豊川　裕之
11	食生活と廃棄物	食生活の変化がゴミ処理に影響を及ぼしている。ゴミは何故発生するのか、発生源ではどんな対応が求められているのか、食生活がゴミの量や質に与える影響、ゴミ問題解決の手段、および家庭から排出されるゴミの処理の実態などについても解説する。	田中　勝（岡山大学教授）	田中　勝（岡山大学教授）
12	食べ物をめぐる迷信	世の中にはいろいろな迷信がある。また、迷信とはいわなくても、かなり科学的根拠があるように思える――実はそうではないのだが――“迷信”めいたこともある。それらを具体的に説明して行きたい。酸－アルカリ性食品の例は恰好のものである。	豊川　裕之	豊川　裕之
13	栄養素で食生活を論ずることの問題点	特定保健用食品をはじめ食品から限りなく薬品に近寄った食品がある。また、「不老長寿の妙薬」のように特定の効用を期待する食品もある。その本質は何か、ということを説明する。	同　上	同　上
14	日本人の食生活を栄養疫学の視点から視ると	第3章で取り上げた「栄養学の理論体系」を基にして、栄養疫学の考え方を説明する。とくに、近代科学の一翼を荷負う医学における問題点を一、二とりあげて論ずる。	同　上	同　上
15	食生活と健康づくり	昭和60年と平成2年との2回にわたり「健康づくりのための食生活指針」が厚生省より発表された。その作業に携わった者として、その考え方を正確にとらえ、理解することを試みる。	同　上	同　上

＝ 住計画論（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：本間　博文（放送大学教授）〕
〔主任講師：初見　学（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

私達の日常生活において、住まいのありようは生活の質を左右する重要な要件である。しかし社会の仕組みが多様化し、急速に変化しつつある現代社会において、自分達の家族生活に相応しい住まいを見つけることは簡単なことではない。それに加え、住宅に取り入れられる技術や使用される素材が次々と変化しており、問題解決を一層難しくしている。だからといって専門家に任せればよいというものではない。住まい手として基本的な知見を持って住まいにかかわるさまざまな問題解決に積極的に取り組んでいかなければならない。このようなねらいのもとに、本講義では前半で住まいに関わる基本的な知見を学習し、後半で具体的な事例をもとに安全、快適な、そして利便性に富み、健康な住まいのあり方を検証する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化・風土と住まい（1）	さまざまな国の住まいについて概説し、住まいが作り出す形態の多様性は、それぞれの地域の生活文化、慣習、気候、風土などの条件と密接にかかわり、必然性を持つことを述べる	藤井　明（東京大学教授）	藤井　明（東京大学教授）
2	文化・風土と住まい（2）	韓国や中国の住まいを紹介して東アジア文化圏の中での日本の住まいの特性を明らかにする	同上	同上
3	日本の住まいの変遷（1）	寝殿造から書院造への変遷過程をたどることにより和風の住まいは、どのような空間構成原理のもとに形成されているかを明らかにする	本間　博文（放送大学教授）	本間　博文（放送大学教授）
4	日本の住まいの変遷（2）	明治以後、洋風の住まいが和風の住まいにどのような影響を与え、今日の日本の住まいとして定着することになるのかその過程をたどる。あわせて現代の住まいにおける和風の住まいの意味を考える。	同上	同上
5	環境にやさしい快適な住まい（1）	地球環境や都市環境と住まいの関係を考える。これからの都市づくり、街づくりの観点から生活の場としての建築外部空間を考える	梅干野　晃（東京工業大学教授）	梅干野　晃（東京工業大学教授）
6	環境にやさしい快適な住まい（2）	わが国の気候風土のもとで環境と共生する住まいのあり方を考える。自然のポテンシャルを広くまんべんなく使うさまざまな手法を紹介しつつ、快適な室内環境を造りだすための条件を提案する。	同上	同上
7	住まいの構造と性能	なんと言っても住まいの基本的な性能は、住まいの構造（骨組み）に規定され、それを包み込む部材で構成された物としての建物による。住宅の構造や構法を概説し、住宅の安全性、快適性、機能性を考える。	上野　武（千葉大学助教授）	上野　武（千葉大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	住まいの空間構成とデザイン	現代住宅のデザインを考え、生活と空間構成、空間をつなぐ手法などについて概説する。	上野　武	上野　武
9	家族と住まい	家族の変容とさまざまな住まい方について考える。高齢化、世帯構成とライフスタイルの多様化などのキーワードをもとに、グループ居住、マルチハビテーション、ＳＯＨＯやネットワーク居住の現状を探る	横山　俊祐（熊本大学助手）	横山　俊祐（熊本大学助手）
10	集まって住む（１）－都市居住の形態	高密度化への対応（密度と集合形式）、都市集住の形態（超高層と中庭型）、都心回帰、ミニ戸建て問題（所有と使用）、複合化などの実態を解説し、新たな都市集住形態の創出を提起する	初見　学（東京理科大学教授）	初見　学（東京理科大学教授）
11	住まいの集合（２）－コミュニティの形成	住まいの社会性、コミュニティの形成について考える。住宅団地における住棟とアクセス形式（リビングアクセスの実例）などを通じて住まいを開くことの意味を考える。	同　上	同　上
12	住まいの集合（３）－ライフスタイルの実現	住戸の計画を通して個別のライフスタイルと変化への対応を考える。スケルトンインフィル（ＳＩ）方式などの集合住宅の新しい空間構成手法によって可能になるフレキシブルな計画、居場所の創造など、居住者自身による生活空間創造の実態を報告する。	同　上	同　上
13	住まいづくりへの参加	住み手自らが計画に参画する。住まいに普段に働きかける。住みこなす。住み続ける。そして建て替えるといった、住まい自体のライフサイクルの各場面での住まい手の主体的なかかわり方を、いくつかの先端的な事例をもとに考える。	横山　俊祐	横山　俊祐
14	地域の中の住まい	住まいは、それが建つ地域の環境のもとで、その地域の資源を活用し、地域性を生かして造られる。あるいは住まいが地域を作る役割を担うこともある。先端的な事例を検証し、地域と住まいの関係性を報告する。	同　上	同　上
15	これからの住まい	あるべき住まいの形は決して一通りではない。さまざまな解決の仕方があり、そしてその答えは単に各要素を足し算したことによって得られるものではない。１４回の講義を通して得られた住まいの諸条件を総体として検討し、２１世紀の住まいが向かうべき方向を提案する。	本間　博文	本間　博文

＝ 世界の住まいと暮らし（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：服部　岑生（千葉大学大学院教授）〕

全体のねらい

世界の人口の大部分が都市に住む時代である。講義の中心は、世界の都市居住の実態－住まいと暮らし－から、その都市居住の理想と今後の姿を求める講義とする。主な特徴は、以下である。

1）　地球上には、様々な形の都市の住まいがある。都市住宅の先進国である欧米の住まいと暮らしに焦点をあてて、その実態と、立地環境、歴史・文化による違いを、住まいの豊かさとして紹介する。

2）　未来の住まいに必要な条件について、多様性、生活、文化や環境の観点から、その取り組みの事例を取り上げ解説する。

3）　都市居住の対極にある未開や辺境の住まいについての講義を組み合わせて、住まいのあり方の過去と未来、世界と日本を対比して考える。

4）　授業の資料としては、現地取材ビデオ映像や写真映像などのビジュアルな情報やインタビュー・フィルムを用い、平易で魅力的なものにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	住まいの豊かさ	イギリスの住まいと街の事例（ブレーズハムレットの環境、ハルの環境・生活）を通して、豊かさ、人々の日常生活の豊かさを語る。その中で住まいが暮らしに対して持つ役割を考える。さらに、講義の目的を述べ、世界の住まい－例示、中国ヤオトン・イエメンの高層住宅ー、特に都市住宅・住宅地の様子、歴史を概観にしながら、これからの住まいの課題と条件を紹介する。	服部　岑生（千葉大学大学院教授）	服部　岑生（千葉大学大学院教授）
2	東南アジアの住まいと暮らし	アジアの辺境地域の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらと忘れられた日本の伝統とのつながりも示唆する。	畑　聰一（芝浦工業大学教授）	畑　聰一（芝浦工業大学教授）
3	南欧の住まいと暮らし	同様にエーゲ海などの島嶼の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらの都市住宅・住宅地への示唆を学ぶ。	同　上	同　上
4	歴史の中の住まいとインテリア	ヨーロッパの都市住宅とその住宅地の構成を、伝統的な住まい（イギリス・シングルトンの民家村）、イタリアの古代住宅の史跡（ローマ・オステイア）などの住まいの事例について、現地写真や図例を中心に、住まいを歴史的に解説し、その多様性が現在に伝えられていることを概説する。また、ヨーロッパの住まいのインテリアの伝統についても、暮らしを視覚的に紹介（ノビララの住まい）する。特に、歴史文化、気候環境などと住まいの形の発祥の関係、住まい方と民族性などの関連について、論ずる。	服部　岑生	服部　岑生
5	都市住宅地のはじまりー集合と単位	都市の住まいは、多様な単位と群という集合でできている。その単位は、都市の集積のために、コンパクトで高密である。群としての住まいは、その配置（集合形成）に、人々の社会生活を表現する。これらについて、イタリアの古代都市の集合住宅の史跡（ローマ・オステイア）、スペインの歴史都市（グラナダとその周辺）、パリの中世のイメージを残す街区（サンポール街区とドーミニールの集合住宅）、バルセルナの計画的に作られた街区（セダーによる計画街区）などを例に、都市の住まいおよび、その集合のパターンを楽しく紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	欧米の都市住宅地－囲み配置の住まい	ロンドンの都心部にたまたま計画された中庭のある街区の生活のすばらしさを紹介し、囲み型の意味や歴史を考える。20世紀初頭の中庭型街区づくりの動きを代表するウイーンのマルクスホフと同時期の半開放型のラベンホフ住宅地を事例に現地取材し、共同体になっていく居住地の生活をかいま見る。現代の囲み型住宅地の流行において、その代表例ストックホルムのスカルブナック住宅地を訪問し、そのライフエリアづくりの特徴を学ぶ。	服部　岑生	服部　岑生
7	楽しい様々な住まい－集合住宅の展開	ローマ時代からの集合住宅の歴史を概観する。はじめに、集合住宅の成立要因を、古代ローマの集合住宅遺跡を示し、解説する。特に、近世に発見された集合住宅は、どのような経緯で典型的なフラットの平面計画や住棟計画に至ったかについて、英国の20世紀初頭のタウンハウス（ロンドン）、近年の都市ビラ型集合住宅（ベルリン）、メゾネット住宅（コンビュジェのヘマルセイユ・ユニテ、ニューヨークのルーズベルトアイランド、1199住宅）、環境に配慮したグリーンハウス（ベルリン）、さらに住棟の多様性として、植物をデザインに取り入れたベルリンの集合住宅、現代の構法を駆使した奇抜なロッテルダムの集合住宅など多様な発展を、現地取材（パリ大学エルブ教授のインタビュー）、写真で説明する。	同　上	同　上
8	楽しい様々な住まい－カントリーハウスからデザインハウスへの展開	欧米の独立住宅の歴史を、イタリアの都市に建てられた宮殿住宅パラッツオ、イギリスの歴史的なカントリーハウスの大豪邸を手始めに、小型の都市住宅の試みであるブリーズ・ハムレット（18世紀、ブリストル近郊）近代の都市住宅の始まりといわれる赤い家（ロンドン）、コルビュジェのサボイ邸を紹介するとともに、大規模なものから小規模なものへの変遷の経緯を考察する。欧米のあこがれの住まいは、貴族の理想の住宅であったカントリーハウスから、都市居住者のホワイトカラーたちが求めた独立住宅へと展開した系譜である。最後に、マイヤーのアテニュームを典型とする、白色で連続空間を構成する現代住宅のデザインの特色から、デザインハウスの行方を考えたい。	同　上	同　上
9	郊外住宅地の形－田園都市からニュータウンまで	ヨーロッパの20世紀の郊外住宅地の歴史を概観する。特に英国の田園都市（イギリス中部の田園地帯、バートンなど）、最初のニュータウン（ロンドン近郊のウエルイン・ガーデンシティー）、現代のニュータウン（ドイツ、ニュータウン）までの歴史を概観し、都市と郊外住宅のかかわり、その結果としての郊外住宅の計画の特性を考察する。ドイツのニュータウンの歴史について、ブレーメン芸術大学キルシェンマン教授にインタビューする。特に、第二次世界大戦後、住宅復興のために欧米で大量に建設されたニュータウンの集合住宅は、今や耐久性の寿命が終り、再生を待っている。年を取った住まいの運命と今後の課題（イギリスのシェフィールド）について、シェフィールド市建築家A．ベアード氏にインタビューする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	都心住宅地の形－タウンハウスからインフィルハウスまで	欧米の都心住宅地の歴史を、健康、復興、再生、可変などの価値観の変化として、概観する。まず、ロンドンのタウンハウスの紹介を行い、パーティーウォールによるインフィル住宅の意味について考察する。次に、都心の高層集合住宅として、バービカン（ロンドン）やルーズベルトアイランド（ニューヨーク）を紹介し、防御的な配置計画とその内部に取り込んだアメニティ施設によるライフエリアの確立という特徴を明らかにする。パリのビッテ教授の生活（ビッテ夫人の紹介）により、都心の喧噪の裏に、静かで上品な生活が展開していることを学ぶ。さらに、都心住宅地は、多くの場合伝統的で古い住宅地であるが、その継承を、住民参加で環境共生住宅を創造した、ベルリン103街区の事例を、インタビューする。さらにニューヨークの古い地区での伝統を継承する住宅計画の様子を紹介し、現代の傾向とされる、居住者参加による住まいづくりを学ぶ。	服部　岑生	服部　岑生
11	アメリカの住まい－郊外の理想	ヨーロッパからの移住に起源を持つ、アメリカの都市住宅の理想は、20世紀のはじめに郊外移住のブームとなった、それによって生まれた郊外住宅を、解説する。まず、アメリカの生活と住宅史の源流を、インヂアナ・ニューハーモニーのヒストリック村を訪ね探る。ここで、開放的な住宅と住宅地の構成やコミュニティの理想を理解する。次に現代でも理想の姿を維持するニューヨーク近郊の街を訪ね、住宅地の構成や暮らし、町の運営の様子をインタビューする。最後に、ニューヨーク郊外に住むオダムスさんの家族に、日本に住んだ経験からの比較評価を含め、アメリカ人の住まいに関する考え方、引っ越し観などをインタビューする。ここでは、アメリカ人の住まいの理想の条件が、郊外に関わっていることが明らかになる。	同　上	同　上
12	アメリカの住まい－高層プールとスーパーのある生活	もうひとつのアメリカの住まいの典型として、特に超高層住宅の住まいに焦点をあてる。ニューヨーク、シカゴには数多くの世界一高い超高層住宅があり、アメリカの定番の住宅となっている、そのような高層住宅の作りと暮らしを探る。事例は、高層集合住宅の始まりとされるニューヨークのルーズベルトアイランド、ダコダハウス、同じく1199プラザ、シカゴのジョンハンコックセンターなどビデオの現地紹介と多数の写真による。ここでは、超高層住宅で生活する居住者や管理者のインタビューを行う。	同　上	同　上
13	未来の住まい－街の住まい	コルビュジェのマルセイユのユニテは、生活施設を内蔵しコミュニティーとして自立する住まいであった。このような自立型の集合住宅の起源は、古くユートピア思想とともにあり、その事例をロンドンのドルフィンスクエア住宅を訪ね、インタビューを通して紹介する。現在ではさらに助け合って住む住まいが、高齢者の集合住宅やコレクティブ住宅（スエーデン、ファルドクナッペン）など、多様に見られる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	未来の住まい－挑戦する住まい	失われつつある豊かな自然とともに暮らす、実験プロジェクト、バイスフイアⅡは、地球という自然の意味を明らかにする実験であった。人間の未来を支える自然、地球に優しい、要するに持続し、循環する住環境づくりの挑戦を紹介する。サンフランシスコ近郊のデービス市の、エコーシティーの試み、オランダのエコロニアの試みは、いずれも、自然に優しい住まいのプロジェクトである。また、すでに建設されてしまった都市は、再生されて新しい世代を受け入れていかなければならない。そのために、コミュニティー・アーキテクチャーの試みがきわめて重要であり、イギリスの先進的な組織の活動を紹介する。	服部　岑生	服部　岑生
15	世界と日本－ゆとりある住まいを求めて	まとめとして、単位の住まいについて、科学技術や工業生産技術の進歩より、従来の住まいづくりの条件であった、自然条件が克服され、またより高度に環境条件が制御されていく時代となった。このような技術がもたらす未来の住まいと平均化する実態の住まいを対比して、住まいの課題を考察する。さらに、集合としての都市住宅地について、今後の居住地の生活の変化、コミュニティーの変化の課題や、閉鎖型の再認識、日本の伝統的な路地を内蔵する街区などフィジカルな課題を確認する。	同　上	同　上

＝ 日本における集合住宅計画の変遷＝（ＴＶ）

〔主任講師：高田　光雄（京都大学助教授）〕

全体のねらい

わが国の集合住宅の歴史は第二次世界大戦前の同潤会のアパートに始まるが、本格的に供給され、都市域における一般的な住宅形式として認知されるようになったのは、戦後のことである。

50年足らずではあるが、わが国の社会情勢の急激な変化に対応して、集合住宅も様々な変遷を経て今日多様な表現をとりつつある。この間の経緯を明らかにし、変化がいかなる要因によるものかを探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概説	集合住宅計画の変遷	高田　光雄（京都大学助教授）	高田　光雄（京都大学助教授）
2	戦前および戦後復興期（1）	集合住宅団地の誕生 －同潤会アパートを中心に－	服部　岑生（千葉大学教授）	服部　岑生（千葉大学教授）
3	戦前および戦後復興期（2）	住宅で街をつくる試み －古市中団地－	冨江　伸治（筑波大学教授）	冨江　伸治（筑波大学教授）
4	戦前および戦後復興期（3）	高層化の夢 －晴海高層アパート－	初見　学（東京理科大学教授）	初見　学（東京理科大学教授）
5	高度経済成長期（1）	マンションという商品 －第一次マンションブーム－	高井　宏之（三重大学助教授）	高井　宏之（三重大学助教授）
6	高度経済成長期（2）	大規模団地とニュータウン －千里ニュータウンを中心に－	杉山　茂（大阪市立大学助教授）	杉山　茂（大阪市立大学助教授）
7	高度経済成長期（3）	高層集合住宅街区の建設 －広島基町高層住宅と芦屋浜高層住宅－	森保　洋之（広島工業大学教授）	森保　洋之（広島工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	第一次石油ショック以降 (1)	低層集合住宅の復活 －水戸大番池団地とタウンハウスの隆盛－	小林 秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）	小林 秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）
9	第一次石油ショック以降 (2)	地域性を活かした集合住宅 －地域型公営住宅－	志田 正男（東北工業大学教授）	志田 正男（東北工業大学教授）
10	第一次石油ショック以降 (3)	集合住宅計画への住まい手参加 －コーポラティブ住宅「ユーコート」－	定行まり子（日本女子大学講師）	定行まり子（日本女子大学講師）
11	安定成長期からバブル経済崩壊まで (1)	都市内居住と複合化 －大川端・神谷－	石倉 健彦（住宅・都市整備公団係長）	石倉 健彦（住宅・都市整備公団係長）
12	安定成長期からバブル経済崩壊まで (2)	街区と集合住宅 －ベルコ・リーヌ南大沢－	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）
13	安定成長期からバブル経済崩壊まで (4)	住まい手の個性とインテリア －内装自由設計の集合住宅－	沢田 知子（文化女子大学教授）	沢田 知子（文化女子大学教授）
14	展望 (1)	住まい手と住まい	園田眞理子（明治大学専任講師）	園田眞理子（明治大学専任講師）
15	展望 (2)	「いえ」と「まち」の関係	高田光雄	高田光雄

＝ 医療・社会・倫理（’９９）＝（R）

〔主任講師：近藤 喜代太郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：藤木 典生（福井医科大学名誉教授）〕

全体のねらい

医学生物学の進歩は医療の向上の原動力であるが、さまざまの社会的影響をもたらし、法・倫理にかかわることも少なくない。技術的進歩の恩恵とともに被害を受けるのも患者であり、医療は患者の立場をいつも考えなければならない。この科目では患者の権利を基本的な観点として、医療・医学と患者および社会との接点に起こる多岐にわたる問題のなかから、とくに大切な15課題をとりあげ、技術的進歩が本当に人々の役に立つには個人・医師・医学者・社会・行政はどうすべきかを考える。しかし回数の関係で医療制度・医療経済・社会保障などの問題には触れない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	医学・保健・医療と社会の接点	医学は病気を中心とするヒトの生物学であり、学理の探究をめざした体系をもっている。一方、保健医療は国家のしくみで、法令・予算・施設・専門職・科学技術などの要素からなっている。医学と保健医療は車の両輪で、その進歩は国民の幸福を増すが、ときに好ましくない問題が起きることも少なくない。第１回では医学・医療と社会にはどんな接点があり、どんな問題が起きているかを知るための序説とする。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	医療の倫理と患者の権利	医療と社会の接点を考える上で根幹をなすのは倫理である。これは古い課題ではあるが、近年、医療技術の進歩と国民の意識の変化によって新しい段階に入っている。生命の始期と終期の問題は別の回に論じられるが、医療の場ではその他にも生命権と治療決定をめぐって多岐にわたる問題が起きる。本講義ではそれらを巾広く展望し、患者の権利と自己決定権をいかに守り、よい医療をいかに提供するかを考える。インフォームド・コンセントにかかわる問題はとくに大切なので次回でのべる。	星野 一正（京都大学名誉教授）	星野 一正（京都大学名誉教授）
3	インフォームド・コンセント	医療の倫理を考える上で基本となるのは「患者の権利」と「インフォームド・コンセント」（ＩＣ）である。ＩＣはアメリカで生まれた法概念で、医療とその過誤を裁く上での基本となり、日本では「説明と同意」と訳されることが多い。「説明」とは病気の性質・予後、さまざまな検査・治療・薬剤などの効用とリスクなどについて、患者が知る権利に応えることで、それに基づいて患者が自己決定した「同意」を受けて医療を行う。この講義では、ＩＣをめぐるさまざまの問題を述べ、日本に適した提言を行う。	同上	同上
4	医療の自己規制と倫理委員会	医療は患者と医師の個別的な契約による行為ではあるが、移植、受精卵技術、輸血拒否、遺伝子治療など、倫理問題の起きやすい医療行為については、担当医のみに任せず、病院があらかじめその内容を審議し、好ましくない事態から患者と医師を守ることが必要とされている。これが「倫理委員会」で、日本でも各大学に普及し、各分野の教授、法律家などが参加し、申請に基づいて医療の内容を検討し、大学病院としての責任を果たしている。一般病院や地域への普及は今後の課題であり、医療以外にもヒトを被験者とする治験などにも施設内または第三者による評価が必要となることが多い。	武部 啓（近畿大学教授）	武部 啓（近畿大学教授）
5	生命技術と倫理	ヒト・ゲノム計画は、遺伝子診断・治療としてゲノム多様性といった遺伝医学への応用の他に、体外受精などの生殖医学、クローン研究などの発生生物学、行動のメカニズムなどの科学の分野で輝かしい進展をとげてきた。反面、多岐にわたる倫理的・法的・社会的問題点を惹起してきた。本講義ではこれら背景を展望した上で、その倫理的考察を行ない、あるべき理念を検討したい。	藤木 典生（福井医科大学名誉教授）	藤木 典生（福井医科大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	遺伝医学と倫理	遺伝子は個人の所有物であるだけでなく、家族と共有するものである。最近、技術の進歩によって比較的容易にそれぞれの個人に特有の遺伝情報を解析できるようになった。これらは遺伝性疾患にとどまらず、人生後半に起こる生活習慣病の診療にもさまざまの恩恵をもたらしたが、複雑な人文的問題をもひき起こした。本講義では生命倫理の基本に従って、医療としての遺伝医学の正しいあり方を考える。	松田　一郎（重症心身障害児施設江津湖療育園園長）	松田　一郎（重症心身障害児施設江津湖療育園園長）
7	脳死と移植	昭和42年の和田手術から平成9年の「臓器移植法」までの永い年月、脳死がヒトの死かどうか、脳死移植の可否をめぐる国家的な論争がつづき、脳死者からの臓器移植でしか救命できない患者が外国に行くなどの事態がつづいた。脳死をめぐる問題は、医学の技術的進歩がきわめて広範な分野に反響を呼んだ事例として他に類をみない。この講義では、この問題を広く回顧し、立法に至った経緯をのべ、日本文化との係わり合いにも触れる。	中山　太郎（衆議院議員）	中山　太郎（衆議院議員）
8	死の医学	病気の治療を目的とした医学にとって、死に至る病気は、ともすれば医学の敗北とみなされがちである。しかし最近、ホスピスや緩和ケア、安楽死・尊厳死などに対する社会の関心が高まり、いわゆる「死の医学」の重要性が叫ばれるようになってきた。この講義はそれらについてのべ、日本にふさわしい終末医療のあり方についても考える。	柏木　哲夫（大阪大学教授）	柏木　哲夫（大阪大学教授）
9	医療のシステム	医療は診察と治療とからなるが、すべての医師がすべての病気を正しく診療、治療できるのではない。良質で適切な医療はさまざまな技術・能力を組み合わせることで確保される。本講義では良い医療を保障できるシステムを築くにはどのようなデザイン・運用・監視・教育・人事などが必要であるのかを説明、例示する。	信友　浩一（九州大学教授）	信友　浩一（九州大学教授）
10	医療政策と情報公開	行政のあり方は国民生活に大きな影響がある。日本は乳幼児死亡率が世界最小、寿命が最長であり、それには行政も大きく貢献した反面、薬害エイズのように行政ミスによる事件も起きている。本講義では、医療政策はどうあるべきか、情報を公開し、国民も参加した政策をいかに確立すべきかを考える。	同　上	同　上
11	障害児をもつ親	患者の障害の告知、親としての障害の受容などの問題について実例を紹介しながら講義する。重症の障害をもつ新生児の選択的治療停止や、親による治療拒否などの倫理的な問題、患者団体のあり方など、患児の近親からみたさまざまの問題に触れる。	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）
12	医学研究と社会	医学の進歩のためには研究が欠かせないが、研究の美名のもとになんでも許される訳ではない。遺伝子組換え、クローン技術などは5，6回で論じられるので、本講義ではヒトを被験者とする研究、ヒト集団を対象とする疫学調査、治療法を比較するコントロール化臨床試験、動物の愛護と実験などに触れ、研究の利益と不利益の釣衡を考える。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	薬をめぐる問題	薬は両刃の剣と言われる。病気を治すために使った薬が、予想もしない副作用を招くこともある。不適切な薬剤行政は薬害エイズのような不幸をもひき起こす。薬は治療には欠かせない手段であるが、企業にとっては商品でもある。この講義では薬に関する行政のあり方、科学的・倫理的に望ましい開発、医療に当たって、証拠に基づいた適正な薬剤の選択を行うにはどうすべきかなど、薬をめぐる多くの問題を考える。	別府　宏圀（東京都立府中療育センター副院長）	別府　宏圀（東京都立府中療育センター副院長）
14	日本・アジアの社会と生命倫理	本講義ではアジア的生命倫理の特殊性について考える。欧米がヒューマニズムと人権の理念に基づく生命倫理を推進しているのに対し、アジア的コミュニタリアニズムは欧米の受けとめ方と異なる点が少なくない。本講義ではこれから21世紀に向けての地球的倫理を構築するための東西の生命倫理の融合の道を探りたい。	坂本　百大（青山学院大学名誉教授）	坂本　百大（青山学院大学名誉教授）
15	医療と国際協力	国際協力というと、開発途上国への援助の面からしか考えられていない。本講義では医療を国際的視野で考え、人間として基本的医療を受ける権利を有することから、医療資源の適正配分の考え方を述べる。医療資源は人的資源、物的資源、社会経済的資源に分けられるが、それらの適正配分と国際協力について考える。	岡崎　勲（東海大学教授）	岡崎　勲（東海大学教授）

＝ 看護学概説（’０１）＝（R）

〔主任講師：佐藤　禮子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

学習者が、看護学の主たる概念や諸理論に関わる先進的知識を幅広く獲得し、実践の科学である看護に対する理解を深め、自らの看護観を確かなものにしていくことを意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	看護の本質となるもの	看護は、人が幸せにして健康な生活を営むことができることを目指す、生物－心理－社会的存在としての人間の健康生活に焦点を当てた働きをなす実践の科学である。このような科学的看護の本質について理解を深めるために、看護のｋｅｙ概念についてと看護実践とその基盤について詳述する。	佐藤　禮子（千葉大学教授）	佐藤　禮子（千葉大学教授）
2	看護学発展の方向性	今や看護学は独自の学問分野として専門分化しつつある。今後の方向性の基盤ともなる医療の高度化や機能分化、人々の健康水準と求める健康の質、および社会経済状況と将来にむけた要請に対応しつつ、他の学問分野の成果をも取り入れながら発展する過程について述べる。	吉本　照子（千葉大学教授）	吉本　照子（千葉大学教授）
3	生涯発達過程にある看護の対象	人間は誕生してから死ぬまでに生涯発達の過程にあり、看護はあらゆる発達過程にある人々を対象とし、発達過程に応じた適切な看護を提供することを目標とする。対象の生物的・心理社会的発達と健康・疾病との関連について述べる。	岩崎　弥生（千葉大学教授）	岩崎　弥生（千葉大学教授）
4	健康を保つメカニズムと看護	健康とは何か、そして健康を保つために看護はどのような役割を果たしうるのかについて解説する。これにより健康のあらゆるレベルに対する看護の役割、機能について考察する。	宮崎美砂子（千葉大学教授）	宮崎美砂子（千葉大学教授）
5	環境との相互作用がもたらす健康問題	健康を支えるための環境づくりが地域、国、地球レベルで進みつつある。その基盤をなす概念として、物理化学生物的・社会的な外部環境と個人の内部環境、環境の変化と人間の適応の相互作用、適応困難としての健康問題を主に述べる。	吉本　照子	吉本　照子
6	事象・事実に基づく看護過程の展開	看護過程は問題解決のアプローチであり、看護する者が対象のためにケアを計画し、提供するための系統的な方法である。看護過程の５段階（アセスメント、診断、計画、実施、評価）を説明し、看護過程を用いることの利点について述べる。	齋藤やよい（群馬大学教授）	齋藤やよい（群馬大学教授）
7	看護技術の意味	看護実践は対象との関わりの中で発展させていくものであり、対象にもっとも適した看護実践には、看護する者のしっかりした看護観とともに科学的根拠に基づいた看護技術が要求される。具体例とともに看護技術の意味と看護の実践力について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	関わりと看護技術	看護は人と人との関わりの中で実現され、看護する人もされる人も関わりの中で変容する。看護する者が、全体的存在として患者と共にあることの意味を述べ、そのような関わりを含む看護技術を説明する。	岩崎　弥生	岩崎　弥生
9	セルフケアを育てる看護	健康問題を解決し、健康を増進するために、人はさまざまな社会資源を活用し、セルフケア能力を育み、実践している。慢性疾患患者のセルフケアを例に、セルフケアを遂行するために必要な要件と、それを支える看護活動について説明する。	齋藤やよい	齋藤やよい
10	患者を含む一単位としての家族への看護	患者を含めた単位としての家族を看護の対象とする意義・必要性を概説し、個人の健康回復・維持に果たす家族の役割と家族成員の病気が家族全体に及ぼす影響、並びに家族を対象とした看護の方法を説明する。	岩崎　弥生	岩崎　弥生
11	在宅療養を支える看護	在宅療養者及びその家族を支えるために、地域社会で機能している看護の諸活動の現状について説明する。また在宅療養を支える看護をさらに充実・発展させるための課題について述べる。	宮崎美砂子	宮崎美砂子
12	他職種との連携・協働における看護の役割	保健医療福祉の発展と効率化、対象のニーズの多様化に対応するために、職種間の連携が重要になっている。チームの形成と目標設定および役割分担にむけて他職種の資格制度を概観し、看護の調整的役割と責任性、期待されるリーダシップや指導的役割について述べる。	吉本　照子	吉本　照子
13	地域住民と共働する看護	人々は、地域生活共同体の一員として、多様な人とつながりを持ちながら生活している。人々の健康や生活の豊かさを追究するために、看護が創出してきた、地域住民と共働する看護活動の方法及び意義について説明する。	宮崎美砂子	宮崎美砂子
14	人の死と看護	人の死とはについて、生物学的な死の概念から導入し、人の死と死に行くことについて理解を深め、特に、人が人生途上において、突然に死に直面せざるをえない事態に陥った時の苦悩する人々および死に逝く人々にかかわる看護の働きについて説明する。	佐藤　禮子	佐藤　禮子
15	看護における倫理	倫理とは何かという基本的な意味について、および専門職としての看護実践を導く判断の基盤であり道徳的な意思決定を行う時の行動の指針ともなる、倫理的な原則について説明する。また日々の看護実践における倫理的問題を理解するための講義展開を行う。	同　上	同　上

＝ 母子の健康科学（’００）＝（R）

〔主任講師：日暮　　眞　（東京家政大学教授）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康科学には年齢特有の問題も多いが、放送大学では限られた枠の中で母子と高齢者に関する科目をそれに当てている。母と子の保健問題は互いに関連しており、おなじ科目で講義することとしている。日本は「多産多死・感染症社会」から「少産少死・成人病社会」に移行し、世界でもっとも進んだ保健先進国となっている。本科目ではこうした状況でもなお未解決な問題、新しく生じた問題などに重点をおいて、母子の健康科学をめぐる重要問題を15課題選んで講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	これからの母と子の課題	近年子どもを巡る環境は急速な変化を生じ、それらは少産少子・育児環境（社会・人間関係・情報等）の変化・国際化など、多岐に亘っている。本講義ではこれらの変化が母子にどのような影響を及ぼしているかを分析し、対応策を考察し、全体の序論とする。	日暮　眞（東京家政大学教授）	日暮　眞（東京家政大学教授）
2	母と子の健康の状況	主に統計と疫学を駆使して、母性と学齢期までの子どもの心身の健康の現状をのべる。子どもはもっともよわい社会の構成員であるが、日本の乳幼児死亡率は世界最低である。これは日本の社会の先進化、母子保健行政、医療など、母と子を守る仕組みがかなり満足すべき水準にあることを示しているが、残された課題も少なくない。この講義では3回目以降の序説をかねて主な問題を述べる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
3	妊娠と分娩	今日の日本は、高度な先進医療と人類がかつて経験しなかった少産少死の時代を迎えつつある。母子の健康を考えるとき、周産期・新生児死亡の著減、不妊治療の飛躍的上昇、腎臓移植後の妊娠など、多くの合併症を持った妊娠例の増加があり、新たな視点を持って臨むことが必要となってきた。母体死亡率はなお高い。妊娠成立やその維持機構、分娩発来機序についてはまたまだ不明な点があるが、新しい知見が次々に発見されている。	福岡秀興（東京大学助教授）	福岡秀興（東京大学助教授）
4	妊婦の心とからだ	本講義では妊娠が母体の心身にとのような変化をおこすかを学ぶ。もっとも大きな変化は子宮におき、成長する胎児をはぐくみ陣痛によって娩出する準備が進む。内分泌をはじめすべての臓器が多少とも変化するが、分娩によって復元する。感情不安定、挙子への期待と不安、うつなと心の問題も多く、周囲の支援が大切である。	佐々木　茂（日本医科大学永山病院産婦人科）	佐々木　茂（日本医科大学永山病院産婦人科）
5	妊婦の異常と流早産	「お産は女の寿命定め」という諺があるように、妊娠・出産は女性の心身に重大な影響を及ぼす。本講義では異常妊娠・妊娠高血圧・妊娠中毒症なとの妊娠に固有の異常、分娩の異常、てんかん、糖尿病などの合併症と妊娠との関係、さまざまの原因による流産と対策について論ずる。	進　純郎（葛飾赤十字産院院長）	進　純郎（葛飾赤十字産院院長）
6	リプロダクティブヘルス・ライツ	多くの女性が出産の間隔や産む子供の数を自由に選択できず、その結果、多産の奨励、あるいは危険な中絶で命を落としている。妊娠、出産、中絶などにかかわる女性の健康を重視し、さらに、子供を産む産まないの自己決定権の他、生涯にわたって女性自身の健康を主体的に守って生きる権利をリプロダクティブヘルス・ライツという。その促進にむけて、どのような医学的ケアと情報の提供が必要かを産婦人科医の立場から考察する。	島本郁子（奈良県立医科大学看護短期大学教授）	島本郁子（奈良県立医科大学看護短期大学教授）
7	胎児から新生児へ	子宮内で母体から酸素や栄養素の供給を受けていた胎児は、出生を境に呼吸し栄養素を摂取するなど自立した生活が必要になる。子宮外生活への適応は、ヒトの一生の中で最も大きな変化であり、多くの異常がこの時期の適応障害によって生じる。この劇的な変化について解説する。	多田　裕（東邦大学教授）	多田　裕（東邦大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	子どもの成長	出生から成人に至るまでの各時期の成長の特徴を、全身的ならびに器官ごとの観点から解説する。また、日本人の発育の年次推移について議論する。さらに、成長の正常と異常や、その判断の方法について、計測方法、発育基準とのてらし合わせ方も含め解説する。	加藤則子（国立公衆衛生院母子保健学部乳幼児保健室長）	加藤則子（国立公衆衛生院母子保健学部乳幼児保健室長）
9	子供の栄養	子どもの栄養状態は過剰栄養状態が問題視されるようになり、肥満、高血圧症等のリスクをもつ子どもが増加してきている。その背景として、単なる食物の過食や偏りばかりではなく、摂食のリズム、食習慣の不規則性や家庭・社会の問題などが子どもの食生活に影響している。栄養問題を子どもの生活すべてを包含した視点から検討する。	坂本元子（和洋女子大学教授）	坂本元子（和洋女子大学教授）
10	母子の生活と環境	近年の母子を取り巻く環境はめまぐるしく変化しつつある。本講義では母子の健康生活により密着した立場から、環境を(1)生物学的環境（母子感染、食中毒など）(2)物理・化学的環境（環境汚染物質の母子への影響など）(3)社会学的環境（住環境の変化による健康影響、事故の現状と対策、育児環境、遊びなど）に分けて、母子の健康生活と影響の関連性を述べ、その問題点と対策について論じる。	織田正昭（東京大学大学院助手）	織田正昭（東京大学大学院助手）
11	子どもの心の病い	不登校をはじめとして、心身症、いじめ、非行、行為障害など、子どもの心の病が近年強く関心を集めている。子どもの心の問題には、親子関係や家庭環境、学校環境、子どもを取りまく社会環境の問題が影響している。本講義では、これまでの知見に基づき、子どもの心の病の理解と対処、そしてまた予防について学習する。	吉田弘道（専修大学教授）	吉田弘道（専修大学教授）
12	子どものからだの病い	日本の乳児の死亡率は1000人当たり4.3と世界で一番低く、子どもの死は稀である。乳児期で問題になるのは乳児突然死症候群で、乳児死亡の約10%を占めている。乳幼児の病気は日常茶飯事にみられるかぜ症候群がもっとも多く、子どもの伝染病がときおり流行を繰り返す。過去に比べて増加してきているものにアレルギー疾患がある。乳児期のアトピー性皮膚炎、幼児期から発症することが多いのは気管支喘息である。最近話題になっているのは「生活習慣病」の幼児期からの予防である。	中村敬（恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所情報担当部長）	中村敬（恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所情報担当部長）
13	母と子の保健行政	母子保健は、大正当時、出生千人に対して180以上あった乳児死亡率を減少させることを目的としてスタートした。その後、乳児死亡率は年々減少し、平成9年には3.7となり、世界で最も低率となっている。その一方で、出生率の急激な低下、疾病構造の変化、核家族化等、母子を取りまく環境は大きく変化している。超少子化の現状をふまえ、今後の母子保健のあり方を論じる。	住友眞佐美（東京都衛生局課長）	住友眞佐美（東京都衛生局課長）
14	予防接種	平成6年、予防接種法に昭和51年以来の大改正が行われ、予防接種は集団接種から個別接種による個人防衛に変わった。その結果接種率の低下が心配されているが、予防は治療に勝ることを広く理解しなくてはならない。21世紀を迎え、一国の感染症対策は世界的視点なしには成り立たないという共通認識が必要となった。平成6年（1994年）3月にWHOは「ワクチンと予防接種への世界計画」を発足させた。この分野の今後についても考える。	渡邉言夫（杏林大学名誉教授）	渡邉言夫（杏林大学名誉教授）
15	学校保健	社会の変化に伴い、学校教育の在り方が種々論議され、その影響は学校保健の領域にも及んできている。このような時期にあって、児童生徒等の健康を保ち、かつ推進するにはなにを考慮すべきなのか、特に、学校・家庭・地域が連携して取り組むべき課題は何なのかなとに重点を置き、講義を進めてみたい。	衛藤隆（東京大学教授）	衛藤隆（東京大学教授）

＝公衆衛生（’０１）＝（R）

〔主任講師：近藤　喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

公衆衛生は健康をまもる社会のしくみであり、日本では憲法25条などで国が義務づけられている。公衆衛生は法制度、経済、施設、専門的マンパワー、科学技術の５大要素から成り、単なる学理ではないが、この科目では学理に重点をおいて主な問題を学ぶ。ただ、この科目とほぼ同時に開講されている「母子の健康科学」「高齢者の心と身体」「こころの健康科学」「医療・社会・倫理」にも公衆衛生的な問題がとり上げられており、それらとの重複を避けて立案されている。今日、公衆衛生と医療は国の制度そのものである。日本の制度はその管理的性格で世界的に知られ、疾病制御、平均寿命の延長などの成果が著しい反面、薬害を反復するなど、危機管理では遺憾な点もある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論と予防の考え方	この章は全体の序論であり、公衆衛生の概念、歴史、主な分野、法令・制度の枠組みなどとともに「予防」という考え方について学ぶ。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	保健・医療の制度	保健・医療制度は複雑であるが、それを理解しないと日本の医療を理解し、また実務を行なう上で大きな支障をきたす。そこで本章ではできるだけ分かりやすく現実の状況に照らして、制度とその背景、問題点などを解説する。	池上　直己（慶應義塾大学教授）	池上　直己（慶應義塾大学教授）
3	疫学と厚生統計	制度としての公衆衛生の基盤のひとつは厚生統計である。また学理としての予防医学は必要なあらゆる方法を駆使するが、その根幹にあるものは疫学である。本章では公的制度となった厚生統計と疾患の集団レベルの定量的研究の方法としての疫学について学ぶ。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
4	感染症　Ⅰ	公衆衛生における感染症対策の原則と実際の状況を解説する。本章では総論的な事柄を中心とし、感染の成立条件、感染症新法の概要、日本における対策の現況、サーバランスなどについてのべる。	稲葉　裕（順天堂大学教授）	稲葉　裕（順天堂大学教授）
5	感染症　Ⅱ	全章にづづいて、主な感染症について、その原因、疫学、臨床、対策についてのべ、近年注目されている新興・再興感染症にも触れる。	同　上	同　上
6	生活環境の保健	生活環境を規定する主な原因についてのべ、都市化および都市の生活環境と、そこにすむ人々の健康問題とその解決について包括的に論ずる。	高野　健人（東京医科歯科大学教授）	高野　健人（東京医科歯科大学教授）
7	環境保健　Ⅰ	私共の生活環境は様々な要因によって規定されているが、その重要な因子として物理的要因が挙げられる。その主なものは騒音、振動、放射線、温熱条件などである。これらは生活の快適性を失わせるのみならず、一定のレベルをこえた場合、人の健康にも様々な影響を与える。これらの様相を概観する。	二塚　信（熊本大学教授）	二塚　信（熊本大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	環境保健Ⅱ	２０世紀に入り、農薬、医薬、プラスチックなど、きわめて多くの科学物質が生み出され、多くの分野に利用されて生活が豊になった反面、地球的規模で環境汚染の原因となってきた。これら環境汚染物質の有害性、あらたに問題となりつつある環境ホルモンについて解説する。	小泉　昭夫（京都大学教授）	小泉　昭夫（京都大学教授）
9	産業保健　Ⅰ	産業経済の歴史を見ると、結核対策、急性産業中毒対策、じん肺対策など、労働者の重篤な健康障害の対応が主であった時代から、近年の産業構造や業務態様の顕著な変化に伴い、作業関連疾患の重視、予防から積極的健康増進に発展している。ここでは、産業保険の意義、労働衛生行政、作業環境管理、作業管理について学ぶ。	清水　英佑（東京慈恵会医科大学教授）	清水　英佑（東京慈恵会医科大学教授）
10	産業保健　Ⅱ	Ⅰに引き続いて、労働衛生３管理の３番目として健康管理についてその進め方を理解すると同時に、物理的・化学的要因によるさまざまの職業性疾患を学ぶ。さらに、最近問題となっているメンタルヘルス、女性労働、深夜業等についても学ぶ。	同　上	同　上
11	食品の保健	食品はすべての国民がいつも摂取するものであり、その安全性は公衆衛生のひとつの基幹である。本章では有害物質、有害微生物などによる食品汚染の実情、食中毒、食品の管理、流通などの法規制についてのべ、「森永毒ミルク事件」最近の「雪印牛乳中毒事件」などを例として危機管理の命題としての食品衛生にも触れる。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
12	学童と青年の保健	ヒトの生理学的・解剖学的機能は２０歳前後に完成され、その時期は身体的疾病が生涯でもっとも少ない時期である。しかし、生活習慣病（成人病）の初期段階がこの時期において少なからず観察される。全国の国立大学保健管理施設が協力して実施した「健康白書2000」の資料に基づいて、学生の健康状態および生活習慣病の予防について講義する。	佐藤　祐造（名古屋大学教授）	佐藤　祐造（名古屋大学教授）
13	生活習慣と疾患	生活習慣とは長期間つづく個人の生活特性であり、食事、酒・タバコ、運動、社会生活、休養、安全習慣などをふくむ。保健先進国では環境側のつよい病因が制圧され、人生の途中死亡が減じ、その分、生活習慣のようなよわい病因が有力となり、長くなった寿命のため、臨床的影響を生ずるようになった。それが「生活習慣病」であり、その対策にはどんな習慣がそんな病気を生ずるかの機序を解明し、予防政策と個人のセルフケアに応用することが大切である。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
14	健康管理	長くなった生涯にわたる健康を保つためにはケルフケアによって自らの健康を保持増進する必要がある。しかし、個人の力の及ばない部分は法律と制度に基づいて「健康管理」を行なうようになっている。生まれてから死ぬまで多くの法令に基づいて公的な健康管理制度がある。この講義では公的な健康管理のしくみと問題点をのべるが、生活習慣病対策など個人の努力が欠かせない分野も多い。	鈴木　庄亮（群馬大学教授）	鈴木　庄亮（群馬大学教授）
15	歯の健康	咀嚼機能をつかさどる口腔の健康を生涯にわたって維持することは、健全な成長や生活習慣の予防、高齢者の呼吸器感染や「生活の質」の低下を防止する上で不可欠である。全身の健康状態との関係を主に、口腔衛生、歯科疾患の予防のための公衆衛生的な配慮についてのべたい。	新庄　文明（長崎大学教授）	新庄　文明（長崎大学教授）

＝ 高齢者の心と身体（’００）＝（R）

〔主任講師：折茂　肇（東京都老人医療センター院長）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本はすでに高齢社会となっている。放送大学では高齢者の生活、福祉など、社会的な側面についてはかなり広汎に講義されているが、本科目は医学の立場から高齢者の心と身体をめぐって、15題の重要課題を選んで講義する。加齢とともに心身の衰えがおき、一部の高齢者にはさまざまの疾患がおきるが、その理解と対応には若齢者とは異なる視野を要する。本科目ではこの面を重点をおき、高齢者の心身の現状、医療の問題点などを明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老化のメカニズム	老化は万人におこるものであるが、その起こり方、進み方をみると個人により千差万別であることに驚かされる。これは、個体が誕生し、成熟する過程と著しい対照をなす事実であり、老化がいかにして起こるのかを理解するためには、なぜこのような個体差が生じるのかを説明することができなければならない。	石川冬木（東京工業大学教授）	石川冬木（東京工業大学教授）
2	高齢者の身体機能	加齢変化に関する研究が進むにつれ、人間の老化を局所的にではなく、全身的に評価できるようになった。また、病気の有無ではなく、生活機能の自立度で健康を定義する概念も確立され、その結果、老化は直角型に進行することが明らかになりつつある。	柴田博（桜美林大学教授）	柴田博（桜美林大学教授）
3	高齢者の心と病気	老年期には精神の座である脳の老化の進行に伴って、精神機能も少なからぬ影響をうける。記憶力・思考力・判断力が徐々に低下し、複雑な問題を扱ったり、理解することが次第に難しくなる。性格にも多少とも変化が現れる。老年期には健康・職業・役割・収入・配偶者・友人・住み慣れた環境などさまざまな面での喪失を体験し、そのために不安・抑鬱状態に陥ることが少なくない。記憶力・思考力・判断力などの低下が著しくなると痴呆の状態になる。	西村健（甲子園大学教授）	西村健（甲子園大学教授）
4	いきがいと健康	高齢者のライフスタイルが多様化してきており、高齢者自身が自ら直面するライフスタイルをわがものとして「生きがい」をもって生活することが心身の健康を保つ一助となる。「生きがい」活動には「友人・知人の会合」「趣味・スポーツ」「社会奉仕・社会参加」等があげられ、コミュニティ活動を通して行うことが健康保持につながることになる。	五島雄一郎（東海大学名誉教授）	五島雄一郎（東海大学名誉教授）
5	高齢者の栄養	高齢者は低栄養状態に陥る危険性が高く、その危険因子を把握し、栄養評価を行うことが必要である。老化機序には栄養が関係している。高齢者に高率にみられる動脈硬化の発症にも栄養が関係しており、ＬＤＬの量を増加させる因子と、ＬＤＬの酸化変性に影響を及ぼす因子があげられ、抗酸化物が重要である。	板倉弘重（国立健康栄養研究所名誉所員）	板倉弘重（国立健康栄養研究所名誉所員）
6	高齢者の病気の特徴	高齢者の病気の特徴として、1）多臓器に疾患が併発、2）症状の非定型化、3）長期ケアを要する障害と痴呆、うつの増加、4）薬害が起こりやすい、5）低栄養、感染症の増加、6）福祉との関わり合いか深い、7）終末期医療などの点が問題となる。本講義ではこのような面から第7～10回の基礎となる問題をのべる。	小澤利男（東京都老人医療センター名誉院長）	小澤利男（東京都老人医療センター名誉院長）
7	循環器の疾患	「ヒトは血管とともに老いる」といわれるように、血液循環は生命活動の源泉であり、高齢者の健康を保つには血圧の上昇と動脈硬化の進行を如何にして抑制するかが鍵になる。本講義では心筋梗塞、脳血管障害などを中心にその予防のためのライフスタイルと薬物治療の意義について述べる。	尾前照雄（国立循環器センター名誉総長）	尾前照雄（国立循環器センター名誉総長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	感染症とがん	高齢者の感染症では肺炎、尿路感染、褥瘡感染、敗血症などが問題となり、また新型インフルエンザが流行すれば犠牲者が多数出ると懸念されている。一方、大多数のがんは年齢の指数函数として増加し、ホルモンの影響をうける前立腺癌は50歳代から急増し、乳癌は40歳代でピークを示す。本講義では高齢者の感染症とがんをめぐる重大問題を判りやすく解説する。	島田馨（東京専売病院長）	島田馨（東京専売病院長）
9	神経系の疾患	日本人の死因と罹患因の20%。ＡＤＬ低下の1/2は神経疾患に起因し、その大半は高齢者におき、脳血管障害と神経変性疾患が圧倒的に多い。本講義では高齢者に多発する主な神経疾患の特徴と予防についてのべ、痴呆、寝たきりなど要介護状態についても触れる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
10	骨と関節の疾患	高齢者では骨疾患としては骨粗鬆症、関節疾患としては変形性関節症が多発し、そのために自立が障害され、ＱＯＬが著しくそこなわれる。骨粗鬆症は骨量が減少し骨が脆くなった病気で、大腿骨頚部、脊椎、橈骨の骨折を起こしやすいのが特徴である。変形性関節症は脊椎、膝関節などに多発し、痛みや歩行障害を来たし、高齢者を大いに悩ませる。	折茂肇（東京都老人医療センター院長）	折茂肇（東京都老人医療センター院長）
11	高齢者と薬	高齢者の服薬後の血中濃度の推移（薬物動態）の特徴とその機序について中年との違いを述べ、服薬上の注意点を示す。高齢者に多く服用される睡眠薬、消炎鎮痛薬、抗血栓薬、抗菌薬、降圧薬などについて、その使用法、副作用など、高齢者の薬物療法をめぐる問題を解説する。	蔵本築（東京都老人医療センター名誉院長）	蔵本築（東京都老人医療センター名誉院長）
12	高齢者医療のあり方	高齢者の病気は成人のそれとは著しく異なるので、効果的な医療を行うには戦略が必要である。1）高齢者のＱＯＬを第一義的に考えた医療：これまでは延命のための医療が中心であったが、これからは高齢者のＱＯＬを第一義的に考えた、自立機能障害（disability）の予防を最終目的とした医療が中心となるべきである。2）高齢者医療ではチーム医療が必須：高齢者は一人で多くの病気に罹患している場合が多いので、専門を異にする各診療科の医師及びコメディカルが協力して、最も適切と考えられる医療を行うべきである。3）高齢者医療では地域連携システムの確立が必須：各地域に於いて高齢者医療に関わる病院、診療所、かかりつけ医がお互いに協力して高齢者医療を行う体制を確立する必要がある。	折茂肇	折茂肇
13	看護介護・福祉～在宅ケアと介護保険制度を中心として～	高齢化が進み寝たきり等の要介護者が増えている。医療の流れもキュアからケアへ、更にホスピタルケアからホームケアの方向へと動いている。2000年から介護保険が導入されるが、よい介護には保健・医療・福祉の連携が不可欠である。21世紀は介護の時代といわれる。在宅ケアを中心として看護・介護・福祉のあり方について述べる。	山口昇（公立みつぎ総合病院・御調町保健医療福祉管理者）	山口昇（公立みつぎ総合病院・御調町保健医療福祉管理者）
14	高齢者の死	「畳の上の大往生」で天寿を終えるのが理想としても、多くの高齢者は障害のために在宅・施設ケアを経て、高齢者医療施設などで死を迎える。本講義では医療・社会・家族などの面から現在の日本の高齢者の死の実情に触れる。「介護保険」の導入（平成12年）から5年後に施設のあり方が見直されるといわれるが、国民が「長生きして良かった」「手を尽くして親を見送った」と実感できるように死を看取れる施設が必要である。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
15	長寿社会と高齢者の自立	長寿社会となって高齢者も自立し、社会・家庭での役割を果たすことが期待される。エイジレス社会とは年齢で輪切りにされず、各自の能力と意思に応じて役割が与えられる、開かれた、やわらかい社会を指すが、そのような社会を構築するには行政はじめ、社会の側の努力だけでなく、個人の生活と心身の自立が大切である。	同上	同上

＝ こころの健康科学（'９９）＝（R）

〔主任講師：仙波　純一（放送大学教授）〕
〔主任講師：高橋　祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）〕

全体のねらい

現代社会は、情報量の増大、価値基準の多様化、家族形態の変化など、ひとむかし前と比べて急速に変化しつつある。このなかでおびやかされているわれわれの心の健康を考える。心の健康を援助する仕事にたずさわる人との役割についても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代における心の健康の意義	現代社会で、心の健康を保つことがどうして必要なのか、またそれを得るためにはどのように注意し、努力してゆくべきかについて概観する。以下の章のねらいについて説明する。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）
2	心の病気　(1)精神分裂病	精神分裂病は精神障害のうちで最も重要な疾患のひとつである。その推定される原因、症状、経過、および治療法（リハビリテーションも含む）について解説する。	同　上	同　上
3	心の病気　(2)気分障害	気分障害とは、従来、躁うつ病と呼ばれてきた病態をさしている。その原因、症状、経過、治療法などについて解説する。ストレスの多い現代社会において、心の健康を保つための具体的な方法についても触れていきたい。	高橋　祥友（（財）東京都精神医学総合研究所副参事）	高橋　祥友（（財）東京都精神医学総合研究所副参事）
4	心の病気　(3)不安障害	不安障害は、以前神経症とよばれていたものの大部分を占めている。各種の不安障害の症状や治療法などについて解説する。	仙波　純一	仙波　純一
5	心の病気　(4)人格障害	人格障害は、極度の人格の偏りのために、当人自身が苦しんでいたり、あるいは社会的に問題が起きている状態を指している。さまざまなタイプの人格障害があるが、講義では最近話題になることの多い境界性人格障害を中心に取り上げる。	高橋　祥友	高橋　祥友
6	心の病気　(5)アルコールと薬物依存	現代社会の高度発展・多様化・国際化とともに、カルチュラル・ラグをきたし、人間の心はとまどいをみせ、アンビヴァレントな状況にある。いっときの癒しを求めて、アルコールや薬物をのむが、いつしか依存していくようになり、嗜癖・乱用へとつき進んでしまう。さまざまな社会的問題（病気）をひき起こし、精神的に混乱（病気）し、身体的病気となり、顕在化する。治療的には身体的、精神的、社会的にトータルな治療・ケア・教育が必要である。	榎本　稔（榎本クリニック院長）	榎本　稔（榎本クリニック院長）
7	精神科医療における精神科医の仕事：その1	現代の精神科医療においては、精神科医、看護者、臨床心理士、ソーシャルワーカーといった多分野の専門家がチームを作って、心の問題を抱えた人の治療にあたっている。そのような現状の中での精神科医の役割について解説する。	高橋　祥友	高橋　祥友

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	精神科医療における精神科医の仕事：その2	引き続き前回の内容について取り上げる。なお、放送では、2人の精神科医による対談を通じて、実際の現場での精神科医の役割やさまざまな問題点、そして将来への展望などについて話し合う。	高橋　祥友	高橋　祥友
9	精神科医療における臨床心理士の仕事：その1	仕事の第1は、評価・査定である。対象の年令は、乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、発達、知能、人格、作業能力などを、心理検査などの様々な媒体を用いて、評価・査定する。また、個人とその家族との相互作用も対象となることがある。	溝口　純二（東京国際大学教授）	溝口　純二（東京国際大学教授）
10	精神科医療における臨床心理士の仕事：その2	仕事の第2は、心理療法・カウンセリングである。対象の年令は、この場合も乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、個人の抱えている精神的な苦痛に対して、心理的な援助をおこなう。また、家族の働きかけをおこなうこともある。	溝口　純二	溝口　純二
11	精神科医療における看護婦（士）の仕事：その1	病院を含めた地域社会の中で、精神障害者及び家族のケアとその自立を支えるための援助のあり方について、精神科看護に携わってきた立場から論じる。また、地域の諸資源を活用するために必要な他職種との連携について述べる。	田上美千佳（(財)東京都精神医学総合研究所主任研究員）	田上美千佳（(財)東京都精神医学総合研究所主任研究員）
12	精神科医療における看護婦（士）の仕事：その2 －精神科看護からの発展	精神科看護からの発展領域として、リエゾン精神看護について論じる。筆者は、がん患者を対象として個人カウンセリングやサポートグループを実施しているが、その実践を紹介することを通して、心の問題を抱えた身体疾患患者の看護について考察する。	廣瀬　寛子（戸田中央総合病院カウンセラー）	廣瀬　寛子（戸田中央総合病院カウンセラー）
13	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その1	我国において、精神科ソーシャルワーカー（以下ＰＳＷと略す）が精神医療の中で、どのような役割を担ってきたのか概括し、そこから現在の状況、及び今後の課題についてふれてゆく。	大原美知子（(財)東京都精神医学総合研究所技術課主任）	大原美知子（(財)東京都精神医学総合研究所技術課主任）
14	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その2	現在ＰＳＷの仕事は単に医療内にとどまらず、地域精神保健分野をはじめとして、多岐にわたり、その活動先が広がってきている。それらの具体的仕事を述べながら「精神障害者の支援」とは何かを考察する。	同　上	同　上
15	現代社会で心の健康を保つには	以上の章をまとめ、いくつかの残されている課題を追加する。全体をながめて、これからわれわれが社会の中で生きてゆくにあたって、心すべき事柄について考える。また放送では、地域の精神保健についてゲストにお話していただく。	仙波　純一	仙波　純一

＝ 脳の健康科学（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小川　紀雄（岡山大学教授）〕
〔主任講師：仙波　純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

脳は生体のすべての機能をつかさどる中枢である。この脳を理解するには、異なった次元からの多角的なアプローチが必要である。この講義のねらいは、さまざまな分野での脳研究の現状を理解し、脳の機能を学ぶだけでなく、われわれが健康な生活を営むための知識を豊かにしようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	脳の構造と働き	脳についての講義を開始するにあたって、脳の構造・発生・進化などについて概説する。この講義の序説となる部分である。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）
2	脳における情報伝達－１	神経細胞内では情報は電気的に伝わる。電気的活動が伝導される仕組みと、それを担う細胞膜・イオンチャンネル・活動電位などを学ぶ。神経細胞の電気的活動の総和として現れる脳波や脳磁図についても言及する。	同　上	同　上
3	脳における情報伝達－２	神経細胞から放出される神経伝達物質がレセプターに作用する化学的情報伝達現象の総和が脳の機能であり、またレセプターは中枢神経作用薬の作用部位でもある。これら脳機能の基盤となる化学的情報伝達について学ぶ。	小川　紀雄（岡山大学教授）	小川　紀雄（岡山大学教授）
4	脳の可塑性	学習や環境などの外的因子によって神経ネットワークが柔軟に変化することを脳の可塑性といい、ネットワークが固定されているコンピュータとの根本的な違いである。リハビリテーションによる脳機能の回復にも不可欠な可塑性について学ぶ。	同　上	同　上
5	脳の血液循環と栄養	脳の活動は血液からの酸素やブドウ糖などの栄養によって支えられている。脳の血流は精緻な仕組みで調整されている。最近脳の血流は脳画像解析によって定量化できるようになり、脳の活動の指標としても使われている。	仙波　純一	仙波　純一
6	知覚と認知	ヒトの大脳は外界から様々な感覚情報を受容しているが、意識にのぼり認知されるものと、意識されずに終わるものとがある。意識にのぼる感覚情報の受容は知覚と呼ばれる。この章では、大脳における様々な知覚のメカニズムにつき学ぶ。	岩田　誠（東京女子医科大学教授）	岩田　誠（東京女子医科大学教授）
7	記憶と学習	記憶は事柄や事実を覚える陳述的（宣言的）記憶と、技術や方法を覚える手続き的記憶の２種類に分けられる。個人ならびに社会の知的財産の維持発展を支える重要な高次機能である記憶・学習機能ついて学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遺伝子と知能・行動・性格	特定の遺伝子を働かなくさせたノックアウト動物などで行動の変化が観察されることから、ヒトのいろいろな行動にも遺伝的な要素があることは否定できない。最近の遺伝研究からは、以前のような単純な「氏か育ちか」というような対立的な考えではなく、どちらがどれくらいどのように影響を与えているのかということに視点が移っている。ここではヒトの知能、行動や性格などについての最近の遺伝子研究を紹介する。	仙波　純一	仙波　純一
9	脳と運動機能	運動機能には自分の意志で行う随意運動と、無意識的に行われる不随意運動の２種類があり、運動が円滑に行われるためには両者の協調が必要である。これら２種類の運動の機序とそれらの障害について学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄
10	情動と行動	情動や感情はヒトの行動に大きな影響を与える。不安や恐怖もこの情動に含まれる。この章では主に不安について、その仕組みや身体との関連について学ぶ。	仙波　純一	仙波　純一
11	脳の外傷・腫瘍・血管障害	脳神経外科は手術により脳の各種病変を治療しており、20世紀後半に著しく進歩した領域である。ここでは脳の外傷、脳腫瘍、もやもや病や脳動脈瘤などを例として現在の脳神経外科治療の現況を概説するとともに、遺伝子診断や治療など最新のトピックスについても解説する。	山田　和雄（名古屋市立大学教授）	山田　和雄（名古屋市立大学教授）
12	脳の分子生物学	脳の疾患のうちには、遺伝的要因が関与する疾患が数多く存在している。最近の分子生物学の進歩から、このような疾患の病態や発症への理解が進んでいる。ここでは、遺伝子レベルで脳を理解する。	辻　省次（新潟大学教授）	辻　省次（新潟大学教授）
13	脳の老化	加齢に伴って神経細胞の数は減少し、老廃物が神経細胞に沈着物し、神経伝達物質やレセプター、脳血流や脳の代謝機能が減少し、脳の機能もゆっくりと変化してくる。高齢化社会に備えて老化脳の特徴を学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄
14	脳と薬	脳に働く薬は、治療薬として働く一方、乱用されることもある。脳に働く薬の作用機序や治療目的などについて学ぶ。	仙波　純一	仙波　純一
15	脳研究の将来	脳研究には長い歴史があり、最近の科学技術の進歩により、一段と脳の理解が増した。一方で、心とは何か、脳移植は可能か、コンピュータは脳を越えられるかなどの課題が生まれている。この章では、これらの問題について考えていく。	小川　紀雄 仙波　純一	小川　紀雄 仙波　純一

＝ がんの健康科学（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小林　博　（（財）札幌がんセミナー理事長・北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（放　送　大　学　教　授）〕

全体のねらい

がんはもっとも重要な健康問題のひとつである。すでに圧倒的な第１死因であるが、心臓病、脳卒中の減少がさらにつづくなかで、近い将来、いっそう重大化すると推測される。がんの学理は長足の進歩をとげ、発がんの機序は分子レベルの問題となり、がん素因の予知にも大幅に応用されている。がんはライフスタイルの改善や環境制御によって予防ができ、早期発見すれば完治または相当の延命が可能になっている。がんの問題は研究面では総合科学ともいうべき巨大な存在となっただけでなく、患者個人はもとより、社会・国家にとっても大きな課題となっている。
この科目では限られた枠ではあるが、こうした視点に立ち、今日のがん科学のエッセンスを伝えようと試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	がん科学への序説	がんは生命の根源にも迫る、巨大で包括的な医科学のテーマであるだけでなく、ひろく自然科学全体にわたる問題でもある。さらに、がんは人文社会学においても重要なテーマになっている。第１章ではがんを健康科学の立場から記述し、14章の枠組みを概説する。	小林　博（（財）札幌がんセミナー理事長・北海道大学名誉教授） 近藤喜代太郎（放送大学教授）	小林　博（（財）札幌がんセミナー理事長・北海道大学名誉教授） 近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	発がんの仕組み	第１章では１個の細胞ががん化し、がん組織に発展するまでの学理をのべる。発がんは１個の細胞におきた遺伝子の変化から出発する。本章では「多段階発がん説」をめぐる諸事実をのべ、それに影響するさまざまの外因・内因、家族性発がんとがん体質の問題、成立したがん細胞の運命とがん組織の成立についてのべる。	北川　知行（(財)癌研究会癌研究所長）	北川　知行（(財)癌研究会癌研究所長）
3	がんの生物学	がん細胞は増殖力が旺盛で、死ににくく、血管新生を促進するので、無制限に増殖する。また運動性が活発で、近くの組織に侵入し離れた組織にも転移する。近年、がんに関する生物学的研究によって、これらの現象の仕組みがわかってきた。	葛巻　暹（北海道大学遺伝子病制御研究所教授）	葛巻　暹（北海道大学遺伝子病制御研究所教授）
4	がんの疫学	疫学は発生率、有病率、死亡率を通じて、がんの動向を定量的に示し、種々の集団調査によって、その要因についてきわめて有用な情報をもたらした。本章ではこれらの問題について主な知見をのべる。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
5	食品・嗜好品とがん	食物および喫煙などの嗜好ががんの発生に密接に関与していることが疫学的に明らかにされた。米国の死亡資料で食物が３５％、喫煙が３０％が原因を占めると推定され、１次予防対策、食生活の改善と喫煙対策が重要であることが指摘されている。飲酒のがんに対する寄与度は喫煙に比べて小さく、約３％と推計されている。最近、緑茶とコーヒーのがん予防作用が示唆されている。	富永　祐民（愛知県がんセンター総長）	富永　祐民（愛知県がんセンター総長）
6	感染症・ストレス	感染症とがんは本来まったく別のものであるが、ある種の慢性感染症はがんの原因となる。また精神的ストレスもがんの原因になるようである。本章では今まであまり注目されていなかった、これらの要因のいくつかについてのべることとする。	小林　博	小林　博

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	がん遺伝子	正常の細胞をがん細胞に変える遺伝子を、がん遺伝子という。また正常の細胞ががんにかわることを抑制している遺伝子をがん抑制遺伝子と呼ぶ。がんは、がん遺伝子とがん抑制遺伝子の異常によって起こることがわかってきた。 本章ではこれについてのべ、がんについて分子レベルの理解をすすめる。	葛巻　暹	葛巻　暹
8	ライフスタイルと１次予防	がんは脳卒中、心臓病、糖尿病などとともに「生活習慣病」と呼ばれている。疫学的研究から食生活、喫煙、飲酒、運動などのライフスタイルが発がんに密接に関与していることが明らかにされた。がんの１次予防には、禁煙、節酒、食生活上の注意（特に、塩辛い食品と動物性脂肪の摂取抑制、生野菜・緑黄野菜・果物類および繊維にとむ食品の頻回摂取、バランスのとれた食事）、適度な運動などが重要である。	富永　祐民	富永　祐民
9	がん検診と２次予防	がん検診は２次予防対策と位置づけられ、症状の発現以前の早期の段階でがんを発見し、早期に治療することにより、がん死亡を予防することを目的としている。胃・子宮・肺・乳房・大腸の各がん検診について、わが国の現状と問題点、さらに今後の展望をのべる。	辻　一郎（東北大学助教授）	辻　一郎（東北大学助教授）
10	老化とがん	老化とがん化の仕組みには共通するものが少なくない。とくに細胞の染色体末端によるテロメアは細胞の老化とともに短小化するが、その働きを押さえるテロメラーゼを出すがんの細胞は老化することなく永遠に生き続ける。本章はこの分野の最近の知見をのべる。	田原　榮一（(財)広島がんセミナー理事長・広島大学名誉教授） 田原　栄俊（広島大学助教授）	田原　榮一（(財)広島がんセミナー理事長・広島大学名誉教授） 田原　栄俊（広島大学助教授）
11	主ながんⅠ（呼吸器ほか）	長い間日本のがんを特徴づけてきた胃がんを抜いて、肺がんはがん死のトップになっている。本章では肺がんの成因、診断、病理、治療の現状を概説したい。	田原　榮一	田原　榮一
12	主ながんⅡ（消化器ほか）	消化器がんの多段階発生の分子機序、遺伝子診断、さらにはがん医療における分子病理診断の重要性についてのべる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	がんの臨床Ⅰ－診断	がんは自覚症状がはっきりしてからでは治療効果が低いため、早期診断が大切である。本章では検診にかかわる問題は9章にゆずり、早期微候とその意義、X線CT、MRI、生物学的マーカー、細胞・組織診断など、主な診断手段についてのべ、近年発展している遺伝子診断とがんのリスク評価も触れる。	垣添　忠生（国立がんセンター中央病院長）	垣添　忠生（国立がんセンター中央病院長）
14	がんの臨床Ⅱ－治療	がんの治療はめざましく進歩している。本章では、外科療法、放射線療法、抗がん剤による療法など、既存の治療とその限界についてのべ、遺伝子治療の試みをはじめ、最先端の進歩にも触れる。	同上	同上
15	がんの臨床Ⅲ－がんに悩む人々	予防・治療が進歩したとはいえ、末期がんは恐るべき性格をもっている。本章ではがんの告知、家族への対応、家族性がんの遺伝相談、ホスピスなど、がんをめぐる人文的問題をのべ、国家・社会の努力にも触れる。	同上	同上

＝ 循環器科学（ ’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：藤島　正敏　（九州大学名誉教授）〕
〔主任講師：近藤 喜代太郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康科学を学ぶ上で心臓・血管の構造・機能と主な疾患を知ることはきわめて必要である。放送大学では限られた枠のなかで、臓器別の科目は脳と心臓のみである。前者は動物性機能、後者は植物性機能の代表である。心筋梗塞と脳血管障害を合わせると日本人の第一死因となる。この科目では15回の1/3を循環器系の正常な働き、2/3を臨床的問題に当てて、心臓・血管とその疾患について主要な点を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	循環器科学への序論	本科目では心臓・血管など、循環器の構造・機能、主な罹患機序について学ぶ。科目数の限られた放送大学では脳と並んで、特定の臓器に焦点を当てた数少ない科目である。第1回では、循環器に関する科学的認識に焦点に当てながら、後につづく14回の序説とする。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	心臓・血管の働き	心臓から送り出された血液は動脈血管を通って各臓器に運ばれ、臓器からは静脈血管を通って再び心臓に返ってくる。正常な循環を保つために、心臓や動脈・静脈血管にどのような仕組みが備わっているかを概説する。	竹下　彰（九州大学教授）	竹下　彰（九州大学教授）
3	循環調節	循環系は生命維持に不可欠な内部環境の恒常性を維持する最も重要なシステムである。そのため循環系は心臓や血管などの物理的な流れを導くハードウエアーと、その流れを合目的に神経性・体液性あるいは構造的な対応を経て制御する調節系（ソフトウェア）で構成されている。本講義では調節系に的を絞り、どのような原理で循環が調節されているのか、分かりやすく解説したい。	砂川賢二（国立循環器センター研究所循環動態機能部長）	砂川賢二（国立循環器センター研究所循環動態機能部長）
4	血圧調節とその異常	生体には血圧を一定に調節維持する機構があり、これには多くの因子があるが大別すると神経性調節、体液性因子（ホルモンなど）、腎性調節の3つに分けることができる。これらの血圧調節因子の異常により血圧の異常（高血圧・低血圧・血圧変動など）が生じる。	後藤淳郎（東京大学助教授）	後藤淳郎（東京大学助教授）
5	高血圧症	高血圧を早期に発見し、適切な対策を講ずることにより高血圧性の心臓・血管病変を予防できる。本講義では高血圧に関する主な問題、とくに重症度に応じた生活習慣の是正、降圧薬の服用、合併症に対する治療などを学び、その科学的な根拠と有用性に関する成績を紹介する。	江藤胤尚（宮崎医科大学教授）	江藤胤尚（宮崎医科大学教授）
6	弁膜症と先天性疾患	日本胸部外科学会の学術調査によると1996年度のわが国の心臓大血管手術総数は約34700例であった。先天性心臓病の手術は8438例で、手術生存率は94.9%であり、心臓弁膜症の手術は7654例で、手術生存率は95.9%であった。本講義では最近の心臓外科治療の傾向、進歩について述べる。	安井久喬（九州大学教授）	安井久喬（九州大学教授）
7	不整脈	不整脈は心臓の刺激生成異常、刺激伝導異常あるいは両者の組み合わせによって生じ、不規則な脈拍、頻脈、徐脈などの形で現れる調律異常である。明らかな原因がある場合とない場合とがあり、症状と重症度とが必ずしも一致しなかったり、まったく病的意義のないものから突然死の原因となる極めて危険なものまであり、臨床的に多様な病態を示す。	矢野捷介（長崎大学教授）	矢野捷介（長崎大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動脈硬化と臓器障害	「ヒトは血管とともに老いる」といわれているが、日本の死因統計によれば、死因のなかで虚血性心疾患、脳血管障害を合わせた群がもっとも多い。血管の障害は、その原因が多岐にわたっているが、今回は動脈硬化によって惹起される臓器障害を中心に組み立ててみたい。	北　徹（京都大学教授）	北　徹（京都大学教授）
9	冠循環とその異常	冠循環は酸素消費量のもっとも大きい臓器のひとつである心臓の栄養を司っており、生命の維持に極めて重要である。他の臓器循環と異なり心臓は拡張期に灌流される点が特徴であり、また血圧の生理的変動によっても一定の循環が得られる自己調節機構を備えた特殊な循環システムである。その破綻は虚血性心疾患の原因となる。	堀　正二（大阪大学教授）	堀　正二（大阪大学教授）
10	虚血性心疾患	虚血性心疾患は、心臓の栄養血管である冠動脈の動脈硬化により引き起こされる病気である。狭心症、心筋梗塞が代表的なもので、西欧化した食生活と高齢社会の到来により増加しつつある。診断、治療の進歩は著しいが、予防が可能な生活習慣病でもある。	山口　徹（東邦大学教授）	山口　徹（東邦大学教授）
11	心不全	最近、心不全の病態に対する考え方、診断・治療が大きく変貌した。従来、心不全は心血行動態の異常に基づくとされ、その治療もジギタリス、利尿薬に加え、血管拡張薬、強心薬が用いられた。しかしながら、一時的に心機能を改善しても必ずしも生命予後は改善しなかった。心不全では全身の神経・体液性因子が活性化し、その程度は心不全の重症度、予後とも相関する。現在、不全心筋保護のために活性化している神経・体液性因子を抑制するという新たなコンセンプトへの展開が図られている。	北畠　顕（北海道大学教授）	北畠　顕（北海道大学教授）
12	高血圧と腎障害	本態性高血圧では高血圧が持続すると腎の細小動脈に硬化が起こり、腎硬化症と呼ばれる。この血管病変がレニン分泌を亢進し、高血圧を更に進行させる。慢性糸球体腎炎でも正常血圧例に比し高血圧例では腎生存率が悪く、高血圧が腎機能障害のリスクファクターになっている。	阿部圭志（仙台社会保険病院院長）	阿部圭志（仙台社会保険病院院長）
13	脳循環とその異常	体重の2.2%にすきない脳組織へ、心臓が送り出す血液量（心拍出量）の15%が流れ込み（脳血流量）、全身消費量の20%の酸素を脳は消費する。脳血流は神経や化学因子によって調節され、血圧、動脈硬化、脳活動によって変動する。脳血流量が正常の半分以下になると脳は虚血に陥り、さらに低下すると梗塞を生じる。	藤島正敏（九州大学名誉教授）	藤島正敏（九州大学名誉教授）
14	脳血管障害	脳血管障害は出血性（脳出血、くも膜下出血）と虚血性（脳梗塞）に分けられ、脳梗塞はさらに3つの臨床カテゴリー（アテローム血栓性梗塞、ラクナ梗塞、心原性栓塞症）に分けられる。治療、再発予防に当たってはそれぞれの病型毎に対応しなければならない。本講義では脳梗塞に重点をおいてこれらを解説する。	山口　武典（国立循環器病センター総長）	山口　武典（国立循環器病センター総長）
15	循環器疾患のリスクと予防	循環器疾患はつねに死因の上位を占める。脳出血、脳梗塞、心筋梗塞など代表的な循環器疾患の危険因子（リスク）は年齢、高血圧、糖尿病、高脂血症などであるが、リスクは時代とともに変わる。疾病の予防にはリスクの管理と生活習慣、とくに食生活の是正が不可欠である。本講義では一般住民を対象にした久山町研究のデータを紹介し、循環器科学の結びとする。	藤島　正敏	藤島　正敏

＝ 薬の歴史・開発・使用（’００）＝（Ｒ）

〔主任講師：津谷　喜一郎　（東京大学客員教授）〕
〔主任講師：仙波　純一　（放送大学教授）　〕

全体のねらい

薬により恩恵がもたらされる一方で、開発や副作用の問題などで、大きな社会的な問題も生じている。この科目では、対象を医療専門家以外におき、一般の学生が薬と社会に関わる問題を学ぶことを目的とする。薬の歴史、現在の薬の開発、薬の効果の評価、臨床試験の倫理、副作用情報の扱いなどは、どのようになされているか、また今後どのようにしていけばよいのかなどについて考えていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序説	薬は「草煎り」との説があるように植物起源のものが主体であったが、現在は化学合成薬が主体である。1990年代には「開発資源を節減し、良い薬を迅速に社会に」を目指した国際協調会議（ＩＣＨ）のもとに、薬の開発の世界は大きく変わろうとしている。	佐久間　昭（東京医科歯科大学名誉教授）	佐久間　昭（東京医科歯科大学名誉教授）
2	天然物から薬品へ－薬の歴史（1）	洋の東西を問わず、薬は天然物の簡単な加工品で始まり、経験、選別、伝承の反復で薬のリストができた。東洋の薬は総合的、マクロ的認識、西洋の薬は分析的、ミクロ的認識のもとに育まれてきた。その差は19世紀後半の西洋での有機化学誕生で明白となる。	同　上	同　上
3	薬理学から臨床薬理学へ－薬の歴史（2）	有機化学は天然物を離れての、近代西洋医学の薬の創製を可能とし、最近では生物工学も薬の開発を助けている。1872年に薬効の論理性と客観性を与えるべく、シュミーデベルクが薬理学を提唱したが、ヒトでの臨床薬理学はかなり遅れて1940年代に始まる。	同　上	同　上
4	ランダム化と試験デザイン－薬の臨床試験（1）	「エビデンスにもとづく医療」（evidence-based medicine:EBM）の世界的な流れの中で、エビデンスを「つくる」臨床試験に対する関心が高まっている。本講では、臨床試験の基本的構成要因である研究デザインを中心に、比較試験、ランダム化、バイアス、解析の方法などについて、解説を行う。	津谷喜一郎（東京大学客員教授）	津谷喜一郎（東京大学客員教授）
5	プラセボと倫理－薬の臨床試験（2）	臨床試験は目の前の患者を実験対象に使い、その結果を将来の多くの患者に用いるという、通常の医師患者関係とは異なる性格をもつ。本講では、まず、エンドポイント、プラセボなどについて述べ、ついで臨床試験の倫理の歴史について解説する。	同　上	同　上
6	非臨床試験－薬の開発（1）	新薬のヒトに対する投与に先立って、毒性、薬効、体内動態などについて特徴づけをすることを前臨床試験という。個体の毒性、生殖発生毒性、依存性、抗原性、変異原性、がん原性について試験する。臨床試験開始後に行うものも含めて非臨床試験ともいう。	永田　傳（スミス・クライン・ビーチャム製薬・研究開発本部長）	永田　傳（スミス・クライン・ビーチャム製薬・研究開発本部長）
7	治験－薬の開発（2）	新薬の厚生省承認のために必要なヒトでのデータを作成するために行われる臨床試験は、治験といわれる。新薬の効果と安全性について評価する。厚生省令「医薬品の臨床試験の実施の基準」、いわゆるＧＣＰに沿って行われる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国際化時代の臨床試験－薬の開発（3）	ある薬が、ある病気に有効・安全であるとの検証には、適切な対照薬とその薬との比較が原則で、ランダム化二重遮蔽試験が原則的に必要となる。すでに海外成績があれば、遺伝的、環境的要因を勘案し、妥当ならば日本に利用すべしとの方針が出されている。	佐久間　昭	佐久間　昭
9	市販後調査－薬の開発（4）	厚生省の承認後も、臨床試験に引き続き安全性の調査が行われる。承認前に見られなかった有害事象（副作用）が見られるか、承認前見られたものの発生頻度に変化がないかを調査する。得られたデータにより薬の添付文書の内容を改訂したり、使用を制限することがある。	永田　傳	永田　傳
10	薬の適正使用－P drug－	医薬品は適応に従って適切に選択し、正しい用量・用法で使用することによって、はじめてその真価を発揮する。医師は絶えず学習し、自分が使いこなせる薬（Personal Drug）の幅を広げながら、個々の患者に最適の薬を選ぶ必要がある。	別府宏圀（東京都立北療育医療センター院長）	別府宏圀（東京都立北療育医療センター院長）
11	医薬品の情報	医薬品に関する情報環境は大きく変わりつつある。コンピュータ技術の進歩により、医師は豊富な医薬品情報を診療に生かせるようになったが、同時に、患者に対する情報提供（説明）の義務も増大した。	同　上	同　上
12	医薬品のプロモーション	医薬品はヒトの健康を守るための手段であると同時に、商品でもある。メーカーが提供する医薬品情報はときに宣伝と区別がつきにくいことがあるが、命に関わる商品であるだけに、これを取り扱う者には高い倫理性が求められる。	同　上	同　上
13	薬と国際保健	世界には豊める国もあれば貧しい国もある。また地域によって問題となる病気は異なっている。さらに人々の健康観、疾病観も多様である。こうした、現実の世界の保健状況の中で、医薬品はどういう位置を占め、どういう役割を果たしているのか、また果たすべきなのかを、ＷＨＯの活動を含めて解説する。	津谷喜一郎	津谷喜一郎
14	薬の乱用とその対策	医薬品は本来病気を治すという目的で使われる。しかし、睡眠薬・鎮痛薬・抗不安薬などは多幸感や意識変容状態を求めて乱用されることがある。乱用は、薬と人をとりまく文化や社会という面からとらえられなければならない。ここでは、薬物がなぜ、またどのように乱用されるか社会的な側面から述べる。	仙波純一（放送大学教授）	仙波純一（放送大学教授）
15	まとめ	最後の章として、今まで述べられなかった薬物をめぐる種々の問題を補足し、その対策を述べる。	仙波純一 津谷喜一郎	仙波純一 津谷喜一郎

＝ 子ども家庭福祉論（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：髙橋　重宏（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

「ウェルフェア」から「ウェルビーイング」へという新たな理念、「児童福祉」から「子ども家庭福祉」へという新たなフレームワークから児童福祉を教授するためのテキストとして編集した。テレビの特徴を生かし、目で見て学ぶ子ども家庭福祉論としたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ウエルフエアからウエルビーイングへ	「子ども家庭福祉」は、国連子どもの権利条約を基調に既存の児童福祉論を再構築して展開する。例えば「子どもの権利擁護サービス」という用語は、伝統的な児童福祉のテキストには登場しない。具体的には、①学習のねらい、②ウエルビーイングとは、③改正児童福祉法、④伝統的な「児童福祉」と新しい「子ども家庭福祉」、⑤子ども家庭サービスとは、⑥家族と家庭、家庭養育機能、⑦各回の紹介と担当講師の紹介などについて学ぶ。	髙橋　重宏（日本社会事業大学教授） 山本　真美（日本子ども家庭総合研究所研究員）	髙橋　重宏（日本社会事業大学教授） 山本　真美（日本子ども家庭総合研究所研究員）
2	子どもの権利に関する条約	国連の子どもの権利に関する条約について解説し、新たな理念、子どもの権利擁護サービスのあり方について学ぶ。・ウェルフェアからウェルビーイングへ ・こどもの権利擁護（子どもの権利ノートなど）	髙橋　重宏	髙橋　重宏
3	児童福祉のあゆみ	(1)明治期以降児童福祉法成立までの法律および実践の紹介 (2)児童福祉法による児童福祉の実施体制の紹介 (3)戦後の児童福祉の展開 (4)児童福祉から児童家庭福祉への転換	山縣　文治（大阪市立大学助教授）	山縣　文治（大阪市立大学助教授）
4	子ども家庭福祉の新潮流	平成２（1990）年６月のいわゆる「1.57ショック」以降、急速に加速しつつある児童福祉改革の動向について、政府、関係団体等による各種報告書をもとに整理し、児童福祉改革の展望について考察を進める。	柏女　霊峰（淑徳大学教授）	柏女　霊峰（淑徳大学教授）
5	児童福祉実施体制	児童福祉に関する基本法及び関連法の概要を押さえるとともに、児童福祉行政の実施主体、児童相談所等の主たる実施機関、児童福祉施設、児童福祉の費用、施策体系等について解説する。さらに、児童相談所の活動に焦点をあて、児童福祉実施体制の課題及将来展望について考察する。 ＜構成＞　行政機関、審議機関実施機関（児童相談所、福祉事務所、保健所、児童委員等） 措置制度（児童福祉施設入所のしくみ） 児童福祉施策体系、費用	同　上	同　上
6	児童福祉施設	児童福祉法に基づく児童福祉施設の現状と課題について検討する。 ①児童福祉施設の種類と内容 ②児童福祉施設の展開（戦後の数値） ③児童福祉施設の運営 ④児童福祉施設の実践 ⑤児童福祉施設の今後	山縣　文治 山本　真美	山縣　文治 山本　真美

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	保育制度とひとり親家庭へのサービス	・わが国の児童福祉施策の中心となってきた措置制度による認可保育所による支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 ・母子を中心としてきたひとり親（母子・父子）家庭への支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 (1)制度の概要とその変遷 (2)現在の動きと今後の方向性	山縣　文治 山本　真実	山縣　文治 山本　真実
8	母子保健と障害児童への支援	昨今、地域サービスにおける保健と福祉の統合への動きが高まりつつある。健常児および障害児に対する保健と福祉の連携の現状を具体的な事例を用いて示す中から、解決しなければならない課題を明らかにし、今後の展開方向を検討し学習する。	安梅　勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）	安梅　勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）
9	保護を必要とする子どもの福祉	保護を必要とする子ども、子どもへの不適切な関わり（虐待・ネグレクト）について概説し、子どもの権利擁護サービス、子どもと親へのトリートメントの実態を紹介しながら、虐待・ネグレクトを予防するための啓発・教育のあり方を探る。	高橋　重宏 柏女　霊峰	高橋　重宏 柏女　霊峰
10	子ども家庭福祉とソーシャルワーク実践	子ども家庭サービスを支えるヒューマン・パワーを紹介し、ソーシャルワーカーに焦点を当てつつその専門的な援助技法について検討する。	高橋重宏	高橋重宏
11	多様な子ども家庭サービス	従来は「保育に欠ける子」という考え方に代表されるように、健全育成に支障がある状態にある場合や具体的なケアを必要とする子どもや家庭に対してのみ支援サービスが提供されてきたが、社会の変化や生活の多様化に伴って生じた新しいニーズへの対応も求められている。多様なサービス発生の背景とその実態について紹介する。 ①多様な子ども家庭サービス出現の背景 ②多様な子ども家庭サービスの種類 ③多様な子ども家庭サービスの実践 ④多様な子ども家庭サービスの今後	山縣文治 山本真実	山縣文治 山本真実
12	海外の子ども家庭サービス： デンマーク　①	ＥＵにおける子どもと家庭施策のモデルとなっているデンマークの施策体系、サービス供給の実態などを、子どもと家庭に対する支援策の基盤となる社会的背景・動向、考え方や成り立ちなどを踏まえながら紹介する。	高橋重宏 山本真実	高橋重宏 山本真実
13	海外の子ども家庭サービス： デンマーク　②	第２回目は個別サービスの状況を取り上げ、就学前や学齢期の子どもと家庭に対するサービスの提供状況、今後の政策的見通しなどを把握する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	海外の子ども家庭サービス：カナダ　①	オンタリオ州における子どもの権利擁護サービス・システム（子ども家庭アドボカシー等）と子ども保護援助協会の活動、イン・ケアにある子どもの生活（グループホーム）、ペープ資源センターの活動等を学習する。	高橋重広	高橋重広
15	海外の子ども家庭サービス：カナダ　②	子どもへの不適切な関わり（虐待とネグレクト）の実態の解説と、子どもと親へのトリートメント機関とその内容を学ぶ。	同上	同上

＝障害者福祉（’０１）＝（R）

〔主任講師：三ツ木　任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

戦後５５年の間にかなり進展してきたわが国の障害者福祉は、平成の社会福祉改革の最中で新たな変革を迫られている。どんなに障害が重くても、必要な援助を受けながら、地域で主体的に生活できる、ノーマライゼーションが実現した社会をつくるために、私たち一人ひとりがいま何をなすべきかを問い直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	障害者福祉の動向	わが国における障害者福祉の進展の経過を概観するとともに、障害者基本法、障害者プランを中軸として推進されてきた近年の障害者施策の実施状況、新たな社会システムに対応した障害者施策の再構築のあり方にについて検討する。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授）
2	障害者福祉の理念	人権の尊重、ノーマライゼーション、自立生活、自立と社会参加の促進など、障害者福祉の基本理念の本来の意味を概観しながら、私たち自身の意識や福祉サービスの現実とのギャップ、そしてそのギャップを埋める方策について検討する。	同上	同上
3	障害者福祉の対象	障害者福祉の対象は、身体的または精神的な機能障害があるために日常生活や社会生活で困難を抱え、その困難を解決、軽減するために社会福祉の支援を必要とする人たちである。わが国の対象者の範囲を示しながら、対象者の認定に関わる課題を検討する。	赤塚　光子（立教大学助教授）	赤塚　光子（立教大学助教授）
4	障害者福祉の制度	わが国の障害者福祉の法・制度は、障害種別毎に定められ、教育、雇用など多岐にわたる関連法・制度が生活全般を支援する仕組みとなっている。これらを概観し、法の対象者との関係を含めて、今後の課題を検討する。	同上	同上
5	障害をもつ子どもの療育と教育	医療の進歩により、障害をもつ子どもの重度化・重複化が進む中で、療育・教育は大きな変化を求められている。軽度の障害をもつ子どもや「障害」という概念に当てはまらない子どもの問題も注目されている。今後の療育・教育はどうあるべきか、国際的動向も踏まえて検討する。	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）
6	障害をもつ人の在宅福祉	障害をもつ人の地域生活を支える在宅福祉サービスの整備の過程を振り返りながら、現行のサービスを概観する。さらに、ライフサイクルを通した支援、障害種別や地域による格差、供給システムのあり方など、今後の課題を検討する。	赤塚　光子	赤塚　光子
7	障害をもつ人の施設福祉	わが国の障害者福祉は、施設福祉を主流とした時期を経て現在に至っているが、今もなお施設が果たしている役割は大きい。この経過と現状を示しながら、施設の役割の整理、施設改革の方向性など、今後の課題を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	障害をもつ人の雇用・就業	障害をもつ人の就業状況はどうなっており、雇用促進のための法・制度や対策はいかに取り組まれてきたかを概観する。また、障害種別の就業状況と課題について、欧米での雇用対策と比較しながら検討する。	丸山　一郎（埼玉県立大学教授）	丸山　一郎（埼玉県立大学教授）
9	障害をもつ人の福祉的就労	現在１０万人以上の障害をもつ人が就労している授産施設や小規模作業所の実態を概観し、一般の雇用・就業が困難な重度の障害をもつ人にとっての働く意義や働く機会を確保する方策などについて検討する。	同　上	同　上
10	障害をもつ人の地域活動	障害をもつ人が生活、人生の質（ＱＯＬ）を高めるためには、日常生活において他の住民と同様に地域社会の諸活動に参加することが不可欠である。スポーツ、文化、芸術などの諸活動への参加状況を概観し、今後の課題を検討する。	同　上	同　上
11	障害をもつ人による社会行動	国際障害者年以降、自立生活運動をはじめとする障害者自身の社会行動が、障害者福祉のあり方を大きく変えてきた。政策決定への参加・参画、福祉サービスの新たな担い手、さまざまな地域活動など、その流れと今後の課題を検討する。	石渡　和実	石渡　和実
12	障害をもつ人の権利擁護	権利擁護（advocacy）という概念は、社会福祉の根幹をなすもので、障害者運動の進展の中から確立されてきた。権利擁護に関わる当事者、関係者の活動を概観し、社会システムの変化の動向を踏まえて、今後の課題を検討する。	同　上	同　上
13	世界の障害者福祉	障害をもつ人は、世界の人口の１０％、６億人を超えるといわれている。他の人々と同様の生活の実現が取り組まれている国から、まったく顧みられていない国まで、障害者福祉の状況には大きなギャップがある。欧米とアジアの国々の障害者施策の状況を紹介する。	丸山　一郎	丸山　一郎
14	障害者福祉のマンパワー	障害者福祉には、社会福祉職、介護福祉職、医療技術職など多種多様な専門職員、障害を持つ当事者、家族、ボランティアなどが関わっている。これらのマンパワーの状況を概観しながら、効果的なチームワークのあり方について検討する。	三ツ木任一	三ツ木任一
15	障害者福祉の展望	めまぐるしく移り変わる社会的状況において、障害者福祉は何をめざして進めばよいのか。これまでの学習を総括して、主要な課題とその解決への指針を検討しながら、２１世紀の障害者福祉のあり方を方向づける。	同　上	同　上

＝ 高齢者福祉（’９９）＝（R）

〔主 任 講 師 ： 直 井 道 子（ 東京学芸大学教授 ）〕
〔主 任 講 師 ： 山 田 知 子（埼玉県立大学助教授）〕

全体のねらい

高齢社会の到来は、社会の在り方のみならず、ひとりひとりの生活・人生の在り方をも根本から問い直すことを迫っている。本講義では、今日の我が国の高齢者の生活実態と高齢者の生活を支える福祉等の施策の実状をふまえながら、利用者主体の高齢者福祉のあり方を追求する。すべての人の高齢期を生き生きとしたものにするために、どのような社会的努力が必要であろうか。21世紀の新しい高齢者福祉を展望する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢社会の進展	第１部　現代社会と高齢者 日本社会の高齢化はいつごろから、どのように進んできたのだろうか。今後、どのように少子化・高齢化が進行するのだろうか。それが日本社会にどのような影響をもたらすのかを考察する。	直井　道子（東京学芸大学教授）	直井　道子（東京学芸大学教授）
2	歴史の中の老い	老い（高齢化）は、生物学的な現象だと思いがちであるが、老いを社会がどう意味づけるかによって、高齢者の役割や生き方は異なっていることを知る。特に、近代化によって老いの意味づけがどう変化してきたかを考察する。	同　上	同　上
3	高齢期の心と身体	歳をとるということは、心や身体がどのように変化していくことなのだろうか。日常生活における注意点などを考えると同時に、福祉サービスを考える上で必要な日常生活自立度などの概念について学習する。	杉澤　秀博（東京都老人総合研究所研究員）	杉澤　秀博（東京都老人総合研究所研究員）
4	高齢者と家族	従来、多くの高齢者は、子どもと同居して老後の問題を解決してきたが、それがどうして困難になってきたのか。夫婦関係や別居子との関係を含めて、社会の変化と関連づけて検討する。	直井　道子	直井　道子
5	高齢期の社会・経済生活	収入源と生きがいという二つの視点から、高齢期の就労の現状を明らかにする。また、引退後の生計のたて方や消費生活の現状、生きがいを求めての学習、余暇活動にも目をむけつつ、心豊かな老後の実現にむけての方途を探る。	同　上	同　上
6	高齢者と人権	第２部　高齢期の生活支援策 高齢者の人権はどのような理念にもとづいて、守られようとしているのだろうか。高齢者をめぐる法制度について憲法、世界人権宣言、国連行動計画や老人福祉法等を概観しながら考える。	河野　正輝（九州大学教授）	河野　正輝（九州大学教授）
7	高齢者と医療、介護保障	高齢期の健康を守る制度としての医療保障、介護保障の現状を示し、そこでの問題点と課題について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	高齢者と雇用・年金・生活保護	高齢期の経済生活の基盤である雇用の現状及び年金制度について述べる。また、高齢者の最低生活を守る生活保護の現状と課題についても考える。	河野　正輝	河野　正輝
9	高齢者と住環境・まちづくり	豊かな高齢期の生活基盤である住宅に焦点をあてる。高齢者はどのような住宅に住み、どのような課題をかかえているのか、安心して住み続ける居住条件とはなにか、住宅改造やまちづくりの視点を含めて考える。	児玉　桂子（日本社会事業大学教授）	児玉　桂子（日本社会事業大学教授）
10	高齢者保健福祉(1)施策の展開	老人福祉法から介護保険法にいたる戦後の高齢者をめぐる福祉施策の流れを追いながら、どのような社会経済的状況のなかで、わが国の高齢者福祉等の施策は展開されてきたのかを概観し、今日的な政策課題について検討を加える。	山田　知子（埼玉県立大学助教授）	山田　知子（埼玉県立大学助教授）
11	高齢者保健福祉(2)高齢者生活支援サービスの体系	高齢者の生活を支える保健福祉等のサービスについて在宅・施設福祉等サービスの現状を福祉現場の実態分析を含めて概観し、サービスの種類、量と質について考察する。	同　上	同　上
12	高齢者保健福祉(3)保健・医療等と福祉の連携	在宅、施設を問わず、豊かな高齢期の生活を支えるための福祉や保健等のサービス体制をどう構築するか、保健と福祉・医療の連携、相談体制のあり方等について考える。介護保険法に基づく要介護認定、介護計画立案からサービス提供という流れを追いながら、高齢者の生活自立を支えるサービス提供のあり方を考える。	同　上	同　上
13	消費者としての高齢者の保護・高齢者の当事者運動	高齢者福祉の新しい展開のために高齢期は身体的低下のみならず、精神活動の低下にみまわれることもある。消費者としての高齢者をどう守るかについて検討する。また、高齢者自身がみずからの権利を守る活動・運動を展開する動きもある。高齢者自身の活動・運動を取り上げながら、当事者運動としての可能性を考える。	同　上	同　上
14	福祉人材の確保と方策	ソーシャルワーカー、ケアワーカーといった福祉の人材の確保、養成について考える。高齢社会を支える福祉従業者はどのような環境のもとで働いているのだろうか。その多くは女性である。女性労働としての福祉労働の問題点を賃金、労働時間、雇用形態といった側面より考え、これからの人材の確保・養成のあり方をさぐる。また、専門福祉労働の周辺を支えるものとして、住民参加型サービスの担い手やボランティアについてもふれ、より質の高い人材を確保するために何が必要であるか考える。	同　上	同　上
15	21世紀の高齢者福祉の展望と課題	超高齢社会に立ち向かい、すべての人の生き生きとした高齢期の生活を創り出していくためには、生産第一主義、効率主義一辺倒の社会システムを生活・人間中心のシステムへ転換していく必要があるのではないだろうか。そのための変革の視点を家庭生活、教育、労働といった側面より考える。今日の高齢者福祉が抱える課題と解決のための方策を探る。	直井　道子 山田　知子	直井　道子 山田　知子

＝ 地域福祉（’９９）＝（R）

〔主任講師：大橋　謙策（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

地域福祉は社会福祉における新しいサービス提供システムであり、実践方法である。地域福祉は社会福祉における地方分権化を前提として、居宅における自立生活を支援する在宅福祉サービスを軸に、地域住民の参加を得て福祉コミュニティを形成する実践である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会福祉の変容・発展と地域福祉の実体化	・社会福祉の歩みと地域福祉 ・高齢化社会の進展と家庭介護の社会化 ・障害者の自立運動とノーマライゼーション ・子どもの発達保障と子育て支援のあり方	大橋　謙策（日本社会事業大学教授）	大橋　謙策（日本社会事業大学教授）
2	1990年社会福祉改革と市町村地域福祉の時代	・社会福祉三法体制から六法体制へ ・1990年社会福祉関係八法改正と地域福祉の時代 ・社会福祉法改正に関する修正加筆	同　上	同　上
3	地域自立生活の保障と地域福祉の考え方	・社会福祉の目的と自立生活のとらえ方 ・地域福祉の考え方と展開のあり方	同　上	同　上
4	在宅福祉サービスの考え方と構成要件	・在宅福祉サービスの考え方と入所型社会福祉施設 ・在宅福祉サービスの構成要件	同　上	同　上
5	在宅福祉サービスの供給のあり方と供給組織	・在宅福祉サービスの供給のあり方 ・在宅福祉サービス供給組織	同　上	同　上
6	在宅福祉サービスとインフォーマルケア	・在宅福祉サービスの発展 ・住民の社会福祉意識 ・新しいライフスタイルの構築と「ゆとり型社会」の創造 ・高齢者の生きがいと社会参加	同　上	同　上
7	地域福祉の主体形成と福祉教育	・福祉教育が必要とされる背景 ・福祉教育の発展と地域福祉の主体形式 ・福祉教育の理念	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ボランティア活動の理念と活動の構造	・ボランティア活動の歴史的発展 ・ボランティア活動の構造	大橋　謙策	大橋　謙策
9	地域福祉推進体制　(1) 社会福祉協議会の理念と課題	・社会福祉協議会の歴史的変遷と区市町村社協の位置 ・区市町村社協の現状と今後の課題 ・若干修正―社会福祉法に伴う修正	同　上	同　上
10	地域福祉推進体制　(2) 民生委員・児童委員制度	・社会福祉にかかわる「制度ボランティア」 ・民生委員制度の歴史と法的根拠 ・民生委員の現状 ・同上―民生委員法改正に伴う修正	同　上	同　上
11	地域福祉推進体制　(3) 地域福祉推進の財源と共同募金活動	・21世紀高齢社会における国民負担のあり方と地域福祉の推進 ・共同募金の歴史と今日的課題 ・国民負担のあり方と地域福祉推進における民間財源の確保のあり方 ・同上―社会福祉法改正に伴う修正	同　上	同　上
12	社会福祉施設と地域福祉	・「施設の社会化」論の変遷 ・施設の社会化と地域化 ・社会福祉施設の地域配置と住民参加	同　上	同　上
13	地域福祉実践の方法とコミュニティソーシャルワーカーの資質	・社会福祉のパラダイム転換とコミュニティソーシャルワーカーの位置 ・コミュニティソーシャルワークの展開過程とコミュニティソーシャルワーカーの機能	同　上	同　上
14	地域福祉計画のあり方と策定方法	・地域福祉計画論の発展段階と今日的位置 ・老人保健福祉計画と社会福祉行政の計画化 ・地域福祉計画づくりの視点と枠組み ・若干―社会福祉法改正法に伴う修正	同　上	同　上
15	諸外国の地域福祉の歩み	・近代社会福祉制度の原点としてのイギリスにおける地域福祉の変遷 ・アメリカの地域福祉の発展	同　上	同　上

＝ 公的扶助（’０２）＝（R）

－生存権のセーフティネット－

〔 主 任 講 師 ： 杉村　宏（法政大学教授）〕

全体のねらい

人々の「人間らしく暮したい」という願いを根底で支える制度として、公的扶助制度がある。本講座では、「生存権のセーフティネット」をキーワードにして、わが国の公的扶助制度である生活保護を中心にして、その理念の形成、役割と現状を国民生活と関連させながら考えたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会保障 －社会的セーフティネット－	公的扶助を含む社会保障がなぜ社会的セーフティネットとよばれるのか，また現在進行中の社会保障改革がセーフティネットをどのように捉えているかを検討する。	杉村　宏（法政大学教授）	杉村　宏（法政大学教授）
2	公的扶助 －生存権セーフティネットの意味－	公的扶助制度の社会保障における位置と役割を検討し，生存権のセーフティネットといわれる理由について考える。また公的扶助が所得保障の制度であると同時に，社会福祉の機能も併せ持っていることについても検討する。	同　上	同　上
3	公的扶助の形成と展開 －貧困，貧困観の変化と救済制度の発展－	公的扶助制度の前身である救貧制度の成立と展開を，主にイギリスの救貧法を例に，その時代の貧困の実態と人々の貧困に対する見方と関わらせて述べる。	同　上	同　上
4	戦争と社会保障 －社会的セーフティネットの理念形成－	社会的セーフティネットとしての社会保障の形成を，20世紀前半の世界大戦との関係で考える。とくに生存権が，人々の生存の危機が現実のものとなる中で確立したものであることを［戦争国家］の人間観と関連して検討する。	同　上	同　上
5	戦前わが国の救貧制度 －特殊なセーフティネット－	戦前わが国の救貧制度を、日本の，近代化の特徴と関連させて概観し、その特質と問題点について考える。	同　上	同　上
6	生活保護制度 －わが国における生存権セーフティネット－	戦後の国民生活の再建に向けて，社会保障の中核を担った生活保護制度について，その成立過程と制度の目的，基本原理について述べる。とくに生活保護の基本原理は生存権のセーフティネットとして機能する上で，原動力となったものであることを確認する。	同　上	同　上
7	生活保護の実施原則	生活保護制度は柔軟な構造によって実施されるよう組みたてられているが，その原則と方法を概観し，これを解釈し運用する福祉行政の役割と責任について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生存権セーフティネットの保障水準－	生活保護の要否と程度を測定するための生活保護基準の成り立ちと、国民生活に直結する賃金所得や社会保障給付との関連について検討する。	杉村　宏	杉村　宏
9	生活保護行政の展開	生活保護行政の動向は、社会経済の動向と相互に関連しながら展開してきた。また被保護層は生活保護集返送の動向とも当然影響し会うが、被保護者・世帯の推移と保護行政の展開を、保護適正化政策を基軸にしながら検討し、その課題と問題点を考察する。	同　上	同　上
10	公的扶助ケースワーカーの仕事－生活再建への自立支援－	生活保護法の目的は最低生活の保障とともにその自立の助長にあるが、被保護者の社会的自立にとって必要なソーシャルケースワークの専門性とは何かを考える。	同　上	同　上
11	生存権セーフティネットの担い手－公的扶助研究活動をめぐって－	生活保護制度を生存権のセーフティネットとして機能させる担い手としての公的扶助ケースワーカーは、専門性とともにその組織的な研究活動を必要とする。いわばセーフティネットのネットワーキングの必要性と現状を、公的扶助研究活動をとりあげて考える	同　上	同　上
12	生活の不安定化と生存権セーフティネット－	雇用不安や経済状況の不安定化を背景にして、セーフティネット論がさまざまな分野で語られるようになってきているが、生活不安・将来不安の現実に立ち戻って、今求められているセーフティネットの再構築の方向を考える。	同　上	同　上
13	生存権セーフティネットの危機－「ホームレス」問題をめぐって－	国民的最低限保障のセーフティネットとしての生活保護制度があるにもかかわらず、今日では大都市を中心にして、路上で生活をする人々－いわゆるホームレスが無視できない数で存在している。これらの人達が提起している問題を、わが国のセーフティネットとの関係で検討する。	同　上	同　上
14	生活保護裁判で問われていること	生活保護行政をめぐる裁判が、目に見えて増加しているが、そこで問われている問題を通して、生活保護制度のあり方を検討する。	同　上	同　上
15	まとめにかえて－生存権セーフティネットの課題と展望－	公的扶助論のまとめにあったて、社会福祉構造改革の一環としての生活保護改革を取り上げ、その課題と展望を検討し、生存権セーフティネットの再構築のあり方を考える。	同　上	同　上

＝ 年金・医療保険論（’００）＝（Ｒ）

〔主任講師：木村　陽子（総務省地方財政審議会委員）〕

全体のねらい

年金と医療保険制度の概要とわたし達の生活とどうかかわるのかを理解する。次に、少子・高齢社会において、年金や医療保険の構造改革が必要とされる背景として、経済社会の変化、家族の変容も含めた年金・医療保険の抱える問題点を指摘する。最後に、先進諸国の共通の経験をもとにして構造改革の方向を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	年金編－ 公的年金制度と高齢者家計	高齢者家計における年金の役割を就労収入やしおくり、貯蓄との関係を述べる。時系列でみると、年金収入が高齢者家計において大きな割合を占めるようになり、一方で就労収入が低下した。	木村　陽子（総務省地方財政審議会委員）	木村　陽子（総務省地方財政審議会委員）
2	年金編－ 年金の構造改革はなぜ必要か	世紀の転換期にあたって、先進諸国の年金や医療制度の構造改革、およびその背景として、財政問題、世代間の不公平、労働や貯蓄にたいする無視できない影響等を説明し、次になぜ年金が強制加入かを述べる。	同　上	同　上
3	年金編－ 日本の年金制度の概要	日本の年金制度の概要－社会保険方式で運営されること、国民年金の被保険者の種類、年金の種類、給付構造や拠出構想について述べる。	同　上	同　上
4	年金編－ 年金の財政問題と年金積立金の運用	年金の財政は、高齢化率が約25％となる2015年、約33％となる2050年を前に1999年の制度のままでは、日本の年金財政は保険料率が34％となってしまうことを示す。次に、年金積立金の自主運用問題について説明する。	同　上	同　上
5	年金編－ 世代間の公平、世代内の公平	年金制度における公平の問題について述べる。後続世代ほど負担に対する給付の割合は小さくなり、マイナスの事態も生じること、また世代内の公平については、所得の低い人が不利になる場合もあることを述べる。	同　上	同　上
6	年金編－ 年金と老後の就労、貯蓄	年金制度が老後の就労にいかなる影響を及ぼすのか、また年金が貯蓄に及ぼす影響について説明する。	同　上	同　上
7	年金編－ 転換期にある企業年金	企業年金が老後所得保障の柱となるために必要な受給権の保護－受給権の付与、ポータビリティ、支払い保証制度、税制について述べ、次に確定給付年金と確定拠出年金について説明し改革の方向を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	年金編－ 女性と年金	先進諸国では1970年代より女性の年金権の確立が問題となってきたこと、次にわが国の現行制度の問題点を指摘し、改革の方向を述べる。	木村　陽子	木村　陽子
9	年金編－ これからの年金制度	先進諸国の年金改革も紹介しながら、わが国の年金制度がどうあるべきなのか、企業年金および税制との関係も含めて述べる。	同　上	同　上
10	医療編－ 各国の医療制度	先進諸国において、国民所得にしめる医療費の割合は無視できない高さであること、医療制度の供給体制や医療保険の態様が国によって違うこと、そしてなぜ公的医療保険が必要かを述べる。	同　上	同　上
11	医療編－ わが国の医療保険	わが国の医療保険が職域保険と地域保険に分れていること、健康保険と国民健康保険の給付内容、保険料、財政調整などについて説明する。次いで、退職者医療制度、老人保健制度について説明する。	同　上	同　上
12	医療編－ 医療保険の沿革と医療費の3要素	これまでの大きな制度改革を中心としてわが国の医療保健の沿革を述べ、次に医療費の3要素である受給率、1件当たり日数、1日当たり医療費を説明し、医療需要はどのように決まるのかについて述べる。	同　上	同　上
13	医療編－ 高齢者医療	1997年では70歳以上の高齢者1人当たり医療費は、70歳未満の1人当たり医療費の5倍強である。高齢者医療が増大した理由と対策を述べ、次に医療と代替することが大きい介護保険について述べる。	同　上	同　上
14	医療編－ 医療と介護	さまざまな医療保険からの財政調整を主とした現行の老人保健制度がこのままではなりゆかないことを述べる。先進諸国の例も述べる。	同　上	同　上
15	医療編－ 望ましい医療保険制度	公的保険を維持しつつ、21世紀の望ましい医療制度とは何か、供給体制や診療報酬、薬価、一部負担金、監査体制等に今後のあり方を述べる。	同　上	同　上

＝ 社会福祉の国際比較（ ’０２）＝（ＴＶ）

－利用者主体のシステムをめざして－

〔 主 任 講 師 ： 松 村　祥 子（放送大学教授）〕

全体のねらい

「福祉国家から福祉社会へ」というスローガンの下で先進諸国の社会福祉の理念や方法は大きな変化を遂げている。特に地方分権化や民営化が進む中で、公的社会福祉サービスと民間社会福祉サービスの役割変化、関連分野（医療、教育、住宅）との連携及び専門職とボランティアの関係なども変わってきている。

本講義では、変革期にある各国の社会福祉の課題と方法を示したい。特に、利用者主体の制度をめざす我が国の社会福祉に必要なことを世界の事例から学びたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	世界の社会福祉を学ぶ視点	経済、社会、文化の国際化の進展の中で、各国の社会福祉は大きな変革を迫られている。先進工業国では、少子高齢化や家族規模の縮小に伴う生活変化に対応するために、社会福祉の行財政や方法技術の改編や革新が行われている。他方、開発途上国では、一国内の貧困や生活格差との闘いだけでなく、雇用環境や生活環境の国際化による生活問題も深刻であり、従来とは異なる社会福祉の方法が求められている。相互依存の高まる国際社会の中で、世界の社会福祉を学ぶ視点を明らかにする。	松村　祥子（放送大学教授）	松村　祥子（放送大学教授）
2	世界の社会福祉の歩み	長い歴史の中で積み重ねられてきた社会的生活支援の為の実践活動は、一般的には選別的で治安維持的なものから普遍的で権利擁護的なものに変化してきている。19世紀末から20世紀初頭の欧米諸国から広がった「近代的社会福祉」の理念、対象、方法等が何故、どんな経路で、どのような変容を伴いながら世界中に広がったのか。社会福祉の世界史年表から検討してみたい。	同　上	同　上
3	アメリカの社会福祉	自立援助型といわれるアメリカの社会福祉の特色を次の観点より考察する。１）市場経済、地方分権の原理に立った社会福祉政策、制度　２）公的社会福祉サービスと民間社会福祉サービスの関係と財政　３）社会福祉サービスの中心的思考。４）専門職とボランティアの関連と役割　５）社会福祉サービスの将来への展望	平山　尚（東京福祉大学教授）	平山　尚（東京福祉大学教授）
4	スウェーデンの社会福祉	社会福祉の世界的最前衛としてのこの国では、どのようなプロセスで高い質量の社会福祉活動が生み出されてきたのか。スウェーデン社会の構造とそこに暮らす人々の生活文化等も含めて検討したい。高福祉高負担型の福祉施策は、福祉サービスに対する社会的責任と個人の権利意識に支えられ、社会福祉の内実を豊かにしてきたが、現在では、経済や政治状況の変化とどう調和させていくかの課題解決も不可避となっている。	外山　義（京都大学教授）	外山　義（京都大学教授）
5	イギリスの社会福祉	最低所得保障に重点をおく所得保障制度と、無料の国営医療を基礎とする医療保障制度とを中核とする福祉国家体制を確立してきたイギリスは、また、民間社会福祉の伝統を生かしつつ、独自の特色をもった社会福祉サービスの実施体制を築いてきた。ここでは、イギリスの社会福祉の特色について、コミュニティケアの推進、専門職制度、民間社会福祉の役割などを中心に分析するとともに、「コミュニティケア改革」の実施や貧困問題への取り組みなど近年の新たな政策の展開についても検討する。	平岡　公一（お茶の水女子大学教授）	平岡　公一（お茶の水女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	フランスの社会福祉	フランスの社会福祉活動の実働はアソシアシオンと言われる非営利組織によって担われている。年金、医療、家族手当の運営機関である社会保障金庫や行政組織とともにユニークな体系の中で多元的で柔軟性のある社会福祉が実現されている。「社会的連帯」をキーワードとするフランスの状況を、20世紀初頭からの高齢化の進展や第二次大戦後のヨーロッパの国際的地位の変化をも視野に入れながら示してみたい。	松村　祥子	松村　祥子
7	タイの社会福祉	貧困問題がアジア太平洋地域の開発途上国の社会開発問題の根底にあると言われているが、タイも例外ではない。１９９７年のタイバーツの暴落に端を発したアジアの経済危機は、全ての階層の経済生活に多大な影響を与えた。社会の低所得者層、特に、低所得の労働者層は、企業経営の建て直しの中で、多くの失業者を生み出した。タイの経済が緩やかに回復に向かう中でも、まだ、低所得者層の生活苦は続いている。このような中で、都会と農村部の格差はますます拡大している。農村部では過疎化が進み、都市部では、経済的な貧窮だけでなく、棄児や児童虐待、児童労働の問題、また売春や海外出稼ぎなどに絡んだ女性問題などが山積している。また、高齢者問題も家庭の崩壊の中で表面化している。福祉サービスがまだ十分に行き渡っていない中で、障害者の当事者運動は盛んで、タイの福祉施策の今後のあるべき姿を示唆している。開発途上国を代表するタイの社会福祉の現状と課題を考究する。	高嶺　豊（国連障害者問題担当官）	高嶺　豊（国連障害者問題担当官）
8	日本の社会福祉	少子高齢化の進展に対応して介護保険の導入や児童手当の拡充等、我が国の社会福祉は大きな変化の渦中にある。行政処分の措置制度から利用者主体の契約的選択的制度への移行をめざす中で社会福祉の運営上の地方分権化、民営化、住民参加が切り札とされている。しかし、実際には福祉サービスの基盤は不十分で、専門職員は不足し、国民の福祉意識も高まっていない。どのような方向と方法で新しい社会福祉体制を構築できるのか。国内の事例を取り上げながら検討していきたい。	松村　祥子	松村　祥子
9	地域環境と社会福祉	住民が享受する社会福祉の質にとって、福祉インフラとしての地域環境が果たす役割は大きい。乳幼児期から青年期、壮年期を経て老年期に至るまで、それぞれのライフステージにおける住まいから地域、さらに広域的な生活行動圏域内の点的、線的、面的インフラのあり方を、各国の事例を紹介しながら考えてみたい。キーワードは「自立」「自律」「予防」などである。	外山　義	外山　義
10	在宅福祉と施設福祉	我が国では介護保険が導入され、在宅での居住継続を支える仕組みの普及、強化が急がれている。「住み慣れた住まい、地域で暮らし続けたい」という願いは万人のものであるが、現実には８割を大きく越える日本人が施設において人生を閉じている。人生の最終ステージの生活の場として施設をも視野に入れざるを得ない状況の中で、在宅における生活と施設における生活の極端な落差によって、みすみす高齢者の残存能力が失われ、生命力が萎んでしまうという問題は、スウェーデンをはじめとする他の高齢化先行社会も経験してきたテーマである。そうした国々に学びながら、今後の施設ケアの在り方、さらには在宅福祉と施設福祉のあるべき関係を展望してみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	医療と福祉の連携	すべての人の「健康で文化的な生活」を目的にする社会福祉活動にとって、医療保健の充実は基礎的条件である。また、病気の予防、早期回復、慢性病管理のためには適正な医療と社会福祉の連携が不可欠である。人々の生活の中では車の両輪ともいえる医療と福祉が縦割り行政や関連職間の連携不足のために、サービスの欠落、重複、過剰等の種々の問題を発生させている。何故連携が必要なのか、どのような形の連携が望ましいのかについてアメリカと日本の事例を参考にして述べる。	平山　尚	平山　尚
12	社会福祉の専門職	日本を含め欧米諸国のように高度に発達した社会にとって、高度の知識と技術の備わった有能なソーシャル・ワーカー（社会福祉専門職者）を養成することは急務を要することである。しかし、日本は欧米諸国と比較をするとソーシャル・ワーカーの養成に質と量の両面で遅れをとってしまっている。ソーシャル・ワーカーの業務とは何か、ソーシャル・ワークの知識、技術とは何か、また、ソーシャル・ワーカーの訓練はどのように行わなければならないかを日本とアメリカの事例を見ながら学ぶ。	同　上	同　上
13	社会福祉の多元化と市場化	近年の（日本を含む）先進諸国における社会福祉政策の展開の一つの特徴として、サービス供給における民間営利・非営利部門の比重を高める「多元化」と、サービス供給に市場メカニズムを導入する「市場化」の進展をあげることができる。この講義では、1990年代初頭に多元化・市場化に向けての制度改革を実施したイギリスの例も紹介しながら、多元化と市場化についてどのような観点から分析し、評価していけばよいのかを考えてみたい。	平岡　公一	平岡　公一
14	アジア太平洋地域の障害を持つ当事者運動	１９８１年の国際障害者年および国連障害者の１０年（１９８３年―１９９２年）を境に、障害者の当事者国際団体が結成され、国連の政策決定の場での障害者の影響力が増大した。１９９３年から始まったアジア太平洋障害者の１０年は、障害当事者団体のイニシャティブにより域内の政府に働きかけて実現されたと言われている。障害当事者団体には、障害種別の組織と、障害の種別を超えた団体に大別される。また、農村の十数人で構成される自助団体から、全国の障害者を網羅した団体まで、さまざまな規模で存在する。これらの当事者団体の国の政策決定への影響力は確実に増大している。アジア太平洋地域の障害当事者団体の結成の過程および目的、権利擁護運動、独自のサービス提供、メンバーのエンパワメント、域内のネットワーク作りなど数カ国の実例を紹介しながら、障害当事者運動の意義を明らかにしていきたい。	高嶺　豊	高嶺　豊
15	今後の社会福祉の課題	公助、共助、自助のそれぞれの機能の充実と効果的な連携によって拡大する生活問題を緩和し、安心社会を築くことが多くの国で目標とされている。世界各国でこれからの社会福祉発展の鍵となるNPO（非営利組織）の推進やジェンダーと社会福祉の関係の見直し等も取り上げながら、国際社会と我が国での社会福祉の今後の課題を示したい。	松村　祥子	松村　祥子

＝ 近代の教育思想（’９８）＝（R）

〔主任講師：宮澤　康人（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の教育制度や教育理論の基本的枠組が作られるうえで、西洋近代の教育と教育学は大きな役割を果した。その背景にある西洋近代の教育思想に含まれる基本的概念や理論を、近代に生きた思想家の個性から切り離さずに学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育思想とは何か	全体の序論として、教育思想をどのようにとらえるか、教育思想なるものが成立する条件は何か。西洋近代において、教育思想が社会思想、政治思想などから独立してくることなどを説明する。	宮澤　康人（放送大学教授）	宮澤　康人（放送大学教授）
2	近代の教育の思想の特徴	３章以下の個々の思想家の思想に入るまえに近代の教育思想のきわだった一般的特徴にふれ、それが近代の社会と文化の独自性によって作られた、教育主体と学習主体、大人と子供の間の葛藤を克服しようとする課題を負っていることを明らかにする。	同　上	同　上
3	モア－ユートピアと教育－	近代の教育思想の特徴の一つに、そのユートピア性がある。といっても、（暗黙の裡にであれ）思い描かれるユートピアと教育の関連は、さまざまなものがあり得る。ここでは、「ユートピア」という造語の発祥の場トマス・モア『ユートピア』（１５１６年）の中で、教育がどのような位置を占めたかを明らかにしようとする。ユートピアは教育社会として構想されざるを得ず、教育はユートピアであり続けることを課せられる。	寺崎　弘昭（東京大学助教授）	寺崎　弘昭（東京大学助教授）
4	コメニウス－人間と社会の改造のための術－	近代教育学、とりわけ教授学の祖ともいわれるコメニウスの思想を次の項目に従って説明する。コメニウスへの関心、コメニウスをめぐる時代状況、教育の役割と教育可能性、教授学と汎知学。	金子　茂（中央大学教授）	金子　茂（中央大学教授）
5	ロック－習慣形成と近代社会－	近代教育思想は当然にも、フィクションとしての近代社会と相伴ってその姿を現す。それらの関連を体現したものとして、市民社会理論家であると同時に教育論者であったジョン・ロック（1632～1703年）があげられる。その教育論は、習慣形成を通じて生涯学習主体のエートスを育むことに向けられるものであったが、その基底に「懲治」を捉えることによって、近代市民社会の周縁を不断に中心へと還流させることを保証しようとするものであった。	寺崎　弘昭	寺崎　弘昭
6	ルソー－子どもの発見－	ルソーの『エミール』の主題は、彼自身の言うところによれば「大人になる前の子どもというものはどのような存在であるか」を明らかにし、それにふさわしい教育のあり方を考察することであった。この主題の意味を、ルソーの時代認識とそこから導かれた人間観を分析することによって明らかにする。	森田　伸子（日本女子大学教授）	森田　伸子（日本女子大学教授）
7	コンドルセ－進歩の思想と教育－	コンドルセの公教育思想は、フランス啓蒙思想の特徴をそなえつつ、革命の動乱のなかであらわとなったブルジョワ社会の矛盾に対して応えようとする実践的な問題意識に貫かれたものであった。彼の公教育思想の歴史的意味を、こうした背景と彼の進歩思想と関係づけつつ考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ペスタロッチー「技術」としての教育と教授－	成人として生活していくうえで必要なことを、子どもたちが子どもなりに大人の社会生活に参加するなかで、自然に、みようみまねで学んでいく。これが教育のもっとも素朴な形だろう。しかし近代の教育思想はそのような素朴な教育がもはやなりたたなくなったときに誕生したのだった。何をどのように教えるのか。それは自覚的に取り組まなければならない課題となったのである。近代教授学の創始者として知られるペスタロッチが、この問題をどう考えたのか。それをここではたどってみたい。	鳥光美緒子（広島大学教授）	鳥光美緒子（広島大学教授）
9	ヘルバルト－教授による教育	「学者」としてのヘルバルト、「教育」と「教授」、教育的教授、学問しての教育学、『一般教育学』の構造、人格の客体的部分と主体的部分、といった事柄について説明する。	金子　茂	金子　茂
10	フレーベル－幼児教育の意味と方法－	幼児教育の重要性は、今日しばしば指摘されている。早期からの知的教育が推進される一方では、幼児期にこそ、知識中心主義的な学校教育とはちがった自由な「本当」の教育が必要だし可能なのだという声もある。幼児教育理念の創始者であるフレーベルは、幼児期とその教育の意味をどのように考えていたのだろうか。彼は子どもたちに何を、どのような方法で教えようとしたのかという問題を中心に、彼にとっての幼児教育の意味について考えてみたい。	鳥光美緒子	鳥光美緒子
11	ミル－父と子の葛藤と自立の教育学－	近代社会は、近代情愛家族を析出することによって、思春期の子どもと親の葛藤を顕在化させた。こうした父子間葛藤をくぐり抜け、現実化した近代社会との対峙の中で社会論・教育論を紡ぎ出したのが、ジョン・スチュアート・ミル（１８０６～１８７３年）である。父ジェイムス・ミルによる被教育体験を経て、自由教育論・＜公衆(the public)＞形成論へと子ミルが自立してゆくプロセスを追う。	寺崎　弘昭	寺崎　弘昭
12	マン－コモン・スクールの思想－	19世紀のアメリカ合衆国において公教育制度の確立に貢献したホーレス・マンの思想を中心として、コモン・スクール運動の背景にある学校教育の「義務」「無償」「中立」の諸原則に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦　良充（明治学院大学教授）	松浦　良充（明治学院大学教授）
13	ライン－国民教育の理論化の試み－	明治中期の日本の教育界に圧倒的な影響を与えたヘルバルト派を代表するラインの理論は、ヘルバルトの「教育的教授」の理論を国民的規模での学校制度が普及する状況において具体化することであった。そこに至る経過を略述する。	金子　茂	同　上
14	デューイ－成長そのものとしての教育－	20世紀のアメリカ合衆国における進歩主義教育運動に関して、ジョン・デューイの思想を中心に、進歩主義批判の思想も含めて、この磁気の教育論争に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦　良充	同　上
15	教育思想の近代から現代へ	結びの章として、20世紀以降の現代教育思想に対して近代の教育思想をどう位置づけたらよいかを次のごとく展望する。近代の帰結としての現代、現代という時代区分とその特徴、教育と教育思想における近代と現代、現代と教育思想への視点。	宮澤　康人	宮澤　康人

＝ 教育の歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　秀夫（日本大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、日本の教育の問題性をその歴史に即して根源的に考えてもらうための素材を提供することにある。ただし、歴史講義の例に多い、ある時間軸に沿って概説していくという形式をとらず、特徴的な問題領域別に史的流れを説明していく方式をとりたい。取り扱う時期は、現在の日本の教育の骨格が形成された、明治維新から第二次大戦前後までの近現代を主とするが、必要に応じてその前後に及ぶことがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の歴史とは	教育の歴史を学ぶ意味はどこにあるのか。人間にとっての学習の自発性と強制性の発端（「学」と「教」のちがい）、「学校」の発生と社会身分制との関係、日本の教育の時期区分論、具体的なコトやモノに即して教育を考えるなど、講義の導入をはかる。	佐藤　秀夫（日本大学教授）	佐藤　秀夫（日本大学教授）
2	明治維新と教育	非欧米文化圏での初の「改革・開放」の実験となった明治維新により、日本の教育の近代は始まる。その状況を1870年代～1880年代の特徴的な事実に基づいて説明する。御雇教師、留学生派遣、「学制」、「教学聖旨」をめぐる教育論争、「改革・開放」を可能にした近世日本の文化条件など。	同　上	同　上
3	教育勅語の成立	教育の「欧米化」と「国民化」との狭間で天皇の権威に依拠した教育勅語の形成史を、通説への批判とともに明らかにする。教育勅語の内容構成の特徴とその問題性、およびそれがその後の教育界に与えた影響などを説明する。	同　上	同　上
4	学問と教育の制度化	国家制度としての近代学校の枠組みの形成過程を、学問と教育の未分化から分離の定着という視点より考察する。初等教育の単一化と中等教育以上の分岐化の成立事情、学歴による社会階層の改編、ジェンダーと学校、平等と競争の関係などを解説する。	同　上	同　上
5	学校と空間	学校には一定の空間が必要である。その空間の設定における日本の特徴を解明する。黒板と教壇、学校の立ち机と手習塾の座り机、一足制の大学と二足制の小学校、小中学校になぜ運動場があるのか、廊下をめぐる南北論争、など。	同　上	同　上
6	学校と時間	学校教育は一定の時間の制約の中で進行する。その時間の制約における日本の特徴を解明する。授業日指定と休日指定（通年授業制）、学年の始終期（四月制と九月制）、夏休みの問題、修業年限は何によって決まるのか、など。	同　上	同　上
7	教科書とは(1)	日本における近代教科書の形成過程を、教科書概念の検討、教科書制度の変化，とくに国定制成立にみる戦前文部省の教科書規制の強化などを解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教科書とは(2)	前回に引き続き、文部省の教科書政策の変動に起因する教科書内容の変化、および「モノ」としての教科書の社会史を説明する。	佐藤　秀夫	佐藤　秀夫
9	鉛筆、ノート、謄写版	学習用具の変化が近代教育の方法改革を下支えしていった過程を検討する。学習用具としての毛筆と鉛筆、試行錯誤を許す鉛筆と消しゴムのセット、雑記帳と大学ノート、文集づくりの武器だった日本創作の謄写版などを、教育方法の改革と学習負担増大の両面から考えていく。	同　上	同　上
10	服装と教育(1)	服装のもつ社会規範性と内面拘束性に留意しつつ、学校での服装規制がなぜ生ずるのかを考える。軍服をモデルとしたユニフォーム、男子中等学校以上の場合をここでは扱う。	同　上	同　上
11	服装と教育(2)	服装規制に現れた教育規制の具体例として、女学生の通学服装と女性教育観との相関関係を検討する。最初の女学校での服装ユニ・セックス化、儒教主義徳育重視と和装回帰、国家主義の登場と洋服化・女袴、体操の重視とセーラー服の定着、など。	同　上	同　上
12	試験と選抜	近代学校に必然化した学習成果の評価法と、上級学校進学のための選抜の史的特徴を分析する。定期試験の結果による席次決定・落第・進級・飛び級の発生、考査の意味、通信簿、そして入試競争の激化とその影響など。	同　上	同　上
13	教育での「外」と「内」(1)	国家統合の過程で新たに包摂した少数民族などマイノリテイへの教育を先行例として、台湾・朝鮮などにおいて植民地教育が開始された。植民地の子どもたちにとって、学校教育を通じた立身出世の道はどのように開かれていたのか、あるいは閉ざされていたのか。植民地の教育制度に即して考える。	駒込　武（お茶の水女子大学助教授）	駒込　武（お茶の水女子大学助教授）
14	教育での「外」と「内」(2)	植民地の教育は文化統合の手段であり、その武器とされたのは日本語教育である。植民地に対する日本語教育強化の史的問題性を、最初の植民地である台湾の事例に則して説明する。	同　上	同　上
15	象徴と教育	国家・国民を初め、集団構成員としての統合や連帯を意識させるために、標旗・標章・歌曲などに表現させた象徴についての教育は、学校においても重視されている。しかしその抽象度が高いほど、「見えざるイデオロギー」教育に結果することがある。ここでは旗章を中心にして、象徴を教育に用いる場合の問題性を考察する。教育の自由と集団性との史的関係を考察して、本講義の結びとする。	佐藤　秀夫	佐藤　秀夫

＝　教育社会学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：天野　郁夫（国立学校財務センター教授）〕
〔主任講師：藤田　英典（東京大学教授）〕
〔主任講師：苅谷　剛彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

教育現象についての実証科学としての教育社会学について概説する。教育は個人にとっても社会にとっても、その成長・存続・発展の要に位置する重要な社会的営みであり、社会生活のあらゆる側面と関連している。そのような教育の形態・構造・機能、個人と社会にとっての意味、教育と社会との関連などについて、教育社会学はどのように考察してきたかを概説し、そのなかで教育社会学の理論と方法について説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育社会学とは	教育社会学とはどのような学問であるかについて概説する。それは教育に関わる諸現象を社会的に研究する学問と定義されるが、その対象の捉え方、社会学的方法、基本的概念について説明する。また、日本の教育社会学の特徴についても簡単に説明する。	藤田　英典（東京大学教授）	藤田　英典（東京大学教授）
2	社会化と社会統制	個人が文化を習得し社会の成員になっていく過程を社会化という。それは、社会が世代を越えて再生産される過程でもある。この二重性をもった社会化の過程はどのように構造化されているか、その構造化の様式は社会によってどのように異なるかについて考える。	同　上	同　上
3	家族・地域の教育	高学歴化や産業化・都市化・情報化の進展にともなって、教育環境はどのように変化してきたが、それにともなって子どもたちの生活と成長の過程はどう変化してきたか、社会化の担い手としての家族・地域の人間関係はどう変化してきたか、といった問題について考える。	同　上	同　上
4	情報化社会の教育	コミュニケーション・メディアの変化は生活様式と文化は生活様式と文化空間をどのように変えてきたか、とくに情報化と消費の高度化の進展は青少年の意味世界をどのように変えてきたか、成長の過程と教育の課題はどのように変化してきたか、といった問題について検討する。	同　上	同　上
5	教育問題の社会学	「学校の荒廃」が言われて久しいが、青少年の非行・逸脱や、教育に関わる諸問題はどのように変化してきたか、その変化は社会環境の変化とどのように関連しているか、教育社会学はそれをどのように据え、どのように解明してきたか、といった問題を検討する。	同　上	同　上
6	学校制度の社会学	組織的な教育の場である学校が、どのようにして生まれ、産業化の進行とともに発展をとげ、現在のような巨大な制度へと成長するに到ったのかを歴史社会学的にあとづけることにより、学校制度の基本的な構造を明らかにする。	天野　郁夫（国立学校財務センター教授）	天野　郁夫（国立学校財務センター教授）
7	カリキュラムと教育的知識	学校は、古い世代から世代へと文化を伝承していくための、専門的な機関である。どのような文化や知識が、選ばれ分類され、序列づけられるのか。教育的知識の選択・配布・序列づけと社会との関係について考える。	苅谷　剛彦（東京大学教授）	苅谷　剛彦（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校の組織と文化	学校は、教師集団、生徒集団からなる社会的組織である。それぞれの集団は、ものの見方や考え方を共有することで、教師文化、生徒文化を形成している。学校の組織としての特徴、教師文化と生徒文化の形成のメカニズム、それが教育過程に及ぼす影響について考える。	苅谷　剛彦	苅谷　剛彦
9	教育過程と教室空間・学校空間	教育という社会的行為の最小単位は、教師と生徒、ないし生徒同士の相互作用である。教師の期待効果、生徒のグルーピングの学習への影響、さらにはそれらの相互行為を外枠として規定している教室空間、学校空間の特徴について考える。	同　上	同　上
10	学校の社会的機能	学校で行われる様々な活動は、社会との関わりで見たときに、どのような役割を果たしているのだろうか。学校における諸過程が、人材選抜機能、社会化機能、正当化機能を果たしていることについて検討する。	同　上	同　上
11	高等教育の社会学	初等教育から始まった学校教育の発展の波が中等教育をへて高等教育の段階へと及んでいく過程で、高等教育の中核的な機関である大学の重要性が増すとともに、性格が変化し、学歴社会を出現させ、さまざまな問題を生み出していることを明らかにする。	天野　郁夫	天野　郁夫
12	階層・学歴・職業	現代社会の主要な制度のひとつとなった学校が、その階段的な構造のゆえに、いかに人々の能力（業績）による評価と選抜の機構として機能し、人々をさまざまな、職業に代表される社会的な地位に配分していくかを説明する。	同　上	同　上
13	教育改革と学習社会	現代社会の巨大化した学校制度が、その内部に、また社会の諸制度との関連でさまざまな問題を抱えるようになり、それがくり返し改革の動きを生んでいること、そのなかから学習社会の実現が改革の重要な目標として浮かびあがっていることをのべる。	同　上	同　上
14	教育社会学の技法	教育社会学は経験科学のひとつである。理論は実証研究によって強化され、実証研究は理論によって枠組みを与えられる。教育社会学において、実証研究の基礎となる調査の方法と研究テーマとの関係を中心に、データの収集と分析の方法について考える。	苅谷　剛彦	苅谷　剛彦
15	教育社会学のパラダイム展開	教育社会学研究の発展過程を概観し、機能主義、葛藤理論、方法的経験主義、解釈的アプローチ、社会史的／歴史社会学的研究など、主要なパラダイムの特徴と最近の研究動向について検討し、教育社会学における理論と方法および今後の課題について考える。	藤田　英典	天野　郁夫 藤田　英典 苅谷　剛彦

＝ 道徳教育（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：木原孝博（倉敷市立短期大学長）〕
〔主任講師：大西文行（横浜市立大学教授）　〕

全体のねらい
道徳教育を単に学校教育に位置づけて考えるだけでなく、学校教育を取り巻く地域的、社会的、文化的環境との相互作用的、共同的な観点から、考えることを目的にする。道徳教育の目的は、道徳性、すなわち人間の自・他相互の福祉の向上に資する傾向を形成することです。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	道徳教育と教育学	ペスタロッチ、ヘルベルト、デューイ、マカレンコなどの道徳教育理論を解説する。教育的目的論から道徳教育を論じる。	木原　孝博（倉敷市立短期大学長）	木原　孝博（倉敷市立短期大学長）
2	道徳教育と教育社会学	教育社会学者の道徳教育理論ないしは社会化理論を解説する。	同　上	同　上
3	道徳教育と心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムについて心理学的な面からの研究から道徳教育を考える。アイゼンクバンデューラなどの道徳性の形成、道徳的行動、道徳的情意形成について理論と道徳性の個別性についての人格理論を解説する。	大西　文行（横浜市立大学教授）	大西　文行（横浜市立大学教授）
4	道徳教育と発達心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムを発達的側面からの研究から道徳教育を考える。コールバーグ、ホフマン、セルマンらの道徳性の発達についての研究から道徳教育を考える。	同　上	同　上
5	道徳教育と文化人類学	文化による価値、道徳的価値の多様性について学習し、多様な価値体系での道徳教育について考える。	木原　孝博 大西　文行	木原　孝博 大西　文行
6	家庭教育と道徳教育	道徳性の発達の基盤となる家庭での親子関係の相互作用での道徳性の発達の過程について学習する。	大西　文行	大西　文行
7	地域教育と道徳教育	学校での道徳教育は、学校と地域共同体との密接な連携でなされることが必要である。地域共同体と連携し道徳教育を実践しているアメリカのボストンでの実践を中心に考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生涯教育と道徳教育	幼児期、幼児期、少年期、青年期の発達課題とその解決を通して人格が形成されていくプロセスを明らかにする。	木原　孝博	木原　孝博
9	国際化社会と道徳教育	従来の国という概念を超えた概念が広がっている。国際化である。他国についての理解とともに、他国と主体的、共同的に対処する必要がある。国際化社会での道徳教育に実態の観察を通して道徳教育のあり方を考える。	大西　文行	大西　文行
10	多文化社会と道徳教育	現在我が国は、アメリカやカナダのように未だ多民族、多文化、多宗教の国ではないが、9章で論じられたように、近い将来そのような状況を迎えることになる。そのような状況での道徳教育のあり方を、タイ、中国およびカナダの実践を比較しながら通じて考える。	同　上	同　上
11	情報化社会と道徳教育	情報技術の発達に伴い、多様な価値、道徳的価値を含んだ情報を処理することが求められてくる。情報処理能力の形成の観点から道徳教育のあり方を考える。	同　上	同　上
12	学校教育と道徳教育　(1)	学校教育の仕組みを領域と機能の視点から分析、教科指導と教科外指導、学習指導と生徒指導の役割を明確化しながら、学校教育の仕組みの中に道徳教育を位置づける。各国の文化型のちがいによる学校教育のあり方、道徳教育のあり方のちがいに着目する。	木原　孝博	木原　孝博
13	学校教育と道徳教育　(2)	わが国の道徳教育の歴史を辿りながら、「道徳」の時間を特設して道徳教育をする事の意味を明確にする。	同　上	同　上
14	道徳の時間の実践例　(1)	「教科のなかでの道徳教育」と「道徳の授業」を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	同　上	同　上
15	道徳の時間の実践例　(2)	「道徳性発達」理論に基づいた道徳の時間の実践を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	大西　文行	大西　文行

＝ 幼児教育の社会学（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：萩原　元昭（江戸川大学教授）〕

全体のねらい

今日、幼児の能動性、有能性や人とのやりとりの能力に関する新たな知見が、幼児教育のパラダイムの転換を招き、家庭、地域や幼稚園、保育所のカリキュラムや方法、環境構成の見直しが求められている。本講では、幼児の遊び、生活の場である家庭、園、地域を、個性形成のコミュニケーション体系として把え社会学的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	幼児の発達への社会学的アプローチ	幼児の発達の特性を、能動性、有能性や人とのやりとりの能力の形成として捉え、異なる個性を持つ幼児一人ひとりの心理的要求に適応するaccommodation systemの形成のにない手としての保育者・教師と幼児の二者関係、知識習得の方法など社会学的に究明。	萩原　元昭（江戸川大学教授）	萩原　元昭（江戸川大学教授）
2	家庭環境	幼児の最初の社会化の場としての家庭において、父親の育児参画・加の必要が訴えられている割合には少ない現状もあってか、母親の育児不安を解消するための手段として、園が地域の子育て支援センターとして家庭を支援するしくみの必要性が期待されている。	同上	同上
3	遊びとメディア	幼児の生活のほとんどが遊びであり幼児は遊びを通して多くのものを学ぶ。その遊びもマルチメディアの発展に伴い、テレビゲームを初め電子メディア遊びが盛んになり、新しい幼児教育の問題を生み出している。問題点を具体的に取り上げながら課題を明かにする。	森　楙（広島修道大学教授）	森　楙（広島修道大学教授）
4	幼児の仲間関係	発展的視点を含めて幼児期の仲間関係の特徴をふまえた上で幼稚園・保育所という集団保育施設が幼児の仲間関係の形成に果たす役割について考察する。園生活における幼児の仲間関係について、観察事例をもとに、遊びや保育形態、園環境などとの関連から捉える。	青井　倫子（愛媛大学助教授）	青井　倫子（愛媛大学助教授）
5	保育所の生活環境	保育所は子どもが生活時間の多くを過ごすところであるので、安全で情緒の安定した生活のできる環境を整えることが大切である。その中での遊びの指導を通して心身の健康の基礎や豊かな感性、表現力などを育成するのである。このような保育環境の重要性を考察する。	栃尾　勲（立正大学教授）	栃尾　勲（立正大学教授）
6	幼稚園の生活環境	幼稚園教育は「環境を通して行う」といわれているように、どのような環境のもとで、どのように生活を展開するかが重要となる。幼稚園の生活環境について、心身の発達、関係性の発達、表現力の発達という視点から、何が大事になるのかを考えてみる。	柴崎　正行（東京家政大学教授）	柴崎　正行（東京家政大学教授）
7	保育内容の社会学	保育内容構成の原理として収集型から統合型への変化を、領域「絵画製作」「音楽リズム」の廃止、それに代わる、領域「表現」の創設という例示で考察すると同時に、幼児の興味・関心に基づく指導計画の作成過程について考察を加えてゆく。	萩原　元昭	萩原　元昭

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	幼児の保育方法と環境構成	幼稚園や保育所における保育方法は、時代の変化に伴って変わりつつある。日本において保育方法がどのように変化してきたのかを論ずると共に、そこでの保育者の役割についても明らかにする。特に現在の保育における環境構成の意義と内容については詳しくふれる。	柴崎　正行	柴崎　正行
9	日本の幼児教育文化	幼稚園や保育所では、幼児を意図的・組織的な集団単位に組み込んで保育活動を展開する。幼稚園で編成される集団単位の種類とその編成原理、それらの集団単位を前提に展開する保育者と幼児の間の相互作用の様相から、日本の幼児教育の文化的特質を考察する。	結城　恵（群馬大学助教授）	結城　恵（群馬大学助教授）
10	幼児教育実践の研究	保育者自身が行なう園内研究、保育者以外の者が幼稚園や保育所をフィールドとして行なう研究など、幼児教育実践の研究の意義や方法また限界などについて研究をする際の視点の持ち方や保育者－幼児－研究者の相互の関係なども視野に入れて考察する。	青井　倫子	青井　倫子
11	園と家庭・地域との相互支援	いじめ問題や不登園問題にあえぐ幼児にとり家庭の父母と園の保育者とが相互に支援しあうシステムを意図したさまざまな連携方法について、例示しながら考察してゆく。その際統合的視点として、幼児一人ひとりの心理的要求に適応する視点の重要性について論ずる。	萩原　元昭	萩原　元昭
12	地域における子育て支援センターの役割	子育ての伝承や見聞が希薄化する中で、保育所や幼稚園に対して地域の子育て支援センターとしての役割が要請されている。子育て環境の変化と地域の子育て相談、親同士の交流等について、子どもに視点を合わせながら、その実態と課題を考察する。	栃尾　勲	栃尾　勲
13	プレイ・パーク	ロンドン郊外にあるホーランドパークの中にあるプレイパークを訪れ、幼児にとって魅力のあるプレイパークの条件を、社会学的視点からアプローチし、明らかにすると同時に、プレイリーダーの役割や幼児の生活環境の安全性などの関連とで究明する。	萩原　元昭	萩原　元昭
14	マルチ・カルチャリズムに基づく幼児教育	外国籍幼児の増加に伴い、保育者と幼児・親とのデスコミュニケーション、異文化としての幼児・親との接触による園の多文化など日本の幼児教育のパラダイム転換のひきがねにもなっている現状について考察する。マルチ・カルチャリズムの視点から園保育を論及。	同　上	同　上
15	幼児教育思想とその社会的背景	子どもの生活と遊びを大切にしようとする現在の保育文化は歴史的遺産と背景をもっている。幼児教育の思想と実践を歴史的な展開の中でたどるだけでなく、当時の社会におかれた幼児や親の生活の状況などその社会的背景についても考察してゆく。	林　信二郎（埼玉大学教授）	林　信二郎（埼玉大学教授）

＝ 現代社会の学力（'９９）＝（R）

〔主任講師：駒林　邦男（岩手大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代日本社会における学力をめぐる問題状況について論じ、日本の子どもたちの学力は、どうなっているのか、「日本型」高学力の弱点はどこにあるのか、「日本型」高学力を支える授業の特質は何か、子どもたちの人生にとって学力はどんな意味をもっているか、そもそも、「学力」とは何か、いま、どのような学力観、授業が求められているか ーこれらの論点について、具体的な例をあげて講義をしたい。なお、1990年代後半の教育改革論議における学力問題についても論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「学校化・情報化・消費化」社会の中の子どもたち	講義の方針と概略を説明する。現代日本の子どもをめぐる社会を「学校化・情報化・消費化社会」状況ととらえ、戦前から1960年頃までの子どもの生活（家庭・地域・学校の中の生活）と比較する。	駒林　邦男（岩手大学名誉教授）	駒林　邦男（岩手大学名誉教授）
2	学力をめぐる社会状況	過熱する学力競争の社会的背景と過熱化の経緯について、具体的な例をあげながら述べ、学力競争に子どもたちを向かわせる親の心理についても考えていく。	同　上	同　上
3	「学校からの逃走」と、「学（校）歴信仰」	1970年代以降の「教育荒廃」、「子どもたちの学校からの逃走」という事態に対する臨時教育審議会、1990年代後半の中央教育審議会などの対応を取り上げるとともに、社会の「学（校）歴信仰」をめぐる問題について論じる。	同　上	同　上
4	学力観概史	1872年は「学事奨励に関する被抑出書」から今日に至るまでの学力観の変遷を、明治以来の教育理念の変化と関連させながら論じる。	同　上	同　上
5	「新しい学力観」、その問題点	「新学力観」、特に「関心・意欲・態度」の重視について述べ、3点にわたって、「新学力観」の問題点を指摘する。	同　上	同　上
6	学校知、学校知地学力	普通「学力」と呼ばれているのは「学校知学力」である。「学校知」とは何かを明らかにすることによって、社会的通年としての学力の「制度化・公定化部分」の基本的性質（基礎可能性、規範性）について論じる。	同　上	同　上
7	「日本型高学力」と、それを支える授業の特質	国際的学力調査（ＩＥＡ）、文部省学力調査のデータによって、日本の子どもの学力の高さを示す。この高水準を支える授業は、知識注入型授業であることを、放送担当者が行った調査結果に基づいて具体的に説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「日本型高学力」の問題点	学力の地域差・階層差、断片的知識の量とそれらの知識の意味的関連についての理解の質と著しい跛行、理解のドロップアウト学力の「剥楽」、子どもたちの「勉強・学力観」について論じる。	駒林　邦男	駒林　邦男
9	伝統的構造の一斉授業	高学力を支えてきた「伝統的構造」の一斉授業とはどんな授業かを、評価の特徴、学びの組織化の特質、一斉授業と学びの個別性との構造的摩擦について説明する。	同　上	同　上
10	学校化された学び特異性	具体的生活の中での学びとの対比によって、学校知の学び（「学校化された学び」）の人工性・迂回性を浮かびあがらせる。	同　上	同　上
11	学校知学力の特性	「学校知学力」の基本特性が「非・ヴァナキュラー性」であること、すなわち受験手段性・依存性、「学校課題」性であることについて論じる。	同　上	同　上
12	隠れたカリキュラム、「日常知」	「もう一つの学力」としての「隠れたカリキュラム」を教育学的に定義し、学校知学力の対極にある「日常知」について、さまざまな角度から論じる。	同　上	同　上
13	子どもにとっての学校・学び・学力（一）	具体的データを使って、子どもの授業実感について探り、「学びの疎外」状況の拡がりについて述べる。	同　上	同　上
14	子どもにとっての学校・学び・学力（二）	高校生の学びの現状 － 学校離れ、学力離れ観について紹介し、また、高校生の否定的自己認識（自己過少評価）について述べる。	同　上	同　上
15	教育「改革」と昏迷の中の学力問題	14回の講義を整理する。「まとめ」として、現在の教育改革の動向との関係の中で、学力問題について論じる。	同　上	同　上

＝ 教育の政治経済学（'００）＝（ＴＶ）

〔 主任講師：金子 元久 （東京大学教授）〕
〔 主任講師：小林 雅之 （東京大学助教授）〕

全体のねらい

教育を経済現象との関連で捉えることによって、教育システムの構造や機能を理解することを目的とする。「教育は経済・社会およびそれらの変化とどのような関係にあるか」ということをマクロに把握することが最大のねらいである。このため、講義全体を、教育と社会・経済発展、経済現象としての教育、しごとと教育、教育の政治経済学の4つのトピックに分けて説明する。特に、現在の日本の学校教育、とりわけ高等教育を理解することが目的であるが、そのために歴史比較や国際比較も行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育と経済を見る眼	・教育と経済・社会の関わりについて、簡単な図式をもとに解説する。教育がなければ社会は成り立たない、逆に社会がなければ教育は成り立たない、という関係を説明する。 ・この科目を通じて、現代社会と教育の接点のどこが問題か、学生に考えてもらいたい問題とアプローチの方法を説明する。 ・各回の内容の簡単な紹介をする。	金子 元久（東京大学教授） 小林 雅之（東京大学助教授）	金子 元久（東京大学教授） 小林 雅之（東京大学助教授）
2	教育と社会・経済発展 (1) ～教育と社会発展の歴史～	・教育と社会システムの関連をとらえるマクロな図式を提示する。 ・中世から近代、現代にいたる教育システムの発展を説明する。 ・その結果生じた現代の教育システムの特徴や問題点を説明する。 ・生涯学習など現代の教育システムの変化への動きとその背景を概説する。	小林 雅之	小林 雅之
3	教育と社会・経済発展 (2) ～近代日本の教育と社会～	・近代以前の教育、特に江戸時代の教育の特徴を簡単に説明する。 ・これと対比することで明治の教育改革の考え方とそれによって生じた教育システムの拡大を解説する。 ・社会的選抜と教育的選抜の結びつきによる学歴社会システムの成立と発展を概説し、その戦後への遺産についてふれる。	同 上	同 上
4	教育と社会・経済発展 (3) ～世界の教育と社会～	・社会経済発展と教育の関連を、世界各国について比較する。ＧＮＰと就学率の関連などを図で説明する。 ・発展途上国がかかえる問題点を、国際会議などの報告書をもとに紹介する。 ・途上国の例をとりあげ紹介する。（資料映像、ロケ）	金子 元久	金子 元久
5	経済現象としての教育 (1) ～教育と「市場」メカニズム～	・教育を経済的な現象として捉える見方を、「教育機会市場」と「労働市場」の2つの市場モデルをもとに説明する。 ・教育機会市場の構造と変化を具体的に説明する。 ・学卒労働市場の構造と変化を具体的に説明する。 ・２つの市場の関連を説明する。	同 上	同 上
6	経済現象としての教育 (2) ～社会的投資としての教育～	・教育を社会的投資と見る見方を説明する。識字率と就学率や近代化との関連などを例にする。（映像） ・経済発展と教育との関連を、人的能力政策を例に説明する。 ・経済学理論として人的資本論の登場の背景を説明する。（映像、または写真） ・人的資本論の骨格をわかりやすく説明する。	同 上	同 上
7	経済現象としての教育 (3) ～個人的投資としての教育～	・人々の進学行動を人的資本論の立場から経済学的に説明する。（映像、または写真） ・個人的な投資に対する利益の算出方法を具体的に提示し、収益率により進学行動を説明できることを具体的に示す。 ・教育だけでなく、人間行動の理論としての人的資本論について簡単に紹介する。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	しごとと教育(1) ～産業・職業の変動と教育～	・職業と教育の関連をマクロに捉え、具体的なデータに基づいて、両者の関連を説明する。 特に戦後日本について、分析した結果を図やグラフでわかりやすく提示する。 ・学歴獲得と社会移動の関係について機能主義的な一般モデルを提示する。（映像）	小林　雅之	小林　雅之
9	しごとと教育(2) ～学歴と就職～	・特に、日本では教育と職業が密接な関係を持たない理由を説明する。 ・職場で要求される知識や技術と学校教育の対応などミクロな教育と職業の対応について説明する。 ・人的資本論に批判的な経済学的・社会学的理論による教育と職業の対応関係の捉え方を紹介する。 ・日本の終身雇用制と内部労働市場化による学卒一斉採用方式について説明する。（映像）	同　上	同　上
10	しごとと教育(3) ～女性の職業と教育～	・女子の労働参加と高学歴化との関連を捉える見方を紹介する。 ・女性と職業の関連について、日米の相違を比較する。（映像） ・今日の女性と職業の問題点と教育の関連を論ずる。	同　上	同　上
11	教育問題の政治経済学（1） ～戦後日本の教育～	・戦後日本における教育の量的拡大を紹介する。それに対する政策的課題を提示する。 ・高度成長のための手段としての教育と教育需要の急激な拡大の関連を説明する。 ・教育の拡大とその歪みの増大、社会問題化した教育の例をあげる。 ・それに対する教育政策として、自由化、多様化、個性化など国際社会の中での社会資本としての教育のありかたを説明する。	金子　元之	金子　元之
12	教育問題の政治経済学（2） ～教育と社会階層～	・教育と社会階層の関連、それをむすぶものとしての社会学的、経済学的な要因に関する研究を紹介する。 ・教育の機会均等に関する様々な議論と問題点を紹介する。 ・現代日本における教育の機会均等を具体的に評価する。 ・教育の機会均等にむけた奨学金や授業料などの政策を紹介する。	同　上	同　上
13	教育問題の政治経済学（3） ～教育における政府の役割～	・教育における政府の役割と市場メカニズムの関連について、様々な理論を紹介する。 ・新自由主義の思想など、政府の教育への介入が必ずしも自明でないことを説明する。 ・教育制度のコントロールと政府の関連、その問題点を説明する。 ・政府の教育支出について、日本の特徴を国際比較によって具体的に解説する。 ・高等教育への政府補助を例に、政府と教育に関する現在の問題点を解説する。	同　上	同　上
14	教育問題の政治経済学（4） ～教育改革の動向～	・臨時教育審議会や大学審議会、中央教育審議会などの議論をもとに、教育改革の方向を解説する。 ・中等教育の改革について、業者テストの廃止や総合制などの動きを紹介する。（映像、ロケ） ・高等教育の改革について、教育改革などの動向を紹介する。（映像）	同　上	同　上
15	日本の教育と社会の課題	・教育改革とその問題点について総括的に論じる。 ・世界の教育改革の動向と日本の改革を比較する。 ・教育の生産的機能と選抜配分機能という観点から、教育と経済・社会の関連をまとめる。	同　上	同　上

＝ 子どもと若者の文化（’０１）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 本田　和子（聖学院大学教授）〕

全体のねらい

変化のスピードが世代交替の速度を上回るとき、社会には世代間の葛藤や混乱が生じると言われる。こうした現状を踏まえて、若い世代の文化を理解し、新たな関係を構築することが、本講義のねらいである。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化のテクストとしての子どもと若者	・文化をどう捉えるか　・子どもと若者の文化は何を語るか	本田　和子（聖学院大学教授）	本田　和子（聖学院大学教授）
2	活字と映像（その１）	・活字文化の近代	同　上	同　上
3	活字と映像（その２）	・映像の跳梁と世代葛藤	同　上	同　上
4	音楽する世代	・変貌する音楽環境	同　上	同　上
5	演劇とパフォーマンス（その１）	・演技する世代	同　上	同　上
6	演劇とパフォーマンス（その２）	・演じる遊びとその快感	同　上	同　上
7	身体文化と子どもと若者（その１）	・近代化と身体への関心	清水　諭（筑波大学講師）	清水　諭（筑波大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	身体文化と子どもと若者（その2）	・遊び・スポーツ・イベント	清水　諭	清水　諭
9	ものの文化史（その1）	・おもちゃ革命と子どもたちの現在	本田　和子	本田　和子
10	ものの文化史（その2）	・変化する暮らしと子どもと若者	同　上	同　上
11	電脳時代の遊びと文化（その1）	・激変するコミュニケーション環境と人間の遊び	西村　清和（埼玉大学教授）	西村　清和（埼玉大学教授）
12	電脳時代の遊びと文化（その2）	・機器の発達と遊びの変貌	同　上	同　上
13	パーソナル・コミュニケーション	・コミュニケーション状況の変化と子ども・若者の生活	本田　和子	本田　和子
14	異文化体験と他者認識	・海外旅行とボランティア活動　・伝統の発見と回帰	同　上	同　上
15	現代文化と子どもと若者	・少子化社会の光と影　・若い世代に何を期待するか	同　上	同　上

＝ 家庭・学校と地域社会（’００）＝（ＴＶ）
－地域教育社会学－

〔主任講師：岡崎　友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

人間の成長・発達といった社会的な作用（教育）を中心的に担う学校と家庭そして人間の共同生活の場面としての「地域社会」との関係を、生涯学習・教育の視点から明らかにする。特に学校・家庭が地域の諸組織・機関との連携協力により、どのような形で地域社会形成の担い手（主体）を生み出しているかについて、地域の教育を社会学の手法を用いて研究してきた「地域教育社会学」の研究成果をもとに考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域社会の変動と教育（導入）	第二次世界大戦後の我が国の地域社会の変動と教育の関係について、地域開発政策の展開過程に即して、その特徴と教育上の課題を提示する。 教育環境としての地域と「家庭・学校」との関係について、研究上の枠組みを提示し、また具体的な事例を通して全体の構成を紹介する。	岡崎　友典（放送大学助教授）	岡崎　友典（放送大学助教授）
2	家族周期と教育の課題－ライフステージ別学習－	ライフスタイルが大きく変容する我が国の家族の生活を、家族類型別にライフステージに即した学習課題を、家族周期と個人のライフコースに視点から考察する。	同　上	同　上
3	家庭の福祉と教育の役割－高齢社会の家族－	家族のもつ機能について、福祉と教育の視点から明らかにする。とくに児童と高齢者にとって、家族が果たす役割について具体的な場面に即して考察する。	同　上	同　上
4	家族・親子関係と世代の交代 －地域間・世代間の交流－	家族規模の縮小と形態の変化に伴い、家庭のもつ養育・教育機能に変化が見られる。次世代を育てるために地域社会が果たす役割について、山村留学の実践と郷土芸能の伝承形態の事例を通して検討する。	同　上	同　上
5	学校の統合・新設と学区－開かれた学校と地域－	近代の公教育の学校の成立と発展の歴史をたどるとともに、人口の分布変動に伴う学校の統合と新設の問題を通して、地域社会にとって学校が果たす役割について考察する。	同　上	同　上
6	学校と地域社会の連携・協力－地域教育の創造－	学校教育の目標を達成するための教育実践に、地域がいかなる役割を果たせるか、また地域住民の生活をより豊かにするために、子どもだけでなく大人に対して学校が担える役割は何かについて、連携・協力といった視点から明らかにする。	同　上	同　上
7	ＰＴＡと地域住民組織－大人の教育責任－	教職員と保護者でによって組織されるＰＴＡを、子どもを媒介に成立する成人の学習組織と捉え、さらに保護者が地域社会の中堅世代として地域社会形成に主要な役割を担うといった視点から、大人の教育責任について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教育内容と地域社会～学校の再生～	急激に変動する社会、また寿命の延長により、人々の生涯にとって学校の果たす役割・意味は多様に変化している。義務教育を含め生涯学習に学校が果たす役割、とくに教育内容について、学校の再生といった角度から検討する。	岡崎　友典	岡崎　友典
9	人材の養成と移動～職能形態の過程～	社会人としての能力とくに職業人としての能力（職能）形成が、学校教育を土台としてどのような過程を経てなされるについて、義務教育学校終了後の個人のライフコースに沿って具体的な形態・内容について検討する。	同　上	同　上
10	地域社会の再編と新旧住民の交流（1）	急激な人口の分布変動にともなって、地域住民の構成が大きく変化している。地域社会のもつ人間形成機能（教育）は、住民の人間関係を基盤として発揮されるといった視点から、その（1）では大都市の伝統的な祭事行事を事例に住民の交流・融和がどのような形で図られているかについて考察する。	同　上	同　上
11	地域社会の再編と新旧住民の交流（2）	その（1）の祭事行事が新規来住者が増大するなかで変容して行く過程、また地域住民組織の町会・自治会の果たす役割について、新たなコミュニティの創造といった視点から現代的課題を探る。	同　上	同　上
12	地域社会の活性化と教育事業	地域社会がその社会的・自然的条件を生かして「自治体」としての活性化を目指して、全国各地で貴重な実践がなされている。都市と農村の交流事業が、地域社会の教育機能を最大限に利用して行なわれている事例を分析する。とくに定住人口と交流人口を確保することにより、地域を活性化させるうえで、教育の果たす役割について検討する。	同　上	同　上
13	地域文化の創造と継承(1)～文化の中心としての地域～	地域社会の人々の生活文化がどのような形で創造されまた継承されるかを、二回に分けて考察する。その(1)では生活文化の概念を明示し、地方自治体レベルで地域文化を創造・継承させるためにどのような施策・態勢が考えられるか、伝統工芸をの事例を通して検討する。	同　上	同　上
14	地域文化の創造と継承(2)～地域定住と文化活動～	その(2)では、地域の「産業」と「文学」が地域文化とどのように経過をたどって形成されてきたかについて、家具製造業と文学記念館の事例を通して検討する。	同　上	同　上
15	学習社会の成立と教育の課題～まとめ～	全体のまとめ。現代社会を学習社会といった社会類型として捉えるとき、地域社会でなされる教育がどのような形態をとるかについて、各回で提示した市町村レベルでの事例を要約し、今後の研究上の課題を提起する。	同　上	同　上

＝ 国際化と教育（’９９）＝（R）

〔主任講師：佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

21世紀は、トランスナショナルという国境をこえた人の動きが盛んになり、否応なく異文化との共生を迫るようになる。教育も例外ではなくトランスナショナルな動きに対応し、異なった文化をもつ人との共生が大きな課題になろう。国際化の進展により異文化共生という新しい課題が提起され、そのための教育をどのように構想するかが問われるようになっている。それは、19世紀以降前提にしてきた国民教育という枠組みから、「地球人」といった普遍的な価値や意義をもつ教育への転換を迫っている。本講座は、こうした視点から国際化に伴い必然化する日本の異文化間教育にかかわる諸問題について考察することを課題にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際化社会における教育	近年、「トランスナショナル」な動きが急速に進行している。こうした状況の中で、複数の文化間にまたがる教育現象が日常的におこっている。複数の文化の狭間で生じる教育を異文化間教育というが、本章では、この異文化間教育について概説する。ついで、その方法論や研究課題について考察する。	佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）
2	日本の教育の国際化	本章では、日本の教育改革を国際化という視点から跡づける。特に、異文化間にまたがる教育に対して、国と地方自治体がどのような施策を展開してきたかを探るとともに、その問題点と今後の課題について考察する。	同　上	同　上
3	日本における異文化間教育の進展	本章では、日本の異文化間接触の現状を概観し、その多様性について明らかにする。そして、異文化接触、異文化適応をとらえる枠組み、文化をとらえる視点について考察する。	同　上	同　上
4	海外子女教育	国際化の進展とともに、海外で育つ日本の子どもが増えている。この子どもたちは海外子女とよばれるが、その就学形態は日本人学校と現地校に分けられる。本章では、海外で生活する子どもの異文化接触、異文化適応の特質を就学形態別に考察する。	同　上	同　上
5	帰国子女教育	本章では、帰国子女の実態と帰国子女教育の政策、実践の推移を考察する。ついで、帰国子女の自文化復帰について学校文化との関連で検討し、その問題点を明らかにする。そして帰国子女教育の今後の課題を展望する。	同　上	同　上
6	在日外国人子女教育	本章では、最近、急増している外国籍の子どもをとり上げる。まず、外国籍の子どもの異文化適応の特質について考察する。ついで、外国人の子どもの教育を異文化共生という視点から考察し、その課題について明らかにする。	同　上	同　上
7	外国人留学生	本章では、急激な増加を続けている外国人留学生をとり上げる。留学生が日本で直面している問題点を明らかにする。そして、留学生の異文化適応に焦点をあて、異文化適応を支援するための様々な試みについて考察していく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	在日外国人学校・国際学校	本章では、日本にある外国人学校、国際学校をとり上げる。日本に在留する外国人のための学校は、特定国の子どもを対象にした外国人学校と、どの国の子どもにも門戸を開放している多国籍の子どもからなる国際学校に分けられる。それぞれの実態と問題点を明らかにするとともに、日本の教育制度との関連で、今後の課題について考察する。	佐藤　郡衛	佐藤　郡衛
9	異文化間教育におけるアイデンティティ	異文化間教育で重要なテーマの一つにアイデンティティの問題がある。本章では、アイデンティティをめぐるこれまでの研究を概観する。社会的アイデンティティ、文化的アイデンティティの形成、そして、関係性としてのアイデンティティの形成というこれまでの研究の動向について考察する。	同　上	同　上
10	異文化間コミュニケーション	異文化間コミュニケーションは、異文化への適応過程や異文化間教育における二文化の相互作用の過程の中心的テーマである。本章では、異文化適応スキルの習得におけるコミュニケーションの役割、異文化間コミュニケーションにおけるステレオタイプ化の問題などについて考察する。	同　上	同　上
11	異文化接触と言語発達	本章では、異文化接触と言語について取り上げる。異文化間教育では、第二言語の習得が大きな課題になるが、その教育の現状と課題について考察する。特に、日本の外国人子女を対象にした言語教育の取り組みについて具体的に検討する。	同　上	同　上
12	国際理解教室	本章では、国際理解教育の日本における発展の軌跡を跡づける。日本の国際理解教育は、多様化の道を歩んできたが、1990年代にはいり統合化の動きが出ている。そうした動向について明らかにするとともに、今後の国際理解教育の課題について展望する。	同　上	同　上
13	教育における国際交流	国際化の進展は、国際交流活動を活発化させる。本章では、高等学校を中心とした教育国際交流活動、学校の国際交流活動、教員の国際交流、そして地域における国際教育交流をとり上げ、現状と問題点、そして今後の課題について考察する。	同　上	同　上
14	グローバルな教育への取り組み	本章では、グローバルな教育の取り組みとして、開発途上国への教育援助・協力をとり上げる。まず、教育援助・協力の歩みを概観する。ついで、文化という枠組みから教育援助・協力について考察する。そして、異文化間教育という視点から教育援助・協力について考察する。	同　上	同　上
15	国際化教育の課題 － 日本の異文化間教育の展望 －	本章では、これまでの講義のまとめとして、国際化と教育との関連をどのようにして把握するかという研究上の課題について考察する。異文化間教育研究の方向性、今後の研究の進め方、そして、実践のあり方について明らかにする。	同　上	同　上

＝ メディアと教育（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：白鳥 元雄（聖徳大学教授）〕
〔主任講師：高桑 康雄（名古屋大学名誉教授）〕

全体のねらい

教育は、教える者と学ぶ者相互のコミュニケーション過程である。教育の場面で使われるメディア － 基幹的媒体である音声言語を初め、文字・活字・映画・電波・コンピュータなど、それぞれのメディアが産みだされた歴史的・社会的文脈と教育との関わりを考察し、現在の問題としてメディアの受容と活用の方法を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報化とメディア	・オリエンテーションとして、1970年代以降の社会の急激な情報化 － 情報量の巨大化とメディア技術の高度化・と多様化による情報の質の変化 － について考察する。 ・教育とメディアの関係をデールの「経験の円錐」とその展開によって捉える。	高桑 康雄（名古屋大学名誉教授） 白鳥 元雄（聖徳大学教授）	高桑 康雄（名古屋大学名誉教授） 白鳥 元雄（聖徳大学教授）
2	「言語」というメディア	・生物進化の歴史の中で獲得されたヒトHomo sapiensの基幹的なコミュニケーション・メディアとしての音声言語の特性を考察し、特に、ことばを「聞く」という行動を分析してメッセージの受容に何が必要かを考える。	遠藤 榮（元帝塚山学院大学助教授）	遠藤 榮（元帝塚山学院大学助教授） 白鳥元雄
3	文字と学校	・文字の誕生は、文明にとって画期的な発明であった。ヒトの営為が時間と空間を超えて伝達・蓄積され新しい世界が開かれた。視覚メディアである文字の特性を考察する。 ・また文字の誕生は、その技術に習熟させるための訓練機関 － 「学校」の誕生を促した。	同上	同上
4	グーテンベルク革命	・文字の文化の象徴としての「図書館」、そして12世紀から続々誕生する「大学」。その時代的雰囲気の中でグーテンベルクの活版印刷術が発明される。後に F. ベーコンがいうように、それは火薬・羅針盤と並んで、全世界の外観と状況を一変させた。	白鳥 元雄	白鳥 元雄
5	教科書と体験	・コメニウスの「世界図絵」の特徴と意義を教育の大衆化との関係で捉える。 ・日本の教科書の変遷を学校教育の思想との関係でたどる。 ・直観教授の伝統と直接経験を重視する教育思潮を考察する。	高桑 康雄	高桑 康雄
6	掛け図と黒板 － 教育の大衆化のなかで	・教育のメディアのひとつとして学校の建築様式と施設について開智学校を例に考察する。 ・近代学校の特徴的な方法である一斉教授のメディアとして重要な黒板の利用をみる。 ・一斉教授に効果的な視覚的メディアである掛け図を考える。	同上	同上
7	新聞	・明治期、日本の新聞 － 特に「小新聞」は漢字にルビをふることによって、文字に弱かった階層にまで市場を広げ、同時に人々の識字力を高めた。新聞は教育を目指したメディアではないが、「現在」を伝える強力なメディアとして、今も教育の場で教材性をもつ。	白鳥 元雄	白鳥 元雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	映画はなにをもたらしたか？	・映画の発明とわが国への導入の経過をふりかえる。 ・初期の映画への教育界の対応の否定的な立場と肯定的な立場を解説する。 ・積極的な映画への取り組みとして、成城学園の事例を紹介する。	高柴　康雄	高柴　康雄
9	ラジオとテレビ	・ラジオの発明と教育への活用 － アメリカの事例から考察する。 ・わが国でのラジオ放送にみられる社会教育のメディアとしての応用を歴史的に跡づける。 ・ラジオからＴＶへ － 「テレビ学校放送」の発展と学校教育の改革との関係について考える。	高柴　康雄 遠藤　榮	高柴　康雄 遠藤　榮
10	テレビと子ども文化	・1960年代に入ってＴＶは急速に普及した。何のスクリーニングも経ずに子どもの生活圏に入ってくるＴＶはさまざまな影響を与える。20世紀後半子ども文化の中心的存在となったＴＶとその周辺のビデオやＴＶゲームなどを含め、その影響力と教育力を検証する。	白鳥　元雄	白鳥　元雄
11	博物館再発見	・資料（メディア）の集積と展示による博物館の教育活動を実例により考察する。 ・館内・館外でのイベントへの発展を紹介する。 ・博物館の新しい展開 － 「見る博物館」から「さわる・試す博物館」「バーチャル・ミュージアム」へ － を紹介する。	高柴　康雄	高柴　康雄
12	コンピュータの登場	・戦後間もなくコンピュータが発明され、単なる自動計算機械から情報処理機器へ、さらに人間の思考をシミュレーションしたり、機械を制御したりするようになる。ここでは、コンピュータのもつ本質的な仕組み、メディアとしての発展・変容について紹介する。	永野　和男（聖心女子大学教授）	永野　和男（聖心女子大学教授）
13	学習環境としてのコンピュータ	・コンピュータの導入は、教育現場に大きな変革の衝撃を与えている。教師の教材提示だけでなく、子ども自身が道具としてコンピュータを使い、情報活用能力を高める実践も行われている。学習の場でのコンピュータの役割を、実践も紹介しながら考察する。	同　上	同　上
14	情報ネットワークと教育	・インターネットの普及によって、コンピュータはコミュニケーションの窓口としての機能が期待されている。時間と空間を超えたコミュニケーションは教育の構造を大きく変える。情報ネットワークが教育にどのような変革をもたらすのか、事例を紹介し考察する。	同　上	同　上
15	新しいリテラシー	鼎談 ・情報社会に求められる「リテラシー」とは何かを考察する。 ・コンピュータ・リテラシーの必要条件を考える。 ・映像を読み解く力、批判的読解と自己表現の力をどのように育てるかを検討する。	高柴　康雄 白鳥　元雄 永野　和男	高柴　康雄 白鳥　元雄 永野　和男

＝ 障害児教育論 （'０２）＝（R）

〔主任講師：大南 英明 （帝京大学教授）〕
〔主任講師：緒方 明子 （明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

我が国の特殊教育（障害児教育）について、制度、歴史、教育の実際、目指すもの等を知的障害教育を中心に解説、説明する。障害児者の社会参加・自立を支援し、共生の考えを十分に身に付けるようにする。そのため、障害児及びその教育に対する理解と認識を深めるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	我が国の学校教育制度における特殊教育	我が国の特殊教育（障害児教育）は、盲学校、聾学校、養護学校及び小学校、中学校に設置されている特殊学級、通級による指導により行われている。特殊教育の制度、現状等について解説する。	大南 英明（帝京大学教授）	大南 英明（帝京大学教授）
2	知的障害教育の歴史	1945年以降の知的障害教育を中心に紹介する。知的障害教育は、特殊学級における教育からスタートしている。1979年（昭和54年）養護学校教育の義務制の実施前後より、養護学校における教育、とくに高等部における教育が充実されてきている。	同上	同上
3	知的障害教育が目指しているもの	国際障害者年（1981）前後より障害者の完全参加と平等が、強く叫ばれ、障害者の社会参加・自立に向けた様々な取り組みが行われている。知的障害教育においては、一人一人の児童生徒が、「生きる力」を身に付けることを長年にわたり目指している。	同上	同上
4	障害児の理解Ⅰ	教育課程を編成し、指導計画を作成し、授業を展開するには、障害のある児童生徒を正しく理解することが大切である。 児童生徒と相対しながら、児童生徒理解を進める観点、方法などについて説明する。	緒方 明子（明治学院大学助教授）	緒方 明子（明治学院大学助教授）
5	障害児の理解Ⅱ	障害のない児童生徒と障害のある児童生徒とを理解する観点、内容、方法等について、共通点、障害のある児童生徒を理解するための配慮などについて、具体例をあげながら説明する。	同上	同上
6	障害児の理解Ⅲ	知能検査、発達検査、心理的アセスメントにより得た情報、資料を障害児の理解にどのように活用し、授業、具体的な指導、支援にいかしていくか等について説明する。	同上	同上
7	個別の指導計画の作成Ⅰ	海外からの情報等により、我が国においても個別の指導計画について関心が高まっている。盲学校、聾学校及び養護学校の学習指導要領においては、重複障害児の指導、自立活動の指導について、個別の指導計画による指導を求めている。その意義、ねらいを解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	個別の指導計画の作成Ⅱ	個別の指導計画を作成し、指導することは必ずしも１対１の指導だけを意味するものではない。指導の個別化と集団での指導との関係についても説明する。	緒方　明子	緒方　明子
9	交流教育	障害のある児童生徒との交流は、障害のない児童生徒が、障害のある児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深める絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場である。	同上	同上
10	養護学校における教育Ⅰ	知的障害養護学校の教育の実際を紹介しながら、教育課程編成の基本的な考え方、指導計画の作成等について説明する。 教材・教具の開発、工夫、指導体制等についてもふれる。	大南　英明	大南　英明
11	養護学校における教育Ⅱ	知的障害養護学校高等部の教育について、具体例を紹介する。 職業教育、進路指導（進路支援）等、学校と地域社会、関係機関との連携について説明する。	同上	同上
12	特殊学級における教育Ⅰ	知的障害特殊学級の教育の実際を紹介し、教育課程の編成、指導計画の作成、通常の学級との交流、他校の学級との合同学習等について説明する。	同上	同上
13	特殊学級における教育Ⅱ	学校経営における特殊学級の位置づけ、教職員の連携、協力、設置校における「総合的な学習の時間」の活動等について、具体例を紹介しながら説明する。	同上	同上
14	諸外国における知的障害教育	我が国の知的障害教育に影響を及ぼしている海外の知的障害教育の現状を紹介する。	緒方　明子	緒方　明子
15	知的障害教育の今日的課題	教育課程の編成、個別の指導計画の作成、施設・設備、教員の採用・研修、養護学校と特殊学級との連携、協力等、知的障害教育の今日的課題について解説する。	大南　英明	大南　英明

＝ 発達障害児の心と行動（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：太田　昌孝（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

発達障害は人生の早い時期に社会的諸関係のなかで現れ、その原因は脳機能障害にあり、知的障害、言語と学習障害、自閉症、多動症候群等がある。本講座では発達障害を持つ子どもの心と行動を理解するために、発達的観点と学際的観点を基本に置き、心理・生理・病理を解説し、教育的支援の実践的基礎となることをねらった。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発達障害とはなにか	発達障害は人生の早い時期に社会的諸関係のなかで現れ、その原因は脳機能障害にある。知的障害、言語と学習障害は認知機能に、自閉症、多動症候群は行動に基づいて診断される。発達障害の概念、診断、支援についての概論を述べる。	太田　昌孝（東京学芸大学教授）	太田　昌孝（東京学芸大学教授）
2	アセスメント１心と行動の理解	発達障害児の心と行動は、子ども側の要因と環境的要因の相互作用として現れる。子どもの認知発達段階と固有の不均衡さ、それに相応する情緒などの把握の仕方、さらに働きかけとの関連で如何に心と行動を客観的に理解するかについて述べる。	永井　洋子（静岡県立大学教授）	永井　洋子（静岡県立大学教授）
3	アセスメント２心理機能と発達アセスメント	発達アセスメントをおこなう上で，心理機能の測定は不可欠である。知能、言語などの心理機能について、代表的な測定方法について論じる。	小池　敏英（東京学芸大学教授）	小池　敏英（東京学芸大学教授）
4	アセスメント３脳の機能と生理	脳機能は、入力系、情報処理系、出力系に区分される。人の脳機能を無侵襲で評価可能な方法が、近年、種々開発されてきた。脳波、MRIなどの人の脳機能計測について触れ、発達障害に関する所見との関連で論ずる。	同　上	同　上
5	学習理論と発達支援	学習理論は、教育的働きかけの組み立てを考える上で、その枠組みを与えてくれる。学習理論は、行動主義的立場と認知論的立場に大きく分かれるが、障害の程度や内容を考慮した働きかけを行うためには、各理論の主張を理解することが求められる。	同　上	同　上
6	発達障害の早期発見と対応	出生時のマススクリーニングは、精神遅滞の予防に貢献している。発達障害については本態的な医学的治療が可能でないことが多いが、早期発見と早期からの適切な親に対するガイダンスと子ども自身に対する発達援助の意義は大きい。	太田　昌孝	太田　昌孝
7	行動障害の理解と支援	自閉症、多動症候群などは、とりわけ多くの行動障害を持ちやすく、その対処に苦慮することが多い。子どもの認知や情緒の特徴を捉えた上で、人間的な成長を促す中での基本的な対処の考え方、さらに個々の行動障害への直接的な対処法などについて述べる。	永井　洋子	永井　洋子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	知的障害（精神遅滞）児の理解と支援 その１	知的障害（精神遅滞）の定義，診断と分類，原因と病理について説明する。	太田　昌孝	太田　昌孝
9	知的障害の理解と支援 その２	知的障害（精神遅滞）の心理（認知・言語など）と行動について説明する．取り上げる領域は，発達特性，言語，認知．運動，社会性などである。	奥住　秀之（東京学芸大学講師）	奥住　秀之（東京学芸大学講師）
10	重症心身障害児の理解と支援	重症心身障害児は、重度運動障害とともに重度知的障害を伴う。指導に際しては、視覚機能と聴覚機能の他覚的評価が大切である。また、働きかけに対する期待反応を理解し、さらに期待反応を促進する働きかけの中で、コミュニケーション活動を形成することが重要な課題となる。	小池　敏英	小池　敏英
11	自閉症の理解と支援	自閉症は、対人関係の障害、相互的意思伝達の障害、興味や活動範囲の狭さと常同性の３つで診断される。その背後にある特有な認知の歪みと発達段階の観点から、自閉症の状態像と療育目標や課題、留意点など、理解と対応の仕方について述べる。	永井　洋子	永井　洋子
12	注意欠陥/多動性障害（ADHD）の理解と支援	ADHDとは不注意と多動と衝動性の３組の行動症状からなる症候群である。ADHDの特徴，検査と評価について述べ、それにもとづいた働きかけを学際的な観点も含めて述べる。	太田　昌孝	太田　昌孝
13	学習障害の理解と支援	学習障害児は、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなどの特徴を持つ。また、言語性LD、非言語性LD、包括性LD、注意・記憶性LDなどの分類があげられる。ここでは，定義、特徴，教育的配慮などについて述べる。	奥住　秀之	奥住　秀之
14	医学的治療１ 精神医学的状態と薬物療法	発達障害の薬物療法の目的は、①本態的治療の為の薬物、②情緒障害、異常行動の改善を目的にする薬物　③経過で出現しやすい精神医学的状態に対する薬物に分けられる。行動の障害にしばしば使われる向精神薬について主として解説する。	太田　昌孝	太田　昌孝
15	医学的治療２ てんかんと関連する状態	発達障害にはしばしばてんかんが合併する。てんかんとその治療・対処法についての正しい理解は、発達障害児の教育的支援上不可欠である。	小林　繁一（静岡県立子ども病院）	小林　繁一（静岡県立子ども病院）

＝ 障害児教育指導法（'０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：太田　俊己（千葉大学教授）　〕
〔主任講師：宮崎　英憲（東京都立青鳥養護学校校長）〕
〔主任講師：中坪　晃一（植草学園短期大学教授）　〕

全体のねらい
主に知的障害養護学校における教育課程、および指導法について取り上げる。どのような教育課程（ふさわしいカリキュラムや日課）で、どんな指導法（特徴に応じた教育的対応）が行われ、望ましいかを実際的に学び、考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	知的障害教育の教育課程　①	知的障害養護学校、また関連して知的障害特殊学級における教育課程編成の特色と考え方などについて、実際の例を交え解説する。	宮崎　英憲（東京都立青鳥養護学校校長）	宮崎　英憲（東京都立青鳥養護学校校長）
2	知的障害教育の教育課程　②	知的障害養護学校、また関連して知的障害特殊学級における教育課程の編成と指導計画立案などについて、実際の例を交え解説する。	同　上	同　上
3	知的障害の特徴と指導のあり方	知的障害の障害特徴、それにも対応する指導についての考え方、その具体としての実際の生活に即した対応の重要性、教科等の内容に分けずに指導する授業（領域・教科を合わせた指導）などについて解説する。	太田　俊己（千葉大学教授）	太田　俊己（千葉大学教授）
4	生活単元学習　①－特色と指導計画	養護学校や特殊学級を通じ、知的障害教育で広く行われている「合わせた指導」の代表的な指導形態である生活単元学習を取り上げる。その特色および指導計画例などについて述べる。	同　上	同　上
5	生活単元学習　②－実践の方法	生活単元学習に取り組む際の実践方法、および実践上の要点などについて、実践例を紹介しながら説明する。	同　上	同　上
6	作業学習　①－特色と指導計画	知的障害教育の中でも、養護学校中学部・高等部、あるいは中学校特殊学級で一般的に行われている、「合わせた指導」の一つである作業学習を取り上げる。その特色および指導計画例などについて述べる。	中坪　晃一（植草学園短期大学教授）	中坪　晃一（植草学園短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	作業学習 ② －実践の方法	作業学習に取り組む際の実践方法、および実践上の要点などについて、実践例を紹介しながら説明する。	中坪 晃一	中坪 晃一
8	遊びの指導	知的障害教育の中でも養護学校小学部で主に行われる、「合わせた指導」の一つである遊びの指導を取り上げる。ここでは実践例の紹介を含め、その特色および実践方法などについて述べる。	太田 俊己	太田 俊己
9	日常生活の指導	知的障害教育の中で、日常生活習慣への対応も含む、日常生活の指導は「合わせた指導」の一つとして、知的障害養護学校、知的障害特殊学級を通じて広く取り組まれている。ここでは実践例の紹介も含め、その特色および実践方法などについて述べる。	石塚 謙二（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特殊教育調査官）	石塚 謙二（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特殊教育調査官）
10	教科別の指導 ①	知的障害教育の中で、時間を特設して教科の内容を指導する指導形態である、教科別の指導を取り上げる。実践例の紹介も含め、望ましい指導のあり方、指導計画、実践する上での要点などについて解説する。	大南 英明（帝京大学教授）	大南 英明（帝京大学教授）
11	教科別の指導 ②	教科別の指導の実践例を紹介し、知的障害教育で実際に教科別の指導を行う際の実践方法、工夫、教材例、授業づくりなどについて解説する。	同上	同上
12	進路への指導	知的障害の子どもの学齢期ならびに卒業後の進路についての考え方、および進路指導のあり方と実際を取り上げる。入学時の就学指導や職業教育の課題などにもふれる。	宮崎 英憲	宮崎 英憲

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	自閉症への対応	養護学校や特殊学級を含めて広く見受けられ、指導上の課題も大きいとされる自閉症の子どもへの対応を取り上げる。その障害の状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて解説する。	肥後　祥治（独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育部・主任研究員）	肥後　祥治（独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育部・主任研究員）
14	学習障害等への対応	近年、教育現場で話題となっている学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）などの子どもへの対応を取り上げる。これらの状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて解説する。	柘植　雅義（独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育部・研究室長）	柘植　雅義（独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育部・研究室長）
15	重複障害への対応	養護学校を中心にその数が増している重複障害の子どもへの対応について、その障害の状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて解説する。	川住　隆一（独立行政法人国立特殊教育総合研究所重複障害教育部・研究室長）	川住　隆一（独立行政法人国立特殊教育総合研究所重複障害教育部・研究室長）

＝知覚心理学（'01）＝（TV）

〔主任講師：相場　覚（北海道大学名誉教授）〕
〔主任講師：鳥居　修晃（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間における知覚活動は、そのほかのすべて心的活動のもととなる極めて重要な機能といえる。そこには神経生理学的基礎過程から高次の認知的精神過程までを含む複雑な機構が関係し、それらを理解することによって、われわれは人間の精神活動に一層深い洞察を得ることができよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	感覚・知覚・認知	感覚と知覚と認知はともに密接に関連しあっている。これらの間の関係を考察し、それぞれの働きと特徴を概観する。	相場　覚（北海道大学名誉教授） 鳥居　修晃（東京大学名誉教授）	相場　覚（北海道大学名誉教授） 鳥居　修晃（東京大学名誉教授）
2	知覚研究の方法	知覚研究を目的として数多くの研究法が開発されて来た。そのあるものは心理学とおなじ位の歴史を持ち、またあるものは最近になって使われはじめた。それらを解説し、知覚研究の進展との関係をみる。	同上	同上
3	視覚（1） 明るさ・色	視覚のもっとも基本的な属性である明暗の知覚と色彩視について、それらと日常の経験との関連について考察し、またそれらの働きを担うメカニズムに関する最新の理論を解説する。	相場　覚	相場　覚
4	視覚（2） 形・立体視	2次元・3次元的な形の知覚に関する諸現象のうち、図・地の分化、群化、線画の立体視などについて論述する。一方、3次元の具体物などの知覚に関しては、その見え方が視点に依存するか否かという問題を取り上げて考察を加える。	鳥居　修晃	鳥居　修晃
5	視覚（3） 運動視	われわれの視覚的世界は運動する事物に満ちている。またわれわれも動きながら物を見る。したがって運動の知覚はわれわれの生存に欠く事の出来ない機能である。そのメカニズムと生物学的な意義について論ずる。	相場　覚	相場　覚
6	空間知覚	空間知覚に関する研究の流れを跡づけ、近年の代表的な空間知覚理論の一つとして知られるギブソンの「きめの勾配説」について解説を加える。次いで、線画のステレオグラム、ユレシュのランダムドット・ステレオグラムによる両眼立体視の仕組みについて考察し、さらにそれと視野闘争との関連についても言及する。	鳥居　修晃	鳥居　修晃
7	開眼 手術後の視知覚	先天性の視覚障害の人たちが開眼手術を受けた直後、どのような視覚体験をするかという問題を取り上げて論考する。次に、手術後、色・形の視知覚ならびに事物の識別活動がどのような過程を経て増強・形成されていくかという問題を中心に考察を進める。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	聴覚（1） 聴覚の基礎	聴覚の基礎として、音の物理的性質と聴覚の属性との関係について、コンピュータ・グラフィックスを用いて説明する。マスキング実験などを通じて聴覚の基礎的モデルの1つである臨界帯域の概念について概説し、さらに聴覚の動特性について例をあげて紹介する。	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）
9	聴覚（2） 音楽・音声 騒音	音楽の演奏表現に大きく関与する高さ、大きさ、音色の時間的変化についてデモ実験により説明する。また音声の知覚に及ぼす諸要因について合成音声を用いて紹介する。騒音の人間に及ぼす影響について例示し、音環境のアセスメントの重要性について概説する。	難波精一郎	難波精一郎
10	触覚	触覚については、触覚器官の代表であるヒトの手を主題とし、その触情報処理メカニズムについて解説する。まず、触情報を受容する皮膚機械受容単位の種類と機能を述べ、次にそれらの情報から主観的な触感覚がどのように産出されるかに言及する。	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）	宮岡徹（静岡理工科大学助教授）
11	味覚・嗅覚	味やにおいの知覚について、閾値、感覚的強度、味・においの分類に関する学術的知見を学び、特にこれらの感覚に特徴的な快不快と前述の知覚との関係、またそのような快不快が形成される過程やその要因について考える。	斉藤幸子（工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）	斉藤幸子（工業技術院生命工学工業技術研究所研究室長）
12	知覚の脳内機構	最近の脳神経科学の著しい進展により知覚の諸々の側面と密接に結びついた脳内の過程がPETやfMRIより明らかにされつつある。それらの知見とそれらが知覚研究に対してもつ意義を解説する。	相場覚	相場覚
13	時間知覚	時間は普段はあまり意識されない。そして意識されたとしても時と場合によってそれは全く異なって把握される。それらを規定する要因は何か。また時間知覚の生物学的基礎は何か、などについて概観する。	同上	同上
14	知覚の計算理論	計算機の発達にともなって、人間の知覚機能を計算機によって模擬させる試みが多くなされた。それらを概観し、それがわれわれの知覚機能の理解にどのように役立っているかを考察する。	同上	同上
15	知覚研究の応用・感視覚代行	知覚の研究が応用面にどのように活用されているかについて論じる。先天性盲人ないし早期失明者における視覚の障害状況について解説するとともに、それらの人たちに視覚以外の感覚系を通して視覚情報を伝達する試みのうち、歩行ガイドロボット開発の現況について紹介する。	鳥居修晃	鳥居修晃

＝労働と生活の心理学（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：越河　六郎（松蔭女子大学教授）〕
〔主任講師：星　　薫（放送大学助教授）　〕

全体のねらい

人間は、誰でも働くことが要請されており、社会生活は、まさに「働くこと」を中心に展開されているとみてよいであろう。職場の生活がある、家庭の生活、また地域の生活という分類も出来るが、そこには必ず「仕事」が含まれている。

本講義では、労働科学・応用心理学の知見をベースにして、これらの「労働生活」における心的過程を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	応用心理学、労働科学の展開	「働く人間のために真に合理的な労働と生活の条件を求める」。　これが労働科学の目標である。時代的背景をふまえて、応用心理学の領域における問題の所在を提示する。	越河　六郎（松蔭女子大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）	越河　六郎（松蔭女子大学教授） 星　　薫（放送大学助教授）
2	フィールド研究の方法 (1)観察と測定	仕事の場面や生活の状況について考察する、または研究するとき、まず、問題事象の実態を捉えること（情報の収集）が基本である。行動観察の方法、特にタイムスタディ（作業時間研究）の意義と方法を概説する。	同　上	同　上
3	フィールド研究の方法 (2)質問法と検査法	外から見えにくい心の動きを探る方法としての、質問法（面接、質問紙）、評定尺度法および、検査法（性格検査、適性検査）について述べる。ここでは、評定尺度法を中心に考察する。	同　上	同　上
4	職場の環境(1)物理的条件と作業	人間工学の立場から、作業場面の空間的設計・設備、照明、振動，音響等、物理的条件と作業者との関係（効果・影響）について概要を述べる。また、アメニティ（快適性）の評価にもふれる。	神作　博（中京大学教授） 星　　薫	神作　博（中京大学教授） 星　　薫
5	職場の環境(2)社会的側面	採用条件、職階制度、業務量と配置人員数など、人事・組織上の問題を含め、職場環境の社会的な側面とモラールとの関連を考察する。	越河　六郎 星　　薫	越河　六郎 星　　薫
6	労働と休養(1)勤務スケジュール	勤務形態、勤務スケジュール、労働時間の設定と「勤務外の時間」との関係など、生活時間構成の「まともさ」を考える。生活時間の具体的な調査法、余暇の問題も取り上げる。	同　上	同　上
7	労働と休養(2)労働負担の調査	仕事（作業）による心身への負担を調べる方法として、「主観的評価法」を中心に概説し、労働時間と休養時間とのバランスを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	労働生活への適応過程	就職後の適応努力の段階的経過について考察する。大別すると、身体的適応、技能習得といった技術的適応、そして、組織への適応（社会的適応）の問題である。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫
9	障害者の職業適応	職場で働く身体障害者の作業支援システムについて考察する。労働能力の開発、リハビリテーションの問題にもふれる。知的障害者に関しては、「作業の特徴」に関して概説する。	同上	同上
10	年齢と労働能力	個人の年齢段階に伴う作業能力の推移について述べる。また、高齢者人口の増加にもかかわらず、高齢者の労働参入は我が国では進んでいないが、高齢者の就労に必要とされる配慮についても考察する。	神作　博 星　薫	神作　博 星　薫
11	労働と安全	労働に伴う災害・事故の問題を取り上げる。不注意、ミスといった人為的な側面だけでなく、システム上の問題も含めて、職場の安全管理のあり方を考察する。交通安全に関しては、交通心理学の知見を述べる。	同上	同上
12	労働と健康	職場における健康管理のあり方について考察する。現状では、病気・医療を中心とした健康管理であって、いわゆる「健康」の管理ではない。産業心理学の立場から「メンタルヘルス」管理を中心に考察を述べる。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫
13	労働生活の具体像(1)	製造業・農業に携わっている人たちの労働・生活場面を捉え、その職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。製造業については、伝統工芸の継承について述べる。	神作　博 越河　六郎 星　薫	神作　博 越河　六郎 星　薫
14	労働生活の具体像(2)	情報処理（システム設計、管制業務）運転業務に携わっている人たちの労働・生活場面を捉え、職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。	神作　博 星　薫	神作　博 星　薫
15	労働生活の具体像(3)	人間を対象とする、サービス業（客室業務員）、ケアワーク（看護、介護、保育）に携わっている人たちの労働生活場面を捉え、職務特性とライフスタイルとの関連を考察する。	越河　六郎 星　薫	越河　六郎 星　薫

＝ 学習の心理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：今田　寛（関西学院大学長）〕

全体のねらい

われわれは毎日さまざまな行動を行って環境に適応しているが、その殆どが経験を通して学習されたものである。本書では学習の諸現象、その根底にある基本法則、さらにそれらの法則の応用・利用の実際について講ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習とは	われわれは環境に適応するためのいろいろな仕組みをもっている。あるものは生得的なものであるが、多くは生まれてからの経験を通して学習されたものである。学習とは何かを考え、本書で取り上げるテーマを紹介する。	今田　寛（関西学院大学長）	今田　寛（関西学院大学長）
2	初期経験の効果、経験の繰り返しの効果	学習は生まれた直後から始まり、ほぼ生涯つづくものであるが、生後間もない頃の経験はその後の適応過程に特別の意味をもつ。初期学習の重要さについて考え、普通の初期経験の欠如がもたらす不可逆な障害について論ずる。また単なる経験の繰り返しの効果についても論ずる。	同　上	同　上
3	古典的条件づけ	環境内の刺激間の関係の学習の問題として古典的条件づけ、あるいはパブロフ型条件づけについて述べる。また古典的条件づけの基本的諸現象について論じ、それから導き出される法則について講ずる。	同　上	同　上
4	オペラント条件づけ(1)	適応にとって刺激間関係の学習も重要であるが、反応の仕方を変えることによる適応も重要である。反応学習の原型としてソーンダイクの試行錯誤実験に始まるオペラント条件づけの研究と、それから導出される法則について講ずる。	中島　定彦（関西学院大学助教授）	中島　定彦（関西学院大学助教授）
5	オペラント条件づけ(2)	オペラント条件づけにおける三項随伴性について講じる。刺激による行動の制御ならびに行動と強化子の出会いの取り決めである強化スケジュールについて述べる。	同　上	同　上
6	回避と罰	環境の中にはそれへの接近を促す対象（快刺激）と、それからの回避・退却を促す対象（不快刺激）が存在するが、本章では不快刺激から回避したり、それに近づかない行動の学習について論ずる。	今田　寛	今田　寛
7	学習における生物的制約	各種の動物が生まれながらもっている制約条件のために、学習成立のための条件が充たされた場合であっても、どのような刺激間にも、またどのような反応でも学習されるわけではない。このような生物的制約について講ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	条件づけの臨床的応用	学習の諸原理を臨床場面に適用する試みを行動療法、あるいは行動修正法と言うが、本章ではそのような試みのいくつかについて具体的に述べると共に、それを通して学習の基本原理の理解を深める。	久野　能弘（中京大学教授）	久野　能弘（中京大学教授）
9	観察学習	これまでの章では、学習者が学習するべき行動を実際に「なすことによって学習」する場合を問題にした。しかし人は他者の行動を観察することによっても多くのことを学習する。本章はこの観察学習の問題を講ずる。	春木　豊（早稲田大学教授）	春木　豊（早稲田大学教授）
10	記憶の過程	記憶は、学習のみならず人間の行動全般を支える重要な機能である。記憶はいくつかの過程に分割出来るが、まずその区分について解説し、さらに情報を取り込む過程である符号化の働きについて説明する。	浮田　潤（関西学院大学助教授）	浮田　潤（関西学院大学助教授）
11	知識と学習	人間の持つ知識の構造と仕組みについて、現在提唱されているモデルなどを解説する。また外界の情報を理解したり、新しい情報を知識に付け加えたりする過程において、既有の知識がどう関わるかについて説明する。	同上	同上
12	言語の獲得	人間は、生後の比較的短期間の間に急速に言語を獲得する。その過程を概観し、さらにそれを可能にしている要因について解説する。また言語が人間の全般行動にどのように関わっているかについても考える。	同上	同上
13	概念と推理	概念について、いくつかの考え方を紹介した後、概念の学習に関して、概念達成実験を例にとり説明する。また概念について、プロトタイプ、自然概念、概念の階層構造などについて説明する。また概念が用いられる過程としての推理については、機能推論、演繹推論、因果推論、転導推理、仮説推理について論ずる。	嶋崎　恒雄（関西学院大学助教授）	嶋崎　恒雄（関西学院大学助教授）
14	問題解決と学習	問題解決の問題が歴史的にどのように研究されてきたかを、学習理論史との関連で説明する。また問題解決に影響を及ぼす要因について例を挙げて説明する。	同上	同上
15	運動技能の学習	パソコンのキーボードを叩いたり、各種スポーツの技能なども、経験による行動の変化であり、その意味で学習されるものである。本章では効率のよい技能学習の方法や、それを支える理論について論ずる。	今田　寛	今田　寛

＝ 生涯発達心理学（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小嶋　秀夫（京都学園大学教授）〕
〔主任講師：やまだ ようこ（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい
乳幼児期から老年期を含む生涯にわたる人間の心理学的発達の主要な問題を学ぶことにより、生涯発達の視点を理解することを目指す。個体の発達的変化の姿、それにかかわる個体側と環境側の条件間の相互調整的変化を重視する。それぞれの発達の道を辿る違った世代の人々が日常生活の中で形成し展開する対人関係と、その背後にある社会・文化の働きに目を向ける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯発達心理学とは	生涯発達の視点・考え方とその歴史を概観し、全15回への導入を行う。発達的視点そして生涯発達の視点の特徴、年齢的変化への関心をもたらす社会的・文化的諸条件、そして生涯発達心理学の役割とは何かを論じる。	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）
2	生涯発達の心理学的研究の課題と方法	発達心理学研究の中心的問いと、それに答えるための主要な研究方法を説明する。その上で生涯発達を扱おうとする際に生じる問題を提示して、発達研究の結果を理解・解釈・評価するために必要な視点・考え方を提起する。	同　上	同　上
3	人生の出発：発達の基礎としての愛着	子どもは誕生直後から他者との関係の中に生きている。特に親との愛着関係は、人の心身発達の基礎となる。愛着の成立に絡む諸要因およびそれが個人の生涯発達過程に対して持つ意味について親子双方の視点から考える。	遠藤　利彦（九州大学大学院助教授）	遠藤　利彦（九州大学大学院助教授）
4	乳幼児期の認知とことばの発達	乳幼児期のわずか数年の間に子どもは実に多くのことを学習する。そして、その基盤になるのがことばや象徴機能の発達であり、また心というものに対する気づきである。認知能力の発達を中心に、人の心の成り立ちを探る。	同　上	同　上
5	乳幼児期における社会的世界の広がり	子どもは徐々に親以外の様々な他者と関係を深め、またその中で自分の欲求や感情を調節し、他者に対して思いやりを示すことができるようになる。乳幼児期の自己や他者の理解および感情制御や共感性の発達を概観する。	同　上	同　上
6	子ども時代の環境世界	子どもを理解することは、子ども達が生きている環境世界を理解することでもある。子どもの生活が展開する家、となり近所、学校といった生活空間において、世界をとらえる枠組みが形成される過程を見ていく。	南　博文（九州大学大学院教授）	南　博文（九州大学大学院教授）
7	児童期の学びと仲間世界	学習面での概念的思考や仲間との集団関係が重要になる児童期の認知発達と社会的発達を、自己中心性からの脱却、ルールの発生、公平感・道徳性などの観点を含めて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	思春期：子どもからの脱皮と揺れ動く心	思春期への移行に伴う諸問題として、身体成熟と身体意識の変化、親に対する依存と独立の葛藤、親子間の相互調整的変化、中等教育への移行と学校環境への適応、おとなと子どもの世代間の意識のずれ等を解説する。	平石　賢二（名古屋大学大学院助教授）	平石　賢二（名古屋大学大学院助教授）
9	青年期：アイデンティティの探求と社会的関係	青年の自我意識の高まりとアイデンティティ探求のプロセスを中心に扱い、その発達の背景にある認知発達過程、親子関係、同世代の友人関係、教師－生徒関係等が果たしている役割について解説する。	同　上	同　上
10	成人前期：おとなとしての意思決定と親密性	青年期後期から成人前期の発達課題として、時間的展望の発達と進路選択・職業決定のプロセス、異性との親密な関係の形成と性役割観の発達、結婚や子育てなど親密な人間関係をつくる問題について解説する。	同　上	同　上
11	人生なかば：危機と成熟	中年期は、社会的にも家庭的にも責任が大きく、世代間ギャップの矛盾にもさらされ、人生前半から後半への移行期として危機的な時期でもある。中年期の捉え方と人生後半の再編について考える。	やまだようこ（京都大学大学院教授）	やまだようこ（京都大学大学院教授）
12	成人後期：世代を育み伝える	成人後期のテーマとして、生成継承性、心理的成熟、世代間伝達、病や死の看取りの問題をとりあげる。とくにエリクソンの発達理論と人生の物語研究をもとに、次世代への連関としてのライフサイクルを考える。	同　上	同　上
13	中高年期の心理的機能変化をもたらす要因	これまでの研究の成果を踏まえ、中高年期に起こる心理的変化の特徴を把握する。その上で、エイジングの個人差を生む生物学的・環境的要因、そして生活史を含めた個人側の要因を探り、さらに時代的変化にも言及する。	小嶋　秀夫	小嶋　秀夫
14	老年期の生活の諸相	人生を舞台（ステージ）として見ていく立場から、老年期の生活構造に生じる変化と、それが個人の住まい方、ライフ・スタイルや対人世界とどのように関わっているかを、人生移行という側面から考えていく。	南　博文	南　博文
15	生涯発達心理学の課題と未来	高齢化、情報化社会を迎えて、「進歩」概念から脱却し、文化・歴史的分脈のなかでの変化を重視した新たな生涯発達理論と方法論への転換が求められる。人の生き方の多様性と柔軟性を視野に入れて未来を展望する。	やまだようこ	やまだようこ

＝ 発達と学習（’００）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学では、「発達」とは、年齢の変化とともに行動や認識の仕方が変わることであるのに対して、「学習」とは、経験の影響によって行動や認識の仕方が変わることであるというように一応の区別を立てたうえで、それぞれの現象について研究するのが「発達心理学」、「学習心理学」であるとしている。しかし、何も経験しなくても、ある年齢に達すれば一定の行動が現れるということはないし、何歳であっても、適切な経験が与えられれば必ず目指す行動を起こすことができるということもない。「学習」と「発達」はいったいどういう関係にあるのか、どこが違うのかという問題について深く考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習心理学と発達心理学(1)	学習心理学では、学校の教科の学習はほとんど扱わない。動物が芸を覚えるときの学習も、人間の学習も、根本の原理は同一だと考えて、動物（特にネズミ）の学習について研究する。発達心理学は、ビネーが知能検査の作成に際して考えた精神年齢を重視し「何歳になると何ができるか」という問題に関心をもつ。その限りでは、学習心理学と発達心理学の間に関係は少ない。	永野　重史（放送大学教授）	永野　重史（放送大学教授）
2	学習心理学と発達心理学(2)	心理学と文化人類学をくらべると、心理学が極め出て独特の考え方をもっていることがわかる。フランツ・ボアズという人類学者は「（人類学者からみれば）生活の諸条件から独立していて、それから影響を受けないような精神の存在など考えることはできない。実験心理学が初期の段階で不毛であったのは、環境条件の影響を受けないような心が存在すると仮定する理論にもとづいて研究したからである」と言ったが、心理学のこの傾向はその後も続き、ついに、行動主義に走った。	同　上	同　上
3	発達段階（1）	教育の世界では、心身の発達段階を考慮して適切な教育課程を編成し、指導する、ということがいわれる。発達段階という言葉のかわりにレディネス（準備状態）という語が使われたこともあった。例えば文字の読みを教えるためには、学習者が精神年齢10歳半の精神発達の段階に達していなければならないと言われた。だが、1960年の『教育の過程』でブルーナーは、ピアジェの認識発達段階説をもとに、年齢にかかわりなくどんな内容でも指導できるという考えを発表した。	同　上	同　上
4	発達段階（2）	ブルーナーが注目したピアジェの認識発達段階説とはどういうものか。「発達とは精神構造の変化だ」とはどういう意味か。例をあげて説明したうえで、現在では、ピアジェの調査方法がかならずしも適切なものではなく、調査の方法を工夫すれば、幼児の知的能力はかなりすぐれたものであることが判り、ピアジェが年齢を指定して発表した「発達段階説」も大幅に修正しなければならないことがわかってきたことについて述べる。	同　上	同　上
5	発達と教育	「発達段階を考慮して教える」という表現は、年齢とともに自然に発達するのを待って適切な時期に指導するという意味にとられやすい。確かに、精神年齢に合わせて教材を選ぶという方法は、この方針に合う。だが、ワトソンのように年齢に伴う発達を否定して、学習ですべてをつくりあげることができるという学者もいた。ブルーナーのように、認識の構造が変わるのが発達なのだから、どの年齢でも、その子の認識構造に合わせた学習をすると考えることもできる。発達と教育の関係について学説は様々あり、「発達段階を考慮して教える」と言っただけでは、何をしてよいのかがわからない。	同　上	同　上
6	能力はどこに存在するのか(1)	どうして学校はつらい所になるのか。原因のひとつに、能力が増すことが学習だ「能力」をつくる「生産」が教育だという見方がある。この見方に立つと、良い教育をおこなうためには、まず能力の到達目標を決め、どういう教育的体験を用意するかを考え、最後に到達度を評価するという手順が決まる。だが、見聞きし、体験している間に、世界を理解し、人間関係を広げていくのが学習だという考え方もありうる。この考え方をとると、学習も発達も違ったものに見えてくる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	能力はどこに存在するのか(2)	知能検査を発明したビネーは、能力は個人の中にあるのだと考えていた。ピアジェも自然観察とテストの中間型の臨床的質問によって子どもたちのものの考え方を明らかにしようとしたが、質問がヒントとなってしまうことを注意ぶかくさけた。これに対して、ヴィゴツキーは、ヒントによって正しく考えられるのは、そこまで子どもの認識発達が進んでいるためなのだと考え、大人の援助を発達のきっかけだとみた。さらに、丸の絵を描いて計算したり、メモをみて説明することも、その子の理解だと見れば、子どもの能力は、頭の中だけでなく子どもの外にもあるということになる。	永野　重史	永野　重史
8	心理学と個人主義	学問は、客観的で普遍的な理論から成り立っていると考えられることが多いが、実際には学問も文化環境の中で形成される。子どもがうまく発達するか否かの原因を個人（親または子）に求める傾向も、何事にも原因を求める実証主義的探求、西欧の伝統である個人の道徳的責任観、個人としての完成とその結果としてできあがる個人の責任能力の育成こそが育児や教育の第一の目標だとする個人主義の考えなどが発達心理学に大きな影響を及ぼしている。研究の単位が個人としての子どもになるのもその表れ。	同　上	同　上
9	新しい人間観―個人主義を超えて	世の中は孤独な個人が集まっているわけではなくて、世界はどうなっているか、人の心はどのように動くか、どのような責任をもっているかについて共通の理解や信条をもっていることを前提とする「つきあい」の中に自分を置いて生活している。そのような自己を相互作用的自己という。最近の心理学では人間をそのような存在と見る傾向が強い。人は、生まれるとすぐ、自己中心的でなく、社会的であり、世界についての知識は個人の直接体験からよりは、周囲のひとびととの話し合いや代理体験から得ている。そのために、感情・認識・行為はばらばらのものではなく不可分のものとして働くようにできているとみるのが、新しい人間観である。	同　上	同　上
10	発達の学習説	ワトソンは発達などということをもとださなくても、学習の理論を応用するだけで、お好み通りの子どもを育てると宣言した。また、あることを学ぶとその学習がほかのことにも転移（波及）するという考えも出て、転移の可能性についての研究も盛んにおこなわれた。否定的な見解もおおかったが、現状では、学習の転移は認められているのか。それによって「発達」の現象を理解することはできないか。	同　上	同　上
11	学習の発達	学習という変化と発達という変化を区別して、学習心理学と発達心理学をわけているが、学習の仕方がだんだんに洗練されるということ、つまり、学習の発達という現象があるのではないか。それは、どのような変化なのか。	同　上	同　上
12	学習原理の普遍性	学習心理学では、動物の種をこえて、普遍的な学習原理が存在するかのように説くが、ネズミの学習とヒトの学習ははたして同じなのか。違うのではないか。同じようにして、1歳児の学習と10歳児の学習も違うのではないか。違うから、発達の研究が必要になるのではないか。年齢ごとの能力一覧表をつくるのが発達心理学なのではないだろう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	複雑な精神現象の発達	道徳性の発達とか、自我の発達というのは、何が変化することなのか。「道徳性」とか「自我」などというひとまとまりの実体が存在するのか。心理学者は複雑な精神現象の発達を研究する際に、いったい何を調べるのか。	永野重史	永野重史
14	生涯発達	かつては、人生の上り坂の時期の変化をあつかうのが発達研究だった。最近では、生涯発達心理学という言葉が盛んであるが、物忘れがひどくなっても発達すると言えるのか。生物学では以前から、発生の中には部分的退行過程を含めていたし、不可逆的であれば、退化も発生現象とみなしていた。生涯発達心理学はどのような見方をとるのか。小学生と社会人では、与えられている課題が違うのに、能力の優劣をくらべることはできるのか。	同上	同上
15	学習と発達の関係	最終回として、学習と発達とは不可分のものであり、現在では、従来の学習心理学と発達心理学が、どちらも限られた立場から限られた現象を取り扱っていたので、教育に対してもいろいろと有害な提言をおこなってきたことを反省する動きが強いことを説明し、今後の学習研究、発達研究を展望する。	同上	同上

＝ 乳幼児心理学（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

近年、乳幼児期を対象にした研究がますます隆盛になり、生得性をめぐる議論も白熱している。前著『乳幼児心理学』と同様、乳幼児の発達を全般的に扱うという方針のもとに新しい知見が蓄積されつつある発達初期の問題を多角的にとりあげ、この時 期の発達がこれに続く児童期以降の発達にとって重要な意義をもつものであることを理解していただくことをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間発達の可塑性 乳幼児期の発達の重要性	ヒトは生物学的要因を土台に、文化・社会的要因の影響を受けながら「人間化」への歩みを進める。現代の日本には、十分な養育を受けられない環境下で発達遅滞を起こしている子ども、虐待やその逆の過保護により偏った社会・文化的要因に曝されることになり、子どもの心とからだに発達の遅滞がもたらされる事例が多く見られる。子どものその後の発達過程に影響を与えるという点からみると乳幼児期の発達は全生涯のうち最も重要である。しかし、いかに生育環境が劣悪であろうとも、人的環境の改善により子どもは見事に立ち直っていく。乳幼児初期の問題を克服して発達していく子どもの姿は人間発達の可塑性がいかに大きいものであるかを私たちに知らせてくれるのである。	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
2	乳幼児期の認識能	最近の発達心理学は、これまで考えられていたのよりもずっと高い能力を乳児が身に つけていることを明らかにしている。一見、何もわかっていないような乳児だ が、彼 らは自分を取り巻く世界がどのようであるかについての、ごく基礎的な知識や枠組み を持って生まれてくる。そうした知識や枠組みがあるがゆえに、乳児は、自分の周りにいる人やもの、出来事について、驚くほど速く学習することができる のである。ここでは、発達初期の乳児の様々な能力について見てゆく。	江尻　桂子（茨城キリスト教短期大学部講師）	江尻　桂子（茨城キリスト教短期大学部講師）
3	発達初期の気質と行動	いろいろな子どもたちと接してみて驚くのは、いかにひとりひとりの子どもの気質が違っているかということであろう。活発な子どももいれば、のんびりした子どももいる。我々が子どもの行動発達について考える時、その子の気質がどうであるかということも考慮してゆかねばならない。ここでは、気質にはどのようなタイプがあるか、また、気質は、母子関係とどのように関係しているのかといったことを中心に見てゆく。	同　上	同　上
4	情動の機能と発達	情動についての考え方が大きく変わってきた。乳幼児の情動は、文脈的・関係的に理解される。乳幼児は、情動を発達させると同時に、養育者や環境との関わりを通じて、情動制御を発達させる。情動制御は、文化の影響を受ける。最近の研究を中心 に、これらの問題を考察する。	氏家　達夫（名古屋大学教授）	氏家　達夫（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	養育者-子システムと愛着の発達	およそ生後1年間で、養育者と子どもは互いに相手に適応し、子どもは愛着と呼ばれる情緒的絆を発達させる。愛着の発達プロセスには、子どもの特徴や養育者の特 徴、文化的社会的要因が複雑に絡まりあっている。愛着の発達を切り口に、養育者と子どもの相互適応プロセスを跡づける。	氏家 達夫	氏家 達夫
6	世界を捉えるしくみ 象徴機能の発生と認知機能の発達	誕生時から子どもは感覚器官をフル回転させて環境と活発にやり取りしている。人を含めた回りの環境との感覚的運動的なやり取りを通じて子どもは外界についての認識を形成していく。乳児期の終わりには「三項関係」が成立して内面世界が出現し「象徴機能」が発生する。感覚運動的段階から表象の段階で世界や自己を捉える概念が成立し、想像力も発達する。幼児期の終わりには自己を自分の意志で制御できるようになる。また、外界の規則性を直観的に把握する直観的思考段階にいたる。	内田 伸子	内田 伸子
7	ことばの生まれる道筋 言語機能の発達	言語は象徴機能の成立を基盤にして外界認識の手段として成立する。ことば（発話行為）が認識過程に深くかかわるようになるのとほぼ同時に、人とやり取りする手段として人との関係を作る働きをも担うようになる。ことばは人と社会的やり取りを通して、意志や情動、認識と絡み合い、表象（イメージ）の形成や認識を深める手段となり幼児期の終わりまでには、自己や世界を表現するためのディスコース（談話）が成立するようになる。	内田 伸子	内田 伸子
8	対人関係-家族と地域社会の影響	赤ちゃんの誕生にともない夫婦という２者関係から３者関係へと変化する。このことは、夫婦関係に加えて父子関係と母子関係の新たな関係のシステムができることを意味する。また、下に弟や妹が生まれるときょうだい関係も成立する。そして、この家族のメンバーの発達にともない相互の役割や関係のシステムそれ自体も変化する。乳幼児にとって家族が最も重要な影響要因であることは異論の余地がないが、家族の外の人間関係の影響力も大きく、それは私たちが考えるよりも早い時期から認められている。さらに、両親の子育てに対する地域社会の子育て支援のネットワークやサポートシステムの影響についても考えてみたい。	臼井 博（北海道教育大学教授）	臼井 博（北海道教育大学教授）
9	自他についての理解の発達	自他についての理解の発達について、乳児期終わり頃からの意図の理解や共同注意、振り・見立ての成立、心の理論の成立、幼児の自己概念の特徴、他者の人格の理解、などの視点から考察する。	無藤 隆（お茶の水女子大学教授）	無藤 隆（お茶の水女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	幼児の遊びと仲間関係	幼児の遊びの発達について、象徴遊び、ごっこ遊びを取り上げて考察する。さらに、仲間関係の発達について１・２歳児の仲間関係の始まり、仲間とのやり取りの能力の個人差の観点から論考を進める。	無藤　隆	無藤　隆
11	自律性の発達-自己主張と自己制御	自律性の発達は、自己主張と自己制御の両面からなっている。自律性の発達は、社会化方略と子どもの特徴との相互作用として発達する。子どもの自己主張の意味づけや取り扱い、自己制御を要求する度合いや文脈は文化によって異なっている。最近の研究を中心に、これらの問題を考察する。	氏家　達夫	氏家　達夫
12	日本の幼児教育実践者の信念と教育方法	今日就学前の幼児にとって幼児教育は誰もが経験する普遍的な経験である。だが、義務教育の小中学校に比べると幼児教育を担う幼稚園や保育園はその大半が私立であり、教育の目標やその実践の方法も公立学校に比べるとずっと多様性が大きい。にもかかわらず教師たちの教育の目標、子ども観、指導観などの信念や具体的な実践方法についてはかなりの共通性がある。それは教師たちの間でこうした教育についての知識や技能についての文化的なプールを共有しているからに他ならない。ここでは、比較文化の視点から日本の幼児教育を支える実践者の信念と具体的な教育方法の特徴について考えてみたい。	臼井　博	臼井　博
13	読み書き能力の獲得　一次的ことばから二次的ことばへ	幼児期の終わり頃までには、子どもは一次的ことば（生活言語）から二次的ことば、すなわち、読み書きの世界への第一歩を踏み出す。読み書きを媒介にして子どもの世界は時間・空間を隔てた伝達を可能にし、子どもの意識は「今」「ここ」を超えて広がるようになる。また、文字はことばについてメタ的に捉えることを可能にする。考える手段としてのことばは一層確実なものになる。個人的なやり取りの中で育まれた「一次的ことば（生活言語）は読み書きの習得に伴い質的に改変され、公共性の高い二次的ことばに移行する。	内田　伸子	内田　伸子
14	発達のリスクと臨床への基礎	乳幼児期の発達におけるリスクを取り上げ臨床への応用の方途を探る。 そのために、親子関係のリスク、子ども自身のリスク、環境のリスク（含む、メディアや早期教育など）、仲間関係の問題、情動制御の発達と育成、家族への援助と介入の諸点から考察する。	無藤　隆	無藤　隆
15	乳幼児期から児童期へ：発達的な移行期を生きる	これまでの１章から１４章までで、乳児期から小学校の入学前の時期までの発達のさまざまな側面とそれらに影響を及ぼす諸要因について多面的に、かつダイナミックに描いてきた。ここでは、これらを受けて幼稚園の年長から小学校の１年生にかけての発達的移行期に焦点を当てて、この時期に起こる重要な発達的な変化について考えてみたい。	臼井　博	臼井　博

＝　児童心理学（’９８）＝（R）

〔主任講師：無藤　隆（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

小学校期を中心に一部中学校を含めて、その時期の子どもの心の発達とその現代的背景についてまとめる。学校教育への意義を考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童期の発達の考え方	基本的な発達の理論、特に、ヒアジェ、ヴィゴッキー、エリクソンなどの考えを述べ、幼児・児童・青年の時期の対比を行う。	青木多寿子（岡山大学講師）	青木多寿子（岡山大学講師）
2	幼児から児童へ	幼稚園・保育園から学校に移行する際の発達的変化と、学校への適応の問題を述べる。	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）
3	言葉の発達と教育	言葉によるコミュニケーションや文字の獲得についてまとめ、国語教育への意義を述べる。	青木多寿子	青木多寿子
4	数量的理解の発達と教育	幼児から児童期の数量概念の発達と教育的意義を述べる。	同　上	同　上
5	科学的認識の形成	自然科学的認識の形成を素朴概念という観点からまとめ、理科教育への意義を述べる。	同　上	同　上
6	体験学習と表現力と感性の発達	幼児教育、生活科教育、総合的学習、さらに造形や音楽　等の表現の学習の特徴を述べ、その発達的意味を整理する。	無　藤　　隆	無　藤　　隆
7	友人関係の広がり	児童期の同年齢の子ども同士の関係の発達と教室での様子を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	道徳性と価値観の発達	道徳性や価値観、さらにその背景としての社会的対人的認識について述べる。	青木多寿子	青木多寿子
9	自己の成長と人間関係	自己認識の広がりとそれが友人関係や教師との関係とどう関わるかを述べる。	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）
10	メディアとの関わり	読書、テレビ、テレビゲーム等のメディアとの関わりを現代での遊びの変容との関連で述べる。	無藤　隆	無藤　隆
11	現代の家庭と子ども	児童期の親子関係の特色とそれが現代の変化の中でどうなっているのかを述べる。	同上	同上
12	児童から思春期へ	小学校から中学校への制度的変化と思春期を迎えることが絡まっての大きな発達的変化について述べる。	伊藤美奈子	伊藤美奈子
13	問題行動の諸相	問題行動の分類を行った上で、特に、不登校と、いじめについて述べる。	同上	同上
14	子どもの問題行動をどうとらえるか	子どもの心の問題の顕在化の兆候と、それについて子ども自身、また親や教師や専門家がとらえる見方の違いやその意味を述べる。	同上	同上
15	今、先生に求められること	不登校の事例に基づき、子どもの心のあり方とその抱える「問題」の発達的意義を述べる。	同上	同上

＝ 老年期の心理と病理（’０２）＝（R）

〔主任講師：竹中　星郎（元大正大学教授）〕
〔主任講師：星　　薫　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高齢社会の今日、80歳90歳をどのように生きるかということは人類にとってもっとも新しいテーマである。しかし老人問題の多くは介護システムや医療福祉についてであり、高齢者以外の世代にとっての問題である。高齢者が厳しい状況をいかに生きているかをみつめ、彼らの思索や悩みや不安、そして心の病の背景を考えることなどをとおして理解を深め、高齢期の課題をみつめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「高齢社会」の問題点－高齢者の視点から	わが国は1994年に高齢社会になったが、欧州先進諸国より約20年遅れて到達し、高齢化社会からの移行は異常に早い。そのような高齢者を取り巻く社会的な状況をとおして、「いかに生きるか」という人生の最終段階である高齢期の課題を考える。	竹中　星郎（元大正大学教授）	竹中　星郎（元大正大学教授）
2	老いとパーソナリティの発達－真の個性化	高齢期をいかに生きるかは、それまでの人生における蓄積を反映している。人生ではそれぞれの段階に応じた課題に直面する（ライフサイクル理論）が、中年期・初老期はそれ以降の生き方を規定する。「真の個性化」と完結なき発達の課題を考える。	同　上	同　上
3	老年期の喪失体験	新しい創造が難しくなった老年期では、過去が現在の心の拠り所となっている。かつての仕事や立場、役割だけでなく、家や大切な持ち物も自分の歴史が刻み込まれた精神的な財産としての意味をもっている。老年期の喪失体験を鳥瞰する。	同　上	同　上
4	老いの孤独と孤立	老年期は身近な人が身辺からいなくなるという状況に置かれるという意味で真の孤独である。しかしそれは自分の老いをみつめ、ものごとに対する深い思索をもたらすポジティブな側面ももつ。それに対して関係をカットオフされる孤立は精神的に重い状況である。	同　上	同　上
5	老いと死・適応	老年期は死が現前化するが、高齢者は必ずしもそれに恐れおののいているわけではない。しかし末期ガンの患者における死とは異なる問題を多く含んでいる。また、老年期は適応の力がもっとも衰えている一方で、もっとも厳しい適応を求められる。	同　上	同　上
6	老年期の認知・記憶・知能	一般に、精神活動の基盤である認知機能や記憶、知能は老化にともない衰えるとみなされているが、結晶性知能と流動性知能に分けてその変化を見ると前者が減衰するのに対して後者は増加するように一律でなく、個人差も大きいのが老年期の特徴である。	星　薫（放送大学助教授）	星　薫（放送大学助教授）
7	老年心理学の課題	パーソナリティの発達は老年期にどのような課題を担うのか、心身の老化はどれにどのように作用するのか。それは家族関係の変化や社会構造の変化とも無縁ではない。とりわけ厳しい生に向き合う80、90代の心理を理解することは今日的な課題である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	老年期の妄想1	老年期は思春期・青年期とならんで妄想が多く見られるが、なかでも「盗られ妄想」は老年期心性を象徴する問題である。老年期の異常心理を考えるには「脳か心か」という二分法でなく、「脳も心も」という複眼的な視点の重要性を示している。	竹中　星郎	竹中　星郎
9	老年期の妄想2	高齢者には他の年代に見られない特有の妄想が生じることが多いが、そのほとんどは老年期の生活や不安、異常心理を映し出しているものである。接触欠損妄想、「幻の同居人」、共同体被害妄想、人物誤認などの事例について考察する。	同　上	同　上
10	老年期の抑うつとうつ病1	気が重い、憂うつといった気分は誰にもある変動の範囲内から、うつ病にいたる広いスペクトルムをもっている。またうつ病の病前性格として注目されるメランコリー親和型性格は、発症状況をどのように受け止めるかというその個人の意味の理解につながる。	同　上	同　上
11	老年期の抑うつとうつ病2	うつ病の臨床症状をふまえて、老年期の特徴を見ていく。そしてうつ病と痴呆の鑑別、身体症状を前景にする仮面うつ病、奇妙な心気妄想と不死観念などを呈するコタール症状群について事例に則して問題把握のポイントを考える。	同　上	同　上
12	神経症圏・人格障害	一般的に老年期は神経症は減少するとみなされているが、身体病や孤独などにより心気症状や強迫症状を呈するものは少なくない。また、一人では暮らせなくなったために周囲の人びとがかかわるようになって若いころからの人格の偏りが顕在化する場合もある。	同　上	同　上
13	痴呆　1	80歳以降での痴呆発現率は約20％とも言われ、高齢社会の大きな問題である。しかし妄想やうつ病もボケといわれるように、痴呆についての知識は不十分である。なかでもせん妄は痴呆や精神症状を理解するうえでの鍵概念にあたるテーマである。	同　上	同　上
14	痴呆　2	老年期痴呆性疾患はアルツハイマー病と血管性痴呆で約90％を占める。それぞれの臨床症状の特徴、病因、治療などをふまえて、かかわりのポイントを考える。痴呆に伴う精神症状や異常行動を人間関係や環境変化などとの関連でとらえることが大切である。	同　上	同　上
15	老いを生きる	人生の最終段階をそれまでにふさわしく生きるとは、自分らしく主体的に生きることである。ボケ予防や要介護予防といった「身体」へのとらわれから自由になることが大切である。そのためには高齢者の生を支える社会のあり方もふくめて考える必要がある。	同　上	同　上

＝ 言語発達心理学（’９８）＝（R）

〔主任講師：内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

読み、書き、話す営みは人間生活において基本的な営みである。乳児期から喃語や片言で母親と「会話」を始めるし、幼児期のはじめから、子どもは新聞・雑誌を読む大人の姿に興味をひかれ、やがて文字に目をとめるようになる。たえず他者とあるいは自分自身と語り、活字文化に触れる中で、人は自分の世界を広げ、まとまりのある意味世界を構築していくようになる。人間にとって基本的な、読み、書く、話すという営みについて、最新の発達心理学、認知心理学、教授学習の心理学の知見を踏まえ、さらに、ことばの生理学などの最新の成果に基づいて、ことばと人間の関わりについて考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ことばと人間	ことばは世界認識の手段であり、人とやり取りする手段でもある。言語はどのようにして出現し、また獲得されていくのかについて言語獲得に制約を与える生物学的基礎を明らかにするとともに、人間にとってのことばを獲得するということの意味を考える。	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
2	会話の発達	会話は、話し手と聞き手がかわりばんこに発話をすることによって成立する。このような相互作用のパタンは、授乳の過程にも見いだすことができるという。――この章では、会話の発生、発達の過程をみていく。	仲　眞紀子（東京都立大学助教授）	仲　眞紀子（東京都立大学助教授）
3	絵本との出会い	今日では乳幼児向けの絵本が数多く発行され、子どもは早ければ0,1歳台から絵本と出会っている。絵本の読み聞かせを通して子どもは「本を読む」ことを経験し学んでいく。この章では、乳幼児期における読み聞かせがどのように行われているのか、また絵本を読むことが子どもの発達に与える影響について考える。	秋田喜代美（東京大学大学院助教授）	秋田喜代美（東京大学大学院助教授）
4	物語行動の発達	ことばは象徴機能を基礎にして成立し、人とのやり取りの手段として、また内的なモデルを構成する手段となり、しだいに、まとまりのあるディスコース（文章）が生成されるようになる。ことばから文章までの発達過程を物語産出という面から考察する。	内田　伸子	内田　伸子
5	読み書き能力の獲得	自分で考えていること、人に伝えたいことを文字で表現できるようになることは、生後１年して二足歩行ができるようになることと同じくらい大きな出来事である。読み書きを媒介にして、子どもの世界は「今」「ここ」を超えて広がる。この文字の世界に子どもが足を踏み入れるのはきわめて早い。本章では幼児期から就学期までの読み書き能力の獲得過程について具体的資料に基づき考察を進める。	同　上	同　上
6	文章の理解過程	私たちは日常生活の中で、本や教科書、新聞、雑誌、電化製品やコンピュータの取り扱い説明書など数多くの文章を読んでいる。読んでいてわかりやすい文章もあればわかりにくい文章もある。こうした時に、私たちの心の中ではどのような処理が行われているのだろうか。文章を読むとはどのような心理過程であるのかについて、認知心理学の代表的研究を紹介しながら考えていく。	秋田喜代美	秋田喜代美
7	読みの発達と教育	児童期を中心に読みに関して何が発達するのか、また読みや読書行動を促すにはどのような教育的働きかけを行うのがよいのかについて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	作文の発達と教育	子どもはかなり早くから文字を読んだり書いたりする。しかし、自分で考えたことを文字で自由に表現することができるまでにはしばらく時間がかかる。本講では作文の発達について焦点をあて、作文過程でどのような精神活動に従事しているかについて考察するとともに、書くことを通して認識の深まりを助ける教育のあり方について考える。	内田　伸子	内田　伸子
9	読書行動の発達	読むことの心理過程についての考察（第６講・第７講）を踏まえ、読書という生活の中の一つの行動として読むことを捉え、年齢に伴う変化と環境が読書に与える影響について考える。	秋田喜代實	秋田喜代實
10	会話の発達を支えるもの	人は生まれおちた瞬間から相互交渉をもつべく方向づけられていることを学んだ。だが適切な社会的、言語的環境になければ話ことばは育たない。どのようなはたらきかけによってことばは育つのかについて考察する。	仲眞紀子	仲眞紀子
11	話しことばの特徴	話しことばは原初的な言語活動である。ここでは話ことば全般について、書きことばと比較しながらその特徴を考察する。話ことばに伴う身振り動作についてもふれる。	同　上	同　上
12	会話の情報処理	発話を理解するには、文字どおりの意味が分かるだけでは不十分である。推測される背後の意味（含意）や発話の意とをも知る必要がある。本講座で発話の理解がどのように行われるのかを検討する。	同　上	同　上
13	聴こえとことばの生理学	聴く・話す・読む・書くの神経機構を解説する。外界の情報を取り込む器官である聴覚器官のしくみとその働きについて理解を深め、さらに外界に働きかけるときの主要器官である発声・発語器官のしくみとその働きについて講ずる。	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）
14	聴こえとことばの障害	話しことばが作りだされ、さらに、それが情報として受け手に伝わり、理解される過程、いわゆる“ことばの鎖”をつくりだす神経機構のどの部分に働き異常が起こったときに、どのような障害が生じやすくなるかについて取り上げる。	同　上	同　上
15	言語治療	言語治療の現場から子どもから大人まで、具体的症例をあげ、治療の方法と回復の過程について解説する。これを踏まえて、ことばを失うことが人間生活にとってどういうことかを理解し、ことばが人間生活においてどのような意義があるかについて考える。	同　上	同　上

＝社会心理学＝（TV）
－アジア的視点から－

〔主任講師：山口　勧（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本人の社会的行動について考えること。特に、アジアの中の日本という視点から、実証的な研究結果に基づいて、比較文化的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アジアの社会心理学へ	全体の枠組みを提示する。	山口　勧（東京大学教授）	山口　勧（東京大学教授）
2	方法論・固有文化心理学	相関的方法、実験的方法の解説および文化に固有な心理学の必要性について解説する。	同上	同上
3	個人主義－集団主義	個人主義・集団主義の国際比較について解説する。	同上	同上
4	自己－文化心理学的アプローチ	相互独立－相互協調的自己観において日本人と西洋人との間に顕著な違いがあることを解説する。	北山　忍（京都大学助教授）	北山　忍（京都大学助教授） 山口　勧
5	文化の継続性について	文化がどのようにして維持されるかについて考える。	嘉志摩佳久（オーストリア・LaTrobe University 教授）	嘉志摩佳久（オーストリア・LaTrobe University 教授） 山口　勧
6	集合性の理論－グループ・ダイナミックス	人間の集合体を一つの全体としてとらえ、理論的に考察する。	杉万　俊夫（京都大学教授）	杉万　俊夫（京都大学教授） 山口　勧
7	日本人の社会的行動 1「コントロール観」	日本人およびアジアの人々のコントロール観について解説する。	山口　勧	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本人の社会的行動 2「信頼」	日本人の信頼感の特徴に付いて、アメリカと対比させながら解説する。	山岸 俊男（北海道大学教授）	山岸 俊男（北海道大学教授） 山口 勧
9	日本人の社会的行動 3「甘え」	日本人に特徴的とされる「甘え」の現象について解説する。	山口 勧	山口 勧
10	日本人の社会的行動 4「紛争解決」	日本人およびアジア人の社会的葛藤の解決法について、西洋人のそれと対比させながら、解説する。	大淵 憲一（東北大学教授）	大淵 憲一（東北大学教授） 山口 勧
11	中国人の社会的行動 1「中国文化における対人関係のダイナミックス」	日本人と同様に集団主義的と考えられる中国人の集団行動の特徴について、日本やアメリカとの対比をしながら解説する。	Kwok Leung（香港中文大学教授）	Kwok Leung（香港中文大学教授） 山口 勧
12	中国人の社会的行動 2「中国文化における体面	中国人にとって重要とされる体面の問題について解説する。	Kwok Leung	Kwok Leung 山口 勧
13	韓国人の社会的行動 1「恨」	韓国人を理解するために重要と考ええられている「恨」について解説する。	Uichol Kim（韓国中央大学校助教授）	Uichol Kim（韓国中央大学校助教授） 山口 勧
14	韓国人の社会的行動 2「我々意識」	韓国人が強く持つ「我々意識」を、日本人や西洋人のそれと比較しながら解説する。	同上	同上
15	文化間のコミュニケーション・まとめ	同じ様な文化を持つ、さまざまな勝ちを共有するようにみえるアジアの人々の間でも、コミュニケーションの難しさは存在する。この点について考え、全体のまとめを行う。	渡辺 文夫（上智大学教授） 山口 勧	渡辺 文夫（上智大学教授） 山口 勧

＝ 人格心理学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鈴木　乙史（聖心女子大学教授）〕
〔主任講師：佐々木正宏（國學院大学教授）〕

全体のねらい
人格には、多くの人が関心をもっているが、その複雑で多面的な性質から、理解は容易でない。人格心理学では、まず、人格とは何かを取り上げ、また、基礎理論として、精神分析、現象学、行動主義の三大アプローチを紹介する。さらに、人格と発達、人格と適応の諸問題を詳述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「人格」とは	「人格」とはどのようなものなのかについて論じる。人格と類似した語に、性格があるが、その説明も行い、差異を考察する。さらに個人差についても取り上げる。	佐々木正宏（國學院大学教授）	鈴木　乙史（聖心女子大学教授） 佐々木正宏（國學院大学教授）
2	「人格」理解の方法	人格理解の方法として、面接、生育史に関する情報を得る家族アセスメント、心理検査などの具体的方法を概説する。次に、心理検査に関して性格検査と知能検査について解説し、最後にまとめとしてテスト状況やテスター・被験者関係について取り上げる。	大貫　敬一（東京経済大学教授）	大貫　敬一（東京経済大学教授）
3	人格理論(1) 精神分析的アプローチ	フロイトが創始した精神分析のアプローチについて概説する。無意識や、エス、自我、超自我の三者から成る人格の構造や、防衛機制について述べ、さらに、精神分析療法についても、人格やその変化とのかかわりの点から取り上げる。	佐々木正宏	佐々木正宏
4	人格理論(2) 現象学的アプローチ	現象学的アプローチについて概説する。とくにロジャースの自己理論における経験や自己概念、及びそれらの関係を述べ、さらに、彼の創始したクライエント中心療法における人格変化のとらえ方を述べる。	同上	同上
5	人格理論(3) 行動主義的アプローチ	研究対象を行動とする行動主義のアプローチについて概説する。その基礎をなしている古典的条件づけや道具的条件づけについて述べ、不適応行動を除き、適応行動を獲得することを目指す行動療法についても取り上げる。	福田　幸男（横浜国立大学教授）	福田　幸男（横浜国立大学教授）
6	人格理論(4) 類型論・特性論・状況論	古典的な類型論・特性論だけでなく、新しい考え方を含めて論じられる。また、状況論を紹介することによって、行動の一貫性が存在するかどうかの論争と性格との関連性を論じる。	若林　明雄（千葉大学助教授）	若林　明雄（千葉大学助教授）
7	人格と発達(1) 生得的特質の影響	人格発達のスタートとなる生得的特徴である気質について論じ、それが発達するにつれて、どのように人格発達に影響するのかを考える。また気質以外の生得的・遺伝的な特質について、人格発達に関連させながら論じる。	清水　弘司（埼玉大学教授）	清水　弘司（埼玉大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	人格と発達(2) 対人関係の発達	乳幼児期に母親（代理）との相互作用により形成される愛着（アタッチメント）は、後の対人関係形成に強い影響を与える。愛着の形成プロセスと、初期の愛着の質が後にどのように発達するのかが対人関係の発達の中で論じられる。	清水　弘司	清水　弘司
9	人格と発達(3) 自己・自我	人格の中心にあると考えられる自己の発達について論じる。自己の機能、自己の形成、自己コントロール、自己意識など多様な側面に焦点をあてながら考えていく。	鈴木　乙史	鈴木　乙史
10	人格と発達(4) ライフサイクル	人格は一生を通して発達していくと考えられている。成人期、老人期にも焦点をあてながら、人間の一生と人格の発達と変化について論じる。	同　上	同　上
11	人格と適応(1) 正常と異常 神経症と精神病	正常と異常、健康と病気、適応と不適応の概念に関して概説する。次に、神経症と精神病概念の歴史的変遷と現在の分類について概説する。最後に、実例として不登校などの現代の心理的諸問題を取り上げて考察する。	大貫　敬一	大貫　敬一
12	人格と適応(2) ストレス対処	人と環境の関係を扱うストレスを取り上げる。生理学的ストレス論から心理学的ストレス論への発展の経緯を述べ、さらに、心理学的ストレス論において重視される、認知的評価、情動中心の対処、問題中心の対処について説明する。	佐々木正宏	佐々木正宏
13	人格と適応(3) 別離体験	適応が難しい体験の中でもとりわけ重大なものと考えられる別離体験に焦点を合せて論じる。とくに、フロイトの対象喪失の考え、幼い子どもの母親との比較的短期間の別離体験、おとなの愛する人との死別体験について述べる。	同　上	同　上
14	人格と適応(4) 家族・社会・文化	人間は社会的存在でもある。個人の人格は家族のあり方や文化・社会の特質によって大きな影響を受ける。家族システム論の考えや文化とパーソナリティ研究などを論じていく。	鈴木　乙史	鈴木　乙史
15	人格の成熟と変化	全体のまとめをおこなう。人格の恒常性と変化、成熟した人格論などを材料にして、人格の形成と変化、適応と不適応について考察する。また、変化の技法としてのカウンセリングについてもふれる。	同　上	同　上

＝ 臨床心理学概説（'９９）＝（R）

〔主任講師：馬場　禮子（東亜大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学の基本的理論と方法、社会に向けて果たすべき課題について概説する。理論的な基盤を押えつつ、平易にまた臨床の実際が伝わるように記述し、図表などを加えて視覚的に捉え易くする。概説すべき内容は大量なので、テキストでは必要な項目にすべて触れておき、説明の不足はラジオ放送で補って内容の充実をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	①定義　②実践の内容－心理アセスメント、心理療法、コミュニティ援助、それらに関する研究　③領域と対象－教育、医療、司法、その他において、乳幼児から成人、高齢者まで、健常者も病者もが対象であること。　④歴史－米国と日本を中心に。	馬場　禮子（東亜大学教授）	馬場　禮子（東亜大学教授）
2	臨床心理学の理論的背景　(1)心理学の諸領域	人格、発達、社会、学習、認知などの心理学がどのように臨床心理学の基礎理論としての役割を持つのか、臨床心理学との関連においてこれらを解説する。	青木紀久代（お茶の水女子大学助教授）	青木紀久代（お茶の水女子大学助教授）
3	臨床心理学の理論的背景　(2)医学の諸領域	精神医学、心身医学（心療内科学）、小児科学、高齢者医学などの理論と基礎知識を臨床心理学との関連で、特に臨床心理学にとって必要なものに焦点づけて解説する。精神薬理も含む。	大野　裕（慶応義塾大学講師）	大野　裕（慶応義塾大学講師）
4	臨床心理学の理論的背景　(3)精神分析学と分析心理学	両学の人格理論の部分を、臨床心理学の基礎理論という位置づけで解説する。無意識仮説、心的構造論などを比較の形で出すか、別個にするか、検討を要する。	永井　徹（東京都立大学教授）	永井　徹（東京都立大学教授）
5	臨床心理アセスメント　(1)アセスメント総論	①心理アセスメントとは何か（導入、動機づけ、秘密義務を含む）　②面接と検査があること、両者の関係　③アセスメント面接について　④テストバッテーについて　⑤アセスメントのまとめ方と伝え方。	馬場　禮子	馬場　禮子
6	臨床心理アセスメント　(2)知能検査と質問紙法	まずどのようなものがあるかを羅列（表示）し、原理について簡単に触れ、代表的なものについて解説する。知能検査はウェクスラー法を重視。質問紙はねらいの異なるものを選ぶ。放送授業にそなえて検査用紙を提示しておく。	黒田　浩司（茨城大学助教授）	黒田　浩司（茨城大学助教授）
7	臨床心理アセスメント　(3)投映法	投映法の原理、分類法（どれか1つ）、代表的なものを概説。紙幅から、きわめて概略的な説明しかできないので、各検査についても原理を重視し、解釈法の細部などは放送授業とする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心理療法 (1) 心理療法総論	①心理療法とはなにか（相談、カウンセリングにも触れる）②方法－各学派（表示）、各設定（個人、集団、家族）、各手段（会話、行動、芸術表現など） ③対象－乳幼児から高齢者まで、精神的障害者から健常者まで含むこと。	馬場 禮子	馬場 禮子
9	心理療法 (2) 精神分析的心理療法	①原理 ②方法－対象と方法について。児童治療、成人個人、集団、家族、芸術表現療法のそれぞれについて精神分析的観点と方法を解説する。	同上	同上
10	心理療法 (3) ユング派心理療法	同上の内容でユング派心理療法の対象別の方法を解説。	永井 徹	永井 徹
11	心理療法 (4) クライエント中心療法	同上の内容でクライエント中心療法の対象別の方法を解説。	馬場 禮子	馬場 禮子
12	心理療法 (5) 認知・行動療法	同上の内容で認知・行動療法の対象別の方法を解説。	大野 裕	大野 裕
13	コミュニティ援助 (1) 危険介入とコンサルテーション	①コミュニティ援助の領域と方法の総論（図表） ②リエゾン・コンサルテーション（学校臨床、高齢者援助を含む） ③危機介入 ④予防活動－以上順序は偏光ありうる。	黒田 浩司	黒田 浩司
14	コミュニティ援助 (2) 育児と親への援助	①意義と実際－親子（母子）関係の重要性、援助の可能性 ②対象－親、保育者、など ③障害児の治療教育。	青木紀久代	青木紀久代
15	臨床心理学の研究法	調査研究、事例研究について解説する。それぞれの難しさ、留意点にも触れる。卒論研究にも生かせるように配慮する（例えば資料の作り方、論文のまとめ方など）。	同上	同上

＝ 児童の臨床心理（'９８）＝（R）

〔主任講師：上野　一彦（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

今日、子どもを取りまく家庭、学校、社会環境は複雑化し、さまざまな問題行動や心理的な不適応を引き起こすケースも多く見受ける。そうした児童の心と行動のメカニズムを明らかにし、行動の改善や不適応の軽減を目的とする発達支援へのニーズはますます強くなってきている。ここでは臨床心理学的観点からの児童、ならびに関連する諸要因の理解とアプローチの仕方を紹介した後に、具体的な適応・発達に課題をもつ事例を通して、現代に生きる子ども像について学び、考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童の臨床心理とは	問題行動・不適応の基本的理解、発達障害と適応障害、臨床心理学の歩みと児童理解に関する基本的アプローチについての概観的な紹介をする。	上野　一彦（東京学芸大学教授）	上野　一彦（東京学芸大学教授）
2	児童と発達環境	児童期を中心に、子どもの発達について概観をする。昨今の子どもたちの特徴、家庭、学校、地域社会など、子どもを取り巻く環境の変貌などを視野に入れ解説する。	松村　茂治（東京学芸大学教授）	松村　茂治（東京学芸大学教授）
3	行動の理解とアプローチ	児童の問題行動・不適応行動がどのような心理的メカニズムで生じてくるのかについて、防衛・適応機制に触れるとともに、現代の学習理論からの解説と行動論的なアプローチの応用について述べる。	小林　正幸（東京学芸大学助教授）	小林　正幸（東京学芸大学助教授）
4	発達援助とカウンセリング	子どもの心の発達理解のために必要なポイントについて述べながら、子どもと親のためのカウンセリングやその他の心理的援助について解説する。	佐野　秀樹（東京学芸大学助教授）	佐野　秀樹（東京学芸大学助教授）
5	子どもの対人関係とソーシャルスキル	子どもの社会的行動の発達と、その領域で出現する対人関係に関わる問題について学ぶ。仲間関係と、そこで習得するソーシャルスキルについて、集団生活の大切な場である学級に焦点を当てる。	松村　茂治	松村　茂治
6	臨床アセスメントⅠ－発達と能力－	児童理解のためのアセスメントとして、生育歴、発達検査、知能検査などを中心に発達の押さえ方と種々の能力検査の利用について述べる。	上野　一彦	上野　一彦
7	臨床アセスメントⅡ－行動とパーソナリティー	行動やパーソナリティのアセスメントを行うための方法について述べる。子どもと親を援助するために必要な面接法、観察法、パーソナリティ検査などにも触れる。	佐野　秀樹	佐野　秀樹

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不登校	近年増加の一途をたどる不登校について、その社会的背景や要因、発生のメカニズムについて考える。その上で予防と対処法について、児童の状態像に応じたアプローチの仕方について述べる。	小林　正幸	小林　正幸
9	いじめ（暴力）	一頃激しかった校内暴力が表面的に沈静化した後、いじめの問題が表面化してきた。ここではいじめの特徴とこの問題に対処していくための具体的方策について学ぶ。	松村　茂治	松村　茂治
10	こころの不適応	児童に多くみられる心の問題から生じるさまざまな不適応行動を取り上げる。神経症、心身症のほか、チックなど神経性習癖、さらには対人恐怖を背景とする引っ込み思案などにも触れ、その理解と対処法について紹介する。	小林　正幸	小林　正幸
11	発達の遅れとかたより	知的発達障害（精神遅滞）・自閉症・言語障害ほか、発達に遅れや偏りをもつ児童に対する基本的理解と本人と親への発達支援と心理教育サービスについて述べる。	同　上	同　上
12	学習障害とその周辺	軽度の発達障害への援助ニーズが高まってきている。なかでも、近年、急速にその対応が注目されつつある学習障害（LD）とその周辺の問題について、学校教育との関わりに中で述べる。	同　上	同　上
13	現代の家庭と家族	時代とともに、家族がどのように変化してきたか。さらに現代の家庭と家族の特徴について述べる。子育ての不安や児童虐待などにも触れ、これからの育児、家庭家族のあり方についてカウンセラーの立場からまとめる。	同　上	同　上
14	学校と教育臨床	学校で起こるさまざまな問題に対処するために、スクールカウンセラーなどが機能し始めた。こうした対応がより効果を上げるために必要な学校の組織や教師の機能と専門的な援助のあり方について学ぶ。	松村　茂治	松村　茂治
15	児童臨床心理の明日を考える	児童をめぐるさまざまな発達・適応の諸問題を、激動する時代的、文化的背景の中でどのように理解し、対処していけばよいのか。これからの児童臨床心理の課題について、総合的に考察しまとめとする。	上野　一彦	上野　一彦

＝ 現代精神分析学（ '００）＝（R）

〔主任講師：牛島 定信（東京慈恵会医科大学教授）〕

全体のねらい

精神分析学が興ったのが19世紀末である。その後、単なる神経症の治療法に止まらず、広く人間理解のための理論と技法としての地位を確立するに至り、20世紀の思想界に大きな影を落とすことになった、一方、そのなかで精神分析そのものも影響を受けて、さまざまな理論的発展をしていることも忘れてはならない。このコースでは、それを踏まえて、精神分析の始りからその後の発展をたどることにしたいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	フロイトの生涯と精神分析	Freud Sの生い立ちと人生が精神分析の理論と技法にどのような影を落としているかを明らかにする。	牛島 定信（東京慈恵会医科大学教授）	牛島 定信（東京慈恵会医科大学教授）
2	無意識について	無意識がどのような過程を経て発見されたのか、無意識世界へ至るにはどのような方法があるのか、無意識はどの様な性質をもっているのかを明らかにする。	上別府圭子（日本橋学館大学助教授）	上別府圭子（日本橋学館大学助教授）
3	性欲論	Freud Sが小児性欲論を提示して、学問の世界にさまざまな波紋を投げかけたが、Freud Sの性欲理論とはどのようなものであり、どのような理論的展開をしたのかを明らかにする。エディプス・コンプレックスとそこから導き出された精神性的発達などを展開する。	生地 新（日本女子大学講師）	生地 新（日本女子大学講師）
4	パーソナリティ論	Freud Sがエス、自我、超自我という人格論を展開するまでに、局所論、力動論、エネルギー論などの視点が展開され、自我の防衛活動に関する詳細な論述がなされている。それらを踏まえて、欲動論に根ざした人格論から、同一性、偽りの人格などの概念が出現するに至っている。それらを概観する。	福井 敏（福岡大学講師）	福井 敏（福岡大学講師）
5	神経症論	最初、幼児期の外傷を原因と考えたFreud Sは、空想説（エディプス・コンプレックス）、さらには不安信号説へと発展した。その後、エディプス葛藤を越えて、前エディプス的不安のあり様にまで論及するようになった。その経過をたどる。	生地 新	生地 新
6	精神病論	フロイトの分裂病論はシュレーバー症例に垣間みることができ、さらにうつ病については「悲哀とメランコリー」に伺うことができる。その後、さまざまな理論的展開がなされた。現在どのような理論の展開があるのか展望する。	松木 邦裕（精神分析家）	松木 邦裕（精神分析家）
7	精神分析療法	Freud Sが自由連想法を導入して、精神分析療法が完成されたといわれるが、人間理解の基本にエディプス・コンプレックスがあったことは間違いない。その後、エディプス期以前の心性を見据えた治療技法の開発などがなされている。治療法の変遷をも含めた解説をする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	フロイトの患者たち	さまざまな理論の展開の基盤になっているのはFreud Sの臨床経験であることは間違いない。Freud Sにはどのような症例が残されているのか。その概略を解説してもらう。	松木 邦裕	松木 邦裕
9	文化論・社会論	Freud Sは、精神分析理論を人間理解だけに限らず、社会文化的側面にまで応用して、さまざまな文化論、文芸論、社会論を展開している。これらを含めた解説をしてもらう。	川嵜 克哲（学習院大学助教授）	川嵜 克哲（学習院大学助教授）
10	フロイト以降の発展	Freud Sの精神分析学の確立の後、自我心理学、対人関係論、対象関係論、自己倫理学等さまざまな理論的発展がなされて今日に至っている。これらの概要を解説する。	福井 敏	福井 敏
11	女性分析家の貢献	Freud Sのエディプス・コンプレックスは男性優位の社会での視点からの発想であるという批判がある。面白いのは、その中で、女性分析家の活躍は決して見逃せないところである。これらの人たちの理論や精神分析における貢献について解説する。	上別府 圭子	上別府 圭子
12	精神分析的発達理論	Freud Sの精神性的発達論の後、自我心理学、対象関係論などの出現によって、精神分析的発達理論がさまざまに展開されて今日に至っている。ことに、最近の幼児観察から得られた発達理論には、古典的精神分析ではみられない現実感がある。幼児期からの精神発達論は精神分析学の根幹をなす部分であるだけに、概観しておくことは大切であろう。	同上	同上
13	ユングの個人心理学	Freud Sからの離反後、ユングは独自の理論を発展させ、個人心理学なる学派を形成した。フロイト心理学にない境地を展開するに至っている。現在の人間理解に、古典的精神分析とは違った趣があるだけに、ここでユング心理学を学んでおくことは意義あることである。	川嵜 克哲	川嵜 克哲
14	わが国の精神分析事情	精神分析学はさまざまな発展を示したが、それがわが国ではどのような発展なり展開なりをしているのか。導入のいきさつから、自我心理学、更には今日の対象関係論に至るまでの解説を行う。	牛島 定信	牛島 定信
15	現代社会における精神分析の位置	ほぼ100年の経過のなかで、現代の人間理解に精神分析学がどのような貢献をしているのかを展開する。	同上	同上

＝カウンセリング概説（’０１）＝（R）

〔主任講師：馬場　謙一（放送大学教授）〕
〔主任講師：橘　　玲子（放送大学教授）〕

全体のねらい
カウンセリングについてその方法や理論、効果などを含め、具体的事例にふれながら概説する。心理的援助であるカウンセリングの基本にあるクライエント・カウンセラー関係を重視し、そこに起こる心の動きや成長の過程を考える。この講義では特定の学派に立つものではないが、しかし重要な理論については学習する。なお、カウンセリングが望まれる新しい領域にも若干ふれることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カウンセリングとは	心の悩みやストレス、問題行動に対して、カウンセリングは行われる。誰が、どこで、どんなカウンセリングを行っているかを本講義の全体の章と併せて述べ、今後カウンセリングが要請される分野などを示す。	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
2	カウンセリングの歴史と定義	カウンセリングはどのようにして生まれ、発展してきたか、また助言、指導、ガイダンス、心理療法とは、どんな違いがあるか、日本での発展も含めて述べる。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
3	カウンセリングの方法	カウンセリングに先立って知っておくべき知識（精神医学、無意識の理論など）があること、カウンセリングの具体的な進め方、目標を設定することの大切さ、目標や対象による進め方の違い、などについて論ずる。	馬場　禮子（東亜大学教授）	馬場　禮子（東亜大学教授）
4	カウンセラーの態度	基本的な態度（ロジャースの提言を紹介しながら解説する）、自己開示と隠れ身、態度に関する注意事項（救済願望、いわゆる逆転移の解説）、カウンセラーの成長について述べる。	同　上	同　上
5	カウンセリングの準備	面接の始め方、インテーク面接、症状や生活史の聴取とクライエントの心の理解、アセスメントと見立て（診断）について述べる。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
6	カウンセリングの約束	カウンセリングを始めるにあたっては、場所・時間・料金などを話し合って、合意しておく必要がある。面接構造の安定性は、カウンセリングの進展にとって重要である。	滝口　俊子（京都文教大学教授）	滝口　俊子（京都文教大学教授）
7	カウンセリングの過程	カウンセリングはどのように進行するか、その過程でどのような現象が起きるか、防衛や抵抗、転移や逆転移などについて述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カウンセラーの応答（1）	カウンセラーはクライエントの語ることを共感的態度によって受け止めるものであるが、クライエントとの交流に際してカウンセラーには応答のパターン（技法）を身につけることも大切である。これらの技法について解説する。	橘　玲子	橘　玲子
9	カウンセラーの応答（2）	実際のカウンセリングにはカウンセラーがどう対応したらよいか苦しむ場面がでてくる。クライエントの質問、沈黙、自殺のテーマ、などなど、代表的な現象を取り上げて考える。	同　上	同　上
10	カウンセラーの訓練	心に関わるカウンセリングという任務には、自らを鍛え続けてゆく意欲が不可欠である。訓練には、事例について詳細に指導を受けるスーパーヴィジョン、ケースカンファレンス、ロールプレーなどの方法がある。	滝口　俊子	滝口　俊子
11	カウンセリングの理論（1） フロイド、ユング、ロジャース	代表的な心理療法の理論からカウンセリングの参考になるところを紹介する。フロイドの理論から心の働き方と転移、抵抗の概説、ユングの理論から無意識論、治療的態度の概説、ロジャースについては４章の補足をする。	馬場　禮子	馬場　禮子
12	カウンセリングの理論（2） 行動療法と認知療法　その他の理論	不安や抑うつに対する援助としての行動療法・認知療法、および、環境（人間関係も含む）との相互作用を分析し、そこにかかわる戦略を考える理論としての応用行動分析・システムアプローチについて、解説する。	神村　栄一（新潟大学助教授）	神村　栄一（新潟大学助教授）
13	非言語的カウンセリング	カウンセリングにおいては、クライエントの非言語的世界への共感を要する。また、非言語的方法（遊戯療法、箱庭療法、表現療法など）を併用することも、カウンセリングを促進させることがある。	滝口　俊子	滝口　俊子
14	グループ・アプローチ	カウンセリングはグループを対象に行われることがある。集団の力学が働き、人間の成長を促進する働きがあるが、逆に危険性もある。集団カウンセリングの適応や方法、などを概説する。	橘　玲子	橘　玲子
15	コミュニティ・アプローチ	コミュニティにおける対人援助、たとえば危機介入、犯罪被害者・被災者のＰＴＳＤ（外傷後ストレス障害）、家庭教育支援（家庭内の暴力）、学校教育相談活動などである。ここでのカウンセリングの利用を考える。	神村　栄一	神村　栄一

＝ 生涯学習と自己実現（’０２）＝（R）

〔主任講師：麻生　誠（放送大学副学長）〕
〔主任講師：堀　薫夫（大阪教育大学助教授）〕

全体のねらい

生涯学習はライフによって統合された学習である。ライフには生涯・生活とともに生命という意味がある。そして人間の生命が躍動する状態を自己実現ということがある。

では、生涯学習の問題を、人間の自己実現という視点からながめるとどのように見えてくるのであろうか。自己実現論からみた生涯学習論を生涯学習論のかかえる今日的諸課題の検討とともに考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯学習の理念	生涯学習がどのような学習観や教育観にささえられてきたのかを、ラングランやジェルピの説などを参照しつつ考えていこう。	麻生　誠（放送大学副学長）	麻生　誠（放送大学副学長）
2	人間の成長と生涯学習の原理：生涯学習の生物的側面	人間の成長の本質と生涯学習の原理を、生物としての人間が環境に適応していく営みにまでさかのぼって考えてみる。生物的に見ても、生涯学習は人間にとって本質的な営みであるということを述べていきたい。	堀　薫夫（大阪教育大学助教授）	堀　薫夫（大阪教育大学助教授）
3	人間の経験と生涯学習	生涯学習、とくに成人期以降の人たちにとっては、人間の経験がその貴重な資源となる。では、生涯学習論においてはこの人間の経験の問題はどう位置づけられているのであろうか。デューイや森有正らの経験論からこの問題にこだわってみよう。	同　上	同　上
4	生涯発達とエイジング	経験の変容からの学習は、生涯にわたる成長・発達をめざすものである。ここでは、生涯発達の概念を、エイジングの問題と重ね合わせて考えていく。そして、自己実現としての生涯発達の考え方に注目していく。	同　上	同　上
5	知的能力の変化をめぐって	生涯発達と生涯学習を結ぶひとつの視点は「成人期以降の学習能力の変化」の問題である。「流動性知力と結晶性知力」「知力のメカニクスとプラグマティクス」といった考え方をもとに成人期以降の学習能力の変化に目を向けてみる。あわせて自己実現に近い概念でもある「知恵」の問題も考えていく。	同　上	同　上
6	高齢者の学習の成立条件	生涯学習と生涯発達の完成期である高齢期の学習のあり方を考えていく。高齢期における学習が、人生の他の時期における学習とどう違うのであろうか。その特徴をいくつかのデータをもとに議論していく。	同　上	同　上
7	死への準備教育	生涯学習の問題をデス・エデュケーション（死への準備教育）の観点からとらえてみよう。人間の死は、「老いや病と結びついた死」と「社会や文化と結びついた死（事故死、他殺など）」とに大きく分けられる。それぞれの視点と教育の視点を結びつけるとどうなるか、考えてみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生きがいと自己実現（1）人間的欲求の解放	本放送のひとつの柱である自己実現の問題を「人間的欲求の解放」という点を軸にして考えていこう。マズローやフロムらの古典的人間観にさかのぼりつつ、人間的欲求とは何かについて考えていこう。	堀　薫夫	堀　薫夫
9	生きがいと自己実現（2）意味への意志	ここでは自己実現の問題を「意味への意思」という概念から考えていく。この言葉は、ヴィクトール・フランクルの提唱した概念であるが、カールソンやカーネギーらの啓蒙的な著作のなかにもこの視点がうかがわれるように思う。人生の意味づけとしての自己実現の問題を考えていきたい。	同　上	同　上
10	成人の特性を活かした学習援助論	生涯学習の中核を占めるのは成人教育であろう。ここでは、成人教育を成人の特性を活かした教育・アンドラゴジーととらえたうえで、アメリカにおいてこの理論が指摘したことと、その発展可能性を考えてみよう。	同　上	同　上
11	生涯学習における学習者像	生涯学習論においては、1980年代からは学習者や参加者の視点に立つ生涯学習という考え方が普及してきた。クラントンやアーノルドらの説をふまえつつ、参加型生涯学習の可能性を考えていきたい。	三輪　建二（お茶の水女子大学教授）	三輪　建二（お茶の水女子大学教授）
12	欧米諸国の生涯学習	ユネスコなどの国際機関、アメリカ、ヨーロッパにおける生涯学習論の特徴と動向を整理し、そこからわが国の生涯学習論への示唆を考えていこう。	同　上	同　上
13	生涯学習の日本的ルーツ	ややもすると看過されがちなわが国の「学び」の原型、および成人が生涯にわたって学び続けるという日本の伝統に関して、それらのプロトタイプとしての先人達の足跡をたどりながら、理解を深めていく。さらに、いわゆる「学ぶ心」といった精神についても考察を深める。	麻生　誠	麻生　誠
14	補償としての生涯学習	成人教育は、今日でも生涯学習の重要な要素の一つである。かつて成人教育の中心的課題であった「過去に剥奪された学習機会の補償」という側面は、確かに近年は後退の傾向にあるものの、現在なお各地で意欲的な取り組みを見ることができる。関西地区における夜間中学の教育実践を通してその現状を知り、さらにその背景や課題についても理解を深める。	麻生　誠 梅田　幸二（奈良市立春日中学校教諭）	麻生　誠 梅田　幸二（奈良市立春日中学校教諭）
15	生涯学習社会の近未来	近年の生涯学習関連の政策や実践の動向のなかには、生涯学習社会への展望を示す重要な問題が示されているであろう。人びとの自己実現を保障する生涯学習社会はありうるのか、近未来を展望してみよう。	麻生　誠 堀　薫夫 三輪　建二	麻生　誠 堀　薫夫 三輪　建二

＝ 教育の中の言葉（'９９）＝（R）

〔主任講師：永野　重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「国語」以外の教科におけることば、学力テストと言葉の関係、文章読解、など、具体的な話題を考えることによって、「教育の中の言葉」にどのような問題があるか、また、問題を解決するためには、「言葉」というものをどのようにとらえなければならない。かということがわかるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の中の言葉（問題の所在）	講義内容ぜんたいの紹介。英語のブロック報告書「生活のための（生涯のための）言葉」と教育。	永野　重史（放送大学教授）	永野　重史（放送大学教授）
2	言語と思考　(1)	貧しい階層の子ども達の知的発達の原因としてあげられた言語生活の特徴。その改善のためにとられた方策。	同　上	同　上
3	言語と思考　(2)	言語が人の思考を左右するという考え方。ベンジャミン・ワーフの言語相対性仮説とその心理学的検証。	同　上	同　上
4	言語と思考　(3)	リテラシーの効用。文字のない文化と文字のある文化。文字をつかってものを書くことが人々の知的能力を高めるという説の検討。	同　上	同　上
5	「言語」とは何か	幼児の母語の獲得の様子と学校の国語の学習とを比較しながら、「言語」についての考え方を整理する。ラングとパロール。「言語音が集まって語となり、語が集まって文となる。」という見方の検討。	同　上	同　上
6	「国語」という教科は道具教科か	「言語教育はすべての教育学習の基礎だ。」という考え方の検討。外国語のイマージョン教育。「カリキュラムぜんたいを通しての言語教育」という考え方。	同　上	同　上
7	学力テストと言葉	教育評価のための指導目標の記述。「要目かす論」。唯言語主義（バーバリズム）を育てるテスト。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会・数学・理科の学習と言語	生活知と科学知とのつながり。外国人に「将軍と天皇はどうちがうか」とたずねられて。「円のまんなか」ではいけないか。「円の中心」でいいか。言語相対仮説をあらためて考える。	永野　重史	永野　重史
9	言葉のつかいかた(1)	モリスの「話しのタイプ」。マンドとタクトと反響語。「言葉のお守り的使用法」	同　上	同　上
10	言葉のつかいかた(2)	一般意味論の運動。言語学上の意味論との違い。一般意味論の主張。	同　上	同　上
11	字引と辞書	意味の説明とは。ソシュールのチェスのたとえ。良い辞書とは。個人にとっての言葉の意味。子どもがつくる辞書。	同　上	同　上
12	文字表現の読みと正書法	「正しい読み方」とは何か。音読みと訓読み。正書法。	同　上	同　上
13	文章の理解	文章の意味は書き手のものか、読み手のものか。三つの要素（言語、機能、状況）。	同　上	同　上
14	文章をつくる	こどもの作文とおとなの作文。感想文と科学論文。パラグラフ構成の指導。	同　上	同　上
15	言語観の拡張	認識の道具としての記号・数式・表・グラフ・コンピュータ。言語の分析から文化の分析へ。エティック的見方とイーミック的見方。	同　上	同　上

＝ 生徒指導（’９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 秦　政 春（大阪大学大学院人間科学研究科教授）〕

全体のねらい

いま学校のなかで、もっとも困難をきわめているものが生徒指導だといわれている。そうした生徒指導に関する実態を明らかにするとともに、現実に子どもたちがどんな非行・問題行動をおこしているのか、そしてその背景にどんな事情があるのか検討する。そうした検討をふまえて、生徒指導の今後のありかたを探っていきたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．生徒指導の実際 生徒指導の理念と実際	生徒指導の理念が、子どもたちのよりよい人間形成をはかるものであることはいうまでもない。しかし、実際には非行防止、非行対策の名のもとに「管理的」な色彩がますます強まっている。こうした実態のもつ問題状況を明らかにする。	秦　政春（大阪大学大学院人間科学研究科教授）	秦　政春（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
2	体罰に依存する教師	「管理的」生徒指導の基本的なものが体罰である。教師の体罰は学校教育法で禁止されているにもかかわらず、現実にはこれがかなり多い。ここでは、教師の体罰に関する実態を明らかにするとともに、これによってもたらされる悪循環について検討を加える。	同　上	同　上
3	校則（生徒心得）による管理	体罰と並んで校則（生徒心得）も、「管理的」生徒指導の1つである。これについてはよく「校則問題」というかたちで話題になっているが、これの実態、とくに規定の内容やどのように運用されているのかという点を中心にして検討を加える。	同　上	同　上
4	校則（生徒心得）の曖昧性	校則が「管理的」生徒指導の1つとはいっても、これ自体に教育的意味がないわけではない。むしろ、これが運用される場合に、これの性格の曖昧さのなかで問題が生じることが多い。簡単にいえば「心得」か「規則」かといった問題である。この点について検討を加える。	同　上	同　上
5	Ⅱ．非行・問題行動の実態 非行・問題行動に関する推移	昭和50年前後の「戦後第3のピーク」と呼ばれた少年非行の急増した時期以降、現在にいたるまでつぎつぎと子どもたちの問題行動が多発している。いじめ、不登校、校内暴力といった具合である。こうした推移を明らかにするとともに、その背景を検討する。	同　上	同　上
6	いじめ問題と子ども	昭和61年頃に急激に「鎮静化」したと思われていたいじめ問題は、実際には継続してきており、かつてより悪質な行為もみられるようになってきた。ここしばらくのいじめ行為の推移を明らかにするとともに、どういった背景からいじめが生じているのか検討する。	同　上	同　上
7	子どもたちのいじめ行為の特質	子どもたちのいじめ行為の特質をひと言でいえば「集団による弱者いじめ」ということになる。ここでは、いじめという行為の特質を考えるとともに、いかなるパターンや形態をもってこの行為が成立しているのか検討を加える。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不登校問題と子ども	いじめと並んで、不登校問題も大きな社会問題・教育問題としてクローズアップされている。しかも、不登校児童・生徒の数は、年々増加傾向をみせている。こうした量的な推移に加えて、質的にいかなる変化がみられるのか、その原因もあわせて検討する。	秦　政春	秦　政春
9	Ⅲ．子どもたちの状況 子どもたちのストレス	いまの子どもたちは、とても疲労しておりストレスがたまっている。しかも、これによってさまざまな症状がでている。なかには、極端な身体的不調や異常行動をとるケースも少なくない。こうした実態を明らかにするとともに、これの影響について考える。	同　上	同　上
10	ストレスと非行・問題行動	子どもたちのストレスは、たんに症状がでているというだけではない。これによって、さまざまな非行・問題行動に結びついていくことも少なくない。たとえば、ストレスの有無は、いじめ行為にも密接に関係がある。原因→ストレス→問題行動の関係を検討する。	同　上	同　上
11	子どもたちの規範意識	子どもたちの規範意識は、確実に崩れてきている。ささいな校則違反、服装違反ならともかく、明らかな反社会的行動、逸脱的行動に対しても「絶対にしてはいけない」という割合が低下してきている。こうした規範意識の崩れの背景を探ることにしたい。	同　上	同　上
12	Ⅳ．生徒指導を阻害するもの 教師のストレス	いま学校では、子どもたちにストレスがたまっているというだけではない。教師にもかなり厳しいストレスがある。そして、子どもたちと同様にさまざまな症状がでている。ここでは、こうした教師のストレスの原因、実態、その影響について明らかにする。	同　上	同　上
13	教師のストレスによる悪影響	教師のストレスは、確実に子どもたちに対して悪影響をおよぼしている。たとえば、子どもたちに「やつあたり」をするといった具合である。これに対して、子どもたちはまたストレスを感じ、教師に反抗するといった悪循環がある。こうした構造を明らかにする。	同　上	同　上
14	教師集団の人間関係の崩れ	生徒指導は、ひとりひとりの教師が個別的に行なうのでは限界がある。教師集団の連携や協力体制が不可欠の条件である。ところが実際には、あまり連携や協力体制がとれていない。こうした教師集団の組織化を阻害する要因がどこにあるのか明らかにする。	同　上	同　上
15	Ⅴ．生徒指導の今後 組織的でゆるやかな生徒指導	今後、どのような生徒指導のありかたを求めていけばよいのか。1つは、教師集団の連携や協力体制を基本にした組織的な生徒指導であり、いま1つは「管理」を脱却したゆるやかな生徒指導である。こうした生徒指導の実現に関する可能性を探っていく。	同　上	同　上

＝ 教育評価（'９９）＝（R）

〔主任講師：梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学長）〕

全体のねらい
教育における評価の問題について、いくつかの基本的な視点から考えてみる。とくに、学校での日常的な見とりや見きわめ、テストや成績づけなどのあり方を、子どもの学習や成長とのかかわりで原理的な地点から検討してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育評価のはたらき	評価は、学校といった組織的な教育形態において、古今東西を問わず行われてきた。教育においてなぜ評価が必要となるのか、学ぶ側、教える側、管理運営する側それぞれにとっての意義を考えてみる。	梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学長）	梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学長）
2	測定から評価へ	評価は客観的科学的ではなくてはならないという発想がある。しかしこれを押し進めていくと本当に大事な面が見落とされ、表面的なつまらない面ばかりが重視され評価されるという落とし穴に落ちる。この意味で1930年代のタイラー等の主張を振り返り、現代の評価論の大前提を考えてみる。	同　上	同　上
3	教育の目標と評価	教育に当たっては目標が体系的に設定されるが、その目標がまた評価の視点や基準となる。目標の明確化のためには、ブルーム等の『教育目標のタキソノミー（分類体系）』が有名であるが、こうした仕事の意義について考えてみる。	同　上	同　上
4	行動目標論の克服	子どもの学びや育ちを外的客観的に見ていくため、行動目標の考え方が提唱されてきた。しかし今や行動目標論は原理的に乗り越えられている。子どもの学びや育ちを本当に問題にするためには、内面を見落とすことはできないのである。こうした視点に立って、達成目標・向上目標・体験目標の考え方を述べる。	同　上	同　上
5	内面の育ちの把握	学びや育ちの現実を見てとるためには、関心や意欲や理解の状況など内面世界の読み取りが必要となるにしても、これは非常に困難な課題である。内面を洞察する上での手がかりを学校で具体的にどのように得られるか、授業とのかかわりを中心に考えてみる。	同　上	同　上
6	相対・絶対・到達度評価	子どもの学びや育ちを評価する際、他の子どもと比べて見る（相対評価）か、教える側の内的基準による判断に任せる（絶対評価）か、何らかの到達基準に達しているかどうかを見る（到達度評価）か、といった違いがある。それぞれの意義と問題点について考えてみる。	同　上	同　上
7	形成的な評価	得点や成績は、学びや育ちの「結論」であるかのように受け止められがちである。しかし本来それは、長い道のりの中でのラップタイム（途中計時）でしかない。教育におけるあらゆる評価は中間的かつ一時的なものであって、次の段階に役立って初めて意味を持つ、という形成的評価の考え方について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自己評価	学びと育ちは、最終的にはその人自身によって評価され、その人自身の次の段階に向けての努力を引き出し、支えるものでなくてはならない。自己教育を基礎づけるものとしての自己評価でなくてはならないのである。こうした自己評価の具体的あり方について考えてみる。	梶田　叡一	梶田　叡一
9	学習指導と評価	学習指導を有効かつ適切なものにするため、具体的にどのような場で、どのような評価活動を行い、それをどのように生かしていけばいいのか、さまざまな場合を例にとって考えてみる。	同　上	同　上
10	学力テストの論理と問題点	学力を客観的な形で測定するために工夫されてきたテストの構成と結果処理の考え方について検討する。特に旧来の集団標準にもとずくテスト（ＮＲＴ）と最近の到達基準にもとずくテスト（ＣＲＴ）とを比較する。さらに、高次の知的能力を測定するための工夫を見る。	同　上	同　上
11	知能検査を考える	20世紀初頭ビネによって考案されて以来、長い間にわたって「頭の良さ」を測る道具として用いられてきた知能検査はどのような論理に立つものであろうか。またその検査結果の表示法として用いられてきたＩＱ（知能指数）が今日なぜ信頼されなくなってしまったのであろうか。ＩＱ神話の成立と崩壊について考えてみる。	同　上	同　上
12	指導要録と通知表	学校での成績は、指導要録（学籍簿）と通知表に記入され、当人や親に対して権威を持ってきた。現在それはどのような形式・内容であるのか。その背後にある基本的な評価観は何であるのか。これまでの様式・記入法の変遷を見ながら検討する。	同　上	同　上
13	入学試験と進路指導	現在の入学試験や進路指導のあり方に偏差値教育と呼ばれるようなゆがみが生じているという指摘がある。過熱した受験準備体制の中では子供の発達そのものにもゆがみが現れざるをえない。これを是正するため、どのような入学者選抜方法を用いるか、どのような進路指導をしていくか、大きな課題である。この問題についていくつかの方向から考えてみる。	同　上	同　上
14	評価する側の眼	評価する側も人間である。固定観念を持って見てしまったり、背光効果や寛容効果などのゆがみが忍び込んでしまったりしがちである。しかし、自分の眼にどのようなゆがみの可能性があるかを認識することによって、そのゆがみに振り回されて非教育的な態度や決定を取ってしまうことも少なくなる。この問題について特に主要な点を検討する。	同　上	同　上
15	評価される側の心理	テスト不安など評価される場に身を置くことによって生じる心理的な効果についても考えておかねばならない。また、誉められたり叱られたりすることの効果の問題もある。評価される側がその評価によってどのような心理的影響を受けるか、いくつかの点から考えてみる。	同　上	同　上

＝ 心理測定法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：繁桝　算男（東京大学教授）〕

全体のねらい

心理学における測定の重要性がよく分かることを出発点とし、実際の測定方法、及び、それを支える理論について知ること、ついで、これらの測定から得られる心理学的知見について認識を深めることを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学研究法と測定	心理学研究における測定の重要性を説明する。実験によって得られるデータを分散分析によって分析し、研究の課題に答えるプロセスと、調査によって多変量データを得、多変量解析によって知見を得るプロセスを考察する。	繁桝　算男（東京大学教授）	繁桝　算男（東京大学教授）
2	知的能力の測定理論	創造性を含め知的能力の構造を因子分析によって探究する。I.Q.の歴史を批判的に概括し、知能テストの将来を展望する。	同上	同上
3	知能テストの実際	知能テストの実施の方法を示し、教育場面における知能の測定値の利用の仕方を説明する。	大六　一志（武蔵野女子大学講師）	大六　一志（武蔵野女子大学講師）
4	パーソナリティ・テストの測定理論	性格の測定の代表的な測定法、すなわち、質問紙法、投影法、作業検査法等代表的な測定法を紹介し、それらの違いを説明する。	丹野　義彦（東京大学助教授）	丹野　義彦（東京大学助教授）
5	パーソナリティ・テストの実際	認知療法を中心として、心理測定法が臨床現場にどう役立っているかを説明する。	同上	同上
6	社会的態度の測定	サーストン法とリッカート法による社会的態度を測定するための調査紙構成の方法を具体的に説明する。	繁桝　算男	繁桝　算男
7	精神物理学的測定法	物理的量と心理量との対応関係を探る。調整法、恒常法等伝統的な測定法について説明する。	佐藤　隆夫（東京大学教授）	佐藤　隆夫（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	一対比較法	心理量を測定する有力な方法、一対比較法の理論と具体的手続きを説明する。	繁桝　算男	繁桝　算男
9	興味と適性の測定	適性と興味を測定するテストの現状を説明し、進路指導におけるテスト資料の利用の仕方を実例に即して説明する。	西村　純一（東京家政大学教授）	西村　純一（東京家政大学教授）
10	テストの信頼性と妥当性	測定値の性能を記述する議論、特に測定値の信頼性と妥当性についてその理論的基礎と応用例を紹介する。	繁桝　算男	繁桝　算男
11	多次元尺度法	変数間の類似性行列から、変数を多次元的に図示する多次元尺度法について、心理学的応用例を通じて説明する。	前川　眞一（大学入試センター助教授）	前川　眞一（大学入試センター助教授）
12	公理論的測定論	公理論的なアプローチを説明し、心理量の測定はそもそも可能なのかに関する問に答える。	繁桝　算男	繁桝　算男
13	因子分析と共分散構造分析	潜在する因子を抽出する因子分析と、さらに、これらの潜在因子間の因果関係をモデル化する共分散構造分析（構造方程式モデル）について例を用いながら、そのコンセプトを説明する。	同上	同上
14	項目反応理論	学力の測定において、モデルを通して、正誤データから、真の学力の推定値を得る方法について説明する。	前川　眞一	前川　眞一
15	意思決定と測定	意思決定の規範理論及び主観確率と効用の測定の具体的な方法を説明する。	繁桝　算男	繁桝　算男

＝ 日本の法システム（’００）＝（R）

〔主任講師：六本 佳平（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代化のために輸入した日本の法システムが、今日の開かれた流動社会に適しい制御機能を果たしているか。歴史的背景・社会的諸因子・文化的思惟構造と関連づけて調査データによって実態分析し、近代西洋型法システムの利点と限界の観点から考察し、改善の方向を論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法システムと法過程	法システムは、個々人の価値や利害を社会に統合する装置のひとつであり、拘束力ある実定法規範体系と、その適用・実現のための機構からなる。社会構成員がこれを主体的に活用する法過程として、紛争処理・法役務・裁判・強行・規制等がある。	六本 佳平（放送大学教授）	六本 佳平（放送大学教授）
2	法文化	法システムは、歴史的に伝承された文化的与件の中で働く。法制度が立法で形成・改変され、人々が争いを起こし、法機構を利用し、裁判所が紛争を処理する諸過程に、日本文化は浸透する。文化とは何か、文化は変わるか、文化を測定・比較できるのか？	同上	同上
3	紛争	法システムが働くさいに直接の対象となる紛争の概念と過程を解明する。紛争処理の社会的過程を、当事者が手持ちの資源や第三者を動員して目的を達する過程として捉える。その中で紛争の法的処理の持つ意義、そのための制度を明らかにする。	同上	同上
4	法使用	個人や組織に生じる法律問題は、社会構成員の法システムに対する需要を表す。法律問題のさまざまの種類、およびその解決のために法システムが提供する手段(法律相談・弁護士・裁判所など)が使用され、またはされない社会的諸条件をデータで見る。	同上	同上
5	紛争処理	法システムの下での紛争過程は、原理的に、法的基準に志向した交渉の過程であり、裁判外の非公式処理から裁判による公式処理にいたる連続的な過程として捉えられる。泣き寝入り・示談・弁護士交渉・調停・和解・判決等にいたる社会的諸条件を見る。	同上	同上
6	法律家	弁護士は、法律問題を持つ個人や組織に法役務を提供する専門職業家である。日本の弁護士制度、その歴史的背景、職業としての社会的特色、法役務の種類、法システムにおける役割、弁護士の職業組織、職業倫理、職業行為を規定する社会的諸条件を見る。	同上	同上
7	法役務1	弁護士の事務所組織・共同経営化・補助員などの業務・経営体制が弁護士による法役務過程に及ぼす影響を見る。日本の弁護士が扱う業務および顧客層のデータ分析から、社会関係や社会過程を法的に制御する機能が十分果たされているかを問う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	法役務2	弁護士の法役務を補完する司法書士・弁理士等の法律関連職業、企業法務員、諸種の法律相談機関、また法使用の機会均等を図る法律扶助制度の現実の機能を見る。弁護士役務の供給量を規定する法曹養成制度の問題点、その改革をめぐる状況を分析する。	六本　佳平	六本　佳平
9	裁判制度	法的争点に最終決定を下す裁判官と裁判制度を取り上げる。日本の裁判制度の歴史的背景、裁判官職業の特色、キャリア裁判官制と法曹一元制との得失を論じ、陪審に代る日本の特徴である調停やその他の準裁判を含めた争訟処理体系についてデータで見る。	同　上	同　上
10	民事裁判	日本の裁判所は紛争の法的処理による社会制御機能を十分果たしているか。訴訟事件とその処理様式、近年の事件数の急増をデータでみる。和解処理の要因、判決との分岐点、取立事件の処理、現代型訴訟の特色、判決の司法行動分析等を論じる。	同　上	同　上
11	刑事裁判と規制	警察による犯罪の抑止・摘発の過程、および行政による法発動によって社会を法的に整序する規制過程を取り上げる。担当組織の人員その他の資源、事件認知の方法、強行・規制対象との関係、実効性確保のための社会的諸条件等をデータで見る。	同　上	同　上
12	法と社会変動1	実定法規範体系の内容を社会の変化に従って変える必要がある。また、実定法の変更によって社会のあり方を望ましい方向に変化させることが試みられる。この法と社会との相互作用が円滑に運ばれるための条件を、家族・農家相続に関するデータで見る。	同　上	同　上
13	法と社会変動2	前回と同じ問題を、不動産の賃貸借・雇用男女均等法について見る。新しい権利や規範が形成される社会的背景と過程、立法のための政治過程、それが実定法機構によって社会に貫徹される諸条件、社会の中に根づいている生きた法との交錯等を論じる。	同　上	同　上
14	法と社会学的理論	人間の社会的行為の性質、規範現象の性質と意義、法システムの一般的な構造と社会制御機能、近代法の利点と限界、法と社会・権力構造、未開法以降の法システムの形態発展、法の文化的多様性、現代法の特質等について、社会科学的な法理論を概観する。	同　上	同　上
15	日本の法と社会	講義全体を総括し、日本の近代法システムの歴史的形成・発展、日本の法と社会についての学説の展開、グローバルに開かれた社会形成における法の役割、日本の法文化、法に関する経験的研究の課題等について展望する。	同　上	同　上

＝ 法と裁判（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山　善充（成蹊大学教授）〕
〔主任講師：井上　正仁（東京大学教授）〕

全体のねらい
現代社会における法と裁判の基本的仕組み、理念および問題点を平易に解説し、あわせて民事裁判および刑事裁判の当面する諸問題を学生とともに考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間の社会と法	「社会あるところ、法あり」といわれる。法とは何か、それは何を目的としているかを考え、実定法の体系を概観する。	青山　善充（成蹊大学教授）	青山　善充（成蹊大学教授）
2	日本における法と裁判制度の近代化	日本は明治維新後、西洋の法を継受し、近代的な司法制度を作った。その後、第2次大戦直後、憲法を初めとする法の根本変革を経験し、現在また大変革期を迎えている。法と司法制度の変遷を振り返る。	同　上	同　上
3	司法権の機能と裁判所の種類・役割	三権のうち司法権は、立法権や行政権に対してどのような機能を果たすことが期待されているか。司法権を担う裁判所にはどんな種類のものがあり、それぞれの裁判所はいかなる役割を果たしているか、を考える。	同　上	同　上
4	裁判を受ける権利と裁判の公開	憲法は、国民に「裁判を受ける権利」を保障し、裁判の公開を要請している。裁判を受ける権利とは、具体的に何を意味するのか、裁判の公開の目的は何か、現在どのようなことが問題になっているかを見る。	井上　正仁（東京大学教授）	井上　正仁（東京大学教授）
5	国民の司法参加	国民の司法参加にはどのような形態があるか、日本ではどこまで行われているか、そのメリット・デメリットは何か、を諸外国の例と比較しながら考える。	同　上	同　上
6	民事紛争とその解決方法	民事関係の紛争には、どんなものがあるか、どのような方法で解決されるか、裁判による解決とそれ以外の解決では、どのように違うか、を考える。また、裁判手続や強制執行の流れも、ここで見ておく。	高橋　宏志（東京大学教授）	高橋　宏志（東京大学教授）
7	市民生活と調停および裁判	日常生活の中で市民は様々な法的トラブルに出会う。その解決方法として、民事調停・家事調停および訴訟（とくに少額訴訟手続）を見てみる。また、近時増えている個人破産の問題も考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業活動と裁判	企業活動の多面的・国際的展開に応じてこれをめぐる法的紛争が国内的にも国際的にも増加している。その解決手段として裁判を取り上げる。また国際商事紛争の解決手段としての仲裁を考える。	伊藤　眞（東京大学教授）	伊藤　眞（東京大学教授）
9	行政活動と刑罰	国や地方公共団体の行政活動の違法性が裁判で争われる場面が増えてきている。そこで、取消訴訟を例にとって、行政裁判とは何か、その問題点はどこにあるかを考える。	同　上	同　上
10	犯罪と刑罰	犯罪とは何か、刑罰はなぜ科せられるのか、という基本問題を踏まえつつ、現代における刑法の存在意義とその機能を検討する。	佐伯　仁志（東京大学教授）	佐伯　仁志（東京大学教授）
11	犯罪と捜査	犯罪捜査手続を概観したうえで、その当面する問題につき、検討する。	井上　正仁	井上　正仁
12	犯罪と裁判	起訴から公判、裁判に至る手続を概観したうえで、その当面する課題につき、検討する。	同　上	同　上
13	少年非行と法	少年非行・少年犯罪とそれに対する法制度上の対応につき、近時の少年法改正問題などにも言及しつつ、検討する。	川出　敏裕（東京大学助教授）	川出　敏裕（東京大学助教授）
14	法律家の役割	弁護士を中心としつつ、裁判官や検察官を含め法律家の役割・責務を見てみる。	井上　正仁	井上　正仁
15	法律家の養成	司法試験や法曹教育、それと大学での法学教育との関係などにつき、検討する。	青山　善充 井上　正仁	青山　善充 井上　正仁

＝ 紛争と民法（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：淡路　剛久（立教大学教授）〕

全体のねらい

民法の財産法の部分を講義する。対象の学生が、教養学部生であること、時間数が圧倒的に少ないことなどを考慮して、法典の体系や理論の体系から演繹的に説明する仕方をとらず、私的な争い（民事紛争）から始めて、それが民法ではどのように解決されるかの説明を通じてやや一般化し、民法を理解してもらう。以下は、テンタティブな講義概要。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民法とはなにか（１）－私的な争いとその解決	具体例。争いには国と国、国と私人、私人間などいろいろあり、その解決の仕方も、実力行使、権威ある第三者の仲介、かつての経験、予め存在する基準などがあることを説明して、民事紛争とその近代的な解決方式としての裁判制度について述べ、民法の存在理由を明らかにし、民法が私法の原則法だといわれるゆえんであるその特徴、民法の要素（私的所有権、契約、法的人格）を説明する。	淡路　剛久（立教大学教授）	淡路　剛久（立教大学教授）
2	民法とはなにか（２）－民法と民法典	民法的な解決の基準となる制定法（民法典、特別法）、慣習法、判例、条理などを説明した上で、民法典の成立史、民法典の構成を説明する。	同　上	同　上
3	民法の主体と客体－権利と義務、人と法人	具体例。民法的な法律関係が権利と義務によって構成されること、権利の行使と義務の履行は信義誠実にしなければならないこと、権利濫用はしてはならないこと、財産法上の権利には物権と債権があること、権利義務の主体となる資格が権利能力であることを明らかにし、人（自然人）に関する制限能力制度、法人制度について説明する。	同　上	同　上
4	加害をめぐる争い（１）－不法行為・不法行為法・過失損害賠償責任	具体例をあげて、不法行為とはなにか、不法行為法とはなにかを説明した上で、過失損害賠償責任についての７０９条の要件を説明する。因果関係、過失、権利侵害と違法性。	同　上	同　上
5	加害をめぐる争い（２）－無過失損害賠償責任と中間的責任	争いの具体例をあげつつ、中間的責任の意味を明らかにし、使用者責任、工作物責任、無過失責任に近い自動車運行供用者責任を説明し、無過失責任としては、原子力損害賠償責任、製造物責任などを説明する。	同　上	同　上
6	加害をめぐる争い（３）－不法行為責任の効果	具体例をあげて損害賠償、原状回復と差止について説明した後、損害賠償請求権の主体、損害賠償の内容を説明する。	同　上	同　上
7	契約をめぐる争い（１）－契約の成立および効果とその障害	具体例をあげて、契約はどのようにして成立するかを説明する。当事者の意思の合致、代理人による場合、無権代理と表見代理など。その効果が妨げられる場合として、公序良俗違反による無効、錯誤による無効、詐欺（・強迫）による取消を説明する。契約の種類。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	契約をめぐる争い（2）－契約の履行と不履行	具体例をあげて、契約が約束どおり履行されて（信義則を含む）契約にもとづく債権、債務が消滅する過程を説明した上で、契約が約束どおり履行されない場合に、債権者が取ることができる現実的履行の強制、債務不履行に基づく契約の解除、損害賠償について説明する。なお、消滅時効にふれる。	淡路　剛久	淡路　剛久
9	契約をめぐる争い（3）－売買	具体例をあげて、一時的債権契約の典型例としての売買についてその成立要件と効果を説明した上で、売買契約が履行されなかった場合の債務不履行について振り返り、売買の目的物に瑕疵があった場合の担保責任について説明する。	同　上	同　上
10	契約をめぐる争い（4）－賃貸借	具体例をあげて、継続的債権契約の典型例としての賃貸借についてその成立要件と効果を説明した上で、借地借家関係の争い、その解決を借地借家法を中心に説明する。	同　上	同　上
11	契約をめぐる争い（5）－消費者契約	具体例をあげて、現代的な問題である消費者問題を説明し、割賦販売法、訪問販売法、消費者契約法による解決について説明する。	同　上	同　上
12	不動産をめぐる争い（1）－物権と物権法	具体例をあげて、物権と物権法について説明した上で、物権の基本型である所有権について説明する。相隣関係、所有権の取得（取得時効を含む）、共有（マンションの法律関係を含む）、物権の妨害に対する物権的請求権など。権利濫用が適用される一場面。	同　上	同　上
13	不動産をめぐる争い（2）－土地と家屋の権利関係	具体例で不動産の権利関係をめぐる争いを示した上で、その解決、とくに不動産の対抗要件としての登記による解決を説明する。	同　上	同　上
14	担保をめぐる争い（1）－担保物権と抵当権	具体例をあげて、担保物権の概略を説明した上で、抵当権とはなにか、成立要件と効果の原則を説明し、抵当権の効力が及ぶ範囲、法定地上権、短期賃借権の保護、根抵当権制度の概略を説明する。	同　上	同　上
15	担保をめぐる争い（2）－保証	具体例をあげて、人的担保の概略を示した上で、保証の成立要件と効果を説明する。保証債務の範囲、保証債務の付従性、保証人の抗弁権、保証人の求償権など。普通の保証と連帯保証、根保証など。	同　上	同　上

＝ 家族法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：泉　久雄（専修大学名誉教授）〕

全体のねらい

家族法は、私たちの保族生活である夫婦、親子の生活関係（それに相続を含めて）を対象とした法の世界であるが（民法典では、親族法と相続法といっている）、保族生活は人類の生存に不可欠であり、人類生存の基礎である。そういった認識の下に、現行家族法の描く家族関係の全体と理想像を追及したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	(1)現行家族法の理念と構成 (2)家族法の基礎的概念	現行家族法は核家族を念頭において個人の尊厳と両性の平等を理念として、その上に夫婦・親子の関係を規律していることを明らかにする。 次に、家族法の基礎的概念である、血族と親族関係を説明する。	泉　久雄（専修大学名誉教授）	泉　久雄（専修大学名誉教授）
2	婚姻(1) 婚約 婚姻の成立	婚姻の成立をめぐる問題を一括説明する。第１に婚約をめぐる法律問題、第２に婚姻の成立要件、第３に成立要件に違反した婚姻の効力＝無効・取消を説明する。	同上	同上
3	婚姻(2) 婚姻の効力	氏とか貞操義務といった婚姻の一般的効力と夫婦財産制（婚姻生活をめぐる財産関係）を説明する。民法は夫婦の財産関係について別産制を採っている。別産制の長所と欠点は何か、その解決策は？といった問題にもふれたい。	同上	同上
4	離婚(1)	離婚は当事者に再婚の可能性を保障する制度であるが、わが国の離婚制度がヨーロッパとちがった道を歩んで来たことを明らかにし、ついで、統計を使いながら、今日の離婚の全体像と離婚法の構造および特色を説明する。	同上	同上
5	離婚(2)	民法に規定する離婚の方法、協議離婚と裁判離婚を（めぐる問題を）説明し、続いて離婚の効果（親権者の決定とか財産分与など）を説明する。	同上	同上
6	内縁	内縁の判例法はわが国特有の法領域であるが、どうしてそうなっているのかを判例の変遷をたどって説明し、ついで内縁判例法の現状を説明する。内縁以外の男女共同生活（同棲）にもふれたいと思う。	同上	同上
7	親子(1)	親子関係には実親子と養親子があり、実親子は婚姻によって出生した嫡出子と婚姻外の子、非嫡出子がある。人工生殖子もある。こういった親子関係の成立をめぐる問題を説明する。通常、教科書では、実子、養子として説明されている部分である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	親子(2)親権	子の監護教育を民法は親権という表類のもとに一括して規定しているが、親権は子の身上監護（子育て）と財産管理の二分野から成っている。それを説明し、親権の剥奪にもふれたいと思う。	泉　久雄	泉　久雄
9	扶養	広く扶養というときには、夫婦間の扶養（婚姻費用の分担）、未成熟子の扶養（養育ないしその費用の支出）、それ以外の親族間の扶養の三種を含む（私的扶養という）が、私的扶養と公的扶助との関係から始めて、親族間の扶養を説明する。	同　上	同　上
10	現行相続法の基礎と特色	現行相続法は諸子均分相続制と配偶者相続権の強化（それに遺言の自由を加えてもよい）を柱として組立てられているが、それはどういう理由によるのか、明治民法の家督相続の理念、相続制度の歴史などを引合いに出しながら説明する。	同　上	同　上
11	相続人	相続人には血族相続人と配偶相続人とがあるが、その相続順位を説明し、ついで相続権剥奪制度である、相続欠格と相続人の廃除制度を説明する。続いて相続の仕方（相続の承認・放棄）に進み、最後に相続人不存在の場合の遺産の行方を説明する。	同　上	同　上
12	相続の効力	生命侵害に対する損害賠償請求権の相続と、保証債務の相続を通して、相続が故人の遺産を承継する制度であることを明らかにする。祭祀財産の承継にもふれる。次に、遺産分割をするまで、相続した遺産の管理がどういう形で行われるかを説明する。	同　上	同　上
13	遺産分割	遺産分割の前提となる各相続人の相続分を説明し、ついで遺産分割の二つの方法、協議分割と審判分割について注意すべき問題点を説明する。	同　上	同　上
14	遺言(1)	遺言が死後行為（遺言者の死亡によってはじめて効力が生ずる）であることを述べ、続いて、遺言の内容を明確にするために定められている、遺言の方式（仕方）を説明する。遺言の撤回にもふれる。	同　上	同　上
15	遺言(2)	遺言による財産処分、遺贈をめぐる問題を説明し、遺留分との関係にふれる。最後に、遺言を実現する方法である、遺言の執行を問題にする。	同　上	同　上

＝商　　法（’９９）＝（R）

〔主任講師：森本　滋（京都大学教授）〕

全体のねらい

公開会社の実態を前提に、株式会社の設立・管理運営機構・資金調達さらには合併等の組織再編にかかる商法と証券取引法の規制および企業取引活動に関する基本的な法制度を概説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	株式会社、とりわけ、公開会社の組織の基本構造の概要（商号・商業帳簿・機関等）と公開会社にかかわる基本的な法規制（商法・証取法・独禁法・経済法等）を解説する。	森本　滋（京都大学教授）	森本　滋（京都大学教授）
2	経営管理機構その一（株主総会）	公開会社の株主の法的地位を説明した後、株主総会の招集手続・議事運営・権限、および、株主代表訴訟等の株主の監督是正権について解説する。	同上	同上
3	経営管理機構その二（企業経営）	取締役の法的地位を整理した後、取締役会制度と代表取締役および業務担当取締役について検討する。	同上	同上
4	経営管理機構その三（経営コントロール）	公開会社の健全かつ効率的な経営を確保するために、商法が規定する経営コントロールないしチェック機構（取締役会・監査役・会計監査人）の概要を示した後、決算手続における経営チェック・システムについて説明する。	同上	同上
5	企業結合法	公開会社の合併・営業譲渡、分社化としての子会社設立、さらに、持株会社の設立について、商法・証券取引法、さらに、独禁法の規制の概要を解説する。	同上	同上
6	資金調達	公開会社の資金調達方法としての新株発行と社債の募集について、商法と証券取引法の発行開示規制を合わせて解説する。	同上	同上
7	計算・監査・公開（企業会計法）	公開会社の計算・監査・公開制度を、資産の評価と合わせて解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	商法と証券取引法	公開会社の組織に関する体系的な法規制としての、商法と証取法および開示の関係を整理した後、証券業者にかかる証取法の規制内容について解説する。	森本　滋	森本　滋
9	閉鎖会社法	中小規模の株式会社と有限会社の管理運営（同族会社の法的問題）について解説する。	同上	同上
10	銀行と企業	銀行（金融機関）が、企業の組織活動および取引活動に対してどのような役割を果たしているか、とりわけ、企業の資金調達と手形・小切手取引における銀行の役割を説明し、銀行法についても解説する。	同上	同上
11	約束手形の一生	企業取引における決済手段としての約束手形について、銀行取引と関連付けて解説する。	同上	同上
12	企業取引と民法・商法	企業取引にも取引にかかる一般法である民法が原則として適用されるが、商法は民法の特則ないし特別規定を定める。この商法の特則の解説を通して企業取引の特色を明らかにする。なお、消費者保護の問題についても簡単に触れる。	同上	同上
13	問屋・運送業・倉庫業	企業の取引活動を補助する補助商として、問屋・運送業・倉庫業等がある。これらの補助商にかかる商法の特則と関連業法について触れた後、貨物引換証についても簡単に解説する。	同上	同上
14	保険と代理商	保険制度について概説した後、生命保険を巡る最近の法的問題（変額保険・団体保険等）について、代理商・保険ブローカー制度と併せて検討する。	同上	同上
15	まとめ	これまでの講義内容をまとめたあと、最近の改正動向に触れつつ今後のわが国の企業法制の在り方について検討する。	同上	同上

＝ 市民生活と行政法（’０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：芝池　義一（京都大学教授）〕

全体のねらい

私たち市民の生活上の関係は、一般の個人を相手方とすることもあれば、企業を相手方とすることもあるが、さらに、行政を相手方とすることがある。私たち市民にとって、行政との関係はかなり大きな比重をもっている。そして、この市民と行政との関係は、法律・条例などの法によって規律された関係である。この市民と行政との法的な関係の有り様（ありよう）を描き出すことが、本講義の課題である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	行政法と行政活動	まず、行政法とはどのような性格の法か、どのような形で存在するか（存在形式）、どのような種類があるか、といったことを説明することによって、行政法についてのイメージを形成する。そのあと、行政法が規律の対象とする行政活動の主体（国・地方自治体など）および行政活動の種類について説明する。	芝池　義一（京都大学教授）	芝池　義一（京都大学教授）
2	法治主義・違法性・行政裁量	まず、行政法における最も基本的な原則である法治主義の原則について説明する。そのあと、違法性の問題に入り、それとの関連で、とくに行政に裁量が認められている場合のその限界について説明する。	同　上	同　上
3	行政処分の成立と効力	この週から、行政活動の説明にはいるが、最初に取り上げるのは、行政活動のうちでも最も重要な役割を果たしている行政処分である。この週では、行政処分の成立、それに関連する行政庁の審査応答義務、成立した行政処分に認められる効力について説明する。	同　上	同　上
4	行政処分の職権取消しと撤回	この週も引き続き、行政処分の法理について説明する。具体的には、違法に行われた行政処分の取消し（行政庁による取消し）、および適法に行われた行政処分の撤回について説明する。	同　上	同　上
5	行政による強制と制裁	国民が行政法令や行政の命令に従わなかった場合、１つには、行政による強制執行が行われる。また、国民に対して、制裁が加えられる場合がある。第５週では、これらについて説明する。	同　上	同　上
6	行政指導	行政の活動のうちの最も重要なものは、第２週から第４週で説明する行政処分であるが、わが国では、行政指導も大きな役割を果たしている。行政指導とは、通例指導・勧告・助言などと呼ばれるものである。行政指導については、行政手続法に規定があるので、それに即して説明する。	同　上	同　上
7	行政手続法	行政手続とは、行政の意思決定に先立ち行われる手続であるが、その種別についてまず述べ、そのあと、行政手続法などの法律に即して行政手続の制度について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報公開法	情報公開は、近年とくに重視されるようになってきている法的価値である。この情報公開については、まず地方自治体で情報公開条例が制定されたが、１９９９年、国において情報公開法が制定されたので、これに即して情報公開制度について説明する。	芝池　義一	芝池　義一
9	行政訴訟法総説	この第９週から最後の第１５週まで行政救済法について説明する。行政救済法とは、行政の活動により国民が権利や利益を侵害された場合の救済に関する法である。第９週では、まず、行政救済法全般について簡単に説明したあと、行政訴訟の形式について概観する。	同　上	同　上
10	取消訴訟の機能と訴訟要件	行政訴訟のうち最も重要な訴訟は取消訴訟であり、取消訴訟において裁判実務上大きな問題になっているのはその訴訟要件である。そこで、取消訴訟の機能について述べたあと、訴訟要件の問題に入り、取消訴訟の対象（行政処分）、原告適格および訴えの客観的利益について説明する。これらは、取消訴訟を適法にするための要件であるが、今日のわが国では大きな論点になっているものである。	同　上	同　上
11	取消訴訟の判決	取消訴訟が訴訟要件を備え、適法である場合、裁判所は訴えの中身（本案）について審理し、判決を下すことになる。この判決にはどのようなものがあり、どのような効力を有するかが説明される。	同　上	同　上
12	取消訴訟における仮の権利保護	一般に訴訟が判決によって決着がつくまでには、長い年月を要することが少なくない。このために、民事訴訟の世界では、仮処分などの制度がある。行政訴訟の世界では、仮処分は大幅に制限され、執行停止の制度が設けられているので、これについて説明する。	同　上	同　上
13	公権力の行使と国家賠償責任	この第１３週と第１４週には、行政救済のうちの金銭による救済である損害賠償について説明する。行政の世界では、民法の損害賠償についての規定が適用されることもあるが、民法とは別に、国家賠償法という法律が制定されている。第１３週では、この国家賠償法が定めている公権力の行使に対する賠償責任の制度（国家賠償法１条）について説明する。	同　上	同　上
14	営造物の管理と国家賠償責任	第１３週に引き続いて、国家賠償責任の制度について説明するが、今回取り上げるのは、いわゆる営造物（道路や河川など）の設置・管理に瑕疵があった場合の損害賠償責任すなわち営造物管理責任の制度（国家賠償法２条）である。	同　上	同　上
15	損失補償法	国・公共団体が適法な活動により国民の権利や利益を侵害した場合に、国・公共団体が行う損失の補填を損失補償といい、これについて説明する。この損失補償については、国家賠償法のような一般的な法律がないので、一方では、憲法２９条３項の解釈、他方で、個別法律における補償規定の解釈が問題になる。	同　上	同　上

＝ 刑法（’０１）＝（R）

〔主任講師：西田　典之（東京大学教授）〕

全体のねらい

刑法とは犯罪と刑罰に関する法である。本講義では、まず、刑罰の目的、刑法の役割、罪刑法定主義などの基本的論点を踏まえたうえで、犯罪の一般的成立要件を解説する。そのうえで、刑法典各則の主要な犯罪およびコンピュータ犯罪、総会屋への利益供与罪、インサイダー取引等の証券犯罪などの現代型の犯罪について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	刑法とはなにか。	刑事事件と民事事件の区別や各種の制裁の区別から、刑罰を制裁とする刑罰法規の意義や種類を明らかにするとともに死刑、懲役、罰金などの刑罰の内容を解説する。	西田　典之（東京大学教授）	西田　典之（東京大学教授）
2	刑法はいかに実現されるか。	刑法という実体法の実現手続である刑事裁判のプロセスについて簡単に説明する。あわせて、微罪処分、起訴猶予、執行猶予制度などの非刑罰的処理についても言及する。	同　上	同　上
3	刑罰の目的	応報刑、予防刑、改善・教育刑などの刑罰の本質をめぐる論争を紹介し、刑罰の目的についての考え方を検討するとともに、これと関連する犯罪観の対立である「学派の争い」について解説する。	同　上	同　上
4	刑法の機能	人権・自由保障機能、法益保護機能、社会秩序維持機能など、さまざまな刑法の機能についての考え方を紹介し、現代社会において刑法の果たすべき役割について検討する。なお、罪刑法定主義についても一部言及する。	同　上	同　上
5	罪刑法定主義	近代刑法の基本原則である罪刑法定主義について、その意義、内容を説明し、あわせて、刑法の解釈のあり方について検討する。	同　上	同　上
6	犯罪論の構成	犯罪成立の一般的要件である構成要件該当性、違法性、有責性という段階的構造についての基本的な考え方を説明するとともに、刑法典の構成について解説する。	同　上	同　上
7	構成要件とはなにか	構成要件とういう概念について解説し、あわせて、その重要な内容である因果関係論、不作為犯論、法人処罰について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	違反性	実質的違法性の考え方とそこから導かれる違法阻却の原理について説明したのち、正当防衛、緊急避難、正当業務行為などの違法阻却事由について説明する。	西田　典之	西田　典之
9	有責性	責任の要件である責任能力、故意、過失について解説したのち、事実の錯誤、禁止の錯誤、違法の意識の問題について検討する。	同　上	同　上
10	未遂・共犯	未遂犯および共犯について、刑法典の規定を説明し、関連する諸問題である不能犯、中止犯、共謀共同正犯などについて検討する。	同　上	同　上
11	生命・身体・自由に対する罪	殺人罪、傷害罪、逮捕・監禁罪、脅迫罪、誘拐罪などについて解説し、あわせて、臓器移植法、人質強要罪などに言及する。	同　上	同　上
12	財産に対する罪	窃盗罪、強盗罪、詐欺罪、横領罪、背任罪などの財産犯の体系および個別的内容について解説するとともに、カード犯罪、情報犯罪などにも言及する。	同　上	同　上
13	社会的法益・国家的法益に対する罪	放火罪などの公共危険罪、文書偽造罪、収賄罪などについて解説し、あわせて、テレフォンカードの偽造、コピーによる文書偽造などの問題についても言及する。	同　上	同　上
14	コンピュータ・カード犯罪	昭和62年に新設された各種のコンピュータ犯罪について、その導入の必要性や内容を説明し、平成11年に成立した不正アクセス禁止法についても解説する。また、クレジットカードの偽造の問題にも言及する。	同　上	同　上
15	経済犯罪	商法罰則における総会屋への利益供与罪、証券取引法におけるインサイダー取引や株価操作の罪などについて、その実態や解釈上の問題点などを解説する。	同　上	同　上

＝ 経済法（’００）＝（R）

〔主任講師：根岸　哲（神戸大学教授）〕

全体のねらい

市場経済体制の下で国家が経済的規制を行うための法である経済法は、主として、独禁法、各種事業法および通商法から構成されているが、その基本法は独禁法であることから、独禁法の内容と現実の機能の解説に講義の中心を置きつつ、それと関連づけながら各種事業法と通商法の近年の動向についても明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済法とは何か	市場経済体制ないし自由経済体制の下で国家が経済的規制を行うための法を経済法と総称しているが、経済法は、主として、公正かつ自由な競争を促進するための規制を行う独禁法、競争が適切に機能しない事業分野で競争制限的な規制を行う各種事業法、および公正かつ自由な通商を促進するための規制を行う通商法から構成され、その基本法が独禁法であることを解説する。	根岸　哲（神戸大学教授）	根岸　哲（神戸大学教授）
2	第二次大戦後の経済法の展開	第二次大戦後、占領政策として経済民主化政策が実施され、独禁法が経済憲法としての位置づけを与えられ民間主導型の経済運営を基本とすることが意図されたものの、現実には、昭和40年代までは政府主導型の経済運営を基本とし、国内産業を保護しつつ国際競争力を強化することを意図とした競争制限的な規制や行政指導が広範囲に活用され、占領政策の意図が現実化しだしたのは、政府規制の緩和と独禁法の強化を本気で実行せざるを得なくなった平成元年に開始された日米構造問題協議を待たなければならなかったことを解説する。	同　上	同　上
3	独禁法の目的と規制概要	経済法の基本法である独禁法の目的が「公正かつ自由な競争の促進」によって「一般消費者の利益の確保と国民経済の民主的で健全な発達の促進」を図ることにあり、独禁法は、その目的を実現するために、私的独占、カルテルを典型例とする共同行為、不公正な取引方法など事業者または事業者団体による競争制限的な行為や状態に規制を加え、専門的規制機関として公取委を設けていることを解説する。	同　上	同　上
4	共同行為の規制（1）	独禁法制定以来違反事件として取り上げられた行為のうち最も多いのは、価格カルテル、入札談合などの競争制限的な共同行為であり、競争制限的な共同行為は事業者によって行われることも事業者団体によって行われることもあるが、ここでは主として事業者による競争制限的な共同行為である不当な取引制限（3条後段・2条6項）の要件について具体例を取り上げて解説する。また、広い意味において共同行為の規制に含まれる、寡占企業による価格の同調的引上げの理由報告徴収制度（18条の2）もここで取り上げる。	同　上	同　上
5	共同行為の規制（2）	競争制限的な共同行為は事業者団体によって行われることも多く、不当な取引制限との関係に言及しつつ事業者団体による競争制限的な共同行為に対する独禁法の規制（8条）について解説するとともに、価格および供給量の制限に係る競争制限的な共同行為を実行した事業者および事業者団体の構成事業者に対して課される課徴金納付命令制度について解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	不公正な取引方法の規制（1）	独禁法違反事件して取り上げられる行為として競争制限的な共同行為に次いで多い不公正な取引方法は、公正な競争を阻害するおそれ（公正競争阻害性）がある行為であって公取委が指定する行為である（19条・2条9項）ので、公正競争阻害性の要件と公取委による不公正な取引方法の指定内容の概要について解説する。	根岸　哲	根岸　哲
7	不公正な取引方法の規制（2）	公取委による不公正な取引方法の指定には一般指定と特殊指定とがあり、このうち一般指定には16の多様な類型の不公正な取引方法が含まれているが、このうち重要な不当な取引拒絶、不当廉売、ぎまん的顧客誘引、不当な利益による顧客誘引、不当な抱き合わせ、不当な排他条件付き取引、再販売価格維持行為、不当な拘束条件付き取引、優越的地位の濫用、競争者に対する不当な取引妨害を取り上げ具体例に即して解説する。	同　上	同　上
8	独占・集中の規制（1）	独禁法は独占・集中に対する規制として、私的独占の禁止（3条前段・2条5項）、独占的状態に対する措置（8条の4・2条7項）、合併・営業譲受・株式保有・役員兼任等の企業結合に対する制限（第4章）を定めているが、まず、前二者について具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
9	独占・集中の規制（2）	独禁法による企業結合の制限は、事業支配力の過度集中を防止する持株会社の制限（9条）、大規模事業会社の持株の総額制限（9条の2）および金融会社の持株制限（11条）と、一定の取引分野における競争を実質的に制限することとなる株式保有、役員兼任、合併、営業譲受等の禁止とに分けられるが、両者について具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
10	知的財産権と独禁法	特許権、ノウハウ、著作権等知的財産に対する一定の独占的利用権を与える知的財産権と公正かつ自由な競争の促進を目的とする独禁法との関係について基本的にとのように捉えるべきかを検討するとともに、マイクロソフト事件、ばちんこ機製造特許プール事件、プレステーション用ソフト中古販売制限事件等の具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
11	独禁法の執行・実現	独禁法違反に対する措置として、行政措置としての排除措置命令と課徴金納付命令、刑事罰、および損害賠償請求等の民事救済が用意され、いずれの措置の発動においても公取委の役割が大きい公取委中心主義が採用されていることから、それぞれの措置の内容と発動実績を明らかにするとともに、公取委の組織と権限の特色について解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	独禁法と国際問題	企業活動の国際化の進展に伴い外国企業による外国での競争制限的行為によって自国市場の競争に悪影響を及ぼす事態が生ずることがあり、この場合自国の独禁法を外国企業の行為に適用できるかという域外適用の問題がでてくること、そして一方的な域外適用を回避するためにＯＥＣＤを通じた多国間の相互通告・協議・調停や.二国間の独禁法協力協定が利用されていること、さらには独禁法の国際的ハーモナイゼーションや国際独禁法の制定の動きがあることを解説する。	根岸　哲	根岸　哲
13	規制産業（1）	独占性と必需性とを根拠に競争が適切に機能しないとして参入・退出規制、設備規制、料金規制など包括的な公益事業規制に服してきた電気事業、ガス事業、電気通信事業、運輸事業等の事業分野も、近年、規制緩和と競争導入という大きな変化を経験しているが、各事業分野ごとにその内容、根拠、問題点について解説するとともに、将来展望を試みる。	同　上	同　上
14	規制産業（2）	電気事業、ガス事業、電気通信事業、運輸事業等の事業分野では、程度の差はあるものの、いずれも競争と規制との適切な組み合わせ方についての模索が試みられているが、その模索の試みが各種事業法と独禁法との関係にどのように現れているのかについて具体例を取り上げて解説する。	同　上	同　上
15	通商法とGATT／WTO	国際通商（貿易）については、公正かつ自由な通商のルールを確保するための国際機構であるＧＡＴＴ／ＷＴＯ体制の下にあり、日本もその枠内においてダンピング（不当廉売）規制、補助金付き輸出に対する相殺関税賦課、緊急輸入制限（セーフガード規制）などを行っていることから、このような輸入規制とＧＡＴＴ／ＷＴＯルールとの関係について解説する。	同　上	同　上

＝ 雇用と法（'９９）＝（R）

〔主任講師：諏訪 康雄（法政大学教授）〕

全体のねらい

労働者と使用者との間に成立する労働関係は、信頼と対立の契機を内包している。労働法は主として対立の契機への対応を主眼としつつ、全般的な利害調整規準を提示する法領域である。労働市場をめぐる法、個別的労働関係をめぐる法、集団的労働関係をめぐる法の三者を中心に構成される労働法の構造と機能について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	労働法とは何か？	労働法の特徴について概説する。その過去と現在を眺めて、労働法の誕生のいきさつ、その後の発展と果たしてきた役割、現時点におけるその姿などをめぐり、簡単な考察を加える。ここでは、欧米諸国で発展してきた労働法とその理論が中心となる。	諏訪 康雄（法政大学教授）	諏訪 康雄（法政大学教授）
2	日本の労働法	明治末期ころかせ労働立法が現われはじめた日本では、その後、労働法がどのように発展してきたかを概説する。とりわけ欧米諸国と相当に異なる社会経済状況のなかで、どのような特徴を有するに至ったかを、立法、判例および法理の各面から考察する。	同上	同上
3	採用と法	労働関係の成立は採用に始まる。この採用をめぐり労働法はどのような利害調整規準を用意してきたか。採用プロセスの流れに沿って法的な問題点を説明し、労働法が用意した問題解決手法を考察する。採用、内定、試用期間などが中心となる。	同上	同上
4	配置と法	採用された労働者は、初期研修などを経たうえで、しかるべき職務に配属される。使用者の配置の権限は人事権と呼ばれる一連の権限の核となるものの一つである。配置、配置転換、転勤、出向、転籍などをめぐって、労働法がどのような判断の仕方をするかを見る。	同上	同上
5	服務と法	労働者は職務を誠実に行なうことを要求される。使用者の指揮命令権のあり方を中心にして、服務をめぐる法的問題点を説明する。服務規定、懲戒処分などの論点にも及ぶ。ともすれば無限定な服務要求が出がちななかで労働法はどういった限界づけを行うのか。	同上	同上
6	労働時間と法	労働時間、休日、休暇などをめぐる法規制のあり方を中心に説明する。これらの問題は労働者の労働義務の範囲を確定し、人間的な働き方を確保するうえで、非常に重要な点である。時間短縮などの動きとその達成手法との関係についても言及する。	同上	同上
7	賃金と法	労働者が働いたことに対する報酬は、経済的なものにとどまらない。働く喜び、人間的成長などが指摘される。だが、賃金、賞与、退職金などがまるで期待できないのでは、働く喜びも何もない。労働法は賃金についてどういった法規制をするか考察してみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	安全衛生・労働災害と法	安全で衛生的な環境で働けることは、労働関係の基本中の基本である。たが、必ずしも理想どうおりにいってない例が多くある。労働災害と職業病の予防としての安全衛生の確保ならびに発生した場合への対処として、労働法はどのような対応策を用意しているか。	諏訪　康雄	諏訪　康雄
9	退職と法	労働関係の終了原因には、退職、解雇、死亡などがある。この退職などをめぐっては、労使間の利害が激しく衝突することも少なくない。労働法が用意する利害調整規準をめぐって考察する。日本型と呼ばれる判例法理のあり方についでも検討を加えよう。	同　上	同　上
10	労働組合と法	個人では使用者と十分な交渉ができない労働者に対して、法は団結して交渉力を高める道を用意する。労働組合の結成と運営、団体交渉、争議行為、労働協約など、労働組合法を中心として法領域について説明する。集団的労働関係法、労使関係法の考察である。	同　上	同　上
11	非典型雇用と法	パートタイム労働、派遣労働、契約労働といった新しい働き方が広がってきている。フルタイムで長期に雇用されて働くという典型雇用とは異なる世界の拡大は、労働法にどのような課題を提起し、法はどのような解決策を形成してきているのだろうか。	同　上	同　上
12	機会均等と法	雇用機会を均等に用意させるため法が規制を加えるようになってきている。日本では男女間の機会均等が中心だが、外国では人種、年齢などでの差別を禁止し、しかも雇用以外へもこれを広げる動きも顕著である。なぜ均等法なのかを含め検討する。	同　上	同　上
13	雇用政策と法	労働法は労働市場を前提として存在する。しかし、より狭義の労働市場法として、職業紹介、職業能力開発、雇用保険などの法制が存在する。これらは国の雇用政策の基礎をなし、その連用に関係するという意味で、雇用政策法とも呼ばれる。ここを検討する。	同　上	同　上
14	苦情・紛争と法	社会あるところに利害の対立は不可避で、それを処理すべきルールとルール運用手続きが不可欠である。労働法における苦情・紛争の処理システムはどのようになっているかを考察する。とりわけ日本の労働法の特徴を説明したい。	同　上	同　上
15	労働法はどうなるのか？	労働法の未来について考える。労働市場の変化、社会経済の変化のながで、労働者像が変わってきている。労働関係も違いを見せてきた。これから21世紀に向かって、労働法はどのような課題を担い、どのように変遷していくことだろうか。	同　上	同　上

＝ 国際関係法（’０２）＝（R）

〔主任講師：横田　洋三（中央大学教授）〕

全体のねらい

今日の国際関係は、かつてのように国家間関係のみを対象とするだけではすまなくなった。人も物も情報も国境を越えて移動することが日常的になった結果、この動きを規律する法関係も複雑になり、従来の国家間国際法だけでは捉えきれなくなった。国際関係法というより広い枠組みで現実の国際問題を捉える必要が生じてきている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際関係法の枠組み	国際関係を規律する法の総体を国際関係法として見ると、それには国家間関係を原則として扱う国際法、それぞれの国家の内部の法関係を扱う国内法、それに国連を始めとする国際機構の法体系がある。それがどのように今日の国際関係を規律しているかを考察する。	横田　洋三（中央大学教授）	横田　洋三（中央大学教授）
2	国際法の成立	国際関係法の中核をなす国際法の成立の経緯を16、7世紀のヨーロッパの政治的、経済的、社会的状況を踏まえて検討する。とりわけ、初期の国際法の成立に貢献したスアレス、ゲンチリス、グロティウスなどの学者の考え方を中心に検討する。	同　上	同　上
3	国際法の発展	18、9世紀の国際法は産業革命や市民革命の影響を受けて、大きく発展する。この時期の国際法はヨーロッパの国際法から世界の国際法へ、自然法から実定法へ、そして君主間の法から国民間の法へと発展を遂げる。この変化をバッテルらの学説を中心に検討する。	同　上	同　上
4	国際社会の組織化と法	20世紀に入ると国際社会は国際連盟、国際労働期間、国際連合、ユネスコなどの国際機構を設立し、諸国に共通の問題に組織的に対応するようになる。この国際社会の組織化の中で、国際法がどういう役割を果たし、どのような変容を遂げてきたかを考察する。	同　上	同　上
5	国際法と国内法の関係	近年の国際関係は、人、物、カネ、サービス、情報などが国境を越えてひんぱんに行き来するようになり、その法的規律も複雑化した。そこには、国際法と国内法が微妙にからみあう複合構造が見られる。この二つの法体系の関係を理論的、実際的に検討する。	同　上	同　上
6	国際機構法の意義と役割	国際機構の発達によって今日の国際関係は国際法、国内法に加えて、国際機構が定立する国際機構法によっても規律されるようになった。これまで国際法と国内法の二分論のもとで軽視されてきた国際機構法の意義と役割を正面から扱う。	同　上	同　上
7	戦争と法	国際法は戦争をなくし平和な諸国家間の関係を創出する目的で作られた。しかし実際は戦争そのものは禁止できず、戦争の仕方や攻撃目標を限定する規則ができた。国際連合成立後戦争は原則禁止されたが、戦争はなくなっていない。この戦争と法の関係を論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	平和維持活動と法	世界平和実現のための国連の体制は、元来は侵略者を力で押さえ付ける方式であった。ところが冷戦期には5大国の対立によってこの方式は機能せず、それに代わる平和維持活動が考案され各地に展開された。この平和維持活動の可能性と限界を法的に分析する。	横田　洋三	横田　洋三
9	開発援助と法	1960年代以降に植民地地域が独立を果たし、これらの新興独立国に対する開発援助の問題が国際社会の重要な課題となった。開発途上国に対する二国間および多数国間機関による資金援助、技術援助を規律する法を論じ、その問題点について考察する。	秋月　弘子（亜細亜大学助教授）	秋月　弘子（亜細亜大学助教授）
10	国際企業活動と法	経済のグローバル化に伴って企業活動を規律する法関係も複雑化した。一国の租税法や独占禁止法が領域を越えて適用され、また貿易や金融に関する国際法が国内の企業活動に影響を及ぼすようになった。国際化時代の企業活動と法の関係を具体例をあげて検討する。	横田　洋三	横田　洋三
11	人権の国際法的保護	国家と国家の関係を主に規律してきた国際関係法は、私たち個人の人権をも規律する法へと展開している。第二次世界大戦後に急速に拡大・発展した人権に関する国際法について、普遍的レベルおよび地域的レベルならびに国際機構による保障の現状と課題を考察する。	滝澤美佐子（中部大学助教授）	滝澤美佐子（中部大学助教授）
12	人道的支援と法	地震などの自然災害や内戦などの紛争による犠牲者は、身体の安全や保護のための支援を最も必要とする。他国の犠牲者に対して日本あるいは国際機構が支援を行おうとしてか、内政不干渉原則や根拠となる法律との関係でさまざまな法的検討課題があることを論ずる。	同　上	同　上
13	国際犯罪と法	交通手段の発達によって犯罪も国際化した。海賊は国際犯罪として古くから取り締まられてきたが、近年はハイジャック、テロ、集団殺害、大規模な人権侵害などが国際犯罪として国際法、国内法、国際機構法のそれぞれによって取り締られるようになった。	横田　洋三	横田　洋三
14	地球環境と法	地球環境問題はオゾン層破壊や地球温暖化の事例に代表されるように、各国内の産業活動の影響が地球環境全体に及ぶ点に特徴がある。地球環境問題に取り組むための国際的な環境基準の定立、各国内での履行、および、国際的な履行監視などの問題を考察する。	秋月　弘子	秋月　弘子
15	国際社会の将来と法	国際社会の組織化は今後ますます進展する。また個人、企業、非政府機構（NGO）の国際場面での重要性も一層増すと思われる。この中で国家主権を中心に形成されてきた国際社会の法秩序は今後いかに変容するかを考察する。	横田　洋三	横田　洋三

＝ 現代法の諸相（’９９）＝（R）

〔主任講師：水野　忠恒（一橋大学教授）〕

全体のねらい

「法学出門」ともいうべき講義である。最近の社会問題となっている先端的法領域で、ようやく学問的体系化がなされつつあるもの、未だそこまで行っていないもの、合計5つを選び、新進気鋭の学者が分担して行う、「オムニバス講義」である。全体を通ずる特色は、公法・私法といった従来の学問体系に囚われない領域である点にある。今回は、租税法（水野：一橋大学）、社会保障法（岩村正彦：東京大学）、知的財産法（玉井克也：東京大学）、環境法（大塚直：早稲田大学）、消費者法（大村敦志：東京大学）という内容である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	租税法①－租税の基本原則及び所得税など－	税制改革論議の基礎におかれるべき租税の原則、特に公平負担の原則をとりあげ、個人の租税負担の基準となる所得、消費、財産のそれぞれの特質について論じたのち、所得の概念について考える。	水野　忠恒（一橋大学教授）	水野　忠恒（一橋大学教授）
2	租税法②－法人税税－	所得概念の論議ののち、個人所得税の理論について、法人の所得税である法人税の課税の根拠ならびに法人税のあり方について検討する。いわゆる配当二重課税の調整という問題が法人税の中心的課題である。	同上	同上
3	租税法③－消費課税－	所得税に対する批判として注目を集めるようになった消費支出税の論議を検討したのち、間接税としてのわが国の消費税とそのモデルである付加価値税について説明する。	同上	同上
4	社会保障法①－高齢化社会と社会保障法－	高齢化社会の到来によって、医療保障、日常生活の支援などを行う社会保障法はその重要性をますます増しつつあるが、他方で大きな変容を迫られている。私達の生活を支える社会保障法が高齢化社会において果たす機能とその変貌を考えたい。	岩村　正彦（東京大学教授）	岩村　正彦（東京大学教授）
5	社会保障法②－医療保障法と年金法－	社会保障法の中核をなす社会保険法を取り上げる。国民の医療へのアクセスを保障する健康保険法、国民健康保険法等の医療保障法と、老後の所得保障を行う国民年金法、厚生年金保険法等の年金法を概観し、これらの法分野の抱える問題点と今後の課題を考察する。	同上	同上
6	社会保障法③－社会福祉法－	高齢者や障害者などに介護、必要な器具の供与、施設への入所といった便宜を提供する社会福祉法を概観する。とりわけ老人福祉の分野に着目して、現在押し進められている施設の充実、福祉労働力の増強、老人医療との連携などの政策や介護保険を中心に考察を加える。	同上	同上
7	知的財産法①「情報」と法律	知的財産法、知的所有権法などといわれる分野は、経済的価値のある情報を法的な側面から考察するものと言える。現代社会における情報の価値という観点から、知的財産法の全体について、大きな枠組みを概観する。	玉井　克哉（東京大学教授）	玉井　克哉（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	知的財産法② 創作の保護	知的財産法が保護する情報のうち、主要なものは、創作的価値のある情報である。そうした観点から著作権法や特許法などについて解説する。現代社会において発生した新たな問題についても、言及したい。	玉井　克哉	玉井　克哉
9	知的財産法③ 営業標識の保護	知的財産法には、経済的価値のある情報を保護する法制度のほか、ブランドやマークについて保護する法制度も含まれている。そうした制度としての商標法と不正競争防止法について解説し、現代的な問題にも触れる。	同　上	同　上
10	環境法①	環境法に関して、その生成の歴史、特色、基本原則、体系、環境規制の手段等、総論というべき分野について解説する。その中で、環境計画、環境影響評価、汚染者負担原則にも触れたい。	大塚　直（早稲田大学教授）	大塚　直（早稲田大学教授）
11	環境法②	環境規制・整備・保全に関する法律に関し、重要と思われるものを摘出して説明する。具体的には、大気汚染・水質汚濁、廃棄物処理・リサイクル、野生鳥獣の保護等を中心として述べる。	同　上	同　上
12	環境法③	環境に関する民事訴訟及び行政訴訟の問題点を概観すると共に、公害に関する費用負担についても説明する。なお、地球環境問題についても言及したい。	同　上	同　上
13	消費者法① －消費者法とは何か	消費者と法との関わりについて導入的な説明を行う。消費者問題とはいかなるものか。消費者法が必要とされるのはなぜか。実際には、消費者法はどのように形成されてきて、今日、どのような問題をカバーしているのか。	大村　敦志（東京大学助教授）	大村　敦志（東京大学助教授）
14	消費者法② －行政の側から見た消費者法	消費者法を行政の側から見る。行政は消費者問題に対応するために、どのような法的手段を用いているのか。安全性や取引条件に関する規制行政、独占の排除などの競争規制、教育・情報提供などのサービス行政について説明する。	同　上	同　上
15	消費者法③ －消費者の側から見た消費者法	消費者法を消費者の側から見る。肉体的・経済的な被害を受けた消費者が救済を受けるためにはどうすればよいか。また、行政に働きかけることによってあるいは自主的な活動によって、積極的に消費生活のあり方を変えていくことはできないか。	同　上	同　上

＝ヨーロッパ政治史（’０１）＝（R）

〔主任講師：田口　晃　（北海道大学教授）〕

全体のねらい

冷戦期を通じたヨーロッパの政治史を、各国の政治構造に着目しつつ、概観する。その際、ヨーロッパの政治経験の多様さを知って貰うために、英、仏、独、ソ以外の小国にも言及するとともに、ヨーロッパ統合問題も射程に入れたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	分析視角と２０世紀前半ヨーロッパの政治対立	最初に第二次世界大戦後のヨーロッパ政治を通観するための分析視角と認識枠組みを検討し、更に戦後政治の理解の前提となる２０世紀前半の政治史を国民国家と階級対立の絡み合いとして概観する。	田口　晃（北海道大学教授）	田口　晃（北海道大学教授）
2	ヨーロッパにおける冷戦	ヤルタ会談、ポツダム会談からトルーマン宣言、マーシャル・プランを経てNATO、WTOの軍事同盟網のへ対決と激化する米ソ東西対立の過程を追い、その歴史的、政治的意味を考える。	同　上	同　上
3	東欧の新体制	ソ連の勢力圏内に組み込まれた国の中からポーランドを，またソ連の影響下から自立した例としてユーゴスラヴィアを取り上げ、比較しながらスターリン体制化の進んだ東欧の多くの国と、ユーゴスラヴィアの独自路線とを考察する。	同　上	同　上
4	西欧の復興と右旋回（１）イギリス	長年にわたる議院内閣制と二大政党制の中で初の労働党安定政権が登場し、重要産業国有化と福祉国家化を経験したイギリスを扱う。植民地独立により、対外的影響力は減少するものの、保守党政権復活後も福祉国家は定着する。	同　上	同　上
5	西欧の復興と右旋回（２）フランス	内外の混乱から不安定な第四共和制。アルジェリア問題をめぐる危機を終息させるためドゴールは大統領権限の強い第五共和制憲法を導入。フランスの栄光をめざす独自の外交防衛政策も展開した。	同　上	同　上
6	敗戦国の運命（１）ドイツ	西側に属することで独立を認められた西ドイツ。「奇蹟」と謳われた経済の急速な復興とアーデナウアーの宰相民主政、民主主義の定着過程に着目しよう。	同　上	同　上
7	敗戦国の運命（２）イタリア、オーストリア	冷戦構造の中で保守派のキリスト教民主党が一党優位制を確立したイタリア。ドイツに先駆けて、中立を条件に、二大政党による大連立政権の手で占領から解放されたオーストリア。二国を取り扱う。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ソ連の変化と東欧の反応	スターリン死後のソ連内部の束の間の「雪解け」とフルシチョフ改革を検討する。また、フルシチョフによるスターリン批判とその影響、とくにハンガリー反乱に光を当ててみたい。	田口　晃	田口　晃
9	中立国の政治 スウェーデンとスイス	ここでは二つの中立国が見せた６０年代の平和と繁栄に光を当てよう。社会民主党主導の福祉国家スウェーデンと４党政権で安定した質実国家スイスである。そうして両国の中立政策も比較検討してみたい。	同　上	同　上
10	７０年代の構造変動 スペインとオランダ	長く続いた独裁体制から民主政へというスペイン政治の変革と多極共存型民主政が文化変容とともに解体したオランダを並べて、位層の異なる政治構造変動を論ずる。	同　上	同　上
11	世界市場の荒波の中でサッチャーのイギリスとミッテランのフランス	７０年代石油危機以後の経済的停滞と世界市場の自由化の進展への対応例としてイギリスのサッチャー保守党政権による「小さい政府」の実験とその成果、およびミッテラン大統領率いるフランス社会党政権の「大きい政府」からの方針転換についてふれる。	同　上	同　上
12	東欧の体制変動とソ連の解体	７０年代危機から転換を模索した西欧に対し、旧態依然のソ連東ヨーロッパは８０年代後半ゴルバチョフの登場から一気に急変を遂げる。そして８９年の連鎖的「革命」と冷戦の終結へと至るのである。	同　上	同　上
13	西側への影響 ドイツとイタリア	冷戦の終結は、西ヨーロッパでも様々な変化を呼び起こした。ドイツの統一という積年の難題に答えを出すとともに、イタリアにおいては大がかりな政治再編を引き起こしたのである。	同　上	同　上
14	国民国家のゆくえ（１）ユーゴスラヴィア解体とベルギー再編	冷戦終結と進むヨーロッパ統合の中で国民国家は試練と変容を遂げる。ここでは民族対立を現象化させて解体したユーゴスラヴィアの例と地域的連邦制と言語集団の分権という二重の連邦制によって再編されたベルギーの例を取り上げる。	同　上	同　上
15	国民国家のゆくえ（２）古い政治と新しい政治	最後にまとめて安全保障問題とヨーロッパ統合を概観する。同時にヨーロッパ全域で生じた構造変動を背景に、従来の政治から少しずれた所から生まれた新旧の政治潮流の新たな展開を、新しい社会運動、市民運動と新極右運動について見、２１世紀の展望とする。	同　上	同　上

＝ 比較政治学（’００）＝（R）

〔主任講師：眞柄　秀子（筑波大学助教授）〕
〔主任講師：井戸　正伸（茨城大学助教授）〕

全体のねらい

本コースの目標は、比較政治学の基本的枠組みを理解することである。理解を深めるために、戦後の先進諸国（おもに西ヨーロッパ）および新民主主義国の政治を、特に政治制度と最近20～30年間の政治変容に焦点に当てて考察する。また同時に先進各国の政治経済のグローバル化に関しても検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較政治学とは何か？	比較政治学とは、政府と社会の関係について理論化し、各国の実際を調べる学問です。比較政治学の発掘を、アーモンドによる構造機能主義アプローチの提唱とそれへのヨーロッパ、第三世界からの批判として概観する。	眞柄　秀子（筑波大学助教授） 井戸　正伸（茨城大学助教授）	眞柄　秀子（筑波大学助教授）
2	政治制度（1）：議会制と大統領制	デモクラシーの二つのタイプである大統領制システムと議会制システムについて、その違いと長所、短所について述べる。	井戸　正伸	井戸　正伸
3	政治制度（2）：議　会	世界各国の議会はいかなる構造か、またいかなる機能をはたしているか、検討する。	同　上	同　上
4	政治文化	クロスナショナルな比較政治研究において中心的位置を占めてきた各国の政治文化について述べる。	同　上	同　上
5	政治体制（1）：非民主的体制	非民主的体制とは何か？非民主的体制として、全体主義体制、権威主義体制、スルタン主義、ポスト全体主義を検討する。	同　上	同　上
6	政治体制（2）：現代民主政	現代におけるデモクラシー（民主政）とはいかなる特徴をもつのか。現代においてデモクラシーが在立するための社会・経済的条件とは何か。現代民主政にはいかなるタイプがあるのか。	同　上	同　上
7	デモクラシーへの移行	先進各国は非民主主義体制から民主政へ、いつどのような経路をたどって移行したのかを、シュミッター／オドンネルらの枠組みを用いて考察する。また、さまざまな移行論に関して検討する。	眞柄　秀子	眞柄　秀子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	デモクラシーの確立	各国のデモクラシーは、いかなる条件を満たせば確立されたとみることができるのだろうか。また、デモクラシーの確立とは、果たして本当に可能なのだろうか。さまざまな研究者の議論を検討し、民主化の問題の中心に迫る。	眞柄　秀子	眞柄　秀子
9	政党と政党システムの変容	西ヨーロッパを中心に、政党および政党システム研究の流れを概観する。特に「亀裂」と政党アイデンティティに関するリプセット／ロッカンらの理論の意味を再検討する。	同　上	同　上
10	政党システムの力学	M．デュヴェルジェとG．サルトーリの議論を中心に、各国の政党システムがどのように分類されるかを検討する。また、いかなる要因が政党システムに危険をもたらすかも検討する。	同　上	同　上
11	利益集団システム	政治過程で利益集団はいかなる役割を果たしているのか。代表的な利益集団システムとして多元主義とユーボラティズムの特色を概観する。	井戸　正伸	井戸　正伸
12	福祉国家の発展と危機	戦後西ヨーロッパにおいて福祉国家がいかにして発展してきたのかを、主要政治アクターの戦略と選択という視点から考察する。また、先進国の福祉国家をいくつかのパタンに分類し、どのような要因が各国福祉国家の質的相違をもたらすのかを考える。	眞柄　秀子	眞柄　秀子
13	福祉国家の再編	先進社会の福祉国家が、脱工業化時代を迎えて、いかなる問題に直面しているのか、また、各国でいかなるアクターがどのように福祉国家を再建しようとしているのかを、スウェーデン・イタリア・イギリスなど具体的な事例を参考にしながら検討する。	同　上	同　上
14	グローバリゼーションと欧州統合	欧州連合（ＥＵ）が第二次大戦以後、発展してきた歴史的経路を概観する。欧州連合を構成する主要機関を紹介し、欧州連合における政策形成・執行のあり方を見てゆく。	井戸　正伸	井戸　正伸
15	新しい政治への潮流	先進各国における脱工業化の潮流のなかで、ジェンダー・エコロジーなどの新しい争点がどのようなインパクトをもっているのかを考える。また、女性・若者・市民運動・外国人などの新しいアクターの出現と政治の変化について検討する。	眞柄　秀子	眞柄　秀子

＝ 第三世界の政治（’０１）＝（R）

〔主任講師：高橋　和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

第三世界が経験している地域紛争の代表例であるパレスチナ問題を取り上げる。全ての地域紛争は、それぞれの地域の実情を反映して特殊である。しかし同時に第三世界に共通した要素によって普遍的な面も有している。共通の要素とは、たとえば大国の関与であり、ヨーロッパからの入植者と先住民の対立である。こうした要素ゆえに、一つの地域の紛争を語る事が他の地域の問題を語ることにつながる。『第三世界の政治』とのタイトルの下でパレスチナ問題を語るのはこうした意図からである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パレスチナへ	パレスチナを巡るシオニストとパレスチナ人の抗争の起源からイスラエルの成立までの歴史を振り返る。そのハイライトは第一次中東戦争とパレスチナ難民の発生である。	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
2	戦うユダヤ人国家	第二次、第三次中東戦争を中心に中東状勢を歴史的に検証する。	同　上	同　上
3	アラブ世界の反撃	パレスチナ解放闘争の発生、そして第四次中東戦争と石油危機を論じる。	同　上	同　上
4	イスラエル社会の変貌	イスラエルの政治を建国以前から牛耳ってきた労働党の1977年の選挙での敗北の背景を考える。その理解の鍵は、イスラエル社会のエスニック構成の複雑さと変化である。	同　上	同　上
5	レバノン戦争の構図	イスラエルのレバノン侵攻を論じる。	同　上	同　上
6	ペレストロイカの影で	1985年3月にソ連の最高権力者となったゴルバチョフは国際政治の基本的な枠組みを変えた。その中東への影響を解説する。	同　上	同　上
7	インティファーダ	1987年に占領地で発生した民衆の一斉蜂起は、パレスチナ問題を封じ込めてきた国際政治の枠組みを揺すぶった。その衝撃を振り返る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	湾岸戦争	湾岸危機と湾岸戦争が中東和平プロセス開始の伏線となった。その意味を考える。	高橋　和夫	高橋　和夫
9	和平プロセスの構図	何故に、これ程までパレスチナ側に不利な和平が始まったのか。との問題意識から和平プロセスを考える。	同　上	同　上
10	ラビン／その栄光と暗殺	パレスチナ人との和平の過程でラビンと言う人物の果たした役割は限りなく大きい。それゆえラビンの暗殺は和平プロセスの停滞につながった。そのラビンの重さを考える。	同　上	同　上
11	停滞する和平	ラビン暗殺後に行なわれた1996年の選挙を検討し、その後の和平の停滞を解説する。	同　上	同　上
12	スフィンクスの謎／シリアのアサド大統領	ハーフェズ・アサドと言う人物の作り上げたシリアの支配体制を紹介する。	同　上	同　上
13	革命はビートルに乗って／アラファト	パレスチナ人の指導者アラファトの生涯を跡付けながら、パレスチナ民族主義の過去と未来に思いを巡らす。	同　上	同　上
14	アメリカ／中東で一番重要な国	中東で圧倒的な存在感を誇るアメリカの中東政策を規定する国内要因に光を当てる。	同　上	同　上
15	取り残されしもの	難民の帰還の権利のように、和平プロセスの過程から切り離され、取り残されつつある問題に光を当てる。	同　上	同　上

＝ 国際政治（’００）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 高 橋　和 夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

世紀が変わる時期の国際政治の見取り図を提示する。そこでは詳細なミニアチュールのような記述ではなく、墨絵のような太いタッチで分析の構図が描かれる。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	テレビと国際政治	湾岸戦争やベトナム戦争のテレビ報道を材料に、テレビ映像が国際政治に与える影響を考える。	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
2	メディアの風景	ロンドンのBBCのテレビ・センターでのインタヴューを使いながら、急速に変化する映像メディア業界を紹介し、その意味を分析する。	同　上	同　上
3	スーパー・パワーの世界戦略	アメリカの世界戦略の変遷を概観し、その外交の特徴を論じる。東京第一学習センターの教室での公開講座である。	同　上	同　上
4	ヨーロッパ合衆国の夢	ブリュッセルとベルリンでのロケの映像を背景に、20世紀におけるドイツ問題から説き起こし、ヨーロッパの統合運動を振り返り、その将来を展望する。	同　上	同　上
5	007の独立運動	エジンバラの風景の中で、スコットランドの独立運動を紹介し、その特殊性と普遍性を対比する。	同　上	同　上
6	マイクロ・ナショナリズムの挑戦	カタロニアやイタリア北部の独立・自治運動に代表されるような先進工業諸国でのエスニック集団の「小さなナショナリズム」を紹介し、その意味を検討する。	同　上	同　上
7	東アジアのパワー・バランス	与那国島と根室という南北の国境から、東アジアにおける国際関係の変化を見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	立ち上がった巨象インド	日本との関係に視点を置きながら、インドの情勢をインドで解説する。	高橋　和夫	高橋　和夫
9	ターレバンの勝利、パキスタンの憂鬱	パキスタンとアフガニスタンの情勢を紹介する。	同　上	同　上
10	大量破壊兵器の恐怖	ドイツのVロケット基地を訪れ、大量破壊兵器と長距離ミサイルの拡散の問題を論じる。	同　上	同　上
11	イスラム／脅威か、共存か？	ロンドンのイスラム教徒の現状を紹介しながら、文明の衝突論を批判する。	同　上	同　上
12	イラン・イスラム体制の変貌	イランのイスラム体制の変遷を振り返り、その将来を展望する。	同　上	同　上
13	国際政治の中のエネルギー問題	エネルギー資源に占める石油の位置を再確認し、中東と中央アジアのエネルギー資源を巡る情勢を鳥瞰する。	同　上	同　上
14	環境保護の政治力学	ロンドンのグリーン・ピース事務所でのインタヴューを混じえながら、環境保護運動の歴史を振り返る。また環境を巡る政治の特徴を論じる。	同　上	同　上
15	国際関係のパラダイム・シフト	多国籍企業やＮＧＯなどの活動が、国家を中心とする国際関係の枠組みに修正を迫っている。国家の役割を再評価しつつ現状を分析する。	同　上	同　上

＝ 日本政治思想史（’０１） ＝（R）

〔主任講師：平石 直昭（東京大学教授）〕

全体のねらい

主に徳川時代（西暦17世紀～19世紀半ば頃）の約二百五十年間の政治思想（広義）を扱う。①各時期の歴史的背景と関連させて主な観念の変化を跡づける。②代表的な思想家の内在的な理解と今日的な意味の導出に努める。③一般的な概説よりは、新しい見方や論点の提出に重点をおき、学生が自分の頭で考える参考にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	キリシタン禁教の思想	まず講義全体の構成と時期区分を示す。ついで徳川社会の特徴をのべたのち、主題に入る。全国統一をめざす武士政権がどんな理由からキリシタン禁教と弾圧に至ったかをみる。秀吉段階と家康・秀忠段階の違いを分析し、とくに崇伝執筆の追放文を重視する。「神国」観念の歴史的な変化にもふれる。	平石直昭（東京大学教授）	平石直昭（東京大学教授）
2	天道思想の諸相	近世初期における幕府権力の自己正統化の施策（家康の国家的守護神化）、当時の支配的な言説だった「天道」思想が担っていた思想的な課題（キリシタン神学との対抗など）、新興儒学の代表者である惺窩や羅山について分析する。	同上	同上
3	新儒学の受容と構想	理学や心学など、新儒学の体系的な導入や構想の努力を、松永尺五、中江藤樹に即してみる。とくに一般庶民層まで包摂した普遍的な教説として儒教が強調された理由、尺五における二つの「気命」の区別、藤樹の「なりはひ」論などが分析される。朱子学の理気論についても概説する。	同上	同上
4	儒学思想の展開	近世前期における儒教をとりまく客観状況の変化（寺請制の一般化など）をみたのち、儒教古典や宋明学研究の進展と自分の生きる日本の現実への理解の深化の中で、儒教思想が再定式化されてゆく諸相をみる。蕃山の朝幕関係論、素行の士道論などが扱われる。関連して『葉隠』に即して、武士のエトスの変容をみる。	同上	同上
5	仁斎学の基本構成	山崎闇斎の朱子への傾倒と対照しながら、前期儒学の最高の達成として伊藤仁斎の儒学についてみる。陰陽と仁義の区別、性と道徳の区別など程朱学的な天人相関論の否定とともに「天道福善禍淫」の再定式化がもった意味、またその古義学の方法や論孟中心主義について分析する。	同上	同上
6	仁斎の鬼神論／徂徠の古文辞学	仁斎の鬼神・卜筮論を分析し、彼が三代聖王と孔子を区別し、政治と道徳の二領域を峻別していたことをみる。また伊藤東涯における歴史意識の変容にふれる。ついで独自の儒学を構築した近世中期の儒者荻生徂徠にうつり、今回はその古文辞学という方法論を分析する。	同上	同上
7	徂徠学の基本構成	近世思想史の転回点に立つ徂徠学を、その主要な側面に即して分析する。仁斎以上に徹底した天人相関論の打破、天の不可知化、聖人信仰、道の聖人制作説と窮理観の関連、聖人が建てた仮構としての鬼神観、「物」としての六経と「道」の区別、「格物致知」論などを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	石門心学論	近世中期における庶民層の社会的自覚の高まりを示すものとして石田梅岩の思想を扱う。一世代前の西川如見らの町人エトス論との比較、「市井の臣」や商業利益の正当化にみられる特徴、道徳・職業を共に天命で正当化する思想など。安藤昌益のユートピア思想にも言及する。	平石直昭	平石直昭
9	経世思想の展開	徂徠の制度改革論を紹介したのち、太宰春台・海保青陵に即して、彼の経世思想が近世中期～後期にかけてどう変容していったかをみる。商品経済に対する三者の対応の仕方の違い、春台に現われる利己的人間像の青陵での展開、商品売買を引照基準とした天理観の提出、世襲制批判の論理など。	同上	同上
10	徂徠学の影響の諸相	徂徠学が近世後期の思想界に与えた影響の諸相をみる。古文辞学の方法が蘭学・国学や富永仲基の仏典批判など儒学以外の分野に与えた影響、その「天地自然」の不可知観が、三浦梅園の自然哲学や本居宣長の国学、吉益東洞の古医方を促した面、また民俗学的関心の高まりを導いたことなど。	同上	同上
11	本居宣長の国学	契沖以来の歌学と荷田春満の皇国学が賀茂真淵で合流し宣長学の形成を準備する過程を概観したあと、初期宣長に即して、儒教に代る全体的思想像の基礎を彼がどう作っていったかをみる。主に契沖、真淵、徂徠からの影響や示唆　がどう組合わされているかを分析する。平田国学にも言及する。	同上	同上
12	西洋像の変遷	近世中期における特徴的な西洋像を新井白石、荻生徂徠、伊藤東涯、西川如見、西川正休についてみる。ついでそれらの西洋像が、近世後期に蘭学を介した理解の深化により修正変容される様子を前野良沢、杉田玄白、本多利明らに即してみる。	同上	同上
13	「鎖国論」とその影響	19世紀初頭に邦訳されたケンペルの「鎖国論」がいかに日本の鎖国策を正当化しているかを検討する。ついで幕末期に本書が日欧双方にとって議論の共通ベースになった経緯を考察し、「鎖国論」が日本の開国を促した皮肉な事情を分析する。	同上	同上
14	西欧の衝撃と日本の開国	日本・中国・朝鮮という東アジア三国のうち日本がいち早く近代化に着手した歴史的条件として、儒教の社会的存在形態の違い、支配エリート層のエトスの違い、旧体制の構造的相違、世界秩序像の相違などに即して、比較の見地から検討する。洋学者による西洋事情の紹介にもふれる。	同上	同上
15	幕末政治思想論	幕末の儒教的思想家をとりあげて、儒教的価値の多様性と多義性が西洋文明に対する評価の相違をうんだ事情を明らかにする。その上で後期水戸学の「国体」論、佐久間象山の自然科学観とその国民教育の必要論、横井小楠の公議輿論思想などを近代日本と関連させてみる。	同上	同上

＝ 西洋政治思想史（'０１）＝（R）

－ 視 座 と 論 点 －

〔主任講師：川出 良枝（東京都立大学助教授）〕
〔主任講師：山岡 龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治とは何か、特に、より善き政治とは何であり、それはどうすれば実現可能か、といった問いを、西洋政治思想の歴史を振り返ることで検討する。本講は思想の歴史的継承や文脈に留意しつつも、むしろいくつかの重要な論点を選び、その理解を通じて、西洋政治思想史の現代的意義を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋政治思想とは何か	西洋政治思想史という学問の全体像を簡潔に示し、その学習の方法と意義を考える。	川出 良枝（東京都立大学助教授） 山岡 龍一（放送大学助教授）	川出 良枝（東京都立大学助教授） 山岡 龍一（放送大学助教授）
2	統治の諸形態	いかなる統治の形態が理想であり、また、現実に建設可能であるかという問題は、政治学という学問を古典古代のギリシアに成立させた最も本質的な原動力であった。当時において展開された政体論を紹介し、さらにそれが近代においてどのように受け継がれ、変貌を遂げたかをみていく。	川出 良枝	川出 良枝
3	法の支配	政治を規制し指導する原理として法の支配の思想を、古代ギリシアと古代ローマを中心に論じ、その展開を、自然法思想、立憲主義等に留意しつつ描く。	山岡 龍一	山岡 龍一
4	信仰の共同体	キリスト教思想の政治思想への影響を、人間観、権力観、共同体のイメージ等を中心に概観する。	同上	同上
5	権力	政治秩序はデ・ファクトな物理的強制力によって維持されるという発想が前面に押し出されたとき、近代の政治思想は離陸したと言われる。代表的な権力国家論をマキャベリやボダンの思想に探るとともに、ホッブズの登場により、個々人の合意によって国家に権力を委譲するという社会契約説の論理が成立したことの意味を探る。	川出 良枝	川出 良枝
6	所有権	所有権をめぐって、政治的なものと経済的なものの関係がいかにして論じられてきたかを控りつつ、近代社会において私的所有が正当化・批判される倫理を明らかにする。	山岡 龍一	山岡 龍一
7	迫害と寛容	宗教的寛容を端緒に、寛容思想がいかにして発展してきたかを考察し、異質な価値をの共存を肯定する政治思想が生まれてきた展開を描く。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	権力批判の論理	近代国家による権力の独占が進むにつれ、強大化した国家権力をいかにすれば制限できるか、という問題が立てられる。それは、一方では、支配の正統性を問い、正統性なき権力には抵抗すべきであるという抵抗権の議論として展開される。他方で、いかなる権力も必然的に堕落するという認識の下で、権力相互の均衡と抑制によって、権力の暴走を抑制すべきであるという権力分立の発想も生み出される。	川出　良枝	川出　良枝
9	公共の利益	私的欲望の追求は、必然的に公共精神の衰退を招くのか。個人の利益と結びつかない公徳心や愛国心はあり得るのか。政治に関わる市民（公民）の徳性をめぐる議論は、政治学にとって重要な問題であり続けた。市民の徳を高く評価する共和主義の伝統を概観するとともに、ある意味ではそれと真っ向から対立する１８世紀の文明社会論を検討する。	同　上	同　上
10	参加と統合	近代デモクラシーの成立過程で大きな画期となったのは、ルソーの一般意志論（人民主権論）の登場である。それにより、すべての人民の政治への直接参加が、政治的統合にとって不可欠であることが示される。しかし、ルソーの構想がそのまま実現することはなく、実際には、間接参加型（代表制）民主制が定着する。	同　上	同　上
11	個人の尊厳	共同体に対して個人を優先させるような思想のモデルを、中世における特権としての自由という考えから始めながら、啓蒙的個人主義的思想、ロマン主義、個性の尊重といったトピックを通して明らかにする。	山岡　龍一	山岡　龍一
12	社会的連帯の基礎	資本主義の急速な発達がもたらした貧困や搾取、地域共同体や家族の変貌、男女や民族の間の差別といった社会問題がクローズアップされるにつれ、国家の役割の見直しが様々な形で訴えられるようになる。	川出　良枝	川出　良枝
13	正義と善	特に「公正／権利」と「効用／善」という観点に留意しつつ、正義論の展開を古代ギリシャから現代まで概観する。	山岡　龍一	山岡　龍一
14	政治と教育	善き政体に不可欠な善き市民の形成という問題が、政治思想史においてどうのように論じられてきたかを概観する。	同　上	同　上
15	政治と歴史	国家や文明の盛衰に何らかの意味づけをなし、現代の意味を問い直すとともに、未来への指針を探ろうという「歴史」の叙述は、政治思想の一つの課題であった。古典古代の独特な時間意識からキリスト教の歴史意識、近代の「進歩」史観や唯物史観、保守主義の時間意識、ヘーゲルに発する「歴史の終焉」論などを概観する。	川出　良枝	川出　良枝

＝ 政治過程の比較分析（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大嶽　秀夫（京都大学教授）〕
〔主任講師：野中　尚人（学習院大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、日本とフランスの戦後政治を相互にかつ総体的に比較することをつうじて、政治過程の分析を具体的に行おうとするものである。両国には、戦後における厳しいイデオロギー対立、官僚主導の経済成長などの共通性と、議会や統治機構の上での相違性がある。これらの論点の検討をつうじて、政治過程の比較分析を試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イデオロギー対立の構造：フランス	第一部　歴史的アプローチ フランス革命に始まるといわれるフランスにおける左右の厳しい対立が、戦後どのように再生産されたかを、ドイツによる占領とレジスタンスの遺産、労使関係の展開、東西冷戦、植民地独立への対応などの争点をつうじて、検討する。	大嶽　秀夫（京都大学教授）	大嶽　秀夫（京都大学教授）
2	イデオロギー対立の構造：日本	フランスの例と比較しながら、日本における左右のイデオロギー対立がどのように形成され、展開されたかを検討する。とくに、労使関係、再軍備と平和運動、東西冷戦、アジアにおける冷戦などの争点が日本の国内政治をどう特徴づけることになったかを検討する。	同　上	同　上
3	戦後の高度経済成長：フランス	1950－60年代にヨーロッパで最も目ざましい経済成長を遂げたといわれるフランス経済において、政府の高級官僚（テクノクラート）の果たした役割や、それを支えた政治指導、とくにドゴールの役割を検討する。また、財界・政府の役割についても検討する。	同　上	同　上
4	戦後の高度経済成長：日本	1950－60年代における日本の高度成長を、大蔵省、通産省などの果たした役割や、日本型市場の構造などから説明する議論を検討する。そしてフランスとの比較において、敗戦を契機とする政治文化の変化の重要性如何という問題に考察を加える。	同　上	同　上
5	民主化から自由化へ：フランス	1968年の5月革命の与えた、社会的、経済的、政治的インパクトを検討し、そこから生まれてきた左翼・リベラル優位のシステムから、ミッテラン政権の誕生を経て、やがて市場競争を再導入する試みが登場するまでの過程を分析する。	同　上	同　上
6	民主化から自由化へ：日本	60年代末の地方自治体における革新首長の登場から、オイル・ショックを経て、労働運動が変質し、さらに、行政改革の名でネオ・リベラリズムが登場し、官と民との関係の再調整や福祉の見直しが行われていった過程を分析する。	同　上	同　上
7	世紀転換期のフランスと日本	1980年代中期に中曽根首相とシラク首相の下に、民営化など新自由主義政策が導入されたあとの日本とフランスの、一見したところ対照的な展開を跡づける。とくに労使関係、福祉政策、政党の再編、対外的経済政策に焦点を置いて検討を加える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	政治過程の全体的構図	第二部　構造的アプローチ 半大統領制と議院内閣制、あるいは大統領と総理大臣との比較や、内閣、与党、議会、行政官僚制など、主たる政治制度・アクター間の関係を検討することを通じて、政治過程の全体的な見取り図を描く。	野中　尚人（学習院大学教授）	野中　尚人（学習院大学教授）
9	議会と立法過程	立法過程の実態、委員会の運営の仕方などに関して、憲法構造との関連を念頭に置きつつ比較検討し、内閣提出法案の優越性や審議の形骸化についてまとめる。また、議会内での討議のあり方と議員の能力・キャリアパターンとの関連性についても検討を加える。	同　上	同　上
10	行政官僚制の構造と機能	行政組織の構造、官僚のリクルートメント、昇進の制度などを比較検討する。日仏両国の行政官僚制は、ともに強力で、「組織指向性」という共通性を持っているが、他方で、内部調整の仕組みや組織管理、また「政治」との関係の点で異なっていることを分析する。	同　上	同　上
11	政党と政党システム	自民党による一党優位性の継続が与野党間関係や自民党の内部システムにどのような影響を与えてきたのかを分析する。また自民党とフランスのＲＰＲとを比較しつつ、政党の内部組織、人事の仕組み、政策過程の特徴などについて検討する。	同　上	同　上
12	選挙	日仏両国の選挙制度について概観した上で、公認決定の仕組みなども比較分析する。日本の「二世議員」とフランスの「落下傘候補」現象の比較が興味深い。さらに、選挙制度と政党システムとの相関関係、選挙をめぐる人的資源の動員の仕組みについて検討する。	同　上	同　上
13	政治的リーダーシップ	フランスの大統領と日本の首相との政治的リーダーシップのあり方の違いを、与党との関係、議会との関係、スタッフのリクルートメントといった構造的側面から検討する。リーダーシップの強弱やスタイルが歴史制度的に規定されていることも論じる。	同　上	同　上
14	政策決定のパターン	合意形成のあり方と、エリート・リーダーへの委任の形態を日本とフランスの間で比較検討する。トップ・リーダーの役割、総合調整の仕組み、政党による政策過程への関与のパターン、行政官僚制からの影響力行使のパターンなどについて分析する。	同　上	同　上
15	1990年代の政治変動	日本における93年の自民党単独政権から連立政権への移行、フランスにおけるコアビタシオンの頻繁な出現など、90年代に入って日仏両国の政治は大きく変動しつつある。こうした変動の意味を構造的・歴史的に捉えて分析する。	同　上	同　上

＝ 現代日本の政治変動（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山口　二郎（北海道大学教授）〕

全体のねらい

1993年以降の戦後日本の政治システムの大きな転換をあとづけ、変化の原因を探るとともに、これからの日本政治のあるべき方向性について考察する。政党政治、官僚制と行政改革、地方政治の新たな動き、市場参加など様々な側面から変化を浮き彫りにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	55年体制崩壊の虚像（1） －連立政権の意義と限界	1993年政変の過程を振り返り、なぜこの時期に自民党単独政権が崩壊したのかを明らかにする。そのうえで、細川政権以降の連立政権が何を変えようとし、なぜ政治の転換に失敗したかを考察する。そして、残された課題が何であるかを考える。	山口　二郎（北海道大学教授）	山口　二郎（北海道大学教授）
2	55年体制崩壊の虚像（2） －政党再編の夢と挫折	自民党単独政権の崩壊と同時に、政権交代可能な政党システムの必要性が叫ばれたが、自民党に代わる政党が生まれていないのはなぜだろうか。政党再編成論を振り返り、なぜ政党再編の試みが挫折したか、なぜ無党派層が増加したのかを考える。	同　上	同　上
3	55年体制崩壊の虚像（3） －選挙制度改革がもたらしたもの	小選挙区比例代表並立制は、日本の制度をどのように変えたのか。政治改革の目玉として導入された新しい選挙制度を検証する。そして、政治改革の意義を再検討し、さらなる改革の課題について考える。	同　上	同　上
4	社会党の消滅	55年体制の一翼を担ってきた社会党は、なぜ政党再編の渦の中で消滅しようとしているのか。その歴史的役割をふまえ、土井ブームから村山政権、新党運動の挫折の過程を検証しながら、社会党の消長について考える。	新川　敏光（北海道大学教授）	新川　敏光（北海道大学教授）
5	利益団体と政治（1） 労働組合と政治	長年革新勢力を支えてきた労働組合は、経済構造の変化の中で、その政党的役割をどのように変えようとしているのか、労働基準法改正、社会保障制度改革などの政策事例を検証しながら考える。	同　上	同　上
6	利益団体と政治（2） 経済界と政治	長年保守政党を支えてきた経済界は、経済構造の変化の中でその政治的役割をどのように変えようとしているのか、規制緩和、財政再建、景気対策などの政策事例を通じて検証する。	同　上	同　上
7	官僚支配の動揺と変化	エイズ薬害事件、福祉汚職、金融不安と大蔵省など官僚制の失敗がなぜ90年代中頃に噴出したのか。組織的要因、政策的要因を掘り下げて考える。そして、官僚制による行政と行政責任のあり方について検討する。	山口　二郎	山口　二郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行政改革と言う課題の浮上	1996年総選挙を契機に、行政改革が政権の公約となったが、なぜこの時期に行政改革が必要なのかを考える。そして、1997年の行政改革会議の議論を振り返り、行政改革に対する取り組みの仕方について検証し、真の改革課題についても考察する。	山口　二郎	山口　二郎
9	福祉国家の再構築	日本型福祉政策は、行政改革、財政危機の中でどのように再構成させているのか。また、高齢社会の到来の中で、どのような対応が行われているのかを検討する。	新川　敏光	新川　敏光
10	社会保障システムの再編	介護保険の導入、年金制度の改革、医療保険における負担の強化など、目まぐるしく動く社会保障政策について検討し、なぜ改革が必要か、改革をめぐる政治力学はどのようなものかを考える。	同　上	同　上
11	公共事業と政治	政治と公共事業の関係について整理し、政治・行政改革の中での公共事業改革の必要性について考える。また、財政再建によって公共事業がどのように影響を受け、それが政治にどのような影響を及ぼすかを検討する。	山口　二郎	山口　二郎
12	地方政治の新たな展開	官僚接待などの矛盾の噴出によって地方政治がどのように変化したかを追跡し、情報公開や行政改革を推進する新しいリーダーの登場の過程を分析する。また、新潟県巻町、沖縄、岐阜県御嵩町などの住民投票運動の背景についても検証し、地方における新たな民主主義の可能性について検討する。	同　上	同　上
13	分権改革の意義と可能性	地方分権委員会答申の意義と分権改革の今後の展開について考察する。また、21世紀のあるべき地方自治の姿についても考えてみたい。	同　上	同　上
14	日本の対外政策の変化	安保再定義を契機とする日米安保体制の変質の過程を検証する。また、地球環境問題、アジア経済の安定化など新たな課題に対する日本の対応を検討しながら、これからの日本の対外政策の座標軸について考える。	同　上	同　上
15	日本型民主主義の特質と今後の行方	21世紀の日本の民主主義のあるべき姿について考える。	同　上	同　上

＝ 現代の行政（’００）＝（R）

〔主任講師：森田　朗（東京大学教授）〕

全体のねらい

近年、日本の政治行政システムは大きく変わりつつあるが、現代の複雑な行政の実態を正確に理解し、その問題点を分析して改革の処方箋を書くことは容易ではない。この講義では、とくに行政改革を支える新しい行政理論に焦点を当てて、行政現象を理解するための概念と分析枠組について平易に解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「行政」とは何か？－現代国家における行政活動	「行政」概念を理解し、そのイメージを示すために、具体的な事例を紹介する。それを手がかりとして、複雑な行政現象を理解するために必要な「制度」「組織」「活動」という３要素について説明し、それらの関係を明らかにする。	森田　朗（東京大学教授）	森田　朗（東京大学教授）
2	行政国家の成立	現代行政学が対象としているのは、政府活動が飛躍的に拡大し、立法権、司法権に対して行政権が優越した行政国家である。この章では、行政国家が、どのようにして成立し、発展してきたかを、社会経済的発展の側面および政治制度の変容の側面に着目して論じる。	同　上	同　上
3	行政学の発展	行政国家の成立とともに、拡大した行政活動の分析を目的として行政学が誕生した。ここでは、主として現代行政学が誕生し発達してきたアメリカ合衆国を中心に、行政学の学説の変遷と現代福祉国家の課題について論じる。	同　上	同　上
4	行政改革	福祉国家の発展は、他面において、行政改革の世界的な潮流を作り出した。この章では、行政改革の基盤をなす「小さな政府」の考え方を紹介するとともに、これまでの改革の動きと「新公共管理論」について論じる。	同　上	同　上
5	現代の政府体系	現代における国家、中央政府、地方自治体、立法・行政・司法の三権、行政機構等の基本的な制度構造を「政府体系」と捉え、その現代における変容の姿と今日的課題について論じる。	同　上	同　上
6	内閣制度と政官関係	現代国家における民主主義と行政活動の関係を考察するためには、内閣制度の分析が不可欠である。比較の視点から、日本の内閣制度の特質を明らかにするとともに、現在進められている行政改革における内閣機能の強化について論じる。	同　上	同　上
7	地方自治と分権改革	地方自治の制度は、今日の行政現象を理解する上できわめて重要な要素である。日本の地方自治制度の特質について論じる。地方分権推進委員会による勧告を中心に分権改革の内容について述べ、今後の地方自治制度について展望する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行政組織の基礎理論（Ⅰ） ――官僚制の理論	従来の行政学の主要なテーマは官僚制であった。現代の官僚制論の原点をなすマックス・ウェーバーの官僚制論について紹介し、それをめぐる様々な理論展開と初期の組織理論について述べる。	森田　朗	森田　朗
9	行政組織の基礎理論（Ⅱ） ――現代組織論	まず、組織の行動を「決定」と促える視点を示し、情報システムの構造を明らかにし、組織の病理について触れる。情報システムという視点から、現代組織論の枠組と組織管理の諸問題について論じる。	同　上	同　上
10	日本の行政組織と行政改革	日本の行政組織の特質と意思決定のあり方および調整の方式について論じ、行政改革による省庁統廃合の実態を行政組織編成の観点から考察する。	同　上	同　上
11	公務員制度と人事システム	官僚の行動様式という観点から、キャリア・システムを含む日本の公務員制度の特徴を明らかにし、これからの公務員制度に求められる要素と今後の改革のあり方について論じる。	同　上	同　上
12	行政活動と政策	現代の行政は、その多様な政策執行活動によって特徴付けられる。ここでは、現代の行政活動が社会システムを制御する機能を果たしている点に着目して、「政策」の概念、政策のもつべき性質、行政活動の評価のあり方等について考察する。	同　上	同　上
13	政策過程	行政活動を、政策課題の発見から、政策案の作成、決定、そして執行という一連の過程として捉えることによって、複雑な行政活動を理解し分析するための視点を提供する。ここでは、とくに政策過程の構造と課題の設定から正式な政策決定に至る過程を考察する。	同　上	同　上
14	政策の執行と評価	前章を承けて、この章では、正式に決定された政策が執行され、現実の社会に行政機関が働きかける過程を考察する。一定の制度的枠組のなかで、行政官がどのように決定行動を行っているかを論じるとともに、政策評価について考察する。	同　上	同　上
15	行政責任と参加 －21世紀の行政学	これからの行政は、民間企業との協力やＮＧＯ、ボランティアの参加なくしてはなりたたない。この章では、これからの公共サービスの特質について論じるとともに、多様な参加の形態とともに行政責任（アカウンタビリティ）のあり方について考察し、これからの行政学を展望して、最後に、その可能性と課題について論じる。	同　上	同　上

＝現代経済学（'01）＝（TV）

〔主任講師：新飯田　宏（関東学院大学特約教授）〕

全体のねらい

急激に変化している世界経済に対応して、現代の経済学も新しい発展を遂げつつある。この講義では、現代経済学の共有財産になっている基礎理論をできるだけ正確に説明し、現在重要性を増している問題のいくつかをとりあげ、経済学がいかなる解答を興えられるのかを示すことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代経済学の体系	現代の経済問題を説明する学問体系として、現代経済学がどのような分析方法をとっているのかを概説する。具体的には、理論モデルの性格、ミクロ分析とマクロ分析、実証的経済学と規範的な経済学、などの経済学の諸分野について説明する。	新飯田　宏（関東学院大学特約教授）	新飯田　宏（関東学院大学特約教授）
2	家計の行動	家計の選好を示す無差別曲線を用いて、消費者行動、労働供給、貯蓄行動について説明する。	同　上	同　上
3	企業の行動	利潤を最大化しようとする企業が、どのように費用最小の生産方法を選択し、どのように産出量を決定するのか、また生産要素の需要量を決定するのかを説明する。	同　上	同　上
4	競争市場の均衡と有効性	完全競争市場の均衡がどのような性格を持ち、役割を果しているのかを交換、生産、消費者主権の観点から説明する。	同　上	同　上
5	不完全競争と産業組織	市場構造のタイプにしたがって、独占・寡占・独占的競争のモデル分析を説明し、完全競争市場における成果と比較する。独占禁止法との関係についても明らかにされる。	同　上	同　上
6	市場の失敗と公共政策	いわゆる市場の失敗といわれる事例（外部性、公共財、自然独占）について説明し、公共政策による資源配分の改善の可能性について説明する。また情報の不完全性に基づく市場の失敗と、政府の失敗についても触れる。	同　上	同　上
7	経済循環と国民所得	一国経済の活動水準がどのように測定されるかを産業連関表を中心に説明し、GDP（GNP）をめぐるマクロ経済の循環図式と、マクロ経済学の主要課題が何かを明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	国民所得水準の決定	いわゆる有効需要理論にしたがって、総需要と総供給の一致から、国民所得水準が決定されるモデルについて説明する。乗数理論、オープン・マクロの経常収支の決定についても触れる。	新飯田宏	新飯田宏
9	貨幣と利子・所得	国富を構成する実物資産と金融資産の経済活動における役割を説明しつつ、貨幣量と利子率の関係を明らかにする。貨幣市場の需給均衡を通して所得と利子率がどのような関係にあるかをＬＭ曲線によって説明する。	同上	同上
10	消費・投資と利子率	消費関数（ケインズ型短期消費関数とライフサイクル型長期消費関数）と投資関数について説明し、財市場の均衡条件からIS曲線を導き、IS・LM両曲線によって所得と利子率の同時決定のメカニズムを説明する。	同上	同上
11	財政政策と金融政策	経済安定化政策として利用される財政・金融政策の手段について説明し、それぞれの政策効果をIS・LM曲線によって比較検討する。	同上	同上
12	インフレーション（デフレーション）と失業	貨幣供給・GDP・物価の関係を明らかにしつつ、オークン法則・フィリップス曲線について説明する。インフレ予想と自然失業率、スタグフレーション、デフレーションについて説明する。	同上	同上
13	国際収支と為替レート	経常収支に対する３つの考え方を説明し、それぞれに対応する経常収支調整政策を紹介する。次いで、為替レートの決定を利子平価説から説明する。また、経常収支の調整に国際協調は必要かどうかについても説明する。	同上	同上
14	経済成長	国民経済の供給能力が増大する要因を説明し、均衡成長径路の安定性、および貯蓄率・技術進歩率の変化が均衡成長径路に及ぼす影響について明らかにする。	同上	同上
15	景気循環	景気循環の型と周期についての通説を紹介し、景気循環発生のメカニズムを説明する。ついで、ケインジアン，マネタリスト、最近の新ケインズ派の景気循環についての考え方を比較することで、マクロ経済についての各学派の意見対立の核心を検討する。	同上	同上

＝ 金融論（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩田規久男（学習院大学教授）〕

全体のねらい

金融は私たちに預金をはじめとする貯蓄手段を提供するとともに、企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。これらの金融活動は、国内総生産や雇用量や物価などのマクロ的な経済変数への影響を通じて、私たちの生活に大きな影響を及ぼす。この講義では日本の金融制度の仕組みを解説しつつ、金融活動をめぐる諸問題を説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	貸幣と決済システム	私たちの経済では、お金（貨幣）が様々な取引の決済手段として用いられている。貨幣が決済手段として機能するためには緻密、かつ安定した決済システムが存在しなければならない。第1回は日本の決済システムの仕組みについて説明する。	岩田規久男（学習院大学教授）	岩田規久男（学習院大学教授）
2	貸幣の貸借と資金の運用・調達	個人や企業の中には、一方に貨幣が余っているものが存在し、他方に貨幣が不足しているものが存在する。第2回は貨幣の貸借の仕組みと日本全体の貨幣の流れについて説明する。	同上	同上
3	金融機関の役割	貨幣の貸借には様々な取引費用がかかる。この取引費用をできるだけ小さくして貨幣が貸し手から借り手にスムーズに流れるようにするのが、各種の金融機関の役割である。第3回は金融機関の役割を情報の不完全性という視点から説明する。	同上	同上
4	日本の金融機関と貨幣の流れ	日本の金融機関の種類、各々の金融機関の機能の相違、及び、貨幣が各種の金融機関を通じてどのように流れるかを説明する。	同上	同上
5	銀行と貨幣の供給	貨幣を定義したうえで、貨幣は日本銀行と民間銀行とによって供給されること、及び両者の関係について説明する。	同上	同上
6	貨幣の需要と利子率	利子率とは何かを説明した後に、貨幣のさまざまな機能に着目しつつ、貨幣の需要と利子率との関係を説明する。	同上	同上
7	利子率の決定	利子率は、第5回で説明した銀行による貨幣供給と、第6回で説明した個人や企業の貨幣需要とを等しくするように決定されると考えられる。第7回はこの流動性選好説と呼ばれる利子率決定理論を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	利子率と投資	利子率は、企業の在庫投資や設備投資及び個人等による住宅投資に大きな影響を及ぼす。第8回はこれらの投資がどのようなメカニズムを通じて利子率に依存するかを説明する。	岩田規久男	岩田規久男
9	金融政策の手段	日本銀行による金融政策は貨幣の供給量や利子率に影響を及ぼし、利子率は企業等の設備投資に影響を与える。第9回は金融政策の手段にはどのようなものがあるかを説明する。	同上	同上
10	ケインズ・モデルにおける金融政策の効果	代表的マクロ経済モデルのひとつであるケインズ・モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明する。	同上	同上
11	古典派モデルにおける金融政策の効果	もう一つの代表的マクロ経済モデルである古典派モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明し、ケインズ・モデルと比較する。	同上	同上
12	国際金融と金融政策	為替レートと貿易とを考慮して、金融政策が為替レートへの影響を通じて国内総生産や物価にどのような影響を及ぼすかを説明する。	同上	同上
13	新しい金融取引	1980年代半ば以降から、金融先物、オプション、金融スワップなどのデリバティブと呼ばれる新しい金融取引が盛んになった。第13回では、これらの新しい金融取引の仕組みとその機能を説明する。	同上	同上
14	金融自由化－金融ビックバン－	金融システムの安定を図る金融規制は、規制がいきすぎると金融の非効率を招く。第14回は80年代の初め以後進められてきた金融自由化と、2001年に完成予定されている金融バックバンについて説明する。	同上	同上
15	金融規制と金融システムの安定	経済の安定にとっては、金融システムが安定していることが重要である。金融システムの安定を図る手段としての金融規制や預金保険機構等の仕組みについて説明する。	同上	同上

＝ 財政学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：宮島　洋（東京大学教授）〕
〔主任講師：井堀　利宏（内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官（併）・東京大学教授）〕

全体のねらい
現代社会における財政の役割・制度・経済的影響は極めて複雑である。本講義では、政府の範囲と構成、公共支出・予算、租税・公債、社会保障等に関する平易な制度分析と経済分析を通じて、現代財政の仕組みと経済的機能を解説する。その際、急速な高齢化、国際化、情報化等の経済社会の動向と財政との相互関係を重視したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	財政学とは何か	財政学ではどのような内容の講義をするのか、実例を取り上げながら、これからの講義の構成を説明する。	井堀利宏（内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官（併）・東京大学教授）	井堀利宏（内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官（併）・東京大学教授）
2	予算	財政制度の中心的な役割をもっている予算について、日本の制度を念頭に置きながら説明する。また、予算ができるプロセスについてもふれる。	同上	同上
3	政府支出	政府の経済活動の役割を、支出面から説明する。財政の果たすべき機能を取り上げるとともに、日本の政府支出の概要を説明する。	同上	同上
4	政府収入	政府収入の中心である租税の概要を説明する。また、公債発行の制度的側面にもふれる。	同上	同上
5	地方財政	日本の地方財政制度の概要を説明する。地方交付税の役割や地方税の構成などもふれる。また、地方分権のあり方も取り上げる。	同上	同上
6	財政政策	財政政策の考え方を、マクロ経済の安定化政策を中心として説明する。また、戦後日本の財政政策の流れについてもふれる。	同上	同上
7	公債発行	公債発行がマクロ経済にどのような影響を与えるかを説明する。また、公債発行と世代間の負担の関係についてもふれる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会保障	財政支出に占める社会保障の比重は大きい。日本の公的年金の概要を説明するとともに、高齢化社会での社会保障の問題点にふれる。	井堀　利宏	井堀　利宏
9	租税体系	経済や公共部門の発展に伴う租税制度の歴史的推移、日本の租税制度の特色、租税負担率の国際比較、課税ベースと納税義務者による租税の分類、公平・中立・簡素という租税制度の評価基準などについて説明する。	宮島　洋（東京大学教授）	宮島　洋（東京大学教授）
10	所得税	国際的にも租税制度の柱である個人所得課税の仕組み（課税所得、税率構造等）、負担構造、税務行政、経済的影響等を説明する。さらに、国際化、高齢化、情報化等を背景とした、最近の所得税改革の論議を紹介する。	同　上	同　上
11	法人税	日本の租税制度において比重の高い法人課税について、課税の根拠、所得税との関係、課税利潤の算定方法、企業組織や投資・資金調達への影響等を説明し、併せて、経済の国際化に伴う国際課税の動向を紹介する。	同　上	同　上
12	消費税	消費課税の種類や特徴を指摘した後、主に付加価値税（日本の消費税）について、歴史的な推移、課税ベースの定義、税率構造、納税・徴税の仕組み、経済的な影響、負担の特徴、国際貿易上の取扱いなどを説明する。	同　上	同　上
13	資産税	金融資産や実物資産のフローとストックの関係をまず明らかにし、続いて、資産の保有・移転に関する租税に焦点を当て、その租税制度における役割、課税の仕組み、経済的な影響について説明する。	同　上	同　上
14	公共財	市場では必ずしも適切に供給されない公共サービスである公共財の理論を説明するとともに、市場経済における政府の役割をまとめる。	井堀　利宏	井堀　利宏
15	今後の財政問題	21世紀を展望したときの日本の財政問題を説明する。公共部門の規模と役割、公債発行の大きさ、社会資本整備のあり方、国際化、高齢化社会の財政問題などを論ずる。	同　上	同　上

＝ 国際経済学（’０１）＝（R）

〔主任講師：大山　道広（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

経済原論の初歩的な知識を有する学生を対象として国際経済学の基本的な内容を講じる。国際分業、貿易政策、国際金融に関連する伝統的な理論を解説し、その現代的な展開に言及する。これらの理論が現実の国際経済にいかにかかわっているかについても理解を深めるため事例やデータをあげて説明したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際経済学の課題と方法	グローバリゼーションの時代にあっても、国際経済の最小単位としての国民経済の意義は失われていない。国際経済学は国家間の経済取引を分析する。国際貿易理論はその実物的側面に、国際金融理論はその金融的側面に光をあてる。その概要について述べる。	大山　道広（慶應義塾大学教授）	大山　道広（慶應義塾大学教授）
2	国際貿易の均衡	国際貿易理論の目的は、財・サービスの国際経済取引の決定要因とその経済的意味を解明することである。そのため、貨幣を捨象し、経常収支が均衡するような「長期均衡」に焦点を絞る。国際貿易理論の基本的なモデルを示し、貿易均衡の概念を説明する。	同　上	同　上
3	国際分業と労働生産性	国際貿易は、各国が比較的得意とする財の生産に特化した分業、すなわち国際分業に基づいて行われる。ここでは、労働生産性の国際的差異によって国際分業を説明するリカード・ミルの比較生産費説をとりあげ、比較優位、貿易利益の概念を明らかにする。	同　上	同　上
4	国際分業と要素賦存	希少な生産要素は労働のみではない。労働、資本などの生産要素の賦存状況は国ごとに異なっており、このこともまた国際分業の重要な根拠となる。ヘクシャー・オリーンの国際貿易モデルを解説し、国際分業、国内所得分配への含意を示す。	同　上	同　上
5	国際分業と収穫逓増	産業に収穫逓増の現象が見られるとき、比較優位の差異がなくても国際分業が行われ、貿易利益が得られる。収穫逓増に加えて製品差別化の概念を導入することにより、現代の国際貿易に重要な地位を占める産業内貿易を説明する。	同　上	同　上
6	経済成長とトランスファー問題	経済成長のスピードは国によって異なり、先進国と途上国の格差が問題になっている。これまで学んできた国際貿易の基本モデルを用いて、各国の経済成長や国際的な所得トランスファーが国際貿易にいかなる影響を及ぼすかについて検討する。	同　上	同　上
7	国際投資と技術移転	国際貿易はいわゆる商品貿易に限られるものではない。資本や技術も貿易の対象となる。国際投資は資本サービスや技術の貿易をひきおこす。ここでは、間接投資によって生じる資本移動と直接投資に起因する技術移転について、その要因と効果を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	貿易政策の理論	政府が実施する経済政策を国内政策と貿易政策に分類し、その政策手段を説明する。貿易政策の代表的な手段である関税政策に注目し、それが国際交易条件、国内価格、ひいては国内所得分配に及ぼす効果を見る。これに基づいて輸入数量制限の効果を類推する。	大山　道広	大山　道広
9	資源配分と保護貿易	自由貿易論はいっさいの保護貿易政策の撤廃を主張する。その経済学的な根拠は、一定の条件のもとで自由貿易が世界の資源を最も効率的な利用を保障するという命題によって与えられる。これに対する保護貿易論の根拠を紹介し、批判的に検討する。	同　上	同　上
10	保護貿易の政治経済学	自由貿易論にしても保護貿易論にしても、単純に経済学的な根拠だけで理解できるものではない。そこには、国内の所得分配に関わるさまざまな政治的要因が絡んでいる。最近の保護貿易の政治経済学的分析について解説する。	同　上	同　上
11	国際金融と国際収支	実物的な財・サービスの国際移動が実現するためには、国際決済、すなわち代金の受け払いが必要である。国際金融を含む国際経済取引の総合的記録体系としての国際収支表の見方を解説する。最後に、国際収支の均衡とは何かを明らかにし、不均衡の調整メカニズムについて述べる。	同　上	同　上
12	為替レートの理論	各国はそれぞれ独自の通貨を発行している。異なる通貨間の交換比率、すなわち為替レートがいかに決定されるかは、国際金融の基本問題のひとつである。伝統的な購買力平価説、最近のストック均衡理論など、為替レート決定の諸学説を解説する。	同　上	同　上
13	マクロ経済と国際的連関	国際経済のマクロ的連関は、マクロ経済学のモデルに為替レート決定の理論を組み込むことによって分析できる。簡単な国際経済のマクロモデルを設定し、財政金融政策が為替レートや内外経済に及ぼす効果と国際収支の調整過程を考察する。	同　上	同　上
14	地域経済統合	最近の地域経済統合の「第２の波」に注目し、その動向を概観する。地域経済統合は、自由貿易地域、関税同盟、経済同盟など種々の形態、段階のものがある。地域経済統合のの理論的理解の基礎となる関税同盟の理論を説明する。	同　上	同　上
15	国際協調と貿易・金融体制	国際経済関係が緊密になるにしたがって、さまざまなレベルで国際的な政策協調が必要ととされるようななった。その基本的な理念を明らかにし、ＧＡＴＴ／ＷＴＯの生成、その経済的意義を論じ、国際通貨制度の過去・現在・未来を展望する。	同　上	同　上

＝ 日本経済史（’９９）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

近現代日本経済の歴史的展開を部門別に概観することに力点を置く。前近代の日本経済を概観したのち、戦前の近代日本における産業貿易・金融財政・社会階級構造と恐慌・戦争の意義を検討し、戦後の現代日本における高度成長と景気循環・対外経済関係を分析して、最終的には世紀転換期日本の課題を自覚することを目標とする。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	前近代の日本経済	古代・中世・近世の日本経済を考察する。旧石器時代・縄紋時代の原始的共同体、弥生時代における農耕共同体の成立・貢納制社会への移行と古墳時代・律令制国家・院政期・鎌倉期・室町期・戦国期など荘園制社会の諸段階、幕藩制社会の成立と展開を概観する。	原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）	原　朗（東京国際大学教授・東京大学名誉教授）
2	資本制社会への移行	幕末開港の影響と倒幕運動の展開、明治新政府の成立と明治維新期の諸変革（地租改正・秩禄処分・殖産興業）、紙幣整理と小生産者の分解（日本型の原始的蓄積）、企業勃興による産業革命の開始、自由民権運動と天皇制国家の成立などを概観する。	同　上	同　上
3	近代日本の産業貿易構造	軽工業部門における輸出産業の発展（紡績業・製糸業）と鉱山業（石炭・銅）、重工業部門の展開（重工廠・製鉄業・造船業）、農業部門と工業部門との関連、産業諸部門間の関連と貿易構造、商業その他諸部門の比重、植民地との関連などについて概説する。	同　上	同　上
4	近代日本の金融財政構造	明治新政府の財政経済政策、産業革命期の銀行分業体系成立、日清・日露戦争の軍事財政と戦後経営、第一次大戦期の金融と財政、1920年代の経済政策体系、1920年代以降の金融財政構造と諸恐慌との関係などについて概説する。	同　上	同　上
5	近代日本の社会階級構造	資本制部門での労資関係と賃労働の状態、労働争議・労働運動の展開、農業部門での零細自作農と地主小作関係、寄生地主制と小作争議、社会政策と調停法体制、中間層の広範な存在、資本家団体と地主団体・産業組合、財閥資本と独占体制などについて概説する。	同　上	同　上
6	近代日本と恐慌	1890年恐慌、日清戦後第一次・第二次恐慌、日露戦争後恐慌、日露戦後の景気循環、1920年戦後恐慌、1920年代の「慢性的不況」、1927年金融恐慌、1929～31年昭和恐慌などについて概説し、景気循環と恐慌が近代日本の経済と社会に与えた影響について概説する。	同　上	同　上
7	近代日本と戦争	産業革命と日清・日露戦争ならびにその戦後経営、台湾・朝鮮における植民地支配の展開と南満州の半植民地化、第一次世界大戦と対華二一ヶ条要求・西原借款、シベリア出兵、ワシントン軍縮、山東出兵、張作霖爆殺事件、ロンドン軍縮、中国東北への侵略につき概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日中全面戦争期の日本経済	日中全面戦争と統制経済への移行、物資動員計画、外貨不足問題、国家総動員法、物動計画改訂、価格統制の展開、日米通商航海条約の廃棄、第二次欧州大戦、日独伊三国軍事同盟、北部仏印進駐、独ソ開戦、南部仏印進駐、対日資産凍結などにつき概説する。	原　朗	原　朗
9	アジア太平洋戦争期の日本経済	アジア太平洋戦争と戦時体制の強化、軍需生産の動向、労働力の動員、戦時下の農業、「大東亜共栄圏」の経済的実態、南方占領地からの物資略奪、中国占領地と植民地の支配、戦時末期の増産政策、船舶不足問題、戦時経済の崩壊などについて概説する。	同　上	同　上
10	被占領下の戦後変革	アメリカ初期対日占領政策の形成、財閥解体・労働改革・農地改革、財政改革・地方行政制度改革、賠償問題、敗戦後の経済危機、傾斜生産方式の採用、冷戦と占領政策の転換、ドッジラインとインフレ収束・統制撤廃・労資関係の再編などについて概説する。	同　上	同　上
11	戦後日本の景気循環	朝鮮特需ブームとその反動、景気回復と54年不況、神武景気、鍋底不況、岩戸景気、公定歩合政策・財政政策と景気循環、転型期不況、オリンピック景気、1965年不況、いざなぎ景気など、景気循環の動向に即して概説する。	同　上	同　上
12	戦後日本の高度成長	重工業化の進展、エネルギー革命、環境汚染の発生、企業集団の投資競争、経済の二重構造、大型合併の続出、設備・機械の大型化、モータリゼーションの進行、コンピュータ社会の到来、ＭＥ革命の開始などについて概説する。	同　上	同　上
13	高度成長期の社会的変化	労働力需要の増大、生産性向上運動と労働運動の転換、農工格差の拡大、農業基本法制定、労働力不足への転換、新労務管理方式、農業の衰退、労働組合運動の再編成、地球環境問題などについて概説する。	同　上	同　上
14	戦後日本の対外経済関係	貿易自由化と賠償支払い、輸出貿易と市場開拓、貿易摩擦と資本輸出、国際通貨危機、列島改造論、変動相場制移行、第1次石油危機への対応、高度成長の終焉、低成長への調整期などについて概説する。	同　上	同　上
15	世紀転換期の日本経済	第2次石油危機と長期不況、日米通商摩擦の激化、プラザ合意と円高不況、円高好況への転換、経済大国化、バブルの発生と崩壊、1997年金融危機、世紀転換期日本の課題などについて概説する。	同　上	同　上

＝ 欧米経済史（’９９）＝（R）

〔主任講師：藤瀬 浩司（愛知淑徳大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は資本主義という社会システムから成り立っていますが、この講義では資本主義の経済発展を、イギリス産業革命から現在までの約2世紀を中心に考察します。資本主義の発展に見られる大きな枠組みや流れに重点を置き、またとくに資本主義を構成する国民国家と世界経済という2つの要素に注目したいと考えます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．歴史社会としての資本主義 共同体社会と資本主義	資本主義は16世紀に登場し、イギリス産業革命によって成立した歴史社会です。これ以前の歴史社会は共同体という関係を基礎とした、資本主義とは異なった社会システムでした。共同体社会の基本的性格とともに、完成された市場経済としての資本主義の特徴を考察し、さらにその構造と変動に関する予備概念を説明します。	藤瀬 浩司（愛知淑徳大学教授）	藤瀬 浩司（愛知淑徳大学教授）
2	資本主義社会の誕生	14世紀半ばから15世紀に西ヨーロッパでは市場経済の発展を伴った封建社会の解体が始まります。15世紀末の地理上の発見によって資本主義は急速に展開し、ヨーロッパを中心とした世界経済が生成します。こうした世界経済の分業体制、中心諸国の経済発展や経済政策、さらにイギリス産業革命の前提条件を検討します。	同上	同上
3	Ⅱ．19世紀資本主義 イギリス産業革命	イギリス産業革命によって資本主義は本格的に展開を開始します。産業革命の過程、最初の産業革命としての特徴、イギリスの産業や社会、また世界経済に対する影響を考察し、さらに同時期のフランス革命など欧米の諸変革を検討します。またイギリス産業革命を起点とする19世紀の資本主義発展の段階と局面を概観します。	同上	同上
4	イギリス資本主義の成熟	19世紀中葉イギリスは自由貿易政策に転換します。これとともに、労働、企業組織、金融などの面で制度改革が進みます。イギリス資本主義は19世紀の第3四半期に大きく成長し、世界の工業、商業、金融の中心としての地位を確立します。自由貿易と平行する制度改革、イギリス型産業組織と金融組織について検討します。	同上	同上
5	資本主義世界の拡張－工業化の第２の波	運輸革命と自由貿易体制は19世紀第3四半期の世界経済の拡張をもたらしました。この回の講義では、こうした世界経済の拡張に中で、西ヨーロッパの国々やアメリカ合衆国が工業化を進め、それぞれの資本主義を確立し、そしてイギリスを核とした資本主義世界の中心を形成する過程を考察します。	同上	同上
6	周辺経済の分極化－周辺工業化と周辺従属地域	中心諸国の政治的経済的拡張は、地球上の広範な地域を世界経済の中に組込み、旧周辺地域を含めて新しい分業体系を創り出します。一連の周辺諸国は欧米に対抗して工業化を実現しようとし、また他の地域は世界市場向けにもっぱら原料や食糧を供給する地域に転化されます。周辺的工業化と周辺従属地域の特徴を考察します。	同上	同上
7	19世紀末大不況	1873年の世界恐慌以後約4半世紀は通常大不況と呼ばれている時期です。しかしこの時期は景気循環の「不況」ではありません。世界的に価格や利子率は低水準に留まりましたが、経済成長は鈍化したものの持続していました。大不況期の構造変動を、生産方法における変化、世界市場の再編成、社会・政治的動向について検討します。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Ⅲ．20世紀資本主義 20世紀資本主義発展の特徴	20世紀の資本主義は19世紀に見られた資本主義とは異なった特徴を持っています。20世紀資本主義は曲折を経ながらも、アメリカにリードされアメリカを中心に構成されていった資本主義です。その構造や特徴を概括するとともに、最近の統計的整理に基づいて全体の時期を2つの段階と4つの局面に区分します。	藤瀬　浩司	藤瀬　浩司
9	大型企業体の出現	19世紀末から新鋭産業において一連の大型企業体が出現します。大型企業体は大量生産・大量流通により低コストを実現し、巨大な市場を創出していきます。こうしたタイプの企業体が成長し、様々な分野を支配していく過程が、20世紀資本主義の発展の原動力になります。大型企業の特徴と社会経済への影響を検討します。	同　上	同　上
10	世界経済の拡張と国際金本位制	世界経済の稠密化の中で、20世紀初めに世界経済の新たな構造が現れます。第1に中心機能が、金融の中心と工業生産の中心に分化し、第2に周辺的工業国が形成され、最後に世界的規模で原料・食糧供給地が開発形成されます。こうした構造の特徴、その上に成立する多角的貿易決済システムや国際金本位制を考察します。	同　上	同　上
11	帝国主義と戦争	二つの世界大戦は列強諸国の帝国主義的対立を原因としています。植民地帝国のイギリスやフランスに対抗して、多くの後発国は自身の支配地域を獲得しようとしました。こうした対立の根源、支配地域における独立運動や反帝国主義運動、社会主義との関連、新しい選択としてのウイルソンの政策構想について検討します。	同　上	同　上
12	両大戦間期経済と大不況	第一次大戦後ヨーロッパの経済回復は遅れ、また農業諸国は原料・食糧の供給の過剰に悩まされましたが、アメリカはその資本輸出によって世界経済をともかく維持し、国内経済の繁栄を享受していました。この回は、1920年代経済の特徴とアメリカを起点とする大不況の発生過程を考察します。	同　上	同　上
13	アメリカ体制の成立－大不況克服の道	アメリカのニューディール、ドイツのナチズムなどの大不況克服の試み、また戦時経済から戦後改革にいたる経済・社会政策、さらにはアメリカを中心とした戦後の国際的政治経済体制の形成を考察することによって、第2次世界大戦後の経済発展を支える制度や政策がいかに創出されたかを考察します。	同　上	同　上
14	資本主義の黄金時代の光と影	20世紀の第3四半期に多くの資本主義国が高水準の経済成長を達成します。アメリカ型の生産方式が西欧や日本に広がり、新しい分野を支配してゆき、同時に国家は経済成長のため総合的手段を講じました。しかし国際的には発展途上国問題や社会主義経済の行詰まりが発生しました。黄金時代の構造と問題点について検討します。	同　上	同　上
15	成長国家の終焉と新しい時代のはじまり	黄金時代の経済成長は、1960年代末から70年代にかけて悪性のインフレーションの進行と戦後国際金融システムの崩壊によって終わります。従来の制度や政策が有効制を失い戦後の国際体制が大きく変化する過程を考察するとともに、情報革命、経済のグローバル化、アジア経済の成長など新しい資本主義の方向を展望します。	同　上	同　上

＝ 経済学史入門（’０１） ＝（ＴＶ）

〔主任講師：根岸　隆（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経済学が発展してきた歴史を学ぶことにより、現代の経済学についての理解を確かめることを目的とする。現代経済学の観点から経済学の歴史を考察し、また、わが国の学者による研究成果にもできるだけ言及したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学史をなぜ学ぶのか	主流派である新古典派のほかに、さまざまな学派が存在する現代経済学の状況について述べ、なぜ経済学の歴史を学ぶのかを考える。	根岸　隆（青山学院大学教授）	根岸　隆（青山学院大学教授）
2	経済学のあけぼの	経済学のあけぼのである重商主義（マーカンテイリズム）と重農主義とを概観する。ことに、後者におけるケネーの「経済表」に注目する。	同　上	同　上
3	Ａ・スミスと「諸国民の富」	重商主義を批判、「諸国民の富」により古典派経済学を創始したアダム・スミスについて概説する。ことにその経済成長論について検討し、マルサスの批判にも言及する。	同　上	同　上
4	リカードの巨視的分配論	古典派経済学の代表的理論家であるリカードの経済学、ことに資本家、労働者、地主の諸階級間の分配に関する理論を検討する。	同　上	同　上
5	比較生産費説	国際貿易に関するリカードの比較生産費説について概説　する。英国、ポルトガル、服地、ワインをめぐる有名な数値例についての疑問を検討し、さらにリカード理論による交易条件（国際的な財の交換比率）の決定可能性について考察する。	同　上	同　上
6	Ｊ．Ｓ．ミルと賃金基金説	古典派経済学の殿将であるＪ．Ｓ．ミルの経済学を概観する。古典派経済学における賃金基金説の意義をあきらかにし、ソートンの批判に対してミルがそれを放棄したわけを検討する。	同　上	同　上
7	マルクスと「資本論」	古典派経済学を継承しながら資本主義の歴史性を主張したマルクスの「資本論」を概観する。等価交換をつうじて資本が労働を搾取するというなぞを解明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利潤率低下法則	マルクスの利潤率低下法則を概説し、それを否定するわが国の柴田・置塩の定理を数値例によって解説する。	根岸　隆	根岸　隆
9	古典派経済学と限界革命	古典派経済学のまとめとして、現代経済学にとってその意義を検討する。さらに、1870年代における古典派経済学に対する限界革命、新古典派経済学の誕生について概説する。	同　上	同　上
10	クールノーの数理経済学	クールノーの先駆的な独占理論、寡占理論、完全競争理論についてのべ、その考え方が現代経済学におけるゲームの理論のそれにつながることをあきらかにする。	同　上	同　上
11	ワルラスと一般均衡理論	市場経済の原理を求めて新古典派経済学の中心的な理論である一般均衡理論を展開したワルラスと、その後継者であり厚生経済学の基本定理（競争的資源配分の最適性）に関する重要な概念を提示したパレートの経済学を説明する。	同　上	同　上
12	ジェボンズと裁定行動	ワルスラとはことなった方法で市場均衡を解明したジェボンズとエッジワースのアプローチ、ことに有名なエッジワースのボックスダイアグラムについて説明する。	同　上	同　上
13	メンガーとオーストリア学派	メンガーにはじまるオーストラリア学派の現代的意義を論じる。また、ベーム・バヴェルクとシュンペーターの資本利子に関する論争など新古典派経済学にたいする貢献について検討する。	同　上	同　上
14	マーシャルとケンブリッジ学派	実際の経済問題を解明するための分析用具を開発したマーシャルの経済学、ことに消費者余剰分析による経済厚生論を概説する。	同　上	同　上
15	ケインズの「一般理論」	ケンブリッジ学派の自己批判であり、現代マクロ経済学の出発点であるケインズの「一般理論」を概説する。また、ケインズと経済学史の関係についても考察する。	同　上	同　上

＝ コミュニティ論（’０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

コミュニティは、欧米における社会的現実であると共に、日本社会では60年代以降、地域社会の現実を変えて行く一種の社会目標として、理念化された概念である。この科目では、この多義的な概念を整理すると共に、日本の地域社会の現実とその問題点を、海外のコミュニティのあり方との対比の中で明らかにして行く。特に日本独自の地域集団とされる町内会の組織原理と、欧米のヴォランタリ・アソシエーションの比較。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニティとは何か	コミュニティ概念の系譜　牧歌的コミュニティと現代的コミュニティ　地域性と共同性相互扶助システムと専門処理システム　両者の最適統合としてのコミュニティ	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授） 江上　渉（成蹊大学教授）
2	コミュニティ問題と施策	都市化と地域社会の変容　コミュニティ問題の登場　コミュニティ答申　コミュニティ施策の展開とその矮小化	江上　渉（成蹊大学教授）	同　上
3	伝統的地域集団～町内会	日本独自とされる地域集団～町内会　＜町内原理＞　町内会は封建的か　町内会はボランティア組織か　地域管理システムとしての町内会	倉沢　進	同　上
4	コミュニティと住民活動	親和的コミュニティと自治的コミュニティ　コミュニティ活動の３類型　自己充実型活動奉仕型活動　問題解決型活動	江上　渉	同　上
5	祭礼とコミュニティ：日本	伝統的地域社会と祭礼　町内会と祭礼　島田市の帯祭　それを支える社会構造　地域社会の変動要因　清水市飯田地区の弥生祭　中核集団と地域社会	倉沢　進	倉沢　進
6	祭礼とコミュニティ：海外	イタリア、シエナのパリオ（裸馬競技）　これを支える17のコントラーダ（地区）　祭礼の会場となるカンポ広場　コントラーダ単位の宴会　コントラーダと町内会	同　上	同　上
7	スポーツとコミュニティ：日本	日本にはスポーツ文化がなぜ育たないか　愛知県成岩地区のスポーツクラブ　習志野市秋津小学校の試み　学校と地域社会	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	スポーツとコミュニティ：海外	スポーツフォアオールとドイツのbreiten sport　ニュールンベルク市ヴォルゼンドルフ地区のスポーツクラブ　地域社会の機能とスポーツクラブの機能	倉沢　進	倉沢　進
9	環境とコミュニティ：日本	環境問題とコミュニティ　古都保存と市民運動　小樽の運河保全　ゴミとコミュニティ	江上　渉 堀川　三郎（法政大学助教授）	倉沢　進 江上　渉
10	環境とコミュニティ：海外	アメニティの概念　イギリスのアメニティ集団　フィンチレイ・ソサイアティの活動　地域のアメニティ集団と援助組織　行政の支援	倉沢　進	倉沢　進
11	住民自治とコミュニティ：日本	町内会型住民自治　行政末端機構としての町内会　明治の町内と平成の町内　問題の自己処理　けやきコミュニティセンター　コミュニティ型住民自治	江上　渉	倉沢　進 江上　渉
12	住民自治とコミュニティ：海外	ピッツバークのネーバーフッド・インヴォルヴメント　ボランタリー集団と行政組織　フィリピン　メトロ・マニラのバランガイ～ガダルーペヌエボ　町内会型のバランガイ　相互扶助システムとしてのバランガイ　行政末端としてのバランガイ	倉沢　進	同上
13	コミュニティと地域組織：日本	町内会の多機能性　青年団・婦人会・老人会・子供会　目黒区の町内会と住区住民協議会	江上　渉	同上
14	コミュニティと地域組織：海外	アメリカ・メーバーフッド連盟（NUSA）　その組織と活動 イギリスのアメニティ・グループの単独性 フィリピンのバランガイの全国組織　行政との関係	倉沢　進	同上
15	21世紀のコミュニティ	コミュニティ概念の拡大　地域性は必要条件か　共同性の契機	倉沢　進 江上　渉	同上

＝メディア論（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉見　俊哉（東京大学教授）〕
〔主任講師：水越　　伸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

私たちは、現代の急速なメディア状況の進展と、それに伴うコミュニケーションや文化の混沌とした変化を、どのようにとらえていけばいいのであろうか。この講義の目的は、そのような視座を手に入れるために、私たちの社会とメディアの関係について歴史社会的な展開、現代的な状況、理論的なアプローチの３つの側面から検討を加えることにある。すなわちここでは、まず１７、１８世紀における印刷術と書物の普及から２０世紀末のサイバースペースの展開にいたるまでを、社会や人間を捨象して情報技術の可能性ばかりを説く議論からも、情報技術やメディアのあり方を固定化した議論からも距離を取りつつ、情報技術、メディア、社会、人間の相互連関のなかでたどっていく。同時に２０世紀末のメディアの状況を、デジタル化やモバイル化、グローバル化やメディア環境化といった諸々の動きとをかかわらせながら考えていく。さらにまた、そうしたメディアをめぐってこれまでなされてきた諸々も学問的なアプローチについて紹介していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	メディア論とは何か	イントロダクション。これからメディア論において何を、どのように学んでいくのかを示す。メディアの歴史、メディアの理論、メディアの現在を３つの柱としてテーマを解説していく、吉見と水越の対論形式。	吉見　俊哉（東京大学教授） 水越　伸（東京大学助教授）	吉見　俊哉（東京大学教授） 水越　伸（東京大学助教授）
2	活字メディアの時代	印刷術の発明にはじまり、その印刷術を用いてどのようなニュース・メディアが誕生していったかを歴史的に明らかにする。日本や西欧諸国の具体的な活字メディアを手がかりに、メディア論的な視点から、ジャーナリズムの発展をとらえ返す。	吉見　俊哉	吉見　俊哉
3	映像文化のはじまり	パノラマや写真の時代から映画の時代への展開課程や、１９世紀における視覚の革命的変化、映画が発明家たちが想定したものとは異なる方向で大衆的に発展していった過程などを、歴史的素材を手がかりに論じていく。	同　上	同　上
4	電話する社会の誕生	電話と蓄音機が、声を複製するメディアとしてどのように登場し、いかにして人々にイメージされてきたのか。またそれがどのように変化していったのかを考察する。ラジオのような電話や電話交換手の話、おしゃべり的な電話の利用など、当時の日常的なメディア現象を取り上げていく。	同　上	同　上
5	オーディエンスのいる場所	ラジオやテレビが一般の家庭空間の中に、どのようにして浸透してきたのか。その中でこれらのメディアの家電的なイメージが形成されてきたプロセスや、そのプロセスとジェンダーの関わりなどを中心に、ラジオとテレビを受けとめていった社会の変化を明らかにする。	同　上	同　上
6	日本型マスメディアの確立	マスメディアの政治経済的体制、構造について学んでいく。第二次世界大戦以降、日本のマスメディアは国民国家の枠組みと不可分に発達してきたが、ここではとくに民間放送の発達過程を素材としつつ、その特色と現代的課題を浮き彫りにしていく。	水越　伸	水越　伸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	メディア論の系譜Ⅰ	メディア論に大きく関わる、行動主義的、機能主義的なコミュニケーション論、マスコミュニケーション論の系譜を２０世紀思想史の広い文脈の中でとらえ返していく。おもに２０世紀前半からアメリカで勃興したマスコミュニケーション論と、その日本での展開課程について、当時のラジオ、テレビといったメディア状況と関わらせながら跡付け、メディア論との連続性と断層を対談形式で探っていく。	水越　伸 吉見　俊哉	水越　伸 吉見　俊哉
8	メディア論の系譜Ⅱ	マスコミュニケーション論に対抗するメディア、コミュニケーションに関する議論の流れを明らかにしていく。アドルノらの文化産業論的、政治経済学的な議論、マクルーハンらのメディア技術をめぐる議論、そして英国カルチュラル・スタディーズなどについて、対談形式で探っていく。	吉見　俊哉 水越　伸	吉見　俊哉 水越　伸
9	メディアとしてのコンピュータ	第二次世界大戦前後から登場したデジタル式コンピュータの発展と変容の過程を、おもに社会的、文化的観点からとらえなおしていく。巨大コンピュータの時代から、６０年代以降のパーソナル・コンピュータ、インターネットの展開などについて、さまざまな社会的要因のダイナミズムの中で明らかにしていく。	水越　伸	水越　伸
10	巨大メディア資本の展開	８０年代以降、欧米で顕著になってきたメディアの産業化、それに伴う巨大メディア資本の出現と現代的状況を明らかにしていく。巨大メディア資本の展開が、グローバル化、デジタル化の中で、人々のメディア意識や文化様式にどのような影響を与えるかに注目する。	同　上	同　上
11	メディアリテラシーの回復	メディアリテラシーは、人々が批判的にメディアを読み解き、能動的にメディアで表現していくための能力を意味し、９０年代以降、世界各地の学校教育や市民運動、メディアの中で注目されてきている。デジタル情報化が進む現代において、私たちがいかにしてメディアとの関係を取り結んでいけばよいか、メディアリテラシーの観点から考察していく。	同　上	同　上
12	新しいメディア表現者の台頭	９０年代以降、新しいメディアの勃興とともに、従来のマスメディア事業体とは異なる領域から、人々がさかんにメディア表現活動を始めている。このことを、メディアリテラシーの獲得、社会文化の変容などと関わらせて明らかにしつつ、具体的な事例を通じて、その可能性と課題を論じていく。	同　上	同　上
13	ネットワーク化するメディア社会	メディアの環境化、ネットワーク化が進む社会の中で、市民と国家、地域の関係性が大きく変わりつつある。ここではメディア・ネットワークに媒介された具体的な市民活動を取り上げつつ、私たちの社会における個人、共同体、メディア、コミュニケーションなどのあり方の変化について、探っていく。	吉見　俊哉	吉見　俊哉

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	グローバル情報化と文化複合	１９８０年代以降のグローバル情報化のプロセスを、メディア論の視点から考察していく。ここではとくに、香港の映画、ポップスなどエンターテイメント産業の発達と、アジアのメディア文化の変化に注目し、関係者などへのインタビューを素材として対談形式で授業を進める。	吉見　俊哉 水越　伸	吉見　俊哉 水越　伸
15	メディアの過去・現在・未来	まとめの回。メディア論に対する歴史社会的、現代的、そして思想的なアプローチのあらましを復習する。またインターネットやグローバリズムなど現代的な課題について検討を加える。２１世紀初頭を生きる私たちにとって、メディア論とはなにか、メディアといかに関わっていけばよいかなどについて、対談形式で探っていく。	水越　伸 吉見　俊哉	水越　伸 吉見　俊哉

＝ 逸脱の社会学（’９８）＝（R）

〔主任講師：清永 賢二（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：岩永 雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

どのような社会あるいは集団も必ず何らかの規範体系を持っている。そうした規範体系が成員に要求する行為や状態から一定限度以上外れた行為または状態を逸脱とよぶ。逸脱の範疇に含まれる行為、状態は、日常的な問題行動から犯罪まできわめて多様であるが、本講義ではそうした逸脱をただ単に形態的に整理して解説するだけでなく、規範との関係を常に考慮しながら、逸脱の持つ社会的意味を考察していく。特に、逸脱を「あるべからざる異常なもの」と見る立場の対極に立ち、通常の社会事象と同様に発生の要因とメカニズムあるいは社会的影響などを考察する。また、近年の逸脱の実態と傾向を把握し、その現代社会における意味についても検討を加える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	規範と逸脱	逸脱を定義し、逸脱論の基本的視座を提示する。特に社会や集団の支配的な文化・規範との関連で、逸脱の位置づけを試みる。さまざまな逸脱の形態を分類し、類型化を試みる。さらにこれまでの逸脱研究の系譜も概観する。	岩永 雅也（放送大学教授）	岩永 雅也（放送大学教授）
2	社会的変動と逸脱	デュルケムのアノミー、ショウ、マッケイらの社会解体などの概念を手がかりに、規範によって秩序と均衡が保たれている社会の中に逸脱が生じる要因とメカニズムを、個人と社会とのつながりという側面から検討する。	同上	同上
3	社会的緊張と逸脱	均衡状態にある社会の規範が弛緩した状況下で生じる、いわば‘非日常的な’逸脱に対し、‘日常的な’逸脱はむしろ社会的規範と個人的願望の間の緊張が高まった状況のもとで生じる。社会的緊張の強弱と逸脱との関連を探る。	清永 賢二（日本女子大学教授）	清永 賢二（日本女子大学教授）
4	逸脱文化の学習	現実の社会はグランド・セオリーが前提とするような単一文化社会ではなく、中心的な規範とは異なる多くの下位文化が存在する。逸脱的下位文化もその一つである。ここでは逸脱的文化の学習が逸脱を生むメカニズムを考察する。	岩永 雅也	岩永 雅也
5	ラベリング	逸脱する主体の側から逸脱を考察する逸脱論に対し、そうした行為を逸脱と規定して逸脱者を作り出す社会の側が持つ機能に焦点をあてたのがラベリング論である。社会が必然的に逸脱を作り出す、という観点から逸脱を俯瞰する。	同上	同上
6	逸脱研究の現状	1970年代以降、ラベリング論は理論的にも実践的にも閉塞状況に陥った。ここでは、現在の逸脱論の二つの潮流である、実践的立場からのラベリングと実証主義との融和、およびラベリングをさらに先鋭化した構築主義的アプローチの二者を中心に、ラベリング以降の逸脱論を検討する。	同上	同上
7	家族内規範と逸脱	家族は社会の中で最も基本的な規範単位である。近年における家族およびそれを取り巻く環境の変化が、家族内の規範構造にいかなる変化をもたらし、どのような逸脱を生んでいるのか、家族の社会化力に焦点を当てて分析する。	木村 涼子（大阪女子大学助教授）	木村 涼子（大阪女子大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	性と逸脱	「性」は逸脱の多くの部分に何らかの形で関わりを持っている。性に関わる逸脱には、レイプのような重大犯罪から日常的なセクハラまで著しい多様性があるが、その現状と根底に通流する社会的な意味について検討する。	木村　涼子	木村　涼子
9	学校と逸脱	学校は単に知識や技能を提供する場ではなく、日常生活を通じて社会の新たな構成員としての子どもに、何が正当で何が逸脱かを刷り込んでいく巨大な規範装置である。いじめなども含め、今学校で生じている逸脱を考察する。	清永　賢二	清永　賢二
10	都市空間と若者	都市は若者を引き付ける。都市の限られた空間には、その場限りのアノミーな雰囲気・気分が充満している。日常社会では逸脱とされる行為もそこでは普通に行われる。彼らの都市空間での行動を通じ青少年の逸脱の本質を探る。	同　上	同　上
11	逃避的行動	逸脱的行為は多かれ少なかれ他の社会構成員を害するものであるが、逃避的行動は自損的である点で逸脱の中でも特異である。自殺、家出、ホームレス、薬物依存など、さまざまな逃避的行動の意味と現状を分析する。	岩永　雅也	岩永　雅也
12	ホワイトカラーの逸脱	サザランドは、本来支配的規範の枠内にあるために最も逸脱から遠い存在と考えられていたホワイトカラー層にも、独自の様式と背景を持った犯罪や逸脱的行動があることを明らかにした。わが国でも近年増加しつつあるホワイトカラーの逸脱について検討する。	西村　春夫（国士舘大学教授）	西村　春夫（国士舘大学教授）
13	集団的逸脱と組織－やくざ、テキ屋、暴力団と逸脱－	ある種の犯罪の多くは、やくざやテキヤなどの逸脱集団との何らかの関わりによって生じるといわれる。さまざまな形態を持つ逸脱集団の構成と成立の背景、社会的機能などについて考察する。	同　上	同　上
14	逸脱の動向	犯罪、非行といった逸脱の量的な変化は、決して一様ではない。犯罪や非行の量的な動向を歴史的に検討し、さらにその傾向を国際的に比較することによって、わが国の逸脱の性格と特徴を時系列的に把握する。	清永　賢二	清永　賢二
15	逸脱をどう見るか	社会に規範が存在する限り、逸脱は不可避である。われわれの生きる近代社会が、一方で逸脱を逸脱として定義付けながら形成しつつ、他方ではそれを減少させようと統制に努めるのはなぜか。前半の理論編、後半の実証編の両者をふまえ、逸脱現象の見方、考え方を展望する。	同　上	同　上

＝ ジェンダーの社会学（’９９）＝（R）

〔主任講師：江原　由美子（東京都立大学教授）〕
〔主任講師：山田　昌弘（東京学芸大学助教授）〕

全体のねらい

この講義は、ジェンダーの視点から現代社会をとらえ直し、よりよい社会生活・社会関係のあり方についての考察を深めることをねらいとする。前半においては、性別という現象への分析力を高めることを主眼とした講義を行い、その後、家庭・職場・福祉・政治などの社会生活諸領域の考察を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ジェンダーとは	ジェンダーという言葉について説明を行い、ジェンダーという言葉が現在どのような意味で使用されているか、またその背景にはどのような問題があるのかを概説する。	江原由美子（東京都立大学教授）	江原由美子（東京都立大学教授）
2	女らしさと性役割	「女らしさ」というものが、どのように性役割（家事・育児役割）と関連しているかについて考察する。女性の性役割についてのこれまでの研究を概観し、性役割を役割取得していく過程における「女らしさ」という美意識・価値観との関わりを追う。	江原由美子	江原由美子 山田　昌弘（東京学芸大学助教授）
3	男らしさと性役割	女らしさが問題になると、その対極にある「男らしさ」にも注目が集まる。最近は、男性学を銘打つ研究も現れ、「男らしさ」研究が盛んになりつつある。従来の男らしさはどのように捉えられたかを考察し、「男性解放」について考える。	山田　昌弘	同　上
4	トランス・ジェンダー、トランス・セクシュアル	同性愛・性転換など、「セクシュアリティー」の領域で、従来の男性・女性の枠組みを越える現象が話題になっている。これらの人々の意識や運動などを考察することを通じて、根本的なレベルでのジェンダーを理論化する。	同　上	同　上
5	恋愛・結婚	多くの人は、恋愛・結婚において、自分の性別を身近に感じ始める。人を好きになり、一緒になるという時にもジェンダーが関係していくる。恋愛対象、恋愛関係、配偶者選択にかかわるジェンダー現象を探究する。	同　上	同　上
6	リプロダクション－子産み・子育て	出産期は、夫婦関係・男女関係におけるもっとも大きな危機の一つである。出産をめぐる男女の意識のズレ、子育てをめぐる夫婦の葛藤をジェンダーとの関連で考察する。生殖医療の問題にも言及する。	江原由美子	同　上
7	家事とジェンダー	家事は従来女性の担当とされてきた。家事に込められる意味、特に「家事は愛情表現である」という意識が、女性への家事の押しつけに繋がっている。家事は、歴史的にどのように成立し、女性に割り当てられて行ったかを明らかにする。	山田　昌弘	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	職場とジェンダー	職場もジェンダーと無縁な場ではない。性別による職業や職位・職務の相違が、どのようにジェンダーと関連しているのかを明らかにする。女性職と性役割の関連性、近代官僚制と「男らしさ」との関わりなど。	江原由美子	江原由美子 山田　昌弘
9	セレモニーとジェンダー	固定的なジェンダー関係は、伝統的な慣習の中に埋め込まれている。しかし最近では、伝統にとらわれないセレモニーも模索されている。結婚式とお葬式、お墓の問題などをとりあげ、その中にみられる新しいジェンダー関係の模索を考察する。	江原由美子 山田　昌弘	同　上
10	セクシュアリティーと家族	男女の性意識、性行動は、大きく異なるといわれている。通常、男性の性欲は自然で攻撃的であり、女性の性欲は受動的といわれている。セクシュアリティーのジェンダー差の意味と、男女関係に与える影響について論じる。	山田　昌弘	同　上
11	女性に対する暴力	最近、レイプなどの性暴力や、ドメスティクバイオレンス（夫から妻への暴力）が、社会問題化している。これらの問題を追うなかで、「男性の攻撃性」「女性の受動性」など従来のジェンダー観をとらえ直すことを試みる。	江原由美子	同　上
12	性の商品化	買売春問題は、非常に多岐にいわれたる社会的要因と非常に深い心理的問題とを伴っている。買売春問題を一つの手がかりとして、現代社会において様々な形をとる「性の商品化」現象を、ジェンダーとの関連性において考察する。	同　上	同　上
13	介護とジェンダー	ケア（介護・看護など）の担い手の大多数は、家族の中でも外でも女性である。ケアの場面で女性が期待される理由を、「さわること」のジェンダー的意味の考察を通じて明らかにする。高齢化が進む中で、介護における男女平等とは何かを考える。	山田　昌弘	同　上
14	セラピーとジェンダー	最近、心の悩みやセラピー（心理療法）に対して関心が集まっている。その中で、従来のセラピーのやり方が、男性中心に偏っているという批判も出てきた。そこで、フェミュスト・セラピーを紹介しながら、臨床場面におけるジェンダー問題を考察する。	同　上	同　上
15	ジェンダー政策と未来	従来女性政策と呼ばれてきた領域で、男性を対象とする政策の必要性が主張されてきている。ジェンダー政策のこうした新たな動きは、ジェンダー秩序を変えることができるのか。望ましい本来とは何かを展望する。	江原由美子	同　上

＝ 都市空間の比較社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

都市社会学という学問がどのような都市的現実、都市の実際の問題状況から生まれ出たのか、空間構造に焦点をあて都市社会学の展開を見る。1～7は、理論とその理論を生んだ都市－パリ、シカゴ、ボストン、メリダ（メキシコ）という展開の舞台で、シカゴ学派都市社会学とそれに対する批判・反批判の流れを検討する。8～10は、ヨーロッパ、東アジア、東南アジアの都市の特色を、それぞれのキーワード（広場、風水、バザー）に即して示す。11以下は日本の都市、特に東京を中心として、その社会・空間構造と変動を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	14番目のパリ	G. Simmelの見たパリ、14番目屋の話を導入として、都市社会の意味を考える。 これを受けて都市の概念規定を吟味する。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
2	20世紀初頭のシカゴ	都市社会学を生んだ20世紀初頭のシカゴがどのような都市であったか。 アメリカの歴史、農村社会から工業社会への変動と、その中でシカゴが果たした役割。 またこの状況が都市問題の噴出をもたらしたこと。	松本　康（名古屋大学教授）	同　上
3	大都市の同心円構造	ループと呼ばれる都心地区、周辺のスラム街などシカゴを彩る空間の紹介。 バージェスの同心円理論。貧乏な人はなぜ地価の一番高いところに住むか、の問いかけを手がかりに同心円構造の形成を観察する。	同　上	同　上
4	ベースマップと人間生態学	シカゴ学派都市社会学の形成の歴史。 都市問題の研究の方法としての社会問題基礎地図はどのような環境で生まれたか。 指導者パークと人間生態学方法。	同　上	同　上
5	ボストンの社会文化生態学	歴史の散歩道を手がかりに、ボストンという都市の歴史上の位置を理解する。 ファイアレイの研究したボストン都市の3つの事例地区を見る。 歴史的都市の類型と、同心円構造を歪曲する社会的要因の相互関係。 イーストエンドから、ストリートコーナーソサイアティ研究ーギャング社会関係。	倉沢　進	同　上
6	アーバニズムと都鄙連続体	シカゴ学派都市社会学の大成物ワースのアーバニズム理論の紹介。 その成立とかかわったレッドフィールドのユカタン半島4つの地域社会の研究。 民族社会と都市社会の連続体概念。	同　上	同　上
7	前産業型都市とメキシコ都市の変容	アーバニズム図式に対する批判。その一つのショウバーグの前産業型都市都市の類型。 貧乏な人はなぜ郊外に住むか。シカゴモデルと異なる空間構造の説明要因。 前産業型都市と植民都市。変容を説明する理論－アーバニズム。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	広場とヨーロッパ都市	広場を中心に持つヨーロッパの中世都市。その空間構造と社会構造。 M. Weberの市民都市論を映像と共に吟味する。 あらためて中世市民都市と、近代大都市。	倉沢　進	倉沢　進
9	風水の東アジアの都市	中国の風水思想と都市 朝鮮におけるその変容 ソウルの空間構造	吉田　光男（東京大学教授）	同　上
10	市場と東南アジアの都市	途上国社会と首位都市 バンコクの都市形成 市場 新中間階層とスラム居住層	松薗　祐子（いわき明星大学助教授）	同　上
11	日本都市の類型	宮処と市をキーワードとする古代都市。 城下町、宿場町など近世の都市類型と、明治以降の都市発展の連続性と断絶性。 倉沢の発展類型－伝統消費型都市の類型。鈴木の産業都市。	倉沢　進	同　上
12	都心と郊外	日本都市社会学の第一世代 都会人の社会的性格	同　上	同　上
13	山の手と下町東京の社会地図	セクター型の具体的実態としての山の手と下町の分化。 ドーアの下山町。 社会地区分析の方法、因子生態学の発展、ロンドン社会地図、東京社会地図の方法。 東京の社会地図・ソウルの社会地図	同　上	同　上
14	アーバニズム現論の展開	都市的生活様式 下位文化理論	同　上	同　上
15	世界都市化東京	グローバリゼーションの概念。グローバリゼーションと世界都市の形成。 青いバナナとベソト。世界都市形成の社会的結果。 空間構造へのその反映。	同　上	同　上

＝ 環境社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鳥越　皓之（筑波大学教授）〕

全体のねらい

三つのねらいがある。ひとつは具体的な事例を通じて環境を社会学的に分析する方法論の理解。二点目は、環境社会学的切り口で、環境や環境問題がどのようにみえてくるかを明らかにすること。三つ目は、環境について身近に感じるとともに、自分も考えみよう、あるいは環境をよくする活動に参加をしてみようと思ってもらえること。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境社会学とは	環境社会学的な考え方がどのようなものであるかを理解してもらうことをねらいとする。方法論的な討議は抽象的になりやすいので、ゴミを例として自分との距離（部屋のなかにゴミを散らかすと気になるが、遠い島の産業廃棄物には関心が薄い）の問題を通じて、私的なこと社会的なことを考える。また、国の文化の違いが環境政策にも影響することを述べる。	鳥越　皓之（筑波大学教授）	鳥越　皓之（筑波大学教授）
2	環境問題とエコシステム	生態学の成立がエコロジカルな運動を起こすきっかけになり、アメリカに国立公園をつくらせるなど、自然環境保護運動がたかまった事実を述べる。ただ、生態学のエコシステムの考え方と人間を要素とする社会システムの考え方とを合体させた有効なシステム論が現状では存在しない。それが環境政策にも反映して、具体的な施策としては両者を空間的に分けて、そん間を線引きをして生態域（自然域）、人間域（社会域）とに区分する方法がしばしばとられる。白神山地の森林とイリオモテヤマネコ（西表島）を例に人と自然との関係について考える。	同　上	同　上
3	森・川・海ーコモンズ	村の空間をイメージするとよい。人びとの家や耕地の外側に広がる森や川や海は独特の使われ方をされてきた。それをコモンズ（入会）とよぶ。そこは人びとの共同利用地となっていた。この全くの自然ではなく、また田や畑のように人間の手によって強く改変された自然でもない、ちょうど中間に位置するのがコモンズである。イギリスなどヨーロッパの荒蕪地に春になると薄紫の花をつけるヒースの野原などがコモンズの典型である。	同　上	同　上
4	農業と自然	人びとは農地をとりあえず自然の一部とみなしているが、自然を遠慮なく人間の思い通りに変形させてしまったのが農業である。とはいえ、人間にとって農業は不可欠である。この農業の問題点は近代化の名の下に、化学化（農薬、化学肥料）と過度な機械化が行われたことである。結果的に農民の窮乏化、また消費者の健康の問題などを引き起こしている。農民からつくる楽しみを奪ったことも問題であろう。この近代化の批判から起こった有機農業について現場からの声をきく。	同　上	同　上
5	生活環境に焦点をあてる	「生活環境主義」というモデルをつかって環境問題の理解を試みる。それはエコロジー論（自然環境主義）とも近代技術が最終的には環境問題の解決に寄与するとみなす近代技術主義とも異なって、人びとの生活のシステムを軸において分析する方法がある。具体的には森林保全の問題を生活環境主義から解釈のしなおしをする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	住民は環境を自分で決められるのか	環境保全を考えるとき「住民の主体性」がたいへん大きな役割をはたす。この住民の主体性を軸にして、住民の課題を問題とする。住民はいつも相互に連帯するわけではない。相互に意見を異にして対立することもある。また、住民は生活を積み重ねることによって「生活権」とでもよべるものをもつことにもなる。住民の環境創造的な試みもとりあげる。	鳥越　皓之	鳥越　皓之
7	社会的ジレンマとしての環境問題	汚水を流すことや、タバコのポイ捨てのように、自分一人ぐらいが注意を怠っても別にどうということはないにもかかわらず、そう思って全員が行うととんでもないことになる現象を社会的ジレンマとよぶ。社会的ジレンマ論を使いながら、多様な環境問題のあり方を考える。	同　上	同　上
8	ゴミとリサイクル	ゴミとはそもそも何を意味するのか、「もったいない」という価値観はないのだろうか、というような点から考えはじめ、リサイクルの活動の分析をし、新しいライフスタイルの模索をする。	同　上	同　上
9	開発計画と加害者・被害者	加害者および被害者がもっている多様な側面を開発計画とかかわらせながら分析をする。日本の伝統的な公害をあつかう預定であるが、視野を東南アジアにも広げることによって、それが現代のグローバルな課題であることを示したい。	同　上	同　上
10	公共事業と地元の利害	原発などが典型であるが、公共事業はたんに公共のためによくなるというのではなくて、たいへんつよく地元の利と害がからんでいる。オリンピックがおこなわれた長野を事例として出そう。また、エネルギー論にまで言及できればと思っている。	同　上	同　上
11	歴史的環境保全の運動	明治期に建てられた西洋建築を守る運動、また歴史的に由緒のある橋を保全する運動、さらには町並みの全体を保全する運動など歴史的環境保護運動の対象は広い。これがいわゆる文化財保護とどのように異なるかを検討しつつ、その結果や可能性を考える。具体的には沖縄の竹富島を対象としてとりあげたい。	同　上	同　上
12	景観の形成	歴史的環境保護の延長上にくらしの景観をとりあげたい。奈良の明日香に視点をすえながら地域の活性化にとりくんでいる姿を紹介する。	同　上	同　上
13	環境ボランティアとＮＰＯ	阪神淡路大震災後、ボランティアとＮＰＯが注目されるようになった。かれらがどのような活躍をし、それが現代社会でどのような意味をもつのかを考える。オルタナティブ社会という新しい社会論の可能性を検討する。行政との関係にも言及する必要があろう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	内発的発展論とコミュニティ・ビジネス	内発的発展とは地域内部からの力で発展を行うことである。外部資本の導入がしばしばその地域の未来の発展をそこなうという考えから、地元（とくに若者）が集まって地域の発展を考え「地元のための」ビジネスを模索する。その可能性を問いかける。	鳥越　皓之	鳥越　皓之
15	政策と実践	全体のまとめを行う。地元の小さなコミュニティをキチンともっていることが環境保全にとって大切なことを事例を通じて説明をする。人間がコミュニティ（共同性）をもつ意味、将来の可能性についても言及する。	同　上	同　上

＝ 都市社会の人間関係（’００）＝（R）

〔主任講師：森岡　清志（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、都市社会が人間関係にどのような影響を与えているかという点を中心に、都市社会学、家族社会学、階層研究にまたがる諸知識を提供し、パーソナルネットワークに関する理解を深めることにある。社会を理解する上で、身近な人と人とのつながりを理解することが重要なことを伝えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市社会の特質と人間関係	都市という集落の特質、そこから生ずる共同生活の営み方（都市的生活様式）がどのような人間関係をつくりだすか、この点に関するこれまでの学説を整理しつつ紹介し、人間関係に注目することがどのような意味をもつかについても講義する。	森岡　清志（東京都立大学教授）	森岡　清志（東京都立大学教授）
2	社会的ネットワークとパーソナルネットワーク	人間関係に注目する先行研究の中から社会的ネットワークという概念が誕生し、さらにその中から人と人とのつながりに着目するパーソナルネットワーク研究が盛んになってきた過程と、これらの研究における基本的な説明論理について講義する。	同　上	同　上
3	アーバニズムと社会的ネットワークの理論	都市は人間関係をどのように変えるのか。ワースのアーバニズム理論とフィッシャーの下位文化理論を対比させて、都市に住むことが社会的ネットワークをどのように変えるのかについて考える。 アーバニズム理論、ネットワーク構築における構造的制約と生態学的（地理的）制約	松本　康（東京都立大学教授）	松本　康（東京都立大学教授）
4	北カリフォルニアのパーソナルネットワーク	大都市の社会生活が、郊外や小さな町の社会生活とどのように異なるのか。フィッシャーの北カリフォルニアでの調査結果を参考に、アメリカ合衆国における親族・近隣・仕事仲間・友人関係などについて検討する。 ネットワークに関する下位文化理論の仮説と北カリフォルニア調査の知見	同　上	同　上
5	現代日本の都市居住とパーソナルネットワーク	現代日本の大都市圏では、どこにどのような人が住んでいるのか。そこでの社会生活の特徴はどのようなものか。またその要因は何か。日本都市におけるパーソナル・ネットワーク研究の成果を踏まえて考える。 都市の社会空間構造、都心居住と郊外居住、性別・年齢・職業・移動歴とパーソナル・ネットワーク	同　上	同　上
6	都市化と親族関係	パーソナルネットワークの中で近親者の親族ネットワークは都市化が進展しても依然として重要である。日本の親族関係の特質と、都市化に伴う変容について講義し、パーソナルネットワークと社会とのつながり、個人の生活とのつながりを理解させる。	森岡　清志	森岡　清志
7	現代の都市家族	現代都市家族の特徴について、ワースのアーバニズム論やパーソンズの孤立核家族論を紹介し、それに対するサスマンやリトワック（修正拡大家族論）などの反論を検討する。日本の都市家族研究にも触れる。	野沢　慎司（明治学院大学教授）	野沢　慎司（明治学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市家族とネットワーク	家族内部の人間関係は家族外の関係のネットワークの構造と関連しているとみるボットと後続の研究を取り上げ、その意義と問題点を論じる。コミュニティ解放論に依拠する新しい見解と比較する。	野沢　慎司	野沢　慎司
9	連帯的なネットワークと家族	家族に対するネットワークの構造的影響について、調査事例を取り上げ、親族、職場、地域社会などにおけるネットワークが連帯性を帯び、現代日本の夫婦関係に影響を及ぼす傾向を論じる。	同　上	同　上
10	解放化するネットワークと家族	ネットワークが空間的、構造的に解放化すると、家族が意識的にネットワークを維持・管理・動員する主体となる傾向を増す。それが家族のライフスタイル化や個人化とも関連することを論じる。	同　上	同　上
11	階層とネットワーク	職業、収入、教育程度などを規準とする社会階層の違いによって、個人の持つパーソナルネットワークの特性には様々な違いがみられる。それらを説明する個人属性的要因および社会構造的要因に言及する。	中尾　啓子（東京都立大学助教授）	中尾　啓子（東京都立大学助教授）
12	地位達成とネットワーク	個人が社会的地位を達成する過程で、パーソナルネットワークはいろいろな機能を果たしている。ここでは主に、職業的地位達成において知人や友人が与える影響を、理論的に考察し、実証研究を紹介しながら探求する。	同　上	同　上
13	小集団のネットワーク	人々が属する職場や友達同士の小集団の人間関係は、様々な構造的パターンがみられ、それらが集団や成員の特性を表している。小集団における関係のパターンを追究する方法、ソシオメトリーを紹介し、それを用いた実証研究を例にとって人間関係の構造に言及する。	同　上	同　上
14	高齢者のパーソナルネットワーク	高齢者の生きがいを支えているものは何か。生きがいの一つとして主観的幸福感をとりあげ、これを規定する要因の一つに友人関係があることを述べ、高齢者の生きがいと友人関係の関連について考察する。また友人関係の特質についても講ずる。	森岡　清志	森岡　清志
15	パーソナルネットワーク研究の課題	パーソナルネットワーク研究の成果を整理するとともに、今後の研究課題について説明する。親しい人びとに限定されたネットワーク研究の問題点や、ライフコースとネットワークの変化の関連を追求する必要などについて講ずる。	同　上	同　上

＝ 経営工学総論（’００）＝（R）

〔主任講師：辻　正重（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営工学は企業を代表とする「目的をもった組織」の経営問題を対象として、意思決定やシステム設計などを合理的に行うための汎用的な問題解決技術学である。本講はそのような立場で講義する。また入門書としてなるべくやさしく、そして総論としてなるべく広く経営工学を概観する。さらに日常生活における問題解決にも役立つよう講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営工学入門　1	経営工学とは、いかなる学問なのかを理解してもらうために、どのような問題をどのようにして解決していくのかを、簡単な問題とその解決事例を通して解説する。問題事例は、第3章以降で展開される基礎になる。	辻　正重（青山学院大学教授）	辻　正重（青山学院大学教授）
2	経営工学入門　2	1章を踏まえて、経営工学的な問題解決法で重要な 1）モデル、2）解決のいろいろなアプローチについて解説する。そしてモデル、アプローチを含めて問題解決の一般的な手順について解説する。	同　上	同　上
3	経営工学の発展	テーラー・システム、フォード・システムを出発点としたアメリカでの経営工学の展開、ＴＱＣ、ジャストインタイム、ＴＰＭ、小集団活動を中心とした日本での経営工学の展開を述べる。	熊谷　智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷　智徳（名古屋工業大学名誉教授）
4	経営の成り立ち	企業の特色、企業の経営について解説した後、企業の目的(利潤目的、社会目的)、企業の活動(階層的多重サイクル)、経営システム（組織構造、制度、情報システム）について概観する。	辻　正重	辻　正重
5	企業構造創造サイクル	企業ライフ・サイクルとプロダクト・ライフサイクルの関係を説明し、企業の構造を決める長期的ビジョン、企業理念、事業コンセプト、企業分析、環境分析、事業展開戦略等々の戦略策定の手順・方法を解説する。	同　上	同　上
6	マーケティングと製品開発	企業の構造的枠組みの下で、企業環境の動向、市場ニーズを把握しながら、技術開発、製品開発を行うが、そこでの課題と問題解決の考え方、解決のプロセス、解決方法を解説する。	同　上	同　上
7	工場計画と生産準備	オペレーショナルな生産活動が行われる前段階として工場計画、工程設計、生産準備、物流システム設計など枠組み作りが行われるが、そこでのそれぞれの課題と解決方法を解説する。	玉木　欽也（青山学院大学教授）	玉木　欽也（青山学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生産管理	生産管理の目的、生産計画と統制、資材材管理の目的、在庫管理、統合的生産管理システムの狙い、ＪＩＴ、ＭＲＰ、製販物統合化管理システムなど、生産管理の課題と解決方法を解説する。	玉木　欽也	玉木　欽也
9	品質管理	品質管理における顧客や品質の基本的な考え方と最近の品質管理の動向について概説する。その上で、品質管理における問題解決の方法としてＱＣストーリを説明し、ＱＣストーリでよく利用される手法を解説する。	石津　昌平（青山学院大学助教授）	石津　昌平（青山学院大学助教授）
10	価値的管理	企業の目的と財務諸表との関係を説明した後、日常業務活動と価値的管理（経営分析、利益計画、子算・原価管理）、製品開発と価値的管理（ＶＡ）、企業構造創造と価値的管理（投資法定法）を説明する。	辻　正重	辻　正重
11	信頼性工学	信頼性工学につて概説する。その中で信頼性の3大要素である（1）耐久性、（2）保全性、（3）設計信頼性について、その考え方と定量化、作り込みの方法を解説する。	鈴木　和幸（電気通信大学助教授）	鈴木　和幸（電気通信大学助教授）
12	プロジェクト管理	プロジェクト・マネジメントの目的・課題、プロジェクト・マネジメントの対象、プロジェクト組織、プランニングとＷＢＳ、ＰＥＲＴ、プロジェクト・コントロールとパフォーマンス・メジャメントなどについて解説する。	辻　正重	辻　正重
13	経営情報システム	経営情報システムの展開、ＥＤＰＳ、ＭＩＳ（経営情報システム）、ＤＳＳ（意思決定支援システム）、ＥＳ（専門家システム）、ＥＳＳ（経営トップ支援システム）、バーチャル・コーポレーションなどを解説する。	同上	同上
14	情報システム設計法	情報を上手に表現し、効率よく処理するための基礎要素であるデータ構造についてアルゴリズムとともに解説する。またこれらデータの管理方法としてのデータベータについて、その設計法を中心として述べる。	坂元　克博（青山学院大学助教授）	坂元　克博（青山学院大学助教授）
15	数理的方法	問題が数学的なモデルとして扱える場合に、確定モデルの典型的な例として線形計画モデルを取り上げ、その定式化と解法について説明する。次に不確定モデルの代表として待ち行列理論について言及する。	同上	同上

＝ 生産性科学入門（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小林　和生（帝京科学大学助教授）〕

全体のねらい

生産性の視点から我が国の国際社会における地位を理解するとともに、生産性概念を追及する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生産性科学の誕生と課題	生産性科学の誕生の由来、系譜について概説し、なぜ今生産性が重要であるか述べる。とりわけ経済学と生産性科学の違いに焦点をあて、この学問の課題を明確にする。	小林　和生（帝京科学大学助教授）	小林　和生（帝京科学大学助教授）
2	生産性科学の対象と方法－その1	生産性科学の対象である産業社会の理論的規定を与える。すなわち、人間－人関係と人間－自然系の交差構造として産業社会が構成されていること。またその構造の詳細を明確にする。	同　上	同　上
3	生産性科学の対象と方法－その2	多元的要因が複雑に関連して形成されている産業社会の分析のためのフレームワークとしてのＳ－Ｆスキームについて解説する。	同　上	同　上
4	国民の豊かさ	生産性概念の根本である国民の豊かさを規定する。そのもとで、その測定指標として国民経済福祉を定義する。	同　上	同　上
5	国民経済福祉の変化とその要因	国民経済福祉の変化の要因分析体系を示し、わが国の国民一人当たりのＧＤＰの変化とその要因を分析する。	同　上	同　上
6	国民経済生産性と部門生産性	生産部門別の生産性の変化と国民経済生産性の関連について分析する。	同　上	同　上
7	企業生産性と付加価値	付加価値概念を考察する。そのもとで国民経済の構成単位である企業の主体性と国民経済への寄与について明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	付加価値生産性と総生産性	企業水準へ生産性概念を展開するうえで、付加価値労働生産性は限界がある。より収益性に密接な概念である総生産性について解説する。	小林　和生	小林　和生
9	付加価値労働生産性格差の形成とその要因	企業間は付加価値労働生産性の格差が生じる原因を追求する。	同　上	同　上
10	総生産性と収益性	企業の収益性変化の要因分析枠組を示す。	同　上	同　上
11	資源・環境問題と生産性	資源・環境問題のあり方と、生産性向上運動への示唆について考える。	同　上	同　上
12	国民の豊かさの国際比較－その1	国民の豊かさを国際比較するための準備として、通貨の換算問題について考察し、国際比較の枠組みを示す。	同　上	同　上
13	国民の豊かさの国際比較－その2	統計資料を活用して、国民経済福祉、国民経済生産性および部門レベルの生産性の国際比較を行う。	同　上	同　上
14	プロダクティヴィティ・スキーム	生産性推進運動体系であるプロダクティヴィティ・スキームの歴史的展開と生活の質（ＱＬ）について説明する。	同　上	同　上
15	情報化社会と生産性	産業の情報化にともなう産業社会の今後のあり方と生産性について考察する。	同　上	同　上

＝ 技術の分析と創造（'０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：赤木 昭夫（放送大学教授）　〕
〔主任講師：槌屋 治紀（システム技術研究所所長）〕

全体のねらい

経験の蓄積と交流（クロスファータライゼーション）と、発想（あるものを別なものに読み替える）と、予測のための計量（アカウンティングとシミュレーション）の３つの側面から、技術の変革の過程でエンジニアリング・センスはいかに発揮されてきたか、またいかに発揮されるべきか、具体的事例によって学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	鉛筆ができるまで	黒鉛と粘土の混合物を焼成してつくる芯を木片ではさみ、それに塗装をほどこすことで鉛筆は生産される。その過程を追いかけながら、蓄積された経験と発想を浮き彫りにし、筆記具としていかに優れた性能をもっているか、そして技能と技術への着眼点は何かをつかむ。	赤木 昭夫（放送大学教授）	赤木 昭夫（放送大学教授）
2	金型の設計	身辺のどんな道具をとってみても、材料が金属でもプラスティクでも、それが大量生産品であるかぎり、型に材料をプレスすることによって作られている。その型が金型（かながた）で、大量生産を支える重要な役割をになっている。その仕組みを知る。	同上	同上
3	金型の製作	ひとつの金型で何百万個という製品をプレスするため、金型は固い特殊鋼を機械で削ってつくる。この回では放電加工機を中心に、許容誤差をミクロン単位におさめるには、機械によってどこまでが可能で、最後にどんな人の手が必要かを見る。	同上	同上
4	工作機械の精度と効率	加工対象よりも加工する機械のほうが、より精密につくられていなければならない。たとえば面を削りだすフライス盤の水平度はどれほどか。それを高めるため設計にどんな配慮がされているか。それをどうやって実際の工作機械につくりこむか。機械の限界を克服するソフトウエアの役割は？	同上	同上
5	熟練の変容と保存	４回にわたって見てきた物作りの過程をふりかえりつつ、熟練がどこまで自動機械によって置き換えられてきたか、それにともなって求められる熟練の中身がどのように変わってきたか、伝統工芸の熟練と共通な点があるのか、熟練をどう保存するかなどを考察する。	同上	同上
6	システム：時計	「物作り」の第一部につづいて、第二部では、技術を「エレメントとシステム」の観点から見る。この回では、歯車式の機械時計が発明された過程を推定するため、そのメカニズムを分析し、時計というシステムを構成するエレメントの源をたどることを試みる。	同上	同上
7	システム：コンピュータ	技術の進歩を分析すると，革命的な原理の発明と原理を活かすための部分的改良、この二つの過程のからみあいであることがわかる。意外かもしれないが、最初に実用化された電子計算機ＥＮＩＡＣは、１７世紀のパスカルの計算機や２０世紀前半の微分解析機に共通の原理を活かし、改良したものだった。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	飛行翼の発明	飛行機の翼は、鳥の翼にヒントを得て発明されたのか。それとも凧（たこ）を発展させる形で発明されたのか。実用的な翼の発明となると、後者のほうを重視しなければならない。翼が空中に浮かぶ原理をもとに、ライト兄弟の凧の実験の意義を知る。	赤木　昭夫	赤木　昭夫
9	ライト兄弟の成功	凧による実験のあと、無人そして有人のグライダーによる実験をかさねたライト兄弟は、翼によって生ずる揚力と抗力の測定データに誤りがあることに気づき、正しいデータを得るため風洞実験に取り組んだ。その測定方法は、実に目覚ましいものであった。それによって彼らは大きく前進することができた。	同　上	同　上
10	飛行性能と制御	主翼と尾翼とガソリンエンジンを組み合わせて初めて彼らが有人動力飛行に成功した。その理由は、エレメントの機能を分析した上で、それらを組み合わせたときシステム全体としてどのように働くのかを徹底的に実験し、飛行機を安定させる制御方法を発明したからである。	同　上	同　上
11	電子出版：情報化と環境	この回から始まる第三部では、「エネルギーと環境を念頭においた技術の未来像」を探る。手始めとして、郵便とファックス、紙による印刷と電子出版、これらのエネルギー消費を比較して、環境への影響に配慮した情報化のあり方を検討する。	槌屋　治紀（システム技術研究所所長）	槌屋　治紀（システム技術研究所所長）
12	太陽電池の可能性	学習の過程は、最初伸びがゆるやかだが、やがて急速な進歩を示し、一般に累積生産量とコストの関係で表される。それを太陽電池の技術予測に応用し、研究開発と大量生産により、いつごろどれくらいコストが安くなるかを推定し、エネルギー政策の立案に役立てることができる。	同　上	同　上
13	車のライフサイクル	生産,使用、廃棄まで車の一生（ライフサイクル）に必要なエネルギーの総量を計算して、ガソリン車、電気自動車、ハイブリッド車、燃料電池車のなかで、未来の車にふさわしい形式はどれか、また車体の軽量化はどこまで可能かなどを分析する。	同　上	同　上
14	世界の資源収支表	人類はどれほどの資源とエネルギーを消費し、どれほどの廃棄物を出しているか、それが人口の増加と生活水準の向上によってどのような規模になるか。それを収支表にまとめて、将来の資源と環境について、シミュレーションを試みる。	同　上	同　上
15	エンジニアリング・センス	シリーズのまとめ。技術にとって個々の発明と改良も重要であるが、それを活かす上で、ますます重要になってくるのがテクノロジー・アセスメント（技術評価）である。技術がもたらす影響をどう評価するのかのプロセスを紹介し、これからのエンジニアリングに必要なセンスと市民の役割は何かを検討する。	赤木　昭夫 槌屋　治紀	赤木　昭夫 槌屋　治紀

＝イノベーション経営（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：亀岡秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）〕
〔主任講師：古川公成（中村学園大学教授）〕

全体のねらい

如何にしてイノベーションを促進し、新産業・新技術を創出するかが現代日本にとって最大の課題である。この課題の解決には、創造的な目標を構想し、イノベーションを起動させ、これを積極的に推進する技術マネジメントが不可欠である。本講座の目標は、技術イノベーションを促進するプロデューサーの養成にある。画期的な技術を開発し、これを事業化し、世界経済の発展に寄与する新産業の創出につなげるという、重要な役割を担うプロデューサーに求められる基本的な知識や考え方を指摘し、イノベーションの推進にチャレンジする意欲の抑揚をはかることに本講座の狙いがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イノベーション経営 －序論	技術立国日本の産業にとって、技術的なイノベーションを推進する人材の育成が急務である。この章では、技術的なイノベーションが小さく芽生え、大きな産業に発展するまでのプロセスを概観し、イノベーションを推進する人材が果たす重要な役割を示そうとする本科目の構成を鳥瞰する。	亀岡秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）	亀岡秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）
2	イノベーションと科学技術	産業革命以降、今日に至るまで、世界経済の発展は産業技術の進歩に依存するところが多かった。新しい技術が新たな産業の創出につながった歴史上の具体例を分析しながら、イノベーション推進の条件を考察する。さらにイノベーションを推進するプロデューサーのタイプを分類する。	原陽一郎（長岡短期大学教授・東レ経営研究所顧問）	原陽一郎（長岡短期大学教授・東レ経営研究所顧問）
3	イノベーションのプロセス	新技術が産業に発達するまでのイノベーション・プロセスについて理論的な整理を行い、自動織機、クオーツ時計、日本語ワープロ、さらにはロボットのように産業の構造変化を招いた幾つかのイノベーションを採り上げてテクノプロデューサーが果たした役割を分析する。	同上	同上
4	イノベーターの創出	新事業の創出が経済発展に寄与する重要な要因として改めて認知される今、企業家の創出を支援する社会経済のシステムを考察する。ベンチャー企業をめぐる環境の日米比較、起業モデルの新旧比較、さらには、企業家育成に関して大学に求められる役割を考察する。	小林喜一郎（慶應義塾大学講師）	小林喜一郎（慶應義塾大学講師）
5	技術・市場予測と新コンセプト創造	産業の基盤技術、需要構造、企業間競争などに変化の潮流を察知し、画期的な新製品や新産業のコンセプトを提示してみせるビジョナリー・リーダーがいる。そうしたリーダーの発想と新産業創出のプロセスを理論的に整理した上で、コンセプト創造に役立つアプローチを指摘する。	亀岡秋男	亀岡秋男
6	新製品・新事業の創出	画期的な新製品には、忍耐強く、その市場をゼロから開拓する努力が必要になる。新製品が新事業を支える主力製品に成長し、多様な関連製品の発達を促し新たな産業の育成につながるまでには、既存製品との競合、代替製品との競合、さらに新規参入企業との熾烈な競争があることを示す。	古川公成（中村学園大学教授）	古川公成（中村学園大学教授）
7	経営戦略と技術戦略	２１世紀の企業は、デジタル・エコノミーへの迅速な対応、プレ・コマーシャル競争での有利な展開、そしてそれらの前提条件として社内に差別化されたナレッジを生み出す仕組みづくりが肝要になっている。東芝のDVD、NECや資生堂による先端ナレッジの取り込みがその状況を例示している。	小林喜一郎	小林喜一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	技術戦略推進のプロセス	自社が開発した画期的な産業技術を企業成長と新産業の育成に結びつける際に必要となる基本的な考え方を考察する。企業活動へのインプットとしての技術導入形態の選択と自社技術を市場に提供する形態の選択の組み合わせが重要である。戦略推進にテクノプロデューサーが果たす役割を確認する。	古川　公成	古川　公成
9	研究開発投資とリターン	企業の永続的な成長に不可欠な研究開発活動への投資の性格ゼロックスを例に考える。また研究開発投資から生じる事業成果を評価する際の考え方を整理する。投資効果の向上をはかるために有効なマネジメントの方法について３Mや花王の具体例を引用して解説する。	許斐　義信（慶應義塾大学教授）	許斐　義信（慶應義塾大学教授）
10	知識創造経営	知識創造（Knowledge　Creation）がイノベーションの源泉である。科学技術にも経営にもナレッジ・マネジメントが重要となる。野中理論を中心に、個人、組織の知の創造、特に暗黙知と形式知との転換プロセスとその場を理解し、実践に生かすための考察を進める。	山之内昭夫（大東文化大学教授）	山之内昭夫（大東文化大学教授）
11	知的財産の戦略	研究開発を通じて生み出した技術を法的に権利化する方策は技術面の競争力を誇る企業にとって経営の重要テーマである。ここでは、知的財産に関わる戦略を一連の企業活動の中でどのように位置付けるのか、ソニー、キャノン、リコーの例を引用して、その考え方を示す。	許斐　義信	許斐　義信
12	国際競争力	國際競争力の源泉は、イノベーションの力である。國際競争力の定義を明確にした上で、最近米国、欧州諸国、および日本で実施した競争力評価の結果を比較し、競争力の要因を分析する。産業競争力強化に向けた政策や企業戦略についても概略を述べる。	山之内昭夫	山之内昭夫
13	科学と技術のイノベーション	科学、技術、技術革新、そして独創力の性質を明らかにし、２１世紀の日本経済と社会の発展に必要な『デジタル企業』の条件や、大学に求められる新しい役割を提示する。企業では、イノベーション・プロデューサーの思想と行動を全社員が実践する必要性を説く。	霍見　芳浩（ニューヨーク市立大学教授）	霍見　芳浩（ニューヨーク市立大学教授）
14	ナショナルイノベーションシステム	２１世紀のグローバル時代の特徴を明らかにし、米国の再興と日本の低迷の原因が技術革新の力の差にあることを指摘する。日本の経営の実像と虚像を明らかにして、虚像にしがみ続ける悲劇の克服の具体策を示す。さらに先端技術革新に果たす大学の役割を考察する。	霍見　芳浩	霍見　芳浩
15	イノベーション経営　－総集編	テクノプロデューサーは、変化を促進するマネジャーであり、不完全な情報に基づいてアクションをとる実務家であり、技術と経営の融合をはかるゼネラル・マネジャーであり、戦略的な思考と行動をとるリーダーであることを再確認する。最後に、科目担当者に貴重な情報を提供していただいた方々をご紹介する。	古川　公成 亀岡　秋男	古川　公成 亀岡　秋男

＝ 産業と労使の関係（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：神代 和欣（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は、企業社会であり、雇用社会である。多くの人は、企業に雇用され、一定のルールに従って働かなければならない。他方、企業は市場の競争に耐え、利潤を上げなければならない。そこに労使の▪藤が生まれる。▪藤の解決には、経済の論理や労働の取引に関する法の枠組みを理解し、労使の経験に学ぶ必要がある。国際比較の視点も欠かせない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の発展と雇用社会	A．サラリーマン社会（雇用社会の主役：企業とサラリーマン。職業の自由と失業の危険） B．「使用者」とは誰か（管理職の役割） C．離職・発言・我慢（契約の自由と職業選択の自由、労働条件の最低限規制、離職と発言、我慢と忠誠）	神代 和欣（放送大学教授）	神代 和欣（放送大学教授）
2	工業社会から情報社会へ	A．産業革命とペティ法則（工業化、需要の所得弾力性、就業構造の変化） B．ホワイトカラー化（脱プロレタリア、ホワイトカラー） C．情報通信革命（第三次産業革命、ＭＥ革命、デジタル革命）	同 上	同 上
3	モノづくりのシステム	A．テイラー・システムとフォード・システム（資本と経営の分離、テイラーの科学的管理法、フォードシステム） B．ホーソン実験と人間関係論（労働者のやる気を起こさせる法） C．トヨタ生産方式（ジャスト・イン・タイム、協力企業との長期的取引関係）	同 上	同 上
4	雇用関係	A．職業選択と採用の自由（職業選択の自由、企業の採用・解雇の自由） B．雇用形態の多様化（非正規雇用の拡大、「終身雇用」解雇権濫用の法理、長期雇用の経済的合理性、有期雇用パートタイム雇用、派遣労働） C．飴と鞭（労働規律、能率刺激の方法、解雇と懲戒処分）	同 上	同 上
5	生産性の向上と成果配分	A．付加価値を生み出す（粗付加価値と純付加価値、ＧＮＰ、付加価値を増やす方法） B．技術革新（生産性向上の方法、第二次世界大戦後の主な技術革新、技術進歩の意義） C．成長成果の配分（「合理化」反対争議の頻発、生産性向上運動、成果配分の原則、労働分配率）	同 上	同 上
6	キャリア形成	A．採用と配置（新規就業者、新規学卒就職者、教育投資、採用の自由、離職者） B．教育訓練と技能形成（企業内技能養成と内部昇進、ホワイトカラーのキャリア、出向・転籍） C．査定と昇進（年功序列から能力主義へ、年功賃金の修正）	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	労働と余暇	A．週40時間労働制（標準労働日、変形労働時間制、みなし労働と裁量労働制） B．所得と余暇の選好（ミクロ経済学の労働供給理論、労働時間短縮の理論的基礎） C．労働時間短縮の推移（労働時間短縮の国際比較、残業時間、年次有給休暇）	神代　和欣	神代　和欣
8	報酬の体系	A．賃金とは何か（労働の需要、労働の供給、均衡賃金率） B．賃金制度（賃金形態、賃金体系、年功賃金の修正、定年延長と年功制度の改革、大競争時代への対応、年功賃金の修正はどこまで進んだか、賞与） C．退職金・企業年金（退職一時金、企業年金）	同　上	同　上
9	労働組合との関係	A．民主的労使関係の枠組み（市民法と団結禁止、市民法から労働法へ、産業民主主義、労働組合の法的保護、正当な争議行為、争議行為、争議行為の制限、不当労働行為） B．対立と協調（労働運動とイデオロギー、漸進的改良主義、組合分裂、労使協調、労働組合組織率の低下） C．職場の労使関係（企業別組合の特色、個別的労使紛争処理）	同　上	同　上
10	日本的雇用慣行	A．日本的雇用慣行とは何か（語源、起源、その経済的合理性） B．日本的雇用慣行修正の方向（長期雇用のメリットとデメリット、日本的雇用慣行修正の方向、修正の実態） C．賃金・処遇システムの変化（年功賃金の修正、退職金制度の見直し）	同　上	同　上
11	団体交渉の経済的効果	A．労働組合の交渉力（労働供給の制限、労働需要曲線の位置、需要の価格弾力性、労働需要の弾力性、マーシャルの4条件） B．春闘方式（ベースアップと定期昇給、春闘相場の形成生産性基準原理、賃金関数） C．人員整理・合理化その他の交渉事項（団体交渉事項、主要な労使交渉の争点の推移、21世紀の労使課題）	同　上	同　上
12	男女の雇用機会の均等	A．女性の職場進出と性差別（欧米の女性解放、男女雇用機会均等法の成立） B．女子労働者の保護と平等（戦後改革とその限界、判例の積み上げ、均等法の概要、改正男女雇用機会均等法の概要、結婚・育児による仕事の中断・引退） C．男女賃金格差（裁判による是正、わずかしか縮小しない男女賃金格差、パートの賃金）	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	高齢化社会の労使課題	A．人生80年時代の生き方・働き方（高齢化、少子化の進展、定年制と高齢者の雇用機会） B．老後の所得保障（老後の所得源泉、所得代替率、わが国の公的年金制度、社会保険方式と保険料負担、年金の水準） C．高齢者医療と介護（医療保険制度、老人医療、介護保険）	神代和欣	神代和欣
14	大競争時代の労使の在り方	A．貿易摩擦の激化と海外現地生産の拡大（変動為替相場制への移行、わが国の国際競争力の増大と輸出品目の構成変化、対米貿易摩擦の激化と日本企業の対応、海外現地生産の拡大、国際調達の増加） B．雇用機会の海外流出（海外雇用の増加と国内雇用の減少、海外直接投資の雇用効果） C．産業空洞化は避けられるか（空洞化の定義とその要因、モノづくりの人材育成、エンジニアリング・ソフトウエアの活用、マクロ経済の回復と成長）	同上	同上
15	外国人労働者問題	A．バブル時代の人手不足（最初の引き金、改正入管法、外国人労働者の就労実態） B．到来する若年労働力の不足時代（加速する若年人口の減少、価値観の変化、経済成長の見通し） C．増加する国際労働移動とその対応（規制を強化するアメリカ、苦悩する西ドイツ、ＥＵの域内移動、アジアの人口圧力）	同上	同上

＝ マーケティング論（’９９）＝（R）

〔主任講師：田村　正紀（流通科学大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングは、顧客創造を担当する企業活動である。マーケティング活動がどのように展開されるのか、また、その活動の市場における有効性はどのように決まるか。この講義の狙いは、この問題に答えるための、マーケティングの基本的な考え方と知識をできるかぎり実践的に講義することである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングという企業活動は、どのような課題を担って生まれてきたのか。その誕生の社会経済的条件を展望しながら、マーケティングにおける、企業と市場のかかわり合いを図式化する。	田村　正紀（流通科学大学教授）	田村　正紀（流通科学大学教授）
2	マーケティング発想の3つの視点	マーケティングの導入によって、市場を見る企業の視座はどのように変わるのか。それを流通機能の代替性、顧客需要の異質性、個別市場の構想、の3つの視点から明らかにする。	同　上	同　上
3	マーケティングの基本戦略	マーケティングの基本戦略は、マーケティングの基本指向であり、かつマーケティング活動の基本形式である。最終顧客指向、ブランド化、流通組織化という基本戦略を取引概念との関連で講義する。	同　上	同　上
4	マーケティング意思決定過程	マーケティング意思決定過程は、マーケティング活動の展開様式を企業内で決めていく過程である。この過程は、市場機会の分析、標的市場と市場目的の設定、マーケティング計画の策定からなる。	同　上	同　上
5	マーケティング・ミックス：製品と価格の決定	マーケティング諸活動の集まりは、マーケティング・ミックスと呼ばれる。マーケティング・ミックス決定の内、製品と価格の決定が、どのような決定問題を含んでいるかを展望する。	同　上	同　上
6	マーケティング・ミックス：経路と販売促進の決定	マーケティング・ミックスの決定は、経路と販売促進の決定も含んでいる。製品をどのような販売を通じて流通させるのかが販路決定問題である。販売促進決定は、広告、パデリシティ、流通サポート、販売部隊の決定を含む。	同　上	同　上
7	ブランド化戦略の有効性	ブランド化戦略は、市場細分化や製品差別化から構成される。市場でのブランドのポジショニング、知覚品質と価格の関連を手がかりに、市場で成功するブランド化戦略のポイントを探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流通組織化戦略の有効性	流通組織化戦略は、垂直統合、流通系列化、製販同盟などから構成させる。これらの戦略の市場での有効性が、どのような市場要因（競争、需要、製品特性など）の影響を受けるのかを検討する。	田村　正紀	田村　正紀
9	製品ライフサイクルとマーケティング戦略の有効性	すべての製品は、導入、成長、成熟、衰退という製品ライフサイクルを描く。製品ライフサイクルが以上の段階を経過するにつれて、マーケティング戦略をどのように変えていく必要があるかを明らかにする。	同　上	同　上
10	営業の役割	マーケティング計画の実施は、営業による個々の顧客との個別取引を通じて行われる。営業が個別顧客との取引において、マーケティング活動をどのように実施統合しているかという観点から、営業の役割を明らかにする。	同　上	同　上
11	営業部隊の管理	営業部隊の管理問題は、営業マン数、営業努力の製品別・地域別分配などの活動水準だけでなく、営業マンの行為を対象にした人員管理の側面がある。この側面について、結果統制と過程統制の２つの管理儀式を比較検討する。	同　上	同　上
12	機動営業	過程統制や結果統制だけでは、市場の多様化とその変化の加速化に対応できない。新しい営業様式としての機動営業が必要になる。機動営業を支える、営業の分権化、戦場構成、情報武装、顧客信頼などを検討する。	同　上	同　上
13	市場発展と戦略構想力	市場は絶えず変化している。その変化の中でも、過去からの飛躍を含んだ断絶的変化が生じることがある。この種の構造変化を含んだ市場の長期的変化が市場発展である。市場発展の中で、存続するには戦略構想力が必要になる。	同　上	同　上
14	リーダー地位の優位性の形成と消滅	企業は市場地位によって、リーダー、挑戦者、追随者、ニチャーなどに分けられる。市場発展の成長期には、リーダーの地位が、競争優位性を生み出すが、市場が成熟するにつれてそれが消滅する。そのメカニズムを探る。	同　上	同　上
15	挑戦者の戦略：競争ゲームのルール転換	市場発展の犠造変化期には、企業の盛衰が激しくなり、業界の再編が起こる。このような構造変化の過程で、次代のリーダーになる企業の戦略構想には、どのような特徴が見られるか。その戦略構想力の内容を探る。	同　上	同　上

＝ 企業の経済学（'９９）＝（R）

〔主任講師：黒澤　昌子（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

企業とは、生産要素を投入して生産活動を行い、生産物を市場で供給する経済主体である。本科目の焦点は、社会経済的法則性の中にある企業活動の展開のルールにある。企業を主体としたミクロ経済学の基礎的理論を、それらの日本への応用を含めて学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	本講義の一般的枠組みと狙い	「企業という主体の活動に寄与する経済学」という本科目の対象と方法、及び全体の流れを概説する。特に、資源の希少性やそれに由来する機会費用の概念、さらには市場を介した資源配分のシステムとそのメカニズムへの展望と共に、本講義で意図している幾つかの独自性に触れる。	黒澤　昌子（明治学院大学助教授）	黒澤　昌子（明治学院大学助教授）
2	消費者選択の理論	消費者行動の分析は、企業行動分析の大前提となる。本章では、消費者行動のメカニズムと需要の創出の基礎、及び所得変化が需要に与える影響などについて考察する。	同　上	同　上
3	需要の分析と予測	財の価格などの与件の変化が個人需要並びに市場需要に及ぼす影響を詳しく分析する。企業の意思決定において不可欠な、弾力性という概念とその測定・予測の方法について考察する。	同　上	同　上
4	生産の基礎理論	企業は、産出物と生産要素の量、及びそれらをいかに効率よく最小費用で生産するかを決定しなければならない。本章ではそのメカニズムの基礎理論を考察する。	同　上	同　上
5	費用の分析	生産の理論を経済価値の空間に移すときの第1歩が、費用の分析である。本章では長期と短期における生産量と費用の関係を分析し、最適な産出物と生産要素の量を決定するメカニズムを考察する。	同　上	同　上
6	市場メカニズム	希少な資源の配分の基盤となるのが市場における需要と供給の相互作用である。本章では価格調整のメカニズムを中心として、完全競争における生産・資源配分の効率性の概念、効率性を妨げる市場における与件の変化とそれらの基本問題などを、実際例を取り上げながら考察する。	同　上	同　上
7	不完全競争：独占と値付け	完全競争以外の市場構造のなかでも、特に独占市場について学習する。さらに、価格差別と、事業部門における移転価格などのメカニズムとその重要性についても考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	不完全競争：寡占と非価格競争	寡占市場における企業の戦略的行動のメカニズムを、簡単な例を踏まえながらゲームの理論を用いて学習する。さらに、寡占における非価格競争のなかでも、特に広告・宣伝による差別化競争と、独占的競争について学ぶ。	黒澤　昌子	黒澤　昌子
9	投資決定メカニズム	現在価値の概念を紹介し、確実性下、あるいは不確実性下における投資決定のメカニズムを学習する。	同　上	同　上
10	不完全情報	情報の非対称性がある場合に生じる逆選択やプリンシパル・エージェント（モラルハザード）問題と、その解決策などについて考察する。	同　上	同　上
11	外部性	企業活動に付随する環境破壊、公害などは外部不経済の典型的な例であり、イノベーションは外部経済をもたらす例である。これらの現象をもたらす外部性の理論的考察と共に、具体例に即した実践的課題、たとえば政府の役割についても言及する。	同　上	同　上
12	労働市場	各種の投入資源のうちで独特な性格を持つものが労働力である。伝統的なテーマである労働の需要と供給の理論、及び賃金決定のメカニズムについて考察する。	同　上	同　上
13	人的資本論	前章で学んだ理論を応用しながら、人的投資の経済学的分析の基礎を考察する。高等教育の人的資本形成の推移とその役割や、企業の労使関係における人的資本形成の問題点について、米国および日本での研究業績をもつゼムスキー教授と対談する。企業内訓練を中心とした人材育成の実態と問題点に関してここで展開される議論は、今後の我が国の在り方への展望を与える上に役立てられるに違いない。	同　上	同　上
14	収益性と生産性	これまで展開されてきた理論を企業経営の成果分析の場で実践上の問題として考察する。それの第1として、生産性と収益性の測定の問題を考える。	同　上	同　上
15	国際競争力：日・米自動車貿易	前章の講義を国際貿易関係の上に展開する。この水準になるとミクロ経済学の諸概念と、マクロ経済学、さらには経済学の境界を越えた領域との媒介的な考察にもはいることになる。	同　上	同　上

＝ 社会の中の会計（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：三代澤 経人（立命館大学教授）〕
〔主任講師：齋藤 正章（放送大学助教授）〕

全体のねらい
企業の会計を中心に、会計とはどのようなものか、その全体的な仕組みと社会的な意味連関を検討することによって、現代社会における企業会計の役割の重要性とこれにともなう問題点を明らかにすることを課題とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	会計の社会的なひろがり	会計は多様な経済主体のもとで行われる活動＝社会的な行為であること、またそこに共通に認められる課題を明らかにするとともに、企業における会計の特質と、会計学上従来、企業会計が重視される根拠を検討する。	三代澤経人（立命館大学教授）	三代澤経人（立命館大学教授） 齋藤 正章（放送大学助教授）
2	会計の職能と方法(1)	企業の会計について、その課題・機能をより具体的に明らかにするために、第3回とともに企業会計の基礎的な方法とその領域を検討する。第2回はその1として、簿記、すなわち複式簿記を取り上げ、その働きを過程的に整理する。	同上	三代澤経人
3	会計の職能と方法(2)	第2回に続き、企業会計の課題・機能をより具体的に明らかにするために、基礎的な方法である原価計算と企業予算について、経営の過程とのかかわりで紹介しつつ、その働きを過程的に整理し、財務会計と管理会計の区分に言及する。	同上	齋藤 正章
4	企業の管理と会計	会計は企業の運営＝管理の必要上行われるから、まず、これを直接的な課題とする会計領域、すなわち管理会計に関して、その基本的な仕組みを紹介しつつ機能内容を再検討し、経営管理との関係を明らかにする。	同上	三代澤経人
5	財務会計と管理会計	外部報告会計として意義づけられている財務会計実務について、粉飾決算をはじめ、会計制度上適正とされる会計の実際的なあり方とその機能内容を再検討し、財務会計と管理会計との関係を明らかにする。	同上	同上
6	会計の過程と社会的な体系	会計は財務会計と管理会計とに区分されているが、本来、両者は全体として1つのものである。そうした会計の基礎的な機能を過程的に把握するとともに、会計をとりまく社会的な諸要素とその関連を整理する。	同上	同上
7	会計の法的規範と会計原則	今日の会計は商法、税法をはじめとする法的規範とその規制のもとに展開している。会計の社会的な規範としてどのようなものがあり、企業の会計実務とどう関係し、また、どのような意味をもつのかを明らかにする。	同上	齋藤 正章

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	企業会計原則とその論理	わが国の企業会計原則について、会計規範としてのその性格、原則の内容と、とくに企業会計原則にもられた基本的な会計思考ないし会計の論理を明らかにすることとし、あわせて、「一般に認められた会計原則」の性格について考える。	三代澤経人	三代澤経人
9	財務諸表のしくみとその分析	企業会計原則にもとづく財務諸表（損益計算書、貸借対照表）の内容・構成と、その基本的な計算原理を具体的な資料をもとに説明し、また、財務諸表から何がわかるか、財務諸表の基礎的な分析方法を明らかにする。	齋藤　正章	齋藤　正章
10	公認会計士監査と証券市場	大企業は、証券取引法および商法（監査特例法）の規定によって、公認会計士による監査が義務づけられている。公認会計士とはなにか、監査法人の状況、会計士監査の意義と方法を明らかにし、問題点に言及する。	三代澤経人	三代澤経人
11	会計の国際化と会計基準	多国籍企業をはじめとして、企業活動が国境を越えて営まれることによって、会計の国際的な展開が進んでいる。そこで国際化に伴う会計問題、国際会計基準と会計基準の国際的調和化、わが国会計基準の対応等について見てゆく。	同　上	同　上
12	情報化の進展と会計の変容	情報化の進展を、とくにコンピュータ・システムの利用とこれによる情報処理能力の増大に焦点をあて、管理会計領域を中心としたコンピュータ利用の状況と、会計上どのような変化が進みつつあるのかなどの点について明らかにする。	齋藤　正章	齋藤　正章
13	現代会計の展開と国民生活	会計、とりわけ企業運営に直接かかわる管理会計の計算要素には、人々の日常生活に深くかかわるものが少なくない。商品の価格や給料・賃金、労働時間などはその好例であろう。会計のあり方がこれらにどのように作用するか検討する。	三代澤経人	三代澤経人
14	環境問題と環境会計	公害問題をはじめ、とくに1980年代後半以降深刻化した地球温暖化、オゾン層の破壊等々の地球規模の環境問題の進行にともなって展開されている、環境保護にかかわる環境会計とその動向について明らかにする。	同　上	同　上
15	会計の社会化と社会関連会計	戦後、産業公害、製品の安全性、物価問題などを契機として企業の社会的責任が厳しく問われるなかで、企業の社会的貢献度を測定し報告する社会責任会計あるいは企業社会会計とその研究の展開がみられる。企業の利益とのかかわりでその動向を考える。	齋藤　正章	三代澤経人 齋藤　正章

＝ 管理会計（’９９）＝（R）

〔主任講師：古川　浩一（岩手県立大学教授）〕
〔主任講師：佐藤　宗彌（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい
管理関係は、経営管理に必要な、様々な価値情報を提供するための方法である。本講では、そこで用いられる価値情報の性質、管理会計で利用される諸方法を概説し、それらがどのように応用されるかの概略を示す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	管理会計の意義と役割	効果的な経営管理のためには、客観的な情報が必要である。管理会計は、そのような情報を価値によって提供する。本章では、このような役割を持つ管理会計の意義について述べる。	古川　浩一（岩手県立大学教授）	古川　浩一（岩手県立大学教授）
2	会計制度による価値情報	本章では、企業などの組織体における会計制度が作り出す会計情報の特色と作成方法を説明する。営利企業においては、財産計算と損益（利益）計算を同時に行う複式簿記の理解が、企業分析や意思決定にとり非常に重要である。	佐藤　宗彌（横浜市立大学教授）	佐藤　宗彌（横浜市立大学教授）
3	経済的価値に関する情報	経営管理は経済的行為でもあるので、そのために、経済的な立場での情報を必要としている。この章では、管理会計で用いられる経済的な情報の特質を述べる。	古川　浩一	古川　浩一
4	原価計算の考え方と方法　(1)	原価計算とは、製品やサービスを作り出している企業で、どれ位のコストが発生するかを把握する計算方法である。その目的として、原価計算基準では、財務諸表作成目的、原価管理目的、予算編成目的など5つを挙げている。	佐藤　宗彌	佐藤　宗彌
5	原価計算の考え方と方法　(2)	原価計算は、目的に応じて色々な計算方法がある。本章では財務諸表作成（決算）目的に役立つ実際原価計算の手続きとその考え方を、いろいろな計算例をとりあげ説明する。	同　上	同　上
6	生産活動の革新と原価	製品を製造するにはどのような作業と、どのような生産要素があるのか。また新技術と革新的な生産方法の採用により、原価はどのように変化するかを実例をまじえて考察する。	同　上	同　上
7	原価情報とコストマネジメント	製造コストを管理するためには、生産方法や作業時間、生産要素の価格を標準化し、標準原価を設定し、実際原価との差異によりどの作業が原価管理（原価削減）の焦点かを知る必要がある。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	原価低減と原価企画	わが国の製造企業は、1970年代から激しい原価切り下げ競争を行ってきた。そのためのさまざまな活動を検討し、製造現場から製品開発段階までの原価切り下げ活動を述べる。	古川　浩一	古川　浩一
9	経営管理における収益－費用の情報	同上	同上	同上
10	セグメント別収益－費用の把握	多角化、多国籍化した企業においては各セグメントごとの決算やグループ全体の連結決算が必要になる。とくに事業部、子会社、海外合併会社の利益管理や業績評価を適切に行うことが益々重要になっている。	佐藤　宗彌	佐藤　宗彌
11	振替価格と企業間関係	我が国では、最終メーカーに対して多くの部品製造企業が部品を納入している。この章では、長期的に関係を持つ企業間、あるいは企業内の部門間で問題となる振替価格を取り上げる。	古川　浩一	古川　浩一
12	プロジェクトの経済性評価	多額の資本の支出を伴う投資プロジェクトの評価に当たって、経済性の検討が重要な課題。	同上	同上
13	海外事業の管理会計	海外での生産・販売の段階まで進んだ国際企業にとって、為替変動、インフレーション、金利格差、カントリーリスクへの対処が大切になる。このような環境変動下での海外事業の利益計画や原価管理をどうするか考察する。	佐藤　宗彌	佐藤　宗彌
14	業績評価と経営監査	企業の業績評価には企業全体の評価、各部門の評価、個々の管理者、従業員の評価、グループ全体の評価、各グループ企業の評価などがある。また監査役や外部・内部の監査人は、法律の順守、社会的責任などを考慮して、企業の評価を行う。	同上	同上
15	管理会計の現代的課題	この章では、これまでに学んできた管理会計の諸課題を要約し、それらが今日抱える問題点を探るとともに、その将来を展望する。この章の放送授業は、座談会形式で行う。	古川　浩一 佐藤　宗彌	古川　浩一 佐藤　宗彌

＝ 簿記入門（’０２）＝（R）

〔主任講師：齋藤　正章（放送大学助教授）〕

全体のねらい

簿記はおよそ500年前から存在し、「ビジネスの言語」ともいわれ、今日の企業社会においても欠かせないものとなっている。本講義では全体を商業簿記編と工業簿記編に分け、簿記に関する知識・技術の網羅的な習得を目標としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	簿記の目的と基本概念	簿記の意義や役割、またその種類について解説する。併せて、簿記の基本構造を構成する資産・負債・資本、収益・費用について説明する。また、貸借対照表（財産法）と損益計算書（損益法）の関係についても簡単に触れる。	齋藤　正章（放送大学助教授）	齋藤　正章（放送大学助教授）
2	取引の記録（仕訳と転記）	簿記における取引の定義を示し、勘定および勘定記入のルールについて述べる。さらに具体的な取引の記録方法である仕訳と転記について解説する。	同　上	同　上
3	現金・預金に関する記帳処理	今回より具体的な勘定科目の記帳処理方法に関する解説を行う。まず、貸借対照表の資産項目である現金・預金の定義およびその記帳処理について説明する。	同　上	同　上
4	商品売買に関する記帳処理	貸借対照表の資産項目である商品の記帳処理方法である分記法、三分法、総記法について各方法の短所と長所の比較を行いながら説明する。	同　上	同　上
5	債権・債務に関する記帳処理	貸借対照表の資産の部に記載される債権と同じく負債の部に記載される債務の記帳処理について解説する。具体的には商品売買に関する売掛金と買掛金、営業外取引に関する未収金と未払金等についてである。	同　上	同　上
6	手形に関する記帳処理	まず、手形について説明し、貸借対照表の資産の部に記載される受取手形と負債の部に記載される支払手形の記帳処理について解説する。その他、営業外手形や金融手形、手形の決済や不渡時の処理等についても言及する。	同　上	同　上
7	有価証券に関する記帳処理	貸借対照表の資産項目である有価証券について、その分類、取得価額と評価方法、評価基準等について解説し、有価証券売買の記帳処理について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	資本および収益・費用に関する記帳処理	貸借対照表を構成する資本に関する諸取引の記帳処理について解説する。また、損益計算書を構成する収益・費用の認識・測定についても説明する。	齋藤　正章	齋藤　正章
9	決算の簿記（1）	決算予備手続である合計試算表や残高試算表といった試算表の作成方法と棚卸表の作成方法について解説する。	同　上	同　上
10	決算の簿記（2）	精算表の作成方法について述べ、一連の決算予備手続に関する説明を完了し、決算本手続（決算仕訳と帳簿締切）について解説する。併せて財務諸表の作成についても言及する。	同　上	同　上
11	帳簿組織	帳簿システムの意義について触れ、補助記入帳、補助元帳、伝票会計について解説する。また電子帳簿システムについても言及する。	同　上	同　上
12	工業簿記の目的と原価概念	今回から工業簿記編である。今までの商業簿記における議論と工業簿記の目的を対比させながら工業簿記の特徴を浮き彫りにする。また、各種原価概念ならびに工業簿記の手続について解説する。	同　上	同　上
13	原価の費目別計算と部門別計算	工業簿記の第1段階と第2段階である費目別計算と部門別計算について解説を行う。	同　上	同　上
14	原価の製品別計算（1）	工業簿記の第3段階である製品別計算の1つである個別原価計算について解説する。また、製品の完成と販売に関する議論も併せて行う。	同　上	同　上
15	原価の製品別計算（2）	工業簿記の第3段階である製品別計算の1つである総合原価計算について解説する。	同　上	同　上

＝ 現代ファイナンス入門（’００）＝（R）

〔主任講師：大塚　宗春（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

現代ファイナンスの基本である資金の調達と運用が現実の企業でどのように意思決定されているか、また、それが私たちの生活にどのように関わっているかについて理解することを目的とする。全体を基礎編と応用編に分け、基礎編では資金の調達と運用の理論を学ぶ。応用編では最近のトピックを踏まえ、具体的な問題を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代ファイナンスの意義と課題ーイントロダクション	本講義全体の鳥瞰図ともいうべき内容の回で、学生に何をこの講義で学ぶかをファイナンスの意義と課題に照らして講義する。	大塚　宗春（早稲田大学教授）	大塚　宗春（早稲田大学教授）
2	現在価値と将来価値	キャッシュ・フローの現在価値への割引計算を中心に、異なる時点に生起する複数の成果を評価する方法について解説する。	同　上	同　上
3	財務諸表分析（1）	企業の経営活動の結果である損益計算書や貸借対照表をどのように読むかを解説する。ここでは損益計算書や貸借対照表にどういった内容が示されているのか、具体的には資産・負債・資本、収益・費用の内容について概説する。	同　上	同　上
4	財務諸表分析（2）	ここでは、前回の内容をうけて、企業の経営の分析を主として比率分析を中心とした分析手法により行う。	同　上	同　上
5	資金の調達と金融制度…株式による資金調達	資金の流れを資本市場とかかわらせて把握するとともに、株式発行による資金調達について具体的に述べる。	阿部　圭司（高崎経済大学講師）	同　上
6	資金調達の諸形態…社債等による資金調達	社債、転換社債、新株引受権付社債などによる資金調達を述べるとともに、日本企業の資金調達の傾向などを解説する。	同　上	同　上
7	資本コストと資本構成	資金調達手段のコストである資本コストをいかに算定するか、企業の資本構成（負債と自己資本の割合）の違いが資本コストおよび企業価値に影響するかについて述べる。	齋藤　正章（放送大学助教授）	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	キャッシュ・フローの管理	企業の資金繰りの管理を中心にキャッシュ・フローの管理を学ぶ。ここでは売掛金、運転資本の管理にも言及する。	齋藤　正章	大塚　宗春
9	投資意思決定の理論	企業における実物投資の決定のための財務的な基準を中心に述べる。投資からもたらされる将来のキャッシュ・フローが確実に予測できるという確実性を前提に、投資価値評価方法を学ぶ。	大塚　宗春	同　上
10	ポートフォリオ選択理論	分散投資の理論であるポートフォリオ理論を金融資産への投資例を用いて説明する。そして、リスクとリターンがどのような関係にあるかを学ぶ。	葛山　康典（早稲田大学助教授）	同　上
11	β(ベータ)と資本資産価格評価モデル	前回のポートフォリオ理論を受けて、証券の収益率とリスクの関係を示す資本資産価格モデル（ＣＡＰＭ）を解説する。さらに、リスクの尺度（ベータ）についても説明を行う。	同　上	同　上
12	デリバティブによる為替リスクの管理	今回から応用に入る。為替リスクの管理を題材としてリスク管理手法としてポピュラーな為替予約、先物取引、オプション取引等の金融派生商品を説明する。	大塚　宗春	同　上
13	財務面から見た組織形態のあり方	企業の組織形態のあり方を財務面から検討する。社内金利や社内資本金を利用した事業部制、カンパニー制、金融持ち株会社について述べる。	同　上	同　上
14	資本市場の効率性とファイナンス情報	ファイナンス情報が資本市場の効率性にいかなるインパクトを及ぼしているかについて述べる。具体的には、その影響を株価との関係で実証した研究成果をもとに解説する。	阿部　圭司	同　上
15	ファイナンスの今日的課題	前回までにふれることのできなかった問題や今後重要となると思われる問題を今日的課題として解説する。	大塚　宗春	同　上

＝ 現代産業組織論（'０１）＝（R）

〔主任講師：井手　秀樹（慶應義塾大学教授）〕
〔主任講師：廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）〕

全体のねらい

産業組織論は、もともと現実・政策指向的な学問である。そこで、本講義では産業組織論の理論的な理解だけでなく、それらが具体的にどのように現実の経済に適用されうるのかまた政策に対してどのような指針を提供しうるのかについても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業組織論の課題と方法	一般には聞き慣れない「産業組織論」の課題と方法、そしてその分析領域について解説する。そして、産業組織論において基本的な概念である「市場構造」「市場行動」「市場成果」の概念について、正しく理解を深めさせる。	井手　秀樹（慶應義塾大学教授）	井手　秀樹（慶應義塾大学教授）
2	市場組織と経済厚生	市場組織と経済厚生を考える上で、基準となる「市場」について解説する。「完全競争市場」、次に「独占市場」を理解させた上で、現実の経済でもっともよく見かける。「寡占市場」の特徴を明らかにする。また、寡占市場の分析に固有の難しさも解説する。	廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）	廣瀬　弘毅（福井県立大学助教授）
3	市場構造	産業組織論の分析の出発点となる「市場構造」の概念について解説する。特に、市場構造の要因である「集中度」、「製品差別化」、「参入障壁」、「規模の経済性」などの概念を、具体的な分析にも生かせるように解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
4	寡占理論(1)	産業組織論における理論的分析の焦点である「寡占理論」を２回にわたって取り上げる。第４章では、寡占市場において、前章で見たような市場構造要因が、企業行動にどのような影響を与えるのかを中心とした理論的な分析を展開する。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
5	寡占理論(2)	本章では、寡占市場における企業行動の典型的なものである、「カルテル・談合」や「プライスリーダーシップ」を理論的な分析をした上で、具体的な事例も挙げながら理解を深めさせる。この際に、市場構造と市場成果との関連をわかりやすく解説する。	同上	同上
6	垂直的取引制限	本章では、垂直的取引制限を扱う。ここでは、どのような場合に垂直的取引制限が生じやすいのか、そしてこのような取引制限行為がどのような市場成果をもたらしうるのかを解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
7	産業の事例研究(1)	本章では、ここまで学んできた産業組織論の基本的な枠組みをもとに、具体的な産業分析の事例研究を行う。まずはじめは、典型的な素材型産業である鉄鋼業を扱う。鉄鋼業では、設備が巨大となり、設備稼働率が重要であることなどを解説する。	村田　修造（神戸大学講師）	村田　修造（神戸大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	産業の事例研究(2)	本章では、耐久消費財産業の典型事例として自動車産業を取り上げる。自動車産業においては、世界的なメーカーの再編の嵐が吹き荒れている。その背景にある巨額にのぼる技術開発費負担の問題などに焦点を絞り、自動車産業の今後を展望する。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
9	産業の事例研究(3)	本章では、消費財産業でありながら、少し変わった市場行動を強いられるタイヤ産業を取り上げる。タイヤ産業は、その市場のパイの大きさが自動車の台数に限られてしまう一方、巨額の設備投資が必要なので、市場シェア獲得が死活問題になっている点などを解説する。	竹内　規浩（福井県立大学教授）	竹内　規浩（福井県立大学教授）
10	産業の事例研究(4)	本章では、典型的な消費財産業である洗剤産業を取り上げる。洗剤産業では、日常的に購買が行われる産業であり、すでに成熟しているため、ブランドによる製品差別化行動が顕著に見られる。そのため、大手各社による寡占が成立しているが、販売場面競争は、必ずしも弱まつていない。こういつた特徴を捉えていく。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
11	独占禁止政策	本章では、主にアメリカにおける独占禁止政策（反トラスト政策）の展開を解説する。特に、世界で最初にこの政策が導入された経緯や、昨今の独占禁止政策を巡って行われている論争などを、新たな経済の変化とともに理解させる。	竹内　規浩	竹内　規浩
12	産業政策	（ドイツ歴史学派を除き）産業政策の理論的な分析の歴史は、実はそれほど古くはない。そこで、本章では、産業政策の理論を、重要な概念である「学習効果」と「規模の経済性」を軸に解説する。その上で、この政策の持つ政治的な困難さ・限界を理解させる。	廣瀬　弘毅	廣瀬　弘毅
13	直接規制政策(1)	直接規制政策は、昨今の規制緩和の潮流の中でも中心的な分野となっている。そこで、本章ではまず直接規制の必要性を理論的に明らかにし、さらに実際の規制がどのように行われているのかについて、規制の持つ問題点とともに解説する。	井手　秀樹	井手　秀樹
14	直接規制政策(2)	本章では、直接規制の規制緩和が叫ばれるようになった背景を理論的に示す。そして、その上で、実際にどのように規制緩和が進められてきたのか、そしてそれらがどのような成果を生みだしてきたかを検証し、規制緩和問題を広く理解させる。	同　上	同　上
15	これからの産業組織論	本章では、これまでの議論で取り上げられなかった範囲について、補足的に解説する。さらに、産業組織論における最近の理論的な発展や範囲の拡大についても展望する。そして、産業組織論を総括する。	同　上	同　上

＝ 情報産業論（’００）＝（R）

〔主任講師：西村　吉雄（(株)日経ＢＰ編集委員）〕

全体のねらい

情報産業という概念の整理から始め、前半では情報産業におけるタテからヨコへの構造転換に伴うネットワーク分業について述べる。次にヨコ型情報産業における研究開発の進め方として「この指とまれ」モデルを提案する。最後に工業社会から情報社会への転換を、産業構造の転換との関連において議論する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報産業論の系譜	第1回目では、情報産業という概念の誕生と、産業の情報化という考え方との関係、脱工業化やサービス化、ソフト化、ネットワークなど、関連概念との関係を整理し、本講義の方針や予定を述べる。	西村　吉雄（(株)日経BP編集委員）	西村　吉雄（(株)日経BP編集委員）
2	タテからヨコへ（1） －コンピュータ産業の構造転換	1980年代後半にコンピュータ産業のビジネス構造は大きく転換した。1社が部品から最終製品までとりしきるタテ型から複数企業の連携によるヨコ型に変わる。オープン・ネットワーク時代への転換でもある。	同　上	同　上
3	タテからヨコへ（2） －メディア産業の構造転換	タテからヨコへの転換はコンピュータ産業にとどまらず、あらゆる情報産業に及びつつある。この回にはメディア産業の構造もタテからヨコに変わりつつあることを示し、マルチメディア現象との関係を考える。	同　上	同　上
4	タテからヨコへ（3） －半導体産業の新しいビジネス・モデル	情報産業にとっての最重要の技術基盤はこれからも半導体集積回路である。この産業でもヨコ型のネットワーク分業が進展して新しいビジネス・モデルが次々に登場し、日本企業も対応を迫られている。	同　上	同　上
5	タテからヨコへ（4） －生産システムのオープン化	ネットワークを介したヨコ型のオープンな分業は、製造業の生産システムにも及ぶ。半導体の生産を例にとってこの転換の意味を考えるとともに、自動車産業などへの展開の可能性をみる。	同　上	同　上
6	標準インタフェース、収穫逓増、ネットワーク	ヨコ型のネットワーク分業では標準インタフェースが不可欠である。この種の標準インタフェースを介して協力し合う産業では、ネットワーク外部性と呼ばれる一種の収穫逓増原理が働くことを示す。	同　上	同　上
7	情報産業における研究開発（1） －リニア・モデルから「この指とまれ」モデルへ	ヨコ型構造の情報産業では、研究開発から生産・販売までのすべてを1社で秘密裏に行うリニア・モデルは不可能で、開発方針を公開して賛同者を募る「この指とまれ」モデルが有効であることを提唱する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報産業における研究開発（2） －研究開発における工業と情報産業の違い	工業製品の研究開発において大きな役割を果たしてきたリニア・モデルと中央研究所が情報産業では妥当せず、産学共同研究やベンチャーの役割が大きくなることを示す。特許の役割の変化にも触れる。	西村　吉雄	西村　吉雄
9	情報産業における研究開発（3） －大学の役割の変化	日本の工業化の全盛期には大学の役割は均質な人材の研究にあり、大学における研究への期待がは低かった。情報産業ではこれが高まる。ヨコ型の情報産業における大学への期待と、大学側の変革の動きを紹介する。	同　上	同　上
10	70年代の構造転換（1） －工業化から情報化、ポスト工業化へ	日本の産業構造は1970年代に大きく転換した。鉄の生産量や原油の輸入量が漸減に転じるなか、半導体の生産は急増する。製造業人口比率の減少も始まる。この構造転換から、ポスト工業化、情報化を考える。	同　上	同　上
11	70年代の構造転換（2） －階層格差の拡大	工業化から情報化への転換と同期して貧富の差の拡大が日本でも始まったことを指摘する。米国のデータとも比較しながら、その原因が、情報化・ポスト工業化への転換と連動していることを示す。	同　上	同　上
12	70年代の構造転換（3） －女性の時代とポストモダニズム	工業化の時代には働く女性の数が減り、情報化の進展とともに、それが増えていることを、長期的な歴史データから明らかにする。またトップレスやポスト・モダニズムなどの文化現象と産業変化との関係にも触れる。	同　上	同　上
13	高齢化と人口減少 －ネットワーク社会のワークスタイル	21世紀の日本は急速に高齢化しながら人口減少に向かう。核家族のなかの成人男性だけを雇用という工業社会型から、高齢者を含む拡大家族がネットワークを介して共働するというワークスタイルへの転換が起こり得る。	同　上	同　上
14	メディア・ルネサンス －ネットワーク社会のライフスタイル	メディアのヨコ型化はメディア秩序の解体と再構築をもたらす。隣の人と同じ番組を観たかった工業社会人に対して、隣の人とは違う番組を観たい情報社会人向けのメディアではネットワークが最適なインフラとなろう。	同　上	同　上
15	大異を認め合いながら小同で協力しよう －ネットワーク社会の協力スタイル	自立分散した小集団がネットワークを介して協力するのが、産業・仕事・暮らしのこれからのスタイルだ。目的は違っても協力することが双方に有益となるように「大異を認め合いながら小同で協力」しよう。	同　上	同　上

＝ ネットワーク産業論（’００）＝（R）

〔主任講師：直江　重彦（中央大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、今日の社会生活の重要な基盤となっている公益事業と呼ばれる産業についての実態を紹介するとともに、その経済的社会的特性について解説し、公共政策上の諸課題について検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概論 1 公共事業の誕生と発展	今日の社会生活の基盤となっている様々なサービスの中に公益事業と呼ばれる産業がある。近代社会の形成とともにシビルミニマムとして普及してきた公益事業のその誕生から今日までの発展を、産業社会の発展と成熟と言う視点から概観する。	直江　重彦（中央大学教授）	直江　重彦（中央大学教授）
2	概論 2 公共事業の経済学的特徴	公益事業は自由主義経済において長い間例外的に政府の強い規制の下で発展してきた。その理由は公益事業が提供するサービスの特性とその生産構造のネットワーク性に求められるが、ここでは特に経済学的に見て、何故規制が必要とされてきたかを解説する。	同　上	同　上
3	概論 3 公共事業政策	公益事業に伝統的に課せられてきた公共規制について概観する。特に今日公益事業改革の主要課題とされている料金規制と参入規制を中心に、その経済的意味や社会的役割とそこから導かれる公益事業政策の問題点を紹介する。	同　上	同　上
4	概論 4 公共事業規制とその変革	公益事業に課せられてきた公共規制にも様々な問題があり、今日多くの国でその改革が進められているが、特に改革の主たる対象となっている料金規制の問題点とされる効率性に焦点を当て、その経済学的理由と各国で試みられている改革の方策を紹介する。	同　上	同　上
5	概論 5 公共事業政策の課題	今日の公益事業は、規制緩和の流れの中で民営化や事業分割、競争の導入と言った様々な制度改革がなされている。これらの改革に伴い新しい公正競争条件の整備やユニバーサルサービスの確保と言った課題が発生している。ここではそれらの課題を概観する。	同　上	同　上
6	各論 1 電気通信事業	公益事業の一つである電気通信事業は公益事業改革の中心的存在であり、ここではＮＴＴの民営化と我が国の電気通信産業規制の実態を紹介する。さらに今日の情報化時代の中でこの産業は関連産業との融合化が始まっており、産業と政策の問題点と課題を解説する。	同　上	同　上
7	各論 2 放送とインターネット	放送産業は通信技術の発展とともに高度化が進んでおり、様々なメディアで放送サービスは提供されるようになっている。放送産業の内部構造も変化しており、産業規制の改革が進められている。特にインターネットの登場と関連づけて変革と課題を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	各論 3 郵便事業と宅配事業	郵便事業はその誕生以来、国家独占で提供されてきたサービスではあるが、多くの先進国でその改革が始まっている。特に近年発展してきた宅配事業との競争の中で様々な問題を露呈し、民営化や事業分割が改革方策として採用されている実態を紹介する。	直江　重彦	直江　重彦
9	鉄道	鉄道は陸上交通の独占的な地位を占めてきたが、道路交通や航空の発達により交通機関間の競合が生まれている。本講では、交通ネットワークと輸送構造の変化を概観した後、自然独占と経済的規制、鉄道整備と費用負担、民営化等事業形態の変化について考察する。	山内　弘隆（一橋大学教授）	山内　弘隆（一橋大学教授）
10	航空	航空産業では、アメリカの国内航空規制緩和（1978年）以降、他の国でも競争導入が進んでいる。本講では、まず航空産業における公的介入の根拠について論じ、規制緩和による市場構造の変化、コンピュータ予約システム等新しい競争戦略について検討する。	同上	同上
11	交通インフラストラクチャー	多くの交通サービスは道路、空港、港湾等の交通インフラストラクチャーを前提として成立している。本講では、交通インフラストラクチャーの特性を論じるとともに、無料開放を原則とする道路整備、利用者負担となっている空港整備について具体的に論ずる。	同上	同上
12	電気事業	電気事業の市場構造の特徴や政府の規制の枠組みを解説し、事業の活性化と消費者利益の増進を図るためにどの様な規制改革が必要かを明らかにする。また電気産業が新たな取り組みを期待される課題としてさらなる経営効率化と地球環境問題への対応を取り上げる。	山谷　修作（東洋大学教授）	山谷　修作（東洋大学教授）
13	ガス事業	ガス事業が直面する最大の課題は、内外価格（英国の3倍）と内々価格差（地域間で約3倍）の縮小である。料金低廉化に向けて取り組むべき諸施策を紹介する。またクリーンエネルギーとしての天然ガスの普及促進についても検討する。	同上	同上
14	上下水道事業	‘安かろう不味かろう、高かろう美味かろう’の世間常識が通用しない財、それが水道水である。としの水道事業は水源の遠隔化、水質の悪化、異常気象による渇水に直面し、供給コスト増を招いている。上下水道の料金低廉化とサービス向上のための方策を検討する。	同上	同上
15	まとめ	これまでの公益事業の経済理論と実態についての講義のまとめとして、公益事業がどの様に変貌していこうとしているのか、その課題としての効果と公正のバランス、それを実現するための公共規制のあり方、さらには市民の参加に不可欠な情報公開を取り上げる。	直江　重彦	直江　重彦

＝ ベンチャー企業論（’０１）＝（R）

〔主任講師：柳　孝一（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：藤川 彰一 (株)ジャフコ産学連携チームシニア-マネージャー)〕

全体のねらい

21世紀はベンチャー企業の時代であると期待されている。ベンチャー企業とは何かから始まり、ベンチャー企業の現状を日米の比較をしながら明らかにする。さらにベンチャー企業を支援するベンチャーキャピタル等についてもふれながら、ベンチャー企業について、体系的な理論、知識、見識を身につけてもらうことがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ベンチャー企業の時代へ	ベンチャー企業の定義を示し、中小企業との違いを明らかにする。産業構造が大変革する中でなぜベンチャー企業が注目されるのかを明らかにする。さらに既存の大企業や中小企業が、新規事業への多角化のために起こす、企業革新型ベンチャーについても言及する。	柳　孝一（早稲田大学教授）	柳　孝一（早稲田大学教授）
2	日本のベンチャー企業の歴史	戦後生まれたソニーや松下電器もベンチャー企業から出発した。今まで日本では、３回のベンチャーブームがあった。今回は95年に制定された「中小企業創造法」が契機となっている。今までの歴史をふりかえりながら、今後の展開方向を探りたい。	同　上	同　上
3	ベンチャー企業経営論（Ⅰ）（構造的アプローチ）	ベンチャー企業は、新規事業への挑戦を行うためリスクが高い。リスクを下げるためには成功したケースから、体系化された経営理論を構築し、それを学ぶ必要がある。まず成功時点に立って、当該企業の主要成功要因を集め一般化して「四面体理論」を形成した。	同　上	同　上
4	ベンチャー企業経営論（Ⅱ）（成長ステージ別アプローチ）	ベンチャー企業は、昆虫の“変態”に例えられるほど、成長ステージごとにマネジメントを変革する必要がある。成長ステージ別に変革するには、経営要素の内容を変えると共にウエイトも変化させなければならない。その変革の力は、経営資源の自己回転力による。	同　上	同　上
5	米国のベンチャー企業の歴史	第二次世界大戦後、米国に輩出したベンチャーの代表企業を紹介する。革新的な技術、新しいコンセプト等に基づいて起こされた企業の殆どがベンチャーであったことを明らかにする。また、ベンチャーを輩出するシリコン・バレーの文化についても言及する。	藤川　彰一（(株)ジャフコ　投資開発チームシニアーマネージャー）	藤川　彰一（(株)ジャフコ　投資開発チームシニアーマネージャー）
6	米国のベンチャー活躍の現状	1990年代に入って、ベンチャー企業への投資が飛躍的に拡大した。その背景とベンチャーが活躍するインターネット分野の歴史と具体的な企業を紹介する。インターネット以外の分野のベンチャーについても説明する。	同　上	同　上
7	米国のベンチャーキャピタル	米国でベンチャー企業の発展を支えた最大の要因の一つであるベンチャーキャピタルの歴史を紹介する。また、ベンチャーキャピタルの資金フローのしくみ、ベンチャーキャピタリストとベンチャー企業の関係をも明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本のベンチャーキャピタル	日本のベンチャーキャピタルの歴史を記し、ベンチャーファイナンスに占める役割を明らかにする。米国との比較から、21世紀のベンチャーキャピタルが向かうべき方向をしめす。	藤川　彰一	藤川　彰一
9	ベンチャー企業の現状	ベンチャー企業が期待されるにしたがって、多くのベンチャー企業が生み出されてくる。全体として、どのような事業や業種、業態が多いのか。又支援制度との関係や問題点なども明らかにしたい。またインターネット関連等最先端の働きも紹介してみたい。	柳　孝一	柳　孝一
10	ベンチャー企業の経営者	ベンチャー企業の成功要因で最も重要なことは、起業家の能力、すなわち「起業力」ということになる。ここでは、ベンチャー企業で成功した経営者の能力を分析し、これからの起業家に役立つ内容としたい。起業力を身につけるにはどうするかについても含めたい。	同　上	同　上
11	ベンチャー企業と株式公開	ベンチャー企業にとっての株式公開の意味－メリットと義務－を明らかにする。日本のベンチャー企業の株式公開に大きな役割を果たしてきた店頭市場の歴史を紹介する。90年代末の新しいベンチャー公開市場の動きを説明する。	藤川　彰一	藤川　彰一
12	ベンチャー支援政策・制度	第二次大戦後の中小企業政策の歴史とベンチャー支援政策の概要をしるす。また、ベンチャー企業にとって、支援制度の活用の方法と注意点を明らかにする。ベンチャー支援制度だけではなく、社会全体の変革の必要性についても記す。	同　上	同　上
13	日本のベンチャー企業 ケーススタデイ	最近注目されているベンチャー企業について業種等を考えながら３社ほど取り上げ、ケーススタデイを行う。起業の動機、成功要因、起業力の自己評価、経営的な危機、支援制度の活用等について、可能であれば、起業家の話を直接聞きながら構成したい。	柳　孝一	柳　孝一
14	米国のベンチャー企業のケーススタディ	米国でベンチャー企業が活躍しているインターネット関連の企業をとり上げ、その起業から公開、その後の成長の歴史を紹介する。とり上げたのは、ネットスケープ、ヤフー、AOL、アマゾン・ドット・コムである。	藤川　彰一	藤川　彰一
15	ベンチャー企業の将来	21世紀の日本経済の突破口は、相変わらず見えていない。突破口のひとつがベンチャー企業の輩出である。政府、地方自治体、大学、民間等の支援制度も整って来た。大企業の人員削減から起業家になる人や、大学生の意識も変わって来ている。将来への展望を述べる。	柳　孝一	柳　孝一

＝ 大 地 と 人 間 ＝（ＴＶ）
－食・農・環境の未来
〔主任講師：祖田　修（京都大学教授）〕

全体のねらい
人類はその生存のために食料を不可欠とする。それを担うのが農業生産である。しかし農業生産技術の発展は、他方で環境破壊の面も持っている。また一方では飽食と大量廃棄をしながら、他方では飢餓と栄養不足も深刻だ。このような世界農業・日本農業の現実をふまえ、高度文明社会における大地と人間という視点より農業を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文明史の中の農業・農村	現在の農業および食生活は多くの問題をかかえている。それは高度文明社会に特有の問題である。農業のあり方と行方は、今後の人間社会のあり方を決定づける意味をもつことを指摘する。	祖田　修（京都大学教授）	祖田　修（京都大学教授）
2	飽食社会への道－日本の食生活	日本は食料を大量生産－大量消費－大量廃棄する、飽食社会のただ中にある。そして大量輸入も飽食を支えている。こうした飽食の陰にある問題を究明する。	古沢　広祐（國學院大学教授）	古沢　広祐（國學院大学教授）
3	飽食を支える農業の発展と技術	日本の食生活を支えているのは、大量生産、周年生産といった農業技術の発展である。しかしその技術は同時に、環境問題や食の安全性をそこなう大きな問題をもつものであることを指摘する。	同　上	同　上
4	食生活と農業を結ぶ	上記のような、食生活と農業生産に所在する問題をのりこえる道は、生産者と消費者がその事実を見つめ、相互に協力して新たな食と農の関係を築いていく以外に道がないことを明らかにする。	同　上	同　上
5	農産物貿易の経緯と現実	農産物の貿易は、国家間・地域間の過不足を補い、無いものを交換しあうという意味で不可欠で有意義なことである。しかしあまりにも外部依存を深めると、種々の問題も起る。こうした農産物貿易の現実と、国家間の交渉経過を追う。	八木　宏典（東京大学教授）	八木　宏典（東京大学教授）
6	貿易自由化と日本農業の展望	近年日本は貿易自由化を押し進め、大幅に農産物自給率は低下している。日本農業の将来を切り開くにはどうすればよいか。その経営経済的条件を探る。	同　上	同　上
7	揺らぐ循環と共生の大地－アフリカ農業・農村の現実	発展途上国ではなお急速な人口増加が続いている。それを補う食料生産の拡大がなければならない。過酷な条件の中で、アフリカ諸国は農業生産の発展方向を模索している。その実態を紹介する。	祖田　修	祖田　修

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	掠奪される大地 －新大陸農業と環境問題	日本はアメリカという新大陸型農業国に大きく食料を依存している。しかしアメリカ農業自体も掠奪農業化し、限界に直面しつつあるといわれる。その現実と可能性はどうか。	八木　宏典	八木　宏典
9	失われゆく大地と森林 －森林破壊と砂漠化の現実	人口増加と工業化によって、森林は急速に縮小しているといわれる。また既存の農地も塩害や砂漠化などを引き起しているところも多い。農業と環境の複雑で困難な関係に迫る。	河合　明宣（放送大学助教授）	河合　明宣（放送大学助教授）
10	激動する大地 －中国農業・農村の行方	中国は世界人口の４分の１を占める。この中国の工業化、農業生産についての考え方は、世界の食料問題を大きく決定づける意味をもつ。激動する中国の農業と農村の実態を明らかにする。	同　上	同　上
11	保全される農業と環境 －ヨーロッパの農政の動向	ＥＵ諸国は、農業と工業の調和、農業と環境の調和を考え、次第に農産物自給率を高める傾向にある。そうした政策の方向と内容を紹介し、日本の方向を考える。	同　上	同　上
12	大地と人間をめぐる文明の対立 －人類と地球永続のための世界農業再編	これまで問題にしてきたように、食糧の確保、環境の保全は、現在地球的規模で考えざるをえなくなってきた。それは人類と地球との永続的関係を探る必要性を提起している。その関係の再編方向を探る。	古沢　広祐	古沢　広祐
13	現代文明の病根と再生	現在の食生活、農業生産、環境の問題は、現代文明の到達点と帰結を現わしている。このような諸問題の原因は何か、そのあるべき姿への再生の条件は何か。こうした点について文明史的視点より論ずる。	井上ひさし（作家）	井上ひさし（作家）
14	日本文化と米	日本の自然と農業のありようは、永年の農民の知恵も蓄積した日本文化の基底をなしている。その事実と意味を検討し、考える。	富山　和子（立正大学教授）	富山　和子（立正大学教授）
15	大地と人間の未来 －都市と農村を結ぶ	これまでの14回の講義を総括し、21世紀に向けての大地と人間の未来について、都市と農村の関係を中心展望する。	祖田　修	祖田　修

＝ アグリビジネス（’０２）＝（R）

〔主任講師：稲本　志良（京都大学教授）〕
〔主任講師：河合　明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現在の食料（食品）供給産業は、従来の農業・漁業を中心とした産業構造を大きく変化させ、資材産業、食品加工産業、流通・サービス産業などの関連産業との結びつきを強めたアグリビジネスといわれる産業構造へ転換してきている。アグリビジネスの発展によって、消費者は豊かな食生活が可能になってきているが、新たな課題も生じてきている。本講義では、上記の動向を国際的な視点も交えて体系的にのべる。

	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アグリビジネスの範囲と役割	アグリビジネスは、農業と商工業（企業）との関連が強まるなかで、関連する産業ないし企業を総称する用語として定着してきているが、先ず、その背景をのべる。次いで、わが国の食料が海外への依存を強めるようになつた現実からも、アグリビジネスという領域として扱うことが必要になつたことをのべる。	西村　博行（京都大学名誉教授）	西村　博行（京都大学名誉教授）
2	農業の生産と投入	経済的にみると、農業・食料関連産業は国内で農業と食料関連の生産物を生み出し、その生産のために必要とされる肥料・飼料などが投入され、機械が利用されている。統計として利用できる1960年（昭和35年）以降における生産と投入の年次的な推移を知り、それらの相対的構成の変化を眺める。	同　上	同　上
3	広がるアグリビジネス	食料市場においては、かつての生鮮農産物だけでなく、各種の付加価値のついた加工食品が消費者に提供されてきた。そして、消費の内容は多様化し、外食と内食から、中食といわれる分野が別れるようになつてきた。それは、生産や製造・加工から販売の段階で、輸送や取引の形態を変えてきつつある。しかし、こういった食品産業の拡大と多様な消費の到来による、廃棄物が無視できなくなっている。この間の経緯について説明する。	同　上	同　上
4	アグリビジネスのなかの農業経営	わが国の農業経営は多様な変化を遂げてきている。このような農業経営の多様な変化は急速な発展を遂げている「川上」、「川下」の関連産業と密接な関連を有している。その関連のあり方は、稲作農業、園芸作農業、畜産業において異なっている。ここでは以下の３つの章に先立って、農業経営と関連産業の関連について概説する。	稲本　志良（京都大学教授）	稲本　志良（京都大学教授）
5	稲作農業の発展と技術・流通革新	米の消費量が減退するなかで、稲作の生産力は技術革新によって大きく上昇してきた。特に、単収の向上と安定、省力化が進み、最近では良食味米の生産が重要になってきた。また、米消費拡大に向けた米加工も進んだ。この間の稲作農業の動向を政策・制度の変化、輸入自由化などの環境変化、関連産業との関連に注目してのべる。	同　上	同　上
6	園芸作農業の発展と技術・流通革新	野菜・果実の消費構造と食生活が大きく変化するなかで、生産技術の革新、流通技術の革新の進展によって、生産構造、流通構造が大きく変化した。また、品目によっては加工が増加すると共に、輸入も大きく増加した。この間の園芸作農業の動向を、関連産業との関連に注目してのべる。	小田　滋晃（京都大学助教授） 稲本　志良	同　上
7	畜産業の発展と技術・流通革新	消費構造や輸入増加などの大きな環境変化のなかで、畜産業は急速な技術革新、流通革新によって規模拡大と生産性の向上を実現してきた。この間の畜産業の発展の過程を関連産業との関連に注目しながらのべる。	稲本　志良	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	食品製造業の発展と食品の多様化・高付加価値化	食品製造業は、品目により大企業寡占と多数小企業の原子的な競争構造にわかれ、技術の状態も異なる。このような産業組織下での、製品の多様化や高付加価値化、衛生・安全性などの品質問題、原料生産者との取引、輸入原料依存構造についてのべる。	新山　陽子（京都大学助教授）	新山　陽子（京都大学助教授）
9	食料（食品）流通業の発展と流通革新	食品の流通は卸売と小売の2つの階段からなる。卸売段階では、生鮮農作物の卸売業と卸売市場の制度・機能、加工食品に関しては製造企業と問屋が担う卸元機能について、小売段階では、量販店の発展と食品小売機能についてのべる。	同　上	同　上
10	外食産業の発展と食生活の変化	一大産業となった外食産業には、寿司など伝統食部門と、ハンバーガーなどアメリカ資本とそのノウハウによって発展した外来食部門とがあり、近年は弁当・惣菜業の伸長が著しい。このような部門や業態の拡大と食生活の変化、食材原料の調達にみる農業とのつながりについてのべる。	同　上	同　上
11	漁業の持続的生産と養殖の展開	水産資源の持続的利用が世界的関心事で、養殖業が漁業生産を捕らえるようになるか否か課題とされる。秩序ある漁業法制度の仕組みや経営システムあるいは技術進歩が資源増減のあり方にどのように影響するかについてのべる。	倉田　亨（近畿大学名誉教授）	倉田　亨（近畿大学名誉教授）
12	水産物加工の伝統と技術革新	水産物加工品は生鮮のままとは異なる味覚を持ち、消費の仕方も違う。伝統的な加工・調整技術が現代にもいかされているものが多い。他方、欧風加工・製造も増えている。水産加工品の商品特性と技術的特徴およびその加工の産業的特徴や盛衰についてのべる。	同　上	同　上
13	水産物流通の多様化とグローバル化	わが国で使用する魚介は700とも1500種といわれ、流通の仕方や価格形成も様々である。産地市場から中央卸売市場を経て小売業者へ届くのが主要ルート、これに輸入品が続々と加わる。各ルートでの取引システムと価格形成についてのべる。	同　上	同　上
14	アグリビジネスの展開と国際化 －欧米諸国との関連で－	わが国のアグリビジネスが発展する過程で、欧米諸国のアグリビジネス、特に多国籍企業との間で、一方では競争関係の激化、他方では、業務の連携関係の強化が進んでいる。この間の動向について、欧米諸国との関連を中心にのべる。	河合　明宣（放送大学助教授）	河合　明宣（放送大学助教授）
15	アグリビジネスの展開と国際化 －アジア諸国との関連で－	わが国のアグリビジネスが発展する過程で、アジア諸国への直接投資や製品市場の拡大が進んでおり、現地諸国の農業や食品産業との競争や連携が強まってきている。この間の動向について、アジア諸国との関連を中心にのべる。	同　上	同　上

＝ 発展途上国の開発戦略（'９９）＝（R）

〔主任講師：河合 明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

経済開発の目標と戦略は、歴史、社会制度、政治体制、資源賦存、地政学的位置等に規定される。これらを視野に入れ、南アジア７ヵ国（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、マールディーヴ）の開発戦略の特徴を国別に考察する。南アジア諸国についての具体的理解は、日本の援助や南アジア地域と日本との協力関係の今後の在り方を考える材料となろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南アジアの多様性と地域の統合	ネパールとブータンを除けば、南アジア諸国はイギリス植民地統治から独立して誕生した。各国は、植民地統治の歴史を開発戦略策定の初期条件とさざるをえなかった。植民地統治期に形成された経済、政治、国家機構の特色について概観し、あわせて本科目の対象とする南アジア地域の概況説明を行う。	河合 明宣（放送大学助教授）	河合 明宣（放送大学助教授）
2	発展途上国の農業開発戦略	工業化が外国資本や援助によって推進された場合は、圧縮された産業構造の高度化が達成されるが農工間の格差は急速に拡大する。南アジアを事例として、経済発展と農業・農村の変容とその結果もたらされた変化の意味を考える。	同上	同上
3	多元的・混合経済的開発 インド (1)	多言語、多民族、多宗教・カーストが交錯するインド社会の実態をふまえて、議会制民主主義国家形態のもで遂行されてきたインドの経済開発戦略の特質について、多民族の国民的統合課題とかかわらせて、産業政策の展開に焦点をあてて考察し、あわせて経済開発の成果と問題点について論及する。	西口 章雄（同志社大学名誉教授）	西口 章雄（同志社大学名誉教授）
4	経済改革の現状と諸問題 インド (2)	1991年7月以降、米ソ冷戦体制の崩壊と共に、インドの経済開発戦略も大転換を遂げた。インド経済の世界市場への統合を目指して、マクロ経済安定化・構造調整政策が経済改革の名の下で着々と実行されてきた。ここでは同改革の特徴・内在的諸問題・展望について考察する。	同上	同上
5	「社会主義型」開発戦略下の農業政策 インド (3)	インドの経済開発戦略における農業政策の展開を跡づける。農業生産力の向上と社会的公正の達成がどのように調整されたか、工業化のために農業部門がどのような役割を担ったかについてインドの特徴をまとめる。	河合 明宣	河合 明宣
6	経済開放政策下での農村改革 インド (4)	1960年代後半に開始された「緑の革命」によって、食糧自給の見通しがついたとはいえ、農村の所得格差や地域格差は拡大している。多数の貧困線以下層の存在、人口増加、環境の悪化等にどう対処するのか。問題点と解決の方向を探る。	同上	同上
7	軍部・官僚支配の開発戦略 パキスタン (1)	国連開発計画によれば、1994年のパキスタンの1人当たり所得は430ドル、貧困層は12％で、生活水準は南アジア諸国のなかでも上位にあるのに、成人識字率37％など社会開発の遅れが目立つのはなぜか。その原因を独立後のパキスタン政治に対する軍部・官僚支配とその下で実施された開発戦略に探る。	浜口 恒夫（大阪外国語大学教授）	浜口 恒夫（大阪外国語大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経済発展と構造的不均衡 パキスタン (2)	独立後の工業化の結果、国内総生産に占める工業の割合は25％で農業と同比率となり、輸出構造も工業製品が主となった。農業増産で食糧自給もほぼ達成された。しかし膨大な財政赤字や国際収支赤字など構造的不均衡を抱え込んだパキスタン経済の実態を捉える。	浜口　恒夫	浜口　恒夫
9	若い独立国の自立の課題 バングラデシュ(1)	1971年に独立したバングラデシュは、一国の経済運営と国民統合のための物的及び人的資本の蓄積が乏しく、軍人政権の交代を繰り返す不安定な政権が続いた。地方行政改革を中心に従属的経済構造からの脱却の模索を跡づける。	河合　明宣	河合　明宣
10	農村開発における環境問題と在地の技術 バングラデシュ(2)	バングラデシュでは、新しい乾季稲作が環境を大きく変え、それに呼応するかのように砒素中毒、マラリアの蔓延等、誰もが予想しなかった問題が生じている。人々を豊かにするはずであった緑の革命の長期的実践の結果である。豊かさをはき違え、短期的成長の罠に囚われたのだろう。今こそ在地に生きてきた人々の知恵と技術が求められている。環境問題の視点から農村開発戦略を具体的に考察したい。	安藤　和雄（京都大学助教授）	安藤　和雄（京都大学助教授）
11	ヒマラヤ山間地の開発課題 ネパール	ネパールは1950年代から混合経済体制下で5か年計画を中心に開発戦略を立ててきた。間もなく第9次5か年計画が実施されるが、その狙いと裏腹に経済は伸び悩み、従来主産業であった農業も生産の構造的基盤が揺るがされている。この問題点を考察する。	ケシャブ・ラル・マハラジャン（広島大学助教授）	ケシャブ・ラル・マハラジャン（広島大学助教授）
12	開発と自然保護の戦略 ブータン	ブータン王国は、ヒマラヤ山脈の南に位置している。ブータンは、今日まで急速な近代化を望まず、伝統的な生活を大事にしてきている。ブータンのこのような姿勢は、工業化に代表される近代化のもたらすメリットとデメリットを考えさせるよい例である。	栗田　靖之（国立民族学博物館教授）	栗田　靖之（国立民族学博物館教授）
13	社会福祉、社会開発重視の開発戦略 スリランカ、モールディーヴ	スリランカとモールディーヴは、ともに南アジア諸国中一人当たり国民所得や社会開発の点で一、二を争う国である。70年代末以降政府主導型経済開発から経済自由化、外資導入へと転換したスリランカ経済の変貌と問題点を明らかにする。モールディーヴは珊瑚礁からなる小国で、独立以来対外経済開放政策をとり、漁業近代化と観光業の開発を進めてきた過程を説明し、その問題点を指摘する。	古賀　正則（明治大学教授）	古賀　正則（明治大学教授）
14	南アジアの開発戦略	インドは、東西冷戦体制のもとで非同盟中立の立場を取り、社会主義型社会の建設を目標として内向きの経済開発戦略を採用した。パキスタンは、対外依存、民間資本、大地主重視の開発を進めた。アセアンやＮＩＥＳとの比較を念頭に、第二次大戦以降の開発戦略の展開を概観し、各国の主要な特色や南アジア全体の流れを考察する。	河合　明宣	河合　明宣
15	南アジア地域と日本	政府開発援助や経済開放政策下での外国資本投資は、経済開発戦略に大きな影響力を与える。外的インパクトによる経済構造の調整は、国内に様々な摩擦を引き起こす。地方分権等の行政機構の改革や農民や地域住民レベルでの新しい動きに注目し、市民レベルでの国際協力や交流活動にも触れて南アジア地域と日本との関係の在り方を考える。	同　上	同　上

＝ 都市・地域経営（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小泉　允圀（明海大学教授）〕
〔主任講師：岡崎　昌之（法政大学教授）〕
〔主任講師：林　　亜夫（明海大学教授）〕

全体のねらい

21世紀を向かえ、我が国の都市や広く地域の活力を維持し、また地域の活性化を維持していかなければならない。そのためには新たな制度や地域に分散している様々な資源を有効に利用し、着実に政策を実施していく経営的視点が必要である。このような視点に立ったときどのような問題があるか、制度的、財政的あるいは地域的制約を通じて明らかにしながら、問題解決の方策や技術を探究することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市・地域経営学の必要性	21世紀をむかえた日本の都市、地域の活力を維持あるいは活性化していくために、都市や地域の資源を有効に利用するという経営的視点が必要である。3人の講師の間でのディスカッションを通じて、経営的視点とは何か、現実の問題は何かを議論し、問題解決の制度的、技術的論点の明確化を行う。	小泉　允圀（明海大学教授） 岡崎　昌之（法政大学教授） 林　　亜夫（明海大学教授）	
2	都市経営の視点と方策	わが国で「都市経営」に関する議論がどのようになされてきたかその歴史的経緯をまず整理し、次いで都市経営が目指す方向や視点をどのように考えるか、また都市経営の具体的対象領域としてどのようなものが有り、現実にどのような方策が採られているか整理解説する。	小泉　允圀	小泉　允圀
3	地方財政のしくみとその運営	地方財政の特色をふまえ、まず国と地方との財政関係について概括的に整理し、次いで地方財政のうち市町村財政を着目し、そのしくみや財政運営上の原則について述べ、都市・地域経営における財政問題の重要性について理解を深める。	同　上	同　上
4	都市・地域計画の役割とその立案過程	都市・地域に関する様々な計画は、都市や地域を経営・管理する上で重要な役割を果たしている。また、複雑化する社会状況の中で、自治体や企業体にとって合理的意思決定として欠くことができない。それ故、各種計画の役割とその立案過程について解説する。	同　上	同　上
5	生活環境整備とその経営	いずれの都市、地域にとっても住民の生活環境をより豊かに、快適に整備してゆくことが求められている。そこで、生活環境整備をより積極的に推進して行くための諸方策について、制度面や財政面から検討を加え、今後の整備のあり方について考察を加える。	同　上	同　上
6	地域経営の視点と方策	地域外の力に安易に依存することなく、地域に内包された力を基本に、地域の可能性を長期的な視点で追求するという、地域経営の原点をいかに実現していくか。地域資源の活用、整備拡充、規制排除等、具体的な地域経営の方策を検討する。	岡崎　昌之	岡崎　昌之
7	過疎化の進展と対応策	過疎化、高齢化により日本の国土の荒廃が進んでいる。中山間地域、豪雪地域、離島等々の条件不利地域での農林業をはじめとする産業振興の行方も不透明である。こうした地域の実像を明確にしつつ、条件不利地域への対応を日本国内、海外の事例から模索する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市農村交流と地域経営の担い手	高速道路や新幹線等の社会的基盤がほぼ整ってきた今日の社会では、人々の移動性も高まり、地域の定住人口に加えて、その地域を訪れる交流人口も視野に入れて地域経営を考えることが必要になった。またそうした交流を支える地域経営の担い手も重要である。	岡崎　昌之	岡崎　昌之
9	地域の経済的振興－特産品開発、刊行、新しい産業振興	地域の資源と技術を活用する身近な特産品開発の産業振興、その特産品や景観、地域の歴史文化を活かした観光振興をいかに着実に展開していくか。また空洞化しがちな日本の地域にいかに新しい産業を根づかせるか。地域に視点をおいた産業構造の新しい枠組みを考える。	同上	同上
10	地方公営企業と公社	都市、地域での様々な公共・公益サービスを供給する主体として地方公営企業や公社、そして第三セクターといった組織が存在する。これら組織の性格と機能を明らかにしながら、その効用と問題点を分析する。	林　亜夫	林　亜夫
11	都市・地域経営手法－シミュレーション	都市、地域の動態を把握し、将来の予測あるいは都市、地域政策の結果の影響分析を行い、計画や政策を評価するために様々な計算機モデルが構築される。この章では、一つのシミュレーション手法を取上げ、このような手法の有効性と問題点を理解する。	同上	同上
12	都市・地域経営手法－都市・地域計量分析	都市、地域の人口動態、経済、財政の構造を計量経済学の手法を用いてモデル化し、地域政策の結果の影響分析や将来予測を行う手法論を具体的に修得する。実際のモデルの構築方法から始めて、モデルの検証や利用の仕方を学ぶ。	山口　誠（豊橋科学技術大学教授）	山口　誠（豊橋科学技術大学教授）
13	都市・地域経営手法－地理情報システム	都市、地域の現況や動態を計算機上の電子地図の上に落とし、様々な都市、地域の態様や政策的影響を計算機の地図上で効率よく分析、解析する手法ＧＩＳの基礎を学習する。さらに、このＧＩＳを用いて政策の土地利用等に与える分析例を学習する。	川口有一郎（明海大学助教授）	川口有一郎（明海大学助教授）
14	広域行政	市町村の行政区域を越えて公共サービスを供給する広域行政機構について、その制度的性格さらにその効用と問題点について、経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	林　亜夫	林　亜夫
15	市町村合併	市町村を統合し一つの行政区域にする市町村合併について、その傾向と目的、さらに広域行政との比較において、その効用と問題点を経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	同上	同上

＝ 都市と生活空間の工学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阪本　一郎（明海大学教授）〕

全体のねらい

人々の生活は多様な行動で成り立ち、それらが営まれる生活空間は道路や建物などの物的基盤によって機能する。人類はその歴史の中で、良質な生活空間を獲得するためにさまざまな努力と試みを行ってきたが、いまだにその質は人々の期待から遠く離れた水準にあり、その改善は重要な社会的課題としてあり続けている。この課題に応えることがどのような意味で難しく、社会のいかなる選択を必要としているかという点について、主として社会技術の側面から示すことが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市と田園－2つの生活空間	対照的な生活空間である都市と田園を対比することにより、それぞれの特性を明らかにする。さらに田園の魅力と都市の魅力の源泉について述べる。	阪本　一郎（明海大学教授）	阪本　一郎（明海大学教授）
2	生活空間としての田園	田園から都市へ、地方都市から広域中心都市へ人口が移動し、従来の生活空間の維持が困難になった状況に、政府・自治体がどのように対処してきたかを概観するとともに、田園居住の可能性を検討する。	同　上	同　上
3	都市と郊外－生活空間の拡散化	都市の郊外化といわれる現象が世界的に進行し、生活空間の拡散化が生じている。この現象を紹介するとともに、それがもたらす社会的不利益の大きさを述べる。	同　上	同　上
4	都市と郊外－居住地の選択	人々の自由な居住地選択が都市の郊外化をもたらしている。社会条件の変化が人々の選択にどのように作用するかを考察する。	同　上	同　上
5	郊外開発抑制の試み－居住地の制限	都市をコンパクトに保つためのさまざまな試みがなされてきた。グリーンベルトを採用したイギリスや日本の試みを概観する。	同　上	同　上
6	都市空間制御の現実	都市空間を人為的にコントロールしようとする試みは、現実社会の中でしばしば変形を余儀なくされる。線引き制度の変形の過程を検討し、人為的制御の難しさを示す。	同　上	同　上
7	優れた生活空間の基本要素	優れた生活空間であるための物的な条件を検討する。特に都市においては人々の高密な活動が相互に摩擦を生じやすいため、厳しい条件が必要になること、その実現に市場が十分には機能しないことを述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本の土地利用規制による生活空間の質確保	日本では生活空間の質を確保するためにゾーニングという方法を採用してきた。その歴史的な展開を概観し、良質な生活空間の実現に成功していない理由を示す。	阪本　一郎	阪本　一郎
9	欧米の土地利用規制による生活空間の質確保	それぞれ異なる方法で土地利用規制を実施しているアメリカ、ドイツ、イギリスについて、規制方法を紹介し、良質な生活空間の実現方法としての性能を検討する。	同　上	同　上
10	私権の制限と社会の支持	土地利用規制は土地所有権の制限を意味するため、しばしば強い反対を生じ、有効な規制を実施できないことになる。いかにして社会の了解と支持を得て有効な規制を可能にするかを、イギリスやアメリカのケースをとりあげながら考察する。	同　上	同　上
11	都市基盤の構築	良質な生活空間を実現するためには開発の制限だけでなく、道路、公園などの社会基盤施設の建設が必要である。日本ではどのようにこの課題に取り組んできたかを概観し、基盤構築上の課題を述べる。	同　上	同　上
12	都市再開発－負の遺産の解消と社会変化への対応	貧困な都市基盤の故に生活空間として種々の問題を抱えた市街地、社会が変化する中で新しい要請に応えられない市街地、これらの地区の再開発について歴史的に概観し、そのあり方や実現方法について述べる。	同　上	同　上
13	開発の担い手と費用負担	良質の生活空間を実現するためにはこれに貢献する開発が必要となる。誰がそのような開発の担い手となるか、誰がその費用を負担するか、どのようにして開発を誘導するかといった点を検討する。	同　上	同　上
14	都心空間の再生	都市中心部から居住者が居なくなる空洞化現象、郊外のショッピングセンターとの競争に敗れ活力を失いつつある中心商業地、これらの問題を抱える都心部の再生をいかにして図るか、また何故再生が必要かを述べる。	同　上	同　上
15	生活空間のサステナビリティ	環境問題で注目されている持続可能性は、生活空間の長期的な維持を考える上でも重要な概念である。これまでに提案された生活空間を持続可能性の観点から検討し、未解決な点を考慮する。	同　上	同　上

＝ 環境アセスメント（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：原科　幸彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

持続可能な発展は世界の環境政策のキーワードであり、環境アセスメントはそのための基本的な手段である。計画などの人間行為の意思決定において透明な形で環境配慮を行うことがアセスメントの本質である。方法論的にはシステム分析が基礎であり、透明性を高める工夫が環境先進各国で行われているが、我が国はこの点で欧米に遅れている。米国よりも我が国に近い状況である先進国として欧州諸国の事例も多く紹介して、アセスメントのあり方について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	持続可能な発展	人間活動と環境（スイス）、東京とニューヨークの土地利用比較、環境問題の変遷、NEPA リオの地球サミット、持続可能な発展、環境基本法、環境と開発の対立を超えて調和へ、 環境共生都市（Freiburg）、環境共生型の住宅地開発 アセスメントは人間行為の意思決定への環境配慮の手続き	原科　幸彦（東京工業大学教授）	原科　幸彦（東京工業大学教授）
2	環境アセスメントとは何か	環境に配慮した人間行為の選択、判断形成の透明化、環境配慮の説明責任、情報公開と住民参加 政策分析としてのシステム分析、科学的・民主的手続き、 代替案の比較検討：Mission Bay、横浜市青葉区の道路作り アセスメントの手続き	同　上	同　上
3	コミュニケーションの方法	アセスは情報交流のツール、コミュニケーションが基本 アセス法による手続き、対象事業の選定、方法書、 準備書と評価書、文書による方法と会議による方法、 説明会（神奈川県の事例） 公聴会（川崎市の事例） 問題点と改善方法	同　上	同　上
4	検討範囲の絞り込み	検討範囲の絞り込み（スコーピング） 代替案の列挙、評価項目の選定、影響範囲の確定、 調査の方法、現状把握、 予測の方法、予測モデル、予測の前提、評価の方法	原科幸彦 村山　武彦（早稲田大学助教授）	原科幸彦 村山　武彦（早稲田大学助教授）
5	予測手法（1）自然関連項目	環境汚染：大気汚染、悪臭、水質、土壌汚染、地盤沈下、騒音・振動、パソコンの活用事例 自然環境：貴重な動植物の保護、生態系の変化	村山　武彦	村山　武彦
6	予測手法（2）社会関連項目	社会環境：景観の変化（予測システム）、街並みと自然景観、人と自然の触れ合い、身近な緑の保全、コミュニティ、文化財、歴史的環境、廃棄物 地球環境：温暖化効果ガス	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	環境影響の評価	項目別の評価、定性的評価と定量的評価、評価関数、評価結果の表示 解釈（総合評価）、相対評価、Dr. Therivelのコメント、重みづけ 総合評価の例、Jackson, Wyomingの下水処理場の評価例、誰の重みか、単一指標は必要か	原科　幸彦	原科　幸彦
8	日本の制度の歴史	我が国の制度成立の経緯、歴史と背景、環境汚染と自然保護 国の制度と自治体の制度 地方自治体の制度化、川崎市の条例アセス、東京都・神奈川県・等個別法等による制度化、 法制化の失敗と閣議アセス 環境影響評価法の成立、環境基本法、第20条：環境影響評価制度の推進	同　上	同　上
9	日本の現行制度	環境影響評価法の特徴 これまでの実績 最近の事例： 藤前干潟の埋め立て事業（アセス結果と事業計画の意思決定） 恵比寿ガーデンプレース（NGOの力とフォローアップ） アセス法の活用と問題点	同　上	同　上
10	欧米の アセス制度と事例	欧州でも事業アセスが中心、代替案の比較検討は行う、 欧州とアメリカの制度 日本との比較：計画との連動、住民参加、情報公開 アセスの具体事例 イギリスの事例：英仏海峡トンネル連絡鉄道 オランダの事例：アムステルダム近郊の住宅地開発 （Mr.Verheem）	同　上	同　上
11	積極的な住民参加	我が国は不十分な住民関与、住民参加には情報公開が不可欠 欧米に見る積極的な住民参加の事例 Mission Bay 開発のアセス事例 我が国における新しい動き 狛江市のごみ中間処理場建設計画	同　上	同　上
12	アセスメントと 紛争	アセスメントによる環境紛争の発生 紛争解決の方法、裁判よりも話し合いで、調停（mediation） 紛争解決の事例 Seattle の道路建設 Jackson, Wyoming の下水処理場建設	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	戦略的環境アセスメント	環境配慮した人間行動の管理、東京とロンドンの土地利用比較（空撮）、累積的影響の除去、成長管理、土地利用計画が必要 Strategic Environmental Assessment(SEA)、Dr. Therivel 世界の動向：Dr. Sadler、EUの動向 SEAの事例：イギリス、英仏海峡トンネル連絡鉄道 Prof. Banister 政策の例、オランダの廃棄物処理10ヶ年計画	原科　幸彦	原科　幸彦
14	環境計画とアセスメント	環境基本計画：京都の環境計画を事例に COP3のフォローアップ（京大・内藤正明教授） 歴史環境の保全と近代化、京都駅ビルと南禅寺の対比、路面電車の活用 環境と調和したZurichの交通システム 地域の総合計画が必要、計画への参加、早期段階での環境配慮	同　上	同　上
15	アセスメントの今後	環境との共生を目指して：万博アセスの教訓 地球環境問題への対応（Think Globally, Act Locally） 地球規模の視野で、日本の海外援助と環境配慮 世界はSEA的アプローチ 計画制度と環境配慮の運動：イギリスの例、Prof. Hallスイスの地域計画、Prof. Schmid 京都の賀茂川	同　上	同　上

＝ エネルギー工学と社会（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：牛山　泉（足利工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギー工学と現代社会の関わりをいろいろな視点から明らかにする。国内外のエネルギー事情や地球規模での環境問題を調べ、次に、エネルギー技術や環境問題の歴史をたどる。さらに、エネルギー技術と現代社会の現状を学んだ後、エネルギー工学と持続可能な社会の構築に向けて将来のあるべき姿を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	エネルギーと現代社会	現代社会の経済活動は化石燃料を中心とする大量のエネルギー消費により支えられているが、これに伴なう環境問題が顕在化している。これら経済、エネルギー、環境のトリレンマについて考察する。	牛山　泉（足利工業大学教授）	牛山　泉（足利工業大学教授）
2	世界のエネルギー事情	世界の一次エネルギー消費量とエネルギー資源の埋蔵量とを比較し、国際的なエネルギーの需要と供給の現状を明らかにすると共に、エネルギー資源がいつまでもつのかについて考察する。	同　上	同　上
3	日本のエネルギー事情	日本国内における近年のエネルギー需要と供給の動向を明らかにし、産業、民生、運輸の各部門のエネルギー消費やエネルギー転換部門の現況について調べる。また、経済成長とエネルギー消費についても考える。	同　上	同　上
4	地球環境問題とその解決策	地域規模での環境問題を分類し、地域環境問題とエネルギー消費の関係を調べる。また、温暖化や酸性雨の問題と二酸化炭素排出量の現状を明らかにすると共に、問題解決の対策を考える。	同　上	同　上
5	エネルギーの社会学	エネルギー問題と現代社会の関係を概観した上で、エネルギーと国際政治、エネルギーと環境との調和、エネルギーの安全保障、さらには、エントロピーと世界観などについても言及する。	同　上	同　上
6	エネルギー工学の技術史	エネルギー工学のうちで主に動力技術に焦点を絞り、水車や風車のような自然エネルギーの利用から、熱エネルギーから動力を取り出す蒸気機関や内燃機関、さらには電気エネルギーについても述べる。	同　上	同　上
7	エネルギー技術と環境問題の歴史	エネルギー資源とその利用技術の歴史を木材・木炭の時代から石炭への転換、さらには石油文明の時代へとたどり、これらに伴なう大気汚染などの環境問題についても明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	エネルギー技術と日本の産業社会	日本における産業、民生、運輸の各部門におけるエネルギー需要の変遷と現状について明らかにし、エネルギー供給の側からは、石油、石炭、ガス、電力の産業構造とその動向について調べる。	牛山　泉	牛山　泉
9	エネルギー交換の技術	現代社会の産業・経済活動を支えているエネルギー技術のうちで、エネルギー変換の工学について焦点を絞り、力学、熱、化学、電気、光・放射の各エネルギーの変換について概括する。	同　上	同　上
10	原子力発電システム	現代のエネルギーシステムの中で賛否両論のある原子力発電について、世界の原子力発電の現状、原子力発電のしくみと燃料サイクルについて学び、原子力利用の安全性と経済性について考える。	同　上	同　上
11	自然エネルギー利用技術	環境に優しいクリーンなエネルギー源である自然エネルギーの利用技術を、太陽光・太陽熱、海洋熱、地熱などの熱や光と、水力、風力、波力なでの液体エネルギー、さらにはバイオマスとに分けて概説する。	同　上	同　上
12	エネルギー評価	エネルギーの有効利用を考える上で、エネルギーの適正な評価が不可欠である。そこでエクセルギーという概念を導入して、資源と環境を再評価すると共に、エネルギーの利用効率を評価する。	同　上	同　上
13	省エネルギーとエネルギーパス	現代社会における省エネルギーの取り組みについて明らかにすると共に、エネルギーの消費構造を調べ、ソフトエネルギーパスの選択によるエネルギーの有効利用の可能性について考察する。	同　上	同　上
14	開発途上国とエネルギー問題	開発途上国における人口爆発とこれに伴なう食糧不足やエネルギー不足が深刻化している。持続可能な開発のための途上国援助をエネルギー及び環境問題の視点から提案する。	同　上	同　上
15	エネルギー工学と持続可能な社会	エネルギー問題と環境危機について再認識すると共に、環境と調和する将来の持続可能な社会のあり方を提案し、これに果すべきエネルギー工学の役割りや目標について考える。	同　上	同　上

＝ 材料工学と社会（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：東　千秋（放送大学助教授）〕

全体のねらい

環境保全は人間社会の最も緊急で重要な課題である。その環境破壊の根源は、物質文明にあり、それは科学・技術の弊害であるとの批判がある。しかし、21世紀の望ましい社会すなわち環境に調和し持続可能な資源循環型社会の創成とさらなる高度情報社会の構築および高度医療福祉に支えられる高齢社会の構築など、その実現は、社会の成立基盤である科学・技術の貢献なしには成し得ない。その科学・技術の3要素は情報、エネルギー、材料であるから、脱物質化をはかりながらも、材料の役割は本質的には欠かせない。この講義では、社会の成立基盤である科学・技術の要としての材料工学を社会との関わりから学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	I 技術の革新と材料・その光と影 1 社会の発展	科学・技術の革新は社会の発展のための鍵である。産業や社会の発展における技術革新の役割とその原動力である材料の革命をたどる。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
2	I 技術の革新と材料・その光と影2 限界に達した地球	科学・技術がもたらした環境の破壊と限界に達した地球を考察し、環境調和社会の創成の必要を知る。	同　上	同　上
3	II 環境に調和する社会の要件1 化学物質のリスク管理	環境保全は人間社会の最も重要な緊急課題となった。環境に調和し持続可能な資源循環型社会の創成のために、有害科学物質の情報と対策を取り上げ、環境への安全対策について考える。	同　上	同　上
4	II 環境に調和する社会の要件2 環境マネジメントと社会の動向	環境に調和する社会の創成のためには、エコデザインの発想による環境マネジメントが鍵となる。ここでは、その枠組みと仕組みを知り、社会の動向を見る。	同　上	同　上
5	II 環境に調和する社会の要件3 エコプロダクツの設計と評価	環境に調和する製品の設計と評価について、材料や製品の設計手法と評価法のライフサイクルアセスメント(LCA)の概念と手法を知る。	同　上	同　上
6	II 環境に調和する社会の要件4 LCAとその実際	LCAは実際にどのように行われるのか、NIRE-LCA Ver.3を用いて、いくつかの例を取り上げ検証する。	同　上	同　上
7	II 環境に調和する社会の要件5 エネルギーのクリーンな利用	エネルギーのクリーンな利用が環境保全のために急務である。太陽光発電や実用化が迫る燃料電池さらに送電によるエネルギー損失がゼロの超伝導材料の開発など、これらの現状と材料技術との関わりを知る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	II 環境に調和する社会の要件6 コンピュータの利用	コンピュータの利用は、実際には不可能なことを体験可能にし、また環境に余分な負荷を与える実験を低減できる。材料技術におけるコンピュータ・シミュレーションなどの利用を展望する。	東　千秋	東　千秋
9	III 高度情報社会と有機フォトニクス1 情報の処理	21世紀のさらなる高度情報社会の構築には、再生可能な資源である有機材料をもとにした光技術(フォトニクス)が大きな期待を集めている。ここでは、情報の処理に利用できる材料について解説する。	雀部　博之(千歳科学技術大学教授)	雀部　博之(千歳科学技術大学教授)
10	III 高度情報社会と有機フォトニクス2 情報の表示	フォトニクスによる情報の表示について、EL発光を取り上げ、その材料を主に解説する。	同　上	同　上
11	III 高度情報社会と有機フォトニクス3 情報の伝送	有機フォトニクスによる情報の伝送技術について、光ファイバー、光導波路を取り上げ、解説する。	同　上	同　上
12	IV 未来医療とバイオメディカル・エンジニアリング1 医療技術の進歩 artから科学技術へ	21世紀の先進社会における市民の高齢化に応えるべき未来医療とその基盤技術となるバイオエンジニアリングを取り上げる。まず、過去数十年の医療技術の進歩とその意義について概説し、医療が科学技術化したことについて考察する。	桜井　靖久(東京女子医科大学名誉教授)	桜井　靖久(東京女子医科大学名誉教授)
13	IV 未来医療とバイオメディカル・エンジニアリング2 ハイテク医療技術の現状 画像診断と画像監視下治療の進歩	ハイテク医療技術の現状について、人工臓器などを含めたバイオメディカルエンジニアリングの最先端を、検査、診断(情報)、治療、福祉工学を通じて、概説する。	同　上	同　上
14	IV 未来医療とバイオメディカル・エンジニアリング3 未来医療の展望	高齢社会、健康重視QOL(Quality of Life)時代に向けて、未来の医療とヘルスケア・パークを含むヘルスケアのあり方を探る。	同　上	同　上
15	V 材料工学のこれから 材料工学の夢を展望する	この講義の総括として、最先端科学・技術の要の材料技術はどうあるべきか、材料合成ではグリーンケミストリーを取り上げる。また、2000年度のノーベル化学賞が材料科学の分野で受賞があったことも踏まえて、これからの材料工学の夢を展望する。	雀部　博之 東　千秋	雀部　博之 東　千秋

＝ バイオテクノロジー（'０１）＝（ＴＶ）

－その社会へのインパクト－

〔主任講師：軽部　征夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、急速に進展するバイオテクノロジーに注目し、これの基盤となっている技術、この技術の農林水産、医療、工業、資源、エネルギー、環境などの分野への応用の最新の情報を提供し、バイオテクノロジーの社会への影響、これのもつ倫理的問題などについて講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	遺伝のしくみ	顔や体つきが親に似ていることから遺伝を知る人が多い。長い間謎に包まれてきた遺伝に初めて科学的な説明を加えたのはメンデルである。20世紀になると多くの研究者によって少しづつ遺伝のしくみが解き明かされてきた。	軽部　征夫（東京大学教授）	軽部　征夫（東京大学教授）
2	ＤＮＡと遺伝子	遺伝の本質を担っているのはＤＮＡであることがわかり、これの構造や化学成分が明らかにされた。また、ＤＮＡの暗号によってタンパク質が作られる機構が解明された。また、高等生物ではＤＮＡが全て遺伝子ではないこともわかった。	同　上	同　上
3	組換えＤＮＡ技術	ＤＮＡを切断したり、結合させる酵素が発見され、特定のＤＮＡを細胞に運ぶベクターと呼ばれる小さなＤＮＡも開発された。これにより、特定のＤＮＡを切り出してベクターにつなぎ込み、細胞に導入することができるようになった。	同　上	同　上
4	細胞操作	細胞と細胞を融合させて雑種細胞を作る細胞融合技術が開発された。また、細胞に特定の遺伝子を導入する技術が開発されている。さらに、生殖細胞を操作する技術によって胚性幹細胞（ＥＳ細胞）や始原生殖細胞由来の胚性生殖細胞（ＥＧ細胞）が作られた。	同　上	同　上
5	組換えＤＮＡ技術を応用した作物	植物に組換えＤＮＡ技術を応用すると害虫耐性遺伝子や除草剤耐性遺伝子を導入することができる。これらの作物は農業生産の効率を上げるためには極めて重要であるが、安全性、生態系への影響などを考えなければならない。	同　上	同　上
6	クローン・キメラ動物	卵分割による一卵性双生牛の形成はすでに行われていたが、イギリスでは羊の体細胞からクローン羊を形成することに成功した。また、異なった種の胚を融合させて仮親の子宮内に移植してキメラ動物を作ることもできる。	同　上	同　上
7	海洋生物の応用	魚類の性操作によってメスあるいはオスのみの生産が可能になっている。水産資源は重要なタンパク源であり、バイオテクノロジーの応用が期待されている。また、海洋生物から医薬品や工業原料、エネルギー物質を取る研究も行われている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	バイオ医薬	組換えＤＮＡ技術を巧みに利用すると、ヒトホルモンや免疫関連物質などの医薬品を微生物や細胞を利用して大量に生産することが可能である。特にヒトゲノムの解析が進んでおり、ゲノム情報から創薬する研究開発が盛んになると予想される。	軽部　征夫	軽部　征夫
9	高度先進医療	ヒトゲノムの解析が進み、遺伝病の原因となる遺伝子が多数発見されている。遺伝病の一部は遺伝子治療によって治すことが可能である。また、ガンなどの難治性疾患の治療にも遺伝子治療が応用されている。さらに、診断にゲノム情報が大いに活用されるようになる。	同　上	同　上
10	医用工学	細胞の組織培養技術によって皮ふや耳などを再生することができる。また、ＥＳ細胞を応用すると臓器の再生も可能になると思われる。一方、生体適合性材料を用いる人工臓器の研究が進んでいる。	同　上	同　上
11	バイオエレクトロニクス	生物の機能を巧みに応用したバイオセンサーが注目されている。バイオセンサーは酵素、微生物、抗体などの生体分子や細胞を分子識別素子として用いており、医療や環境計測に応用されている。また、脳の機能を模倣したニューロコンピューターの研究もある。	同　上	同　上
12	資源・エネルギーの生産	銅の湿式精錬に微生物が利用されている。これは、バクテリアリーチングと呼ばれている。銅以外にウラニウムの精錬も試みられている。また、再生産可能なバイオマス（生物資源）を利用したアルコール、メタンなどのエネルギー資源の生産も行われている。	同　上	同　上
13	環境の保全	微生物を利用して有機物を分解して水を浄化する方法がよく知られている。微生物の機能を巧みに利用して環境負荷物質の原油類、有機塩素化合物などを分解する技術の開発が進んでいる。また、バイオセンサーによる環境のモニタリングも行われている。	同　上	同　上
14	生命倫理	クローン技術の開発によってクローン人間の問題がクローズアップされた。また、ＥＳ細胞などによる臓器再生、移植の問題、生殖補助技術など生命倫理に関わる問題が多い。これらの問題について十分な議論が求められている。	同　上	同　上
15	未来のバイオテクノロジー	21世紀はバイオテクノロジーの時代だと言われているが、この技術によって生活の質がどのように変わるであろうか。特に医療分野などにおいては大きな変化が起こるであろう。バイオテクノロジーの可能性について解説する。	同　上	同　上

＝情報工学と社会（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：赤木　昭夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

ユーザーのための情報工学－これからの情報通信のあり方について的確な視点と見識を持てるようにするため、必須の基本知識を養うことをめざす。各ハードウエアについては概念的説明にとどめる。どのように情報（データ）が伝達・処理・記憶され、またそのためソフトウエアがどう働くかの理解に主眼を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アナログ対デジタル	いま光ファイバやコンピュータをめぐるのはデジタル・データである。それにたいし旧来の電話では、アナログ・データをやりとりした。アナログとデジタルの差異と得失を知り、なぜ今デジタル時代を迎えつつあるかを理解する。学習方法についても案内する。	赤木　昭夫（放送大学教授）	赤木　昭夫（放送大学教授）
2	電子記録媒体	磁気によるもの、プラスティック円盤の凹みによるもの、半導体によるものがある。記憶されるデータの形、また容量や読み出し速度などの性能をもとに、電子記録媒体の過去と未来を見る。データの記憶や伝送の効率を飛躍的に高める圧縮と伸長の原理にもふれる。	同　上	同　上
3	プロトコル－通信の規約－	デジタル通信では、コンピュータ処理に適したデータの書き方や送り方、さらには受けられるサービスの種類などを規則（プロトコル）として定める。それにしたがって文字・音・画像を送受する。これについてインターネットのプロトコルを例に解説する。	同　上	同　上
4	ネットワークの構成	従来の電話では、通信線を短くするため、交換局をはさみ階層的なネットワークをつくってきた。それにたいし携帯電話やインターネットのネットワークはどうなっているかを考察する。それらを通じて、目的と技術水準と経済から見て最適な構成について論ずる。	同　上	同　上
5	ネットワークの進化	目的と技術水準と経済に応じて、さまざまな通信ネットワークが併存し、そして新旧の交代が生じ、全体として進化していく。そのプロセスを明らかにし、ネットワークの育成策、情報弱者をつくらぬための施策など、あるべき通信政策を立てるための視点を探る。	同　上	同　上
6	インターフェース：その１	どんな道具や装置でも、使いやすいもの、使いにくいものがある。コンピュータは知的な仕事をする装置であるだけに、使いやすくするためのインターフェース（人間とコンピュータとの接面）が重要である。この回では道具一般の使い勝手を中心に検討する。	安村　通晃（慶應義塾大学教授）	安村　通晃（慶應義塾大学教授）
7	インターフェース：その２	この回では、入力装置－コンピューター出力装置のループを通じて、いかに使い勝手を高めていくかを、とくに出力の表示や命令の与え方などを中心に見ていく。そのためのソフトウエアをつくる原理として、対応付け・可視化・一貫性・直接操作が挙げられる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	マルチメディア	双方向のマルチメディアの実現には、コンピュータ、とくにソフトウエアとして、どんな機能が要求されるか。テキスト・音声・画像のデータの形式、それらのデータの圧縮と伸長、画像と音がずれないようにする同期など、マルチメディア技術の進歩をたどる。	安村　通晃	安村　通晃
9	オペレーティングシステム	コンピュータの処理と、その結果の配置などを統括するソフトウエア、オペレーティングシステム（ＯＳ）の骨格をつかむ。とくにファイル管理、プロセス管理（平行処理）、マルチメディアのためのＯＳとして必要なカーネル、資源の確保と解放を解説する。	同　上	同　上
10	ＣＡＤとＣＡＭ：その１	機械製作メーカーにおける実例をもとに、コンピュータによる設計（ＣＡＤ）と、コンピュータによる加工（ＣＡＭ）におけるデータの処理と流れを知る。この回では、コンピュータで図面を描く方法、それをもとに設計の適否を確かめるシミュレーションを扱う。	槌屋　治紀（（株）システム技術研究所所長）	槌屋　治紀（（株）システム技術研究所所長）
11	ＣＡＤとＣＡＭ：その２	設計が固まると、そのデータを設計室と工場現場を結ぶネットワーク（ＬＡＮ）を通じて数値制御工作機械へ送り、自動的に製品をつくる。どのようにしてコンピュータ・データによって工作機械が制御されるか、併せてシステム設計の基本的心得についても学ぶ。	同　上	同　上
12	ソフトウエア産業の課題	通信やコンピュータ処理では、機能の点でもコストの点でも、ソフトウエアの比重が高まる一方である。ところが、規模の大きなソフトウエアとなると、きわめて複雑になるため、欠陥のないものを納期通りに仕上げるのがむずかしい。その解決策はあるのか。	赤木　昭夫	赤木　昭夫
13	データの保護	通信ネットワークやコンピュータの中のデータが盗まれるようでは、安心できない。それを防ぐための工学的な対策として、ファイアウオール、暗号、パスワードなどについて解説する。印判や署名に代わる電子認証や電子マネーも暗号の応用にほかならない。	同　上	同　上
14	システムの信頼性	全ての社会活動が、コンピュータ・ネットワークへの依存の度合いを高める一方である。コンピュータ・ネットワークの故障による機能麻痺をどうやって防ぐかについては、社会全体として取り組まねばならない。情報システムの事故例を分析し対策を提案する。	同　上	同　上
15	経済からの評価	シリーズのまとめとして、日米における情報通信の経済への寄与を評価する。新しいビジネス・チャンスとそれにともなう雇用の創出と、社会全体の生産性向上の二つの面から検討する。前者について著しいことは明らかだが、後者については見解が分かれる。	同　上	同　上

＝ 電子技術と社会（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：後藤　尚久（拓殖大学教授）〕

全体のねらい

18世紀末の産業革命ではエネルギーと交通が飛躍的に発展したが、現在の情報と通信に関する産業の発展はこれに対応しているという。本講義では、情報と通信の発展の歴史にはじまり、現在この産業を支えている電子技術のポイントを解説するとともに、電子技術の発展が社会に当てるインパクトを展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報と通信のビックバン	エネルギーと交通の手段が飛躍的に発展した18世紀末の産業革命は、情報と通信が急速に発展している現在に似ている。エネルギーが情報に、交通が通信に対応するため、今後、情報通信がどのように発展するかを、産業革命の結果から予測する。	後藤　尚久（拓殖大学教授）	後藤　尚久（拓殖大学教授）
2	電気通信の基礎	電気通信の基礎と特長を簡単に解説する。線路を用いたモールス通信を例にして、光速で情報が伝送できることを示す。通信容量を増やすための周波数多重通信の発明、さらに、ＦＤＭＡ、ＴＤＭＡ、ＣＤＭＡなどの通信方式をとり上げる。	同　上	同　上
3	電波の有効利用	電波を利用する無線通信や放送では、電波を放射する範囲が重要である。そこで、衛星放送、ＶＨＦテレビ放送、携帯電話、ＰＨＳなどのシステムで、電波を放射する範囲（セル）の大きさと、電波の有効利用の関係を考察する。	同　上	同　上
4	電磁波と周波数	電気信号の周波数は、有線通信、無線通信ともに重要な役割を果たしている。無線通信では、人類共有の財産といわれる周波数の有効利用が重要である。電磁波と周波数の関係を解説し、最近の「電磁波は危ない」という風潮にコメントする。	同　上	同　上
5	電話の歴史	電話は、現在最も広く利用されている情報通信技術であるが、その仕組み、技術的な進展の経緯と将来動向について説明する。さらに、二人の人間が遠隔地間で会話するという電話の特性から発生する技術的問題について論じる。また、この技術が社会に受け入れられるまでにどのような議論があったかについても言及したい。	伊澤　達夫（NTTエレクトロニクス㈱代表取締役社長）	伊澤　達夫（NTTエレクトロニクス㈱代表取締役社長）
6	光ファイバー通信	光ファイバー通信技術は、現在最も多くの情報を送受信できる技術である。その技術の基本的な原理、能力の限界について述べる。さらに、この通信技術に使われる主要部品である光ファイバーや半導体レーザなどについて概説する。また携帯電話のような無線通信技術と比較してこの技術がどのような位置づけにあるのかについても言及する。	同　上	同　上
7	第2世代の光ファイバー通信	光ファイバーの原理は19世紀後半に発見されたが、どのような経緯を経て通信に使われるに至ったかについて背景にある関連技術も含め概説する。さらに、講師らが開発した光ファイバーの作り方について説明する。また、この技術から派生した光のプリント配線板とも言える光回路部品についても説明したい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	マルチメディア社会の将来像	無限と言って良い程大きな通信能力を持つ光ファイバ通信ネットワークが発展すると、将来の情報通信はどのように変貌する可能性があるか大胆に予測してみたい。また、そのために必要な技術的背景の現状について説明する。さらにその進展が、他の技術にどのような影響を与えるかについても言及したい。	伊澤　達夫	伊澤　達夫
9	トランジスタの誕生 と シリコン技術の進展	新しい原理に基づく進行波管等を創出し、真空管エレクトロニクスがまさに絶頂期を迎える時に、トランジスタは誕生し、素材をゲルマニウムからシリコンに変えて、今世紀後半のエレクトロニクス大発展の主役となる。	大見　忠弘（東北大学教授）	大見　忠弘（東北大学教授）
10	電子回路から超ＬＳＩへ	正負の電荷を持つホール、電子を自在に発生する半導体を用いたトランジスタは、夢のスイッチといわれるＣＭＯＳ回路を誕生させ、直結型回路構成超ＬＳＩにより、今日のコンピュータ時代の隆盛を築いた。	同　上	同　上
11	超ＬＳＩの生産方式	1cm²程度のチップ内に、7～10億個程度のトランジスタ等を集積化する超ＬＳＩは、ゴミや水分、分子状、原子状・不純物にきわめて敏感であり、エントロピーゼロすなわち、汚染やゆらぎ、変動がない生産方式を要求する。	同　上	同　上
12	知的機能を備えたシステムへ	今のコンピュータは機能向上とともに使用者に大量の訓練を要求する。人に優しい誰にでも使える21世紀型コンピュータワールドを目指して、知的機能を備えた対話型システムへの挑戦が今世界中で展開されている。	同　上	同　上
13	情報の記録の過去と現在	情報の記録再生の意義と歴史から各極メモリの形態までを概説する。特に光メモリについてはＭＯなどの具体例についても述べ、ＤＶＤにも触れる。これらのメモリの出現による社会の変革について指摘する。また、大きな通信情報システムのなかで大規模メモリが使われている例、現状などについても述べる。	大津　元一（東京工業大学教授）	大津　元一（東京工業大学教授）
14	光によるメモリ技術	2010年の社会が要求される情報の記録再生について、最近調査された技術予測を紹介する。この内容をもとに、まず、近未来型のメモリ技術、特に光メモリ技術について述べる。ホログラフィックメモリ、記録再生用の青色レーザの開発などについて触れた後、ＳＩＬ技術について述べる。	同　上	同　上
15	情報の記録の将来	前回の内容に呼応し、将来のメモリ技術、特に光メモリ技術について述べる。そのうち急展開が見られている近接場光技術について、原理と実際を述べる。この技術はさらに計測、加工に、さらには原子の操作加工へと発展することを指摘し、21世紀の基盤技術となり得る可能性を論じる。	同　上	同　上

＝ 情報工学（'９９）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 都 倉　信 樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）〕

全体のねらい

情報工学で扱う事項は非常に広く深くなっている。この講義では、その入門として、この分野の基礎的な概念と基本的な知識とともに、この分野の考え方を伝えることを目指す。(http://tokweb.ics.es.osaka-u.ac.jp/)

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コンピュータ	情報工学の対象分野の全体像の簡単な概観とこの講義の全体構想にふれる。応用事例としてバーコードを取り上げる。	都倉　信樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）	都倉　信樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）
2	情　　報	情報とは何か、データ、コード化などの概念を、身の回りの情報についてみていく。情報量の比較、アナログとディジタル。	同　上	同　上
3	データの表現	データの表現法について考える。各種の符号を紹介し、２進法についてやや詳しく扱う。	同　上	同　上
4	回　路　素　子	コンピュータは電気で動くこと、その構成要素を簡単にみていく。	同　上	同　上
5	組合せ回路	2値関数、ゲート、2値関数の簡単な性質、回路の解析法、標準形、関数の実現法、簡単化、回路例などを通じ、原理的にいかなる2値関数もゲート回路で実現できることを示す。	同　上	同　上
6	データの加工	論理演算、シフト、2進数の加算、減算の方法と、それらの機能を果たすＡＬＵについて、説明する。	同　上	同　上
7	記　　憶	記憶装置について、ＩＣメモリ、磁気記録、フリップフロップなどを説明し、レジスタと順序回路の話に至る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ＣＰＵの構成(1)	計算の手順と、コンピュータの命令について導入的な説明を行う。	都倉　信樹	都倉　信樹
9	ＣＰＵの構成(2)	アドレシングモードの概念を説明する。ＣＰＵの構成と命令について説明する。	同　上	同　上
10	コンピュータの仕組み	ＣＰＵの制御の方法を考える。外部バスとのデータのやりとり、入出力と割り込みについて述べる。	同　上	同　上
11	割り込み	割り込みとその処理、内部割り込みについて説明する。	同　上	同　上
12	オペレーティングシステム	ＯＳの役割、コンピュータの使用形態、入出力管理、ファイル管理、プロセス管理等について、簡単な説明を行う。	同　上	同　上
13	コンピュータと通信	通信とはどういうことか、通信の実際、そして、特にデータ通信について、考える。	同　上	同　上
14	ネットワーク	ネットワークのさまざま、ネットワークプロトコルの下位置から順に説明する。特に、多重アクセス方式についてややくわしく説明する。	同　上	同　上
15	情報化社会	情報化社会の状況と課題について、考える。	同　上	同　上

＝ プログラミング入門（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：都倉　信樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）〕

全体のねらい

プログラムを作ることは、苦しさとできあがったときの感激の両方を味わうことである。苦しさをできるだけ軽減し、よりよいプログラミングをするための方向を見出すことを目指す。
（http://tokweb.ics.es.osaka-u.ac.jp/）

コラム　齊藤明紀（大阪大学大学院基礎工学研究科講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プログラミング	1.1　なぜプログラミングか 1.2　プログラムとプログラミング 1.3　ソフトウェア開発	都倉　信樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）	都倉　信樹（鳥取環境大学副学長・大阪大学名誉教授）
2	プログラムの構成要素	2.1　いくつかのプログラムの形 2.2　処理の記述 2.3　プログラムの要素 2.4　処理手順の記述	同　上	同　上
3	プログラム言語	3.1　言語の概観 3.2　言語の構成要素 3.3　文 3.4　データ型 3.5　その他	同　上	同　上
4	構文の記述	4.1　拡張ＢＮＦと文脈自由文法 4.2　構文図 4.3　具体構文と抽象構文 4.4　正規表現	同　上	同　上
5	探索　1	5.1　配列 5.2　データの性質を知る 5.3　キーを持つデータの探索	同　上	同　上
6	探索　2 文字列探索	6.1　文字列型、テキスト 6.2　文字列探索 6.3　Knuth-Morris-Prattの方法	同　上	同　上
7	ソート　1	7.1　キーの順序 7.2　ソート法　1 7.3　アルゴリズムと評価	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	再帰	8.1 変わった計算 8.2 手続き・関数	都倉 信樹	都倉 信樹
9	ソート 2	9.1 マージソート 9.2 クイックソート	同上	同上
10	木	10.1 集合、表 10.2 抽象データ型	同上	同上
11	式	11.1 電卓 11.2 変わった式 11.3 式の計算	同上	同上
12	アセンブラ	12.1 アセンブラの仕様 12.2 アセンブラの設計	同上	同上
13	コンピュータのシミュレータ	13.1 COMET 13.2 シミュレータの設計	同上	同上
14	時間の扱い	14.1 時間を知る 14.2 マウス 14.3 表示 14.4 シミュレータ 14.5 実時間システム	同上	同上
15	さらに、学ぶために	15.1 補足 15.2 さらに学ぶために 15.3 参考書	同上	同上

＝ 産業人間工学（ '００）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 池 田　良 夫（愛知工業大学教授）〕

全体のねらい

現代産業社会で生産性の向上は必須であるが、そのために人々の労働安全、衛生、福利が犠牲となってはならない。人間工学は、所与の環境条件が人間の機能に整合するように環境の整備または設計に関する学際的技術体系である。本講座は働く人々の活動とその場に焦点を当て、人間工学の知見と応用を講述し、生産性向上にも役立つことを紹介する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	産業システムの構成と講座概要	産業システムは人間と労働をめぐる広義の環境とで構成される。環境は狭義の環境条件と機械設備と仕事・手続きなどで構成される。このシステムは効果的・効率的で、人にやさしいことが望ましい。人間と環境とを整合する概念を概説し、講座の概要を紹介する。	池田　良夫（愛知工業大学教授）	池田　良夫（愛知工業大学教授）
2	ディスプレイ機能と情報処理系	人間と環境との相互作用で、ディスプレイは環境側から人間の感覚器官に受容される刺激や情報をさし、狭義には情報を提供する機器・表示器をさす。表示機器と人間の感覚・知覚・認知機能の特性とその能力とに適合したディスプレイの設計について概説する。	同　上	同　上
3	ヒューマンエラーとその低減・防止方策	人間はエラー（ミス）をする動物である。それが引き金となり、大事故を招くこともある。エラーの根元はヒューマン・ディスプレイ・インターフェイスの不適合にある。エラーとは何か、どのような種類のものがあり、それを未然に防ぐ対策を検討する。	小松原明哲（金沢工業大学教授）	小松原明哲（金沢工業大学教授）
4	コントロール機能と制御系	コントロールは人間側からの働きかけに対する環境側の受容部分で、狭義には機械器具の制御操作系をさす。そこでは、人間の制御・運動機能と狭義な作業姿勢とに配慮した使いやすいコントロールへの設計がある。	池田　良夫	池田　良夫
5	職場・職務の設計と設備保全	科学的管理法の原理と生産管理システムの概要を説明し、ディスプレイとコントロールと人間機能と周辺環境とを効率的・効果的に配置することを述べる。また、設備性能維持のために保全が不可欠なので、設備保全への諸問題にもふれる。	同　上	同　上
6	職場環境の改善とＩＬＯトレーニングマニュアル	学校給食調理現場や中小企業での取り組み経験をもとに、職場環境改善の課題領域と改善プロセスについて解説する。職場環境改善にとって有効なＩＬＯのトレーニングマニュアルやアクション型チェックリストなどをとりあげて、職場での応用方法について検討する。	酒井　一博（(財)労働科学研究所所長）	酒井　一博（(財)労働科学研究所所長）
7	生産性向上のための作業改善と産業人間工学	企業間の競争は厳しい。中小企業の多い総菜製造業を例に、生産性向上のための作業改善について、産業人間工学的視点から解説する。特に、作業能率の向上をめざすあまり、作業者の安全と健康の視点が見落とされがちであるが、その視点を含め、コストも考慮したい。	岸田　孝弥（高崎経済大学教授）	岸田　孝弥（高崎経済大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	高齢化労働と人間工学的対策	中高年労働者（年令45～65歳）を対象とした職場管理のすすめ方を中心として講義する。あわせて、労働と密接な関連性を有する生体諸機能の加齢変化を概説し、これらの変化を考慮した産業社会の人間工学的対策のあり方についても概説する。	神代　雅晴（産業医科大学教授）	神代　雅晴（産業医科大学教授）
9	労働時間・勤務制と人間工学	私たちが産業界で働く上で労働時間や勤務制の問題は最も基本的な事柄のひとつである。過大な労働時間や交替勤務による生理的・心理的な影響をとりあげながら、適正な働き方について考える。	酒井　一博	酒井　一博
10	熟練技能と人間工学	自動化が進む製造業においても、機械の調整、製品の試作などに熟練工がその腕を振るっている。また、伝統工芸等は、職人の技に支えられている。産業を支える熟練の技を紹介し、その人間工学的課題としての技能継承や、ＣＡＤなどによる技能作業支援について検討する。	小松原明哲	小松原明哲
11	労働とストレス	ストレッサーとストレスとの関係について生理学的な知見から概説し、労働の局面に限定して労働負担＝労働ストレスの観点から職場でのストレス現象を取り上げる。労働ストレスの発現メカニズムとその対処法を概説し、ＩＳＯ／ＪＩＳ関連用語の定義を解説する。	神代　雅晴	神代　雅晴
12	製品開発の人間工学	製品利用者に「安全」で「使いやすい」モノ作りの研究も重要な課題である。「対話型システムの設計原理」や「機械・安全」などの国際規格も出来つつあり、使いやすさを保障する社会的要請がある。事例を通じて、製品開発への人間工学の適用を検討する。	小松原明哲	小松原明哲
13	ＰＬ（製造物責任と産業人間工学	ＰＬ法が成立し、実施され、ＰＬという言葉が定着しつつある。しかし、各種の製品を作る企業側の対応と消費者の受け取り方には、まだミスマッチの場面が多い。使用者の不注意という言葉で片づけられているものの中に、トラブルの本質が隠されているようである。	岸田　孝弥	岸田　孝弥
14	緊急時の人間行動と産業人間工学	人間はいろいろな場所で働いている。今まで製造業の現場での安全については多くの研究がなされてきた。今回取りあげるサービス産業や鉄道業には、顧客という生産現場では表されない要因があり、突然の事故や災害にどのように対応すればよいかを考える。	同　上	同　上
15	人間工学の他産業への応用	今まで、製造業を主体的な話題としてきたが、人間工学の体系は他の産業におけるヒューマン・マシン・システムにも適用できることを概説し、最後に労働安全衛生のマネジメント（ＩＳＯ１６０００）の側面にふれて、本講座を総括する。	池田　良夫	池田　良夫

＝ 設計学（'００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉川 弘之（独立行政法人 産業技術総合研究所理事長・元放送大学長）〕
〔主任講師：冨山 哲男（　東　京　大　学　教　授　）〕

全体のねらい
設計とは工業製品や建築物だけでなく、人間に備わる普遍的な能力である。現代文明はこの設計の営みの結果、築きあげられたといっても過言ではない。この設計を理解するための学問が設計学であり、実例を通じて設計の本質に迫ることが狙いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	設計とは	いろいろな工業製品だけでなく、設計は人間に備わる普遍的な能力であり、日々の行動においても設計は重要な役割を果たしている。実際の設計のさまざまの例を通じて、設計行為の役割を理解する。	冨山 哲男（東京大学教授）	吉川 弘之（独立行政法人 産業技術総合研究所理事長・元 放送大学長） 冨山 哲男（東京大学教授）
2	人口物設計の歴史	人工物の設計の歴史は、設計が人間の創造行為である以上、設計者の意図を反映してきた。また人工物の発展してきた歴史の中で、突然変異的な発明であっても、時代背景や当時の技術を色濃く反映していることを論じる。	同上	同上
3	人工物の進化	設計の進化を歴史的な発展過程で考察すると、技術的な進化、社会的進化、設計技術そのものの進化の3つの軸を反映してきたことが分かる。また、成功例だけでなく失敗例をも理解することが重要である。	同上	冨山 哲男
4	製品ライフサイクル	工業製品のコンセプトの誕生から実際に設計・生産され、使用され、最後に廃棄、リサイクルされる一生のことを製品ライフサイクルという。自動車を例にして、ライフサイクルの中での設計の果たす役割を理解する。	同上	同上
5	工業製品の設計過程	工業製品のライフサイクルのうち、設計過程をさらに細かく理解する。どのような製品であっても、設計過程は共通することが多い。また、コンカレントエンジニアリングや計算機の利用など、実際の設計現場で取り入れられている技術を理解する。	同上	同上
6	設計とモデル	設計は「要求から仕様へ」の、属性、挙動、機能に関する情報が次第に詳細化されていく過程である。これらの情報を表現する方法は「モデル」と呼ばれ、設計に関わる情報を作成・伝達するためには欠かせない。	同上	吉川 弘之
7	設計図面	設計に関する情報の伝達手段として有効な図面について、JIS製図規格をもとに解説する。また、簡単な機械要素を例に、製図法と加工法との関係を講義する。最後に計算機によるCAD製図について紹介する。	同上	冨山 哲男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	いろいろな設計	設計の様相を紹介する。設計段階（概念設計、基本設計、詳細設計など）、設計スタイル（発明、新規設計、再設計）などの違いを説明する。設計は最適性、信頼性、安全性が重要であり、常にコストとのトレードオフであることを論じる。	冨山　哲男	冨山　哲男
9	設計学	設計学とは設計を理解することを目的とした学問であるが、対象が人間の行為であるだけに、他の工学とは少し方法論が異なる。まず、設計を実験的に扱う実験設計学を紹介し、設計知識は集合演算的な操作が行われていることを述べる。	同　上	同　上
10	一般設計学	一般設計学は、公理論的集合論に基づく設計の理論である。まず、人間が持つ設計知識に関する公理を導入すると、設計知識を位相空間として集合論的に扱うことができる。また、公理から設計に関する定理を導出することができる。	同　上	吉川　弘之
11	設計における推論	推論には基本的に、演繹、帰納、アブダクションの3種類があると言われている。その中でも設計では、C.S.Peirceが提唱したアブダクションが重要な役割を果たしている。さらに、アナリシスとシンセシスについて述べる。	同　上	同　上
12	設計支援システム（1）	CAD（Computer Aided Design）は現代の工業では欠かせない設計支援技術である。計算機上に幾何形状を表現するための技術として、曲線・曲面の方程式、データ構造などについて述べ、幾何モデル・プロダクトモデルなどの技術を紹介する。	同　上	冨山　哲男
13	設計支援システム（2）	CADで作成した幾何形状は、その後のプロセスで利用される。その例としてCAE（Computer Aided Engineering）、CAM（Computer Aided Manufacturing）、CIM（Computer Integrated Manufacturing）などのシステムについて紹介する。	同　上	同　上
14	設計の新しい役割	日本経済の戦後の発展において、設計技術がどのような役割を果たし貢献してきたのかについて講義する。そして、特に製造者責任、地球環境問題などを中心に、設計の今後の課題について述べる。	同　上	同　上
15	まとめ	本講義のまとめを行う。設計学とは、産業界で実践されている設計活動と、設計の結果としての人工物に関する理解を決めるための学問である。また、計算機による高度な設計支援を実現するための基礎的な学問でもある。	同　上	吉川　弘之 冨山　哲男

＝ 21世紀への技術発展（’９９）＝（R）

〔主任講師：森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

21世紀に技術はいかに発展するか、社会、生活、産業をどのように変えていくのかを、総合的、体系的に展望する。まず20世紀の技術は何であったかを明らかにして、21世紀の新しい発展方向を示し、各分野について発展の可能性を述べ、それがいかに実現するか、21世紀はいかなる時代になるかを洞察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	技術は変わる	20世紀後半に、エネルギー・物質・情報の技術の基本三要素が出揃って、爆発的な技術発展が生じた。したがって、技術はある意味で成熟に達した。情報技術は急速に進むか、応用が広がるか。これからは「社会」に技術を向ける時であり、21世紀の技術は変わる。	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
2	自然を知り、地球環境を守る	技術は、「社会」「人間」「自然」の複雑系に向かうが、まず「知る」ことがきわめて重要になる。地球、大気、海洋などをいかに「知る」ことができるか、地震予知はできるのか、地球温暖化は正しく把握できるのかなど展望する。	同　上	同　上
3	環境保全とエネルギー	地球温暖化、酸性雨などの地球環境問題は主として化石燃料消費のエネルギー問題である。核融合は期待できるのか、自然エネルギーはいかに伸びるか、新しい発電システム、コジェネレーションはいかに発展するかを展望する。	同　上	同　上
4	廃棄物のリサイクルへ	静脈産業としての廃棄物処理は、多様に発展し始めた。都市ゴミ処理は新しい方向に進んでおり、プラスチックや廃家電製品など難しかったリサイクルも進み始めた。理想的なゼロ・エミッションにいかに近づきうるのかを展望する。	同　上	同　上
5	都市を保つ	都市の新技術としては、大深度地下利用や超々高層ビルなどがあるが、現実には、都市が抱えるさまざまな問題を解決していくことが求められている。防災、美観・アメニティ向上、住まいの向上などが大きな課題であり、そうした技術がいかに発展するか。	同　上	同　上
6	都市内交通の改善へ	ＳＳＴ，リニアエキスプレスなど高速化のシステムは難しい。より重要な技術は、都市内交通であり、とくに自動車がいかに変わるかに最大の関心が集まる。無公害自動車にいかに進むか、事故、渋滞問題を緩和する道路システムはいかに整備されていくのか。	同　上	同　上
7	人間とバイオテクノロジー	人間を「知る」のは医学によって進められてきたが、遺伝子の解明によって、一段と進み始めた。しかし、なお「知る」べき課題はきわめて多く、いかに進んでいくか。また、農業や工業へのバイオテクノロジーの応用はいかに進むのかを展望する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	医療と福祉の充実へ	医療は、遺伝子治療などにより新たな方向に進み始めている。人間を「知る」ことの寄与も多い。診断機器はさらに進んでいく。また、いよいよ高齢化社会に入り、福祉はいっそう重要になる。それらの技術はいかに進展していくのかを展望する。	森谷正規	森谷正規
9	情報技術は大きく進むが	情報技術は大きく進むが、応用がいかに開けていくのかが、現実の技術発展を左右することになる。まず、その急速に進む技術を、半導体、光ディスクメモリ、通信ネットワーク、コンピュータについて展望する。技術としてはギガを越え、テラに進む可能性がある。	同上	同上
10	家庭の情報化は大きく進むのか	これまで進んだのは一次の情報化であり、これから高次の情報化に進むのだが、それは容易ではない。目的情報、手段情報に分けてネットワーク、パッケージ、放送のそれぞれにおいて、インタラクティブで働きかけを要する高度の情報化がいかに進むかを展望する。	同上	同上
11	産業、社会の情報化はいかに進むか	産業も高度の情報化に進むが、その核となるパソコンはいかに変わるか。また、産業は社会と情報化において深く結びつくが、その一つがＥＣ（エレクトロニック・コマース）であり、一つの画像の駆使であり、それらがいかに進むかを展望する。	同上	同上
12	進めるべき医療と教育の情報化	教育の情報化は遅れているが、カギはコンテンツにあり、その充実を目指すべき時だ。医療にも遠隔診断、電子カルテなどなすべきことは多い。情報化のまとめとして、農業社会、工業社会に対する情報社会の将来像を深く考えてみる。	同上	同上
13	産業はどう変わるのか	技術は成熟したように見える製造業が進む新しい方向は何か。やはり環境問題はきわめて大きい。また、サービス産業はどう変わるのか。農林水産業が技術によって新しい方向に進むのか。技術の担い手としての産業の将来を展望する。	同上	同上
14	新しい技術の時代へ	きわめて高度な人工物を創り出すよりも、非常に複雑な「社会」「人間」「自然」に対する技術を進めていく時代となった。また、「個」の技術から「場」の技術へのパラダイム転換が生じる。技術の基本的な性格が変わり、新しい技術の時代に入る。	同上	同上
15	技術をいかに進めるか	20世紀には、技術はもっぱら企業とくに大企業が進めてきた。しかし、21世紀には、ベンチャー企業の活躍が期待され、また、企業を超えて、政治あるいは広く社会が、技術推進の大きな担い手となる。技術の進めようが21世紀には変わってくる。	同上	同上

＝ ギリシャ哲学（’９９）＝（R）

〔主任講師：天野　正幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、語源的にも歴史的にも「哲学」の故郷と言うべき古代ギリシャにおいて哲学という学問がどのように生まれ成長していったかを解き明かし、哲学とはいかなる学問であるかをその原点に立ち返って理解するための手懸りを提供することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ソクラテスの「知恵」（『ソクラテスの弁明』）	「哲学」を意味するギリシャ語「フィロソフィアー」の原義である「知恵の愛求」としての「哲学」を実質的に確立したのはソクラテスである。彼の「知恵」概念を手懸りに、彼にとっての「知恵の愛求」について考察する。	天野　正幸（東京大学教授）	天野　正幸（東京大学教授）
2	ソクラテスのエレンコス（プラトン初期対話篇）	ソクラテスの「知恵の愛求」の活動は他者との議論を通して遂行される。彼の議論はいつでも相手を論駁して相手の無知を暴露する（「エレンコス」と呼ばれる）。その議論を手懸りに、彼の「知恵の愛求」について考察する。	同　上	同　上
3	プラトンは超越的イデア論者か	プラトンのイデア論は「超越的イデア論」と一般に考えられている。そのような理解は彼の弟子のアリストテレスから始まる。だが、プラトンのイデア論を「超越的」イデア論と理解するのは誤解のもとである。	同　上	同　上
4	仮説的イデア論（『パイドーン』）	プラトンのイデア論は、イデアの存在を仮説する仮説的理論であり、「仮説的イデア論」という名がむしろ相応しい。それは『パイドーン』において初めて、一個の理論として確立された。	同　上	同　上
5	善のイデア（『国家』）	『国家』において、仮説的イデア論の仮説を正当化する究極の根拠として「善のイデア」が導入され、それが「太陽」・「線分」・「洞窟」の譬喩によって説明される。その説明の目的は真の哲学者を規定することにある。	同　上	同　上
6	イデア論の再検討（『パルメニデス』）	『パルメニデス』において、プラトンは自らイデア論を批判する。その批判はイデア論にとって、致命的とは言えないまでも、少なからぬ打撃を与えるものと思われるが、プラトンにとってはどのような意味を持つのだろうか。	同　上	同　上
7	「エピステーメー」概念の再検討Ⅰ（『テアイテートス』）	『パルメニデス』のイデア論批判は「エピステーメー」概念についての再検討をプラトンに促し、『テアイテートス』において、エピステーメーを獲得する方法が根本的に考察し直される。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「エピステーメー」概念の再検討Ⅱ（『テアイテートス』）	「エピステーメー」は最終的には「ロゴスを伴った真なるドクサ」と定義される。この定義も結局は批判されるが、エピステーメーは「他のすべてのものとの差異の認識」であるということが積極的な成果として確保される。	天野　正幸	天野　正幸
9	分割法（『ソフィステース』『ポリーティコス』）	『ソフィステース』『ポリーティコス』において、「他のすべてのものとの差異」を体系的に認識する方法として、「分割と統括」という方法が導入される。この方法について考察する。	同　上	同　上
10	イデアのコイノーニアー（『ソフィステース』）	『ソフィステース』において、虚偽の言明がいかにして成立し得るかを説明するために、イデアのコイノーニアー（結合あるいは分有）という考え方が導入される。この考え方について考察する。	同　上	同　上
11	アリストテレスにとっての「哲学」（『形而上学』）	アリストテレスは『形而上学』の冒頭で「知恵」を「原理・原因についての知」と規定している。これは彼にとって「哲学」の根本規定である。それでは、アリストテレスにとって「哲学」とはどのような学であったのか。	同　上	同　上
12	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」（『形而上学』）	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」（「あるもの」は多義的である）というテーゼがアリストテレスの存在論の根本前提となっている。このテーゼの意味と意義について解説する。	同　上	同　上
13	本質をめぐる議論Ⅰ（『形而上学』）	アリストテレスは『形而上学』第７、８、９巻において、実体の存在の原因について論じている。それは彼の形而上学の精髄と言っても過言ではないが、極めて難解である。それをできるだけわかりやすく解説する。	同　上	同　上
14	本質をめぐる議論Ⅱ（『形而上学』）	存在の原因としての本質を知の対象という観点から見ると、例えば「本質は個別か普遍か」、「類と種差（という二つのもの）からなる本質がなぜ単一なものであり得るのか」など、様々な問題が生じる。これらの問題について考察する。	同　上	同　上
15	論証理論（『分析論後書』）	最後に、アリストテレスの「知」の概念について解説する。彼は、最も厳密な知は論証に基く知だと考える。それについて、主として『分析論後書』における論述に基いて解説する。	同　上	同　上

＝ 西洋近世哲学史（’９９）＝（R）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの哲学からヘーゲル哲学にいたる西洋近世哲学史は、西洋哲学史全体のなかできわめて重要な位置を占めている。全体のねらいは二つのねらいから成っている。一つは、近世哲学全体の流れを正確に把握することである。もう一つは、基本的な諸概念を厳密に理解することである。精選された西洋近世哲学史の客観的な叙述を試みたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世哲学の概観	二つのことを考えている。一つは古代・中世哲学との関係である。もう一つは近世哲学自体の流れである。後者は、具体的には、揺籃期の哲学、大陸合理論、イギリス経験論、批判哲学、そしてドイツ観念論として展開する。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	揺籃期の哲学Ⅰ ルネサンスの哲学	「ルネサンス」とは「再生」を意味する。すなわち、キリスト教以前のギリシア・ローマの文化を再生しようとするものである。具体的には、クザーヌス、エラスムス、ポンポナッツィの哲学を取り上げて考察する。	同　上	同　上
3	揺籃期の哲学Ⅱ 宗教改革	16世紀の宗教改革は狭義の近世哲学史の範疇には入らない。しかし近世初頭における思想の変革の一つとして、また、その後の影響史を考え合わせるとき、欠落させることはできない。具体的には、ルターとカルヴァンの思想を取り上げる。	同　上	同　上
4	揺籃期の哲学Ⅲ 科学革命	「科学革命」という言葉は二とおりの意味で使われる。一つは英語で大文字で書かれる科学革命であり、もう一つは小文字で書かれる科学革命である。前者は近代自然科学の基礎となった16世紀半ばから17世紀後半にかけての自然科学の興隆のことを指す。	同　上	同　上
5	合理論の哲学Ⅰ デカルト	「われ思う、ゆえにわれ在り」という言葉によって知られるデカルトは、単に大陸の合理論の祖であるだけではなくて、人間というものを哲学の中心に握えたという意味で、近世哲学の祖である、ということができる。したがって、当然、今日にまで及ぶ影響史がある。	同　上	同　上
6	合理論の哲学Ⅱ スピノザ	「神即自然」という言葉によって知られるスピノザの哲学は汎神論である。デカルトは精神と物体という二つの実体を認めたが、神のみが唯一の実体であって、精神と物体はこの唯一の実体である神の様態ある、としたスピノザ哲学は、デカルト哲学の徹底である。	同　上	同　上
7	合理論の哲学Ⅲ ライプニッツ	ライプニッツの実体は「単子」と呼ばれる。その数は無数である。単子の本性は作用にある。しかし単子と単子との間には相互作用はない（「単子は窓をもたない」）。けれども、被造物としての単子の全体は創造者が定めた「予定調和」の秩序のなかに置かれている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	経験論の哲学Ⅰ ベーコンとホッブズ	中世以来もともとイギリスには経験論的傾向の伝統があったが、近世における経験論の哲学はF・ベーコンをもって始まる。ベーコンに続くホッブズは徹底的に機械論的な自然観を樹立した。そしてそれを道徳や社会の分野にまで拡張しようとした。	量義治	量義治
9	経験論の哲学Ⅱ ロック	ベーコンやホッブズを先駆とするイギリス経験論はロックをもって確立する。経験論はすべての認識は経験をもって始まるのであって、経験に先立っては、われわれの心は「白紙」または「暗室」である、と主張する認識論上の立場である。	同上	同上
10	経験論の哲学Ⅲ バークリとヒューム	バークリとヒュームはロックの経験論を継承発展させた。バークリの「存在することは知覚されることである」というテーゼは有名である。ヒュームは、経験論を徹底させていった結果、いっさいの認識の確実性を疑う懐疑論に陥ってしまった。	同上	同上
11	批判哲学Ⅰ 形而上学	カント哲学は批判哲学と称される。すなわち、理性による理性の批判、つまり、理性の自己批判の哲学である。批判哲学はそれ以前の全哲学を批判し、真の哲学を構築しようとした。カントは西洋哲学史上最大の哲学者である、といってもけっして過言ではない。	同上	同上
12	批判哲学Ⅱ 道徳と宗教	理性には三つの関心がある。すなわち、(1)「わたしはなにを知ることができるか。」(2)「わたしはなにをなすべきであるか。」(3)「わたしはなにを望むことを許されるか。」第一の関心は形而上学、第二の関心は道徳、そして第三の関心は宗教にかかわる。	同上	同上
13	ドイツ観念論の哲学Ⅰ フィヒテ	ドイツ観念論の哲学の起点は批判哲学である。批判哲学の特徴はその二元論にある。この二元論の一元論化、つまり体系化の試みがドイツ観念論の哲学の基本的意図である。フィヒテの「知識学」はその最初の体系的哲学である。	同上	同上
14	ドイツ観念論の哲学Ⅱ シェリング	フィヒテにおける二元論の克服は不徹底に終わった。というのは、その絶対者は自我と非我との根底にあるというよりは、むしろ自我の根底にあるものであったからである。これにたいして、シェリングの「同一哲学」は文字どおり絶対者の哲学である。	同上	同上
15	ドイツ観念論の哲学Ⅲ ヘーゲル	ヘーゲルによれば、実体は客体ではなくて主体である。そして主体の本質は自由にある。「精神」は自由を本質とする実体としての主体である。精神はその自由に基づいて、自己を自己の外に発現しつつ運動する主体である。ヘーゲル哲学をもって近世哲学は終焉する。	同上	同上

＝現代の哲学（’０１）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

ここでは、現代の日本に生きる私たち自身の立場に立って、現代哲学の諸問題を、やさしく、その基本から考え直してみたい。初めに、東西の思想史の流れとその伝承を振り返ってみる。次に、現代哲学の主要な諸傾向を概観してみる。最後に、現代の哲学的問題を、科学、人間、倫理、芸術、宗教の五分野に即して考え直す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	哲学の現在と日本	日本人は、東洋思想の伝統のなかで育ち、しかもいまやグローバルとなった世界文明のなかで、西洋哲学の考え方からも深く影響されている。その上、現代は科学技術の時代である。今日、人間はいかに生きるべきかという人生観・世界観の根本知が必要である。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	東洋思想と西洋哲学	東洋の思想には、仏教、儒教、道教などの人生の知恵がある。ただし、大事なのは、東洋思想は、科学を生まなかった点である。科学は、西洋哲学のなかから、西洋17世紀に生まれた。そうした西洋哲学の特色と、その歴史的歩みの全体をよく心得ねばならない。	同　上	同　上
3	古代中世哲学と現代	西洋古代の哲学の大枠をまず省みる。それは、古い時代の思想だが、現代性を持っている。次に、西洋中世の哲学の大筋を振り返る。とくに普遍論争に注意を払う。いずれにしても、古代ヘレニズムと中世ヘブライズムの思想が二千年にわたって存在していた。	同　上	同　上
4	近代哲学の登場とうねり	西洋の近代哲学は、ルネサンスの哲学とともに始まる。豊かな現実を前にした人間中心主義の思想、ヒューマニズムの思想の開始である。そのあと、17世紀に近代科学が登場する点が大切である。そして、イギリス経験論と大陸合理論の二潮流が台頭する。	同　上	同　上
5	科学的認識と人間的生き方（その１）	近代の経験論と合理論の二潮流は、総合されねばならない。それをなし遂げたのが、18世紀後半にドイツに出た大哲学者カントである。カントは、科学的認識を基礎づけるとともに、その限界をも明らかにした。そのカントの理論哲学の基本をやさしく捉え直す。	同　上	同　上
6	科学的認識と人間的生き方（その２）	カントは、理論哲学をも越えて、実践哲学を樹立した。ここでカントは、人間の人格性の尊厳を基礎づけたのである。自然の衝動を抑え、理性の道徳法則に従って、自由において、自律した人格として行為してこそ、ほんとうの人間性が成り立つ。この点を詳説する。	同　上	同　上
7	ドイツ観念論から現代哲学の胎動へ	カントのあと、ドイツ観念論の哲学が登場する。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらがその代表である。ここに、カントで始まった自由の理想主義が大規模に展開されて、近代哲学の完成が打ち立てられる。ヘーゲルの急逝（1831年）以後に現代哲学が始まる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	現代哲学の生成（その１）	19世紀の中葉に、ヘーゲル左派からマルクス主義が現れ、フランスにコントの実証主義が登場し、デンマークにキルケゴールが出て、実存主義の萌芽が形成される。19世紀後半には、種々の思想が出るが、新カント学派とディルタイにおける歴史科学の問題を見る。	渡邊　二郎	渡邊　二郎
9	現代哲学の生成（その２）	19世紀後半から20世紀にかけて、とくに重要なのは、まず生の哲学である。ショーペンハウアーの意志の哲学を承けて、ニーチェの思想が出て、ニヒリズムの状況のなかでの人生の肯定を打ち出す。そのあと現象学を介して、実存哲学が出現する過程を追う。	同　上	同　上
10	現代哲学の生成（その３）	現象学の流れのなかから、ハイデッガーの哲学が現れる。その『存在と時間』の基本思想と、後期思想の特色を振り返る。一方、英米哲学には、早くからプラグマティズムの思想があり、20世紀に成立する論理実証主義や分析哲学の特色を省みる。	同　上	同　上
11	科学技術と自然および歴史の問題	さて、これ以後、現代哲学の主要問題を横断的に取り上げる。まず、科学的認識の本質と限界について、科学哲学的考察を加える。技術の問題にも眼を向けたあと、自然についてどう考えるべきかを省みる。そのあとで、歴史の流れとその意味について考察を企てる。	同　上	同　上
12	人間の本質論と自己の問題	歴史のなかに生きる人間とは何かという問題意識から、人間の本質論が浮かび上がってくる。しかし、ここで何よりも肝要なのは、たんに客観的な人間の規定ではなく、そのあり方において、いかに自分自身を形成すべきかと態度決定をする自己の実存の問題である。	同　上	同　上
13	他者との共同存在と倫理の問題	その自己の実存の問題を考えるとき、同時に、他者とともに生きる人間の共同存在の場面が、問題性をはらんで登場してくる。現代には、さまざまな他者論がある。それらを振り返ったあと、共同存在における倫理の問題、とりわけ善と悪の問題に考察を加える。	同　上	同　上
14	美的情念と芸術の問題	人間は、知性のみならず、情意を持つ。とりわけ、意志とも連動した感情の問題は、人間にとって大きな意味を持つ。情意の充足は人間の幸福と結びついている。とくに美的情念とその感動は、人間の心を震わせる。美の本質や、自然美、さらには芸術の意義を見直す。	同　上	同　上
15	運命の力と生存の意義の問題	人間は、人生の途上で、苦悩に見舞われ、挫折にみちた人生行路を歩む。人生のすべては見通せず、非力な自己を越えた運命の力に人間は勝てない。こうした自己を越えたものを思うところに、宗教的観念の登場する根源がある。そこでは生存の意義が問題になる。	同　上	同　上

＝ 美と詩の哲学（’９９）＝（R）

〔主任講師：渡邊　二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は大きく2部に分かれる。前半の7回は「美について」考え、後半の8回は「ロマン主義的詩情について」考察を行う。私たちは日頃、自然と人生のなかの美しいものによって魅惑され、心慰められる。そうしたところから、ロマン主義的な心情も生まれてくる。こうした「美と愛と生命」礼讃の思想と文学を追ってみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	美の根本問題に向けて	私たちは、自然の美しい風物に感動し、また美しい人に魅せられて、恋心に捕らわれる。実在の生命の輝きが、私たちを美的感動へと誘う。芸術作品の美よりも、自然的生命の美のほうが、より根源的である。美とは、私たちに贈られる深い感銘と感激である。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	美の問題性とプラトン	こうした実在するものの美しさを深く掘り下げたのが、西洋古代中世の美の思索である。 美の本質を秩序や調和のうちに見るピュタゴラスのあとに、プラトンが出て、美が、善を背後に秘めつつ、光輝きとなって私たちを魅惑するものである点を明らかにした。	同　上	同　上
3	プロティノスの衝撃	古代末期のプロティノスに至って、秩序や調和のうちに美の本質を見る考え方は徹底的に批判される。その代わりに、美の本質は、光輝く形相のうちにあるとされ、それを魂の高揚において捉えることが大切とされる。そこに忘我奪魂の恍惚の境地が出現する。	同　上	同　上
4	中世の開始とアウグスティヌス	しかし、中世キリスト教の開始とともに、再び、秩序や調和のうちに美の本質を見る考え方が復活する。それがアウグスティヌスの場合である。アウグスティヌスとともに現れたキリスト教的世界観の特色や、アウグスティヌスの美に関する思想を追ってみる。	同　上	同　上
5	光のなかで呼ぶものとしての美（その1）	けれども、紀元6世紀初めに著された、偽ディオニュシオス・アレオパギテースの『神名論』という書物のなかで、否定神学の立場から、究極の絶対者が、善でありつつ、光輝きとなって立ち現れ、万物を自分のほうへと「呼ぶ」ところに、美が成立するとされた。	同　上	同　上
6	光のなかで呼ぶものとしての美（その2）	この偽ディオニュシオス・アレオパギテースの美論のなかで、最も決定的に、秩序や調和としての美を超えて、光輝きのなかで「呼び」かけてくれるものとしての美の究極的本質が明らかにされた。そして人は、そうした美を「愛」さずにはおれなくなるとされた。	同　上	同　上
7	中世から近世にかけての美論	中世後半の多くの美論はみな、この偽ディオニュシオス・アレオパギテースの思想に立脚して可能となったのである。トマス・アクィナスの美の思想その他の、西洋中世最盛期の美論が、省みられる。そして近世初頭のフィチーノなどの美と愛の思想が考察される。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ドイツ・ロマン主義の位置	この回より、本講義の第2部「ロマン主義的詩情」が始まる。西洋近代の美と詩をめぐる思潮のなかから、本講義では、ドイツ・ロマン主義、しかもフリードリッヒ・シュレーゲルのそれを考察する。まずディルタイの近代美学史により、ロマン主義の位置を見る。	渡邊　二郎	渡邊　二郎
9	ドイツ・ロマン主義成立の背景	ドイツ・ロマン主義の成立の背景となった諸事情について考察を加える。とりわけカントからシラーを経て、人間の美学的教養の大切さが自覚され、理論と実践とをつなぐ人間の全面的なあり方の根源が、美的な遊戯に求められた点をたどってみる。	同　上	同　上
10	フリードリッヒ・シュレーゲルについて	フリードリッヒ・シュレーゲルは、ドイツ・ロマン主義運動の旗手であった。この哲学者にして文学者、美学者にして評論家であった人物の生涯と思想の歩みを概観してみる。そのことによって、前期から後期にかけてのドイツ・ロマン主義の流れが明らかになる。	同　上	同　上
11	ロマン主義的なものの方法的基礎	ロマン主義とは何か、どうしてシュレーゲルはこの考え方に到達したのか、といった問題を考え、シュレーゲルの前期ロマン主義の思想の成立過程に光を当てる。『アテネーウム』断章116番の考察も行う。シュレーゲルのロマン主義の方法的基礎が明らかにされる。	同　上	同　上
12	『ルツィンデ』（その1）	シュレーゲルは、みずからのドロテア・ファイトとの恋愛・結婚という一大事件を基礎にして、『ルツィンデ』という長編物語を著した。なんらの筋もない、思想的文学的断想の集積に成るこの『ルツィンデ』という作品に即して、ロマン主義的詩情の本質を捉える。	同　上	同　上
13	『ルツィンデ』（その2）	『ルツィンデ』の前半の3分の1ほどに盛られた「愛と生命」讃歌の断章を、順次、解きほぐし、解明してゆく。前回の冒頭の書簡体の断章の考察に続いて、本章では、幻想的覚え書きを中心として、シュレーゲルの愛と結婚の思想の意義を探ってみる。	同　上	同　上
14	『ルツィンデ』（その3）	さらに『ルツィンデ』には、少女ヴィルヘルミーネの記述を介して、自由と大胆不敵さを讃えるシュレーゲルの文学的理想が表白される。そしてシュレーゲルは、暖かさのある健やかな自然の愛を大切と見なしていることが看取される。	同　上	同　上
15	『ルツィンデ』（その4）	『ルツィンデ』は、続いて、「ゆとりのある生き方」を讃美し、文明社会の進歩のなかにあって、愛に恵まれた静かな生命の享受を喪失してはならないと説く。また「誠実」と「戯れ」の入り混じった、愛の多様な情熱についても、シュレーゲルは理解をもっていた。	同　上	同　上

＝ 現象学入門（’００）＝（R）

〔主任講師：千田　義光（國學院大学教授）〕

全体のねらい

20世紀の哲学を特徴づける思想運動の一つとして挙げることができるのは、フッサールを創設者とする現象学である。本講義においては、その思索の展開を同時代の生きた思想として考え直して、この哲学的理念そのものの自己運動に聴講者とともに肉薄していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象学の前史	現象学は西欧哲学の伝統のなかに立ちながらも、この知的伝統をいわば内側から解体し乗り越えようとする試みである。ギリシア以来の、とりわけ近代哲学の流れにおいて、それがどのように位置づけられるかを考察する。	千田　義光（國學院大学教授）	千田　義光（國學院大学教授）
2	現象学運動	20世紀初頭以来のゆるやかな知的運動としての現象学は、創設当初よりさまざまな展開をみているが、それらの運動を先ず最初に概観して、全体的な見通しを立てるとともに、本講義のすすむ方向を明らかにする。	同　上	同　上
3	超越論的主観性の現象学（1） ――現象学の現象学	フッサールによる超越論的現象学は彼独自の方法論をもっているが、さらにはその方法論にたいする自己批判そのものが現象学の展開それ自体と不可分な関係をもつ。現象学的方法論としての「現象学の現象学」は、現象学そのものである。	同　上	同　上
4	超越論的主観性の現象学（2） ――意識の一般構造	意識の本質的構造としての志向性と内的時間性は、現象学にとって中心となる問題である。この概念に立脚しながら、現象学的にさまざまな種類の意識作用とそれらの遂行様態が分析され、それにのっとって、フッサールの現象学が展開する。	同　上	同　上
5	超越論的主観性の現象学（3） ――世界の意味的構成	フッサールは、意識の一般構造の分析と現象学的方法論に基づき、多様な体験の具体的統一化という問題を、さまざまな身近な世界の意味的構成、ひいては万人に共通する一つの世界の構成の問題として解明する。	同　上	同　上
6	超越論的主観性の現象学（4） ――自我と相互主観性	彼の自我論は方法論的に独我論から出発して、相互主観的な共同体の構成の分析にすすむ。孤立した認識主観からの解明は多くの批判にさらされることになったが、しかし彼の議論の途上において何が哲学的問題として問われるのかを考える。	同　上	同　上
7	超越論的主観性の現象学（5） ――生活世界と歴史の現象学	ガリレイ以来の客観主義的な近代科学によって忘れられた、主観的かつ相対的なわれわれの生きて体験されている感覚的世界を、彼は生活世界とよぶ。生活世界論のもつ射程と意義を彼の歴史観とともに検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	事実的人間存在の現象学（1） ――存在論的現象学	フッサール現象学の根本的批判者はハイデガーである。超越論的現象学がハイデガーによって存在論的現象学として批判されつつ展開されることによって、現象学が新たに切り開いた哲学的次元が何であったのかを考察する。	千田　義光	千田　義光
9	事実的人間存在の現象学（2） ――世界内存在としての人間の存在	ハイデガーは人間の存在を現存在とよび、さらにそれを世界内存在としてとらえかえす。世界に超越的な主観ではなく、みずからの存在をみずからのその充全な具体性において生きる事実的な人間の存在が問題とされる。	同　上	同　上
10	事実的人間存在の現象学（3） ――本来的人間存在の分析論	現にある事実性へと投げいれられた存在としての実存する人間の存在は、たえず存在するものを配慮しつつ解釈し、理解している。存在論に先立つこの存在理解が、ハイデガーによって本来的な人間存在の分析論という哲学的問いへと深化される。	同　上	同　上
11	事実的人間存在の現象学（4） ――日本文化論としての解釈学	ハイデガーの現象学的解釈学は、当時留学した日本の留学生たちによって日本文化の解釈学として豊かに結実した。現象学的に見ることの生産性と、その一つの日本的変様と意義を考える。	同　上	同　上
12	実存的現象学（1） ――自由と実存の現象学	ハイデガーの現象学はまたフランスにも影響をあたえ、サルトル、メルロ＝ポンティらの実存的現象学へと展開した。特にサルトルにおいて、それは自由と実存の思想として第2次大戦後の時代を強く彩った。	同　上	同　上
13	実存的現象学（2） ――受肉した身体の現象学	メルロ＝ポンティにとって、世界の意味は、他に還元することのできない、この世界の具体的な内容に拠っており、無数の異質な経験の交点に現れる意味として理解される。このような理解は、判断に先立つ、感覚的な受肉した身体に固有な意味をとらえることとされる。	同　上	同　上
14	現象学の多様な進展	1950年代以後、フランスやドイツにおいて、西欧近代思想の自己批判として、他の現代哲学思想と結びつきながら、これまで看過され軽視されてきたさまざまな側面に、哲学的分析が加えられていった。	同　上	同　上
15	現象学の意義	現象学は20世紀の哲学的運動としてすでにその生命力を枯渇させ、存在意義を失っているのであろうか。現在にとっての現象学のもつ意味を、あらためて再考することによって、さらに哲学そのものの意味をも考察する。	同　上	同　上

＝ 自己を見つめる（’０２） ＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 渡 邊　二 郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人生の現実のなかに立って生きる自己自身を見つめてみたい。公共的な学問の世界では扱ってくれないが、しかし私たちが実際にこの世の中を生きていくときに深く実感する人生論的な諸問題を取り上げてみたい。哲学的な人間論のひとつの試みを行うのが狙いである。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	経　　験	人生の現実は、経験してみなければ分からない。ひとは、それぞれ、さまざまな人生経験をして生きる。経験するとは、いったい、どういうことなのであろうか。	渡邊　二郎（放送大学教授）	渡邊　二郎（放送大学教授）
2	時　　間	経験の蓄積は、時間のなかで行われる。起こった出来事を経験し、それを苦い思いとともに、記憶する。しかし、次に来るべき新しい未来に期待をつなぐ。こうした時間の流れのなかで人生を生きる。	同　上	同　上
3	境　　遇	そのとき、それぞれの人は、異なった境遇と環境のなかを生きる。生まれ育った境遇、それぞれのかけがえのない人生、それらはみな、変えようのない宿命を帯びた状況のなかにある。そのなかで、人生の営為は行われる。	同　上	同　上
4	遍　　歴	ひとは、みな、そうした境遇のなかで、それぞれなりの人生遍歴をする。そのなかで、ひとは磨かれ、また変貌する。長い旅路と遍歴のなかで、来し方と行く末を思うことが、生きることの実態をなす。	同　上	同　上
5	自　　己	そのようにして生きているのが、かけがえのない自己である。自己自身を見つめ、引き受け、そのなかで人生の充実を図ることが、生きるということである。	同　上	同　上
6	生 き 甲 斐	ひとはみな、生き甲斐を求める。それなりに、生きる目標、役割、意味を見定めなくては、人生設計は成り立たない。しかし、たんに目的を設定しただけでは、生き甲斐は達成されない。ほんとうに生きた甲斐のあった人生が大切。	同　上	同　上
7	仕　　事	そのためには、仕事をしなければならない。人生は、仕事に尽きるとも言える。仕事と課題、任務と役割を果たすこと、これが、それぞれの持ち場での大切な使命となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	孤独	人生の途上で襲ってくる最も痛切な実感は孤独ということであろう。むろん、誰もが共同社会のなかで生きている以上、まったくのひとりということはありえない。そうではなく、そうした共同存在のなかでの孤独の実感が人生の真実であろう。	渡邊　二郎	渡邊　二郎
9	愛	ひとは、愛を求める。愛する人を大切にしたい。また、みずからも愛の交わりを求めている。これが、人間の真実であろう。愛と人生は切り離しがたいものである。	同　上	同　上
10	他者	他者こそは、人生の謎である。不可解な、捉えがたい他者とともに、この人生を送らなければならないことほど、人を苦しめるものはない。自己と他者の問題こそは、人生の最大の難問である。	同　上	同　上
11	世間	世の中の動きは、見通しえないものをもつ。不特定の世間一般の動向が、個人の生き方を左右する力をもつようになった。日本では特に、世間や世の中の動きに注意し、それに順応して生きることが求められる。大勢順応と事大主義が、人生の前景をなす。	同　上	同　上
12	運命	ひとは、長い人生行路を生きるとき、やむをえない運命、変えることのできない宿命、そうした限界のある、非力な自分を自覚する。自己の人生の意識は、自己の運命の意識でもある。運命意識が、自己の根底に存在する。	同　上	同　上
13	不幸	ひとが、人生の過程のなかで発する問いは、結局、自らの不運と不幸の宿命についての疑問であろう。ひとは幸福と、幸多き人生、この世の幸福を希求する。しかし、それは何を意味するのであろうか。	同　上	同　上
14	老い	人生の宿命は、老いの宿命でもある。年輪を加え、老成し、年老いてゆくのが、人間の宿命である。もはや、繰り返せぬ一回きりの人生は、こうして、成熟し、円熟し、やがて枯れてゆく運命を免れがたい。	同　上	同　上
15	死	老いの果てに見えるものは、死である。むろん、若い人も、突然、病に襲われて死ぬことがある。事故死もある。しかし、一般には老いとともに死が訪れる。この死によって人生は終わる。死こそは、人生の重大事件である。	同　上	同　上

＝ 宗教の哲学（’００）＝（R）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

「宗教の哲学の課題」を発見するために現象学的方法を採る。具体的には、仏教、キリスト教、イスラム教という三大世界宗教とこれらに基づく特殊的宗教の哲学の考察をとおして、宗教の哲学の課題の発見、そしてその解決に迫る。特定の宗教および宗教の哲学に偏ることなく、できるだけ普遍的・客観的に述べることを旨とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	課題と方法	「宗教の哲学」を現象学的方法によって省察する。すなわち、最初に代表的な世界宗教を取り上げ、つぎに特定の宗教の立場を背景にした宗教の哲学を取り上げる。こうしてはじめて「宗教の哲学の課題」を見出すことができる。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	宗教Ⅰ仏教	ゴータマ・シッダールタを開祖とする仏教にはキリスト教やイスラム教の神に相当する絶対者は存在しない。また、聖書やコーランに相当するような正典というものもない。それだけに、あまたある経典のなかからどの経典を尊重するかということが問題となる。	同　上	同　上
3	宗教Ⅱキリスト教	キリスト教は聖書の宗教である。聖書には旧約聖書と新約聖書とがある。両聖書は一体不可分の全体を成している。その中心に位するのがイエス・キリストである。キリスト教は、端的にいえば、イエス・キリストの宗教なのである。	同　上	同　上
4	宗教Ⅲイスラム教	ムハンマドを開祖とするイスラム教では、正典コーランとともにハディース（伝承）およびシャリーア（イスラム法）が尊重される。イスラム教においては、モーセもイエスも預言者と見なされるが、ムハンマドが最後最大の預言者とされる。	同　上	同　上
5	特殊的宗教の哲学Ⅰ仏教的宗教の哲学	世界的に著名な日本の代表的仏教学者、鈴木大拙をとおして考察する。そのさい、宗教の地平としての「霊性」と霊性の論理としての「即非の論理」に注目する。	同　上	同　上
6	特殊的宗教の哲学Ⅱキリスト教的宗教の哲学	日本の代表的キリスト教哲学者、波多野精一をとおして考察する。「超越的・実在的・絶対他者」「神の愛」「永遠の生命」等のテーマを取り上げる。	同　上	同　上
7	特殊的宗教の哲学Ⅲイスラム教的宗教の哲学	世界的に著名な日本のイスラム学者、井筒俊彦をとおしてイスラム神秘主義「スーフィズム」を考察する。具体的には十三世紀のイブン・アラビーの「存在一性論」を省察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	宗教批判	現代において、宗教の哲学の構築を試みようとする場合には、宗教批判の哲学に一顧を与えておくことは不可欠である。これなしには、この時代においては宗教の哲学の構築は砂上に楼閣を建てるようなことになりかねないであろう。	量義治	量義治
9	宗教批判に対する批判	フォイエルバッハとマルクスの宗教批判は、要約すれば、神は実在ではなくて虚構であるというものである。また、ニーチェの場合は、それは「神は死んだ」という衝撃的な言葉で表される。これらの宗教批判を反駁する。	同上	同上
10	宗教哲学の課題	基礎作業を了えたいま、われわれは、「宗教の哲学の課題」を確定することができる。それは「救済の問題」と「絶対者の問題」と「信仰と行為の問題」とに要約することができる。これらの問題のなかで中心的な問題は「救済の問題」である。	同上	同上
11	救済の問題	救済は単に個人の救済ではなくて、全人類の、いな全宇宙の救済でなければならない。救済の方法としては、他力、自力、自力・他力の方法があるが、全宇宙の救済のためには絶対他力が必然的である。	同上	同上
12	絶対者の問題	救済とは、それが自己であれ、他者であれ、絶対者による救済である。したがって宗教の哲学において、絶対者の問題はきわめて重要である。さまざまな絶対者観を考察するが、アブラハムの神と哲学者の神との対置は思想史上有名である。	同上	同上
13	信仰と行為の問題	宗教の中心問題である救済は絶対者による救済であるが、そのさい人間の側が一切問題にならないのではない。人間の信仰が問われる。そして、その信仰とは意識の問題ではなくて実存の問題である。ここからして信仰は必然的に行為と深く関わる。	同上	同上
14	宗教における真理の問題	世にはさまざまな宗教がある。いったいどの宗教が真理なのであろうか。そもそも宗教における「真理」とはなんであろうか。イエスを尋問した総督ピラトもイエスに向かって「真理とはなにか」（ティ・エスティン・アレーテイア）という問いを発したのである。	同上	同上
15	宗教の哲学と現代	宗教的真理はわれわれ自身が「そのために生き、かつ死ぬことを願うような実存的真理」でなければならない。したがって理論的・傍観的立場に終始することは許されない。この無神論・ニヒリズムの時代の只中にあって、われわれはいかにして信仰を持ち続けうるのか。	同上	同上

＝ 老荘思想（'００）＝（R）

〔主任講師：池田　知久（東京大学教授）〕

全体のねらい

老荘思想、すなわち中国古代の思想家である老子や荘子の思想は、中国だけでなく日本を含む東アジアの諸地域の文化にとって、近代に至るまできわめて重要な思想の一つであった。それだけでなく、現代社会の典型である今日の日本の中に生きる我々にとっても、顧みるに値する重要な思想の一つである。

この講義では、従来の老荘思想の研究成果を十分にふまえながら、それらとは異なった新しい観点に立って、老荘思想の主な内容を解明するとともに、近年の出土資料をも利用して、戦国時代より六朝時代に至るその歴史的な展開を大ざっぱに跡づけてみたいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	最初の思想家たちとその生きた時代	老荘思想の誕生した背景にある、戦国時代～前漢時代の社会状況を考察し、その中における老（ﾛｳﾀﾝ）・荘周・劉安といった思想の担い手たちの生き方について考察する。	池田知久（東京大学教授）	池田知久（東京大学教授）
2	テキスト編纂の歴史（その一）――『荘子』	老荘思想を記した代表的な書物の一つである『荘子』に関して、その成立・由来・構成などについて述べ、あわせてこの書物の正しい取り扱い方を解説する。	同上	同上
3	テキスト編纂の歴史（その二）――『老子』と『淮南子』	老荘思想を記した代表的な書物である『老子』と『淮南子』に関して、それらの成立・由来・構成などについて述べ、あわせてこれらの書物の正しい取り扱い方を解説する。	同上	同上
4	「黄老」から「老荘」を経て「道家」へ	「老荘」という概念は、老荘的な諸思想をグルーピングするために、後代になって作られた人工的な概念である。「黄老」「道家」などをも考慮しながら、諸概念の変遷の中に見られる老荘思想についての歴史的事実と、後代における学者の机上の整理との乖離について分析する。	同上	同上
5	老荘思想の誕生とその先駆者たち	老荘思想は、戦国時代中期の紀元前300年ごろ、人間疎外の克服や人間の主体性の獲得をめざして誕生したが、その時代背景を考察するとともに、老荘思想の誕生に影響を与えた先駆者たちについて究明する。	同上	同上
6	「万物斉同」の哲学	戦国時代中期の紀元前300年ごろ、老荘思想がこの世に初めて誕生した時、彼らが抱いた思想は、「万物斉同」の知識―存在論であった。中国古代の諸思想の中でも、最も難解なこの哲学について、その理論構造や目的などを解明する。	同上	同上
7	「道」の形而上学	老荘はまた道家とも呼ばれる。それは、彼らにとって「道」が最も重要なキー・コンセプトだったからであるが、この回は、人間をも含めた「万物」を存在させ変化させている窮極的根源的な実在としての「道」に関する哲学を分析する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「物化」・転生・輪廻の思想	老荘思想の「物」という存在者に関する哲学、すなわち「物化」・転生・輪廻の思想について解明する。これらの思想は単なる存在論の一つではなく、同時に人間の死の意味づけでもあったのである。	池田　知久	池田　知久
9	「万物一体」の思想と宇宙生成論	老荘思想は戦国時代後期に至って「気」の思想を他から取り入れた。また、それに基づいて「万物一体」や宇宙生成論を論じた。この回は、これらの諸思想の内容と意味について考察する。	同　上	同　上
10	「天」の立場と「仁孝」の否定	老荘が「天」を重んずる立場に立っていたことは、戦国末期の『荀子』によっても確認できる。「天」の立場は儒家などの言う倫理や政治を「人」として批判することと表裏の関係をなすが、この回は、以上の諸問題について解明する。	同　上	同　上
11	「養生」の説と「遊」の思想	老荘の「養生」説は、「気」の理論とともに他から取り入れたものであり、また「遊」とは、人間が世間的な単なる存在者から真の実在の世界に飛翔していくことである。これらには思想家たちの自由や独立の願いが伴っている。この回は、以上の諸問題について考究する。	同　上	同　上
12	三つの政治思想――政治の拒否、ユートピアの思想、中央集権の現実	老荘思想の中にはあい反する三つの政政思想がある。一つは、原理的な政治の拒否。二つは、万民平等のユートピア思想。三つは、一君万民の中央集権的な専制主義の黄老思想である。この回は、三者の内容と由来について考察する。	同　上	同　上
13	聖人の「無為」と万物の「自然」――新たな思想の展開	老荘にとって「無為」や「自然」は、当初から抱いていた思想ではなく、当初の道の形而上学を修正するために唱えるに至ったものである。この回は、人間や万物の自律性を主張する「自然」の思想について解明し、あわせて魏晋南北朝時代の老荘思想への展開を論述する。	同　上	同　上
14	「無知」「不言」の提唱と弁証法的な論理	無言の提唱、矛盾律の否定などを始めとして、老荘思想はことば・論理・知識について重要な思索を行っている。この回は、中国古代の知識論の歴史における老荘思想の位置と意義に関して論述する。	同　上	同　上
15	諸子百家に対する批判と中国思想史の構想	老荘もまた諸子百家の一つであり、先行する諸子百家の思想を批判的に摂取しながら自己を形成していった。しかし、前漢初期の老荘はむしろ諸子百家の統一・総合に努力を傾注している。これらの問題を解明しつつ、あわせて老荘思想の後世に与えた影響について考究する。	同　上	同　上

＝仏教思想（'01）＝（R）

〔主任講師：末木　文美士（東京大学教授）〕

全体のねらい

仏教は日本人にとって身近な宗教であるが、その思想となるとなかなか解りにくい。その理由の一つは、インドに発して以来、さまざまな文化圏で多様な展開を遂げ、焦点を絞りにくいことにある。ここでは、歴史的な事情も勘案しながら、日本という場を原点としてその思想を解体、再構成してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	いまなぜ仏教か	仏教は古代のインドに発して、東南アジア・チベット・東アジアなどのさまざまな文化圏で多様に展開した。その多様な思想をどのような視点から見てゆくことができるのか。方法論的な問題を研究史を振り返りながら考察する。	末木文美士（東京大学教授）	末木文美士（東京大学教授）
2	歴史的概観	仏教思想史のさまざまな問題を見てゆくにあたって、一通りインド以来のさまざまな文化圏における仏教の歴史的展開を頭に入れておく必要がある。最近の研究に基づきながら、最低限必要な知識を概観する。	同上	同上
3	テキストの森	仏教の聖典は三蔵（経・律・論）とか大蔵経とか呼ばれて膨大な量にのぼる。また、その言語もパーリ語・サンスクリット語・チベット語・漢文など多様である。それらの成立や特徴、扱い方について論ずる。	同上	同上
4	解釈のパラダイム	膨大な仏典を整理し、体系化するために、教判と呼ばれる方法が工夫された。また、近代になると、大乗仏教はブッダの説でないとする大乗非仏説論などが現れ、議論を呼んだ。こうしたさまざまな仏典解釈の方法について考えてみる。	同上	同上
5	苦悩としての存在	ブッダの教説は人生を苦と見るところに出発点を持ち、その原理を求めて、無常・無我・縁起などの教説が展開された。原始仏教に由来しつつ、大乗にも生きているそれらの根本原理の意味を探る。	同上	同上
6	言語と存在	大乗仏教の一つの特徴は、存在の問題を考えるのに、言語論の立場から考察する点にあり、日常的言語の世界の無根拠性を鋭く突いた。その典型的な発想をインドの中観派の理論、及び中国の禅思想を中心に考察する。	同上	同上
7	象徴としての世界	日常言語を超えれば、そこには沈黙しかないのだろうか。果敢にもその恐るべき領域に踏み込み、世界を象徴として言語化したのが密教であった。マンダラとして展開される壮大な世界解釈の体系を読み解いてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心の深層	大乗仏教における人間論は、心の理論として展開される。心を清浄なものと見る如来蔵系と、汚れたものと見る唯識系の思想があり、また、中国の天台では心を観察する止観と呼ばれる行法が展開した。これらの理論を考えてみる。	末木文美士	末木文美士
9	他者と関わる	内的な心の観察は独我論に陥りはしないか。他者はどのような形で必然性を持つのか。大乗における菩薩の理想は他者との関わりを我々に迫るものであり、その極限に『法華経』が位置する。他者論としての大乗の意味を考える。	同上	同上
10	コミュニティの形成	以上考察してきた原理論に対して、以下では実践思想を扱う。具体的な他者との共存はサンガ（僧伽）と呼ばれる共同体において実現される。その共同体を支える規律が戒律である。さまざまなサンガのあり方を比較検討する。	同上	同上
11	超脱の森	苦なる世界を超脱するためにさまざまな修行法が開発され、悟りに至る道筋が示された。それに対して、瞬時に悟りに至る密教の即身成仏や禅の頓悟も主張された。そもそも悟りとは何か、修行とは何か、考えてみたい。	同上	同上
12	来世と救済	自力の修行に対して、仏・菩薩の力に頼って救済を受けるという道も考えられた。特に来世における救済を説く浄土教（阿弥陀仏信仰）は東アジアで大きな勢力を得た。浄土経典から親鸞にまで至る思想の系譜を考える。	同上	同上
13	楽観論の陥穽	東アジアの仏教の大きな特徴は、我々に仏性（仏になる可能性）が内在すると考えるところにある。この思想はさらに発展して、本覚（我々は本来的に悟っている）という立場にまで至る。余りに楽観的なこのような思想傾向の問題点を考える。	同上	同上
14	差別と平等	仏教はすべての生命ある存在は平等に尊重されるべきであると説く。だが、同じ仏教がもう一方で社会的な差別を認め、むしろ差別を積極的に生み出してゆく一面も持った。差別の原理となる業と輪廻の思想などを取り上げる。	同上	同上
15	思想史の中の仏教	仏教はそれぞれの文化圏において、それぞれ土着の思想と交渉しつつ展開した。土着の思想から影響を受けた面も、逆に土着の思想が発展するのに寄与した面もある。仏教をより広い思想史の中でどう位置付けるか、最後に考えてみる。	同上	同上

＝ 自然と文化の記号論（’０２） ＝（ＴＶ）

〔主任講師：池上嘉彦（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

私達の回りのさまざまなものの多くは、何らかの意味を持つものとして私達に関わってきます。つまり、私達は〈記号〉（何かを意味するもの）に満ち満ちた世界に住んでるわけで、このことは生命体一般とその環境世界にまで拡げて言えることです。人間の文化から自然の世界にかけてのさまざまな営みを記号現象として横断的に捉えてみる――現代の記号論の視点と可能性について考えてみます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	〈ことば〉と〈ことばらしいもの〉	〈記号〉という用語から、どのようなものを思いつきますか。〈記号論〉でいう〈記号〉は、私たちが日常〈記号〉ということで思いつくより、遥かに柔軟な概念です。そのことを理解するために、〈ことば〉から出発して、私たちの回りに厳密な意味での〈ことば〉ではないけれども、〈ことばらしいもの〉がいかに満ち満ちているかを考える。	池上嘉彦（昭和女子大学教授）	池上嘉彦（昭和女子大学教授）
2	〈ことば〉の再認識	広く〈ことばらしいもの〉について考える際、〈ことば〉はその出発点となる理論的枠組を提供してくれる。〈ことばらしいもの〉の範囲を拡げていくにつれて、〈ことば〉のどういう特徴が薄れ、またどういう特徴が加ってくるか－〈ことばらしいもの〉がどこまで〈ことば〉らしいかを考える。	同上	同上
3	〈意味〉の意味	既に説明の中で何度も出てきた〈意味〉とは、一体どのようなものと考えればよいのか。〈意味を担うもの〉と〈担われる意味〉という二項関係でなく、それにその意味が関わる〈主体〉を加えた三項関係として考えてみる必要のあること、そのような主体にとって差異を生むような差異がその主体にとっての意味であると考える。	同上	同上
4	記号の諸相（１）	〈記号〉と呼ばれるものには〈記号表現〉と〈記号内容〉という二つの側面がある。この二つの側面の間にはどのような関係があるのか。〈有契〉と〈無契〉という概念、それに基いての〈記号〉の分類の試みについて考える。	同上	同上
5	記号の諸相（２）	〈記号〉の二つの側面としての〈記号表現〉と〈記号内容〉のそれぞれについて、〈二重分節〉、〈表示義〉と〈共示義〉、〈有徴〉と〈無義〉、〈プロトタイプ〉など、考察に必要な基本的概念のいくつかを学ぶ。	同上	同上
6	記号の諸相（３）	いくつかの記号が集まって、〈メッセージ〉あるいは〈テクスト〉と呼ばれるまとまりが構成される。そのような、まとまりをなすということは、何かによって達成され、保証されるのであろうか。	同上	同上
7	記号の諸相（４）	〈メッセージ〉あるいは〈テクスト〉の〈機能〉の諸相を考える。とりわけ、それらのコミュニケーションの手段としての実用的な働きとは際立った形で対立する〈美的機能〉と呼ばれる側面、および、〈機能〉が〈構造〉を規定するというテーゼに注目する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	記号現象としての文化（1）	〈文化〉を〈記号〉（ないしは〈記号現象〉）として捉える〈記号文化論〉の考え方と実践を学ぶ。まず、〈ことば〉の関与の大きい広義の〈文学〉と呼ばれるものへの記号論的アプローチを考える。	池上嘉彦	池上嘉彦
9	記号現象としての文化（2）	〈ことば〉よりも〈イメージ〉的なものが中心的に関与する広義での芸術的なジャンル（写真、絵画、映画、音楽など）についての記号論的アプローチを考える。	同上	同上
10	記号現象としての文化（3）	人間の生活での衣食住に関わるさまざまな営みについて、記号論的に考えるということはどのようなことかを学ぶ。	同上	同上
11	記号現象としての文化（4）	現代の人間の日常の生活は、メディアを通してのあらゆる種類の記号の洪水の中で営まれている。広告、消費などといった生活の側面についての記号論的なアプローチを取りあげる。	同上	同上
12	記号現象としての生命（1）	生命の営みを〈記号現象〉として考えるまず最初の段階として、人間以外の動物や植物がその生きるという営みの中で〈ことばらしいもの〉とどのように関わっているか―〈動物記号論〉、〈植物記号論〉と呼ばれる分野を眺めてみる。	同上	同上
13	記号現象としての生命（2）	生物体にとっての〈環境世界〉と呼ばれる概念について検討する。生物体にとっては、外から入ってくる刺激に対して、自らの生存にとってそれが持つ意味に応じて適切に反応するという営みが欠かせない。どの生物体も、自らとの関連で意味づけされた世界を持っているのである。	同上	同上
14	記号現象としての生命（3）	さらに一歩踏み込んで、生命体の体内で生命維持のためになされているさまざまな営みにも、基本的には、関係する組織の間での意味の伝達、解読という記号過程が関わっている―こういう〈生命意味論〉の考え方を検討する。	同上	同上
15	記号の進化	人間が関わる記号の成立、進化ということについて、人間の身体性、人間の置かれている環境、そしてそこでの人間の経験といった要因が深く関与する。記号に刻印された人間らしさを確認する。	同上	同上

＝ 日本語の歴史（’０１）＝（R）

〔主任講師：坂梨　隆三（東京大学教授）〕
〔主任講師：月本　雅幸（東京大学助教授）〕

全体のねらい

古代から現在に到る日本語の変遷の実態を明らかにし、過去の日本語に対する基本的な知識と理解を与えることを目的とする。そして現在の日本語の諸問題や広く日本文化全体の理解にも資するように配慮する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	漢字の移入	上代の日本に漢字が伝わることによって、初めて日本語を文字によって記録することが可能になった。漢字移入の時期・実態・影響について実例を挙げながら述べ、併せて他の言語の文字を日本語に適用する際の問題点についても考える。	杉浦　克己（放送大学助教授）	杉浦　克己（放送大学助教授）
2	奈良時代の日本語音韻・語彙・文体	奈良時代には中国の影響を受けて文化が発展し、『万葉集』所収の歌が詠まれ、また『古事記』『日本書紀』などの文献が編まれるようになる。これらの文献から奈良時代の日本語の姿を見ると、そこには後世と大きく異なった点があることが分かる。音韻などについてそれを考える。	同上	同上
3	奈良時代の日本語文法	奈良時代の日本語の文法体系は平安時代のものとは大きく異なっており、形容詞の活用など、まだ十分に発達していないものもあった。実例と共にその実態を概観する。	同上	同上
4	平安時代の日本語文字・音韻	平安時代に入ると次々に日本語の歴史にとって重要な変化が発生する。平仮名・片仮名の発生がその一つであり、また種々の音韻変化は表記の多様性をもたらして仮名遣いの問題が発生する。これらについて考える。	月本　雅幸（東京大学助教授）	月本　雅幸（東京大学助教授）
5	平安時代の日本語語彙・文体	平安時代には奈良時代と比べると和語による表現が多彩になり、漢語も急速に浸透して行った。また、平仮名・片仮名による新しい文体が作り出され、多様な文体によって多くの文章が書かれるようになった。そのあり方を概観する。	同上	同上
6	平安時代の日本語文法	平安時代には形容詞の活用の完成、助動詞の発達など文法上の重要な変化が起こった。長く後世から規範とされた平安時代語の文法の特徴を明らかにする。また、高度に発達した敬語についても考える。	近藤　泰弘（青山学院大学教授）	近藤　泰弘（青山学院大学教授）
7	鎌倉時代の日本語文字・音韻・語彙・文体	鎌倉時代には貴族中心の時代から武士の時代となって、言葉の上でも大きな変化が生ずる。和漢混淆文が盛んに行われ、新しい語形の登場、漢字音の日本語化などが顕著であり、これについて見て行くことにする。	月本　雅幸	月本　雅幸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	鎌倉時代の日本語文法	文法事項においても鎌倉時代の言葉は平安時代のものから大きく変化しつつあった。終止形と連体形の合一化、係り結びの混乱などがそれである。また敬語においても「候ふ」の発達などが見られる。これらの変化を論ずる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
9	室町時代の日本語文字・語彙・文体・音韻・表記	室町時代には「抄物」や「キリシタン資料」と呼ばれる資料があり、当時の口頭語の姿をよく記録している。これらの資料を見ながら当時の発音の状況を初め、室町時代の日本語の実態を概観する。	坂梨　隆三（東京大学教授）	坂梨　隆三（東京大学教授）
10	室町時代の日本語文法	室町時代語はますます中世語としての性格を強め、係り結びの衰退、可能動詞の発生、各種助動詞の消長など、重要な変化が次々に起こって江戸時代の言葉への橋渡しをしている。これらの諸相について述べる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
11	江戸時代前期の日本語	江戸時代の日本語は、上方語と江戸語という方言差、武士と町人という階級差など、種々の対立によって特徴付けられる。江戸時代前期の文化の中心であった上方の言葉について、音韻・文法など種々の面から見て行く。	坂梨　隆三	坂梨　隆三
12	江戸時代後期の日本語	１８世紀も後半になると、文化の中心は江戸に移り、文学作品である「洒落本」「滑稽本」には江戸の言葉が生き生きと記録されている。ここに見られる江戸語のありさまを概観する。	同　上	同　上
13	明治時代以後の日本語 文字・音韻	明治時代になると、日本語を書き表すための文字についての議論が起こり、それはやがて漢字制限へと向かうこととなる。また、急速に入ってきた外国語の影響でそれまでの日本語にはなかった音節も使用されるようになった。これらについて論ずる。	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）
14	明治時代以後の日本語 語彙・文体	明治時代には西洋から大量の文物が流入し、それらの概念を日本語で表すための翻訳語（新漢語）が作られた。また、話し言葉を基本とした言文一致の口語体が成立した。このような大きな変化の跡をたどって行く。	同　上	同　上
15	明治時代以後の日本語 文法	明治時代以後の文法体系は基本的には前代のものを引き継いでいるが、それでも種々の面で変化が数多く見られ、それは現在の我々が明治の文章を読む際にも感じられることである。この変化を実例と共に概観する。	同　上	同　上

＝ 書誌学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉浦　克巳（放送大学助教授）〕

全体のねらい

文献資料（書籍）を扱う書誌学は、歴史学や文学のための基礎となるばかりでなく、書きことばの変遷の具現した姿をとらえる学でもある。様々な時代の書籍の実例を、形状や書き表わし方によって整理して示し、その特色を考えながら、実際に個々の資料を読みとることで、古文献資料を扱う基礎的な知識を概説しようとするのが本講義の主なねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	書誌学への扉	書籍さらには文字書写物一般の歴史の概略を振り返り、古文献資料を扱う書誌学の主な項目やその意義を概説し、より古い時代の書籍の代表的な形状や装丁の実物例を挙げて紹介し、講義全体への導入とする。	杉浦　克巳（放送大学助教授）	杉浦　克巳（放送大学助教授）
2	書籍の形状と料紙	書籍の形状や書函などの付随物についての基本的な事項を実物例を示して概説する。また料紙の材料や製法とその変遷、装飾などについて各々の特色を実際例を挙げて概説する。	同　上	同　上
3	書籍の取り扱いと保存・修補	書籍の取り扱いを様々な装丁や付属物について概説する。また保存方法や修補の実際例を紹介し、保存と利用の関係を考えることで閲覧の際の注意事項を併せて概説する。	同　上	同　上
4	平仮名の読み方(1)	平仮名の発生・発達を概説し、いわゆる異体仮名の読み方について、主に版本の平仮名文の実例を用いて、類型的な字形・字体の平仮名の読み方を概説する。	同　上	同　上
5	平仮名の読み方(2)	主に古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、字母漢字を考えながら読むことによって、いわゆる異体仮名をある程度読みこなす方法を概説する。	同　上	同　上
6	仮名文の読み方	主に漢字仮名交じりの古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、平仮名文・漢字仮名交じり文の表記方法としての特色を考え、文章の内容や前後関係等も考慮した上での平仮名文の読み方を概説する。	同　上	同　上
7	漢字の読み方(1)	主に行書の版本資料の実例を用いて、類型的な字形・字体を部首などによって整理して把握することで個々の文字を読みとるための参考とするための要点を概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢字の読み方(2)	主に行書の資料の実例を用いて、筆跡を辿りながら漢字を判読するための要点を概説し、複数の伝本を互いに参考にしながら読む実例を示す。	杉浦　克巳	杉浦　克巳
9	漢文の読み方	基本的な漢文の句法や助字などの漢文中での働きを整理して示し、漢文・変体漢文の表記方法としての特色を考え、返点や送り仮名がなくてもある程度基本的な文意を把握するための要点を概説する。	同　上	同　上
10	訓点資料と片仮名文	漢文訓読の歴史を辿り、漢文の訓読の仕方の変遷と基本的な訓点資料の読み方を概説すると共に、漢文訓読と共に発達してきた片仮名文の代表例を紹介する。	同　上	同　上
11	書状と文書	書状の代表的な様式を、仮名・漢文各々の実例を挙げて紹介すると共に、公式令に挙げられた基本的な文書の様式を、公文書の実例によって概説する。	同　上	同　上
12	辞書の利用	古辞書の発達の歴史を、「読むための辞書」と「書くための辞書」という観点から整理して概説すると共に、その性格を活かして古文献資料の読解に役立つ実例を示す。	同　上	同　上
13	書写の経緯	古文献資料の書写の経緯を、奥書や周辺資料から辿る実例を示すと共に、複数の本文を比較検討してあるべき本文を考える校合の基本的な方法を実例を挙げて概説する。	同　上	同　上
14	古筆	古筆資料の実際例を時代やジャンルで整理して挙げ、書風だけではなく文字や用字法の変遷という観点からも比較対照して、各々の特色を整理し概説する。	同　上	同　上
15	出版と書籍	近世頃から盛んになった印刷の歴史を整理概説し、印刷によって出版業や書籍の流通経路が整備されていった跡を辿る。さらにこの変遷の最先端としての現代の印刷・出版・流通の実際例を紹介する。	同　上	同　上

＝ 上代の日本文学（’００）＝（R）

〔主任講師：多田　一臣（東京大学教授）〕

全体のねらい

文学の誕生から平安遷都のころまでを上代とする。この講座では、その主要な作品、古代歌謡、『万葉集』『記紀』『風土記』などを読み解きながら、その展開を文学史的な観点から説明してみたい。上代日本文学の全体像を把握することがここでの目標となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文学の発生	文学の言葉は、日常的な言葉、事務的な言葉などとは異なる、幻想的な言葉、情緒的な言葉である。それは、古代では特別の言い方をもっていた。したがって、そういう言葉の成立をさぐるのが文学の発生になる。	古橋　信孝（武蔵大学教授）	古橋　信孝（武蔵大学教授）
2	古代歌謡の世界	古事記、日本書紀などに記されている歌謡は、古くから歌い継がれてきたものである。古いものゆえ、むしろ歌の構造をはっきりともっている。その構造を、同じ日本語文化圏の沖縄の古謡まで含めて考える。	同　上	同　上
3	万葉集の成立	万葉集が古代歌謡と違って、どの地域の人々にも理解しうるのは、都市的な言葉、いうならば共通語でよまれているからである。それゆえ、時代を超えて、われわれにも鑑賞することができる。そういう言葉の成立を考える。	同　上	同　上
4	初期万葉の世界	舒明天皇の時代から壬申の乱までの、中央集権体制が確立される激動の時代の和歌を初期万葉と呼ぶ。万葉の夜明けにふさわしく清新でのびやかな歌が多い。額田王の作品を中心にその世界をながめてみたい。	多田　一臣（東京大学教授）	多田　一臣（東京大学教授）
5	柿本人麻呂1	柿本人麻呂は万葉集最大の歌人である。宮廷歌人の第一人者として、多くの讃歌や挽歌を残している。長歌の様式を完成させたのも人麻呂である。そうした人麻呂の作品世界をながめつつ、その詩的達成について考えてみたい。	同　上	同　上
6	柿本人麻呂2	前回に引き続いて、柿本人麻呂の作品世界をながめる。さらに、人麻呂と並称される歌人である山部赤人についても考えてみたい。	同　上	同　上
7	旅人と憶良	万葉の盛時を築いた二人の歌人、大伴旅人と山上憶良について考える。脱俗的な風流の中に人生の哀感をうたった旅人、人生の苦悩や社会の矛盾をうたった憶良。対蹠的でありつつどこか重なりあう二人の生のありようを探っていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大伴家持 1	大伴家持は万葉集の編纂者に擬せられている。憂愁に満ちた感傷を繊細な表現でうたいあげて、独自な境地を開いたとされる。次代の和歌への橋渡しを果たした点も高く評価されている。その家持の作品を具体的にながめていく。	多田　一臣	多田　一臣
9	大伴家持 2	前回に引き続いて、大伴家持の作品世界をながめる。さらに、家持が紀女郎と交わした贈答歌を対象に、和歌を通じた当時の社交生活のありようについても考えてみたい。	同　上	同　上
10	東歌と防人歌——都と鄙	東歌も防人歌も、どちらも東国の衆庶の肉声を伝えた歌とされる。しかし、なぜ万葉集に東国の歌が収められたのかという理由は未解明のままである。ここでは、都と鄙という観点から、右の問題を考えてみたい。	同　上	同　上
11	漢詩文の世界	古代の官僚貴族たちにとって漢詩文は必須の教養だった。ここでは最初の漢詩集『懐風藻』を取り上げ、その作品世界をながめてみたい。中国詩学の影響を受けて成立した歌学書『歌経標式』についても触れてみたい。	同　上	同　上
12	歴史書の成立——記紀の世界1	八世紀の初めに成立した『古事記』と『日本書紀』は、大和朝廷が国家としての装いを整えるために要請された歴史書である。それはどのような過程を経て成立し、なぜ必要であったのか、そこには何が描かれているかということを考えてみたい。	三浦　佑之（千葉大学教授）	三浦　佑之（千葉大学教授）
13	神と人の物語——記紀の世界2	記紀には、神々の物語と歴代天皇の事績や系譜が語られている。ここでは、具体的な伝承を取り上げながら、記紀の神話や説話に描かれた世界がどのようなものであったのかということを論じていく。皆さんがよく知っている話も見つけられるはずである。	同　上	同　上
14	古代の民間伝承——風土記の世界	大和朝廷の命令を受けて、各国がそれぞれの土地に伝えられた伝承をまとめたのが『風土記』である。その成立の経緯を踏まえながら、現存風土記のいくつかを紹介する。そこには民間で語られていた伝承世界の多様性を見出すことができるはずである。	同　上	同　上
15	古代の説話——日本霊異記	説話文学は、貴族を中心とする古代文学の世界のいわば周縁に位置している。最古の説話集である『日本霊異記』を取り上げながら、説話文学誕生の史的意義を考える。	多田　一臣	多田　一臣

＝ 平安朝の文学（’０１）＝（R）

〔主任講師：小町谷　照彦（東京経済大学教授）〕
〔主任講師：鈴木　日出男（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

平安朝の文学とは、平安京開都（794年）から鎌倉幕府成立（1192年）以前までの、約400年間に及ぶ期間の文学のことである。ここには、漢詩文・和歌・物語・日記文学・説話など、多岐にわたる文学形態を通してきわめて豊穣な文学が出来ました。これらの特徴を、とりわけ重要な作品を通して、具体的に考えようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	唐風から国風へ	平安時代初頭、人々は中国的な文化に徹底的になじむところから、やがて自国の文化を導き出すようになる。そのような唐風から国風への転換期に、仮名文字の発明・和歌の再興・物語文学の成立などの文学史上の諸問題を考える。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
2	菅原道真とその周辺	歴史の転換期と目される九世紀末、すぐれる漢詩を作りあげた菅原道真の詩と思想について考える。また彼は死後、天神信仰としても民衆から支持されることになるが、それをも視野におさめながら、文化史上の道真の位相を明らかにする。	藤原　克巳（東京大学助教授）	藤原　克巳（東京大学助教授）
3	『古今集』の成立	十世紀初頭、最初の勅撰和歌集として成立した『古今集』は、王朝和歌の規範的な位置を占めるようになる。ここでは、「心」と「詞」の調和が重んじられているが、和歌の表現を解析しながら、その新しい詩としての和歌の本性をを明らかにする。	小町谷照彦（東京経済大学教授）	小町谷照彦（東京経済大学教授）
4	『竹取物語』と『伊勢物語』	十世紀初頭、文学史上はじめて、仮名散文によってつづられる物語文学が登場する。これは、平安朝文化を特徴づける重要な文学形態であるともいわれる。ここでは、その最初期の作品である『竹取物語』『伊勢物語』を通して、物語文学の本質を考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
5	文人たちの文学	十世紀ごろから、詩文のすぐれた教養をもって独自な人生を生きようとする個性が多く輩出する。文人的ともいわれるこれらの人々は、漢詩はもとより和歌・物語の制作にも手を染めた。十世紀末のすぐれた作品『うつぼ物語』をも視野に含め、彼らの活躍を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
6	日記文学の成立とその系譜	十世紀はじめに成立した紀貫之の『土佐日記』は、文学史上に日記文学という新しい形態を生み出した。そして十世紀末の『蜻蛉日記』以後、女性によって多くの作品が書かれるようになる。日記文学とは何かを考えながら、その系譜をたどってみる。	小町谷照彦	小町谷照彦
7	女流文学の隆盛	『古今集』時代の小野小町・伊勢など、いわゆる女流歌人の登場以来、女性たちが文学制作の重要な担い手になる。そして彼女たちは、和歌のみならず、日記文学や物語文学の分野でもすぐれた活動をみせる。そのような女流文学の本質を、さまざまな側面から考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『枕草子』の世界	十一世紀初頭、清少納言によって書かれた『枕草子』は、今日、随筆文学と呼ばれている。しかし、この時代には類例の作品は前にも後にもなく、孤立する存在である。王朝女流文学として『源氏』と並び称されるこの作品について、その独自な文学世界を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
9	『源氏物語』の世界	十一世紀初頭に紫式部によって書かれた『源氏物語』は、物語文学の最高傑作であるばかりでなく、日本文学史上屹立する存在である。それがいかに驚異的な作品であるかを、物語の構造や作中人物のあり方などを解析しながら考え、その本質に迫る。	同　上	同　上
10	和歌と物語	和歌という文学形態は、それ自体のみならず、多様な文学形態と深い関わりをもつ。とりわけ物語文学にとって和歌は必須の要件となっている。和歌とは何か、物語とは何かを考えるためにも、この課題は重要である。この問題を通して、平安朝文学の本質に迫る。	小町谷照彦	小町谷照彦
11	和歌文学の新風	十一世紀後半の『後拾遺集』の時代が、和歌史の転換期とされる。和泉式部の斬新な歌風が高く評価され直すのもそのころである。以後、次代の『新古今集』の時代に向かって胎動する和歌史の動向をとらえ、注目すべき歌人たちやその述作に注目する。	同　上	同　上
12	『狭衣物語』と『夜の寝覚』	『源氏物語』以後も物語が盛んに作られ、その伝統は鎌倉時代にまで続く。そうした平安朝後期以後の物語はおおむね『源氏物語』の影響下にあるところから源氏亜流の物語とみられがちだが、その中で卓越した二作品をとりあげ、その物語としての魅力を考える。	同　上	同　上
13	歴史と歴史物語	平安時代のはじめ六国史と総称される官制の国史が編纂されたが、やがてその伝統も絶えた。そこで制作されたのが、貴族の家々で記される記録の類であり、また十一世紀後半には歴史物語という新しい文学形態も成立する。こうした述作を通して、歴史意識の問題を考える。	藤原　克巳	藤原　克巳
14	説話文学の展開	平安朝初頭、仏教説話集として『日本霊異記』が編まれ、以後、仏教の布教活動との関係などから多くの説話集が成立した。なかでも後期の『今昔物語集』はさまざまな階層にわたる人間の生き方を描き、中世的なるものをも含んでいる点で注目される。これを考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
15	歌謡の諸相	宮廷の儀礼や宴と深く関わりながら、神楽歌・催馬楽・今様など、多様な宮廷歌謡が出来した。それらのなかには、地方的・庶民的なるものを汲みあげたものも少なくない。末期の『梁塵秘抄』には、中世的なるものも含まれている。そうした歌謡の多様性を考える。	同　上	同　上

＝ 中世日本文学の風景（’００）＝（R）

〔主任講師：久保田 淳（白百合女子大学教授）〕
〔主任講師：島内 裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

この科目は、日本の中世文学を地理に焦点をあてて概観する。各地を舞台にした作品やゆかりの文学者たちを取り上げ、中世文学を風土や時代性などの面から考察し、各地域の文学性を浮び上らせる。名歌や名場面を原文で紹介するとともに、それらの意味や背景をわかりやすく解説し、中世前後の時代の文学とも関連付けて論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西日本と東日本・京の都	はじめに日本史学でもしばしば議論される、西日本と東日本の違いについて考え、次に「愚管抄」「保元物語」「平治物語」「平家物語」などの作品に言及しながら、中世初頭における王城の地―京の都の文学史的意味を論ずる。	久保田 淳（白百合女子大学教授）	久保田 淳（白百合女子大学教授）
2	鎌倉	中世において鎌倉が果たした役割を、政治と文化の両面から考察する。源実朝・源光行・宗尊親王などの歌人・学者、「とはずがたり」などの作品、鎌倉武士たちに歌われた早歌などを取り上げる。	島内 裕子（放送大学助教授）	島内 裕子（放送大学助教授）
3	瀬戸内・西国	瀬戸内海は、京と四国、中国、九州地方を結ぶ交通の要路であり、また、日宋貿易で富を築いた平家のように、海外へ通じる海でもあった。歌枕や霊場を訪ねる旅人の往来や遠流の貴人も少なからず、海賊も出没し、港には遊女も集うたこの地方の文学を考える。	木下 資一（神戸大学教授）	木下 資一（神戸大学教授）
4	山陰道	配流の地である隠岐を中心に、後鳥羽院に関連して「新古今和歌集」「増鏡」などを扱い、後醍醐天皇に関連して「太平記」にも触れる。他に、中世における人麿影供や説話などにも言及したい。	村尾 誠一（東京外国語大学助教授）	村尾 誠一（東京外国語大学助教授）
5	陸奥	二度陸奥を旅した西行を中心に、この「辺境」の地の持つ問題を考える。他に、「義経記」や「御伽草子」などにも触れる。	同上	同上
6	東海道	京と鎌倉を結ぶ幹線道路である東海道を舞台とする中世文学の中から、主として紀行文を取り上げる。「海道記」「東関紀行」「十六夜日記」などの鎌倉時代の作品、および中世後期の漢詩文「梅花無尽蔵」などにも触れる。	島内 裕子	島内 裕子
7	東山道	東山道は古代以来、都と東国、陸奥を結ぶ重要な交通路であり、歌枕や霊場なども多いが、山岳地帯を通るゆえ旅の難所も少なくなかった。ここでは主として、信濃以西の国々を取り上げる。	木下 資一	木下 資一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	北陸道	木曽義仲は北陸道を都に攻め上り、一方「義経記」や能「安宅」語るところの義経は、この道をたどり、陸奥へ落ちのびたことになっている。この地方には、親不知などの難所も知られる。また流人の島として知られる佐渡に身を留めた歌人、宗教家、芸能者もいる。	木下　資一	木下　資一
9	大和・吉野	「平家物語」と「太平記」を軸として見て行く。中世始発期における南都の災上と復興、南北朝期の吉野が中心となるが、他にもこの地の持つ豊かな文学的な問題にも言及する。	村尾　誠一	村尾　誠一
10	南海道	紀伊国や四国の中世文学における意味を考える。中世文学に関わる人物としては、明恵・一遍・心敬など、文学の問題としては、補陀落渡海・道成寺縁起などを取り上げる。	久保田　淳	久保田　淳
11	関八州	鎌倉時代になりその重要性が飛躍的に増したこの地について考える。実朝をはじめ、「太平記」「神道集」など、さらには、宗祇や心敬などにも触れる。	村尾　誠一	村尾　誠一
12	叡山と高野	天台宗の総本山比叡山延暦寺と真言宗の総本山高野山金剛峯寺が中世の文学や文化で果した役割について考察する。作家としては慈円・西行など、作品としては「拾玉集」「山家集」「平家物語」「高野物語」「三人法師」説経「かるかや」などに言及する。	久保田　淳	久保田　淳
13	筑紫	主として中世後期における筑紫の文学的位置付けを考える。浄弁の筑紫下向や宗祇の「筑紫道記」など歌人・連歌師の活動、細川幽斎の文武にわたる活躍、および木下長嘯子などの戦国武士について取り上げる。	島内　裕子	島内　裕子
14	異郷・異界	中世文学の舞台は、日本の国土に限らない。天竺・唐土などの異郷やまた神仏や鬼・天狗・龍神などの住む異界もその舞台であった。中世の日本人は外国をどのように捉えていたか、その宇宙観・世界観はどのようなものなのか考える。	木下　資一	木下　資一
15	京	中世から近世への時代の転換を、京およびその周辺に焦点をあてて考察する。主として兼良・宗祇・実隆・守武・幽斎などを取り上げ、新しい文学の展開を眺望する。	島内　裕子	島内　裕子

＝ 近世の日本文学（'９８）＝（R）

〔主任講師：長島　弘明（東京大学教授）〕
〔主任講師：清登　典子（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

中世までの文学は、貴族や武家などの支配層によって作られ享受されていたが、近世（江戸時代）の文学は、被支配層である町人が作者・読者として大きな役割を果たすようになり、前代とは異なった様々なジャンルの作品が生まれた。その多様な近世文学の成立・展開の様相を、作家・作品に即して具体的に見てゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世文学の特徴	前代の文学と比較した時の近世文学の顕著な特徴を、出版文化の成立と大衆化、雅俗の並立・混淆の様相、滑稽と教訓の要素、上方と江戸の地域的な対比等々、様々な観点から考察する。	長島　弘明（東京大学教授）	長島　弘明（東京大学教授）
2	仮名草子から浮世草子へ	近世初期の小説である仮名草子の諸相に触れ、その特徴を明らかにする。また、仮名草子に代わる新しい小説形式である浮世草子の初作、井原西鶴の『好色一代男』の出現の意義について説明する。	同上	同上
3	西鶴の文学	西鶴の伝記を略述し、好色物・武家物・町人物等の西鶴浮世草子の各作品について、それぞれのテーマ的特色等を考察する。あわせて、八文字屋本等の西鶴以後の浮世草子について通覧し、浮世草子の展開の様を探る。	同上	同上
4	貞門・談林から蕉風俳諧へ	俳諧の源流から、近世俳諧の形式を定めた貞門俳諧、新風としての談林俳諧、さらに芭蕉の登場までを扱う。主要俳人と作品について触れながら、各派の特色を説明する。芭蕉については、深川隠棲までの時期を対象とする。	清登　典子（筑波大学助教授）	清登　典子（筑波大学助教授）
5	芭蕉の文学	天和期以降の芭蕉の俳諧について考察する。俳風（連句・発句）の時期的な変遷、蕉風俳諧の理念と表現、俳文と紀行の意義等、多方面から考察する。必要があれば、門人についても適宜触れることにする。	同上	同上
6	浄瑠璃と近松門左衛門	浄瑠璃の歴史を、近松門左衛門を中心に概観する。浄瑠璃の成立、古浄瑠璃、近松の人と時代物・世話物の各作について、また海音・宗輔・出雲・半二、江戸浄瑠璃等、近松以後の浄瑠璃の展開について解説する。	池山　晃（大東文化大学助教授）	池山　晃（大東文化大学助教授）
7	国学と和歌	伝統的な歌学から国学への学問的革新と平行する形で、堂上派から古学派・江戸派、あるいは蘆庵・桂園派など、様々に展開して行った近世和歌の歴史を説明する。幕末の良寛・元義・言道・曙覧らにも触れる。	鈴木　健一（日本女子大学教授）	鈴木　健一（日本女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢学と漢詩文	朱子学・古義学・徂徠学の文学観をとりあげ、儒学各派の詩文に対する見解を押さえつつ、文山・元政から古文辞派の擬古主義、反古文辞の江湖社、幕末の個性的な詩人たちまでの、漢詩文の変遷を解説する。文人の概念についても触れる。	鈴木　健一	鈴木　健一
9	前期読本と上田秋成	前期読本成立の背景に触れ、都賀庭鐘・建部綾足の読本、さらに上田秋成の文業を、『雨月物語』『春雨物語』を中心にして考察する。浮世草子との相違、また後期読本との相違等にも言及する。	長島　弘明	長島　弘明
10	中興期俳諧と蕪村	芭蕉没後の享保期俳諧から説き起こし、蕉風中興運動の経緯について概説し、この時期を代表する文人風の俳人である、与謝蕪村の人と作品について考察する。蕪村の俳論俳詩等にも言及する。	清登　典子	清登　典子
11	一茶と雑俳・川柳	蕪村以後の俳諧大衆化時代の後期俳諧を、一茶調と呼ばれる個性的な句を多く残した小林一茶を中心に概観する。また、雑俳について略述し、特に川柳について、その庶民詩としての本質について解説する。	同　上	同　上
12	笑いと舌耕の文学	笑いを旨とした文学形式である狂歌・狂詩・咄本の流れをそれぞれ概説し、近世的な笑いの質について考える。また、仏教談義・講談と密接な関係を持つ、舌耕の小説ともいうべき仏教長編小説・実録体小説について略述する。	板坂　則子（専修大学教授）	板坂　則子（専修大学教授）
13	江戸の戯作　(1)	文運東漸後、江戸で盛んになった小説類について概説する。本章では、江戸小説の草分けといってよい『当世下手談義』以下の談義本、遊里を舞台とする洒落本、画文が同等の比重を持つ黄表紙、洒落本の流れを引く滑稽本を取り上げる。	同　上	同　上
14	江戸の戯作　(2)	江戸中心の小説の続き。後期読本の展開を、山東京伝・曲亭馬琴の作品を中心に概観する。また、市井の男女の恋愛を描いた人情本、黄表紙の後継ジャンルである合巻について解説し、それぞれの小説としての特徴を検証する。	同　上	同　上
15	歌舞伎と南北・黙阿弥	歌舞伎の歴史を、後期を中心に概観する。歌舞伎の成立、元禄歌舞伎、丸本物の時代、正三・五瓶・治助、特に鶴屋南北・河竹黙阿弥の作に比重をおいて解説する。歌舞伎役者についても、適宜言及する。	池山　晃	池山　晃

＝近代の日本文学 （’０１）＝（R）

〔主任講師：野山 嘉正（放送大学教授）〕
〔主任講師：安藤 宏（東京大学助教授）〕

全体のねらい
明治期から現代に至る近代の日本文学の全体像を描くのがねらいである。通常の文学史の枠に必ずしもとらわれることなく叙述し、主としてジャンル別に流れを辿り、さらに、相互の関連を意識しつつ考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに―近代という時代	本講義の目的と方法について述べる。年代順に整理せずにジャンル別に構想したことの説明から始めて、全体の配置を紹介する。最後に近代文学とは何であったのかを考えるのが目的であることを明らかにする。	野山 嘉正（放送大学教授）	野山 嘉正（放送大学教授）
2	詩歌Ⅰ―詩歌の新時代・近代の始動	詩歌における旧時代から新時代への変化を叙述し、漢詩・和歌・俳諧が漢詩・新体詩・短歌・俳句へと姿を変える様相を描写する。こういう推移の過程から、日本の近代文学の方向が規定されることを論ずる。	同上	同上
3	詩歌Ⅱ―口語詩の確立と短歌・俳句	明治末期から大正期・昭和期戦前における、口語詩の確立と短歌・俳句の変貌を、それぞれのジャンルごとに素描しつつ、詩歌としての文学状況を把握する。	同上	同上
4	詩歌Ⅲ―戦後詩歌へ	昭和十年代の、いわゆる戦時下の詩歌のありかたから、敗戦による反省と回生をまず総括する。次いで第二芸術論による打撃からの短歌・俳句の立ち直りの過程を辿り、現代詩歌考察の手がかりを提示する。	同上	同上
5	小説Ⅰ―文明開化と「文学の変容」	西洋文明の移入、言文一致運動の動向、メディアや出版形態の変化などに留意しつつ、現在「小説」と名付けられているジャンルがどのように成立したのかについて考察する。明治の初頭から、二十年代の尾崎紅葉、幸田露伴までを中心に扱う。	安藤 宏（東京大学助教授）	安藤 宏（東京大学助教授）
6	小説Ⅱ―日清、日露戦争期の文学	日清、日露戦争期にあって、ナショナリズムの台頭、浪漫主義的な傾向、社会の現実を直視して行く傾向が、それぞれ小説にどのような形で表れてくるかを考察する。樋口一葉、国木田独歩、泉鏡花らを中心に、明治二十年代、三十年代を扱う。	同上	同上
7	小説Ⅲ―自然主義文学と漱石・鴎外	明治二十年代から四十年代にかけて、西洋の自然主義文学がそのような形で受容されたのを、島崎藤村、田山花袋を中心に考察する。これらに関連して、「写生文」の動向、大正初頭にかけての夏目漱石、森鴎外の活動状況について考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説Ⅳ―大正文壇の成立	明治の末期、反自然主義的な文学動向が表れ、それがどのように大正文壇を形成して行くかについて考察する。大逆事件の影響、永井荷風、谷崎潤一郎ら耽美派の動向、白樺派の活動、芥川龍之介のデビューなどを扱う。	安藤　宏	安藤　宏
9	小説Ⅴ―マルキシズムとモダニズム	大正後半から昭和初頭にかけての状況を、ソビエト文化とアメリカ文化の受容に注視しつつ考察する。心境小説の成立、関東大震災の影響、メディアの変容と大衆文学の成立、新感覚派の文学運動、プロレタリア文学の展開などを扱う。	同　上	同　上
10	小説Ⅵ―第二次世界大戦と文学	モダニズム文学の消長、転向文学、昭和十年前後の「文芸復興」などについて触れた上で、第二次世界大戦との関わりを、ナショナリズム、ファシズムの日本的な形態の特色、アジアの中の日本文学、といった観点から考察する。	同　上	同　上
11	小説Ⅶ―戦後文学の展開	昭和二十年代から三十年代にかけての文学状況を、「無頼派」の作家たち、第一次戦後派の動向、「第三の新人」たちの作風などについて叙述することから開始する。三十年代以後の展開も流れとして解明し、文学にとって「戦後」とは何であったのかを考える。	同　上	同　上
12	演劇Ⅰ―旧劇から新劇へ	近世演劇から近代演劇の発生への過程を辿り、大正期に至る多彩な演劇運動の特質を解明する。さまざまな層位の活動を、文学と演劇との関連をも包摂しつつ、近代における演劇全体の様態を展望する。	林　廣親（成蹊大学教授）	林　廣親（成蹊大学教授）
13	演劇Ⅱ―戦前から戦後へ	思想運動としての演劇が盛んであった、昭和期戦前から戦後にかけての、新劇の流れを辿り、さらに戦後社会の発展にともなう演劇状況全体の推移を描写し、文化論への展望をも開く。	同　上	同　上
14	近代批評の成立	西洋文化の移入と文学の内外についての自覚が深い関係にあることから説き起こし、坪内逍遙・森鴎外らの立場を中心に考察する。これが昭和初期に至る西洋文学研究の進展につれて変化していくさまを叙述する。	野山　嘉正	野山　嘉正
15	近代批評のゆくえ	小林秀雄の位置から戦後批評に至る流れを全体として把握し、その後の変質についても素描を試みる。昭和十年代の古典復興が文壇や学界を支配したさまや、その戦後への影響をも論じ、近代文学の全体像への基礎を提示する。	同　上	同　上

＝ 徒然草の遠景（’９８）＝（R）

〔主任講師：島内 裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
徒然草下巻の世界を辿りながら、そこで展開される批評の達成について遠望するとともに、徒然草を随筆として捉える従来の考え方を再検討し、日本文学の中で、徒然草とは何であったのかという、新しい位置づけを提示する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	内景から遠景へ	徒然草上巻の世界を振り返り、下巻への展望を示す。	島内 裕子（放送大学助教授）	島内 裕子（放送大学助教授）
2	王朝の余薫	第１３８段・１３９段を中心に、王朝文学の余韻が、なぜここに書かれているかを探る。	同上	同上
3	人間観さまざま	第１４０段から１４６段までを中心に、人間観の描かれ方を考える。	同上	同上
4	外界と内界	世間とのかかわりについて、兼好がどのように捉えていたかを考える。	同上	同上
5	筆法の変化	上巻と比べて、下巻の書き方には、どのような特徴がみられるかを探る。	同上	同上
6	時間の遠景	徒然草に多数みられる有職故実の章段を、新しい視点から捉え直す。	同上	同上
7	批評の達成	徒然草における批評の到達点について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	個性と普遍	徒然草に登場する個性的な人物群像と、人間の普遍性について考える。	島内　裕子	島内　裕子
9	兼好の憂愁	徒然草末尾の数段に現れる兼好の心情を探る。	同　上	同　上
10	八つになりし年	徒然草最終段をめぐって、なぜここで擱筆されたのかを考える。	同　上	同　上
11	晩年の兼好	徒然草執筆終了後から最晩年までの、兼好の事跡を辿る。	同　上	同　上
12	徒然草の復活	室町時代から近世にかけて、徒然草が再発見される過程と、徒然草研究の開始について概観する。	同　上	同　上
13	近世における徒然草	芭蕉や宣長たちにみる徒然草の影響力について考える。	同　上	同　上
14	近代における徒然草	近代における徒然草研究史、および近代の文学者への影響力について考える。	同　上	同　上
15	徒然草とは何か	日本文学における徒然草の位置付けを，文学史の中に遠望し、徒然草とは何であったのか、その新しい文学像を提示する。	同　上	同　上

＝ 中国明清時代の文学（’０１）＝（R）

〔主任講師：大木　康（東京大学助教授）〕

全体のねらい

この講義では、中国の明・清両代の文学について、その中国文学史上の特色を概観し、詩文、戯曲（『牡丹亭還魂記』『桃花扇』、小説（『三国志演義』『水滸伝』『聊斎志異』『紅楼夢』）など個々の代表的作品をとりあげてその魅力を探ってみたい。あわせて、日本文学への影響についても考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	明清の時代とその文学的特徴	まずは背景となる明（1368－1644）および清（1644－1911）の時代の状況について概観し、多様なジャンル、数多くの作者・作品、作品のヴォリュームなどの点からその文学的特徴を概観する。	大木　康（東京大学助教授）	大木　康（東京大学助教授）
2	明代の詩と詩論（1）－擬古主義の流れ	今日の目から見れば、明代には必ずしも唐代の李白、杜甫に匹敵するような作者はいないが、この時代は文学理論の時代といってもよく、さまざまな主張が現れた。まずは明代中期に一世を風靡した擬古派（古文辞派）について述べる。	同　上	同　上
3	明代の詩と詩論（2）－反擬古主義	明代の後期に至って、擬古派に反対の主張を唱えるグループが現れた。この講義では、その中から袁宏道らの公安派を中心に考える。彼らの主張はまた、明一代を代表する文学ジャンルである通俗小説の成立にも関連している。	同　上	同　上
4	明代の小説（1）－『三国志演義』	明代に完成した白話小説の代表的作品の一つ、『三国志演義』について紹介する。ここでは白話小説ジャンルの源流である宋代の「説話（講談）」、元代の先駆的作品など、主としてそのジャンルの前史について考える。	同　上	同　上
5	明代の小説（2）－『水滸伝』	日本でもよく知られる白話小説の一つ、『水滸伝』は、明代末期の人々にとりわけ好まれた作品である。アウトローの世界を描いたこの作品のどこが当時の人々の心をとらえたのか、李卓吾や金聖歎などによる批評を材料にして考えてみたい。	同　上	同　上
6	明代の小説（3）－『金瓶梅』	『金瓶梅』は、いくつかの意味において、中国の通俗小説の一大転換点に位置する作品である。人々の日常生活を微細に描き、人間の欲望を描き出したこの作品について考える。作者や成立事情についても解説する。	同　上	同　上
7	明代の戯曲－湯顕祖の『牡丹亭還魂記』	多様なジャンルの一つとして明代にたいへん盛んだったのが、戯曲である。その中から、明代の末期における元曲『西廂記』の流行現象、そして当時の作品、湯顕祖の『牡丹亭還魂記』を取り上げて考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	馮夢龍と通俗小説	従来は俗なるものとして軽視されていた通俗小説が、なぜこの明代の末期になって大量に刊行されるようになったのか。こうした疑問に、当時の通俗文学の旗手とされる馮夢龍という人物にスポットをあてて考えてみたい。まずは主として精神的背景について。	大木　康	大木　康
9	馮夢龍の出版活動	馮夢龍は、幅広いジャンルにわたる多くの著作を残しているが、当時の出版業との密接な関係がその活動を解明するための一つのカギになる。前回に引き続いて、馮夢龍の生涯を概観し、当時の文学者をとりまく状況について考えてみたい。	同上	同上
10	清代の詩と詞	清の時代にあっても、やはり文学の中心は詩文であった。銭謙益、呉偉業、王士禎などの詩人の作品を取り上げて鑑賞する。明から清への時代の変化、また清代に盛んに作られた詞についても論じたい。	同上	同上
11	清代の戯曲 －『桃花扇』と『長生殿』	清の時代を代表する戯曲の二作品、『桃花扇』と『長生殿』を紹介する。とりわけ『桃花扇』は明末清初の歴史に取材した歴史物の戯曲である。この作品にこめられた意義などについて考える。	同上	同上
12	清代の小説（1） －蒲松齢と『聊斎志異』	怪異小説集として蒲松齢の『聊斎志異』は名高い。蒲松齢は当時の官僚登用試験である科挙に落第を続けた。その不平のはけ口がこうした怪異の話を聞き集め、書きつづることだった。その生涯と作品について考える。	同上	同上
13	清代の小説（2） －呉敬梓と『儒林外史』	『儒林外史』は科挙制度を批判した作品としてよく知られる。そこには当時のあらゆる種類の知識人の生態が生き生きと描かれている。呉敬梓はなぜこうした作品を著すにいたったのであろうか。その生涯と作品を概観する。	同上	同上
14	清代の小説（3） －曹雪芹と『紅楼夢』	わが国の『源氏物語』にも比せられる長編の恋愛小説が『紅楼夢』である。その作品について概観する。この作品がなぜ生まれたか、それは作者曹雪芹の悲劇的な生涯とも密接に関わっている。	同上	同上
15	明清の文学と日本	明清時代の文学作品は、室町から江戸にかけての日本、とりわけ江戸時代の文学に大きな影響を与えている。明清時代の中国文学がわが国の文学作品にどのような影響を与えたかについて考えてみたい。	同上	同上

＝古代日本の歴史（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　信（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本の古代史像は、最近の発掘調査成果をふくむ様々な新資料の出現によって豊かになりつつある。また国際関係、各地域の歴史や古代都市像などの解明が進み、一元的な古代国家中心の史料は見直されつつある。こうした研究動向に焦点をあてながら、あたらしい古代史をたどってみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	あたらしい古代史	文献史料や出土文字史料その他の古代史が取り扱う様々な歴史資料を紹介し、学際的な視野の必要性を提示するとともに、中央と地方の関係、国際関係、古代都市像などをめぐる古代史研究の新動向を整理する。	佐藤　信（東京大学教授）	佐藤　信（東京大学教授）
2	邪馬台国の時代	中国文献が伝える列島の様相を改めて整理し、魏志倭人伝が伝える３世紀前後の古代社会像と、集落、戦い、祭祀をめぐる発掘調査成果とつき合わせて、（邪馬台国の所在はともかく）弥生時代の社会像を提示する。	倉本　一宏（駒沢女子大学教授）	倉本　一宏（駒沢女子大学教授）
3	大王と地方豪族	古墳時代の鉄剣銘文などの出土文字史料や宋書倭国伝が語る世界を明らかにし、磐井の乱などの反乱伝承にも焦点をあてて、５～６世紀の大王と地方豪族の関係を、王権中心ではなく複眼的に整理する。	同　上	同　上
4	飛鳥の王権	７世紀前半の大王推古時代を中心に、蘇我氏の権力、厩戸王（聖徳太子）の実像といった政治の在り方と、仏像（百済大寺）など文化の動向とを明らかにし、官司制整備に向かう倭王権の支配構造を整理する。	同　上	同　上
5	律令国家への道	7世紀後半～８世紀にかけて、「大化改新」から天武・持統天皇時代の藤原京の造営、律令の導入などを経て律令国家が確立する過程を、木簡から知られる７世紀の地方豪族のあり方とともに整理する。	佐藤　信	佐藤　信
6	奈良時代の政治動向	奈良時代の変乱があいつぐ政治史を、皇位継承を軸にしながら藤原氏その他各氏族の動向とともにたどり、この時代が貴族たちにとって決して安穏な時代ではなかったことを明らかにする。	同　上	同　上
7	古代の宮都と地方官衙	平城京や長屋王邸宅における生活や経済基盤などを、木簡などの史料から明らかにするとともに、国司による地方支配のあり方に注目しつつ、国府・郡家などの地方官衙と在地の社会との関係についての最近の研究成果を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遣唐使と天平文化	遣唐使の困難な行程を吉備真備などの人物に焦点をあてながらたどり、彼らがもたらした政治・文化の位置づけを行うとともに、中央の正倉院や地方の寺院遺跡などの文物からその文化的広がりを考える。	佐藤　信	佐藤　信
9	平安王朝への道	奈良時代の天武系にかわる天智系の新しい皇統の登場、桓武天皇による対蝦夷戦争と新都造営、そして桓武晩年の徳政論争による両者の停止など、平安新王朝確立への歩みを概観する。	同　上	同　上
10	平安京とその文化	嵯峨天皇による新政治文化の展開と平安京の確立をみた上で、平安京の都市としての成熟とともに、平安新仏教やカナの展開など、その後の日本文化に影響を与えた平安初期の文化の意義について明らかにする。	同　上	同　上
11	藤原氏の台頭	9世紀半ばからの藤原北家の台頭を相次ぐ他氏排斥事件の順に整理し、天皇と「前期摂関」との関係を軸としながら、宇多天皇時代の政権構造や菅原道真左遷事件など、摂関政治に至るまでの政治過程を整理する。	同　上	同　上
12	摂関時代の政治と文化	摂関政治の構造を地方支配のあり方をふくめて概説し、摂関時代の貴族の政務のあり方を紹介する。そして摂関と天皇との関係の実情を説くとともに、国風文化の意義について明らかにする。	佐々木恵介（聖心女子大学教授）	佐々木恵介（聖心女子大学教授）
13	受領と地方社会	10世紀からの地方支配の要となった受領に焦点をあて、受領の任国支配、受領と地方豪族との関係や受領の任国往来などのあり方を明らかにしつつ、院政期まで含めて、中央と地方との関係を概観する。	同　上	同　上
14	院政の時代	後三条天皇から院政に至る政治過程を整理し、院政期の院・天皇・摂関の関係に焦点をあてながら政治構造を明らかにするとともに、この時代の文化について考える。	同　上	同　上
15	北と南の古代史	日本列島の古代史を律令国家一元論で見るのではなく、蝦夷・北海道の歴史や琉球における統一国家の形成を視野に入れた上でとらえ直す観点を提示する。そして、講義全体のまとめを行う。	佐藤　信	佐藤　信

＝ 日本の中世（’９８）＝（R）

〔主任講師：五味 文彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本の中世社会の歴史とその特質を明らかにすることを第一のねらいとして、さらにそれが現代社会とどう関わっているのかを考えることとする。中世社会のあり方は混迷する現代社会を考える手がかりともなる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中世という時代	中世社会の時代区分やその特徴について通観する。中世社会の歴史を学ぶための史料や学習・研究の意義についても考える。	五味 文彦（東京大学教授）	五味 文彦（東京大学教授）
2	幕府の誕生と成長	源平の争乱や、朝廷との交渉を経て、以降７００年存続する“武士の政権”が誕生する。鎌倉幕府の歩みを追いながら、武士とはいかなる存在なのかを考えてゆく。	本郷 和人（東京大学助教授）	本郷 和人（東京大学助教授）
3	廟堂の群像	鎌倉幕府の成立は朝廷のありように多大な影響を与えた。幕府と共に歩もうとする者、激しく対立する者。個性豊かな朝廷の指導者たちに言及しながら、朝廷の政治・経済を概観する。	同上	同上
4	文書と日記の世界	中世社会を知る手がかりになる史料には、文書と日記がある。両史料を読みこむことにより、人々のいぶきにふれる。また文書、日記の残存状況を考慮しながら、文学史料の可能性にも言及する。	同上	同上
5	都と鄙の遊びとくらし	京の都では朝廷の文士が優雅に文化空間を生成し、地方では武士を中心に新しい文化が育くまれてた。彼らの日常を復原しながら、鎌倉文化の特質に迫る。	同上	同上
6	蒙古来襲	モンゴルの来襲は日本社会に大きな衝撃を与えた。御家人制はゆらぎ、それを抑えるために幕府は専制へと歩み始める。幕府の姿勢と在地領主たちとの矛盾は増大し、また悪党が活発な行動をみせる。	同上	同上
7	再生する仏教	天台・真言両宗は朝廷と深く結びつき、“仏法と王法は車の両輪”といわれた。両宗は貴族化し、人々の救済はなおざりにされていたが、やがて天台宗の中から新しい仏教が誕生する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世社会の転換	蒙古襲来の打撃、貨幣経済への対応に苦しむ幕府に対して、朝廷は承久の乱の敗北後、着実に力を蓄えていった。やがて朝廷は後醍醐天皇の指導のもとに討幕を成功させる。朝幕の関係を述べながら、中世社会が転換していくさまを述べる。	本郷　和人	本郷　和人
9	『太平記』の時代	建武の新政から南北朝動乱期にかけての政治・経済・社会の動向を、この時代を活写した軍記物語『太平記』に拠りながら概観する。国人一揆の形成や荘園の生活、請負代官の活動といった地方の動向にも言及する。	櫻井　英治（北海道大学助教授）	櫻井　英治（北海道大学助教授）
10	室町殿と守護大名	室町幕府の最盛期であり、また将軍専制化の時代ともいわれる義満・義持・義教の三代から応仁・文明の乱にいたるまでの政治過程を、将軍と守護大名との対抗関係や家の企業体的性質等に着目しながら概観する。	同　上	同　上
11	「日本文化」の生成	日本の伝統文化の原型といわれる室町文化（南北朝・北山・東山文化）の実像を、室町幕府の財政体質や唐物好みの盛衰、世阿弥・心敬の芸術論等に着目しながら明らかにし、その後の戦国～桃山文化との系譜関係を考える。	同　上	同　上
12	村と町の誕生	室町～戦国時代に形成され、その後の日本社会を長く規定してゆくことになった村（惣村）と町の成立過程とその構造・特質等について検討し、日本における自治の系譜のついて考える。	同　上	同　上
13	戦国大名と地域社会	戦国大名の権力としての先進性を、法思想や政治理念、権力基盤などの諸側面から解明するとともに、戦国大名の分国をはじめ、国一揆、一向一揆など、さまざまな地域的権力によって国土を分断された戦国期日本の歴史的位置を考える。	同　上	同　上
14	アジアの中の中世日本	中世日本が当時のアジア世界の中で経済的、文化的にどのような位置を占めていたのかを、中国銭・手形の流通や倭寇の活動、貫高制から石高制への移行の問題などに触れながら、また中国や朝鮮、蝦夷地、琉球など周辺の諸国・諸地域の社会にも目を配りながら検討する。	同　上	同　上
15	中世から現代に	中世社会が現代社会とどのように関わっているのか、歴史的にどう位置づけられるものなのか、これらの点をこれまでの講義の上に立って明らかにしてゆく。	五味　文彦	五味　文彦

＝ 日本の近世（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大口勇次郎（元お茶の水女子大学教授）〕
〔主任講師：高木　昭作（放送大学教授）〕
〔主任講師：杉森　哲也（放送大学助教授）〕

全体のねらい

豊臣秀吉が全国を統合した1590（天正18）年から、徳川慶喜が政権を朝廷に返還した1868（慶応４）年までを近世といい、その支配のしくみを幕藩制という。この講義では、幕藩制の成立から解体に至るまでの歴史的諸事象を素材としながら、近世または幕藩制が日本史・世界史のなかでどのような特質をもつのかを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世とは	第二次大戦直後の「民主化」の時期、近世（江戸時代）とは「封建性」の時代であり、それだけで否定されるべき時代であった。この「封建的」の内容が、門閥制すなわち家格制に他ならないことを、福沢諭吉『旧藩情』などを通じて紹介するとともに、また最近の江戸時代観をも紹介して導入部とする。	高木　昭作（放送大学教授）	高木　昭作（放送大学教授）
2	将軍の軍隊	「家格制」の「格」とは、家老・組頭・物頭・組士・足軽などをいい、近世軍隊の編成における武士の位置づけ、役割りを意味する。すなわち近世大名の軍団は家老を大将（指揮者）とするいくつかの備（そなえ）からなるが、各備は、物頭が率いる鉄砲、弓、槍の足軽隊、組頭が率いる騎馬の武士（組士）の組、農民からなる小荷駄（輜重隊）で構成されていた。兵糧を大名が準備し、大名が編成した小荷駄に運ばせるのは、戦国大名の軍隊にはないシステムであり、これによって、近世大名の軍隊は戦国大名のそれにはない機動性を獲得した。	同上	同上
3	「惣の無事」令と近世の軍隊	一五八五（天正一三）年、関白となった秀吉は、全国統合を開始するにあたって、「叡慮」を背景として戦国大名たちに交戦を即時停止し、領土の帰属を秀吉の裁定に委ねるよう命令した。これを拒否した九州の島津氏や小田原の後北条氏を「征伐」した。このような「征伐」戦の結果、諸大名や土豪が武力により領土を争う戦国時代が終熄し、秀吉による全国の統合が完成した。	同上	同上
4	近世の神国観	近世の軍隊を構成する上で不可欠な小荷駄隊は、農民「役」として駄馬と人夫（陣夫）を徴発することが不可欠であったが、そのために秀吉は天皇から任命された関白の地位を十二分に利用し、戦国の世に終止符を打って国土に平和をもたらすという名目で「惣の無事」令を施行した。その「惣無事」令が国民的に受容された素地として、天皇の存在を前提とした神国観があったことを述べる。	同上	同上
5	下克上から門閥へ	以上1～4の知識を前提に、下克上の凍結（「惣の無事」令）に始まった近世の社会と国家が、どのようにして伝統化したのかについて、初期御家騒動を通じて考える。	同上	同上
6	描かれた近世の都市 (1) －「洛中洛外図」の成立と展開－	戦国末期から近世初頭にかけて、都市の諸相を描いた屏風絵が出現する。洛中洛外図に代表されるこれらの屏風絵は、美術史のみならず都市史の上でも貴重な研究史料であるといえる。本章では、洛中洛外図を主たる素材として取り上げ、その成立と展開の過程を見るとともに、絵画史料分析の方法についても検討を試みる。	杉森　哲也（放送大学助教授）	杉森　哲也（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	描かれた近世の都市(2) －幻の「安土図屏風」－	本章では、前章に続き「描かれた近世の都市」というテーマを取り上げる。前章では洛中洛外図を中心として都市図屏風の成立と展開の過程を見たが、本章では安土の城と城下町を描いた一つの屏風絵を取り上げる。この安土屏風について、関連史料から詳細を明らかにするとともに、そ　の歴史的意義について検討する。	杉森　哲也	杉森　哲也
8	町（ちょう）	町（ちょう）は、近世の都市における最も基礎的な自治・支配の単位である。町人たちによって構成される町中をその中核とする身分的な共同体でもあり、村と並んで近世における最も基本的な社会集団であるといえる。本章では、町が最も早期に成立した京都の町を事例として取り上げ、その特質について検討する。	同　上	同　上
9	巨大都市・三都	三都とは、江戸・京都・大坂の三つの都市を意味する。これら三つの都市は、人口規模をとっても、江戸が約100 万人、京都・大阪が約30～40万人にも達する巨大都市であった。そして、いずれも幕府の直轄都市であるとともに、幕藩制の中で固有の機能を有していた。本章では、三都が持つ機能の特質の一端について検討する。	同　上	同　上
10	近世の考古学	近年の近世史研究の新しい動向の一つとして、近世の考古学を挙げることができる。これまで日本考古学は、原始・古代を主たる研究対象としてきた。しかし、近年は中世さらには近世をもその対象に含めるようになりつつある。本章では、江戸を中心に都市考古学として急速に進展している「近世考古学」の現状について紹介する。	同　上	同　上
11	幕府政治の改革	以下の5回では18世紀以降の近世社会が変質していく過程を検討していくこととしたい。まず本章では、社会の矛盾が表面化した時点で、幕府がどのような対応を示したかを、享保の改革を通じて見ていくこととする。	大口勇次郎（元お茶の水女子大学教授）	大口勇次郎（元お茶の水女子大学教授）
12	開発と緊縮と	18世紀の中葉は、徳川幕府の政治にほころびが生じ、これをどのように繕うのかという新しい課題を抱えた転換期の時代である。幕府政治では田沼政権が登場し新しい手法によって殖産と開発の政策を展開したが、飢饉と一揆・打ちこわしの中で倒れ、代わった松平定信の主導する寛政の改革は、その反動として伝統維持と緊縮政策の途を歩んだ。その態様を見ていくこととしたい。	同　上	同　上
13	漂流と海防	本章では、江戸時代後期における対外関係について考えていきたい。江戸時代は鎖国の時代とされているが、決してすべての交流が途絶えていたわけではなく、長崎をはじめいくつかの窓口を通じて世界と接していた。鎖国政策を採用してから100年以上を経過し、わが国を取り巻く国際的環境も大きく変化しつつあった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	女大学の時代	これまで近世史の歴史を13回にわたって述べてきたが、振り返ってみるとその中に登場するのは男性ばかりであった。政治や経済の面ではもとより、文化的面においても女性はほとんど歴史の表舞台には登場してこないのはなぜなのだろうか、本章ではこの点を堀り下げて考えてみたい。	大口勇次郎	大口勇次郎
15	幕藩体制の動揺	本章では、幕藩体制の内部から生まれた体制批判を考えていきたい。まず、天保飢饉を契機に大坂市中で起こった大塩の乱において、儒学の言葉で蜂起の思想が説かれたことの意義を考えたい。次いで幕府（将軍）と藩（大名）の関係について、天保期に生起した知行替えをめぐる二つの出来事の問題点を探ることによって、幕藩体制下の大名知行の性格を明らかにし、あわせて最後に幕藩体制の終末を見通しておきたい。	同上	同上

＝ 19世紀日本の歴史（ ’００）＝（R）

〔主任講師：三谷　博（東京大学教授）〕
〔主任講師：山口　輝臣（九州大学助教授）〕

全体のねらい

いままでの日本の近代は、たとえば明治から太平洋戦争までを対象に、同じ体制下での発展や変化といった観点から述べられてきた。この講義は逆に、変化にまず着目して、日本の近代の意味を考える。明治維新の前後で何が変わり、それが我々に何をのこしたのか、主に政治に関わる側面から観察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	19世紀の意味	19世紀は人類にとって大きな転換点であった。西洋は国民国家、工業文明、そして地球規模の交通網を創りだし、世界を一体化した。各地域は西洋への従属や適応を通じて大きく変貌していった。	三谷　博（東京大学教授）	三谷　博（東京大学教授）
2	近世後期の構造1―国際環境	歴史始まって以来、東アジア世界は中華帝国を中心に世界秩序を形作ってきた。中国と周辺と二つの視点の複合した秩序像とその中での日本の位置を、西洋がふたたびこの地域に登場する以前、19世紀初頭の時点で、輪切りにしてみておく。	同　上	同　上
3	近世後期の構造2―複合国家	近世の日本国家は、明治以降と異なって、公儀と禁裏という二つの中心と二百数十の小国家からなる複合的な構造を持っていた。その個々の特徴と、相互関係を検討し、その上位に立つ「日本」というイメージがどのような形で存在したかを考える。	同　上	同　上
4	近世後期の構造3―社会結合	近世の日本は、身分的にも多元的な社会であった。主に庶民や盲人に注目し、職能的結合や国家との関わりを中心に身分制の動態を考え、さらに身分制や地域性を越える水平な社会結合を創りだした様々なメディアを観察する。	同　上	同　上
5	19世紀前半の変化―国際環境と知識人	日本は19世紀の東アジアでもっとも早く西洋の世界制覇への警戒を始めた国であった。西洋の東アジアとの関わりの変化、日本知識人のその認識、新たな世界像と国内改革論などを概観し、「予知された危機」に対する様々の態度を見てゆく。	同　上	同　上
6	幕末の変革（一）―対外関係	19世紀の半ば、日本は西洋諸国に強制されて、西洋が築きつつあった新たな世界秩序に加わった。隣国の清がイギリスに敗北し、東アジアに西洋の軍事的・経済的拠点ができたアヘン戦争から、日本が西洋諸国に「開国」し、さらに日本人の海外渡航が始まるまでの政策の変転を見てゆく。	同　上	同　上
7	幕末の変革（二）―政治体制	ペリーの来航は政治体制に内在した様々の不整合を矛盾に変えた。西洋の圧力に対する「富国強兵」策、「尊皇攘夷」と「公議」を通ずる政治参加の運動、それらによる「幕府」専制体制の崩壊、「王政」と「公議」を柱とする新体制の成立までを見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	明治前期の変革1 ―武士の解体	明治初年に矢継ぎ早に出された数々の施策は、維新という体制転換を大規模な社会変動へと導いた。秩禄処分とそれに対する旧武士の対応などを素材に、変革の実態を明らかにし、あわせて明治維新の比較史的特徴を考えてみたい。	山口　輝臣（九州大学助教授）	山口　輝臣（九州大学助教授）
9	明治前期の変革2 ―近隣関係の再組織	維新後の日本は西洋の国際法に準拠しつつ、樺太、北海道、対馬、朝鮮、琉球などとの関係を再組織した。維新直後の試行錯誤と危機をへて近隣関係や境界領域の内国化が安定するまでを観察する。	三谷　博	三谷　博
10	明治前期の変革3 ―政治体制	明治憲法により確立する立憲君主制は、「王政」と「公議」という新政権の柱の制度化であり、また「公議」分裂の一翼を担った自由民権運動をも有効に権力へと組み込みうる政治体制であった。立憲君主制の創出過程をあとづけていく。	山口　輝臣	山口　輝臣
11	近代前期の構造1 ―「中央」と「地方」	天皇という単一の中心への移行や画一的な地方制度の施行により、近代の日本国家は、近世と比較するとその構造はかなり単純なものとなった。そうした構造が形成されていく過程の検討を通じて、近世国家とは異なる近代国家の特質を見ていきたい。	同　上	同　上
12	近代前期の構造2 ―国民形成	近代の日本は、多元的な身分制を解体し、国民を生み出した。学校・軍隊などを介して国民意識が形成されていくとともに、地方に対する明敏な意識も並存していた。両者の複雑な関係を、主にメディアへと焦点をあてながら考察していく。	同　上	同　上
13	東アジア国際秩序の変化	中華帝国を核とした東アジアの国際秩序は、日本の朝鮮半島への関与、およびフランスのヴィエトナム植民地化を皮切りに、大きく変化する。日本の対外態度および東アジア国際秩序の変化を、日清戦争までの時期を中心に概観する。	同　上	同　上
14	20世紀へ1 ―「内地」と「外地」	対外戦争は、明治初期に一旦確定した「日本」の外に新たな領土＝植民地、台湾・遼東半島・樺太・朝鮮を付け加えた。近代前期には予期されていなかったこうした事態の出現と、それにともなう「日本」や「日本人」の変容を探る。	同　上	同　上
15	20世紀へ2 ―「政党化」と「都市化」	19世紀から20世紀にかけての社会の変動は、明治前期に形作られた政治構造に変容を迫る規模のものであった。世紀転換期の変動を、「政党化」と「都市化」との絡みとして考察し、激動の20世紀を展望する。	同　上	同　上

＝ 朝鮮の歴史と社会（’００）＝（R）

〔主任講師：吉田　光男（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本にもっとも近く関係も深い地域である朝鮮の歴史を、古代から現代に至るまで、時代を追いかけながら政治・社会・文化的な特色に焦点をあてて概観する。時代ごとの特徴に注目することにより、朝鮮史理解の基礎を形成し、あわせて現代の朝鮮半島に対する理解も深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	朝鮮史を学ぶために	日本列島にとって朝鮮半島は、長い歴史を通じて密接不可分な存在であった。私たち日本に暮らしている人々にとって、このような朝鮮の歴史を学ぶことがどんな意味をもっているのか、現代的な視点からとらえて講座全体の方向付けを行う。	吉田　光男（東京大学教授）	吉田　光男（東京大学教授）
2	神話から歴史へ	朝鮮半島に興亡した古代国家の建国神話や、変容を重ねながら後世に伝わった建国伝説を通じて、朝鮮古代の歴史と文化を論じる。また、後世の史家たちの朝鮮古代に対する系譜観にも言及する。	李　成市（早稲田大学教授）	李　成市（早稲田大学教授）
3	古代国家の形成と展開	古朝鮮から新羅の滅亡までの1000年にわたる古代国家の形成と展開過程を論じる。中国大陸や日本列島の動向に留意しながら、朝鮮半島に展開した古代国家の歴史と文化の特質に力点を置きたい。	同　上	同　上
4	高麗時代の政治と文化	中世王朝高麗500年間の歴史を、政治過程と文化的特色を中心にして論じる。高麗は周辺勢力から圧迫をうけ、13世紀にはモンゴル（元）の支配をうけることになるが、一方で高度な仏教文化が花開いた。この高麗の独自性について見てみる。	六反田　豊（九州大学助教授）	六反田　豊（九州大学助教授）
5	朝鮮王朝の建設と発展	14世紀末の李成桂による王朝創設から15世紀までの朝鮮時代前期の歴史について、政治過程を中心において論じる。朝鮮が独特の文字ハングルを作り出し、中国・日本など周辺地域とも安定した関係を築いた点などに焦点をあて、時代の様相を概観する。	同　上	同　上
6	朝鮮時代後期の政治	16世紀から19世紀前半までの朝鮮時代後期＝近世の歴史的特色を、政治過程を中心にすえて論じる。日本軍と女真軍侵略によって国家的・社会的危機をむかえた時期から、政治と財政の改革で安定をむかえるころまでを展望する。	吉田　光男	吉田　光男
7	朝鮮時代後期の社会と文化	朝鮮時代後期＝近世の社会関係や文化の特色について論じる。身分・血縁などを手がかりとして近世朝鮮社会の性格を考え、この時代に生きた人々の作り出した文化を、儒学などに注目しながら見ていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	開国と開化	1876年に日本と条件を結んで開国した朝鮮が、開化政策によって変貌していく姿を、東アジア世界の近代的再編成という脈絡の中で見ていく。朝鮮半島をめぐる日本と清国の対立が日清戦争となる時期までを論じる。	月脚　達彦（東京外国語大学専任講師）	月脚　達彦（東京外国語大学専任講師）
9	近代化の模索と民族運動	日清戦争から日露戦争までの時期を、近代国家形成過程を中心として論じていく。上からの改革は挫折を余儀なくされ、地方では民衆反乱が頻発して不安定な時代をむかえるが、近代化政策と民衆の動きからこの時代の姿を描いてみる。	同　上	同　上
10	植民地化への道	1905年、第2次日韓協約によって保護国とされ、1910年、朝鮮はついに日本の完全な植民地と化してしまう。日露戦争以後の時期について、日本の侵略とそれに対する朝鮮側の反応を、義兵などの抵抗運動に焦点をあてながらみていく。	同　上	同　上
11	植民地時代の社会	1910年の併合により「武断政治」として開始された植民地支配は、三・一運動という全民族的な抵抗を経てより巧妙な「文化政治」に転換する。異民族支配下で「近代」をむかえた朝鮮社会について、民族運動の展開にも配慮しつつ考える。	並木　真人（フェリス女子大学助教授）	並木　真人（フェリス女子大学助教授）
12	戦時体制下の朝鮮	昭和恐慌や満州事変により動揺する朝鮮に対して朝鮮総督府は支配を強化し、戦時期には人的・物的資源の動員を図る「皇民化」政策を実施した。日本の戦争遂行のために変容した社会の実相に関して、民衆の対応を含めて明らかにする。	同　上	同　上
13	解放から現代へ	朝鮮人が待望した植民地支配からの解放は、冷戦の中で南北分断、朝鮮戦争という新たな苦難を招いた。以後南北は独自の国家建設を推進し、統一は現在も民族の悲願となっている。現代史の歩みを国際情勢の変化と併せて論じる。	同　上	同　上
14	朝鮮の民俗世界	中華の周辺にありながら独自の文化を形成してきた朝鮮社会の多様な民俗について、大伝統と土着の伝統を対比させながら、年中行事・通過儀礼・宗教などを中心として現代社会におけるその在り方を述べる。	秀村　研二（明星大学助教授）	秀村　研二（明星大学助教授）
15	現代韓国人の社会関係	現代の韓国人は、儒教によって意味付けられた父系血縁を程度の差はあれ社会関係の基盤としながらも、一方ではさまざまな横の関係を結ぶことによって活動の幅を広げている。この点について、家族・親族とインフォーマルな関係を中心にして述べる。	同　上	同　上

＝　中国の歴史と社会（’９８）＝（R）

〔主任講師：斯波　義信（（財団法人）東洋文庫理事（図書部長））〕
〔主任講師：浜口　允子（　放送大学教授　）〕

全体のねらい

中国の歴史は長い。その歴史は、すべて刻々と変容し生成を重ねてきた生きた社会から生みだされた。本講は、その歴史と社会の全体性をトータルに示し、あわせて、現在の中国問題や、アジアの世紀の中に立つ中国の理解をも深めようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国社会の特徴	中国人性（チャイニーズネス）を考える 風土の特色 人種・言語そして民族 漢字というボンド剤 農業と家族	斯波　義信（（財団法人）東洋文庫理事（図書部長）	斯波　義信（（財団法人）東洋文庫理事（図書部長）
2	都市国家連合と中華の世界	「中華」世界のおこり 殷・周の都市国家連合 鉄器時代へ 諸子百家 天下、天命、天子	同　上	同　上
3	統一国家の幕あけ	郡県制の登場 中央の強化 財政ベース 武帝の遺産 後漢の社会	同　上	同　上
4	地方の時代	遠心トレンド 散村と結社 通俗道教 仏教の吸収 集権の再生	同　上	同　上
5	隋唐帝国の意義	中華帝国の蘇生（一）－華夷の融合－ 中華帝国の蘇生（二）－集権の再建－ 中華帝国の蘇生（三）－仏教、大運河、科挙 開かれた中国 新しい秩序のはじまり	同　上	同　上
6	宋型社会文化へのシフト	南方中国の優位 農業と商業 開発地主・形勢戸・士大夫 王安石と朱熹 都市と郷鎮	同　上	同　上
7	世界との出会い	元朝の遺産（一）征服王朝 元朝の遺産（二）東西世界の直接交渉 東南中国の成長 朱元璋の課題 海上発展の顛末	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	明後半代の中国社会	北京遷都のインパクト 銀経済への傾斜 西洋大帆船の登場 郷紳の役割り 明から清へ	斯波　義信	斯波　義信
9	清朝の光と影	政権の特色（一）伝統保守の清政権 政権の特色（二）その内陸重視 資源と人口 思想の流れ 衰微の前兆	同　上	同　上
10	近代のはじまり	アヘンと外国 内なる危機 たて直しの担い手たち 日清戦争が顕らかにしたもの 辛亥革命	浜口　允子（放送大学教授）	浜口　允子（放送大学教授）
11	国民国家への模索	共和国建設の方式 第一次大戦とナショナリズムの興起 企業家たちの活動 国民革命の時代 南京国民政府の諸相	同　上	同　上
12	戦いの20年	満州国 囲剿と長征 日中戦争（一） 日中戦争（二） 戦後の内戦と中華民国の終焉	同　上	同　上
13	社会主義の選択	中華人民共和国の成立 集団化と公有化 人々の生活 文化大革命 毛沢東時代の特質	同　上	同　上
14	「現代化」追求の時代	改革と開放 平等主義の放棄 一人っ子政策 一国二制度 90年代：鄧小平時代の諸相	同　上	同　上
15	20世紀の中国	王朝体制との訣別 国民国家建設の課題 統一とその担い手 富強、民主、そして次の課題 歴史をかえりみる	斯波　義信 浜口　允子	同　上

＝ 南アジアの文化を学ぶ（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：辛島　昇（大正大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、南アジアの歴史の概説ではなく、遺跡、刻文、陶磁器、絵画、映画、新聞といったいろいろの具体的な「史料」を取り上げ、そこから何をどのようにして「学ぶ」かという視点で、南アジアの文化を見るようにしたい。宗教、社会、歴史、文化といったテーマの面でも、新しさをだすようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「ラーマーヤナ」をめぐって ―多様な物語の発展とその歴史的意味	「ラーマーヤナ」は有名な古代インドの叙事詩で、仏教・ジャイナ教を含むインド文化全般に大きな影響を与えている。それを狭義のヒンドゥー教の聖典として政治に利用しようとする動きは、その歴史性を無視するものである。物語の広がりに注目しよう。	辛島　昇（大正大学教授）	辛島　昇（大正大学教授）
2	言語・民族問題 ―ドラヴィダ運動を中心に	インド亜大陸には系統を異にする多数の言語が見られる。北部では主としてアーリヤ系諸言語が、南部ではドラヴィダ系諸言語が話されている。その状況が現代の政治に及ぼす影響を、南インドの「ドラヴィダ運動」を例にして見てみよう。	同　上	同　上
3	カーストとは何か ―その発生と行方	古代のインド亜大陸で成立した身分制度としてのヴァルナ制度と、それを大枠として中世に出来あがったより細かなジャーティ制度が、長い間ヒンドゥー教徒の社会生活を縛ってきた。それはどのようにして発生し、今後はどうなっていくのだろうか。	同　上	同　上
4	新聞の求婚広告 ―バラモン社会の変動	インドの大新聞の日曜版には、毎週数多くの求婚広告がのる。真剣な広告で、最近では数も増え、それによって結ばれる人も多い。南インドの広告の分析は、バラモン社会の変動の様を明らかにする。それによってカーストの実態を探ろう。	同　上	同　上
5	インダス文字の謎 ―コンピューターによる解読	印章に刻まれて残るインダス文字は、未だに解読されていない。種々の困難な条件があるのだが、最近のコンピューターを用いた分析によって、その文字で書かれた言語がドラヴィダ語ではないかとされるようになってきた。解読の現状を探る。	同　上	同　上
6	石造ヒンドゥー寺院壁の刻文 ―王朝史・社会史を解く	南インドの石造ヒンドゥー教寺院の壁面には数多くの刻文（碑文）が残る。刻文は、いわゆる歴史書の存在しないヒンドゥー王朝期の歴史研究に、欠くことのできない根本史料である。それによって何が判るのか、刻文の研究史とともに見てみよう。	同　上	同　上
7	菩提樹の蔭にて ―インドとスリランカの仏教	仏教はインドでは滅びたのに、スリランカではなぜ今日なお人々に信仰されているのか。インドでは何が起こったのだろうか。インドにおける歴史の展開と、スリランカにおける菩提樹信仰やピリットと呼ばれる儀礼を通して、両者の違いを見てみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	デリー・スルタン朝の遺跡―ムスリム政権とインド社会	13世紀のデリーに政権を打ち立てた奴隷王朝を初めとするデリー諸王朝は、初めてのイスラーム政権として、インド社会に新しい要素をもたらした。デリーに残る都城遺跡やヴィジャヤナガル王国の宮廷衣装を手がかりに、「イスラーム化」の意味を考える。	辛島　昇	辛島　昇
9	海のシルクロードとインド―胡椒・陶磁器・馬	インドの半島部は、東西海上交通路の中央にあり、諸地域の文化交流に役割を果たしてきた。胡椒を求めたローマ帝国。陶磁器を輸出した宋代以降の中国。そして、一三世紀以降のインドはアラブの馬を求めた。そのような交流の状況を見てみよう。	同　上	同　上
10	カレー文化論 ―南アジアの統一性	南アジアの人々は毎日カレーライスを食べているのであろうか。カレーとは一体何なのだろうか。その歴史はどこまでさかのぼるのか。それらの問いに答えることによって、インド文化に見られる「多様の中の統一」という問題に光を当ててみよう。	同　上	同　上
11	ベンガル派の絵画と日本 ―タゴールと岡倉天心の交わり	詩人タゴールの甥で、ベンガルで新しい美術運動を起こしたアバニーンドラナート・タゴールは、岡倉天心の始めた日本美術院の運動に共鳴し、20世紀初頭、両者の交流が行なわれた。ベンガル派と呼ばれた彼らの絵画によって、交流の意味を探ろう。	同　上	同　上
12	映画にみるインド社会 ―映画と政治の関わり	映画大国インドの映画産業はいかにして発展したのか。政治家に俳優出身者が多いのはなぜか。日本でも、歌と踊りを主体としたインド映画についての関心が高まってきたが、最近は、カーストや宗教上の対立を扱った作品も見られる。その将来は？	同　上	同　上
13	ティプ・スルタンの理想―イギリスとの戦い	18世紀後半、イギリスに対して戦いを挑み、最後には敗れたマイソール王国のティプ・スルタンは、世界情勢についてどのようなヴィジョンをもち、どのように戦ったのか。それを見ることによって、当時の在地社会と植民地化の問題を考えてみよう。	同　上	同　上
14	南アジアのフェミニズム―ヒンドゥー教における女性蔑視と女神崇拝	故インディラ・ガンディー首相を初めとして南アジアでは女性首相の活躍が目立つ。他方、南アジアでは、女性に対する差別、搾取もいまだに多くみられる。その二つはどう結びつくのか、フェミニズムの問題とともに、その点について考えてみよう。	同　上	同　上
15	マハトマ・ガンディーの試み―糸車をまわす	第二次世界大戦後、南アジア諸国は、独立を達成した。ガンディーがそれに果たした役割は大きい。しかし、ガンディーが目指したのは、単なる国家の独立ではなく、社会の改革、人々の意識の改革であった。彼はどのような社会を創ろうとしたのだろうか。	同　上	同　上

＝ 東南アジアの歴史（’０２）＝（R）

〔主任講師：桜井 由躬雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

経済的に強い関係をもちながら、東南アジアの歴史は高校世界史のなかでとりあげられることが少ない。その歴史、文化への知識をもつことなく、多くの日本人が、東南アジアに旅立っていく。本講では、東南アジアのもつ特殊な自然環境、地理環境が東南アジアに独自な地域性を与え、独自な歴史世界をつくっていく過程を論ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	東南アジア概念の成立	東南アジアという言葉は、戦後の国際関係の中で定着した政治的な用語であるが、東南アジアは自然的文化的にはまとまった一つの地域である。東南アジアの自然から生まれた文化が外の文明といかに邂逅し、いかに複合して新しい文化をつくっていくかを考える。	桜井由躬雄（東京大学教授）	桜井由躬雄（東京大学教授）
2	地域としての東南アジア	東南アジアは海の熱帯である。その海域は熱帯産物を生産し、南シナ海、東シナ海、インド洋の三つの世界の海を結合する。その陸域は山地、平原、デルタと火山島からなる。海域と陸域の上をモンスーンが吹きよせる世界でもっとも高温湿潤な自然をもつ。	同上	同上
3	古代の東南アジア	青銅器文明の到来と稲作社会が生んだドンソン文化の時代に、稲を基調とする東南アジアの基層的な文化が成立した。東西の古代都市文明の発展が、東南アジアの海を活性化し、東南アジアの沿岸に港市国家が生まれ、内陸域平原に河川に沿って都市国家が作られる。	同上	同上
4	中世の東南アジア	11世紀以降、東南アジア大陸平原部に広域ネットワークが形成され、平原とデルタ、沿海部などことなる自然環境が結ばれ、島嶼部ではマジャパヒトが諸海域の統合を開始する。外文明と複合した地域ごとの独自な文化を創り出す。	同上	同上
5	近世前期（前期交易の時代）	14世紀末から、アジアの交易活動が活発化し、「交易の時代」が始まる。東南アジアの陸域国家群は衰退し、交易を主催するマラッカ、シャムが東南アジアの中心的な勢力として浮上する。交易ネットワークに、華人、日本・メキシコの銀、西欧勢力が参加してくる。	同上	同上
6	近世後期（後期交易の時代）	オランダ東印会社、日本市場の参加を得て交易市場は過熱化する。ベトナム、シャム、カンボジアが華人のイニシアティヴの下に大陸産物の開発、集荷、輸出システムを創り出す。スンダ海峡が開通してヨーロッパが直接市場になり、オランダのジャワ海独占が進む。	同上	同上
7	植民地の開始	17世紀の末に交易の時代は終焉を迎え、オランダはジャワの、スペインはフィリピンの領域的な植民化をすすめる。ベトナム、シャム、ビルマは国内支配力の強化と領域の拡大を開始し、回復した中国市場とリンクした華人が大陸東南アジアの交易主体となる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	東南アジアの植民地化	大陸部は中国市場に接近し、島嶼部はヨーロッパ市場と結びつけられる。19世紀初めにイギリスがシンガポールを建設し、大陸部と島嶼部の交易活動を一つのシステムにまとめる。フランスの参加により、シャムをのぞく東南アジアのすべてが植民地化される。	桜井由躬雄	桜井由躬雄
9	二重構造の時代	植民地化によって、諸地域はそれぞれの植民地母国に経済的、文明的に結びつけられる。領域が決定され、中心都市が建設され、電信や鉄道によって地域の集約度がたかまる。世界市場の需要にのみ対応したモノカルチュア化が始まり、都市と農村の二重構造が深まる。	同上	同上
10	民族主義の時代	19世紀末から20世紀初めにかけて、西欧化された知識人の間に独立運動が開始され、民族の概念が模索される。20年代以降、一方でコミンテルンと結びついた社会主義運動が勃興して運動が国際化するとともに、農村部に強力な民族主義運動が展開する。	同上	同上
11	第二次大戦	日本軍の東南アジア占領にともない、西欧勢力の威信が没落し、東南アジアの国際性は失われ、都市の経済構造は壊滅し、青年層や農民層が大衆的な反日、また親日的民族主義運動の主体になる。二重構造は解体するが、同時に孤立化した諸地域に経済危機が起こる。	同上	同上
12	バンドンの夢－民族主義国家	植民地エリートたちの妥協によって平和裡に独立を獲得したビルマ、フィリピン、マレーシアでは二重構造が解決できず、長期の農民や少数民族の反乱に苦しむ。長期の独立戦争を戦ったインドネシア、北ベトナムでは経済が孤立化し、東側陣営への接近が強まる。	同上	同上
13	第二次インドシナ戦争	二重構造、冷戦下のアメリカの軍事的経済的圧力、地域的分裂など戦後東南アジアの苦悩は第二次インドシナ戦争のに集約される。ベトナムは経済社会の社会主義化、ソ連中国の大規模援助への依存、軍事的な統一でこの矛盾を解決しようとする。	同上	同上
14	流血の経済発展－開発独裁	独立のもたらした経済的政治的混乱の中から、60年代にいたってシンガポール、フィリピン、インドネシア、タイで親米政権が樹立され、独裁政府の下に経済の国際化がすすめられる。ベトナム戦争の特需の結果、これらの国々は経済成長を開始する。	同上	同上
15	戦場から市場へ	80年代の第三次インドシナ戦争の終結、ベトナム・ラオスのドイモイ政策、ビルマの開放政策の結果、すべての東南アジア諸国は経済市場化による経済発展をすすめる。しかし、経済発展のギャップは再び地域と社会の二重構造を深め、各地に矛盾が噴出している。	同上	同上

＝ 古典古代の歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤　貞夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

古代ギリシア・ローマの歴史を、自由な市民たちが築き上げた、その独自な社会と文化に焦点を合わせつつ辿る。ギリシアとローマを対比しながら、同時に古典古代全体が世界史上に占める位置を明らかにし、その歴史を学ぶ意義を伝えたい。古典古代を受講者にとり身近なものとするよう努めるとともに、先端的な研究状況にも触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古典古代史を学ぶために	ギリシア・ローマと現代とのかかわりを糸口に古典古代史を学ぶ意味を考えるとともに、歴史展開の場である地中海周辺地域の風土を眺め、且つ通史的枠組を時期区分により明らかにする。19世紀以来の研究史、史料の伝存状況にも言及する。	伊藤　貞夫（放送大学教授） 周藤　芳幸（名古屋大学助教授）	伊藤　貞夫（放送大学教授） 周藤　芳幸（名古屋大学助教授）
2	先史としての青銅器文明	前史をなす青銅器時代の社会について、シュリーマン以来の考古学調査の成果を基に検討する。青銅器文明は前12世紀に破局を迎えるが、それに続く混乱の中からいかにしてポリスが形成されたのか、その過程についても考古学的見地から推論を及ぼす。	周藤　芳幸	周藤　芳幸
3	ポリスとは何か	古典古代本来の特徴は、都市を核とする独立の国家の多数分立にある。その様相を最も純粋な形で具現したのが前8～4世紀のギリシアであった。ポリスと呼ばれるこの種の小国家の外観、住民構成、人的結合の状況を盛期アテネをモデルに再現する。	伊藤　貞夫 周藤　芳幸	伊藤　貞夫 周藤　芳幸
4	民主政への歩み	盛期ポリスで具現された世界史上稀有の徹底した直接民主政は、一挙に成立したものではない。ポリスの初期には貴族政が布かれ、それが長い年月をかけ、いくつかの節目を経て民主政に移行する。その過程をアテネとスパルタを例にとり説明する。	伊藤　貞夫	伊藤　貞夫
5	直接民主政のしくみ	前462年から前322年にかけてのアテネは、アリストテレス『アテナイ人の国制』のパピルス写本の発見によって、国政運営のしくみが細部にわたり明らかにされている。立法・行政・司法について制度の詳細を述べるとともに、その運用の実態にも言及する。	同　上	同　上
6	ポリス市民の生活	民主政のもとで市民たちはどのような生活を送っていただろうか。家の中で営まれる日常生活、戸外でのスポーツ、家とポリスとを共に支える経済活動などに論及する。ペロポネソス戦争後、市民たちの意識や行動に変化が生ずる点にも留意したい。	同　上	同　上
7	アレクサンドロスと後継者たち	ヘレニズム時代の政治史。前338年マケドニアのフィリポス2世によるギリシア本土制覇ののち、アレクサンドロスの東征と後継者たちによるエジプト・シリア両王国の建設で、ギリシア世界は遥か東方に拡がる。ローマのヘレニズム世界への進出も見逃せない。	大戸　千之（立命館大学教授）	大戸　千之（立命館大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ヘレニズムの社会と文化	ヘレニズム時代のいわゆる東西文化融合の実態とはいかなるものか、マケドニア人・ギリシア人の支配は古代オリエントの故地にどれほどの社会的変容をもたらしたかにつき、西は小アジア・エジプトから東は中央アジアまでを視野に入れて論及する。	大戸　千之	大戸　千之
9	都市国家ローマの成り立ち	イタリア半島では当初エトルスキの諸市が優勢で、ローマもその影響下にあった。エトルスキ研究の現状を述べるとともに、ローマ人貴族の政権奪取に始まる共和政の成立と、その後のローマ国制の発展とを僅かな史料を基に再構成する。	平田　隆一（東北学院大学教授）	平田　隆一（東北学院大学教授）
10	共和政から帝政へ	ローマでは共和政下、有力貴族間の角逐と外征とが絡み合い、結局オクタウィアヌスによる地中海世界統一と帝政の樹立へと至る。ギリシアの場合との対比を念頭にその経緯を述べ、この時期の相次ぐ戦争と一般市民とのかかわりに論及する。	同　上	同　上
11	ローマ市民の世界	ローマは多くの民族を漸次包摂し、それら諸民族の文化を吸収しつつ発展した。共和政末期から帝政初期に焦点を合わせ、ローマ人はいかなる社会に生き、いかなる文化を育んだかを、キリスト教成立以前の宗教、ポンペイ市民の生活など、具象的に述べる。	同　上	同　上
12	「ローマの平和」	五賢帝の時代はローマ帝政の安定期であり、属州都市にローマ風の生活様式と古典文化が広くゆきわたる。しかしそれはローマによる諸民族支配の進展をも意味していた。「平和」と「繁栄」の実態を史料に即して考察する。	松本　宣郎（東北大学教授）	松本　宣郎（東北大学教授）
13	帝国とキリスト教	ギリシア文化と同じく、キリスト教もローマ帝国を媒体として、のちのヨーロッパに伝えられる。キリスト教は当初、異教徒や帝国側の迫害に遭いながら、遂に国教化する。ローマ社会における異教徒とキリスト教徒とのこのような関係を新しい研究を基に述べる。	同　上	同　上
14	時代の転換	3世紀以後、帝国の危機的状況は専制君主政を生み、自由な市民たちの世界は閉塞へと向かう。中世社会形成への胎動が始まるが、この古代末期の様相を浮き彫りにするとともに、なぜローマ帝国は滅んだかを、諸説を紹介しつつ考える。	同　上	同　上
15	古典古代の歴史的位置	ギリシアとローマの相違を考えるとともに、両者が世界史の上でどのような位置を占めるかを論ずる。古典古代の特殊な社会と文化が近代ヨーロッパに受け継がれ、本来は対極的位置にありながら、私たちの生活をも半ば規定している事実を指摘したい。	伊藤　貞夫	伊藤　貞夫

＝ ヨーロッパの歴史（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：樺山　紘一（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの歴史を、その全体的構造において捉え、基盤の確立と、たえざる革新という様相のもとで考察しようとするものである。別途開設されている古典古代史を承け、また、19世紀以降の近・現代史への導入という趣旨も加えて、ヨーロッパの中世・近世史をできるだけ広い視野から論じようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヨーロッパを考える視点	ヨーロッパ史の舞台となる地域の自然や地理、人間の諸条件を概観する。ことに、古典古代とは異なった歴史世界としてのヨーロッパの成立基盤を明らかにすることをめざす。	樺山　紘一（東京大学教授）	樺山　紘一（東京大学教授）
2	ゲルマン人諸国家の形成	西ローマ帝国崩壊をうけて登場したゲルマン諸国家、つまり東西ゴート王国、ランゴバルド王国、フランク王国の成立過程を、それぞれ通観する。そのうえで、古代社会の諸要素がいかに継承されたか、また新たなゲルマン的要素がいかに結実したかを論ずる。	高山　博（東京大学助教授）	高山　博（東京大学助教授）
3	封建社会の基本構造	初期から中期にかけての中世世界にあって、その基盤をなす封建社会の原理を考える。諸侯、騎士といった戦士集団の構成をはじめ、その経済的基盤としての農業・農村と荘園制の変化とを中心のテーマとする。ヨーロッパにおける現地ロケーションによる講義を予定している。	河原　温（東京都立大学助教授）	河原　温（東京都立大学助教授）
4	都市の出現と成熟	古代の伝統と新たな環境のなかで、都市が成立し、封建社会と向き合いつつ成熟してゆく過程を考察する。ヨーロッパ都市の固有の特質を明らかにするために、現在も残存する中世都市の遺構をさぐりながら、現地ロケーションにより現実味のある展開を試みる。	同　上	同　上
5	国家と王権の成長	封建諸勢力との対抗のなかから王権が自立し、強化されてゆくプロセスを跡づける。フランス、イングランド、ドイツを中心に、それぞれ異なった国家的特質が生まれる理由を探り、近世以降の展開への見通しをも試みる。	高山　博	高山　博
6	中世の地中海世界とヨーロッパ	西ローマ帝国崩壊以後も健在なビザンツ世界や、7世紀以降に抬頭した東方のイスラム世界が、ヨーロッパにたいしていかなる刺激をあたえ、どのような関係を築いたか。また十字軍や地中海交易によって、ヨーロッパが地中海においてどのような飛躍のきっかけを把んだか。これらを概観する。	同　上	同　上
7	中世キリスト教の確立	カトリック教会がヨーロッパ世界に浸透する過程を幅広く考察する。教皇と教会制度、修道院、日常生活における儀礼など社会の諸分野を覆うにいたるさまを描き、ヨーロッパ社会とキリスト教の不可分の関係を解きあかす。	樺山　紘一	樺山　紘一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世世界の終焉に向けて	封建社会の成熟から分解へと、急速に動く13～15世紀のヨーロッパ世界を扱うが、ことに、疾病、飢餓、反乱、戦争などなまなましい社会現実の証言を手がかりとする。また、そこにみられる、新しい社会へ向けての力の抬頭をも視野に入れる。	河原　温	河原　温
9	中世文化からルネサンスへ	キリスト教によって育まれた大学や神学、教会建築などの中世文化から、世俗的色彩の強いルネサンス文化への移行を通観する。ルネサンスがたんにヨーロッパ内部での成長によってではなく、外部世界との接触の結果でもあることを指摘する。	樺山　紘一	樺山　紘一
10	世界へ拡大するヨーロッパ	東方へのアジア航路、西方へのアメリカ航路の開発により、ヨーロッパ勢力が急速に世界へ進出する様相を取り扱う。その結果生まれた植民地との関係、流入した商品や情報がヨーロッパに与えた影響について論じ及ぶ。	高澤　紀恵（国際基督教大学準教授）	高澤　紀恵（国際基督教大学準教授）
11	絶対王政の時代Ⅰ－イギリス	イングランドが、スコットランドなどと合体、併合を重ねて強大な集権国家となり、植民地をもつ帝国へと成長する過程をたどる。また社会の成熟が市民の力量を増大させ、革命による変革や、議会政治の拡充を実現させる様相を描く。	青木　康（立教大学教授）	青木　康（立教大学教授）
12	絶対王政の時代Ⅱ－フランス	フランス王権が、国内の特権貴族との激しい対抗関係を克服して、強大な官僚行政国家を建設する経過をたどる。その中で、近世絶対主義国家がかかえる本質的な問題点が明らかにされる。	高澤　紀恵	高澤　紀恵
13	絶対王政の時代Ⅲ－ドイツと東欧	神聖ローマ帝国のもとでも諸領邦の分立を克服しえないドイツと、新生の帝国の成長によって急速にヨーロッパの枢軸に加わるロシアとを対比する。この両者のもとに成立する中欧・東欧世界の歴史的特質が解明される。	青木　康	青木　康
14	近代文化への道	宗教改革によって開かれたキリスト教会の新しい体制、科学・思想の展開による啓蒙主義、また芸術・学術の諸分野における発展を通観する。世界に普遍性を要求するヨーロッパ文化の精神基盤が説明される。	高澤　紀恵	高澤　紀恵
15	近世ヨーロッパの終幕	絶対王政下の諸国の角逐によって、全ヨーロッパの国際秩序が変容し、またそれぞれの国家の内的基盤が動揺するなかで、新たな社会体制の出現が不可避であることを考察する。フランス革命の直前までが対象となる。	青木　康	青木　康

＝ ヨーロッパと近代世界（’０１） ＝（R）

〔主任講師：川北　稔（大阪大学教授）〕

全体のねらい

現代世界は一体化しているといわれる。とすれば、一体としての世界は、どのようにして成立したのか。南北格差はなぜ生じたのか。なぜ、アジアやアフリカでなく、ヨーロッパが中心となったのか。このような問題に、歴史的な観点から解答を与える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界システム論とは何か	近代世界を一つの巨大な生き物のように考え、近代の世界史をその誕生・成長をへて、死にいたる過程として捉える見方を世界システム論という。この講義の基本的な視角として、世界システム論の要点を解説し、従来の一国史的な見方との違いを説明する。	川北　稔（大阪大学教授）	川北　稔（大阪大学教授）
2	アジアに憧れたヨーロッパ人―大航海時代へ	15世紀のヨーロッパ封建社会は、経済的にも、社会的にも、危機の状態にあった。この危機への対応策として、世界システムの形成が進むことになる。なぜ、ヨーロッパが対外進出に危機の解決策を求めたのかを検討する。	同　上	同　上
3	キリスト教徒と香料を求めて	十字軍と国土回復運動の延長として対外進出に乗り出したポルトガルの事情と、ポルトガル人到来以前のアフリカの状況、アジアの諸交易圏の繁栄ぶりを含めて検討する。ヨーロッパ経済圏とアジアのそれのつながりかたをみる。	同　上	同　上
4	スペイン帝国の成立と世界システムの確立	スペイン国王カルロス一世による世界帝国形成の企図とその挫折、フェリーペ二世の下でのアメリカ開発の進行を論じ、ラス・カサスの見解をもとに、先住民・クリオーリョ・スペイン人の関係について検討する。	同　上	同　上
5	「17世紀の危機」とオランダのヘゲモニー	17世紀はヨーロッパをはじめ世界全体が危機的な状況にあったとされ、世界システムは収縮の局面に入った。この時期に英・仏・蘭三国が、スペイン・ポルトガルに挑戦し、オランダがヘゲモニーを確立することを論じる。	同　上	同　上
6	環大西洋経済圏の成立	16世紀末から経済的危機に陥ったイギリスが、北米における植民地形成にむかい、「財政革命」をつうじて、軍事力を強化する。その結果、貿易の爆発的な展開をみた（商業革命）ことを論じる。また、この現象が、イギリスの社会構造を転換させ、産業革命の展開の前提となったことをも論じる。	同　上	同　上
7	ヨーロッパの生活革命	商業革命が展開するにつれて、アジアやアメリカの新奇な商品が流入した。これに伴って、ヨーロッパ人の生活が一変したことを、イギリスにおける綿織物の消費や紅茶の普及を例にとりあげて説明する。こうして近代ヨーロッパ人の生活様式が成立し、生活必需品となったアジア商品の国産化の過程として、工業化が進行することを示唆する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ネイボップと砂糖王と煙草貴族	植民地に基礎をおく富裕な階級の成立を、プラッシーの戦い以後のインドの状況やカリブ海・北米植民地の事情を中心に検討する。同時に、北米・アジア・ラテンアメリカのヨーロッパとの関わりかたの違いを、それぞれの地域の現況との関係を念頭おきながら検討する。	川北　稔	川北　稔
9	奴隷貿易の展開	トリニダード・トバゴの首相でもあった歴史家エリック・ウィリアムズの生涯とその学説を紹介しながら、イギリスの産業革命が黒人奴隷制度との深い関係のもとに展開したことを論じる。	同　上	同　上
10	だれがアメリカをつくったのか	イギリスから北米植民地への移民の出自を分析し、アメリカ植民地が貧困・犯罪・家庭崩壊などの、本国の社会問題の解決の場とされたことを指摘する。この傾向は、はるかのちの時代まで継続することをも説明する。	同　上	同　上
11	世界システムの構造転換―「二重革命の時代」	アメリカ独立革命と産業革命とフランス革命の歴史的意味を再検討する。産業革命は、なぜフランスではなく、イギリスに起こったのか。フランス革命とは、結局、何であったのか。アメリカ独立革命やハイチやラテンアメリカ諸国の独立を含めての環大西洋革命論を展開する。	同　上	同　上
12	プランテーションと産業革命	イギリスの工業化や都市化が、世界システムの展開との関係を、生活史の側面から説明する。砂糖関税が引き下げられ、穀物法が廃止され、東インド会社の特権が制約されていく過程を、ひろく論じる。アジア物産の確保手段としてみれば、産業革命プランテーション経営は、近代世界システムの双子児であることを論じる。	同　上	同　上
13	ポテト飢饉とアメリカへの移民	アイルランドにおけるポテト飢餓を契機に、大量の移民がアメリカに渡ったが、イギリス帝国を中心に19世紀における労働者の地球規模での移動に焦点をあわせる。アメリカやオーストラリアにおける人種主義思想の形成にも言及する。	同　上	同　上
14	パクス・ブリタニカの裏表	イギリスの繁栄の象徴といわれた1851年のロンドン万国博と、1877年のインド帝国式典を象徴的なイヴェントとしてとりあげつつ、大英帝国の繁栄とその陰り、とくにアジア支配のありかたについて論じる。	同　上	同　上
15	アジアの時代か？―世界システムのゆくえ	アジアの生活文化へのヨーロッパ人の憧れから始まった近代世界の一本化、すなわち、近代世界システムの誕生・成長の歴史は、20世紀末以降、逆に、ヨーロッパの生活文化への憧れを原動力として、東アジアの経済成長をとげることによって、ふたたび大転換をとげつつある。世界システム論の立場から、21世紀の世界を予想する。	同　上	同　上

＝ アメリカの歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：紀平　英作（京都大学教授）〕

全体のねらい

近代の初頭に、ヨーロッパ人の植民によって様相を一変した「新大陸」社会は、その後、18世紀から20世紀にかけて独自の国家群を形成していった。本コースは、ヨーロッパ人の進出から始まる近代以降の南北アメリカ大陸の歴史を、現代まで概観する。アメリカ合衆国のほかに、中南米諸国、カナダにもふれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新旧両世界の出合い	（1）アメリカ史の特質、（2）新大陸「発見」の思想史的な意味、（3）アメリカ大陸の文明（アステカ・インカ）とスペイン人征服者による征服、（4）銀の採掘とヨーロッパ経済への影響、（5）英・仏・蘭のカリブ海地域への進出、についてみる。	清水　忠重（神戸女学院大学教授）	紀平　英作（京都大学教授）
2	北米大陸の植民と合衆国の独立	（1）最初期の移民の生活、（2）本国と植民地の対立と独立への道、（3）連邦体制の再編（連合規約から合衆国憲法）、（4）対外政策と政治制度の特徴、（5）建国期の領土膨張の思想、についてみる。	清水忠重 紀平　英作（京都大学教授）	清水　忠重（神戸女学院大学教授）
3	中南米植民地の独立	（1）砂糖プランテーションと大西洋奴隷貿易、（2）独立運動の背景、（3）独立運動の展開、（4）合衆国の対応（「モンロー主義」）、についてみる。	清水　忠重	同　上
4	合衆国における民主政治の展開	（1）政治的民主化の進展、（2）「改革の時代」の諸相、（3）異人種の抑圧と排除（自由黒人の植民と先住民の強制移住）、（4）大陸国家の実現、についてみる。	同　上	同　上
5	合衆国における南北対立の激化	（1）交通革命、産業革命の進展と地域利害の対立、（2）ミズーリ論争以後の新領土における線引きの問題、（3）南北の思想的対立（北部の反奴隷制・反黒人の論理と、南部の奴隷制擁護論・少数派擁護論）、についてみる。	同　上	同　上
6	南北戦争と再建の時代	（1）南北戦争の勃発、（2）南北戦争と奴隷解放、（3）南北戦争下のアメリカ合衆国社会、（4）南北戦争と国際社会、（5）南部の再建、についてみる。	横山　良（神戸大学教授）	横山　良（神戸大学教授）
7	19世紀末の合衆国社会	（1）フロンティアの時代の終幕、（2）技術開発と工業化および「独占」の発生、（3）移民と都市化、（4）「ギルディッド・エイジ」の政治と文化、（5）労働者・農民の抵抗、（6）1890年代の意味、についてみる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中南米諸国の「近代化」の苦悩とカナダ自治領の形成	（1）国民国家形成の苦悩、（2）中南米諸国と国際社会、（3）輸入経済の発展と従属化、（4）近代化と都市化、（5）カナダ自治領の形成、についてみる。	横山　良 紀平　英作	紀平　英作
9	革新主義と海外進出	（1）「帝国」への道、（2）革新主義運動の進展、（3）「新しい社会」の理念と現実、（4）第一次世界大戦と合衆国社会、についてみる。	横山　良	横山　良
10	中南米諸国と合衆国の影	（1）中南米諸国における民衆の登場と変革の時代、（2）汎米主義と反米主義、（3）メキシコ革命、（4）メキシコ革命への合衆国の干渉、についてみる。	同　上	同　上
11	戦間期の合衆国と第二次世界大戦	（1）「新時代」の到来、（2）大恐慌の嵐、（3）フランクリン・ローズヴェルトの登場、（4）ニューディール政治の展開と帰結、（5）変動する国際政治と合衆国、（6）第二次世界大戦、についてみる。	紀平　英作	紀平　英作
12	中南米諸国による自立の試み	（1）戦間期の米州関係、（2）世界恐慌と中南米諸国、（3）メキシコの動向、（4）ブラジル、中南米の動向、（5）第二次世界大戦と中南米諸国、についてみる。	同　上	同　上
13	冷戦開始から1960年代	（1）世界政治の覇者として、（2）冷戦の開始、（3）朝鮮戦争と冷戦の激化、（4）豊かな社会とアメリカ的生活様式、（5）60年代の改革の潮流、についてみる。	同　上	同　上
14	苦悩する中南米諸国	（1）冷戦と中南米諸国、（2）キューバ革命と社会主義への動き、（3）軍事政権の台頭、（4）輸入代替工業化政策の内実とその帰結、（5）失われた10年間、についてみる。	同　上	同　上
15	パクス・アメリカーナの時代をこえて	（1）泥沼化するヴェトナム戦争、（2）世界経済における合衆国の覇権の後退、（3）冷戦の終息、（4）苦悩を抱える合衆国社会、（5）世紀をこえて、についてみる。	同　上	同　上

＝ 芸術の理論と歴史（'０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山　昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

芸術は、人類の文明の深い意味での美的な結晶の一つですが、それは、一見すると天才的な芸術家が一人で生み出したように見えるものであっても、実は長大な文化的伝統と重層的な社会的諸関係のただなかで受胎し産み落とされたものにほかなりません。この講義では、芸術のこのような文化的・社会的な生成の構造に焦点を当てて、各時代の芸術理論を振り返り、各時代の芸術作品がいかにその時代の文化と社会に深く根ざしていたかを歴史的に考察するものです。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ペリクレスとギリシア建築	1. 全体への序論 2. ギリシア古典美術を代表するものとしてのアテネのパルテノン神殿 3. 芸術総監督フェイディアスの美的理念と民主派の政治家ペリクレスの政治思想 4. 建築芸術の政治的表象性	青山　昌文（放送大学助教授）	青山　昌文（放送大学助教授）
2	プラトンとギリシア文芸	1. ヨーロッパ美学の源流としてのプラトン美学 2. ギリシア文芸とりわけホメロスの叙事詩の政治的・社会的役割 3. 文学芸術の政治的表象性とプラトン美学	同　上	同　上
3	アリストテレスとギリシア演劇	1. ヨーロッパ芸術理論の源流としてのアリストテレス芸術学 2. ギリシア演劇とりわけ悲劇の構造と上演の政治的・社会的機能 3. 演劇芸術の政治的表象性とアリストテレス芸術学	同　上	同　上
4	修道院の神学者とロマネスク美術 －その１－	1. 偽ディオニシオスの神学と神の顕現 2. ロマネスク建築芸術のプラトン的超越性 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
5	修道院の神学者とロマネスク美術 －その２－	1. 悪の神学と異形なるもの 2. ロマネスク絵画と彫刻の光と影 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
6	トマス・アクィナスとゴシック美術	1. トマス・アクィナスの美学と哲学 2. ゴシック建築芸術のアリストテレス的内在性 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
7	ルネサンスの哲学とイタリア・ルネサンス美術	1. ルネサンスの新プラトン主義哲学 2. ボッティチェリとミケランジェロ 3. 絵画・彫刻芸術の哲学性と社会性	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ルネサンスの政治とイタリア・ルネサンス美術	1. フィレンツェの共和制とメディチ家 2. ドナテッロとミケランジェロ 3. 絵画・彫刻芸術の政治性と社会性	青山 昌文	青山 昌文
9	宗教改革と北方ルネサンス美術	1. ルターの宗教思想と芸術思想 2. デューラーとクラーナハ 3. 絵画芸術の宗教性と社会性	同 上	同 上
10	対抗宗教改革とバロック美術	1. トレント宗教会議の宗教思想と芸術思想 2. ベルニーニとリュベンス 3. 絵画・彫刻芸術の宗教性と社会性	同 上	同 上
11	ディドロとロココ美術	1. ディドロの美学と芸術理論 2. ブーシェとフラゴナールそしてシャルダン 3. 絵画芸術の世俗性と社会性	同 上	同 上
12	革命の時代と１９世紀美術	1. 産業革命と芸術の変貌 2. クールベとマネ 3. 絵画芸術の政治性と社会性	同 上	同 上
13	戦争の世紀と２０世紀美術	1. 芸術の理論化と時代批判 2. ピカソとシャガール 3. 現代芸術の理論性と批判性	同 上	同 上
14	死の影と現代芸術	1. 現代社会批判としての現代芸術 2. ウォーホル 3. 現代芸術の現代性	同 上	同 上
15	芸術と社会 ―表象の構造―	1. 芸術の社会性の古典的在り方と現代的在り方 2. 宗教芸術と環境芸術 3. 表象の構造	同 上	同 上

＝ イメージの歴史（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：若桑 みどり （千葉大学教授）〕

全体のねらい
1. イメージが人類の歴史のなかで果たした多様な作用についての理解
2. 視覚表象としてのイメージの解読と分析の方法論についての理解
3. 権威となって崇拝され伝承されるイメージの権力作用についての理解
4. 共同体の心性を創りだすイメージの社会的なはたらきの理解
5. 他者（女性、外国人、異人種、植民地人）に対する差別を産み出すイメージの政治性についての理解
6. イメージは歴史が生み出すものであると同時に歴史を創り出すものであることを理解し、その研究の重要性を理解する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イメージの歴史とは何か	この講義の内容についてその基礎論を語る。まずイメージの歴史が既存の美術史と異なる点について3点説明する。第一点はこれが大芸術のみを研究対象とせず、マンガや版画、宣伝ポスター、貨幣、メダルなどの複製・大衆文化を含む広範なイメージを問題とすること、第二に美術史的方法論のみではなく、アカデミックな学問の領域を越え、歴史、社会史、宗教史、文学史など成果を包含しながら、社会史と連携した文化史をめざすこと、第三にポストコロニアルとジェンダーの視点に立ってイメージの歴史を再解釈することを説明する。	若桑みどり（千葉大学教授）	若桑みどり（千葉大学教授）
2	社会と文化の関係について	「社会」とは、経済的、社会的、政治的な構造の総称であり、特定の場所と時間に特有の社会的諸関係のパターンとして現れる目に見えない構造である。いっぽう、「文化」とは「基本的に書物や美術品や歌舞演劇に現れた態度・価値観、そしてそれらが表現「想像的なものや象徴的なものの領域」すなわち表象であることを説明する。さらにこの表象の生産と消費のメカニズムについて前近代と近代の構造の相違についてふれながら具体的なイメージをあげて説明する。	同上	同上
3	イメージ（image）生産の目的	人類が社会の中でイメージをどのような目的で生産してきたかについて6項目について説明する。(1)「呪術的目的」。イメージはそれ自体が表象されたものの魔力を分け持つものであったこと。(2)不可視のものの喚起。宗教的、道徳的な理念の強化のみならず「想像の共同体」である国家の表象の重要性。(3)表現されたものの権威化・栄光化と永続性。(4)歴史意識の増幅。歴史と神話の創出。(5)他者の創出。社会の下層や周縁、外部にいる集団の否定的イメージの生産による社会秩序の維持のメカニズム。(6)欲望の喚起または昇華。(7)社会批判。	同上	同上
4	イメージの生産方法－定型図像について	イメージは文法や語彙と同様にある文明のなかで歴史的に伝承され、変形をうけながら幾たびも再解釈されつつ継承されるものであることを西欧のイメージの歴史を貫く定型的図像を例にあげて具体的に説明する。(1)古代ギリシャ・ローマで創造された定型図像とその伝承。(2)古代哲学倫理から発生し中世に隆盛した倫理哲学的定型図像。(3)キリスト教的定型図像。(4)オカルト哲学の定型図像。(5)民衆文学と民間伝承の定型図像。(6)定型図像の崩壊としての現代美術。	同上	同上
5	イメージの表現様式	図像は通時的に伝承されるが表現様式は共時的に共有される。「最後の晩餐」という共通の図像が時代とともにいかに異なった様式で表現されたかを具体的に検証する。さらにイメージは図像と様式の独自な結合であると同時に、その結合を引き起こす独自の文化的状況についての総合的な研究であるイコノロジーの必要について説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	カノン「正典」の成立－古代社会のイメージと心性	西欧文明においてはギリシャで生成されたイメージが権威あるカノンとなって伝承されたことについて具体的に説明する。まずアテネのパルテノン神殿の破風彫刻を例にとって、そのテーマが、ギリシャ文化と国家の優越を象徴するオリュンポスの神々の栄光化と異民族の武力による制圧であったことを示し、イメージのカノンとしてのアテナ女神と英雄ヘラクレス、他者のイメージの典型としての「巨人族」と「アマゾン族」の制圧、また「レイプ」のイメージのカノン化について説明する。	若桑みどり	若桑みどり
7	中世西欧のイコン－聖母像	西欧には理想的身体の崇拝というギリシャ的カノンのほかに、肉体の否定というもう一つのカノンがある。イエス・キリストに人間の体を与えた聖母マリアの身体をとおして、霊魂を上位におき、身体を下位におくキリスト教思想がいかに聖母マリアの身体表現をとおして表象されたかを見る。また肉の堕落の象徴であるエバと処女にして母である聖母マリアの二項対立を検証し、この区別によってキリスト教がいかに女性の性を統御してきたかを見る。	同上	同上
8	古代カノンの復活－ルネサンス	フィレンツェの市庁舎前の広場に建てられた公共彫刻の変遷を探りながら、ルネサンスの自治都市国家から君主制国家への推移につれて広場の公共彫刻がどのように変遷したかをみる。共和政の象徴であるドナテッロの「ダヴィデ」、「ユーデイット」からミケランジェロの「ダヴィデ」にピークを迎えた共和国的イメージが君主制の確立とともに「ヘラクレス」へと変貌し、女英雄「ユーデイット」が、「殺されるメドウーザ」「サビニ族の女のレイプ」に変質する。	同上	同上
9	女英雄ユーデイット像の変遷	祖国を救った女英雄ユーデイットが中世、ルネサンス、16世紀、19世紀という時代の推移のなかでどのように再解釈され新しい意味を与えられたかについての講義。女性戦士への家父長的視線をうけて、女英雄ユーデイットから男殺しの運命の女へと堕落してゆく歴史を、具体的作例に即して検証。女性の役割を逸脱した女性戦士の格下げが家父長制社会における女性役割の差別化を象徴することをあきらかにする。	同上	同上
10	フランス革命と公共彫刻	新しい国家・体制は民衆の忠誠心をつくりだすために新しい国家的象徴をつくりだす。革命後のフランスは共和国の象徴を多数うみだすが、その基本的な図像はギリシャ的古典にものづいていた。共和国の象徴となったヘラクレスとマリアンヌについて、革命後100年間の、王政、帝政、共和政の体制変化に伴う国家的表象の変遷を探る。	同上	同上
11	フランス革命と民衆の漫画	革命と共和国、ナポレオン、ルイ・フィリップ、ナポレオン三世など体制の権力を美化する公的な大芸術の下で、民衆は民衆がみた革命、ナポレオンの政治、第三共和制、第二帝政の政治を批判し、笑った。オノレ・ドーミエの漫画を中心にして、下層の大衆の視線からみた政治・国家・権力を笑う漫画、風刺画に注目する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	自由の女神	アメリカ独立を記念してフランスがアメリカに寄贈した自由の女神をテーマとし、この女性の図像について分析する。また、アメリカ大陸発見当時の16世紀から17世紀にいたる時期にヨーロッパが「アメリカ」を「裸体で黒人の野蛮な女性」として人喰いの悪習とともに表象していたこと、それが植民開始とともに邪悪な男性異教徒として表象されるようになったことを示す。いっぽう独立直後のアメリカ知識人が自国アメリカをギリシャ風の衣裳をまとった白人の女神として象徴したことを示す。征服すべき現地女性から支配する白人女性へと変化するアメリカのエンブレムのなかにアメリカの自他イメージの歴史的変化が現れる。	若桑みどり	若桑みどり
13	ナショナリズムと植民地への視線	19世紀の先進国家による世界の植民地化の時期に、フランス、イギリスの官展に出品された作品の主題に古代ギリシャの英雄像が復活する。その背景に進展する考古学と人類学があった。ナショナリズムと人類学の結びつきによって西欧人はギリシャ彫刻を人類の最高の美のカノンであることと、アジア、アフリカの人種を劣等視する人種差別主義を正当化した。アジアの女性を女奴隷として描くオリエンタリズムと、植民地の人間を「展示」した植民地博物館のディスプレイをとりあげて、宗主国側に植民地を見る人種差別的視線を探る。	同上	同上
14	ファシズムのイメージ戦略	ヒトラーとムッソリーニの文化政策と彼らが生産した多数のイメージを分析し、これらのイメージによって国民がいかに全体主義に扇動されていたかを考える。古典主義的秩序と画一性がファシズムの様式原理であった。ドイツではギリシャ人と同じ人種である「アーリア人」の身体をもつ男性全裸像が公共彫刻として優先される。イタリアでは古代ローマ帝国の図像伝統が繰り返され、帝国の継承者としてのムッソリーニが神格化された。古代ローマ皇帝の騎馬像や鷲の紋章の復活など「創られた伝統」の典型をそこに見ることができる。	同上	同上
15	日本の公共彫刻	東京都内に現在立っている公共彫刻を探訪して、現代日本における公共的イメージがどのような性格をもっているかを検証する。その結果、それらの大多数が女性裸体像であることがわかった。戦前の男性武装像を撤去したあとで戦後の日本は政治的、社会的意味をもたない女性裸体を選択したが、その理由はどこにあるのか。パルテノン神殿の彫刻からはじまったイメージの歴史の終わりはわれわれ自身のまわりにある日常のイメージの研究に終わる。	同上	同上

＝ 西洋音楽の歴史（'０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：笠原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい
西洋音楽の歴史を通じて西洋の音楽文化に触れるとともに、日本と西洋音楽との接触について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋音楽の流れ	西洋音楽の歴史を概観し、それぞれの時代の音楽の特徴を学ぶ。	笠原　潔（放送大学助教授）	笠原　潔（放送大学助教授）
2	古代ギリシャの音楽	西洋音楽文化の根底にある古代ギリシャの音楽観ならびにそれを生み出した古代ギリシャの音楽文化について学びながら、言葉と音楽が融合した状態にある「ムーシケー」の理念が今日まで西洋の音楽文化を導いてきたことを明らかにする。	同　上	同　上
3	「音楽」という言葉をめぐって	西洋の音楽文化を導いてきた「ムーシケー」という概念に対して、中国で生まれ、日本で使われてきた「音楽」という言葉は何を意味してきたかを明らかにし、併せて幕末の日本人がどのような言葉で西洋音楽を捉えたかについて触れる。	同　上	同　上
4	ユダヤ教からキリスト教へ	西洋音楽の基盤となったキリスト教の音楽文化がユダヤ教から引き継いだ遺産を明らかにすると同時に、キリスト教音楽文化の諸制度について述べる。	同　上	同　上
5	中世キリスト教聖歌	西洋中世のキリスト教諸聖歌の成立と、その後の時代の展開を明らかにする。	同　上	同　上
6	世俗音楽の隆盛	西洋中世後半の時代における世俗音楽の隆盛について述べ、それが西洋の恋愛観の確立に果たした役割を紹介する。	同　上	同　上
7	ルネサンス時代の音楽	中世末期からルネサンス時代にかけての音楽上の変遷を明らかにしながら、ルネサンス音楽の特徴を、特に音楽と言葉との関わりの視点から明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	キリシタン時代の音楽	前８章のまとめとして、日本が西洋音楽と初めて出会ったキリシタン時代を取り上げ、キリシタン時代に流入した西洋音楽の様相とこの時代に伝えられたキリスト教聖歌が今も隠れキリシタンの人々の間に伝承されている現状について述べる。	笠原　潔	笠原　潔
9	初期バロック時代	ルネサンス末期から初期バロック時代に引き継がれた新しい表現様式について述べ、併せて音律の問題に触れる。	同　上	同　上
10	バッハの『マタイ受難曲』	バッハの代表作として『マタイ受難曲』を取り上げ、そこに見られる言葉と音楽をめぐるバッハの表現技法を明らかにする。	同　上	同　上
11	モーツァルトのオペラ	モーツァルトのオペラから数場面を取り上げ、人間心理の表現に関するモーツァルトの技法を分析する。	同　上	同　上
12	ベートーヴェンとその時代	ベートーヴェン時代に進行した音楽の資本主義化の様相を明らかにし、その動きと併行して楽器に加えられた改良の様相について述べる。また、江戸時代の日本人が、そうした新しい楽器に接していた事実も紹介する。	同　上	同　上
13	シューベルトの『冬の旅』	シューベルトの歌曲集『冬の旅』を題材に、この歌曲集の社会背景や、西洋文化の中の民俗的文化要素を紹介する。	同　上	同　上
14	自筆楽譜の問題	音楽史料としての自筆楽譜の問題を取り上げ、自筆楽譜からどのようなことが読み取れるかを明らかにし、ショパンやメンデルスゾーンの新しい作品像について触れる。	同　上	同　上
15	西洋の楽譜	西洋の楽譜の歴史を追いながら、西洋の楽譜は作品の姿を忠実に書き留めたものではなく、その記譜法は時代性を帯びている事実を明らかにする。	同　上	同　上

＝ 日本音楽の基礎概念（’００）＝（R）

〔主任講師：竹内　道敬（元国立音楽大学教授）〕

全体のねらい

日本の音楽はつまらない、わからない、というので、片隅に追いやられている。そんなことはない。その基礎的な考え方を探ってみると、面白いことがたくさんある音楽で、日本とはなにかということも見えてくるのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本音楽と楽器(1)	我が国は稀にみる高温多湿の国である。そこでは金属楽器は錆びてしまう。楽器の材料も呼吸する必要があったから、木、竹、革などになった。 したがって楽器は生き物であり、生きていなければならない。案外寿命は短いが、日本の楽器は作り替えることで生き続ける。今一番演奏しやすい楽器が名器なのである。	竹内　道敬（元国立音楽大学教授）	竹内　道敬（元国立音楽大学教授）
2	日本音楽と楽器(2)	三味線音楽には、実にさまざまな種類がある。これは音色を追求してきた結果である。それにはどんな音色があるか、どこを変えてきたのか。上方と江戸には大きな差がある。	同　上	同　上
3	楽器演奏者と発声	楽器演奏者が声を出すのは、我が国独特の習慣である。なぜ声をだすのか。なぜ邪魔とは感じないのか。あれでも音楽といえるのだろうか。考えてみよう。	同　上	同　上
4	流派と特色	日本音楽もいいけれども、なにを歌っているのかわからないという意見がある。なぜわからないのか。日本語の特色から考え直してみよう。	同　上	同　上
5	発声のきまり	同じように、歌の語尾をふるわせるからわからないという。なぜふるわせるのか。理由はあるはずである。	同　上	同　上
6	日本音楽と指揮者	日本音楽には、西洋音楽のような指揮者はいない。聴衆に背をむけている演奏家はいない。全員お客のほうを向いている。でも揃っているのはなぜだろうか。	同　上	同　上
7	日本音楽と形式	苦しそうな歌を聞くことがある。男が女の声の真似をする。パート分けをすれば楽なのに、そうしないのははぜか。また声楽四部合唱曲のような形式は、なぜ生まれなかったのか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	調弦・調律	三味線には本調子、二上り、三下りという調弦がある。演奏途中で変更する。箏曲でも琴柱を演奏中に動かす。こんな忙しい演奏は日本だけらしい。	竹内　道敬	竹内　道敬
9	入門曲・練習	日本音楽にはピアノのバイエルのような練習曲がない。初心者が習う曲をききながら、「学ぶ」とはなにか。その理由を考える。	同　上	同　上
10	演奏の姿勢	正座して演奏するのは、現代では（たぶん昔も）苦痛である。それはいつごろ誰がきめたのか。なぜ変えないのか。無理な姿勢でいい演奏はできないはずだが。	同　上	同　上
11	流儀の区別	能には五流ある。箏曲も生田と山田というおおきな流派がある。三味線音楽には長唄、常磐津、清元、義太夫、新内などの流派がある。なぜこの流派が生まれたのだろうか。どうしたら聞き分けられるのだろうか。	同　上	同　上
12	名人・上手	録音技術のなかった時代でも、一世を風靡した美声家、名人上手がいた。昔の人はどんな声を美声と感じたか。想像してみるのも楽しいことだろう。	同　上	同　上
13	リズム・メロディー・ハーモニー	日本音楽の基本は二拍子である。なぜワルツは生まれなかったのだろう。またなぜすてきなメロディーがなかったのだろう。そしてなぜあんなにもゆっくりしているのだろう。	同　上	同　上
14	伝統芸能	伝統音楽の危機が叫ばれている。後継者がいないという。なぜいないのか。ものの考え方が変わったのだろうか。なぜ魅力がなくなったのだろうか。音楽だけではなく、伝統芸能とはなにかを考え、その解決方法を探ってみたい。	同　上	同　上
15	まとめ・日本音楽の特色	雅楽は1300年以上、能は600年以上、箏曲、三味線は300年以上の伝統がある。それらを通していえることは、伝承と創造との巧みなバランスである。それらを考えながら、日本の音楽の将来のあり方を見極めてみよう。	同　上	同　上

＝ 応用音楽学（’００）＝（R）

〔主任講師：山口　修（大阪大学大学院教授）〕

全体のねらい

音楽と社会の関係において両者が見せる相互作用のダイナミクスに焦点を合わせ、それを「応用音楽学」と総称して新しい音楽学の理論と方法を提示する。歴史的な記述を目指すのではなく、現代社会の多様な様相に着目し、従来の「民族音楽学」的な観点を重視しながら日本や東アジア全体から人類文化を眺望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会に開かれた音楽学	社会と音楽を対置したときに、音楽を「鳴り響く音」や「楽譜」のかたちで独立したものとして捉えるのではなく、社会のなかに組み込まれたものとして、また、音楽が社会を変えてゆくといったように両者の関係を重視して、以下の章で順次述べてゆく問題意識を総合的に鳥瞰する。	山口　修（大阪大学大学院教授）	山口　修（大阪大学大学院教授）
2	社会から学ぶ音楽学	音楽学は特定の社会と結びついて発展した。しかし、激動の現代と未来においては、特定の社会に束縛されない観点が一般に必要とされるようになってきた。そこで一つは、大きな社会変動が起きたときにどうなるのか、もう一つは、中心ではなく周縁から何を学ぶかを考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 渡辺　裕（東京大学大学院助教授）
3	多元文化主義の現代と音楽	好むと好まざるとに関わらず、文化が多元的であるということを意識しなければならない時代になった。国や地域の大小を問わず、また社会のどのレヴェルであれ、多元文化があることを知ることになる。この章では、価値の問題をおもに扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 志村　哲（大阪芸術大学助教授）
4	国際化社会の音楽	多元文化主義の一つの現れとしての国際化社会は、近代的な産業構造の産物として考えられがちだった。日本音楽もその悪影響を受け、国際化が西洋化と混同されていた。真の国際化を考えるために、音楽創作の現場と聴き手の好みの変化、そして人間の移動にまつわる問題を扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 吉崎　清富（東京学芸大学教授）
5	地域社会の音楽	「国際」とか「多元」といった外への方向だけでなく、自分の住んでいる地域や集団の方へも関心を保つ必要がある。人びとの音楽生活の中心はあくまでも地域にある。であれば、地域社会の音楽をもっと詳細かつ厳密に調べなければならない。	同　上	山口　修 ゲスト 田井　竜一（京都市立芸術大学附属日本伝統音楽研究センター助教授）
6	音楽における脈絡変換	音楽は、必ず脈絡があって成立してきた。しかし、近代化、国際化、多元文化主義の波は、脈絡の変更を余儀なくしてきた。現代から未来への脈絡変換に影響される「鳴り響く音響」としての音楽、それを伝承する媒体としての身体の問題を考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 月溪　恒子（大阪芸術大学教授）
7	異文化理解と音楽	現代社会では、遠近の異文化に対してどのような態度をとるべきか、選択を迫られている。異文化への道を閉ざす文化は必ず衰弱するものである。そこで、異文化理解に関わる基本的な立場をここで整理し、最近の成果を紹介する。	同　上	山口　修 ゲスト 小西　潤子（静岡大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校教育と生涯教育における音楽	人間は生まれおちてからすぐに音楽学習を始め、生涯を通じて発達をとげてゆく。従来の音楽教育学は、制度化された学校に限定される傾向があったが、教育を人びとの生活一般に関わる問題として位置づけるために、応用音楽学の枠のなかで、音楽学習と自己形成の問題を考察する。	山口　修	山口　修 ゲスト 加藤富美子（東京学芸大学教授）
9	フィードワーク概念の拡大と音楽	地域社会であれ国際化社会であれ、対人認識、他者の認識という側面が音楽活動とは切っても切れない関係にある。これをある程度組織的におこなうのがフィールドワークである。そのあり方は近年大きく変化しつつあるので、そこから何が見えてくるのかを検討する。	同上	山口　修 ゲスト 田中　健次（佐賀大学教授）
10	音楽現場の多様化とアートマネージメント	人類音楽の多様な形態のなかで我々が接近し得る音楽は、全体の5分の1だと言われている。人びとの耳に音楽がとどくためには、アートマネージメントといわれる操作が必要となってくる。このことを明らかにしないかぎり、現代社会の音楽生活の問題点は解明されない。	同上	山口　修 ゲスト 中村　透（琉球大学教授）
11	文化行政と音楽	国や、県、市町村といったレヴェルで、音楽をどのように考えるかをリードする文化行政は、我々がさまざまな音楽に接近できるかどうかを決定する力を有している。公的な財源をつかって公平に体験できる場を提供する問題を考えるのが、この章である。	同上	山口　修 ゲスト 徳丸　吉彦（放送大学教授）
12	音楽における環境問題	かつては、特定の目的のために人びとが衆知をあつめて音楽が演奏されていた。最近では、メディアが大きく変化するにつれ音楽のあり方が拡がり、環境との関係が多様化してきた。すなわち、自然環境のみならず、人為環境が以前にも増して問題となる。	同上	山口　修 ゲスト 中川　真（大阪市立大学教授）
13	映像音楽学の展開のために	映像技術の発展は，視覚情報をともなって音楽を再生することを可能にした。音楽にもともと備わっていた身体性がここで復権する。音楽のあり方を他者に伝えるうえで映像がはたす役割や、新しい表現手段としての映像といった現代的課題をこの章で扱う。	同上	山口　修 ゲスト 高橋　光則（映像作家）
14	「わざ」の世界と音楽	映像にせよ、音楽そのものにせよ、特定の人間の集団が伝承し形成してきた目に見えない「わざ」の領域に多くを負っている。「わざ」はどのように現場で伝承され、新しい「わざ」はどのようにつくられてゆくのかを具体例とともに考察するがこの章のねらいである。	同上	山口　修 ゲスト 岡田　節人（ＪＴ生命誌研究館館長）
15	人と人をつなぐ音楽	音楽は、たとえ一人で演奏するものであれ、多くの人びととの関わりが反映している。個人から集団へ、はては地球レヴェルの仲間たちへと人間的精神を拡大すべきであるという基本的な命題を研究の骨幹に据える応用音楽学の立場を、音楽哲学的に総括するのがこの章である。	同上	山口　修

＝ 現代における伝統演劇（ '０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邊　守章（放送大学副学長）〕
〔主任講師：渡辺　保　（放送大学教授）　〕

全体のねらい

日本には「伝統演劇」と呼ばれる舞台芸術がある。これは、例えば西洋演劇における「古典」が、主としてテクストや譜面のみが伝えられて来たのとは異なり、舞台表現の総体が、数世紀にわたって人から人へと伝承され、現在もなお演じ続けられている。そのために、世界的にも貴重な＜舞台芸術の知＞として、日本以外の多くの演劇人や更には他の領域の芸術家から注目されて来た。その代表的なものとして、歴史的起源の古いものから、主として、能・狂言、人形浄瑠璃（文楽）、歌舞伎について、代表的な作品と理論的なテクストを取り上げ、これらの演劇伝統が、現代の日本及び世界の演劇文化にとって持ちうる意味を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	伝統演劇とは何か	日本の舞台芸術の伝統と伝承の特殊性。伝承されるものは何か。演技とテクスト。この科目の理論的フレーム。テーマの現代性と国際性。映像資料は、現代の若き狂言師野村萬斉演じる「三番叟」『ハムレット』『葵上―能ジャンクション』、舞楽は『陵王』、能は梅若六郎の『井筒』、狂言は茂山千作の『宗論』、文楽は桐竹紋十郎の『酒屋』、歌舞伎は尾上松緑菊五郎の『髪結新三』、そして梅蘭芳の京劇『貴妃酔酒』にジャワの宮廷舞踊、ジュネの『バルコン』など。問題の地平を映像的に示す。	渡邊　守章（放送大学副学長） 渡辺　保（放送大学教授）	渡邊　守章（放送大学副学長） 渡辺　保（放送大学教授）
2	能の地平	能の始原的な構造と作用を「翁」によって考察する。平成11年７月に開催された国際世阿弥シンポジウムにおける『翁』の特別上演（観世栄夫、野村萬斉、大倉源次郎出演）と、シンポジウムの討議を素材とする。	渡邊守章 松岡　心平（東京大学助教授）	渡邊守章 松岡　心平（東京大学助教授）
3	能あるいは記憶の劇場	能は14世紀に成立して、そのままの形で現代まで伝承されたのではないが、「記憶の劇場」としては世界にも類をみない完成を遂げた。記憶の能作術と舞台の典型を、系譜学の可能な『松風』（後藤得三）と、世阿弥作の複式夢幻能の典型である『井筒』（梅若六郎）と『融』（友枝昭世）によって分析する。	渡邊守章	渡邊守章
4	世阿弥の思考	能の大成者である世阿弥は、役者として一座の棟梁であったばかりではなく、能作者であり、現代風に言えば演出家、作曲家、振付家であり、更には、世界の舞台芸術のみならず芸術全般において、類稀な理論家であった。世阿弥の作業を、その伝書を通じて考察し、その現代的な意味を考える。	渡邊　守章 松岡　心平	渡邊　守章 松岡　心平
5	狂言の言葉と身体	能の「もどき」である狂言は、単に中世の笑劇ではない。その笑いの捉え方を始め、喜劇の根拠をなす呪術的な根を考えるには恰好のジャンルである。能との対比構造を世界の演劇の記憶のなかで位置づける。	渡邊　守章	渡邊　守章
6	人形浄瑠璃と劇の言説	現在「文楽」とよばれている人形浄瑠璃は劇作術においてもまた三人遣いによる人形の演技としても、世界に類のない舞台表現である。映像は、吉田簑助の解説、桐竹紋十郎の『艶容女舞衣』「酒屋の段」、簑助の『本朝廿四孝』「狐火の段」など人形遣いの技法と表現に焦点をあてて考える	渡辺　保	渡辺　保

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	人形浄瑠璃の＜世界＞	文楽の時代狂言は，同時代に起きた武士階級のドラマを主題としつつ、それらを例えば『太平記』の＜世界＞に起き直して表現する。こうした劇的虚構の生成は、町人階級の文化的創造力を測る上で鍵となるだろう。文楽の代表作『菅原伝授手習鑑』「丞相名残の段」（吉田玉男）、『摂州合邦辻』「合邦住家の段」（桐竹紋寿・吉田文雀）、『仮名手本忠臣蔵』「三段目」「四段目」「六段目」（吉田文雀、吉田作十郎他）の分析を通して、舞台が如何に文化を表象する＜装置＞として成立しているかを考える。	渡辺　保	渡辺　保
8	音曲と語り物	人形浄瑠璃は三味線音楽に支えられた＜語り物＞である。『恋飛脚大和往来』「新口村の段」（野澤喜左衛門）、『絵本太功記』「十段目」等を例に取り、人形浄瑠璃における三味線音楽と言葉の劇的・演劇的構造と作用を分析する。	同　上	同　上
9	歌舞伎と文楽	歌舞伎の丸本物は、人形浄瑠璃の作品を歌舞伎に移したものだが、それが歌舞伎の劇作術も演技も、極めて豊かなものにした。『菅原伝授手習鑑』の「車曳」、（文楽）と「車引」（歌舞伎）、『鬼一法眼三略記』の「菊畑」『絵本太功記』「十段目」の歌舞伎ヴァージョンと文楽ヴァージョンを比較しつつ、この二つの舞台表現の特性を考察する。	同　上	同　上
10	歌舞伎における舞踊	歌舞伎の重要な演目を構成する舞踊はどのような特性を持つのか。能の舞と比較しつつ、舞踊を考える上での基本的フレーム・ワークを行なう。映像は能『石橋』（宝生英照）と歌舞伎『鏡獅子』（中村富十郎）。	同　上	同　上
11	世話物の舞台	歌舞伎が同時代演劇として成立する上で重要な役割を演じたのは＜世話物＞と呼ばれる同時代の町民階級のドラマによってであった。その代表的な作品『お染久松色読販』（「お染の七役」『梅雨小袖昔八丈』（「髪結新三」）、『青砥稿花紅彩画』（「弁天小僧）によって、劇的言語の変容を分析する。	同　上	同　上
12	伝統演劇とジェンダー	日本の伝統演劇を特徴付けるものの一つに男性が女性の役を演じるということがある。現代におけるその創造的意味を、アジアの伝統演劇（京劇やインドのヤクシャガーナ）と対比しつつ，現代演劇の側から分析する。日本の現代演劇で例に取るのは、ジュネ作渡邊守章訳・演出、篠井英介主演『バルコン一革命夜話幻想館』である。	渡邊　守章	渡邊　守章

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	伝統演劇の幻惑(1)―クローデルと日本の伝統演劇	日本と中国の伝統演劇に実際に触れ、その現代的意味を主張したのは、フランスの劇詩人ポール・クローデルである。この「先駆的な」劇詩人の視線とその変容を、京劇、舞楽、能、文楽、歌舞伎について分析する。	渡邊　守章	渡邊　守章
14	伝統演劇の幻惑(2)―アルトー、ブレヒト、そして…	20世紀の演劇に決定的な影響を及ぼした二人の演劇人、つまりアルトーとブレヒトは、それぞれの形で東洋の演劇に強い衝撃を受けている。現在では、「太陽劇団」を率いるアリアーヌ・ムヌーシュキンや、アメリカ出身でヨーロッパでの活躍のめざましいロバート・ウイルソンなど、20世紀西洋演劇の先端的演出家が、東洋の伝統的演劇表象と切り結ぶ舞台を考察する。	渡邊　守章	渡邊　守章
15	世界化のなかの伝統演劇	みずからの独創性の根拠として、東洋の伝統演劇に負うところを主張する欧米の演劇人は少なくない。その意味では、日本の伝統演劇も、日本人とその文化の特殊性の内部に閉じこもってはいられず、創造的な外部の視線に晒されているはずだ。世界化の地平における伝統演劇の読み直しの作業はどのようなものか。2001年９月にフランスで世界初演を行なったクローデルのテクストによる新作能『内濠十二景あるいは二重の影』（渡邊守章作・演出，観世栄夫作曲、主演）の製作を例に、幾つかの実験的な舞台を検証してみる。	渡邊　守章 渡辺　保	渡邊　守章 渡辺　保

＝ 文化人類学（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：江渕　一公（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代の人類の生活は、産業化と資本主義経済のグローバル化によって、否応なしに世界経済システムに緊密に組み込まれ、それに伴って文化のグローバル化が急速に進んでいる。文化人類学初学者のための入門として、まず前半において、文化人類学の伝統的（古典的）視角・方法・知見についての基礎的理解をはかると共に、それを踏まえて、後半では、人類が直面している諸問題をグローバルな視野で捉える新しい“地球人類学”の視角と課題について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化人類学とはどのような学問か	文化人類学の発展の歴史を振り返りながら、文化人類学の学問的特質、範囲、ねらい、視角と方法、国による人類学の構成の違い、応用人類学の諸分野、人類学と隣接科学の関係について概説し、とくに今期の授業で重点をおく地球人類学的視座とテーマについて述べる。	江渕　一公（放送大学教授）	江渕　一公（放送大学教授）
2	人類学の理論的進化と現代的課題	前世紀の進化主義、伝播主義理論に始まる文化人類学は、今世紀には構造・機能主義、文化相対主義理論等により飛躍的発展を遂げたが、80年代以降、唯物論的文化理論、解釈学・象徴主義理論、政治生態学理論等の登場により更に大きな変化を見せていることを論述する。	同　上	同　上
3	システムとしての文化	文化の定義に関する諸説を概観しつつ、「人間性と文化」の視点から、文化の意味と特質、主要構成要素、人類文化の多様性と共通性・普遍性、文化の可変性、文化相対主義等、人類学の視角を提示するとともに、文化を「システム」として捉える本授業科目の基本的立場について述べる。	同　上	同　上
4	文化化のメカニズム －心理人類学の諸問題－	「文化とパーソナリティ」学派の主要研究、心理人類学・教育人類学の成果を基に、文化化（文化の伝達と習得）のメカニズムを明らかにし、文化と性、文化と認知・情動、自文化中心主義、国民性理論など、「人間性と文化」に関わる諸問題について考察する。	同　上	同　上
5	適応戦略と経済システム	所与の環境における適応方法・戦略として形成された文化の特質を、食料獲得のための生業の形態と食料その他の物資の分配・交換のシステムの視点から捉え、採集・狩猟・漁労、鍬農耕、犂農耕、灌漑・水利システム、産業化の各段階の特徴について経済人類学的考察を加える。	同　上	同　上
6	環境統制のシステム －道具と技術－	主として産業化以前の段階の人類社会が蓄積してきた人間の生物的必要を満たすための環境統制の装置とシステム、エネルギー利用の道具・技術、ものを製作する技術と技能等について、体温調節と身体保護、水と食料、食材の貯蔵と調理、情報伝達と貯蔵、輸送など多面的に考察する。	同　上	同　上
7	社会的協力のシステム －家族・親族・年齢集団・利益集団－	人間集団の形成原理と主要形態に関する文化人類学の基本的概念・理論を、性と婚姻、家族、親族と出自、性・年齢・利益集団等について、それらを社会的協力のシステムと見る立場から概観するとともに、それらの現代的変化の状況について社会人類学的考察を加える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	信仰と価値のシステム －宗教・儀礼・神話－	人間の由来、自然界・超自然界の秩序と人間との関わりをめぐる宇宙論的懐疑は、各民族独自の神話、呪術（病理観や治療技術を含む）、宗教、儀礼を生み出し、真善美に関わる信仰と価値観、世界観を形成してきた。人間の内面統制システムの多様な側面について考察する。	江渕　一公	江渕　一公
9	社会統制のシステム －バンド・部族社会・首長制社会・国家－	原初的社会組織としてのバンド、部族の社会組織、より高度化・複雑化した社会組織としての首長制社会、灌漑農耕文明国家の政治的・経済的・宗教的機能、国家の起源とその促進要因について検討するとともに、それらの組織の基盤をなす諸原理について考察する。	同　上	同　上
10	産業化・コロニアリズム・世界システム	重商主義政策のもとで拡大したヨーロッパ諸国の世界進出競争は産業革命によって一段と激化し、世界の「周縁」社会の植民地化を増大させた。コロニアリズムを通して、「周縁」社会が産業化・資本主義経済の世界システムの中に組み込まれていく過程について概観する。	同　上	同　上
11	エスニシティと社会運動	コロニアリズムの崩壊後、多くの新興独立国家が誕生したが、民族抗争と地域紛争が絶えず、西側諸国でも歴史に根ざす民族紛争が続いている。先住民の人権運動を軸とした新しい社会運動、ディアスポラ現象が創り出す新しいエスニシティ状況など、民族共生の課題について考察する。	同　上	同　上
12	越境の人類学 －トランスナショナリズムとグローバリズム－	ヒト・モノ・情報・メディアのトランスナショナルな流動化と文化的覇権競争を含む世界システムのポストモダン的状況によって特色づけられる現代人の文化環境について、ディアスポラ現象、文化のグローバル化とローカル化等の視点から検討する。	同　上	同　上
13	異文化接触と文化の生成 －地球時代の文化のダイナミズム－	現代の異文化接触と文化変化の諸相、とくに伝統文化と外来文化のせめぎ合い、ツーリズムと文化の生成、新しい文化生成のメカニズム、新しい人間類型の出現過程等について、文化人類学における文化変容理論の批判的検討をとおして考察を加える。	同　上	同　上
14	表出的文化の人類学	社会の諸制度と文化的諸価値の維持・強化・挑戦の表明装置としての表出的文化の構造的特質と諸側面（身体装飾、美術工芸などの視覚的芸術、神話・伝説・民話の語り、音楽・舞踊、演劇・スポーツ・祭礼等の演技・競技芸術など）について、現代的視点から考察する。	同　上	同　上
15	転換期の文化人類学の課題と展望 －応用人類学と人類学者の役割－	今日の人類が当面している最大の課題である自然との共生の問題について、応用人類学の新しい分野として注目されている開発人類学・環境人類学の成果を踏まえながら、開発に伴う文化の諸問題について概観するとともに、転換期の文化人類学の新たな課題について展望する。	同　上	同　上

＝ 博物館概論（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、多様な博物館のあり方を紹介することによって、博物館に関する基礎的知識を概説することにある。とくに、現代社会における博物館の多様な展開を具体的に取り上げることによって、博物館が担う現代的役割を多面的に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館入門	現代世界において、博物館の多様化が急速に進みつつある。各種資料の収集・保管・展示・調査研究のあり方から、生涯学習や文化創造の拠点としての博物館の役割などを入門的に明らかにする。また、博物館関係法規や博物館倫理の問題についても概説する。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の歴史	近代博物館の原型は17世紀のヨーロッパでエリートによって形づくられた。米国では、18世紀に大衆教育のために博物館づくりが進展した。日本では欧米博物館の影響を受けつつ、独自の発展を遂げてきた。博物館の歴史を通して、その役割の変遷を明らかにする。	同上	同上
3	自然と生態の博物館	地球の多様な自然と生態をテーマにした博物館は数多くある。自然界における動植物の生態などの展示を通して、自然との共生の重要性を学ぶことができる。具体的事例を通して、自然生態系博物館の多様な役割を明らかにする。	同上	同上
4	科学と技術の博物館	人類がうみだした科学技術をテーマにした博物館は数多くある。科学技術系の博物館では、科学技術の歴史の展示だけでなく、現代における科学技術を遊びながら学べる工夫もなされている。具体的事例を通して、科学技術系博物館の役割を明らかにする。	同上	同上
5	芸術の博物館	芸術をテーマにした博物館は多様である。美術館は、代表的な芸術系博物館の一つである。そのほか、演劇や演芸をテーマにした芸術系博物館もある。さらに、科学技術と芸術文化を融合させたメディア・アートを扱う博物館なども紹介する。	同上	同上
6	歴史の博物館	近年、日本では、歴史遺産の重要性がとみに高まっている。世界遺産の登録が相次ぐとともに、新しい歴史遺産の発掘が行われている。歴史をテーマにする博物館の役割を多面的に取り上げるとともに、歴史的追体験の場を提供する具体的事例を紹介する。	同上	同上
7	民族の博物館	欧米諸国では、世界の諸民族文化をテーマにした博物館が重要な役割を果たしてきた。日本における民族博物館の歴史は浅いが、民族問題がグローバルな課題になる中で、その重要性が増している。具体的事例を通して、民族博物館の役割を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大学の博物館	欧米諸国では、大学附属の各種博物館が重要な役割を果たしている。米国では、1,158の大学のうち、526大学に博物館がある。それに対して、日本では大学附属博物館がいまだに未発達である。具体的事例を通して、大学博物館の役割を明らかにする。	石森　秀三	石森　秀三
9	企業の博物館	企業はその利益を社会に還元するために、さまざまな文化的貢献を果たしている。日本では現在、約400館の企業博物館が存在しており、社会的・文化的貢献をなしている。具体的な事例を通して、企業博物館が果たす多様な社会的役割を明らかにする。	同　上	同　上
10	途上国の博物館	近年、世界の数多くの開発途上国で博物館づくりが進められている。国家の歴史や諸民族の伝統文化を学ぶための教育施設だけでなく、新しい文化創造拠点としての役割も担っている。多様な役割を担う開発途上国の博物館の現状を紹介する。	同　上	同　上
11	エコミュージアム	欧米諸国では、1960年代からエコミュージアム（生活・環境博物館）という新しいタイプの博物館づくりが展開されてきた。1つの地域における人間と環境の関わりを一体的に表現する博物館をめざす「エコミュージアム」の役割を具体的に紹介する。	同　上	同　上
12	地域社会と博物館	日本では近年、地域社会の活性化を図るために、博物館の役割が見直されている。博物館は、地域文化の活性化だけでなく、観光客誘致による地域経済の活性化にも貢献している。具体的事例を通して、地域社会における博物館の役割を明らかにする。	同　上	同　上
13	生涯学習と博物館	欧米諸国では、博物館が生涯学習の場として機能している。子どものための博物館や美術館などにおける具体的事例を通して、生涯学習拠点としての博物館の役割を明らかにするとともに、日本における問題点を多面的に検討する。	同　上	同　上
14	文化創造と博物館	博物館は、各種資料の収集・保管・展示・調査研究だけを目的にした施設ではなく、新しい文化の創造拠点としても重要な役割を果たしている。国内外における具体的事例を通して、文化創造拠点としての博物館の役割を紹介する。	同　上	同　上
15	博物館の未来	情報通信やマルチメディアの高度な発展によって、世界的に博物館のあり方が大きく変貌しつつある。21世紀を視野に入れて、デジタルミュージアムなどの新しい博物館の動きを取り上げ、博物館の未来を展望する。合わせて、文明資本としての博物館の役割についても言及する。	同　上	同　上

＝ 博物館資料論（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、博物館資料の収集、整理保管、展示、調査研究などに関する理論や方法を多面的に紹介することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館資料の意義	博物館は、資料を収集保管し、展示して教育的配慮のもとに市民の利用に供し、あわせて資料に関する調査研究を行う機関である。そのような博物館の根幹をなす「資料」の意義や博物館資料のワイズユースなどについて概説を行う。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	自然系資料の事例	各種の博物館資料のうち、人間を取り巻く自然界の天地万物に関する資料について、東京大学総合研究博物館における具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
3	理工系資料の事例	各種の博物館資料のうち、科学と技術に関する資料について、米国のエクスプロラトリウムや英国の近代産業遺産などの具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
4	人文系資料の事例	各種の博物館資料のうち、考古、歴史、民俗、芸術などに関する資料について、世界各地の美術館や歴史博物館などにおける具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
5	民族資料の事例	各種の博物館資料のうち、世界の諸民族に関する資料について、スイスのバーゼル多文化博物館や米国のアク・チン・インディアンの博物館などにおける具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
6	マルチメディア資料の事例	各種の博物館資料のうち、マルチメディアやデジタル・アーカイヴスに関する資料について、ドイツのカールスルーエにあるＺＫＭ（芸術メディア・テクノロジーセンター）などにおける具体的事例にもとづいてを紹介する。	同　上	同　上
7	博物館資料の整理と保管	博物館は、展示による普及教育、文化財の保全・保護、学術研究などのために資料の収集を行う。収集された資料は、分類・整理されてから保管される。資料収集の方法や資料保管の方法などについて概説を行う。	宇野　文男（福井大学教授）	宇野　文男（福井大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	博物館資料の情報化	博物館は、各種の資料を収集・保管するとともに、それらの資料を有効に活用するために情報化を進めている。具体的事例の紹介をとおして、博物館資料の情報化に関連する諸問題について概説する。	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）
9	博物館資料の保存	博物館資料にはさまざまな種類のものがあるために、資料の性質によって保存の方法が異なる。博物館資料損壊の原因とその対応のあり方、資料保存の実際などについて、日本とフランスの事例を比較しながら紹介する。	園田　直子（国立民族学博物館助教授）	園田　直子（国立民族学博物館助教授）
10	博物館資料の修復	博物館資料は古い時代からつたわるものが多いために、修理・修復を必要としている。資料の修理・修復の目的や方法などについて、日本とフランスの具体的事例を比較しながら紹介する。	同　上	同　上
11	博物館における調査・研究	博物館は、資料の収集・保管、展示・教育などとともに資料の調査・研究という機能を有している。博物館における調査・研究の位置づけおよび調査・研究活動の具体的事例の紹介をとおして、博物館における調査・研究の重要性を概説する。	石森　秀三	石森　秀三
12	博物館における展示の形態と種類	博物館の多様化が進むなかで、博物館における展示の重要性が以前にもまして、問われるようになっている。博物館における展示の形態と種類について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）	宇治谷恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）
13	博物館における展示計画	博物館における展示の実施にあたっては、周到な計画を必要としている。展示基本計画の策定から実施計画にいたるまでのプロセス、魅力ある展示と環境などについて、具体的事例にもとづいて概説を行う。	同　上	同　上
14	博物館における展示技術	博物館における展示の実施にあたっては、各種の展示技術を必要としている。展示の配置計画、動線計画、空間構成、展示のデザイン、展示備品など、博物館における展示技術の諸相を具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
15	博物館資料の未来	博物館の多様化が地球的な規模で進展するなかで、博物館資料についても、その収集・保管、展示・教育、調査・研究のあり方が大きく問われる時代になっている。貴重な文化資源としての博物館資料の未来について総括的に講義を行う。	石森　秀三	石森　秀三

＝ 博物館経営・情報論（’００）＝（R）

〔主任講師：石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本の博物館における具体的な事例にもとづいて、博物館経営・博物館における教育普及活動、博物館における情報の意義とその利用方法などについて概説することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ミュージアム・マネジメント入門	博物館の多様化が進展するなかで、博物館の財政制度、組織、人材配置、施設管理などについて、博物館経営の改革が求められている。博物館利用者に感動を与えるための経営手法であるミュージアム・マネジメントについて概説を行う。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の組織と職員	博物館は単なる建物を指す施設ではなく、組織としての主体性をもって活動する機関である。博物館における諸活動を円滑に進めるための組織のあり方、人材配置のあり方、学芸員の役割などについて概説を行う。	同　上	同　上
3	博物館人材の養成	博物館は、館長を中心にして学芸員や事務系職員などからなっている。日本における学芸員の養成を中心にして、フランスや英国や米国などの各国の事例と比較することによって、博物館における人材養成について多面的に概説を行う。	同　上	同　上
4	博物館の行財政制度	博物館経営で最も重要なのは、博物館に関わる行財政制度である。博物館に関わる行政の役割、博物館の財政・予算、各種の事業資金などについて、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	同　上	同　上
5	生涯学習と博物館教育	近年、生涯学習への関心が急速に高まっている。学校教育や社会教育などとの関連にもとづいて、博物館における生涯学習のあり方や博物館教育の意義について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設専門員）
6	博物館における教育プログラム	博物館は、生涯学習や学校教育の面で重要な役割を果たしている。博物館が実施している各種の教育プログラムを具体的事例にもとづいて紹介するとともに、博物館ボランティアの役割についても概説を行う。	同　上	同　上
7	博物館と利用者	博物館の多様化に伴って、利用者のあり方も多様化している。日本の博物館はこれまで利用者の立場で博物館が抱える諸問題を検討することが少なかった。博物館に対するイメージや期待や不満などについて、利用者の側から検討を加える。	諸岡　博熊（中京女子大学客員教授）	諸岡　博熊（中京女子大学客員教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ミュージアム・マーケティング	博物館は従来、公的な性格が強かったために、市場調査を行うことがほとんどなかった。近年、博物館においても運営の効率化が求められており、博物館をめぐるマーケティングが重要になっている。具体的事例にもとづいてミュージアム・マーケティングを紹介する。	諸岡　博熊	諸岡　博熊
9	博物館のサービス	博物館は、資料の収集、整理保管、展示、調査研究を行う機関であるが、それらに関して各種のサービスを利用者に提供している。博物館サービスの諸相について、具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
10	博物館施設の運営と管理	博物館は、展示場だけではなく、収蔵庫、研究室、図書室、ミュージアムショップ、ホールなど、さまざまな施設から成っている。危機管理の問題も含めて、博物館諸施設の運営・管理について概説を行う。	宇野　文男（福井大学教授）	宇野　文男（福井大学教授）
11	博物館の連携と国際協力	国際化の進展に伴って、博物館においても各種の国際協力や連携を図ることが求められている。国立民族学博物館における具体的事例を中心にしながら、博物館の国際協力・連携について概説を行う。	石森　秀三	石森　秀三
12	博物館における情報の意義	情報技術革命が進展する中で、「博物館資産としての情報」という考え方が重要になっている。博物館における情報の体系化、情報の質、メディアの多様化と情報など、博物館における情報の意義について、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設専門官）
13	博物館活動の情報化	博物館にはさまざまな情報が存在する。各種の博物館情報の収集、情報収集のメディア、情報化の推進、情報化の経費、情報化の基準、情報の保存とデジタル化、メディアの変化への対応など、博物館活動の情報化について、具体的事例にもとづいて紹介を行う。	同　上	同　上
14	情報の展示と情報サービス	近年、資料展示ともに、情報展示が重要になっている。またインターネットの活用、データベースの形成、情報ネットワークの構築、バリアフリーへの対応など、情報サービスの多様化が進展している。それらの諸問題を具体的事例で紹介する。	同　上	同　上
15	ミュージアム・マネジメントの未来	社会のニーズの多様化に伴って、博物館はさまざまな革新を行う必要に迫られている。博物館経営論および博物館情報論の成果をふまえつつ、今後のミュージアム・マネジメントに求められている重要な諸点について、総括的な講義を行う。	石森　秀三	石森　秀三

＝言語学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大江　孝男（東京外国語大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間活動は言語による伝達活動によって組織され，社会的連帯を生み分業と協業を可能にする。どの社会でも言語の担う総体的な役割はほぼ同じである。伝達活動は内容を表現形式（言語）に変換し，表現形式によって諒解する。どのような構造をもち、どのようにして機能を果たすのか、考え方と研究方法の基礎について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言語と言語学（一）言語学の研究対象	言語活動では、伝えたいと思う表現内容が発音行動を通じて音声に置き換えられて空中を伝わり、聴覚を刺激して理解される。発話行為を中心とするこの過程の中から研究対象を取り出して、その特質を考察し、研究分野について紹介する。	大江　孝男（東京外国語大学名誉教授）	大江　孝男（東京外国語大学名誉教授）
2	言語と言語活動	言語活動は、人間が伝達内容を他に理解させる活動である。表現と諒解は個人のレベルで別々に行われる心理活動であるにもかかわらず、共通の理解が成立する。言語が相互理解を媒介し得る機構とその機構が成立する理由とについて考察する。	同　上	同　上
3	言語と言語集団	伝達活動が効率よく成立するには言語の構造が等質的であるのが望ましいが、広がりをもつ社会では「ことば」の違いがみられるのが常識である。同じ社会の中で、違いの生ずる原因、方言の発生と共通語の成立について考える。	同　上	同　上
4	音声と音声記号	言語表現の外形である言語音声をどのようにして観察し記述するのか。音声の発音機構と聴覚印象との相互関係を考察し、実在の音声と可能な発音とについて正確に観察する方法と記録する方法とについて解説する。	同　上	同　上
5	世界と諸言語	地球上には何千という言語が話されておりよく知られてた言語はそのなかのごく少数である。世界の言語の分布をアジアから、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアへと、概観する。（巻末：世界の「言語分布地図」「共通語地図」）	同　上	同　上
6	言語の構造	音声と意味の結合した単位としての言語記号のもつ特質について考察する。音声面の構成単位、意味の面の特質、単語の機能、語順の役割などについて概観する。	同　上	同　上
7	音声と音韻（一）音素分析	音声資料から，記号の音形を構成する機能的単位である音素を抽出するための分析方法とその弁別素性をめぐって考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	音声と音韻（二）音節とプロソディー	音素が互いに結合して記号の音形を構成するには、各言語に特有の結合規則に従ってまず音節を構成し、音節が単位となって音形を構成する。音節を構成する音素の結合規則，音形を構成する音節連結に音調律動を与えるアクセントや声調の規則について考える。	大江　孝男	大江　孝男
9	形態構造（一）曲用と活用	動詞は活用するといい、名詞は曲用するというが、それぞれ、音形が一部は異なるが同じ形と意味を共有し形の違いが文中での機能の違いに並行的に対応してセットをなす単語の集合である。形の違いと機能の違いとの関係を追求する。	同　上	同　上
10	形態構造（二）派生と合成	構成成分として別の単語を内部にふくむ単語は意外に多い。構成は単語を土台に小形式との接合構造をなしているものと、単語同士の結合構造なすものとがある。このような単語の構造と構成について考察する。	同　上	同　上
11	統辞構造と統合型	単語が統合されて文の構成成分をなし、構成成分が統合されて文をつくる。統合される形式の文法的関係，機能，規則などを考察する。	同　上	同　上
12	文型と文構造	規則に従って統合された形式が発話されて文としての機能を果たす。文が連続してまとまった内容を表現する。文は、文全体に関わるイントネーションを持って発話され同じ構文でも意味が異なることがある。構文，イントネーションと文の種別について考察する。	同　上	同　上
13	言語の変化（一）比較方法の基礎	個人のレベルでみると安定している言語も長い期間をかけて変化し、いくつかの言語に分かれることもある。言語変化の原因について考察し、規則的な音変化のもつ意義について考える。	同　上	同　上
14	言語の変化（二）変遷の諸相	言語の変化は音変化だけではなく、形式の形はいろいろな要因によって変化する。いろいろな変化とその要因について考える。	同　上	同　上
15	言語と言語学（二）20世紀の言語学	言語学は、19世紀の歴史研究の発達を契機に方法論をもつ近代科学として発展し、今世紀にいたって構造体系の研究へと展開してきた。これらの言語研究の特徴と現在の研究の動向について概観する。	同　上	同　上

＝ ギリシャ・ローマ文学（'００）＝（R）

〔主任講師：逸身　喜一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

古典ギリシャ・ローマ文学の世界において、後代はつねに先行する作品の様式を規範と仰いだ。本講義では古典文学のうち散文ではなく韻文で書かれた主な作品を、時代順によらず分野（ジャンル）毎にたどりつつ紹介する。各ジャンルの特質を知れば作品の理解がいっそう深まるだろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	古典古代は一千年以上にわたる。その間に社会の有様は著しく変化した。こうした歴史の簡単な把握と、韻文（詩）の定義、ギリシャ語・ラテン語の特徴、ジャンルとは、神話とは、など基礎知識を概説する。	逸身喜一郎（東京大学教授）	逸身喜一郎（東京大学教授）
2	エポス:叙事詩(1)	『イーリアス』は西洋最古の文学であるとともにその後の古典文学に絶大な影響を与えた。その構成と成立の問題を中心に、英雄叙事詩の特質、ならびに口誦叙事詩という概念について説明する。	同上	同上
3	エポス:叙事詩(2)	同じホメーロスの名で伝えられていても、『オデュッセイア』は物語の内容も構成も『イーリアス』と異なっている。両者の比較を通して英雄叙事詩の別モデルの有り様を考える。	同上	同上
4	エポス:叙事詩(3)	ローマ建国を描いたラテン語の叙事詩を作るにあたり、ウェルギリウスは『イーリアス』『オデュッセイア』双方をともども規範にすえた。ラテン文学の最高峰である『アエネーイス』には、ギリシャ文学の伝統とラテン文学の独自性との葛藤がうかがえる。	同上	同上
5	エポス:叙事詩(4)	偉大な作品の模倣と対決から新しい作品が生まれてくる。ホメーロス・ウェルギリウスとの対比により、アポッローニオス『アルゴー号冒険物語』オウィディウス『変身物語』ルーカーヌス『内乱記』の異質さを明らかにする。	同上	同上
6	エポス：教訓詩	英雄叙事詩だけがエポスではない。ヘーシオドスは世界の成り立ちを神々の系譜という形にし、かつ農夫の日々の努めを説いた。古典文学にはこうした様々な知識や知恵を披瀝する、一群の作品が脈々と続いている。	同上	同上
7	エポス：牧歌とエピュッリオン	大都会アレクサンドリアの発展は田園への憧れを生み出した。テオクリトスに始まり、ローマのウェルギリウスが一層洗練させた牧歌もまた、エポスの韻律であるヘクサメトロスで書かれている。あわせて「小さな物語詩」とでもいうべきエピュッリオンをあつかう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	エレゲイア（1）	エレゲイアとは、エポスという本流に対する傍流として、古典文学を貫いて用いられた韻律である。アルキロコスとカッリマコスを重点において、この詩型の発展の歴史をたどる。	逸身喜一郎	逸身喜一郎
9	エレゲイア（2）	ラテン文学は恋愛詩という独自のジャンルをうちたてた。その韻律はエレゲイアであった。恋愛詩の特徴や背景を、その代表としてプロペルティウスを中心にして説明する。	同　上	同　上
10	抒情詩（1）	「抒情詩」と訳されることばは、元来、弦楽器リラの合わせて歌われた歌を意味した。サッフォー・アルカイオス・アナクレオーンは独唱詩の代表である。そこには個人の感性が、独自の言葉遣いで表されている。	同　上	同　上
11	抒情詩（2）	ギリシャの叙情詩はしばらく優れた後継者を生み出さなかったが、ホラーティウスはそれをラテン語世界に取り込むことに成功した。その歌の対象は幅広く、抒情詩という日本語の訳語はとりわけこの詩人には不適切である。	同　上	同　上
12	抒情詩（3）	オリンピック競技をはじめとする競技祝勝歌をピンダロスは作った。競技での優勝とは、はかなき存在である人間が、栄光の高みに到達する機会なのである。この世界観はホメーロスと悲劇との間をつなぐ。	同　上	同　上
13	演劇（1）	ギリシャ悲劇と喜劇は、アテナイのディオニューシア祭において催されるポリスをあげての行事であった。そのため特殊な約束事にいろいろ縛られている。それらの知識は、一見、普遍的内容をもつ演劇理解に必須である。	同　上	同　上
14	演劇（2）	いわゆる3大悲劇詩人（アイスキュロス・ソフォクレース・エウリーピデース）の特色を、具体的な作品に即してたどる。悲劇は英雄神話を題材に選ぶが、その扱いは詩人の裁量に委ねられていた。	同　上	同　上
15	演劇（3）	アリストファネースの想像力に満ちた突拍子もない喜劇は後継者をもたない。1世紀のちのメナンドロスの人情喜劇はプラウトゥスによってローマに移入され、ついにはヨーロッパ演劇の基礎となる。アリストファネースのおかしみについて説明する。	同　上	同　上

＝　ドイツ文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：神品　芳夫（明治大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ文学は苛烈な歴史を生きた人間たちの真実の声の集合である。その観点に立ち、中世から現代までのドイツ文学の成果を、社会の流れとの相関関係に留意しながら、自由に語ることにしたい。各担当講師が受持つ３回のうち、２回は分担する時代の文学を概観し、１回は「特論」としてテーマを絞って問題を掘り下げたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中世の文学	ゲルマン諸族の移動と神聖ローマ帝国の成立・分裂によってヨーロッパが生まれるが、ドイツではドイツ語そのものが成立してゆくと共に、教会主導のキリスト教文学、ゲルマンの伝統をひく英雄文学と、フランス渡りの宮廷文学とが展開してゆく。その諸相を紹介する。	松浦　純（東京大学教授）	松浦　純（東京大学教授）
2	宗教改革からバロック	活版印刷の発明のメディア革命としての意義は特に宗教改革期になって発揮されたが、なかでもルターの著作と聖書翻訳は新たな文学の基盤となる標準的なドイツ語をも準備した。その時代の文筆活動、続いて三十年戦争を経たバロック時代までの文学について概観する。	同　上	同　上
3	（特論） 知られざるルター	マルティン・ルターは宗教改革のリーダーとして、また聖書翻訳者として知られているが、その思想像は多分に図式化されている。時代背景を描きつつ、己と他者についての彼の思索がもっていた特質を考えてみたい。	同　上	同　上
4	ゲーテ時代の文学	ドイツ文学の隆昌期であるゲーテ時代とは、啓蒙主義と「若いドイツ」に前後を挟まれた時期に当たり、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義を包括する。人間性の時代である十八世紀を起点として、その流れを追いつつ、古典文学の意義を問い直す。	木村　直司（上智大学教授）	木村　直司（上智大学教授）
5	ゲーテとロマン派	古典主義のあとにロマン主義が始まったわけではなく、両者はかなりの期間平行して進行した。初期ロマン派が活躍した時代はゲーテの長い生涯と重なり合い、ゲーテ自身にもそれら両面が認められる。現実的なものと理念的なものとの相互関係を中心に、両者の関わりについて解明したい。	同　上	同　上
6	（特論） ゲーテ像の変遷	ゲーテの特徴は、詩人から自然研究者、政治家にまで及ぶ多面性である。それはまた若いゲーテ・古典主義者・晩年のゲーテに分けられる。どれに焦点を合わせるかに従って多様なゲーテ像が生じてくることを示したい。ゲーテ像の変遷が十八世紀以降のドイツ精心史の反映であることにも注目したい。	同　上	同　上
7	後期ロマン派	ホフマン、アイヒェンドルフを中心に後期ロマン派の特性を分析し、さらにリュッケルト、ミュラーやハイネの詩、グリルパルツァーの演劇やウィーン民衆喜劇にも触れて、ロマン派の視野から十九世紀前半のドイツ文学の魅力を総括的に捉える。	光野　正幸（武蔵大学教授）	光野　正幸（武蔵大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	リアリズム文学	ゲーテの死からドイツの国家統一に至る時代の文学の主潮はリアリズムである。その中核をなすシュティフター、ケラー、シュトルム、ラーベらの小説手法を探るとともに、メーリケ、ドロステの詩、ビューヒナー、ヘッベルの演劇にも触れ、「詩的リアリズム」の文学の諸相を概観する。	光野　正幸	光野　正幸
9	（特論） ドイツ・オペラ文学	十九世紀におけるドイツ・オペラの自立の過程を、モーツァルト／サリエリの時代からヴェーバー／スポンティーニを経てヴァーグナーの「楽劇」、さらに二十世紀のリヒャルト・シュトラウスまで音声資料をまじえて辿り、「音楽と文学の結びつき」の文化史的文脈を明らかにする。	同　上	同　上
10	世紀転換期から表現主義	政治上ではヴィルヘルム２世の対外拡張政策と第一次世界大戦の時期。一方文化的には国際交流が進み、ドイツ文学が世界の流れに合流し、ホフマンスタール、マン、カフカらが輩出、二十世紀文学の視座を開いた。郷土文学とモデルネの文学の対立の構図を示したい。	神品　芳夫（明治大学教授）	神品　芳夫（明治大学教授）
11	亡命文学	1920年代に現代文学の基礎が築かれたあと、ナチの時代になって、ドイツ文学は決定的に国内と国外に分裂した。亡命文学者には大別して、ユダヤ系、左翼系、リベラル系があり、それぞれの例として S. ツヴァイク、ブレヒト、Th. マンの場合を見たい。国内亡命者にも言及する。	同　上	同　上
12	（特論） リルケと現代詩	ドイツ的土着性とは無縁のリルケは、ロシヤからスペインに至るヨーロッパの空間と詩伝統をふまえて多様な詩作を展開した。他方でブレヒトなどの社会派の詩が優位を占めるなか、リルケの詩がどのように受容されてきたかを考える。さらにドイツに独特の自然詩の系譜にも触れる。	同　上	同　上
13	第二次大戦後の文学	国土荒廃のなかでまず声を上げたボルヒェルトら戦中派の作品を紹介し、47年グループの成立事情を説明する。 Th. マンほか亡命作家の受容とともに、50年代におけるバッハマンやツェランの登場、そしてフリッシュとデュレンマットの仕事に触れる。	藤本　淳雄（東京大学名誉教授）	藤本　淳雄（東京大学名誉教授）
14	東西ドイツ並立の文学	帰国したブレヒトをはじめ社会主義の東ドイツ国家におけるさまざまな立場の作家の活動を紹介する一方、西でもエンツェンスベルガーやベル、グラス、さらに東から「移住」したヨーンゾンらの活躍、P・ヴァイスらによるユダヤ人問題との対決、東欧バルト海地域を舞台とするボブロフスキーの作品にも触れる。	同　上	同　上
15	（特論） 東西統一の前後	1968年の「学生の反乱」以降の社会状況を背景とするハントケ、ヴァルラフ、B. シュトラウスらの仕事と、東ドイツ末期の文学状況を概観したあと、近作『メーデイア』に至るCH. ヴォルクの仕事とヨーンゾンの大作『記念の日々』を考察したい。	同　上	同　上

＝ フランスの文学（’９８）＝（R）

〔主任講師：渡邊　守章（放送大学副学長）〕
〔主任講師：塩川　徹也（東京大学教授）〕

全体のねらい

国民文学としてのフランス文学の成立は、17世紀の絶対王政の成立と密接に結びついている。フランス人と対等に話が出来るためには、17世紀以降の「古典的な文学」に、フランス人並に通じている必要があると語ったのは、ドイツの評論家クルチウスであった。それは、フランス語とフランス文化における文学の重要性を指摘したものであり、その事情は、現在でも基本的には変わっていない。この講義では、17世紀から現代までのフランス文学を、主としてジャンル毎に、その代表的な作家と作品について考えてみる。同時代の社会や文化との関わりを視野に入れておくことは言うまでもないが、ただ、日本では、フランスの歴史の基本的な様相も局面も、十分に知られているとは言いがたいので、その点にも配慮する。対象にするテクストは、原則として日本語訳のあるものを念頭におくが、特に韻文の場合は、原文を引用することもありうる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総説	何故17世紀から現代か。「古典主義の時代」に何が起きたか。近代性の時代。17世紀と現代を通底するもの（制度と文学）。	渡邊　守章（放送大学副学長） 塩川　徹也（東京大学教授）	渡邊　守章（放送大学副学長） 塩川　徹也（東京大学教授）
2	古典主義時代の劇文学　(1)	文学言語の厳密化と洗練。ピエール・コルネイユとその時代。モリエールの喜劇。ラ・フォンテーヌあるいは寓話詩の劇場。	渡邊　守章	渡邊　守章
3	古典主義時代の劇文学　(2)	ラシーヌ、ボワロー、マリヴォー、ボーマルシェ、古典主義の頂点、ラシーヌ悲劇。喜劇の変質、マリヴォー喜劇。ディドロと市民劇（演劇美学の拡大・変貌）。	同上	同上
4	古典主義時代の小説	ジャンルとしての小説。デュルフェ『アストレ』、ラ・ファイエット夫人『クレーヴの奥方』、プレヴォー『マノン・レスコー』、ラクロ『危険な関係』	塩川　徹也	塩川　徹也
5	モラリストの系譜	「モラリスト」とは何か。モンテーニュ。ラ・ロシュフーコー。パスカル。ラ・ブリュイエール。	同上	同上
6	「フィロゾフ」の文学	「フィロゾフ」とは何か。モンテスキュー。ヴォルテール。ルソー。ディドロ。	同上	同上
7	近代詩　(1)	ロマン派の詩と詩人（ベランジェ、ラマルチーヌ、ミュッセ、ヴィニー、ユゴー、ネルヴァル、ゴーチエ）	田村　毅（東京大学教授）	田村　毅（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近代詩 (2)	ボードレール。ヴェルレーヌ。ランボー。マラルメ。詩の危機。	渡邊守章 松浦寿輝（東京大学教授）	渡邊守章 松浦寿輝（東京大学教授）
9	近代小説 (1)	ロマン派からレアリスムへ（ノディエ、ネルヴァル、ユゴー、バルザック、スタンダール）	田村毅	田村毅
10	近代小説 (2)	レアリスム以降（メリメ、デュマ・フィス、フローベール、モーパッサン、ゾラ）	同上	同上
11	近代劇	ロマン派革命。同時代風俗劇あるいは近代劇の成立。世紀末のパラダイム（演劇における前衛の出現）	渡邊守章	渡邊守章
12	現代詩 －言語とイメージの冒険	アポリネール。ヴァレリー。『ＮＲＦ』派とモダニズム。ダダからシュルレアリスムへ。ブルトン。シュルレアリスムの内と外。第二次対戦後の詩。	松浦寿輝 渡邊守章	松浦寿輝 渡邊守章
13	現代小説 －プルースト以後	ブルースト。ジッド。セリーヌとマルロー。サルトルとカミュ。 映像への越境、あるいは文学の危機。	松浦寿輝	松浦寿輝
14	現代劇	演出家の世紀（アルトーの影）。演劇における前衛・（クローデルの演劇的宇宙）。「30年代演劇」とその系譜（ジロドゥーから実在主義演劇へ）。 演劇における前衛・（「不条理劇」以降）	渡邊守章	渡邊守章
15	思想と文学	危機と文学。構造主義の地平。文学とその外部。	渡邊守章 松浦寿輝	渡邊守章 松浦寿輝

＝ ドイツの言語文化（’０２）＝（R）

〔主任講師：久保　哲司（一橋大学教授）〕

全体のねらい
ドイツ語で書かれた文学作品や思想的著作を読み、そこに表れている自然観・歴史観・人生観・恋愛観などについて考えてみたいと思います。取り上げるテクストは、おおよそ時代順になっています。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	自然と人間	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの詩「旅人の夜の歌」「魔王」に見られる自然観について考察します。	久保　哲司（一橋大学教授）	久保　哲司（一橋大学教授）
2	愛と死と再生	ゲーテの詩「五月の憧れ」「至福の憧れ」を取り上げ、そこに表現された愛のありようについて考えてみます。	同　上	同　上
3	友愛	ベートーヴェンの第九交響曲終楽章でおなじみのフリードリヒ・シラーの詩「喜びに寄す」を読み、そこに込められたメッセージを、そして表現形式の特質を探ります。	同　上	同　上
4	人生の秋	フリードリヒ・ヘルダーリンの詩「生の半ば」その他を読み、人生の諸段階について考えてみたいと思います。	同　上	同　上
5	幸福な晩年	ロマン派の作家ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの詩「夕映えの中で」に歌われている老年と死について考えます。リヒャルト・シュトラウスがこの詩に作曲したまことに美しい音楽も鑑賞します。	同　上	同　上
6	穏やかな美	写実主義に属する作家アーダルベルト・シュティフターの作品を読み、＜外面の美しさと内面の美しさ＞＜荒々しい自然と穏やかな自然＞といったテーマについて考えてみます。	同　上	同　上
7	芸術の本質	思想家フリードリヒ・ニーチェの『悲劇の誕生』における有名な＜ディオニュソス的なもの＞＜アポロン的なもの＞という対概念について考察します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近代文化の運命	社会学者マックス・ヴェーバーの主著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の一節を読み、ヴェーバーの文化観について考えます。	久保　哲司	久保　哲司
9	庭園	詩人シュテファン・ゲオルゲの作品を読み、十九世紀末から二十世紀初頭に至る時期の美意識や、＜自然の美と人工の美＞といった問題を掘り起こしてみたいと思います。	同　上	同　上
10	大都市の恐怖	ライナー・マリーア・リルケの特異な小説『マルテの手記』に描かれた、20世紀初頭のパリにおける大都市経験を分析してみます。	同　上	同　上
11	親の苦労	フランツ・カフカの物語「家父長の気がかり」その他を読み、この作家が作りだす不思議な世界について考察します。	同　上	同　上
12	子供の幸福	ヴァルター・ベンヤミンのきわめて美しい散文作品『1900年頃のベルリンの幼年時代』から、子供の行なう＜真似＞ということを扱った章を味読します。	同　上	同　上
13	文化と野蛮	哲学者マックス・ホルクハイマーとテーオドーア・W・アドルノの共著『啓蒙の弁証法』の一節を読み、現代の文化産業の問題について考えます。	同　上	同　上
14	二十世紀の証言	第二次世界大戦後のドイツ語文学における最も優れた詩人パウル・ツェラーンの作品を読み、個人の経験と歴史、記憶と文学といったことについて考えをめぐらします。	同　上	同　上
15	コンピューター社会の未来	現代ドイツ文学を代表する作家のひとりハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーのエッセイを手がかりに、コンピューターをはじめとするニュー・メディアの文化史的意味について考えてみたいと思います。	同　上	同　上

＝ フランスの言語文化（’０２）＝（R）

〔主任講師：田村　毅（東京大学教授）〕
〔主任講師：月村　辰雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス人は自国の文化を支えるフランス語にこだわり、日常生活や思想表現の現場で言語の性能に磨きをかけてきた。だから、世界を覆いつくそうとする英語にあらがい、フランスで、またアフリカ諸国やカナダで、フランス語は今なお活発に文化を発信し続けている。そんなフランス語のことばとしての魅力と性能を多様な角度からとらえ、言語の文化のつながりの不思議を考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常生活のフランス語――街角で輝くことば	フランスの知性は、日常なにげなく取り交わされる会話の中に輝く。古い歴史を背負ったことばが一瞬の機転にきらめく街角に、フランス文化の洗練の現在を尋ねる。	田村　毅（東京大学教授）	田村　毅（東京大学教授）
2	レストランのフランス語――ことばを味わう	料理のレシピやレストランのメニューはどう読む？　料理のフランス語は、料理の味わいと同じくらい繊細で奥が深い。その表現に込められたエスプリをかみしめてみよう。	塚本　昌則（東京大学助教授）	塚本　昌則（東京大学助教授）
3	音楽会のフランス語――ことばの響き	優美な音楽の流れるホールの片隅で、聴衆のひそかなささやきが音楽を語る。プログラムや音楽批評のフランス語に耳を傾け、そのリズムと旋律を聞いてみよう。	中地　義和（東京大学教授）	中地　義和（東京大学教授）
4	オペラのフランス語――ことばは歌う	日本でもよく知られたビゼーのオペラ『カルメン』。その台本が、メリメの原作をどのように手直しすることによって生まれたのか、具体的表現に即して見てみよう。	同　上	同　上
5	エッセーのフランス語――自分を語ることば	自分の内面を見つめるきわめて個人的なことばが、深い考察に支えられて人間一般に対する洞察に至る。エッセーというジャンルにフランス語の柔軟な息づかいを読みとってみよう。	塚本　昌則	塚本　昌則
6	恋愛論のフランス語――ことばの魅惑	このうえなく皮肉でありながら、とめどもなく甘美なフランス語の恋のことば。ことばが感情を演出するフランス風の恋愛を、作家たちの恋愛論から読み解いてみよう。	月村　辰雄（東京大学教授）	月村　辰雄（東京大学教授）
7	詩のフランス語――ことばの錬金術	日常生活に用いられる無味乾燥なことばが、どうして、うるおいに満ちた濃密な空間を作り出すのか。フランス近代詩を読みながら、ことばの変貌の不思議にせまる。	中地　義和	中地　義和

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説のフランス語——鏡としてのことば	近代社会は、おのれの肖像画家として小説という新しいジャンルを求めた。１９世紀小説史をたどりながら、社会の現実を映し出すフランス語の描写能力の展開を考える。	月村　辰雄	月村　辰雄
9	シャンソンのフランス語——ことばと生活	世相への憤りであり、生活の慰めであり、また心のときめきでもあるシャンソン。１９世紀最大の歌謡作家であったベランジェの作詞に、そんなシャンソンの魅力の秘密をさぐる。	田村　毅	田村　毅
10	モラリストのフランス語——ことばによる分析	モラリストは、人間の行動と社会風俗の鋭い観察を通じて、人間とはなにか、その本性を分析する。人間に対して辛辣であると同時に慈愛にも満ちたモラリストのことばを考える。	塩川　徹也（東京大学教授）	塩川　徹也（東京大学教授）
11	演説のフランス語——ことばは訴える	論敵をふるえ上がらせたサン＝ジュストの演説。レジスタンスを奮い立たせたド・ゴールのラジオ放送。聴衆にはたらきかけるフランス語の雄弁のメカニズムを明らかにする。	月村　辰雄	月村　辰雄
12	聖書のフランス語——初めにことばがあった	ギリシア・ローマの古典と並んで、ヨーロッパ精神の屋台骨をなすキリスト教の聖書。それが、さまざまな翻訳や翻案を通じて、どのようにフランス語に浸透しているかを探る。	塩川　徹也	塩川　徹也
13	辞書のフランス語——ことばを定義する	明確な定義と豊富な用例こそ、辞書の命。アカデミー・フランセーズの辞書に始まる辞書作りの職人芸のこまやかな工夫を通して、フランス人の国語辞書へのこだわりをさぐる。	田村　毅	田村　毅
14	法律のフランス語——ことばの厳密性	かつて国際条約は、このんでフランス語で起草された。いささかの曖昧さも残さないことばとして評価されたからである。その言語としての厳密性の仕組みを明らかにする。	月村　辰雄	月村　辰雄
15	世界の中のフランス語	世界を覆いつくそうとする英語にあらがい、アフリカや新大陸など、フランスの外でも、母語として、また文化語として、今なお健闘を続けるフランス語の活躍を考える。	田村　毅 恒川　邦夫（一ツ橋大学教授）	田村　毅 恒川　邦夫（一ツ橋大学教授）

＝ 中国の言語文化（'０２）＝（R）

－魯迅と荘子－

〔主任講師：丸尾　常喜（大東文化大学教授）〕
〔主任講師：蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

中国語を読みながら中国人のものの考え方、感じ方を理解し、考察してみたい。前半は、魯迅の作品二編を読み、彼の文学の思想的、文学的特色の理解をはかる。後半は、『荘子』の現代語訳を読んで、荘子の思想の本質を把握したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「『吶喊』自序」（1）	４回にわたって魯迅の第一短編小説集『吶喊』につけられた「自序」を中心に取り上げ、魯迅の文学の出発点と彼の文学の全体的特徴について考える。 ＜解説＞魯迅の人と文学	丸尾　常喜（大東文化大学教授）	丸尾　常喜（大東文化大学教授）
2	「『吶喊』自序」(2)	「『吶喊』自序」の第二部分を読む。 ＜解説＞留学期魯迅の思想―「人」と「人の国」	同　上	同　上
3	「『吶喊』自序」(3)	「『吶喊』自序」の第三部分を読む。 ＜解説＞文学革命	同　上	同　上
4	「『吶喊』自序」(4)	「『吶喊』自序」の最終部分を読む。 ＜解説＞「狂人日記」	同　上	同　上
5	「孔乙己」(1)	『吶喊』の「狂人日記」に続く「孔乙己」を四つに分け、第一部分を読む。 ＜解説＞科挙と読書人	同　上	同　上
6	「孔乙己」(2)	「孔乙己」の第二部分を読む。 ＜解説＞漢字と文言	同　上	同　上
7	「孔乙己」(3)	「孔乙己」の第三部分を読む。 ＜解説＞孔乙己の寂寞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「孔乙己」(3)	「孔乙己」の第四部分を読む。 ＜解説＞「阿Q正伝」	丸尾　常喜（大東文化大学教授）	丸尾　常喜（大東文化大学教授）
9	影子的困惑	『莊子』斉物論篇に見える、罔両つまり影の回りにできる薄い影と、影自体との問答を通して、存在する者の主体性について考えます。	蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）	蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）
10	解開生死的縄結	『莊子』養生主篇に見える、秦失が老子の葬式に出かけた話を通して、人の生死についての受け止め方と死者への弔問に対する考え方を分析します。	同　上	同　上
11	惠施下令捉拿莊子	『莊子』秋水篇に見える、梁の宰相としての恵施が、訪ねてきた親友の荘子を恐れて逮捕させようとした話を通して、権力について考えます。	同　上	同　上
12	惠莊辯論魚是否快楽	『莊子』秋水篇に見える、恵子と荘子が水辺を散歩しながら魚の楽しみについて問答した話を通して、認識の問題について考えます。	同　上	同　上
13	要譲百姓自願捐銭	『莊子』山木篇に見える、北宮奢が人民に自発的に献金させて編鐘を作った話を通して、為政者と税金の問題について考えます。	同　上	同　上
14	真儒少、仮儒多	『莊子』田子方篇に見える、荘子が魯には儒者が多いように見えて実は少ないと言ったという話を通して、人の外面と内実の問題について考えます。	同　上	同　上
15	従九方面考核官員	『莊子』列御寇篇に見える、孔子が人の本性を見抜くのは難しいと言ったという話を通して、人物評価の問題について考えます。７回の題材を見渡すことによって、『莊子』に見えるさまざまな問題の面白さの一端が分かると思います。	同　上	同　上

＝ 応用数学（'９９）＝（R）

〔 主 任 講 師 ： 藤 田　宏(東京大学名誉教授・東海大学教授)〕

全体のねらい

最近のコンピュータによる数値的手段の進歩や対象領域の拡大を遠望しつつ、応用数学の基本的な発想法、概念、方法を解説する。数学的な明快さと具体性による納得にもとづいて展開し、数学による自然の理解と自然への働きかけを任務とする応用解析学への平易な入り口からの、しかし、現代風の誘いとしたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	増 殖 の 数 理	最も初歩的な発展系である増殖の数理モデルから入り、１階微分方程式の基礎およびその豊かな応用について学ぶ。	藤田　宏（東京大学名誉教授・東海大学教授）	藤田　宏（東京大学名誉教授・東海大学教授）
2	振 動 の 数 理	微分方程式の最も重要な応用は力学における発展系の解析である。簡単な調和振動子から入り、特性根の方法を含め、２階微分方程式の初期値問題およびその応用の初歩について学ぶ。	同　上	同　上
3	競 合 の 数 理	量的に表される二つの勢力の間の時間発展をともなう競合の数理モデルは、簡単な場合については、連立微分方程式で与えられる。軍備拡張競争のモデルを扱うこの章は連立微分方程式への初期値問題への入門でもある。	同　上	同　上
4	惑星運動の数理（その１）	ニュートンによる力学と解析学の同時誕生のとき以来、惑星の運動の解析は数学による自然の理解の最大の成功例の一つである。特殊な非線形連立微分方程式の初期値問題に帰着するこの現象の数学モデルとその解析の理解に挑戦することは感激にあたいする。	同　上	同　上
5	惑星運動の数理（その２）	前回に引き続いて解析をすすめ、惑星の軌道が楕円などの円錐曲線になることを導く。デカルトによる解析幾何が自然の理解に顕著な貢献をした例であることも学ぶ。	同　上	同　上
6	弦のつり合いの数理	多くの安定な発展系は時間が立つにつれてつり合いの状態、すなわち、定常状態に到達する。この定常状態の解析は数学的には境界値問題に帰着する。簡単な弦のつり合いを通じて境界値問題の基礎とその応用について学ぶ。	同　上	同　上
7	熱伝導と波動の数理（その１）	状態が時間のみならず空間変数にも依存する発展系、いいかえれば、分布定数系の時間発展の数学モデルは偏微分方程式の初期値問題になる。現象的にも数学的にも典型例である熱伝導と波動の数理を通じて、応用解析のハイライトであるこの問題と取り組む。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	熱伝導と波動の数理（その２）	前回に引き続き、当面の問題の扱いの基礎であり、応用数学の柱の一つであるフーリエ級数の概念および方法について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
9	熱伝導と波動の数理（その３）	前回および前前回に引き続き、フーリエ級数およびフーリエの変数分離法を用いて、針金の熱伝導（１次元放物型方程式）および弦の振動（1次元双曲型方程式）の問題を解決する。	同上	同上
10	発展系の数値解析（その1）	現在の科学技術における、偏微分方程式の、すなわち、分布定数系の実際的な応用は、コンピュータによる数値解法を抜きにしては成り立たない。そのための普遍的な方法である差分法による数値解法の基礎をすでに学んだ熱伝導の問題等について解説する。	桂田　祐史（明治大学助教授）	桂田　祐史（明治大学助教授）
11	発展系の数値解析（その２）	前回に引き続き、差分法による発展系の数値解法の考察を行い、かつ、定常状態への移行問題、非線形問題への拡張について学ぶ。	同上	同上
12	フーリエ変換；出会いとなじみ（その１）	フーリエ級数の威力を、変域が無限区間におよび場合に拡張しようとすれば、フーリエ変換あるいはフーリエ積分に到らねばならない。この趣旨どおりにフーリエ変換を導入しその基礎について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
13	フーリエ変換；出会いとなじみ（その２）	前回に引き続き、理論的にも応用的にも全前空間を変域とする偏微分方程式の解析の基本であるフーリエ変換の性質および応用について学ぶ。	同上	同上
14	超関数；出会いから応用へ（その１）	δ関数を典型とする超関数の概念の理解は解析の自由な応用の支えである。その解説に当たっては、数学的な明快さは尊重しながらも、超関数との友好的な出会いと応用志向のなじみの構築を目的として展開していく。	同上	同上
15	超関数；出会いから応用へ（その２）	前回に引き続き、超関数が自由な解析操作を許す寛大な世界であることを学ぶ。	同上	同上

＝ 解析学（’００）＝（Ｒ）

〔主任講師：熊原　啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

微分積分学では変数が実数の関数についての解析学の基礎を学んだ。本講義ではそれに続く課程として、複素変数関数と微分方程式の初歩を学ぶ。複素変数で考えると単なる算法を越えて関数についての新しい理論が展開される。微積分の算法は微分方程式の解法としてさらに勉強することになる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	複素数	実数の性質、複素数の導入、複素平面、リーマン球面、直線と円。	熊原　啓作（放送大学教授）	熊原　啓作（放送大学教授）
2	複素微分	領域、複素関数、微分係数、コーシー・リーマンの方程式、整級数。	同　上	同　上
3	初等関数	指数関数、三角関数、オイラーの公式、双曲線関数、主値、リーマン面、対数関数。	同　上	同　上
4	1次分数変換	円円対応、非調和比、1次分数変換群、円対称、鏡像、上半平面と単位円板。	同　上	同　上
5	複素積分	曲線、線積分、不定積分、グリーンの公式。	同　上	同　上
6	コーシーの積分定理	コーシーの定理、コーシーの積分公式、モレラの定理、リウヴィルの定理、代数学の基本定理、回転数。	同　上	同　上
7	正則関数の性質	テイラー展開、一致の定理最、大値の原理、正則関数列、等角写像。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ローラン展開	ローラン展開、特異点、ワイエルシュトラスの定理、有理型関数の級数。	熊原　啓作	熊原　啓作
9	留数定理	留数、留数の計算、偏角の原理定積分の計算への応用、フーリエ変換、フレネル積分。	同　上	同　上
10	無限乗積	無限乗積、ガンマ関数、ガウスの公式、ウォリスの公式、リーマンのゼータ関数、オイラー積。	同　上	同　上
11	1階微分方程式	微分方程式とその解変数分離形、同次形、1階線形微分方程式、全微分方程式、初期条件。	同　上	同　上
12	線形常微分方程式	付随する同次方程式、重ね合せの原理、基本解、定数係数線形微分方程式。	同　上	同　上
13	ラプラス変換	ラプラス変換、指数型関数、収束座標、フーリエ変換、ラプラス逆変換。	同　上	同　上
14	演算子法による解法	ラプラス変換の性質、ヘヴィサイドの展開定理、ラプラス変換による解法。	同　上	同　上
15	級数解	解のベキ級数表示、ルジャンドルの微分方程式、エルミートの微分方程式、ベッセルの微分方程式、チェビシェフの微分方程式、ガウスの超幾何微分方程式。	同　上	同　上

＝ 数学基礎論（’９９）＝（R）

〔主任講師：隈部 正博（放送大学助教授）〕

全体のねらい

論理学の基礎を数学的立場から解説する。目標はゲーデルの不完全性定理の理解である。予備知識は特に要求しない。自然の理解専攻以外の学生向けでもある。数学的論理学の概要を理解するのがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	準備	この印刷教材を読むにあたって必要な予備知識について述べる。	隈部 正博（放送大学助教授）	隈部 正博（放送大学助教授）
2	命題論理	命題論理とは何かについて述べ、論理式の定義、真偽値について述べる。	同上	同上
3	トートロジー	論理式の真偽値についてさらに考察し、トートロジーの概念について述べる。	同上	同上
4	論理記号について	論理記号の完全性について述べる。	同上	同上
5	コンパクト性定理	命題論理のコンパクト性定理の証明をする。	同上	同上
6	一階述語論理	述語論理とは何かについて述べる。対象式と論理式を定義する。	同上	同上
7	構造	構造を定義し、述語論理における論理式の真偽について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ロジカルな満足性と演繹計算	述語論理におけるロジカルな満足性という概念について述べる。その後の演繹計算とはどういうものか簡単に述べる。合わせてゲーデルの完全性定理のもつ意味について述べる。	隈部　正博	隈部　正博
9	論理公理	論理公理について述べる。	同　上	同　上
10	演繹計算についてのいくつかの定理	演繹計算についてのいくつかの定理を述べる。	同　上	同　上
11	自然数論	自然数論について述べる。	同　上	同　上
12	表現可能性と計算可能性	自然数上の関係や関数の表現可能性、計算可能性について述べる。	同　上	同　上
13	ゲーデル数と証明の算術化	ゲーデル数の定義をした後、自然数論における証明の算術化とはどういう事かについて述べる。	同　上	同　上
14	不完全性定理その1	ゲーデルの第一不完全性定理の証明をする。	同　上	同　上
15	不完全性定理その2	ゲーデルの第二不完全性定理の証明をする。	同　上	同　上

＝ 計算の理論（’９９）＝（R）

〔主任講師：野崎　昭弘（大妻女子大学教授）〕
〔主任講師：仙波　一郎（　茨城大学教授　）〕

全体のねらい

いろいろな具体例を通して、異なる型の計算問題に触れさせ、関連する技法の紹介や、効率の比較を行う。全体をⅠ．計算の基礎、Ⅱ．計算の効率に分ける。Ⅰでは入門を兼ねて親しみやすい問題を多く入れ、解をさがす技法や「解がない」ことの証明の技法、Ⅱでは実用的な問題についての技法と効率の比較を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数学的帰納法について①	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	仙波　一郎（茨城大学教授）	仙波　一郎（茨城大学教授）
2	数学的帰納法について②	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	同　上	同　上
3	背理法について①	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくにピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
4	背理法について②	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
5	部屋割論法	部屋割論法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ある条件を満たす解を具体的に求めることなく、解の存在を示すときに有用な論法である。	同　上	同　上
6	2値化	2値化の考え方を具体的な問題を通して説明する。解が存在しないことを示す場合にその切れ味を味わってほしい。	同　上	同　上
7	1対1対応	1対1対応の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。うまい対応づけによって、解が求められていく過程に注目してほしい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	バックトラック①	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	仙波　一郎	仙波　一郎
9	バックトラック②	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	同　上	同　上
10	順列の生成	順列を生成するいろいろな方法を紹介する。興味ある応用例を示す。	同　上	同　上
11	計算の効率	電卓を使って、複利計算 10万円×1.05×……×1.05 を実行する方法について考えてみます。こんな簡単な問題でも、計算の上手・下手によって、効果がずいぶん違うことに、注目して下さい。	野崎　昭弘（大妻女子大学教授）	野崎　昭弘（大妻女子大学教授）
12	方程式の解法	5次以上の代数方程式には解の公式がありません。しかし数値計算で解の近似値を求めることなら、もっと複雑な方程式でもできます。そのことを具体的な例で説明し、効率の観点も加えて検討します。	同　上	同　上
13	表の検索	コンピューターに記憶された大量のデータから、目あての情報をさがすことを「検索」といいます。ここでは基本的な「表の検索」について、簡単な工夫で所要時間をずっと短くできることを説明します。	同　上	同　上
14	旅行計画	東京、名古屋、金沢、新潟、大阪の各都市を訪問したいのですが、どんな順序で、どんなコースを通ればいいでしょうか？2都市間の最短コースをさがす問題から始めて、いくつかの計算問題とその解法を紹介します。	同　上	同　上
15	計算の理論の歴史	ギリシャ時代の工夫、たとえば「ユークリッドの互除法」から始まって、現代の最先端をゆく並列計算の理論まで、いくつかのポイントをひろいながら概説してみたいと思います。	同　上	同　上

＝ データの科学（’０１）＝（R）

〔主任講師：栗原　考次（岡山大学教授）〕

全体のねらい

様々な分野で収集されるデータに対して、データに含まれる不確定要素やばらつきを客観的に分析し、データに含まれる真実をより多く引き出すためには、データを科学的に分析する必要がある。講義では、前半では各分野で共通に利用される分析法の中から代表的なものを取り上げ、その考え方と利用方法について解説する。後半では、環境に分野を絞り、データの収集から分析さらに解釈に渡る一連の分析手順について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	データの科学	各分野で日々収集・蓄積されているデータを科学的に分析するためには、分析の目的を明確にした上でデータの収集、分析、解釈の一連の手順を客観的に行う必要がある。講義では、分析の手順を解説するとともに、データの属性や構造などデータに関わること全般について概説する。	栗原　考次（岡山大学教授）	栗原　考次（岡山大学教授）
2	データの記述とグラフ化	得られたデータを正しく分析するためには、データを整理集約しデータが表す性質を簡潔かつ明確に記述表現する必要がある。講義では、データを代表値として集約する方法とデータを視覚的に表現するグラフ化について概説する。	同　上	同　上
3	データに基づく推測（その１）	データに基づきデータが得られた集団の性質を解明するためには、集団を特徴づける平均や分散などの母数の推定や検定を行う統計的推測の概念が不可欠である。講義では、推定や検定の手順や考え方を例題とともに解説する。	同　上	同　上
4	データに基づく推測（その２）	前の章の続きである。講義では、前の章で解説した検定の概念を、計量データのように比率尺度で与えられるデータに加え、分割表や順序のように名義尺度、順序尺度で与えられるデータに適用し、その利用方法について解説する。	同　上	同　上
5	データの間の関連（その１）	２つの変量間の関連性の分析は、その構造と解釈により大きく２つに分けられる。１つは変量間が対等な関係である相関分析であり、他方は変量間に因果関係がある回帰分析である。講義では、変量間での相関指標の作成法及び回帰分析の最も単純な場合である単回帰分析について解説する。	同　上	同　上
6	データの間の関連（その２）	前の章の続きである。回帰分析において１つの変量と複数の変量間の因果関係を調べる重回帰分析の考え方とその利用法について述べる。さらに、データが質的なデータの場合に適用される数量化Ｉ類についても例題とともに解説する。	同　上	同　上
7	データの判別（その１）	データの判別では、データをいくつかのグループに分けたり、新しくデータが観測された場合、そのデータがどこのグループにはいるのかを判別する。講義では、判別分析の考え方を例題とともに解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	データの判別（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、誤判断確率や期待損失などの概念とともに解説する。さらに、データが質的なデータの場合に適用される数量化Ⅱ類についても取り上げる。	栗原　考次	栗原　考次
9	データの次元の縮約（その１）	データが多くの変量について観測される場合、構造を単純化するために、変量の次元を縮約することが望まれる。講義では、１つまたは少数個の総合的指標で代表させる主成分分析を取り上げ、その考え方および利用法について解説する。	同　上	同　上
10	データの次元の縮約（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、具体的な例題とともに解説する。さらに、データが質的なデータの場合に次元の縮約法の１つとして適用される数量化Ⅲ類についても取り上げる。	同　上	同　上
11	データの分類（その１）	得られたデータをいくつかのグループに分ける分類は各種の分野で行われているが、これらの総称はクラスター分析と言われる。講義では、クラスター分析の概念およびその利用法について階層型のクラスター分析を中心に概説する。	同　上	同　上
12	データの分類（その２）	前の章の続きである。講義では、変量の数が複数個の場合について、例題に基づき階層型クラスター分析の手法の特徴を解説する。さらに、空間データの分類法及び構造分析についても取り上げる。	同　上	同　上
13	寿命データの解析	寿命データの特徴として、観測中の中途打ち切りデータなどの不完全データが多数含まれ、関与する要因が複数であることがあげられる。講義では、ハザードや競合リスクの基本的概念とともにこれらのデータに対する解析法について解説する。	同　上	同　上
14	環境データの解析（その１）	環境保全や環境リスク評価等のために、近年リモートセンシングデータの解析法が注目されている。講義では、リモートセンシングデータのようなイメージデータの特徴及び簡単な解析法について具体例とともに解説する。	同　上	同　上
15	環境データの解析（その２）	前の章の続きである。講義では、ランドサットＴＭデータの可視光と赤外線のセンサから得られる具体的なリモートセンシングデータに基づいて、土地被覆の分類法、時系列的な比較、土地被覆の構造分析などについて解説する。	同　上	同　上

＝ 統計の考え方（’００）＝（R）

〔主任講師：松原　望（東京大学教授）〕

全体のねらい

統計学の考え方を、エッセンスそれもエッセンスのみに集約し、わかりやすく、興味深く、かつためになる方法で解説する。そのためには、実例から説きおこし、逐次、本質へ入り、理論を導入し、再び問題への適用・応用へもどるものとする。実例は基本的には自然科学から取るが、かならずしもそれにはとらわれず、また数学は、数学的すぎず、かつ必要に応じて適度のレベルの数学を自由に用いる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	統計の考え方	本音のねらいを具体的に解説し、次章以降の準備を行う。	松原　望（東京大学教授）	松原　望（東京大学教授）
2	誤差と最小二乗法	すべての統計的方法は、数量の観測とそのばらつきから何を引き出すかを考えることから生まれる。	同　上	同　上
3	相関関係	現象の多元的側面は相関関係からとらえられる。統計学の歴史でも、大きな発展の役割をはたした。	同　上	同　上
4	クロス表	日常しばしば出会う形のデータであり、前章と同様、現象の多元的側面をとらえるためにその扱いに慣れる必要がある。	同　上	同　上
5	時系列のデータ	時間によって取られたデータは実に多い。その分析法の基礎と方法のいろいろ（長期傾向、周期性、予測など）。	同　上	同　上
6	確率と確率分布	統計を「推論」として考えるための最小の数学的必要知識。	同　上	同　上
7	あてはまりのよさ	データを仮説や理論と関係させて考える統計推論の基礎入門。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	仮説と対立仮説	統計的意思決定。統計的方法の理論中心と考えられてきたもっともよく知られた方法である。	松原　望	松原　望
9	パラメータ推定と信頼区間	パラメータとはその現象について知りたい中心的な数（定数、値）のことで、推定はその値をデータで知る方法。	同上	同上
10	分散分析	実験データの分析法、あるいは逆にどのようなデータをとるべきかの重要な導き手。	同上	同上
11	0-1型変数の統計	投入量（例：薬）から反応の有無を予測するなど、質的変数（0-1型）が量から決まるタイプの問題を扱う。確率が必要。	同上	同上
12	ベイズ的意思決定	確率分布の期待値の考え方を利用して、日常の意思決定の問題を解く。統計的決定理論、ベイズ統計学の入門。	同上	同上
13	多変量解析の考え方（1）	重回帰分析（多くの変数を用いて目標の変数を予測）	同上	同上
14	多変量解析の考え方（2）	判別分析（多くの変数を用いて対象を分類・判別）	同上	同上
15	多変量解析の考え方（3）	主成分分析とその応用（多くの変数の背後の要因探求）	同上	同上

＝ カオス学入門（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：合原　一幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、20世紀科学の大きな発見の一つであるカオス（Chaos）を取り上げ、その基礎理論及び応用技術について、様々な側面から解説する。また、自然システムや人工システムに遍在する多様なカオスの実例を紹介するとともに、カオスと密接に関連するフラクタルや複雑系などの諸概念についても説明する。本講義によって、カオス学の理論と応用に関する基礎的知識を得るとともに、自然観・世界観を深め、さらには21世紀の非線形科学技術を展望することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カオス学の歴史	カオスの理解が大きく進展したのは、ここ四半世紀のことであるが、その源流はニュートン力学が確立された17世紀までさかのぼることができる。カオスの具体例を紹介しながら、カオスの発見とその理解の深まりの背景と歴史を概説する。	合原　一幸（東京大学教授）	合原　一幸（東京大学教授）
2	離散時間力学系のカオス	カオスの基本的性質を理解するために、離散時間力学系のカオスを取り上げる。まず、カオスの典型例として、1変数の写像であるベルヌーイシフト写像、ロジスティック写像、テント写像のカオスについて、その力学構造を解説する。さらに、より高い次元のカオス写像の例も紹介する。	同　上	同　上
3	連続時間力学系のカオス	微分方程式で表される連続時間力学系であるローレンツ方程式、レスラー方程式、ダフィング方程式などのカオスについて解説する。さらに、離散時間力学系と連続時間力学系との関連について考察する。	同　上	同　上
4	カオスと分岐現象	離散時間力学系や連続時間力学系において、パラメータ値の変化にともなって、解の定性的構造が変化する分岐現象について解説する。さらにこの知識をふまえて、カオスが生み出される分岐過程、すなわちカオスへ至る道すじについて考察する。	同　上	同　上
5	カオスとフラクタル	カオスの幾何学的性質は、自己相似性すなわちフラクタルの概念で特徴づけることができる。フラクタルの典型例であるカントール集合を取り上げ、その直観に反した不思議な性質を明らかにするとともに、カオスとフラクタルをめぐる様々な話題を紹介する。	同　上	同　上
6	カオスの数理構造	カオスはその現象の底の深さゆえに、今だに数学的には厳密に定義されてはいない。しかしながら多くのカオスが共有するいくつかの基本的性質は、明らかになってきている。これまでの講義の内容を基にして、カオスの数理構造を整理する。	同　上	同　上
7	リアルワールドのカオス	この世の中に実在するほとんどすべてのシステムは、自然システム、人工システムを問わず非線形性を有している。したがって、非線形システムの典型的振る舞いであるカオスも、世の中に広く見られる。これらの多様なリアルワールドカオスを、実例を示しながら紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カオスと脳	21世紀は「脳の世紀」とも言われ、現在世界中で脳研究が活発に行われている。他方で脳は非線形システムの典型例でもあるため、脳においては、ミクロレベルからマクロレベルに至る様々な時空間スケールでカオス的現象が観測されている。これらの脳のカオスについて解説する。	合原　一幸	合原　一幸
9	カオスニューラルネットワーク	脳を構成する神経細胞（ニューロン）は、一種のカオスデバイスである。カオス的素子から成る人工的ニューラルネットワークである「カオスニューラルネットワーク」によって実現されうる新しい脳型情報処理システムについて、その集積回路技術を含めて解説する。	同　上	同　上
10	カオスと計算	ある種のカオスは、計算能力をそのダイナミクスの中に潜在的に有しており、現在のコンピュータの原型であるチューリングマシンと対応づけることもできる。このようなカオスの複雑な性質を解説するとともに、カオスの計算の本質的困難さやその応用可能性についても議論する。	同　上	同　上
11	カオスと複雑系	科学やモデル学の歴史を踏まえて複雑系の概念を解説するとともに、その解析のための数理モデルを紹介する。さらに、カオスニューラルネットワークモデルなどを例にして、複雑系研究の理論的基盤としての高次元カオスの重要性を論じる。	同　上	同　上
12	カオスとシステム制御	カオスと制御との関連について、はじめにカオスを抑制して周期状態を実現するカオス制御手法について解説する。次に、カオスをむしろ積極的に活用する制御原理であるハーネシングおよびホメオダイナミクスの考え方を紹介するとともに、生体システムの制御原理との関連についても論じる。	同　上	同　上
13	カオスと時系列解析	世の中には、不規則に変動する時系列データがあふれている。これらの時系列データをカオスの立場から解析するカオス時系列解析について、アトラクタ再構成、フラクタル次元解析、リアプノフスペクトラム解析、リカレンスプロットなど基礎的解析手法を解説する。	同　上	同　上
14	カオスと予測	カオスはしばしば、単純な非線形法則に従って極めて複雑な振る舞いを生み出す。このことは逆に、複雑な時系列データの将来を、非線形法則を用いて予測できる可能性を示唆している。カオスの振る舞いを予測する決定論的非線形予測手法の基礎理論と応用例について解説する。	同　上	同　上
15	カオス学と科学技術	これまでの講義内容を振り返りながら、カオス学と科学技術さらには哲学との関係を概観するとともに、カオス学の理論と応用の将来、21世紀の非線形科学技術を展望する。	同　上	同　上

＝ パソコンによる解析学（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本　光生（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

パーソナルコンピュータを利用して、数値実験を行い、グラフを描き、解析学、（数列、級数、微分、積分、微分方程式）について解説する。解析学は無限を前提として成立しており、コンピュータは有限のシステムである。この差異を十分に注意しながら、パソコンによる数値計算という観点より、解析学を見直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パソコンによる計算	パソコンによる数値計算の手段として、ＵＢＡＳＩＣという言語を学ぶ。基本的には、加減乗除をくりかえして数値計算はなされるが、誤差の累積の危険性を避けるために、収束のスピードが問題になる。遅い収束をする数列と、速い収束をする数列の例をあげたい。	森本　光生（国際基督教大学教授）	森本　光生（国際基督教大学教授）
2	反復による平方根の求め方	aを正の数とするとき、$x \mapsto \frac{1}{2}(x+\frac{x}{a})$ の反復で x は $\sqrt{a}$ に収束する。この収束は、“２乗収束”と呼ばれ、高速である。今回は数列の収束の概念を復習し、上記のニュートン法について学ぶ。パソコンによる数値計算も行う。	同　上	同　上
3	ライプニッツの級数とマチンの公式	ライプニッツの級数は、緩慢に円周率に収束するが、遅すぎて円周率の数値計算には適さない。通常、円周率の数値計算は、マチンの公式により、逆正接関数のテイラー展開を利用する。今回はマチンの公式を証明し、その威力をパソコンによって確かめてみる。	同　上	同　上
4	パソコンによるグラフィックス	モニターのグラフィックス画面は方眼紙である。この方眼紙の枡目は、標準的には640×400である。今回は、ここに描画するためのＵＢＡＳＩＣの命令を学び、y=f(x)のグラフを描いて見る。また描画の例として、モンテカルロ法を視覚化してみよう。	同　上	同　上
5	フーリエ級数のグラフ	フーリエ級数は三角級数とも呼ばれる。周期関数はすべてフーリエ級数に展開される。無限級数はグラフに描くことはできないが、有限和のグラフを描いてみて、極限の関数の様子を探ってみたい。連続だが微分できない関数もフーリエ級数で表わすことができる。	同　上	同　上
6	テイラー展開のグラフ	関数のテイラー展開について説明する。例えば、y = sinxのテイラー展開のはじめの数項のグラフを描いてみて、テイラー展開の意味を探る。テイラー展開を利用して、ネピアの定数や三角関数の値の精密な近似値を加減乗除だけで計算してみる。	同　上	同　上
7	数値積分の公式Ｉ	f(x)を増加（減少）関数とした時、$\frac{1}{2}f(0)$は定積分 $I=\int_0^1 f(x)dx$の不足（過剰）近似値で、$\frac{1}{2}f(1)$はＩの過剰（不足）近似値である。したがってその平均値はＩの近似値として適当である。これを台形公式という。これを改良してシンプソンの公式が得られる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	数値積分法の誤差解析	滑らかな関数の台形公式による数値積分の誤差解析は詳しく実行することができる。オイラーマクローリンの公式を紹介しよう。シンプソン公式の誤差解析や、より高度の数値積分の公式（ロンバーグ法）についても触れてみたいと思う。	森本　光生	森本　光生
9	関孝和の円周率計算	正方形の周の長さから出発して、辺の数を倍々に増やしていく。　正2^n 角形の周の長さは整数から出発して加減乗除を開平算を組み合せて求めることができる。$n\to\infty$とすれば円周率が求まるが、収束は遅い。和算家の関孝和は、巧妙な加速法を発見した。	同　上	同　上
10	建部賢弘の円周率計算	建部賢弘（たけべかたひろ）は、単位円に内接する正４角形、正８角形、正16角形、…、正1024角形の周の長さを計算し、この9個の数値から、43桁の円周率を求めた。彼は、いったいどのような方法で計算したのであろうか探ってみたい。	同　上	同　上
11	微分方程式の意味	簡単な微分方程式により、微分方程式の表わす自然現象について解説する。流れの図をパソコンに描かせて、微分方程式とその解の数学的な関係について考える。微分方程式の一般解は曲線群を表すことと、適切な初期値を持つ解は一意的に定まることを確認する。	同　上	同　上
12	微分方程式の求積法	変数分離型、同次型、一階線形微分方程式など、積分を実行することにより微分方程式の解が具体的に求められる場合がある。今回はこのような微分方程式の実例をいくつか取り上げ、計算例をみることにする。	同　上	同　上
13	微分方程式の数値解法	最も簡単な微分方程式 $\dot{x} = f(x, t)$ を考察する。ここで、$\dot{x} = \frac{dx}{dt}$ は関数 $x(t)$ の時間パラメータtによる導関数を表わす。初期値 $x(0) = x_0$ を与えた時の近似解を折れ線近似で求めることを、オイラー法という。オイラー法を改良することについても述べよう。	同　上	同　上
14	２次元線形自励系	$\dot{x} = ax+dy, \qquad \dot{y} = cx+dy$ という２次元の自励系は、$\dot{x} = A\,x$ という行列形で記述できる。パソコンが描く解軌道図を眺めながら、この自励系の軌道の様子と行列Ａの固有値の関連について考察しよう。	同　上	同　上
15	２次元自励系の定常解	$\dot{x} = f(x, y), \qquad \dot{y} = q(x, y)$ という２次元の自励系の解　$x=x(t)$，$y=y(t)$ の軌道をパソコンに描かせながら，定常解の安定性について説明する。いわゆる極限円もパソコンで容易に描くことができる。	同　上	同　上

＝ 運動と力（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）〕
〔主任講師：堂寺　知成（放送大学助教授）　〕

全体のねらい
運動と力との関係を調べる学問は力学とよばれ、これは物理学の基礎分野の１つである。本講義では、日常生活との関連、映像の活用などに重点をおき力学の基礎的な事項をなるべくやさしく解説する。数学の準備として微積分学、線形代数などの習得が望ましいが、それを前提とせず講義中で適当な説明を加えるつもりである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	位置・速度・加速度	物体の運動を記述するにはその位置を指定する必要がある。このためには空間中に適当な座標系を導入し、物体の座標を決めればよい。あるいは位置ベクトルを決めるといってもよい。ここではベクトルの性質、物体の速度や加速度について説明する。	阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）	阿部　龍蔵（東京大学名誉教授）
2	運動の法則	ニュートンは著書『プリンキピア』において運動の法則を述べ、力学の体系を確立した。ここではまず運動の第一、第二、第三の法則について説明する。次にそれらの法則の応用として等速度運動、等加速度運動、抵抗のある運動、放物体の運動、斜面に沿う運動を決める基礎方程式を導出する。	堂寺　知成（放送大学助教授）	堂寺　知成（放送大学助教授）
3	単振動・強制振動・減衰振動	振動は日常的によく見られる運動の一種であるが、その内もっとも簡単なものは単振動である。ここでは単振動の性質を学び、その延長線として強制振動、減衰振動について触れる。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
4	非線形力学	単振動を記述する方程式は線形微分方程式であるが、非線形性を入れると運動の情況は一変しカオスが出現する。ここではカオスを示す振動子を観察しカオス運動を学習する。また、カオスの特徴である初期値に対する敏感性を凹凸斜面での落下の計算機実験を見ながら理解する。	堂寺　知成	堂寺　知成
5	仕事と力学的エネルギー	仕事とかエネルギーという言葉は日常的にもよく使われるが、その厳密な定義は力学で与えられるものである。これらについて触れるとともに力が保存力の場合、なめらかな束縛の場合などに力学的エネルギー保存則が成立することを示す。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
6	運動量と力積	自動車事故では自動車の質量が大きいほど、また速さが大きいほどダメージがひどくなる。このようないわば運動の勢いを表す量として運動量を導入し、これと密接な関係のある力積について学ぶ。	同　上	同　上
7	計算機の応用	運動方程式を数値的に解くためには離散化が必要である。しかし、離散化には注意が必要である。ここではまず離散化の仕組みを学ぶ。最終的には４次のルンゲ・クッタ法を使って例題を解き、数値計算の面白さを知ろう。印刷教材にCプログラムを例示し、パソコンを所有する学生には演習問題を提供する。	堂寺　知成	堂寺　知成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流体の運動	気体と液体を総称して流体という。力学の対象は固体だけでなく流体にも及び、流体の運動を論じる力学を流体力学という。ここでは流体力学の基本的事項として圧力、流線、粘性率、レイノルズの相似則を学び、次に力学的エネルギー保存則の延長としてベルヌーイの定理を導く。	堂寺　知成	堂寺　知成
9	構造力学	地震で建物が崩壊したり、橋梁が落ちたりする。物体に力が加わると、力が小さいうちは物体の変形の大きさは力の大きさに比例し、フックの法則が成立する。力がある限界を越えると物体の破壊が起こる。この章では力の釣り合い、弾性体の変形、橋の構造といった構造力学の基礎を学ぶ。	同　上	同　上
10	万有引力	ニュートンのりんごの話はあまりにも有名だが、ここでは万有引力について学ぶ。点状の物体間の万有引力を説明した後、有限な形の物体同士に働く万有引力を論じる。とくに、一様な球同士の場合、具体的な計算を行う。	阿部　龍蔵	阿部　龍蔵
11	惑星の運動	太陽と地球との間には万有引力が働くが、この２つだけに注目した場合の問題を二体問題という。二体問題は基本的に一体問題に帰着するが、このような観点から惑星の運動を調べ、ケプラーの法則が導かれることを示す。	同　上	同　上
12	相対運動	慣性の法則が成立するような座標系を慣性系という。慣性系に対して相対運動を行う座標系では、一般に見かけ上の力が現れこれを慣性力という。ここでは並進運動、回転座標系などを考察しガリレイの相対性原理、コリオリ力、遠心力などについて学ぶ。	同　上	同　上
13	剛体と慣性モーメント	力を加えても変形しないような理想的な固体を想定し、それを剛体という。剛体の運動を記述する基本的な物理量は慣性モーメントであるが、その具対例をいくつか扱う。また、剛体の簡単な運動として固定軸をもつ場合と平面運動について述べる。	同　上	同　上
14	剛体の回転	固定点の回りで回転するような剛体を考え、その全角運動量、運動方程式、全運動エネルギーなどについて考えていく。また、このような回転を記述する数学的な方法として、オイラー角を導入し、それに伴う座標変換について論じる。	同　上	同　上
15	重力場中の対称こま	こまの運動は、力学の各種の課題の中でとくに興味のある問題である。ここでは重力場中の対称こまを扱い、オイラー角を利用してその代表的な各種の運動について論じていく。とくにオイラー角θが０となる場合（眠りごま）が実現されるための条件を導く。	同　上	同　上

＝光と電磁場　（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中山　正敏（放送大学教授）〕
〔主任講師：櫻井　捷海（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代文明は、光、電波、電流、磁気などによって支えられている。光は実は電気と磁気の波、すなわち電磁波の一種である。本講義では、光や電磁気現象を電場と磁場という2種類の場と、その基本法則によって理解することを目指す。身近な例から出発して電磁場のイメージを作り、さまざまな現象や応用例を体系的に説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	光と電磁気	光、電波、電気、磁気の諸現象は、身の回りにあふれ、現代文明を支えている。これらは、互いに関連しあっており、空間の中に広がった電場、磁場によって表わされる。光、電気信号の速度を測る。光のエネルギーの伝播の様子を、点・線・面光源について学ぶ。	中山　正敏（放送大学教授）	中山　正敏（放送大学教授）
2	波の性質	光や電波などを波として捉える準備として波の一般的な性質を学ぶ。水面波を例として、波と振動の関係、位相、正弦波を説明する。波の重ね合わせの原理、干渉、回折格子について述べる。波の伝播についてのホイヘンスの原理を紹介する。	同　上	同　上
3	光の波	ＣＤが色づいて見えることから光が波であることを理解する。回折格子により、光の色と波長の関係を知る。光の伝播について、光線の意味を知り、光線の直進、反射、屈折の諸法則を、ホイヘンスの原理によって説明する。レンズの原理と簡単な応用を述べる。	同　上	同　上
4	電波と光	電波と光が電磁波であることを説明する。電磁波の波長による分類、その特徴、応用を概観する。電磁波が偏光を持つことを説明する。光が吸収や放出などで原子とエネルギーを交換するときは、光量子を単位とすることを学ぶ。レーザーの原理を述べる。	櫻井　捷海（東京大学名誉教授）	櫻井　捷海（東京大学名誉教授）
5	電荷と電場	静電気現象の基本概念を説明する。電荷間のクーロン力と、それを媒介する電場について述べる。電場を電気力線で表わし、それがガウスの法則にしたがうことを示す。ガウスの法則から、対称性のよい場合の電場を計算する。	中山　正敏	中山　正敏
6	電位と電気エネルギー	静電気現象を、エネルギーの観点から考える。電気力のなす仕事は、電位を用いて表わされる。電位と電場の関係を説明する。応用として、導体の静電誘導、コンデンサーについて述べる。静電気エネルギーが、電場によって担われていることを示す。	同　上	同　上
7	誘電体と電場	不導体である誘電体と電気現象の関係を述べる。微視的な電気双極子の集まりによる巨視的な電場が、分極電荷を用いて表わされることを説明する。電気分極の場、電束密度の場を導入し、それを用いて誘電体がある場合のガウスの法則を表わす。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	電流	電流は電荷粒子の流れであることを説明する。オームの法則について述べる。ジュール熱、電池の起電力を、エネルギーの転換過程として説明する。空間に分布している電流を、電流密度の場で表わす。電荷の保存則から、電流密度の場の形が決まることを示す。	中山　正敏	中山　正敏
9	磁石と磁場	磁石による静磁気現象について述べる。磁石は単独の磁荷に分けられず、磁気双極子が要素となる。磁気のクーロンの法則、ガウスの法則が成り立ち、誘電体の場合と平行した記述ができる。磁束線は源を持たず、閉曲線としてのみ存在する。	同　上	同　上
10	電流と磁場	電流は磁場から力を受ける（ローレンツの磁気力）。その反作用として電流が作る磁場は、ビオ＝サバールの法則にしたがう。電流コイルと磁気双極子の対応関係を述べる。電流の作る磁束密度は閉曲線をなし、アンペールの法則にしたがうことを示す。	櫻井　捷海	櫻井　捷海
11	電磁誘導	磁場と電流コイルが相対的に動くとき、コイルに起電力が誘導される。それを表わすファラデーの法則を説明する。コイルの相互誘導、自己誘導について述べる。コイルを流れる電流のエネルギー、磁場のエネルギーについて学ぶ。発電機など電磁誘導の応用例について述べる。	同　上	同　上
12	ベクトル解析と静電磁場の法則	これまで積分形式で電磁場の法則を説明してきた。同じ法則を各点での場の微分量の関係として記述できると、近接作用の場の立場によりふさわしい。はじめにベクトル解析について学んだ後に、静電場、静磁場に関する法則の微分形式について説明する。	同　上	同　上
13	マクスウェル方程式の導出	電位のポアソン方程式、静磁場を表わすベクトルポテンシャルの方程式を導く。電磁誘導の法則と、変位電流の導入により拡張したアンペールの法則の微分形式を説明する。これまで述べてきた電磁場の法則をマクスウェルの方程式（微分形式）としてまとめる。	同　上	同　上
14	マクスウェル方程式と電磁波	マクスウェル方程式から電磁波の波動方程式を導く。電磁波の性質についてしらべる。マクスウェル方程式を解くときの境界条件や電磁波の反射屈折などにも触れる。	同　上	同　上
15	電磁波の発生と検出	ポインティングベクトルについて説明する。ベクトルポテンシャルとスカラーポテンシャル（電位）に対する波動方程式を導き、電磁波の発生について述べる。電磁波の伝搬や伝送線に沿っての電気信号の伝搬についても考える。また、電磁場の検出について説明する。	同　上	同　上

＝ 相対論（'９９）＝（R）

〔主任講師：藤井　保憲（日本福祉大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、相対性理論全般にわたって平易な解説を目指す。数式の使用は必要最低限にし、直観的な説明を心がける。重要な点については、時間をかけて丁寧な説明をする。また相対性理論が現在の基礎研究や技術にどのように役立っているかにも焦点をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	相対性理論とは何か	特殊、および一般相対性理論とはどんなものか、詳細にはいる前に概観と現代の姿を与える。次に特殊相対性理論の成り立ちにはいる。以後の説明の準備として座標系、慣性系、またガリレイ変換などを解説し、また電磁気学における光速度との関連にもふれる。	藤井　保憲（日本福祉大学教授）	藤井　保憲（日本福祉大学教授）
2	同時刻とはどういうことか	光速度不変の原理から出発し、直感的な議論によって同時刻の相対性や動いてる時計のおくれを示す。絶対時間概念の崩壊を強調し、ローレンツ変換を紹介する。それによって新しい速度の合成則を導く。	同　上	同　上
3	時空とは何か	ローレンツ変換の作用する場所としてミンコフスキー時空、その中の世界点、世界線、固有時について述べる。2次元から出発し、時代のおくれなどの現象を再現する。光円錐を説明する。4次元ベクトル、スカラー、ローレンツ不変量を解説する。	同　上	同　上
4	特殊相対性理論によって何がわかったか	4次元エネルギー・運動量ベクトルから$E=mc^2$を導き、原子核エネルギーについて説明する。さらに速度とエネルギーの関係も議論し、加速器の原理を述べる。ディラック方程式、それに関連してスピンについても述べる。レーザージャイロなど、最近の応用にもふれる。	同　上	同　上
5	パズルはいかが	特殊相対性理論にかかわるいくつかのパズルに挑戦してみる。これまでに習ったことの練習問題にもなるし、さらに深い理解の為にもなるだろう。	同　上	同　上
6	一般相対性理論への道	一般相対性理論に導くいくつかの概念について説明する。特に非慣性系、慣性力、2種類の質量などを通じてニュートン力学の微妙な点にふれ、等価原理を理解する。エトヴェッシュの実験もとりあげる。	同　上	同　上
7	曲がった時空	加速度運動をあらわす曲がった世界線から、曲がった時空への着想について述べる。曲がった空間の幾何学の話しにはいる。計量、平行性、曲率、測地線などの概念を説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	すべては計量から	前章で説明した諸概念を、もう少し数学的な形で提示する。つまり、計量（テンソル）、線素、接続、曲率など、リーマン幾何学の道具立てを説明するが、できるだけ直感的な方法で、一般相対論の本質の理解を助けることに重点をおく。	藤井　保憲	藤井　保憲
9	重力は力ではない	運動方程式としての測地線の考え方を述べる。ニュートン的極限で、計量が重力ポテンシャルと解釈できることを示す。また回転座標系における円心力の例も考察する。等価原理のさらに深い到達点として、単なる慣性力と真の重力との違いについて説明する。	同　上	同　上
10	重力による時計のおくれ	等価原理の適用例として重力的赤方変位を導く。Pound-Rebkaの実験、およびVessotの実験、さらにはこれを利用した重力計にも触れる。また最近の地球的規模の時計合わせの話題も含める。	同　上	同　上
11	アインシュタイン方程式	基本的考え方と結果を簡潔に述べる。またその苦心談も交える。ニュートン理論との関係、またその非線形性を強調する。その解として、線形解、静的厳密解、宇宙論的解があることを説明する。時空と物質との相互関係についても述べる。	同　上	同　上
12	ブラックホール	シュワルツシルトに関する挿話を交えながら、解の特徴を説明する。ついでブラックホールの説明にはいる。地平線の性質、またそれへの落下の様子を解説する。またブラックホールの実現性についても語る。超新星との関連にも触れる。	同　上	同　上
13	太陽系	水星の近日点移動、太陽のまわりの光の曲がりについて、歴史的挿話と共に説明する。ついで最近の太陽系実験について述べる。さらに連星パルサーに関する話題も含め、実験重力の発展について語る。	同　上	同　上
14	宇宙論	膨張宇宙の解を提示する。宇宙定数の挿話とハブルの発見について語る。赤方変位について説明し、現代のビグバン宇宙観について解説する。宇宙背景輻射、暗黒物質や宇宙定数などに関する話題も含める。	同　上	同　上
15	統一理論	素粒子物理学との接近について述べる。アインシュタイン理論のさらに奥にある統一理論について概説する。	同　上	同　上

＝ 量子力学（'０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大西　直毅（山梨大学教授）〕
〔主任講師：市村　宗武（法政大学教授）〕

全体のねらい

物理学では、２０世紀の最初の四半世紀、それまでの概念や描像を根底から覆す転回が矢継ぎ早に起こり、自然認識が大きく変わり、量子力学が生まれた。この講義ではその歴史を踏まえ、量子力学の基本的な考え方や法則の理解に努める。あわせて、光と物質との相互作用などの理解を深め、物質観を含む現代物理学の核心に触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物理学と量子力学	20世紀の物理学発展における量子力学の位置付けを述べ、先端技術などで果たしている役割を紹介する。量子論の発端は熱放射の解明にあった。光学は、波動説の復活と電磁波説により、古典電磁気学に集約できる。電磁場の基本方程式から波動方程式を導き、放射圧について議論する。	大西　直毅（山梨大学教授）	大西　直毅（山梨大学教授）
2	量子の登場	熱放射と吸収率の比は光の振動数と温度のみで決まる普遍関数であり、この形を決めるのが量子論の誕生に繋がる。黒体放射のT４乗則から、ヴィーンの変移則を経てプランクの放射公式に至る経緯を紹介し、エントロピーの計算から量子誕生の歴史的瞬間を述べる。	同　上	同　上
3	原子論と電子	量子力学はミクロの世界、特に電子の運動を司る法則で、現代原子論の成立と重なる。化学で確立した元素の概念、原子論・分子論を経て、電子の発見、分光学でのゼーマン効果の電子論による説明、原子核の発見、ラザフォード模型など、原子構造の解明の基礎的知見を紹介する。	同　上	同　上
4	量子力学前夜	ボーアはラザフォードの模型の困難を、古典電磁気学の帰結を不問にし、新しく定常状態と遷移の概念を導入して避け、水素原子のスペクトルを説明し、量子力学への大きい一歩を踏み出す。ゾンマーフェルトはボーアのアドホックな量子化を正し、より一般的な古典量子化を提唱した。	同　上	同　上
5	量子力学への２つの道	対応原理を指導原理として、ハイゼンベルグは遷移振幅の解析から交換関係に依る行列力学の道を拓く。ドゥブローイは物質波を提唱し、それを受けシュレーディンガーは電子の波動力学に到達し、異なる２つの道を経て量子力学の成立に向かう。	同　上	同　上
6	量子力学の成立	２つの道を別々に歩んだ方法は、それぞれ独り立ちはできなかったが、同等性が証明され、正準変換理論で完成へと向かった。調和振動子は最も基本的な力学系で、交換関係から波動関数を生成する演算子を導入して解く。1次元の井戸型ポテンシャルの波動方程式を解く。	同　上	同　上
7	球対称性と角運動量	中心力は球対称性のために角運動量が保存し、極座標の導入によって、ハミルトニアンは動径と角度の座標へ変数分離できる。角度の部分は角運動量演算子の交換関係から解け、波動関数が球面調和関数で表せる。動径部分は遠心ポテンシャルを含んだ、一次元の問題に帰着する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	水素原子	水素原子は電子が一つで、中心力の一体問題として解る。クーロン力の特殊性で、角運動量の他に離心ベクトルがハミルトニアンと可換な演算子で、各ベクトル成分の間の交換関係から、量子状態を求める。このことから、完全でない古典量子化が成功した幸運の秘密を解き明かす。	大西　直毅	大西　直毅
9	不確定性原理	量子力学では時間発展を記述するのに波動関数の変化と捉える見方と演算子の変化とする見方がある。両者の関係を明らかにする。ついで、量子論固有の不確定性関係を定量的に導きその意味を波動描象から理解する。合わせて、古典的粒子描象と確率の波との関係を考える。	市村　宗武（法政大学教授）	市村　宗武（法政大学教授）
10	スピンおよび多粒子系	静止した電子でもスピンという半整数の角運動量を持ち、磁石になっている。このような内部自由度の概念を学ぶ。ついで、複数の同種粒子は互いに区別できず、相互の置換に対し波動関数が対称か反対称という統計性を持つことを学び、統計性とスピンの関係を見る。	同　上	同　上
11	原子・分子の構造	まず変分法という近似手法を学ぶ。次いで、多体系取扱いの基本例として２電子を持つヘリウム原子を考察する。つぎに周期律表の理解を中心に平均場近似を用いて原子の構造を定性的に考察する。終りに分子を形成する機構の１つとして水素分子を考察する。	同　上	同　上
12	非束縛状態 ―反射・透過・散乱	まず１次元の散乱問題を取上げ、反射、透過現象を考える。特に古典論と量子論の本質的違いであるトンネル効果を理解する。ついで３次元の散乱問題についても考え方とその取扱い方の基礎を学ぶ。	同　上	同　上
13	摂動論 I ―定常状態	系の主要部分（解ける問題）に弱い付加的力（摂動）が加わったとき、その摂動の取扱い方を考える。まず定常状態について、縮退がない場合とある場合に別けて考察する。原子の分極率、シュタルク効果などを取り上げる。	同　上	同　上
14	摂動論 II ―遷移過程	時間に依存する摂動を取扱い、黄金律と呼ばれる、現象の理解にも、実用にも極めて有用な公式を導く。応用として原子核の大きさを測る電子散乱、光の吸収、放射などの問題を考察する。	同　上	同　上
15	現代の自然像	現在、物質は原子→原子核→陽子・中性子→クォークおよび電子という階層構造を成し、基本粒子間には光子、グルーオン等の交換による力が働いていると考えられている。こうした自然像の発見の歴史と現在の課題について述べる。	同　上	同　上

＝ 物性物理学入門（’００）＝（ＴＶ）

〔 主 任 講 師 ： 藤 原　毅 夫 （東京大学教授）〕

全体のねらい

多様な物質のミクロな構造やマクロな諸性質を物理学の立場から理解し、物理的な物の見方を身に付けるとともにそれらを支配する物理法則を理解する。現代の日常生活のすみずみにまでいき渡っている物性物理学の、技術としての一端も理解されるように努める。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物性物理学とは	物性物理学は力学、電磁気学とは違い開いた体系である。このような側面から説明し、物性物理学が自然科学の最先端をリードしていることを概観する。さらに物性物理学を学ぶ際の単位の重要性を強調し、ＳＩ単位系で物質系の諸量を見る。	藤原　毅夫（東京大学教授）	藤原　毅夫（東京大学教授）
2	物質の構造・結合	固体のミクロな構造が原子の周期的な配列であることを知り、原子配列と固体結合のメカニズムとの関係を理解する。さらに結晶構造を記述するいくつかの概念を説明する。	同　上	同　上
3	物質の構造とＸ線・粒子線構造学	物質の構造やその乱れを観察する手段であるＸ線・粒子線構造学について述べる。物質の構造の乱れの概念を把握し実際に観察する。	同　上	同　上
4	固体の弾塑性	物質の力学的性質について学ぶ。弾性、塑性、破断という過程を理解し、フックの法則を考える。固体の変形、歪み、応力の概念を理解し、結晶の対称性と歪みテンソルの関係を学ぶ。	同　上	同　上
5	固体の動力学と格子振動	物質の動力学的性質を原子論的立場から理解する。特に原子間相互作用を調和振動として取り扱い、音波の伝搬について理解し、また熱膨張と原子間相互作用の非調和性との関連、格子比熱とフォノンについても学ぶ。	同　上	同　上
6	結晶中の電子の振る舞い１．量子力学	固体中の電子性質を理解するための準備として、量子力学の復習を行う。シュレディンガー方程式、球対称ポテンシャルの場合の解（s, p, d, f, ...）、スピン、電子とフェルミ統計、交換相互作用、パウリの原理、電子相関など。	同　上	同　上
7	結晶中の電子の振る舞い２．電子のエネルギーバンド	固体中の電子の性質を周期ポテンシャルとの関連で理解する。ブリルアンゾーンと結合・反結合軌道について知り、電子のエネルギーバンドの概念を理解する。バンドギャップについて学び、金属と絶縁体の区別を明確にする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	固体の光学的性質	光物性の基本について学ぶ。物質の色（金属、絶縁体、宝石の色）がどのように現れるかの問題意識を実際の物質に即して理解し、ローレンツモデル、ドルーデモデルおよびエキシトンについて学ぶ。	藤原　毅夫	藤原　毅夫
9	金属と電子輸送	金属の物性について電子論の立場から学ぶ。特に弾塑性と金属結合、バンド構造、フェルミ面の概念を理解する。フェルミ、ディラック分布から電子比熱を理解する。さらにドルーデモデル、電気伝導、熱伝導、金属の帯磁率にも触れる。	同　上	同　上
10	半導体	半導体の物性について電子論の立場から学ぶ。特に構造と共有結合、バンド構造、電子とホール（キャリア）および真性半導体と不純物半導体、キャリアドーピングの概念を理解する。半導体伝導、簡単なp-n接合、トランジスタについても述べる。	同　上	同　上
11	磁性	物質の磁気的性質についてミクロな立場から学ぶ。反磁性と常磁性の区別、スピン、スピン間相互作用を電子的な立場から説明する。協力現象（強磁性、反強磁性）の概念と磁化、磁化率について学ぶ。	同　上	同　上
12	相転移	強磁性を例に相転移の現象論を学ぶ。物質の相、自由エネルギー、平均場近似の取り扱い、1次転移と2次転移、オーダーパラメター、ランダウの相転移理論について述べる。	同　上	同　上
13	超伝導	超伝導とは何か、現象の理解とその熱力学を説明し電子間相互作用とフェルミ面の不安定性について学ぶ。電子波動関数の位相の重要性とジョセフソン効果についても触れる。	同　上	同　上
14	ソフトマターの構造	新しい材料として注目されているソフトマターについて、構造の階層性、高次構造、共重合とマクロ相分離、体積排除効果を学び、その多様性を理解する。	同　上	同　上
15	ソフトマターの物性	ソフトマターの物性の基礎である分子鎖の形態、ゴム弾性、ゲルを学び、粘弾性（レオロジー）などの物性を概観する。	同　上	同　上

＝ 物質の科学・量子化学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：朽津　耕三（城西大学教授）〕
〔主任講師：濱田　嘉昭（放送大学助教授）〕

全体のねらい

物質の織りなす様々な現象を理解し、特に化学的な知識と技術で物質を調べ、あるいは新しい物質を創造するには分子およびその集合体の性質を量子論に基づいて理解することが必要である。この自然科学の重要な分野である量子化学の基礎をわかりやすく講義するとともに、日常の自然現象の理解あるいは様々な物質研究への量子化学の適用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論－物質の個性と分子の個性	物質の基本単位である分子は非常に小さく、軽いばかりでなく、マクロの物質の性質とは異なった独特の個性を持っている。われわれが見たり触れたりするマクロの物質の性質は、それを構成する分子の個性によって決められている。その関連について説明する。	朽津　耕三（城西大学教授）	朽津　耕三（城西大学教授）
2	ミクロの世界の記述	分子の不思議な性質・挙動を理解するには、ミクロの粒子の運動と性質を正しく記述する量子力学を学ぶ必要がある。分子に適用する量子力学として、波動関数とエネルギー固有値という考え方の基本について説明する。	同　上	同　上
3	原子の電子構造	分子は原子が結合してできたものである。分子の成り立ちを理解するには原子の性質、特に原子の中の電子の性質を知る必要がある。電子のエネルギーと電子が運動する空間＝オービタルについての考え方を量子力学に基づいて説明する。	同　上	同　上
4	原子から分子へ－化学結合のなりたち	原子と原子が結合して分子を形づくる理由を原子価結合法と分子軌道法の考え方で説明する。分子軌道の対称性、ポテンシャルエネルギー曲線、および量子状態の考え方について説明する。	同　上	同　上
5	二原子分子の結合と電子構造	いくつかの典型的な二原子分子をとって、分子軌道の性質、電子の配置、軌道エネルギーなどを説明する。電荷分布の偏り、結合の強さと分子軌道の関連について説明する。	同　上	同　上
6	多原子分子の結合と電子構造	有機化合物の結合を考える場合に重要な混成軌道について述べ、分子の化学的性質を理解する上で重要な分子軌道の考え方と使い方について説明する。	濱田　嘉昭（放送大学助教授）	同　上
7	ミクロの世界の観測	分子を実験的に測定する方法の特徴を解説し、特に量子化されたエネルギー準位の間の遷移を測定する分光法の原理を詳しく説明する。分光法の特徴を利用した分子構造研究の例を紹介する。	同　上	濱田　嘉昭（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	π電子系の電子構造	電子のエネルギー準位を測定する可視・紫外スペクトルについて述べる。電子遷移は物体の色に直接の関連した現象であることを説明し、実例としてカラー写真およびカラーコピーの原理と実際を解説する。	濱田　嘉昭	濱田　嘉昭
9	d電子系の電子構造	第４周期以降の原子からなる分子の化学結合にはd電子が関与する。また金属と有機分子を含む化合物でもd電子が関与しており、複雑な色合いや反応の原因となっている。分子構造を決める有力な実験手法の一つであるＸ線回折法について、錯体の構造と電子密度を例にとって説明する。	齋藤　太郎（神奈川大学教授）	齋藤　太郎（神奈川大学教授）
10	分子の振動	分子の結合は微小な周期的振動をしている。この振動運動のエネルギーを赤外線スペクトルとして測定することにより、結合の強さを決定できる。振動分光法とその応用について解説する。	濱田　嘉昭	濱田　嘉昭
11	分子の回転	分子の回転運動のエネルギーも量子化されており、そのスペクトルをマイクロ波あるいは遠赤外線領域で測定することにより分子構造を決めることを実例によって示す。	同　上	同　上
12	電子スピンと核スピン	電子スピンや核スピンが関係するスペクトルについて説明する。電子スピン共鳴法や核磁気共鳴法を利用した分子構造決定の例を紹介し、分子磁性を利用した将来の発展性を考える。	濱田嘉昭 工位　武治（大阪市立大学教授）	濱田嘉昭 工位　武治（大阪市立大学教授）
13	分子の動的構造	非常に短い時間スケールで分子の構造や結合の変化はレーザーにより追跡できる。レーザーの発振の原理と特徴について解説し、それによって明らかにされた分子の姿の例を紹介する。	佐藤　博保（三重大学名誉教授教授）	佐藤　博保（三重大学名誉教授教授）
14	分子間相互作用	マクロの物体は多くの分子が積み重なってできあがっている。この分子同士を結びつけている弱い力の原因について述べる。マクロとミクロを結ぶ分子集合体として注目を集めているいくつかの物質系とその性質および実験について紹介する。	朽津　耕三	朽津　耕三
15	量子化学の最前線	分子の構造と性質を測定する実験手段と理論の現在の展開を概観し、新しい物質の個性を創造する化学の将来の見通しを述べる。	同　上	同　上

＝ 物質の科学・反応と物性（９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：土屋　荘次（早稲田大学客員教授）〕
〔主任講師：平川　暁子（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、物質の示すさまざまな状態・性質と化学変化を熱力学と反応速度論という２つの方法論によって探求する。方法論の原則を実験事実を通して理解し易く解説することを念頭におく。なお、これらの原則がどのように現代の先端的な問題に関連しているかの解説にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論：物質探究の方法論	本講義の目標と背景、その概要を説明する。物質の科学は、物質のもつさまざまな特性を原子・分子のレベルで探求する学問である。この講義では、主として熱力学と反応速度論に基づいて物質の反応と物性を解き明かす予定である。	土屋　荘次（早稲田大学客員教授）	土屋　荘次（早稲田大学客員教授）
2	物質のもつエネルギー	物質はそれを構成する原子分子の運動による固有なエネルギーをもっている。エネルギーの大きさを規定しているのは温度であり、また、エネルギーの変化は、熱や仕事として認識される。この章の目標は、物質のエネルギーの根源とその変化について学ぶことである。	同　上	同　上
3	熱化学	物質の化学変化にともなってエネルギーの吸収、または放出がある。この章では、物質の構成成分について標準状態エネルギーを定義することによって、結合エネルギーなど物質固有なエネルギー、および反応にともなうエネルギー変化を考察する。	同　上	同　上
4	物質のエントロピー	物質の状態を規定するには、エネルギー以外にエントロピーという物質固有な物理量を必要とする。この章では、エントロピーの物理的な意義とそれが何故物質の状態を支配するのかを説明する。	同　上	同　上
5	化学平衡	物質の化学変化や状態変化は、最終的には平衡状態となる。この講義では、平衡状態がギブスエネルギーが最小となる条件で達成されることを説明し、化学平衡への応用を考察する。	同　上	同　上
6	相平衡	物質は、固体、液体、気体の3つの状態のいずれかをとる。純物質について、どのような条件でどのような状態をとるかを論ずるのが本章の課題である。	同　上	同　上
7	溶液	2つの成分物質の混合系のとりうる状態を論ずるのを目的とする。組成によって平衡状態がどう違って来るのか、また、「溶ける」とはどういうことなのかも論ずる予定である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	相転移	物質の気体、液体、固体の3つの状態間の相の変化の他に、結晶や液体状態で様々な相変化（相転移）をする物質が数多く存在する。相転移がなぜ起こるのかを、エネルギーとエントロピーの立場から、いくつかの例で解説する。	徂徠道夫（大阪大学教授）	徂徠道夫（大阪大学教授）
9	高分子の構造	高分子物質の多彩な性質は、それがとり得る複雑な構造とその分子運動に起因している。ここでは高分子の構造を、単量体の一次構から始めて、高分子鎖の一次構造、二次構造、高次構造を主として熱力学の立場から、説明する。	西敏夫（東京大学教授）	西敏夫（東京大学教授）
10	高分子の物性	高分子に特徴的な物性として、ゴム弾性やゲルの物性、高性能繊維、粘弾性などを取り上げ、構造と物性の関係を説明する。また、機能性高分子の例として、光学的特性、導電性、圧電性などを示すと共に、これからの高分子の可能性について述べる。	同上	同上
11	化学反応のしくみ(1)	物質の化学変化、つまり、反応の速度をどう表現するのか、その速度を支配しているものは何かなど、反応速度の基本を学ぶ。	土屋荘次	土屋荘次
12	化学反応のしくみ(2)	化学反応は、原子分子同士の衝突によって起こる多くの素反応から組み立てられる複合反応の形式をとる。その場合、反応を推進する機構がどうなっているかを燃焼や爆発反応などの例について学ぶ。	同上	同上
13	大気の科学	地球の大気は太陽光をエネルギー源とした光化学反応の場である。この章では、オゾン層の生成などの自然大気で起っている光化学反応と、人間活動によって大気中に放出された汚染気体が起す光化学反応を学び、同時に人間活動が自然に与える影響を考える。	鷲田伸明（京都大学教授）	鷲田伸明（京都大学教授）
14	エネルギーの変換の化学	電子のやりとりで進むプロセスのあらましを説明し、エネルギー変換の原理を解説する。とくに、人間社会にとってもっとも重要なエネルギー変換である光合成をとり上げ、光エネルギー変換のメカニズムを検討する。	渡邊正（東京大学教授）	渡邊正（東京大学教授）
15	触媒の化学	われわれの生活は、さまざまな有用な合成物質に支えられている。それらの大部分は、触媒という特定の化学反応を媒介する機能物質によって合成される。この章では、触媒のもつ反応メカニズムを学び、その多様な可能性を探る。	御園生誠（工学院大学教授）	御園生誠（工学院大学教授）

＝ 物質の科学・有機高分子（０２）＝（ＴＶ）

〔主任講師：西　　敏夫（東京大学教授）〕
〔主任講師：讃井　浩平（上智大学教授）〕
〔主任講師：平川　暁子（放送大学教授）〕

全体のねらい

有機高分子は、私たちの生命・生活に密接に関係し今後もその重要性は増すであろう。本科目では高分子とは何かから始め、有機化学の基礎として有機物質の構造・反応を述べ、重合による高分子の生成を説明する。さらに高分子の構造・物性・加工・社会との係わりなど将来への展望を含めて有機高分子物質の総合的な把握を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高分子とは何か	高分子とは何かについて、天然高分子（植物・動物）を例にとり説明すると共に、日常生活にかかせない合成高分子についても具体的に紹介する。高分子の概念、合成高分子の開発、生体高分子を概観したあと、本科目の講義の構成を説明する。	西　敏夫（東京大学教授）	西　敏夫（東京大学教授）
2	有機化合物の構造	多様な有機化合物は、炭素－炭素間の結合が骨格を作り、それに各種の官能基が結合している。この回では、炭素間の結合の特徴・炭素間結合と官能基の種類による化合物の分類・分子の立体構造など、有機化合物を学ぶ際の基本的な事項を説明する。	平川　暁子（放送大学教授）	平川　暁子（放送大学教授）
3	有機化合物の反応(1)　置換反応	多様な有機化合物の構造と反応性の関係を統一的に理解するには、反応機構にもとづいて整理するとよい。この回では置換反応について、脂肪族炭素上およびカルボニル炭素上の求核置換、芳香族の求電子置換、アルカンのラジカル置換などについて説明する。	井上　祥平（東京理科大学教授）	井上　祥平（東京理科大学教授）
4	有機化合物の反応(2)　付加反応と脱離反応	付加反応と脱離反応を、反応機構にもとづいて整理して説明する。アルケンへの求電子付加、カルボニル化合物への求核付加、アルケンへのラジカル付加、脱離反応によるアルケンなどの生成について述べる。付加・脱離反応と置換反応の関係についても触れる。	同　上	同　上
5	有機化合物をつくる	有機化合物は一般に基本的な反応を組み合わせた多段階のプロセスでつくる。ここでは日常生活に関係の深い合成繊維の原料や染料・医薬品など、有機化学製品の例をいくつかあげ、それらがどんな反応を使って合成されるかを、前回までを復習しながら説明する。	同　上	同　上
6	高分子生成反応	高分子生成反応を有機合成反応の延長としてとらえ、高分子量体を得るための注意を述べる。次に高分子生成反応を逐次反応と連鎖反応に大別し、それらの特徴をわかり易く解説する。両反応における分子量・分子量分布の経時変化の違いなどを例に説明する。	讃井　浩平（上智大学教授）	讃井　浩平（上智大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	重縮合・重付加	重縮合を例に逐次重合の動力学について説明する。次に重縮合の特徴をナイロン・ポリエステル等の代表的な高分子の合成を例に解説し、界面重合によるナイロン610の合成を紹介する。また重付加についても、ポリウレタン・ポリ尿素の合成反応やフェノール樹脂などの熱硬化性樹脂の反応を示して、その特徴を解説する。	讃井　浩平	讃井　浩平
8	ラジカル重合・イオン重合	活性種が二重結合を攻撃して新たにσ結合が生成すると、炭素－炭素結合が伸びていく重合が連鎖的に起こり、短時間で高分子量のポリマーができることを、わかり易く解説する。それぞれの活性種とモノマーとの反応性や重合の特徴を、実験も含めて解説する。	同　上	讃井　浩平 ゲスト： 澤本　光男（京都大学教授）
9	配位重合・開環重合	配位重合では、立体規則性の優れたポリマーが得られ、とくにZiegler－Natta　触媒による立体特異性重合の機構を、分子模型を用いて解説する。また、開環重合のモノマーの反応性を各活性種について説明する。最後に、リビング重合についても簡単に触れる。	同　上	同　上
10	酵素・微生物による高分子の合成と分解	酵素・微生物を用いた立体規則性の高分子の合成および分解反応について、例を示しながらわかり易く説明する。得られた高分子の構造と生分解性などの特徴についても紹介する。　さらに、これらの重合で得られた高分子の応用についても触れる。	讃井　浩平 土肥　義治（理化学研究所主任研究員）	讃井　浩平 土肥　義治（理化学研究所主任研究員）
11	高分子の構造	高分子の構造について、原子分子オーダーから巨視的なオーダーまで（構造単位の立体化学、一次構造、二次構造、結晶・非晶・液晶・球晶・ミクロ相分離などの高次構造）を、構造形成機構を含めて、ＣＧを多用して、わかりやすく説明する。	西　敏夫（東京大学教授）	西　敏夫（東京大学教授） ゲスト： 田代　孝二（大阪大学教授） 橋本　竹治（京都大学教授）
12	高分子の力学的性質	高分子の力学的性質の発現(ゴム・繊維・フィルムなど）には高分子の構造の何がポイントトかについて、有機分子の内部回転と物性・ゴム弾性・ゲルの物性・超延伸などを例にとって説明する。弾性率・強度・伸び・衝撃強度などと高分子の構造がどう関係するかも示す。	同　上	西　敏夫 ゲスト： 長田　義仁（北海道大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	高分子の分子運動と物性	有機分子の分子運動と緩和現象・粘弾性・ガラス転移・結晶化と物性などについて、ＣＧ・実験を含めて、わかりやすく説明する。またシミュレーションのロケも取り入れながら解説する（具体的な例としては免震ゴムの性質など）	西　敏夫	西　敏夫 ゲスト： 土井　正男（名古屋大学教授）
14	高分子の応用	前回までの講義内容の応用として、高分子の成型加工・機能性高分子・導電性高分子・強誘電性高分子・生体適合性高分子・プラスチック光ファイバーなどについて、原理の説明、研究室・研究所のロケを行い、生活に密着している高分子の全体像を示す。	西　敏夫	西　敏夫 ゲスト： 小池　康博（慶応大学教授）
15	高分子と地球環境	高分子と社会とのかかわり、リサイクル、グリーンケミストリーなど、大きな枠組みでとらえたとき、我々は今後高分子をどう利用していくべきかを考えるように講義を締めくくる。生分解性ポリマー・生物を利用した高分子の生産などの現状と意味についてもふれる。	西　敏夫 佐伯　康治（元・新第一塩ビ（株）社長）	西　敏夫 佐伯　康治（元・新第一塩ビ（株）社長）

＝　物質の科学・分析（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：一國　雅巳（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

科学技術の進歩に伴って多種多様な化学分析法が開発されてきた。それに伴って化学分析に対する要求も高度化し、分析法の選択に当たっては、それぞれの分析法にどのような特徴があるかを知らなければならない。この講義の目標はそのための基礎知識を与えることにある。環境分析を例に具体的問題を取り扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	化学分析とはなにか	現代の化学分析は機器を用いた定量分析が主流である。化学分析に要求される条件として正確さ、迅速性、コストがある。機器の高度化、コンピュータの導入はこれらの要求を満足する上での当然の帰結であり、この進歩を支えているのが化学分析の基礎研究である。	一國　雅巳（東京工業大学名誉教授）	一國　雅巳（東京工業大学名誉教授）
2	容量分析	滴定を例に化学分析でどこまで正確な結果が得られるかを考察する。試薬の秤量、標準溶液の調製、滴定量の測定、終点の判定、妨害成分の共存など誤差の原因となる事項を個別的に検討する。終点の決定に機器分析を導入することの利点についても述べる。	同上	同上
3	重量分析	重量分析は正確さが要求されるときに用いられる分析法である。重量分析の核心部分は溶液中の化学種の沈殿分離にあるが、その研究は溶液中のイオン種の挙動の解明と沈殿分離法の開発に大きく貢献した。重量分析を原理と実用性の両面から解説する。	同上	同上
4	吸光光度分析	着色した溶液が光を吸収することを利用した吸光光度分析は古典的機器分析である。原理は簡単であるが、実用面では発色条件の最適化、検量線の作成、共存成分による妨害の除去などの問題がある。この分析法を例に機器分析の基本的事項について解説する。	一國雅巳 吉村　和久（九州大学大学院教授）	同上
5	原子吸光分析	金属元素の分析法として広く利用されている原子吸光分析の原理・応用とその限界について述べる。この分析法では試料中の成分の原子化と共存成分による干渉の除去が重要である。フレーム、電熱による原子化を比較し、この分析法の高感度化について解説する。	一國　雅巳	同上
6	発光分光分析	標題分析法の原理、その発展の歴史と現状について述べる。古典的アーク、スパーク光源を用いた分析、フレーム光源の実用化によるアルカリ金属定量、近年におけるプラズマ光源の導入が実現した高感度・多元素同時分析について解説する。	同上	同上
7	試料の採取と調製	与えられた試料が大量である場合、そこから全体を代表するように、一部分を取り出し、それを分析に適した形態、たとえば溶液に変える操作が必要となる。試料の採取における問題点、分析データ処理の方法、固体試料の溶解法について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	分離と濃縮	マトリックス成分から特定の成分を分離・濃縮する方法について述べる。沈殿、溶媒抽出は古典的分離法であるが、分離に関与する因子の影響を定量的に解析することができる。分離・濃縮法と定量法が密接に関連していることを例をあげて説明する。	一國　雅巳	一國　雅巳
9	電気分析	電気分析を物性特性（電気伝導度など）と電気化学反応を伴う測定（電位差、電流など）に分け、それぞれの方法の原理、特徴、装置、応用例について述べる。ガラス電極などのイオン選択電極を用いた電位差測定と他の分析法との組み合わせにも言及する。	同　上	同　上
10	質量分析	高感度分析法としての質量分析の重要性について述べる。試料をイオン化し、イオンを質量／電荷比に従って分離し、電気的に検出するまでの過程について説明する。目的に応じて使用される各種の質量分析計とその応用例（同位体存在比の測定など）を紹介する。	同　上	同　上
11	放射化分析	試料を中性子で照射し、生成した放射性核種が放射するγ線のエネルギーと強度を利用して定性、定量分析を行う方法、とくに機器中性子放射化分析について解説する。実際の操作を説明し、環境試料の分析で得られた結果を紹介する。	一國雅巳 松尾　基之（東京大学大学院助教授）	同　上
12	ガスクロマトグラフィー	分離手段としてのクロマトグラフィーの重要性を述べ、用語の解説を含めてその種類、原理、装置に関する基礎的事項を説明する。ガスクロマトグラフィーを例に試料中の成分の定性、定量法を示し、この方法の実用面における重要性を探る。	一國　雅巳	同　上
13	液体クロマトグラフィー	ガスクロマトグラフィーと比較しながら液体クロマトグラフィーの特徴を述べる。多様な検出器の利用、高速液体クロマトグラフィーによる分析の迅速化について解説する。無　機陰イオンの分析手段として重要なイオンクロマトグラフィーを紹介する。	同　上	同　上
14	状態分析	複雑な混合物中の特定の元素の存在状態を調べるための方法について解説する。非破壊的な方法として結晶相を調べるX線回折法、鉄の化学的状態を調べるメスバウアー分光法について述べる。複雑な混合物中の元素に適用される分別溶解法についても言及する。	一國　雅巳 松尾　基之	一國雅巳 松尾　基之（東京大学大学院助教授）
15	環境分析	環境試料を例に試料からできるだけ多くの化学的情報を取り出すための化学分析について考える。非破壊的分析の必要性を述べ、その例として蛍光X線分析その他の方法を紹介する。環境分析を通じて今後の化学分析のあるべき姿を議論する。	一國　雅巳	一國　雅巳

＝ 微生物機能に学ぶ化学（’０１）＝（R）

〔主任講師：別府　輝彦（日本大学教授）〕
〔主任講師：高木　正道（新潟薬科大学教授）〕

全体のねらい

地球上の最先住民である微生物の持つ遺伝子、構造、化学反応の多様性及びその地球エコシステム維持に働いている機構を理解し、更にこの多様性を発酵生産や環境保全に利用してきている人間の営みの歴史や実績を知る。そして通常あまり意識されない微生物化学反応の恩恵の大きさを納得し、微生物機能に学ぶ姿勢を身につける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論（1） 微生物細胞の構造と化学反応	進化の過程で、微生物の遺伝子の変化に伴って、細胞構造や細胞増殖機構などが多様化し、それが現存の微生物に見る多くの化学反応を可能にした。微生物分類学はこの多様性を整理しており、微生物の理解に重要である。	高木　正道（新潟薬科大学教授）	高木　正道（新潟薬科大学教授）
2	序論（2） 地球上での生命の誕生と歴史	45億年の地球の歴史の中で、化学進化により生物が誕生した。まず原核細胞である細菌が誕生、これが様々に進化し多様化して現在の細菌になってきたが、一方酵母・糸状菌などの真核微生物や高等動植物も誕生した。	同　上	同　上
3	序論（3） 微生物遺伝子の構造と機能及び進化と適応の機構	微生物の多様性の謎はその遺伝子に書き込まれている。その構造や働きを理解することによって、遺伝子の変化による進化の機構や遺伝子の発現制御による環境への適応制御機構をも理解することが可能になる。	同　上	同　上
4	地球エコシステム維持の機構（1） 炭素の循環と有機物の分解	地球は一つのエコシステムであるが、これを大切に維持しなければならない。この維持のためには、炭素の循環が正常に進行することが大変に重要である。この点で微生物の果たしている重要な役割を理解する必要がある。	同　上	同　上
5	地球エコシステム維持の機構（2） 変わり者の微生物達	微生物の仲間には、様々な代謝系を持つものがいる。無機物の代謝、光合成、窒素固定、特殊な構造の化合物の分解などの能力を持つこれら微生物により地球上での炭素、窒素、硫黄などの正常な循環系が維持されている。	同　上	同　上
6	地球エコシステム維持の機構（3） 極限環境微生物など	通常の生物が生存できないような極限環境の中で生育できる微生物が数多く見いだされてきている。これら微生物の働きが地球エコシステムの維持に果す役割も解明されつつあり、微生物の多様性の恩恵は予想以上に大きい。	同　上	同　上
7	発酵化学（1） 微生物利用学の歴史	人類が微生物の存在に気づいたのは17世紀であるが、それ以前から微生物の機能を利用する技術を発展させてきた。また、現在でも微生物の存在を意識せずに利用していることもある。これら歴史に学ぶことも多い。	別府　輝彦（日本大学教授）	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	発酵化学（2） アルコール発酵と有機酸発酵	現代の発酵工業においては、微生物の行う化学反応やその制御機構を十分に理解して利用している。最も古から生産されてきたアルコールや有機酸の発酵の化学的基礎と共に、微生物の管理や発酵産物の処理も重要である。	別府　輝彦	髙木　正道
9	発酵化学（3） アミノ酸発酵と核酸発酵	日本で大きく発展したアミノ酸や核酸の発酵生産は、微生物の生理や生化学の基礎研究に負うところが大きい。これら発酵の基礎と生産の現状とを理解し、新たな発酵分野の開発の将来を展望したい。	同　上	同　上
10	発酵化学（4） 抗生物質と酵素の生産、その他の発酵	これらも日本の発酵工業が世界に誇る分野である。抗生物質ではその生産微生物の特性や使用した抗生物質への耐性菌出現に対抗する新規抗生物質開発の努力を、酵素では生産した酵素の応用分野の開発の工夫を学びたい。	同　上	同　上
11	発酵化学（5） 遺伝子工学とその利用・蛋白質生産と代謝工学	遺伝子工学により、微生物の遺伝子を操作し、新規な機能を持つ微生物を計画的に育種することが可能になった。この技術を理解し、これが実際に利用されている分野、特に蛋白質の生産や代謝工学を学ぶ。	髙木　正道	同　上
12	環境保全の化学（1） 元素循環の人工的促進	地球エコシステム維持に微生物は重要な機能を果している。一方、人口の増加や人間活動の多様化によりこのエコシステムに異常が生じつつある。微生物の機能を利用し、元素循環を人工的に促進する必要が指摘されている。	中村　剛（三菱重工業株式会社基盤技術研究所）	同　上
13	環境保全の化学（2） 難分解性物質の分解	有機化学工業の発展により人類は多大の恩恵を受けた。しかし地球環境の悪化をも引き起こした。その重要な要因は、生物によって簡単には分解されない化合物の残留である。微生物を利用してこれを分解する必要がある。	同　上	同　上
14	環境保全の化学（3） 組換え生物の利用	遺伝子工学により生物の育種技術が大きく進歩した。この技術と微生物遺伝子とを組み合わせて用い、害虫や植物病原菌に耐性な遺伝子組換え作物を農薬の使用量を抑えながら生産するなどの環境に優しい農業が期待される。	髙木　正道	同　上
15	微生物と高等生物との共存と直接的な相互作用	人類や地球環境に欠くことのできない大切な微生物の中でも、ある種のものはヒト、動物、植物の病原菌となる。人類にとってこのような悪玉としての微生物との共存も、微生物との避けて通れない付き合いの一つである。	同　上	同　上

＝ 光と物質（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤　道也（金沢大学名誉教授）〕

全体のねらい

「我々は光の中に生きている」ということが出来る。これは我々が「光と物質の関わり」のもとで生きていることを意味している。本講義では、「光と分子の関わり」の基本的理論と、これから生まれたレーザーなど新しい研究方法による成果を講義する。またこれを基礎として、我々の生活に最も重要なテーマの先端的成果を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	光について	光の性質すなわち波長、振動数などについての概説と、光のエネルギーと分子のエネルギーとの対応を説明する。また、分子軌道と電子エネルギー準位と、ボルツマン分布からみた、各準位の分布について講義する。	伊藤　道也（金沢大学名誉教授）	伊藤　道也（金沢大学名誉教授）
2	光と分子の関わり	分子による光の吸収の原理と意義を説明する。光の吸収における遷移モーメントと吸収強度、フランク・コンドン原理と吸収スペクトルの振動構造などの一般的性質について講義する。	同　上	同　上
3	光により励起された分子の性質　Ⅰ	励起状態の分子がどのようにエネルギーを失うかを講義する。そのエネルギー消失の主な過程である蛍光スペクトルとその減衰過程について説明する。また蛍光スペクトルと蛍光励起スペクトルや吸収スペクトルとの鏡像関係について講義する。	同　上	同　上
4	光により励起された分子の性質　Ⅱ	芳香族化合物の三重項励起状態の生成と三重項状態分子の特異な性質について講義する。一重項や三重項励起状態分子のエネルギー移動とその簡単な理論、これを利用した増感現象などについて講義する。我々の生活に最も重要な、酸素分子や活性酸素などについても講義する。	同　上	同　上
5	光により励起された分子の性質　Ⅲ	電子励起状態における幾何構造の変化、とくに二つのπ電子系をつなぐ結合のねじれ、シス－トランス異性化反応、フォトクロミズムなどについて講義する。それと関連して化学発光（“ひずみ”のある分子の熱分解反応）や、生物発光（ほたる類やおわんくらげ）についての最近の研究成果も紹介する。	同　上	同　上
6	レーザーと超高速分光	光の化学現象における閃光光分解法から超高速レーザー分光への発展をたどる。レーザーの原理とレーザー光の性質を概説するとともに、ナノ秒からピコ秒フェムト秒パルスレーザーの現状を紹介する。超高速分光の基礎として、連続反応や励起状態の反応の解析法や、時間分解蛍光分光法について講義する。	同　上	同　上
7	レーザー光で光化学反応を追う　Ⅰ	超高速分光としての時間分解吸収スペクトルの測定法と解析法について概説する。これをもとに、光励起状態の反応の典型的な反応である励起状態プロトン移動について、代表的化合物を例として解説する。とくに、励起状態プロトン移動を、溶液中から超音速ジェット（冷却気相）中の水素結合クラスターの構造と反応について、最新の研究成果も含め講義する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	レーザー光で光化学反応を追う Ⅱ	芳香族化合物における分子間、分子内励起状態電子移動を超高速分光の立場から概説する。とくに励起状態分子錯体における電子移動を、溶液中と超音速ジェット中のファンデルワールス錯体やクラスター中の電子移動について講義する。さらに、励起状態電子移動に関連する反応に対する、外部磁場効果について最近の現状も紹介する。	伊藤 道也	伊藤 道也
9	光合成 Ⅰ	地球上で最大の光反応である植物の光合成をとりあげ、その人間生活における意義を述べ、光合成体の構造と機能について講義する。光合成生物の進化についても述べる。	吉原經太郎（北陸先端科学技術大学院大学副学長）	吉原經太郎（北陸先端科学技術大学院大学副学長）
10	光合成 Ⅱ	光合成による太陽エネルギーの補足と、クロロフィル間のエネルギー移動がいかに効率的に起っているか、電子リレー系における電子移動についての先端的成果を講義する。 これらの理解の基礎として電子移動の理論を解説する。	同上	同上
11	視覚：高効率の光情報変換系	目の中で光を最初に吸収するタンパク質（視物質）の分子構造や光化学的な性質を基に、我々の視覚がなぜ高感度なのか、なぜ色を見ることが出来るのか、また、明るさの極端に違うところでも、なぜ物を見ることが出来るのかを講義する。	七田 芳則（京都大学教授）	七田 芳則（京都大学教授）
12	光と環境科学	地球規模の大気環境問題から都市大気汚染まで、大気環境の多くの問題は太陽光による光化学反応や光化学過程に関係している。本講では光化学と大気環境問題の関わりについて講義する。	鷲田 伸明（京都大学教授）	鷲田 伸明（京都大学教授）
13	太陽光紫外線とからだ	太陽光短波長紫外線（ＵＶＢ）の我々のからだに対する影響を講義する。すなわち、細胞致死、突然変異誘発、ＤＮＡ損傷の波長依存性を講義する。さらに紫外線損傷と修復の分子機構の最近の進歩を述べる。	二階堂 修（金沢大学教授）	二階堂 修（金沢大学教授）
14	光触媒反応	固体表面の光触媒効果が注目されている。本講では、酸化還元反応の光誘起効果をとりあげる。具体的には、チタン表面における特異な性質、すなわち異常な親水性や親油性の最近の研究とその利用について講義する。	橋本 和仁（東京大学教授）	橋本 和仁（東京大学教授）
15	光と磁性	有機化合物材料をベースとした磁性の研究が盛んになって来ている。本講では、有機金属錯体の磁性特性の光制御について講義する。とくにカラー磁性体の光制御、光誘起強磁性体について講義する。	同上	同上

＝ 植物の生理（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山田　晃弘（東京大学名誉教授）〕
〔主任講師：菊山　宗広（新潟大学教授）　〕

全体のねらい

高等植物に注目し、植物という生命体の特徴を学ぶ。「植物の営み」「植物の成育」そして「植物のかたちづくり」にどのような特徴がみられるだろうか。さらに、植物と他の生物との関係、植物と環境の問題に照明をあてる。そこに提起された現象のしくみを生命体の基本となる遺伝子の発現と発現分子のはたらきの面からも考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	植物の特徴	植物は動物や微生物とは異なった生命体として地球上で進化し、高等植物はその頂点に立っている。移動性を失い、統御中枢を持たない高等植物がどのように成育し、子孫を繁栄させるかを学び、高等植物の植物界における位置づけを考察する。	山田　晃弘（東京大学名誉教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）	山田　晃弘（東京大学名誉教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）
2	植物の細胞と体制	植物体を組み立てている生命の基本単位は細胞である。この植物細胞内には、細胞核の他、色素体、ミトコンドリアなど様々な小器官からなる細胞社会がある。この植物細胞社会がどのように誕生し、発展したかについて述べる。	黒岩　常祥（東京大学教授）	黒岩　常祥（東京大学教授）
3	光合成　(1) 光エネルギーの利用	植物は太陽光を生物が利用できるかたちの化学エネルギーに変える能力を持っている。この章では、葉緑体で光合成色素に吸収された光エネルギーがＮＡＤＰＨやＡＴＰに変換される過程について述べる。	加藤　栄（東京大学名誉教授）	加藤　栄（東京大学名誉教授）
4	光合成（2） CO_2固定反応と環境	光合成でCO_2が固定される経路（C_3およびC_4光合成と光呼吸）について学び、ついで、光合成に対する環境要因（光、水、CO_2温度等）の影響について考察する。	同　上	同　上
5	植物の代謝	植物は、植物に依存して生活する動物や微生物では見られない特有の代謝を行っている。それらは植物細胞にのみ存在する葉緑体の炭素代謝、窒素代謝が中心となり、さらに、2次代謝へ発展している。これらの代謝経路を考察する。	山田　晃弘	山田　晃弘
6	物質輸送	植物の代謝は、体内のあらゆる場所で進行し、これに伴って、物質の移動が、細胞内ばかりでなく、細胞間、組織間そして器官の間でも起る。植物体内でおこる物質移動の現象とそのしくみを学ぶ。	菊山　宗弘	菊山　宗弘
7	種子から種子へ	高等植物は、種子の発芽に始まり、栄養成長期を経て、生殖成長期に入り、次世代の種子を形成すると、老化して、生活環を完成する。植物の生活環がどのように進行し、どのような機構によって調節されているかを学ぶ。	保尊　隆亨（大阪市立大学教授）	保尊　隆亨（大阪市立大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ホルモンによる調節	高等植物の生活環の進行は体内で合成される植物ホルモンのはたらきによって調節されている。はたらきの異なる植物ホルモンがどのように植物の成育を調節しているかを学ぶ。	神阪盛一郎（富山大学教授）	神阪盛一郎（富山大学教授）
9	環境による調節	植物は、種子発芽後の栄養成長、生殖成長の過程で、光、温度、重力等の環境要因により調節される。環境要因を受容し、それから遺伝子発現に至る情報伝達の過程、さらに、この過程とホルモンのはたらきとの関係について学ぶ。	蓮沼仰嗣（横浜市立大学教授）	蓮沼仰嗣（横浜市立大学教授）
10	細胞形態形成	植物の茎が細長いのは、茎の細胞が細長いからである。茎の細胞が細長いのは、茎の細胞が茎の軸方向に偏った伸張をするからである。細胞の形の決定に重要な役割を果たしている細胞伸張方向の調節機構について学ぶ。	柴岡弘郎（大阪大学名誉教授）	柴岡弘郎（大阪大学名誉教授）
11	器官形成	葉、茎、根、花弁、雄しべ、などの器官では、さまざまに特殊化した細胞がきちんと並んでおり、まとまった機能を持っている。この章では、器官の成り立ちと、それを支える遺伝子のはたらきについて述べる。	岡田清孝（京都大学教授）	岡田清孝（京都大学教授）
12	分化全能性	植物の細胞は分化の柔軟性をもつ。植物の体細胞は適当な条件下で個体へと分化し、分化した細胞は別種の細胞へ比較的容易に分化することができる。このような植物の分化の能力について学ぶ。	福田裕穂（東京大学教授）	福田裕穂（東京大学教授）
13	植物と微生物の相互作用	植物は多様な微生物の囲まれて生活している。免疫系をもたない植物はどのようにして微生物の感染を防いでいるのだろうか。その一方で、豆科植物と根粒菌のように親密な関係を営んでいる場合もある。植物と微生物の相互作用の分子機構を学ぶ。	庄野邦彦（日本女子大学教授）	庄野邦彦（日本女子大学教授）
14	生態系のなかの植物	野外にはさまざまな植物が生存している。比較生理生態学はこの現象を解明する有力な武器となる。その代表例を紹介する。また、個体植物の生理のしくみをもとに生態系における植物群の生理に照明をあてる。	寺島一郎（大阪大学教授）	寺島一郎（大阪大学教授）
15	植物と人間社会	生態系の要として地球上に繁栄する植物とヒト社会とはどのような関係にあるのだろうか。これまでに、ヒトは植物を利用して生活し、さらに、一層の利益を植物から引き出そうとしている。その展望とそれに伴う警告を生物学の視点から考える。	菊山宗弘 山田晃弘	菊山宗弘 山田晃弘

＝ 生態学（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：藤井　宏一（筑波大学教授）〕

全体のねらい

生物群集の構造は個体、個体群、群集のレベルからなっている。本講義では各レベルでの、生物と無機的環境、生物と生物との関係を理論的に、そして具体例をあげながら講義し、生物集団の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびそれらの動態についての理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生態学とは	生態学は生物学の１分野として存在し、その中心課題は生物の分布と個体数の変動を理解することにある。生態学の成り立ちと歴史、現在の研究の中心課題、人間生活との関わりなどについて述べる。	藤井　宏一（筑波大学教授）	藤井　宏一（筑波大学教授）
2	環境と生態系	生物の活動は、生活場所の地学的条件で決まる無機的環境に大きく規制される。生物の活動に大きく影響する物理・化学的要因ならびに生物にとっての生活必要資源について解説し、あわせて気候など無機的環境条件に対する生物の応答について考える。	同　上	同　上
3	光合成－葉から群落へ	生態系における一次生産者の役割を担う植物の光合成と微気象・環境要因によるその制御や、環境への生理的・形態的馴化について述べる。一枚の葉の光合成から群落の物質生産までのスケールアップについても触れる。	鷲谷いづみ（東京大学教授）	鷲谷いづみ（東京大学教授）
4	消費者と食物網	すべての動物と大半の微生物は緑色植物が生産した有機物を直接・間接に消費して生活する。食う－食われるの関係で網目状に結ばれている生物どうしの関係について考え、この網の構造とそれを構成する物質とエネルギーの流れに見られる法則を探る。	藤井　宏一	藤井　宏一
5	物質とエネルギーの流れ	生物世界と非生物世界とを包含する複雑な物質とエネルギーの流れの場を生態系と呼ぶ。地球全体はひとつの生態系複合である。生物を構成する主要な元素に着目して、系内外におけるそれらの挙動を追うとともに、系を出入りするエネルギーの流れをたどる。	同　上	同　上
6	さまざまな生態系	生物間相互作用を介した生物群集／生態系のなりたち、大きな空間的スケールで捉えた生態系として世界のバイオーム、日本のバイオームについて述べる。また、いくつかの代表的な生態系を取り上げてその特徴を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
7	自然選択と適応	自然選択にもとづく進化、それによってもたらされる適応について述べる。いくつかの具体的な適応の例を紹介するとともに、理論的なアプローチの有効性についても述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	植物の生活史戦略	植物の生活史の進化の主要な選択圧について考察し、C－R－Sモデルを紹介する。さらに、植物の栄養成長期の適応として、可塑的な形態形成と被食適応について述べる。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
9	植物の繁殖戦略	植物にみられるきわめて多様な種子繁殖の様式について、開花・授粉、結実、種子分散、種子の休眠・発芽、実生確立のそれぞれの生活史ステージごとに概説し、それぞれの生態的意義について考える。	同上	同上
10	個体数の成長と調節	生物集団（個体群）の個体数は、有限の環境においては無限に増加することはできない。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、まずその機構について理論的に述べ、ついで実例を見ながら密度効果、”なわばり”などについて論じる。	藤井　宏一	藤井　宏一
11	種間競争	同じ資源を利用する異なった生物間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か、まずその機構について理論的に取り扱い、さらに種間競争の結果として起こる諸現象（”すみわけ”、形質置換など）について、観察例を用いて説明する。	同上	同上
12	食うものと食われるものの関係	食うものと食われるものの関係（捕食－被食関係）は、生物間の相互作用の中でも一番重要な関係のひとつである。まず捕食－被食関係にある生物種の動態の理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食－被食関係のはたす役割について説明する。	同上	同上
13	動物の生存戦略	生物はなんのために存在するのか、またその目的を達成するために、無機的環境、そして他の生物に対して如何に適応してきたかについて、まず理論的考察を行ない、ついで動物の採餌戦略、繁殖戦略などを例にとりながら説明する。	同上	同上
14	生物多様性の保全	現代の生物多様性の急速な喪失の主要な原因は、乱獲・過剰採集とともに生育場所の分断・孤立化および生物学的侵入といった「生態的」なプロセスである。ここでは生物多様性の保全のための生態学を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
15	生態学と人間	これまでに学んできた生物の生き方の知識と、我々人間の今後の生存との関わりを議論する。生態学の知識が、人口問題、食料問題、環境汚染など現在我々が直面する諸問題の解決にどんな示唆を与えられるのか、どのように貢献できるのかを論じる。	藤井　宏一	藤井　宏一

＝分子生物学　（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川　統（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球上に棲む生物たちの大きさ、形、行動はきわめて多様であるが、彼らの生命は共通の原理に基づいて営まれている。その共通原理を着々と解明しつつあるのが分子生物学である。本講義は、分子生物学の成果を平易に解説することを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命現象と分子生物学	生物学にはさまざまな研究分野がある。その中で、生物の営みを分子と分子の相互作用として説明しようとする分野が分子生物学である。ここでは、おもに、分子生物学とその他の生物学諸分野の関係について考える。	石川　統（放送大学教授）	石川　統（放送大学教授）
2	生体を構成する分子	生命現象は、細胞や生体を構成するさまざまな分子の働きによって支えられている。細胞の内外に存在する分子について述べ、核酸、タンパク質、糖質、脂質など生命活動に特有な生体高分子を中心に、その構造と機能を概説する。	藤原　晴彦（東京大学助教授）	藤原　晴彦（東京大学助教授）
3	タンパク質と酵素	生体を構成する高分子の代表であるタンパク質は、生体の構造をつくるだけでなく、酵素としてすべての生体反応を触媒したり、遺伝子発現の調節や外敵からの防御などに重要な役割を果たしている。このタンパク質の構造と機能の関係を解説する。	石浦　章一（東京大学教授）	石浦　章一（東京大学教授）
4	遺伝と遺伝子	遺伝現象の根本にある遺伝子の存在の予測、遺伝子の化学的本体がＤＮＡであることの発見、さらに、ＤＮＡの三次元構造の解明など、今日の分子生物学の基礎となった研究とその周辺を概説する。	東江　昭夫（東京大学教授）	東江　昭夫（東京大学教授）
5	ＤＮＡとＲＮＡ	遺伝情報の発現にさいしてのＤＮＡとＲＮＡの役割分担について解説する。機能的ＲＮＡの種類と作用を整理し、あまり知られていないＲＮＡの側面も紹介する。また、ＲＮＡを遺伝子とするウイルスの複製機構についても述べる。	同　上	同　上
6	ＤＮＡの複製	原核生物と真核生物の中から適当な数種を選び、ＤＮＡの複製のしくみを解説する。細胞周期とどのように連動して制御されているか、また、ＤＮＡをめぐる動的な代謝がＤＮＡ複製の正確さを保証していることについても言及する。	同　上	同　上
7	遺伝情報とは何か	ＤＮＡが発見されてから、それが遺伝子の本体であることがわかるまで、ほぼ80年かかった。どのようにして、それが明らかにされたかを紹介する。また、遺伝暗号とは何であり、それがどのようにしてタンパク質の性質を決めているかを解説する。	石川　統	石川　統

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遺伝情報の発現1 転写	遺伝情報が細胞内で利用されるためには、ＤＮＡがいったんＲＮＡにコピーされる必要がある。この過程は転写と呼ばれ、遺伝情報の発現量や発現時期を調節する重要なステップである、転写機構、転写に関わる酵素、転写を調節する因子などについて述べる。	藤原　晴彦	藤原　晴彦
9	遺伝情報の発現2 プロセシング	真核細胞では、転写されたＲＮＡがそのまま働くことは少なく、核の中でさまざまな修飾や加工（プロセシング）を受ける。スプライシングやキャッピングなどの真核細胞に特有なｍＲＮＡのプロセシング、さらにｒＲＮＡやｔＲＮＡのプロセシングのしくみについて解説する。	同　上	同　上
10	遺伝情報の発現3 翻訳	翻訳は、遺伝情報がタンパク質に写しとられる最後の過程であり、この正確さが生命の源になっている。ｔＲＮＡをかいしてリボソーム上でｍＲＮＡの情報に従ってアミノ酸がつながれていく機構を、原核生物と真核生物の違いをもとに解説する。	石浦　章一	石浦　章一
11	遺伝子操作	すべての生物がもつ遺伝情報の発現にいたるしくみに基づいて行われる遺伝子操作技術およびその研究を紹介する。ある生物の遺伝子ＤＮＡを、ベクターというＤＮＡをかいして他の生物ないしはもとの生物へ導入すると、増殖や発現をさせることができる。	渡辺雄一郎（東京大学助教授）	渡辺雄一郎（東京大学助教授）
12	突然変異と分子進化	ふつう遺伝子は正確に子孫に伝えられるが、まれにはさまざまの原因で、その構造が変わる突然変異が起こることがある。このような変異が選択により、あるいは偶然に、１つの生物集団に拡がる現象が分子からみた進化である。これらのしくみについて解説する。	石川　統	石川　統
13	タンパク質工学	現代では、遺伝子を改変することによって、思うままにタンパク質の構造と機能を変化させることができるようになった。ここでは、寿命や基質特異性の改変などの実際の応用例をもとに、タンパク質改変技術と得られた結果を紹介し、将来を展望する。	石浦　章一	石浦　章一
14	ゲノムとゲノミックス	生物がもつ遺伝情報すべてを解読する研究が進んでいる。すべてが解読されると、その生物の何がわかるのであろうか。遺伝情報がいつ、どのような時期に発現されるかなどの総合的な解析について、今後必要とされるゲノミックスの考え方を紹介する。	渡辺雄一郎	渡辺雄一郎
15	分子生物学と社会	ヒトゲノムがほぼすべて読みとられ、私たちの身体のブループリントも解読できるようになると、遺伝子(胎児)診断に伴う治療法の選択、寿命予知と介護など、社会と関わる問題も多くなった。これら生命科学の将来と私たちの未来について対談する。	石川　統 石浦　章一	石浦　章一 石川　統

＝ 生物の進化と多様性（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：森脇　和郎（理化学研究所筑波研究所バイオリソース総合センター長）〕
〔主任講師：岩槻　邦男（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の示す性質には、すべての生物に共通の普遍的な性質もあるが、数多くの種に分化している生物の種が個別に示す多様な性質も知られている。生物の示す多様性は、30数億年に亘る生物の進化の歴史を刻んだものであり、この多様な生物の姿を系統と進化を軸にして理解しようとするのがこの科目の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物多様性と生物の進化	地球上に150万種認知されており、実際は千万を超えるかも知れないと推定されるほど多くの種に分化している生物の多様性とは何か。歴史的な存在である生物多様性の由来を進化の視点で総説し、主な分類体系を紹介する。	岩槻　邦男（放送大学教授）	岩槻　邦男（放送大学教授）
2	分子レベルの進化と中立説	表現型レベルの進化は生存と繁殖に有利な突然変異の蓄積によって起こり、分子レベルでの進化は主に自然選択に中立な突然変異遺伝子が偶然的に種内に蓄積することによって起こる。進化学における中立説の意義を講ずる。	高畑　尚之（総合研究大学院大学副学長）	高畑　尚之（総合研究大学院大学副学長）
3	生物の分子系統樹	脊椎動物の個体発生をモデルとして作られた古典的な系統樹と並んで、近年研究が進んでいる分子レベル、特にタンパク質のアミノ酸配列や核酸の塩基配列における差異を指標に動物の起源と系統進化を明らかにする手法を紹介する。	堀　寛（名古屋大学教授）	堀　寛（名古屋大学教授）
4	動物ゲノム進化の道筋	全生物の究極の祖先は、原核生物シアノバクテリウムであったが、動物細胞は、その先祖と思われる原真核動物以来、各種細菌の細胞質内寄生によって小器官を獲得し、それらの細菌の有効な遺伝子を核内の染色体上に集めることによって進化を続けてきた。	大野　乾（元Beckman Research Indstitute of the City of Hope）	
5	動物の系統樹	ダーウィン以来生物が進化することが広く受け入れられるようになり、この視点をふまえた系統樹が作られている。系統分類学の立場から、現在の多様な動物たちの進化の過程と起源を概説する。	白山　義久（京都大学教授）	白山　義久（京都大学教授）
6	化石が語る動物の進化	過去の生物の記録である化石を通じて、動物の巨視的な形態的進化や多様性を紹介する。生物が地球環境の変化や共存する他の生物種との相互作用の中で、時間とともに進化してきたことを、主に脊椎動物を例に講ずる。	冨田　幸光（国立科学博物館室長）	冨田　幸光（国立科学博物館室長）
7	動物のかたちの起源と進化	多細胞動物の体づくりはすべて１個の細胞である受精卵から始まる。したがって、動物の形の起源と進化を考えるためには発生のメカニズムを理解することが必須である。最近になって、動物の体づくりを制御する遺伝子の働きが明らかになりだしている。そうした遺伝子の働きから体制の進化に至るまでを概説する。	佐藤　矩行（京都大学教授）	佐藤　矩行（京都大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	種の遺伝的分化	種分化は生物進化の基本となる過程である。生物学的「種」の概念に準拠すれば、種の遺伝子構成には特異性がある。遺伝子分析のもっとも進んだ哺乳動物であるマウスを対象に、種の遺伝的分化の実体を探る。	森脇　和郎（理化学研究所筑波研究所バイオリソース総合センター長）	森脇　和郎（理化学研究所筑波研究所バイオリソース総合センター長）
9	陸上植物の種分化	陸上に生活する植物は20数万種に分化しているが、そのためには特有の多様化の過程を踏んでいる。遺伝子突然変異だけでなく、染色体突然変異が、植物の種形成にどのように現れ、具体化されているかを、実際の例を挙げながら概説する。	伊藤　元己（東京大学助教授）	伊藤　元己（東京大学助教授）
10	藻類の系統と進化	真核生物の進化は具体的にどのような過程を経ていたか、新たに真核生物となった藻類の多様性はどのように形成され、維持されているか。現生の藻類の多様性の基づく研究成果から、藻類の系統と進化を紹介する。	井上　勲（筑波大学教授）	井上　勲（筑波大学教授）
11	陸上植物の起源と多様化	陸上植物は4億年あまり前に、緑藻類の１群が、陸上に進出してきたものである。植物が陸上へ進出してくる背景と、陸上へ進出してどのように多様化したのか、陸上植物の系統を、葉の形成を具体的な指標としながら紹介する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
12	種子植物の系統と進化	現生の陸上植物の多様性の大部分は種子植物で占められる。陸上植物のうちから、種子植物はどのような過程を経て形成され、何故このように多様化することができたのか。種子植物の起源と多様化について、とりわけ花と実の進化を紹介する。	西田　治文（中央大学教授）	西田　治文（中央大学教授）
13	菌類の系統と進化	菌類は動物でも植物でもない生物の世界の第３の群を作る。菌類の起源と進化について、現生の菌類の多様性を整理しつつ、その進化の過程を追跡する。菌界にまとめられる真菌類と、変形菌類、ツボカビ類、卵菌類などの原生生物との比較も試みる。	土居　祥允（国立科学博物館室長）	土居　祥允（国立科学博物館室長）
14	人類の起源と進化	ヒトが類人猿と共通な祖先から進化してきたことは疑う余地はない。しかし、いつ、どのようにして今日のヒトができたかは充分に解明されてはいない。化石と分子時計の両面から進められているこの問題へのアプローチを解説する。	長谷川政美（統計数理研究所教授）	長谷川政美（統計数理研究所教授）
15	種の多様化と滅失	自然界における主の分化の実態はすでに紹介されているが、種形成と逆に、種には絶滅が必然である。さらに、ヒトの営為が地球環境を変貌させたことによって、種の絶滅は新たな問題を生み出している。種の形成と滅失について概説する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男

＝ 動物の行動と社会（’００）＝（ＴＶ）

〔主任講師：日高　敏隆（滋賀県立大学名誉教授）〕

全体のねらい

動物たちは、ローレンツ時代に考えられていたように集団や種を維持するためにではなく、それぞれの個体がそれぞれ自分の適応度を高めようと努力しているのだとういう見かたが、研究者たちの基本的認識になった。そうなると、動物たちの行動も動物たちの社会も、これまでとはまったく違ったものとして、われわれの目に映ってくる。われわれ人間自身の行動や社会を見る目も、おのずと変わってくる。この講義では、この新しい視点から“動物の行動と社会”をとらえてみようと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動物行動学――エソロジーとは	エソロジーの初まり 遺伝的組みこみ いくつかの例 遺伝的パターンとリリーサー	日高　敏隆（滋賀県立大学名誉教授）	日高　敏隆（滋賀県立大学名誉教授）
2	エソロジーの基本概念	行動の生得的解発機構　ＩＲＭ エソロジーの4つの柱 目標は種族維持か？ 適応度という概念 適応度増大	同　上	同　上
3	動物の外界認識	動物によって異なる外界認知 環世界・Umwelt 意味づけられた空間や時間 意思決定 環世界と動物の保全	櫻井　一彦（成城大学短期大学部助教授）	櫻井　一彦（成城大学短期大学部助教授）
4	ディスプレーとコミュニケーション	信号とディスプレー 信号が伝える内容 ディスプレーの由来 儀式化 信号の進化 信号のねらい	同　上	同　上
5	行動のおこるしくみ――神経行動学	神経行動学（ニューロエソロジー） 動物の色覚 渡り鳥の太陽コンパス 昆虫の太陽コンパスと偏光受容 生物時計の役割	沼田　英治（大阪市立大学教授）	沼田　英治（大阪市立大学教授）
6	行動の進化と遺伝	共通祖先からの由来 行動の進化的変化 ダーウィンの自然淘汰説 行動の遺伝	近　雅博（滋賀県立大学助教授）	近　雅博（滋賀県立大学助教授）
7	適応戦略	戦略とは 最適戦略 ESS（進化的に安定な戦略）	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行動の多型	戦術と戦略 代替戦略とは 頻度依存の代替戦略 地位依存の代替戦略	中嶋　康裕（宮城大学教授）	中嶋　康裕（宮城大学教授）
9	利他行動	利他行動とは 包括適応度 互恵的行動 囚人のジレンマ しっぺがえし戦略	近　雅博	近　雅博
10	社会構造	群れとなわばり 群れの経済学 なわばりとは何か なわばりの経済学	中嶋　康裕	中嶋　康裕
11	配偶システム	配偶システムとは 子育てと配偶システム 一夫一妻の社会 一夫多妻の社会 一妻多夫の社会 真社会性動物	同　上	同　上
12	性淘汰	性淘汰と自然淘汰 雄どうしの争い（性内淘汰） 配偶者選択（性間淘汰） 魅力的だと得をする？ なぜ雌はより好みするか	同　上	同　上
13	家族とそのジレンマ	家族内の矛盾 親子の対立 兄弟の対立 親と子のかけひき	同　上	同　上
14	学習とプログラム	遺伝か学習か？ 学習の遺伝的プログラム プログラムは種によってちがう 刷りこみ プログラムとその具体化	日高　敏隆	日高　敏隆
15	エソロジーから見た新しい視点	生態学・心理学との関係 競争と調和・共生 人間という動物 老い・老化 遺伝的プログラムと社会・文化	同　上	同　上

＝ 細胞生物学（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川 春律（群馬大学教授）〕
〔主任講師：藤原 敬己（ロチェスター大学教授）〕

全体のねらい

生命はさまざまな分子が特殊な環境の中で反応しあって成り立っている。細胞は生命現象が認められる最小単位で、生命維持に必要なすべての分子を持っている。それらの分子の多くは細胞内で無秩序な溶液状態としてあるのではなく、いろいろな構造に組み込まれている。ここでは細胞の構造やはたらき、それらを支える生命の科学について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	細胞とは	細胞は生物を構成する基本単位であり、生命の最小単位でもある。生命の始まりは、35億年前にさかのぼる。無機質から作られた有機質が地球の原始の海で小塊を作り、生命を持つ細胞へと進化した。細胞の種類や、基本的形態と機能から細胞像をイメージする。	石川 春律（群馬大学教授） 佐藤 英美（名古屋大学名誉教授） 藤原 敬己（ロチェスター大学教授）	石川 春律（群馬大学教授） 佐藤 英美（名古屋大学名誉教授） 藤原 敬己（ロチェスター大学教授）
2	生命を狙う分子	生命はさまざまな分子間の複雑な反応により維持されるが、細胞は生命の最小単位であり、それに必要な分子を備えている。細胞を構成する主な分子の基本的性質や機能、それらが形成する細胞の構造などについて学び、細胞の分子構築をイメージする。	藤原敬己	藤原敬己
3	細胞のしらべ方	細胞の構造や機能、生命現象の機構などを研究するためにはいろいろな方法が用いられる。顕微鏡による細胞の観察、細胞の培養法、電気泳動法、遺伝子操作法など、細胞生物学分野の研究によく使われる解析技術について、その基本原理と得られる情報について学ぶ。	尾張部克志（名古屋大学助教授）	尾張部克志（名古屋大学助教授）
4	細胞膜のはたらき	細胞表面には外界から境する細胞膜がある。細胞膜は、隔壁としての役割、物質の透過や輸送、取り込み、分泌、細胞同士の接着やコミニケーション、情報の受容など多様な機能を果たす。細胞膜の構造や細胞表面の特殊化について機能と関連させて学ぶ。	石川春律	石川春律
5	細胞内小器官のはたらき	細胞内部にも細胞膜と同じような膜が存在し、動物の器官のような働きをする構造を作っている。これらの構造は細胞小器官と呼ばれ、小胞体、ゴルジ装置、リソソーム、ペロキシソーム、ミトコンドリア、葉緑体がある。それぞれの形態的特徴と機能について学ぶ。	同上	同上
6	細胞を支える骨組	細胞質には蛋白質から作られた線維成分が存在し、細胞骨格と総称される。主として微小管、アクチンフィラメント、中間径フィラメントの３種類からなり、細胞の形を支える骨組みや、細胞の運動装置など、多様な役割を果たす。ここでは細胞骨格の構造と機能について学ぶ。	同上	同上
7	細胞の動き	筋細胞は収縮を目的に分化した細胞で、細胞質内は収縮装置で満たされている。筋細胞以外の細胞にも運動能があり、細胞全体の移動や細胞内の動きなど、さまざまな運動がみられる。いろいろな細胞の収縮や運動を引き起こす構造、動きの分子機構などについて学ぶ。	尾張部克志	尾張部克志

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	細胞分裂と染色体	生物の発生や成長は、１個の細胞が分裂して２個になることから始まる。細胞分裂には核内で複製したDNAが凝集して染色体を形成し、紡錘体によって正確に娘細胞に分配される。ここでは紡錘体の構造や動態、染色体の構造、数、形状などについて学ぶ。	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）
9	遺伝のしくみとDNA	遺伝のしくみはメンデルの法則を基本とする。これに合わない現象として遺伝子の連鎖、連鎖を破る遺伝子の乗り換えなどがある。その頻度を利用して染色体地図が作成される。その遺伝子の本体はDNAでる。ここではDNAの構造、タンパク質の合成のしくみなどについて学ぶ。	黒田行昭	黒田行昭
10	生殖と発生	生殖細胞形成、増殖、成熟、そしてそれに引き続く受精、発生という一連の変化は、真核細胞に共通するパターンである。この章では卵や精子の形成過程と構造変化、受精の分子機構、初期発生と変態のしくみなどについて学ぶ。	佐藤英美	佐藤英美
11	細胞内情報伝達	生体の統合的制御には神経に加え、ホルモンなどいろいろな細胞が産生する生理活性物質による液性制御機構が働く。こうした液性情報が特定の細胞にだけ働く機構について、細胞にある受容体、その特異性、細胞内情報伝達などの機構を中心に学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
12	細胞間情報伝達－神経のはたらき	神経細胞は情報の伝達や処理を行う特殊な細胞で、その性質は遺伝的に与えられているが、環境によって変化する性質（可塑性）としない性質がある。神経細胞が個体の生命の営みの情報処理を行う脳の主要構成要素であるという立場から、その特殊性について学ぶ。	松本元（理化学研究所グループディレクター）	松本元（理化学研究所グループディレクター）
13	生体防御－免疫のはたらき	生物は環境中の多くの危険因子から自己を守るため、さまざまな防御機構を備えている。免疫は最も高度に発達した、いわば最後の砦ともいえる生体防御機構である。この機構の主役である抗体の産生や構造、体液性免疫と細胞性免疫のしくみなどについて学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
14	細胞の変異とがん	生物の遺伝子ＤＮＡは安定なものであるが、化学物質や放射線など環境因子によって突然変異が起こる。これが遺伝病や老化、がんなどの原因となる。がんは正常細胞が多くの段階を経て生じるが、特にがん遺伝子やがん抑制遺伝子の関与が最近明らかになった。	黒田行昭	黒田行昭
15	細胞の老化と死	個体の老化や死には、個体を構成する個々の細胞の老化や加齢が深く関わっている。これら細胞のＤＮＡにプログラムされた遺伝情報によるか、または環境因子によるＤＮＡ損傷の蓄積によると考えられる。その証拠として老化遺伝子やテロメアの存在が見出された。	佐藤英美 黒田行昭	佐藤英美 黒田行昭

＝ 太陽系の科学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小尾　信彌（元放送大学長）〕
〔主任講師：吉岡　一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や個々の天体の性質等について、最近の惑星探査などによる研究成果もふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史	古代やギリシア時代から太陽系天文学の発展の歴史を概観し、最近の探査機による成果や研究にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。全15回の講義の展開についても述べる。	小尾　信彌（元放送大学長）	小尾　信彌（元放送大学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等の特徴について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同　上	同　上
3	地球と月の運動	自転や公転およびそれにかかわる地球の運動の様子を、それらが解明されてきた歴史とともに学ぶ。さらに、地球のまわりの月の運動についても学ぶ。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
4	天球座標と時間・時刻	天球上での位置を表わす天球座標および時刻の決定は、地球の自転や公転と深くかかわっている。ここでは、これらの決定がどのようにして行われ、どのような種類の天球座標や時間・時刻が定められているかを学ぶ。	同　上	同　上
5	惑星の視運動と月の現象	天球上の惑星の動きすなわち視運動は、太陽系のモデルの観測的基礎となってきた。ここでは、惑星の視運動がどのように説明されるかについて学ぶ。また、月の運動に関連して、日・月食などの現象についても学ぶ。	同　上	同　上
6	惑星運動の法則	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀　源一郎（富山国際大学教授）	堀　源一郎（富山国際大学教授）
7	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは、面積速度の法則（第2法則）について、その諸側面を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として、楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	堀　源一郎	堀　源一郎
9	第3法則と万有引力	万有引力の法則からは、2体の運動について、公転の平均距離と公転周期の間にいわゆる第3法則が導かれる。ここでは、その導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	同　上	同　上
10	惑星以外の天体運動	地球をまわる月やより一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上	同　上
11	摂動	現実の太陽系においては、惑星の衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降に発展した摂動について学ぶ。	同　上	同　上
12	地球型惑星	水星、金星、地球、火星さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理的な性質を学ぶ。	松井　孝典（東京大学教授）	松井　孝典（東京大学教授）
13	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の結果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。	同　上	同　上
14	太陽系の小天体	太陽系には、惑星のような比較的大型の天体の他に火星と木星の軌道内を公転する非常に多数の小惑星や、さらに数の多い彗星などの小天体が知られている。これらの小天体についても、最近の分光観測や直接探査により多くの知見が得られている。これら小天体について学ぶ。	同　上	同　上
15	太陽系の起源	太陽系の諸天体は、およそ46億年以前に銀河系内の星間雲の中で太陽が形成されるのに伴って誕生した。惑星をはじめとする太陽系の天体の誕生については18世紀中ごろ以来多くの説が出されている。ここでは最近の考え方を中心に太陽系の起源について学ぶ。	同　上	同　上

＝ 宇宙の進化（’０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：吉岡　　一　男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙にはどのような天体があるのだろうか。それらはどのようにして、われわれが現在見るような宇宙の構造を形成するようになったのであろうか。この科目ではその進化のドラマを語る。それらは実証的自然科学としての探求によって得られたものである。ここでは、ビッグバンから始まった時間の経過に沿って述べるのではなく、より身近な概念から始め、科学として理解しやすい順序に話を展開する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	進化する宇宙	ビッグ・バンで始まった宇宙は進化し、構造と秩序に富んだコスモスに発展した。銀河団と銀河が生まれ、銀河の中には星団と星が生まれた。星の中には惑星系を持つものが現れ、地球では生命が発生した。この進化のドラマを概観し、この科目へのプロローグとする。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇宙からの情報	宇宙の進化の研究は、宇宙の観測と理論の比較を元に行われる。ここでは、宇宙の観測をいろいろな視点から概観し、後の章の観測の話のための基礎的知識を提供する。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
3	宇宙を探る道具	宇宙を探るための理論的道具立てを学ぶ。すなわち物理的概念や法則を具体例を交えながら説明し、後の章の理論の話のための基礎知識を提供する。さらに、ＨＲ図等、観測データと理論的研究の仲介の役割を果たす図表等を説明する。	同　上	同　上
4	星の誕生と主系列星	星はどのようにして生まれ、何をエネルギー源として光っているのか、星の内部はどのようにして分かってきたか、星はなぜ進化し主系列星から赤色巨星となるのか、白色矮星とはどんな星か等、星の進化の基礎を解説する。そして。散開星団の観測によって星の進化の理論がどのように検証されるかを示す。	野本　憲一（東京大学教授）	野本　憲一（東京大学教授）
5	赤色巨星と進化の終末	赤色巨星となった星の内部での元素合成の進行を解説し、星がその質量によって異なる進化の終末段階を迎える理由を明らかにする。小質量星の惑星状星雲と白色矮星の形成に至る進化を示し、大質量星が重力崩壊してニュートリノを放出し、超新星爆発を起こす過程を、超新星1987Ａを例にとって示す。	同　上	同　上
6	超新星爆発と元素合成	大質量星が超新星爆発によってどのような元素を合成し放出するか、それが超新星1987Ａの観測によってどのように検証されたかを解説する。また、連星系の中の白色矮星が超新星爆発を起こすメカニズム、合成する元素の特徴を解説し、宇宙の元素の起源がどこまで解明されてきているかを示す。	同　上	同　上
7	惑星系とその起源	地球や木星など、惑星の運動と内部構造について概観する。ついで、原始太陽系の誕生、太陽系星雲の形成ついて簡単に述べた後、「太陽系形成標準モデル」に基づいて、惑星系形成のシナリオを紹介する。	中澤　清（東京工業大学教授）	中澤　清（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	系内小天体・系外太陽系	わたしたちの太陽系には、惑星のほかに小惑星や衛星などいろいろな小天体が知られている。これら小天体の特徴を簡単に概説し、それらの起源について考える。また、近年発見が相次いでいる系外太陽系についても紹介し、「標準モデル」と比較する。	中澤　清	中澤　清
9	銀河の発見	人類が銀河を発見した過程ほ振り返り、銀河からなる宇宙という現代の宇宙像と宇宙の広がりのスケールを確認する。もっとも身近な銀河としての銀河系の性質とその探求方法を解説する。さまざまな銀河の形態とその分類法にも触れる。	岡村　定矩（東京大学教授）	岡村　定矩（東京大学教授）
10	銀河の構造と性質	銀河とはどのような天体で、どのような性質を持つかを概観する。銀河の基本構成要素、光度関数、形態－密度相関、中心核の活動性などを学ぶ。銀河に付随するダークマターの存在を指摘する。銀河のスペクトルを合成する銀河進化モデルを解説する。空間分布の階層構造にも触れる。	同　上	同　上
11	銀河から宇宙へ	銀河を観測することが宇宙の構造を探る上でどのような関わりをもつかを概説する。銀河の距離決定の基礎を解説する。銀河の観測から、宇宙論パラメータを決定するさまざまな方法を概観する。高赤方偏移にある銀河の観測が進み、銀河の進化が見え始めたことについても触れる。	同　上	同　上
12	ビッグバン宇宙モデル	ハッブルの法則、宇宙マイクロ波背景放射、軽元素の存在量という３つの観測事実から出発して、ビッグバン宇宙モデルの必然性とその物理的な意味を説明する。また、膨張宇宙論の年譜を俯瞰する。	須藤　靖（東京大学助教授）	須藤　靖（東京大学助教授）
13	宇宙の階層構造と進化	宇宙初期の密度ゆらぎが膨張宇宙における重力的進化によって階層的構造に形成するに至る道筋を概説する。最新の宇宙論的シミュレーションの結果を可視化したものを使いながら視覚的に理解できるように配慮する。	同　上	同　上
14	観測的宇宙論	宇宙の大構造という最もマクロな存在形態を研究することが、宇宙を特徴づけるパラメータの決定を通じて、宇宙の初期条件を推定する最も重要な方法論であることを紹介しながら解説する。さらに今後の観測的宇宙論を展望する。	同　上	同　上
15	宇宙はなぜ進化する	これまでの章で、宇宙は「どのように」進化してきたかを学んだ。一方で、熱統計力学は閉鎖系のエントロピーは増大し、系は熱平衡に至るという。宇宙の場合にも構造が消失し、一様で何も起こらない熱的死の状態に至るのではないかと心配された。しかし、現実の宇宙は多様性に満ちている。両者の関係はどうなっており、宇宙は「なぜ」進化するのかを考え、この科目のエピローグとする。	杉本大一郎	杉本大一郎

＝宇宙の観測 （'０１）＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉岡 一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙の観測にはどのような種類があるのだろうか。それらの観　測はどのようにして行われるのだろうか。観測の結果、どのよう　な情報が得られるのだろうか。この科目ではこれら観測のイメー　ジを与える。電磁波以外の手段による観測にも触れる。また、技　術の発展が観測にもたらした変貌についても述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の観測とは	宇宙の観測全般に関わる一般的内容を説明し、次章以降の準備とする。宇宙の観測はどのような特色をもち、どのような方法があり、どのような方法が使われ、その結果どのような情報が得られるかを、いくつかの実例を交えて解説する。	吉岡 一男（放送大学助教授）	吉岡 一男（放送大学助教授）
2	可視光観測の歴史	可視光での宇宙の観測は、古くから行われてきた。ここでは、光学望遠鏡等可視光での観測装置や観測方法について解説する。さらに、観測データの解析方法についても解説する。解説は主として歴史の流れに沿って行う。これらの知識は、他の波長域の観測にも応用がきく。	同上	同上
3	観測の現場	いろいろな分野での観測の間の類似点や相違点は何だろうか。観測が実際にどのようにして行われており、観測技術の進歩によりどう変わってきたのだろうか？　ここではこれらの点を担当講師が集まって議論する中で明らかにする。	同上	同上
4	光・赤外線観測の原理	天体からの光や赤外線の連続スペクトルと線スペクトルの放射過程について説明する。それらの観測するための望遠鏡、分光器、検出器の原理と測定法、解釈の仕方について解説する	家 正則（国立天文台教授）	家 正則（国立天文台教授）
5	光・赤外線観測の実際	ハワイのすばる望遠鏡を例にとり、鏡面を制御する能動光学や大気揺らぎを打ち消す補償光学の原理について解説する。また観測の実際と画像データの解析の実際を現場から説明し、体験してもらう。	同上	同上
6	光・赤外線で見た天体	恒星・惑星系り探査、重力レンズ。クェーサー、銀河団、宇宙の元素分析、宇宙論観測などについて、最近の観測成果を実例に挙げて解説する。	同上	同上
7	電波天文学の始まりと発展	電波天文学は、今世紀の初頭から急激に発展してきた天文学の中でも若い分野である。数多くの発見がなされてきた。ここでは、その歴史を振り返りながら、特に観測装置の発展と関連させて、その特徴を解説する。	川辺 良平（国立天文台教授）	川辺 良平（国立天文台教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	電波で探る宇宙の爆発 活動現象	電波天文学により、宇宙における様々な爆発現象、活動的な現象が明らかにされ、ダイナミックな宇宙の描像が得られ、宇宙の認識が深まってきた。ビッグバン宇宙の証拠となる宇宙背景放射や超新星残骸、電波銀河、太陽活動などの観測例について解説する。	川辺　良平	川辺　良平
9	ミリ波サブミリ波で探る 天体の形成史	最近のミリ波サブミリ波での観測により、星惑星形成領域の観測や原始銀河の観測が飛躍的に発展してきた。ここでは、星・惑星系や銀河などの天体の形成に関連する最近の観測結果について解説する。また、惑星や銀河の形成過程の解明にとって重要なサブミリ波の本格的な観測にも触れる。	同　上	同　上
10	X線で見る宇宙	X線天文学の歴史を概観し、X線から宇宙のどのような情報が得られるかを説明する。そして、太陽コロナや超新星、パルサー、ブラックホールあるいは銀河団や暗黒物質について得られた知見を述べる。	牧島　一夫（東京大学教授）	牧島　一夫（東京大学教授）
11	ガンマ線で見る宇宙	ガンマ線がどのような機構で発生するかを説明する。ついで、宇宙線を形成する機構と考えられている粒子加速について説明する。そして、衛星や大気チェレンコフ光などによるガンマ線の観測について述べ、日豪共同によるカンガループロジェクトにも触れる。	同　上	同　上
12	電波波を用いない宇宙の観測手段	宇宙の観測として、電磁波以外の観測も盛んになってきている。ここでは、ニュートリノや重力波について、それらの検出方法やどのような成果が得られてきたかを解説する。また、現在進行中の観測計画についても述べる。	同　上	同　上
13	地球型惑星	水星、金星、地球、火星さらには月など地球型の太陽系天体について、地球からの観測や直接探査で得られた結果をもとにそれらの地形的な特徴や物理的な性質を学ぶ。また、他の天体では不可能な直接探査の方法の特質も論ずる。	松井　孝典（東京大学教授）	松井　孝典（東京大学教授）
14	巨大ガス惑星と小天体	木星、土星、天王星、海王星など巨大ガス惑星の知識は直接探査により格段に進んだ。ここではそれらの成果を学ぶ。太陽系には小惑星や彗星など多数の小天体も知られている。分光観測や直接探査により多くのことが知られるようになった。それらの成果も学ぶ。	同　上	同　上
15	これからの宇宙の観測	担当講師が集まって、宇宙の観測がどのような歴史を経てきたかをまとめる。さらに、将来の宇宙の観測がどのような方向に沿って行われるかの予測、および行われるべきかの希望を話し合う。	吉岡　一男	吉岡　一男

＝ 日本列島の地球科学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田　隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本列島の形質は、地球の歴史の中で育てられてきた。しかも地殻の激動の場からの産物である。赤道直下に近い熱帯サンゴ礁地帯であった部分が、プレート・テクトニクスによって北上し、アジア大陸の東縁と衝突して誕生した結果であることを、周辺の海域を含めた幅広い地球科学の眼でたどってみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	列島の特徴	日本列島とその周辺の、海水をとり去った結果の大地形を概観し、プレート・テクトニクスによる変動帯として成長してきた諸々の特徴を、グローバルな構造論の立場を通して理解する。	濱田　隆士（放送大学教授）	濱田　隆士（放送大学教授）
2	列島の地質構造	日本列島は、複雑な地殻変動の重なりとして形成されたので、現在見られる地質構造も複雑である。プレート衝突場の特徴として、変成帯と非変成帯とが繰り返し配列していたり、火山が帯状に連なるなど、豊かな歴史を反映したものであることを理解する。	同　上	同　上
3	列島の気象	現在の日本列島は、北半球中緯度で西に日本海を隔ててアジア大陸に向かい合い、ほぼ南北に細長くのび黒潮・親潮という二大海流に囲まれ、さらに東は太平洋に面しながら、北半球の偏西風帯に位置する。この配置が季節毎に特徴的な気象をもたらすことを理解する。	同　上	同　上
4	列島をめぐる海	日本は、海洋国・臨海国家と呼ばれるのに相応しい。海洋とは、ただ単に水をたたえた広大な低地というだけはない。地球の自転運動により、太平洋の西縁に当たる日本列島近辺の海水は特異な運動をとるようになっていることを理解する。	同　上	同　上
5	島弧プレート運動	日本列島は、グローバル・テクトニクスとしてのプレート運動によってでき上がった。地球表層部にはプレートがどのように配置され、どのような動きをしてきたのか、列島形成の原動力になった地殻運動のモデルを検証する。	同　上	同　上
6	列島周辺の海底	海の歴史は、海底の地形と地質、そしてその形成年代が語ってくれる。海底の歴史は、プレートのどの位置を占めるかで大きく異なる。列島地形や地質構造との調和のとれた配列が、海底の相対的な動きを示していることを理解する。	同　上	同　上
7	地震活動	変動帯に位置する日本列島には、過去・現在そして未来を通じ、地震・断層運動が激しい。地震とそれによって起こされる地震災害は、日本列島のもつ宿命であることを理解し、地震対策の現況をも併せ理解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	火山活動	伊豆大島や雲仙普賢岳だけが火山ではない。日本列島は、プレートの接し合う場として、地震帯と火山帯とが併存しているので、地質時代から現在に至るまで、多数の火山活動が起こって現在の地形・地質を形成していることを理解する。	濱田　隆士	濱田　隆士
9	地史（1）古生代	日本列島の基礎をつくり上げた古生代やそれ以前の地層が語る歴史はまさにグローバルで、アジア大陸の要素と、今は消え去った南海のパシフィカ大陸要素との出会いにある。化石の語る古生代地理を考え、ダイナミックな列島形成史前半を理解する。	同　上	同　上
10	地史（2）中生代	日本列島形成史に占める中生代の位置は特別である。かつては古生代のものと思われてきた秩父帯のかなりの部分が中生代前半の形成によることが明らかとなり、列島史は大きく塗りかえられてきている。恐竜化石の産出は、大陸とのつながりを示すものと理解できる。	同　上	同　上
11	地史（3）新生代	日本列島がほぼ現在の姿になる、いわば仕上げの時代であり、火山活動、隆起・沈降運動も激しかった。したがって侵食力も強く、堆積作用も大きかったので、山脈・半島・平野の形成期となり、海流系も安定化してきた時代であることを理解する。	同　上	同　上
12	地下資源	小さな島国の日本は、多種大量の資源を外国に依存している。そのような中で、日本の地史を反映した鉱化作用・地下資源鉱床の形成もあった。石灰岩やヨードなどのみが完全自給型地下資源であることを理解し、エネルギー資源には乏しい実情をみつめる。	同　上	同　上
13	多島海型自然環境	日本は島国といわれるが、それはただ列島をなしているということだけでなく、大小様々の島々を抱えた多島海的自然環境下にある、ということに他ならない。わが国の気候・風土・産業・文化へもその影響が大きいことを理解する。	同　上	同　上
14	日本の地球科学の進展	日本列島の歴史が複雑な分、その研究史も多彩である。輸入文化として始まった系統的な日本の地球科学を認識し、それが時と共に消化・吸収され、今では日本からならではの地球科学が、世界に向けて発信される時代となった発展の経緯を概観する。	同　上	同　上
15	人と暮らし	日本列島の歴史の主役が大陸系と南方系であったことに似て、日本列島での人類発展史・生活型にも、南方型と大陸型とがある。自然環境に見合った風土が形づくられてきた縄文・弥生時代以降、次第にグローバル化も混じ、現在ではヒトと自然の接点が変容を遂げた。	同　上	同　上

この冊子に掲載した講義内容のうち、最新の開設年次の科目は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。